

群馬県藤岡市

# 牛田廃寺跡

(E32a 川除屋敷裏遺跡 1区)

平成30年度 県営農業競争力強化基盤整備事業

牛田川除地区

埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

群馬県藤岡市教育委員会  
群馬県西部農業事務所

群馬県藤岡市

牛田廃寺跡

(E32a 川除屋敷裏遺跡 1区) 平成30年度  
県営農業競争力強化基盤整備事業  
埋蔵文化財発掘調査報告書 牛田川除地区

二〇二四

群馬県藤岡市教育委員会  
群馬県西部農業事務所

群馬県藤岡市

# 牛田麿寺跡

(E32a 川除屋敷裏遺跡 1 区)

平成 30 年度 県営農業競争力強化基盤整備事業

牛田川除地区

埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

群馬県藤岡市教育委員会  
群馬県西部農業事務所





1区 空撮（北から）



1区 1号建物跡 空撮



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 北側瓦検出状況



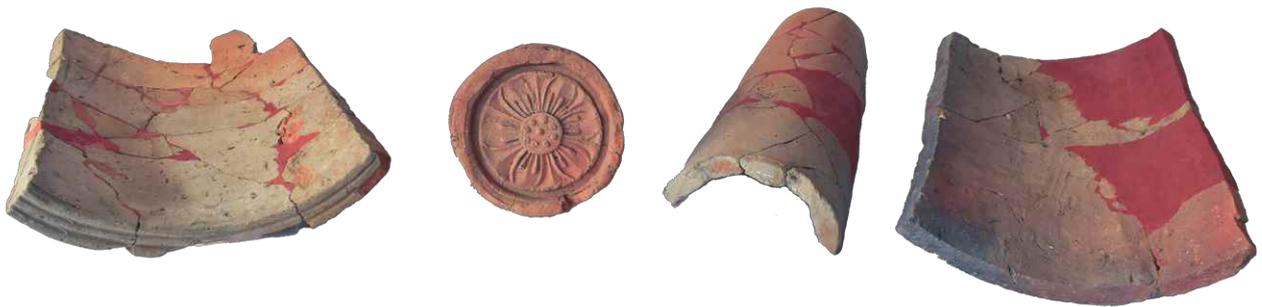
1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 掘り込み地業断面



1号建物跡 創建瓦のセット



1号建物跡 屋根景観の復元

# 序

藤岡市には、平成 26 年度に世界文化遺産に登録された高山社跡をはじめ、数多くの文化遺産が残されております。

世界文化遺産 高山社跡が存在する美九里地区では、これまで多数の発掘調査が行われてきました。平成 30 年度から令和 3 年度にかけて実施された、「県営農業競争力強化基盤整備事業 牛田川除地区」に伴う発掘調査では、8 世紀前半に創建された牛田廃寺跡が発見されました。これまで全く把握されておらず、文献資料にも記載がない新発見の寺院跡です。藤岡市内では初めての古代寺院跡の発見となり、大きな成果が挙げられました。

発見された牛田廃寺跡は、その歴史的な重要性から現状保存されることが決まりました。これは牛田・川除土地改良区並びに地元関係者の皆さまのご理解ご協力の賜物です。また群馬県西部農業事務所にも牛田廃寺跡の保存にご尽力頂きました。保存することができた牛田廃寺跡は、その歴史的価値が評価され、令和 2 年 10 月に藤岡市指定史跡として指定されました。

本報告書は牛田廃寺跡の成果報告書となります。牛田廃寺跡の調査成果をご覧いただき、ご活用いただければ幸いです。

令和 6 年 3 月

藤岡市教育委員会

教育長 田中政文

# 例言

1. 本報告書は、平成30年度・令和元・2・3年度の4か年に渡って実施された、「県営農業競争力強化基盤整備事業 牛田川除地区」埋蔵文化財発掘調査のうち、平成30年度に調査を行ったE32a川除屋敷裏遺跡 牛田廃寺跡（1区）の成果報告書である。
2. 発掘調査・整理報告書作成は、群馬県藤岡市教育委員会直営で実施した。  
発掘調査から整理作業にいたる経費のうち、87.5%が群馬県西部農業事務所委託金、残りの12.5%の農家負担分は国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金の交付を受けた。
3. 本遺跡の事業略称は「E32」で、「E」は美九里地区、「32」は事業番号である。発掘調査は複数年度におよんでいるため、年度ごとに「E32」の後ろに「a～d」を付した。全体の包括的な遺跡名は「E32川除屋敷裏遺跡」であり、その中に牛田廃寺跡や牛田古墳群が含まれる。
4. E32a川除屋敷裏遺跡1区は、群馬県藤岡市牛田字下毛田29,31,32,33,34,35,43,44,45,46に所在する。
5. 調査年度別調査期間・面積・発掘調査区／調査組織

## 年度別調査期間・面積・発掘調査区一覧

調査年度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘調査区
平成30年度	平成30年5月21日～平成30年12月28日	7,260	1～5区
平成31・令和元年度	平成31年5月21日～令和元年10月31日	4,412	6～10区
令和2年度	令和2年6月2日～令和3年3月12日	3,423	11～13区
令和3年度	令和3年5月27日～令和3年12月28日	5,800	14～19区

## 年度別調査組織一覧

	平成30年度	平成31年度 令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
教育長	田中 政文	田中 政文	田中 政文	田中 政文	田中 政文	田中 政文
教育部長	御供 英宏	塚本 良	塚本 良	岡本 通弘	小島 治	小島 治
文化財保護課長	軽部 達也	軽部 達也	軽部 達也	軽部 達也	軽部 達也	軽部 達也
埋蔵文化財係長	井上 勉	井上 勉	井上 勉	井上 勉	井上 勉	井上 勉
庶務担当	高野 美鈴	高野 美鈴	高野 美鈴	高野 美鈴	高野 美鈴	田端 ちあき
調査担当	文挾 健太郎	文挾 健太郎	文挾 健太郎	齋藤 直樹	—	—
	山本 千春 <small>(有)毛野考古学研究所</small>	佐野 良平 <small>技研コンサル(株)</small>	齋藤 直樹	南田 法正 <small>(有)毛野考古学研究所</small>	—	—
整理担当	文挾 健太郎	文挾 健太郎	文挾 健太郎	文挾 健太郎	文挾 健太郎 齋藤 直樹	文挾 健太郎

6. 2020年に刊行した『牛田廃寺跡 発掘調査概要報告書』と一部異なる記載があるが、本報告書が正式な発掘調査報告書となるため、本書の記述が優先する。
7. 本書の執筆・編集は文挾が行った。現地での遺構図面の作成・空撮は、有限会社 毛野考古学研究所に委託した。
8. 整理報告書作成作業では以下の業務委託を実施した。  
遺物整理・実測・トレース：有限会社 毛野考古学研究所  
鉄製品保存処理：有限会社 武蔵野文化財修復研究所
9. 牛馬骨の分析は、宮崎重雄氏に依頼し、玉稿を賜った。
10. 表紙揮毫は江原郁江氏、中表紙絵は進藤 環氏より提供を受けた。
11. 調査によって出土した資料及び記録類は、藤岡市教育委員会（藤岡歴史館）で保管している。
12. 発掘調査・整理作業参加者（50音順・敬称略）

## 発掘調査

新井一光・新井正信・新井貞男・江原貞夫・大和田和美・掛川直美・川村隆司・川村美枝・神部万亀夫・

北野謙二・北野 正・北野仁一・倉林 豪・黒田有彦・黒井優美・小島真弓・小平典子・島田直子・島田幸夫・品川 久・柴崎京子・新川康生・関根和枝・高橋鶴一・高宮義次・武井幸次・田村キミイ・塚本治夫・中尾根紹子・中野則子・中野亮博・根岸 清・平岡幸夫・水谷 宏・宮澤秀昭・森 博美・山口孝行・山田君吉・和田富美子  
整理作業

安積智之・井田由美子・江原光子・菊地典子・菊地風香・木村知里・佐藤マリ・佐藤優羽・高野しのぶ・中山 恵・堀川貴美子

13. 発掘調査及び整理報告書作成に際して以下の方々にご助言・ご協力を頂いた。

阿久澤智和・岡村友理香・金子彰男・小川卓也・小根澤雪絵・品川 肇・志村 哲・滝沢 匡・永井智教・外山政子・前原 豊・右島和夫・若狭 徹・群馬県西部農業事務所・群馬県地域創成部文化財保護課・牛田川除土地改良区・藤岡市経済部農村整備課・高崎市教育委員会・多胡碑記念館・前橋市教育委員会

## 凡例

1. 挿図中の北方位は座標北を示し、座標値は世界測地系の測地成果を用いている。
2. 等高線や断面図中における水準値は、海拔標高（m）を示す。
3. 遺構の略称は以下のとおりである。  
寺院：ZI、竪穴住居跡：H、掘立柱建物跡：B、竪穴状遺構：T、井戸：I、土坑：D、溝：M
4. 遺構図及び遺物実測図の縮尺は、各挿図中にスケールを付した。
5. 本文及び遺物観察表の計測値で（ ）は推定値、[ ]は残存値である。
6. 遺物の色調観察は、『新版標準土色帳』（農林水産技術会議事務局財団法人日本色彩研究所監修 2018 版 9）に従っている。
7. 本書で使用したテフラ表記は以下のとおりである。  
浅間 A 軽石（1783 年）：As-A、浅間 B 軽石（1108 年）：As-B

# 目次

巻頭写真図版 序 例言 凡例 目次

## 第1章 調査に至る経緯及び経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 平成30年度の調査概要	1
第3節 整理報告書作成作業の経過	2

## 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	3
第2節 周辺の微地形と遺跡との対応関係	5
第3節 歴史的環境	6

## 第3章 基本層序

## 第4章 検出された遺構と遺物

第1節 川除屋敷裏遺跡1区と牛田廃寺跡の概要	8
第2節 牛田廃寺跡の立地	9
第3節 牛田廃寺跡 遺構	11
第1項 1号建物跡	11
第2項 1号整地土(旧:2号建物跡)	27
第3項 2号整地土(旧:3号建物跡)	32
第4節 牛田廃寺跡の出土遺物	37
第1項 軒丸瓦	38
第2項 軒平瓦	54
第3項 丸瓦	61
第4項 平瓦	72
第5項 文字瓦	92
第6項 道具瓦	95
第7項 鉄製品	95
第5節 1区で検出された遺構・遺物	118
第1項 1区の概要	118
第2項 1区検出の住居跡・土坑・溝	118

## 第5章 総括

第1節 瓦から見る牛田廃寺跡1号建物跡の創建—改修—廃絶	160
第1項 軒先瓦の種別と出土比率	160
第2項 平瓦・丸瓦の種別と出土比率	160
第3項 軒先瓦・丸瓦・平瓦のセット関係	161
第4項 平瓦・丸瓦の構成比率と屋根景観	162
第5項 丸瓦・平瓦の比率から見る牛田廃寺の屋根改修	162
第6項 改修要因の推定	163
第7項 牛田廃寺の廃絶について	163

第2節 山王廃寺系軒丸瓦の相対編年について—創建年代の検討—	164
第1項 山王廃寺系軒丸瓦とその分布	164
第2項 軒丸瓦 A1・A2 類の序列と製作技法について	164
第3項 瓦当文様の分類と比較	166
第4項 周縁部整形技法に見る系統性	169
第5項 山王廃寺系軒丸瓦の相対編年と製作集団	169
第3節 川除屋敷裏遺跡における牛田廃寺の位置付けと性格	172
第1項 牛田廃寺の形成時期・順序・規模	172
第2項 川除屋敷裏遺跡の遺跡形成過程	172
第3項 牛田古墳群の形成と古墳の再利用—須恵器祭祀と牛馬の祭祀—	176
第4項 牛田廃寺の性格と創建の事由	177
第4節 藤岡市牛田古墳群出土の馬歯及び牛歯について	181
第1項 牛田古墳群の調査概要と検出された馬歯及び牛歯について	181
第2項 牛馬骨の出土位置・状況	181
第3項 牛馬骨の分析について	183
第4項 牛田古墳群の再利用—須恵器大甕祭祀と牛馬の祭祀—	187

## 第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定	199
第2節 牛田古墳群出土馬の歯エナメル質の同位体分析報告	204

写真図版

報告書抄録

奥付

## 挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	3	第 45 図	軒丸瓦 D 類 (1)	51
第 2 図	藤岡市の地形	4	第 46 図	軒丸瓦 D 類 (2)	52
第 3 図	調査区位置図	4	第 47 図	軒丸瓦 D 類 (3)	53
第 4 図	牛田川除地区の微地形	5	第 48 図	軒平瓦 A 類・B1 類・B2 類・C 類 細部の写真	54
第 5 図	牛田廃寺跡の位置と古代を中心とした周辺 の遺跡	7	第 49 図	軒平瓦 A 類 (1)	55
第 6 図	1 区 基本層序	8	第 50 図	軒平瓦 A 類 (2)	56
第 7 図	川除屋敷裏遺跡 1 区 牛田廃寺跡・トレン チ全図	9	第 51 図	軒平瓦 A 類 (3)	57
第 8 図	牛田廃寺跡 地山砂礫層エレベーション図 (南北方向)	10	第 52 図	軒平瓦 A 類 (4)	58
第 9 図	牛田廃寺跡 地山砂礫層エレベーション図 (東西方向)	10	第 53 図	軒平瓦 A 類 (5)	59
第 10 図	牛田廃寺の位置と地質	10	第 54 図	軒平瓦 B1 類	60
第 11 図	1 区 全体図・グリッド配置図	12	第 55 図	軒平瓦 B2 類	60
第 12 図	1 号建物跡 建物規模推定図	15	第 56 図	軒平瓦 C 類	60
第 13 図	川除屋敷裏遺跡 1 区 牛田廃寺跡 遺構配置図	16	第 57 図	丸瓦 A1 類・A2 類 細部の写真	62
第 14 図	1 区 1 号建物跡平面図	17	第 58 図	1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (1)	62
第 15 図	1 区 トレンチ 22・8・20 平面図・ 断面図	18	第 59 図	1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (2)	63
第 16 図	1 号建物跡 南北断面図・東西断面図	19	第 60 図	1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (3)	64
第 17 図	1 号建物跡 エレベーション図	21	第 61 図	1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (4)・ 丸瓦 A2 類	65
第 18 図	1 号建物跡 南面瓦積基壇平面図・立面図・ オルソ図	22	第 62 図	丸瓦 B 類 細部の写真	66
第 19 図	1 号建物跡 種類別瓦分布図 (1)	23	第 63 図	1 号建物跡 丸瓦 B 類 (1)	66
第 20 図	1 号建物跡 種類別瓦分布図 (2)	24	第 64 図	1 号建物跡 丸瓦 B 類 (2)	67
第 21 図	1 号建物跡北側 種類別瓦分布図(拡大)(3)	25	第 65 図	1 号建物跡 丸瓦 B 類 (3)	68
第 22 図	1 号建物跡南側 種類別瓦分布図(拡大)(4)	26	第 66 図	1 号建物跡 丸瓦 B 類 (4)	69
第 23 図	1 号整地土 東西断面図	27	第 67 図	丸瓦 C1 類・C2 類 細部の写真	70
第 24 図	1 号整地土全体図	28	第 68 図	1 号建物跡 丸瓦 C1 類	71
第 25 図	トレンチ 9・14、15 断面図	29	第 69 図	1 号建物跡 丸瓦 C2 類 (1)	71
第 26 図	1 号整地土 種類別瓦分布図 (1)	30	第 70 図	1 号建物跡 丸瓦 C2 類 (2)	72
第 27 図	1 号整地土 種類別瓦分布図 (2)	31	第 71 図	平瓦 A1 類・A2 類 細部の写真	73
第 28 図	トレンチ 13 平面図・断面図	34	第 72 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (1)	74
第 29 図	トレンチ 13 種類別瓦分布図	35	第 73 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (2)	75
第 30 図	1 区 鉄製品出土位置図	36	第 74 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (3)	76
第 31 図	軒丸瓦 A1・A2 類 細部の写真	40	第 75 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (4)	77
第 32 図	軒丸瓦 A1 類 (1)	41	第 76 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (5)	78
第 33 図	軒丸瓦 A1 類 (2)	42	第 77 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (6)	79
第 34 図	軒丸瓦 A1 類 (3)	43	第 78 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (7)	80
第 35 図	軒丸瓦 A1 類 (4)	44	第 79 図	1 号建物跡・1 号整地土 平瓦 A1 類 (8)	81
第 36 図	軒丸瓦 A2 類 (1)	45	第 80 図	1 号建物跡 平瓦 A1 類 (9)	82
第 37 図	軒丸瓦 A2 類 (2)	46	第 81 図	1 号建物跡 平瓦 A2 類	83
第 38 図	軒丸瓦 A1 類・A2 類製作工程模式図	46	第 82 図	平瓦 B 類 細部の写真	84
第 39 図	軒丸瓦 B 類 細部の写真	47	第 83 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (1)	84
第 40 図	軒丸瓦 B 類	48	第 84 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (2)	85
第 41 図	軒丸瓦 B 類製作工程模式図	48	第 85 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (3)	86
第 42 図	軒丸瓦 C 類 細部の写真	49	第 86 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (4)	87
第 43 図	軒丸瓦 C 類	49	第 87 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (5)	88
第 44 図	軒丸瓦 D 類 細部の写真	50	第 88 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (6)	89
			第 89 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (7)	90
			第 90 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (8)	91
			第 91 図	1 号建物跡 平瓦 B 類 (9)	92
			第 92 図	文字瓦 (1)	93

第 93 図	文字瓦 (2).....	94	第 128 図	85・86 号住居跡・82・83 号土坑・ 95 号土坑 (1) 出土遺物.....	148
第 94 図	1 号建物跡 道具瓦 (隅切瓦) (1).....	96	第 129 図	95 号土坑 (2) 出土遺物.....	149
第 95 図	1 号建物跡・1 号整地土 道具瓦 (熨斗瓦) (2).....	97	第 130 図	96・104・108・112・113・115・ 117 号土坑出土遺物.....	150
第 96 図	1 区 鉄製品 (1).....	98	第 131 図	121・123・125・126・137・ 254 号土坑・2・3 号溝・遺構外出土遺物.....	151
第 97 図	1 区 鉄製品 (2).....	99	第 132 図	牛田廃寺跡 軒先瓦 (軒丸瓦・軒平瓦) 種類別比率グラフ.....	160
第 98 図	1 区 1 号建物跡 土器.....	100	第 133 図	牛田廃寺跡 丸瓦・平瓦種類別比率 グラフ.....	161
第 99 図	トレンチ 9・14 瓦.....	101	第 134 図	群馬県における山王廃寺系軒丸瓦分布図.....	164
第 100 図	トレンチ 13 瓦 (1).....	102	第 135 図	山王・秋間系複弁 7 葉鏡瓦系譜の 諸段階.....	165
第 101 図	トレンチ 13 瓦 (2)・土器.....	103	第 136 図	牛田廃寺軒丸瓦 A1 類・A2 類製作工程 模式図.....	166
第 102 図	59・61 号住居跡 平面図・断面図.....	122	第 137 図	牛田廃寺跡 軒丸瓦 A 類の同範資料.....	167
第 103 図	60A・60B 号住居跡 平面図・断面図.....	123	第 138 図	蓮弁・中房長割合グラフ.....	167
第 104 図	62・63・71 号住居跡 平面図・断面図 .....	124	第 139 図	周縁部作出技法の分類及び細部の 特徴 (上段) と周縁部に残された痕跡.....	168
第 105 図	72・85・86 号住居跡 平面図・断面図 .....	125	第 140 図	山王廃寺系軒丸瓦系統図.....	170
第 106 図	75・84 号住居跡・96 号土坑・76 号住居 跡 平面図・断面図.....	126	第 141 図	川除屋敷裏遺跡 時期別住居数 増減グラフ.....	173
第 107 図	2 号溝 平面図・断面図.....	127	第 142 図	笹川沿岸地区遺跡群 時期別住居数 増減グラフ.....	173
第 108 図	3 号溝 平面図・断面図.....	128	第 143 図	神田神明 B 遺跡 時期別住居数 増減グラフ.....	173
第 109 図	土坑 平面図・断面図.....	129	第 144 図	周辺遺跡の動態.....	174
第 110 図	59 号住居跡出土遺物.....	130	第 145 図	住居跡時期別面積グラフ.....	175
第 111 図	60A 号住居跡 (1) 出土遺物.....	131	第 146 図	暦年較正年代.....	190
第 112 図	60A 号住居跡 (2)・60B 号住居跡 (1) 出土遺物.....	132	第 147 図	牛田古墳群 牛馬骨出土状況 (1).....	191
第 113 図	60B 号住居跡 (2) 出土遺物.....	133	第 148 図	牛田古墳群 牛馬骨出土状況 (2).....	192
第 114 図	61 号住居跡 (1) 出土遺物.....	134	第 149 図	3 号古墳 牛馬埋設土坑と須恵器の 接合関係.....	193
第 115 図	61 号住居跡 (2) 出土遺物.....	135	第 150 図	馬歯咬合面の計測部位.....	194
第 116 図	61 号住居跡 (3) 出土遺物.....	136	第 151 図	暦年較正結果 (1).....	202
第 117 図	61 号住居跡 (4) 出土遺物.....	137	第 152 図	暦年較正結果 (2).....	203
第 118 図	61 号住居跡 (5) 出土遺物.....	138	第 153 図	歯エナメル質の炭素・酸素同位体比分布 .....	206
第 119 図	62 号住居跡出土遺物.....	139	第 154 図	歯エナメル質のストロンチウム・酸素同位 体比分布.....	206
第 120 図	63 号住居跡出土遺物.....	140			
第 121 図	71 号住居跡・72 号住居跡 (1) 出土遺物.....	141			
第 122 図	72 号住居跡 (2) 出土遺物.....	142			
第 123 図	72 号住居跡 (3) 出土遺物.....	143			
第 124 図	72 号住居跡 (4) 出土遺物.....	144			
第 125 図	72 号住居跡 (5) 出土遺物.....	145			
第 126 図	72 号住居跡 (6) 出土遺物.....	146			
第 127 図	75・76 号住居跡出土遺物.....	147			

## 表目次

第 1 表	軒先瓦出土地点表.....	37	第 9 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (1) 瓦.....	104
第 2 表	種類別出土平瓦・丸瓦計数表.....	37	第 10 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (2) 瓦.....	105
第 3 表	軒丸瓦種類別出土地点数・グラフ.....	38	第 11 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (3) 瓦.....	106
第 4 表	軒丸瓦計測表.....	38	第 12 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (4) 瓦.....	107
第 5 表	軒平瓦種類別出土地点数・グラフ.....	54	第 13 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (5) 瓦.....	108
第 6 表	丸瓦種類別出土地点数・グラフ.....	61	第 14 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (6) 瓦.....	109
第 7 表	平瓦種類別出土地点数・グラフ.....	72	第 15 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (7) 瓦.....	110
第 8 表	出土文字瓦一覧表.....	95	第 16 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (8) 瓦.....	111

第 17 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (9) 瓦	112	第 41 表	下顎臼歯	194
第 18 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (10) 瓦	113	第 42 表	下顎臼歯	194
第 19 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (11) 瓦	114	第 43 表	上顎臼歯	195
第 20 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (12) 瓦・鉄製品	115	第 44 表	上顎臼歯	195
第 21 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (13) 鉄製品・土器・瓦	116	第 45 表	下顎臼歯	195
第 22 表	牛田廃寺跡出土遺物観察表 (14) 瓦・土器	117	第 46 表	下顎臼歯	195
第 23 表	1 区 住居跡観察表	121	第 47 表	上顎臼歯	195
第 24 表	1 区 土坑観察表 (1)	121	第 48 表	上顎臼歯	195
第 25 表	1 区 土坑観察表 (2)	121	第 49 表	上顎臼歯	196
第 26 表	1 区出土遺物観察表 (1)	152	第 50 表	下顎臼歯	196
第 27 表	1 区出土遺物観察表 (2)	153	第 51 表	下顎臼歯	196
第 28 表	1 区出土遺物観察表 (3)	154	第 52 表	下顎臼歯	196
第 29 表	1 区出土遺物観察表 (4)	155	第 53 表	下顎臼歯	196
第 30 表	1 区出土遺物観察表 (5)	156	第 54 表	下顎臼歯	197
第 31 表	1 区出土遺物観察表 (6)	157	第 55 表	上顎臼歯	197
第 32 表	1 区出土遺物観察表 (7)	158	第 56 表	上顎臼歯	197
第 33 表	1 区出土遺物観察表 (8)	159	第 57 表	上顎臼歯	197
第 34 表	瓦のセット関係	162	第 58 表	牛歯計測値 1	197
第 35 表	多胡正倉跡出土瓦種類別比率表	163	第 59 表	牛歯計測値 2	197
第 36 表	山王廃寺系軒丸瓦計測表	167	第 60 表	出土馬年齢・体高一覧	198
第 37 表	山王廃寺軒丸瓦 周縁部作出技法対応表	170	第 61 表	測定試料及び処理	199
第 38 表	川除屋敷裏遺跡 動態表	176	第 62 表	測定結果	200
第 39 表	牛田廃寺と村落内寺院の比較	178	第 63 表	分析試料の一覧表	204
第 40 表	下顎臼歯	194	第 64 表	牛田古墳群出土馬の酸素・炭素 同位体比	205
			第 65 表	牛田古墳群出土馬のストロンチウム 同位体比	205

## 写真図版目次

巻頭写真図版 1	牛田廃寺跡 1 号建物跡 検出状況 (南から)	1 号建物跡 西壁南端軒丸瓦出土状況
1 区 空撮 (北から)	牛田廃寺跡 1 号建物跡 空撮 (北から)	1 号建物跡 東側瓦出土状況
1 区 1 号建物跡 空撮	写真図版 4	1 号建物跡 西壁南端軒丸瓦出土状況
巻頭写真図版 2	牛田廃寺跡 1 号建物跡 空撮	1 号建物跡 南側軒丸瓦・文字瓦検出状況
1 号建物跡 南側瓦検出状況	牛田廃寺跡 1 号建物跡 空撮	写真図版 8
1 号建物跡 北側瓦検出状況	牛田廃寺跡 空撮 (トレンチ 8)	1 号建物跡 南側軒丸瓦・文字瓦検出状況
巻頭写真図版 3	1 区 空撮	1 号建物跡 瓦積基壇検出状況
1 号建物跡 瓦積基壇検出状況	写真図版 5	1 号建物跡 瓦積基壇拡大
1 号建物跡 瓦積基壇拡大	1 区 空撮	写真図版 9
巻頭写真図版 4	1 号建物跡 瓦積基壇上面・黄色粘土検出	1 号建物跡 瓦積基壇検出状況
1 号建物跡 堀り込み地業断面	1 号建物跡 南側瓦検出状況	1 号建物跡 瓦積基壇拡大
1 号建物跡 創建瓦のセット	牛田廃寺跡 瓦積基壇上面検出	写真図版 10
1 号建物跡 屋根景観の復元	1 号建物跡 南側軒丸瓦検出状況	1 号建物跡 瓦積基壇拡大
写真図版 1	写真図版 6	牛田廃寺跡 調査終了時 (南から)
1 区 空撮 (東から)	1 号建物跡 南側瓦検出状況	牛田廃寺跡 調査終了時 (東から)
1 区 空撮 (西から)	1 号建物跡 北東側瓦検出状況	写真図版 11
写真図版 2	1 号建物跡 北側瓦検出状況	1 号建物跡 基壇外装抜き取り痕
1 区 空撮 (垂直)	1 号建物跡 東側瓦検出状況	1 号建物跡 南北セクション版築断面
牛田廃寺跡 調査前現況	1 号建物跡 検出状況	1 号建物跡 東西セクション版築断面
牛田廃寺跡 調査前検出状況	1 号建物跡 鉄釘出土状況	1 号整地土 土層断面
写真図版 3	写真図版 7	1 号建物跡 雨落ち溝検出状況
牛田廃寺跡 調査前検出状況	1 号建物跡 東側瓦検出状況	1 号整地土内 軒丸瓦出土状況
牛田廃寺跡 1 号建物跡 空撮	1 号建物跡 西壁北端断面	写真図版 12
	1 号建物跡 西壁南端断面	トレンチ 8

トレンチ 9・14	3号溝検出状況	3号溝 東壁セクション(西から)	1号建物跡	平瓦 B類(4)
トレンチ 9・14	3号溝立ち上がり	牛田廃寺跡 作業風景	写真図版 45	
トレンチ 9・14		牛田廃寺跡 埋め戻し風景	1号建物跡	平瓦 B類(5)
トレンチ 10・11・12		3号溝	写真図版 46	
写真図版 13		牛田廃寺跡 調査風景	文字瓦(1)	
トレンチ 10・11・12		牛田廃寺跡 作業風景	写真図版 47	
トレンチ 13		牛田廃寺跡 埋め戻し風景	文字瓦(2)	
トレンチ 15		写真図版 21	写真図版 48	
写真図版 14		軒丸瓦 A1類(1)	1号建物跡	道具瓦(隅切瓦)
トレンチ 15・16・17		写真図版 22	写真図版 49	
トレンチ 19		軒丸瓦 A1類(2)・軒丸瓦 A2類(1)	牛田廃寺跡	鉄製品
トレンチ 20		写真図版 23	写真図版 50	
トレンチ 22		軒丸瓦 A2類(2)・軒丸瓦 B類・軒丸瓦 C類・軒丸瓦 D類(1)	1号建物跡	土器/トレンチ 9・14 瓦
59号住居跡 完掘		写真図版 24	写真図版 51	
写真図版 15		軒丸瓦 D類(2)	トレンチ 13 瓦(1)	
60A・B号住居跡 遺物出土状況(西から)		写真図版 25	写真図版 52	
60A号住居跡 カマド完掘		軒平瓦 A類(1)	トレンチ 13 瓦(2)・土器	
61号住居跡 遺物出土状況(西から)		写真図版 26	写真図版 53	
60A号住居跡 カマド遺物出土状況(西から)		軒平瓦 A類(2)	59号住居跡・60A号住居跡(1) 出土遺物	
60A・B号住居跡 完掘(東から)		写真図版 27	写真図版 54	
61号住居跡 カマド検出状況(西から)		軒平瓦 A類(3)	60A号住居跡(2)・60B号住居跡(1) 出土遺物	
61号住居跡 カマド検出状況(西から)		写真図版 28	写真図版 55	
写真図版 16		軒平瓦 A類(4)・軒平瓦 B1・2類・軒平瓦 C類	60B号住居跡(2)・61号住居跡(1) 出土遺物	
61号住居跡 カマド検出(西から)		写真図版 29	写真図版 56	
61号住居跡 カマド検出		1号建物跡	61号住居跡(2) 出土遺物	
61号住居跡 完掘		丸瓦 A1類(1)	写真図版 57	
62号住居跡 完掘(東から)		写真図版 30	61号住居跡(3) 出土遺物	
61号住居跡 カマド文字瓦		1号建物跡	写真図版 58	
62号住居跡 遺物出土状況		丸瓦 A1類(2)・丸瓦 A2類(1)	61号住居跡(4) 出土遺物	
62・63号住居跡 完掘(西から)		写真図版 31	写真図版 59	
写真図版 17		1号建物跡	61号住居跡(5)・62号住居跡 出土遺物	
62号住居跡 カマド検出状況		丸瓦 A2類(2)・丸瓦 B類(1)	写真図版 60	
72号住居跡 遺物出土状況		写真図版 32	63・71号住居跡・72号住居跡(1) 出土遺物	
76号住居跡 礫出土状況		1号建物跡	写真図版 61	
71号住居跡		丸瓦 B類(3)・丸瓦 C1類	72号住居跡(2) 出土遺物	
75号住居跡 完掘(東から)		写真図版 33	写真図版 62	
76号住居跡 礫出土状況		1号建物跡	72号住居跡(3) 出土遺物	
写真図版 18		丸瓦 C2類・平瓦 A1類(1)	写真図版 63	
76号住居跡 遺物出土状況		写真図版 34	72号住居跡(4) 出土遺物	
85号住居跡 カマド完掘		1号建物跡	写真図版 64	
86号住居跡 遺物出土状況(南から)		平瓦 A1類(2)	75・76・85号住居跡・86号住居跡(1) 出土遺物	
95号土坑遺物 出土状況(西から)		写真図版 35	写真図版 65	
85号住居跡 カマド検出状況		1号建物跡	86号住居跡(2)・82・83・95・96・104・108・112・113・115・117・121号土坑出土遺物	
83・84号土坑 完掘(東から)		平瓦 A1類(3)	写真図版 66	
95号土坑 遺物出土状況		写真図版 36	123・125・126・137号土坑・2・3号溝・遺構外出土遺物	
写真図版 19		1号建物跡		
95号土坑 遺物出土状況		平瓦 A1類(4)		
96号土坑 完掘(東から)		写真図版 37		
110～116号土坑 完掘(西から)		1号建物跡		
126号土坑 遺物出土状況		平瓦 A1類(5)		
95号土坑 完掘(東から)		写真図版 38		
106・107・108号土坑 完掘(西から)		1号建物跡		
117～125号土坑 完掘(西から)		平瓦 A1類(6)		
2号溝 東壁セクション(東から)		写真図版 39		
写真図版 20		1号建物跡		
2号溝 完掘		平瓦 A1類(7)		
		写真図版 40		
		1号建物跡		
		平瓦 A2類・平瓦 B類(1)		
		写真図版 41		
		1号建物跡		
		平瓦 B類(2)		
		写真図版 42		
		1号建物跡		
		平瓦 B類(3)		
		写真図版 43		
		1号建物跡		
		写真図版 44		



# 第 1 章 調査に至る経緯及び経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

平成 25 年 11 月 26 日、群馬県西部農業事務所農村整備課、藤岡市役所経済部農村整備課、藤岡市教育委員会文化財保護課と牛田・川除地区基盤整備事業発掘調査に係る第 1 回の打合せを実施した。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である 200 包蔵地・藤岡市 516～519 号古墳・川除屋敷裏遺跡などが存在する。また包蔵地に該当していない箇所も遺跡地に隣接している。これまで牛田川除地区では開発がほとんどなく、基盤整備事業にあたっては試掘確認調査の実施が必要である旨を伝えた。試掘の結果、遺跡が確認され保存できない場合には、記録保存のための本発掘調査が必要になることも併せて伝えた。尚、調査対象となるのは保護層が確保できる場合、切土部分と道水路部分、古墳となる。

平成 28 年 8 月 5 日、施行計画に関する打合せを行った。西部農業事務所から事業が採択されたことが報告された。さらに施工計画図が示され、耕区面積：32.8ha、総面積：42.2ha で全体が 4 工区に分かれ、4 年計画で工事を実施する計画である。切土は行わないため、試掘・本発掘調査対象は道水路部分のみとなった。遺跡の有無及び遺跡内容の把握のため試掘確認調査を実施する必要がある旨を伝えた。協議の結果、第 1 工区の試掘調査の日程については、稲刈りが終わる平成 28 年 10・11 月頃に行うことを確認した。試掘を実施するに当たっては、事前に場所を指定した図面を作成するよう依頼された。地権者への承諾は市農村整備課が行うこととなった。第 3 工区にある古墳については面整備を優先し、記録保存のための調査を行うように要請された。

平成 28 年 9 月 16 日、群馬県知事大澤正明（西部農業事務所）より文化財保護法第 94 条通知（以下法 94 条通知）が提出された。

平成 28 年 11 月 21・22・25・28 日、第 1 工区の道水路部分にバックホー 0.25 のバケット幅で計 18 本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した結果、遺跡は存在しないことが確認され、平成 29 年度に計画されていた第 1 工区の本発掘調査は不要となった。平成 28 年度の試掘調査では遺跡が確認されなかったため、提出された法 94 条通知は、群馬県教育委員会との協議の結果、平成 29 年度以降の試掘確認調査の結果を踏まえ、次年度以降に群馬県教育委員会に進達を行うこととなった。

平成 29 年 12 月 19 日～平成 30 年 2 月 6 日にかけて、第 2～4 工区内の試掘・確認調査を実施し、2・3 工区で遺跡が確認されたため、開発にあたっては「発掘調査」を指導することが適切であるとの意見書を附して法 94 条通知を進達し、平成 30 年 4 月 2 日付けで群馬県教育委員会より「発掘調査」の勧告があった。

上記の経緯により、牛田川除地区基盤整備事業に伴う発掘調査は、発掘調査が 4 か年（平成 30～令和 3 年度）、整理報告書作成が 2 か年（令和 4・5 年）の 6 か年計画で事業を開始した。

## 第 2 節 平成 30 年度の調査概要

発掘調査の初年度である平成 30 年度は、牛田幹線用水路及び周辺の道水路部分を調査対象とした（1～5 区）。調査面積は 7,260m<sup>2</sup> である。

牛田廃寺跡を含む一帯の遺跡は、「川除屋敷裏遺跡」として把握されており、牛田廃寺跡だけでなく、古墳～平安時代の集落や墓、4～5 基の小型円墳がまとまる牛田古墳群などが複合する一体の遺跡である。調査は、川除屋敷裏遺跡の名称で発掘調査を実施し、牛田廃寺跡は川除屋敷裏遺跡の中に含まれる。

調査区には便宜的に数字を付して管理しており、平成 30 年度は 1～5 区の発掘調査を実施した（第 3 図）。発掘調査は 2 区から開始し、その後、1・3 区の調査に着手した。4・5 区に関しては、調査を効率的に進めるため、有限会社 毛野考古学研究所に調査支援業務を委託している。2～5 区では、6～9 世紀の竪穴住居跡が重複し大量に検出され、大規模な集落跡が把握された。住居跡の時期は 7～8 世紀のものが最も多く、牛田廃寺跡の年代と概ね重複する時期が主体となる。

牛田廃寺跡は最も北側の1区で発見された(第3図)。調査が進展するに従い、8世紀前半に創建された古代寺院であることが判明し、藤岡市内で初めての発見例となった。また遺存状態が良く、この地域の歴史を解明する上で極めて重要かつ価値が高い遺跡であることが明らかになった。保存のための協議を各関係機関と行っていたが、保存箇所を決定するにあたり、寺院の正確な範囲を知るため調査区外にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。寺院の範囲がある程度明確となったため、平成30年11月22日、改めて牛田廃寺跡の現状保存について、牛田川除土地改良区・群馬県西部農業事務所農村整備課・藤岡市経済部農村整備課と藤岡市教育委員会文化財保護課との間で保存のための協議を行った。各関係機関の理解が得られ、調査を実施した箇所とその周辺の1,603m<sup>2</sup>が現状保存されることとなった。牛田廃寺跡の現状保存が決定したため、牛田廃寺跡の発掘調査は中断し、養生を行って埋め戻しを実施した。

残りの調査区の発掘調査を進め、平成30年12月28日に現地での作業を完了した。調査終了後、平成31年1月15日～2月15日まで、藤岡歴史館にて出土した遺物の洗浄・注記作業等の基礎整理を行った。

現状保存がなされた牛田廃寺跡は、令和2年9月28日に行われた藤岡市文化財保護審議会で藤岡市指定史跡にする旨が具申され、令和2年10月20日に藤岡市指定史跡として指定された。

令和4年6月27日には、群馬県文化財保護審議会調査部会及び群馬県地域創生部文化財保護課が牛田廃寺跡へ現地視察に訪れ、群馬県指定史跡への指定について検討を行っている。

### 第3節 整理報告書作成作業の経過

牛田川除地区遺跡群は、4か年の発掘調査を実施し、膨大な遺構・遺物が検出され、単年度での整理・報告書作成は困難であった。そのため発掘調査と併行し、整理作業を実施した。牛田廃寺跡の整理・報告書作成は、調査終了後から開始した。

整理作業を円滑に進め、報告書を確実に刊行するため、部分的に民間発掘調査組織に業務委託を行っている。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

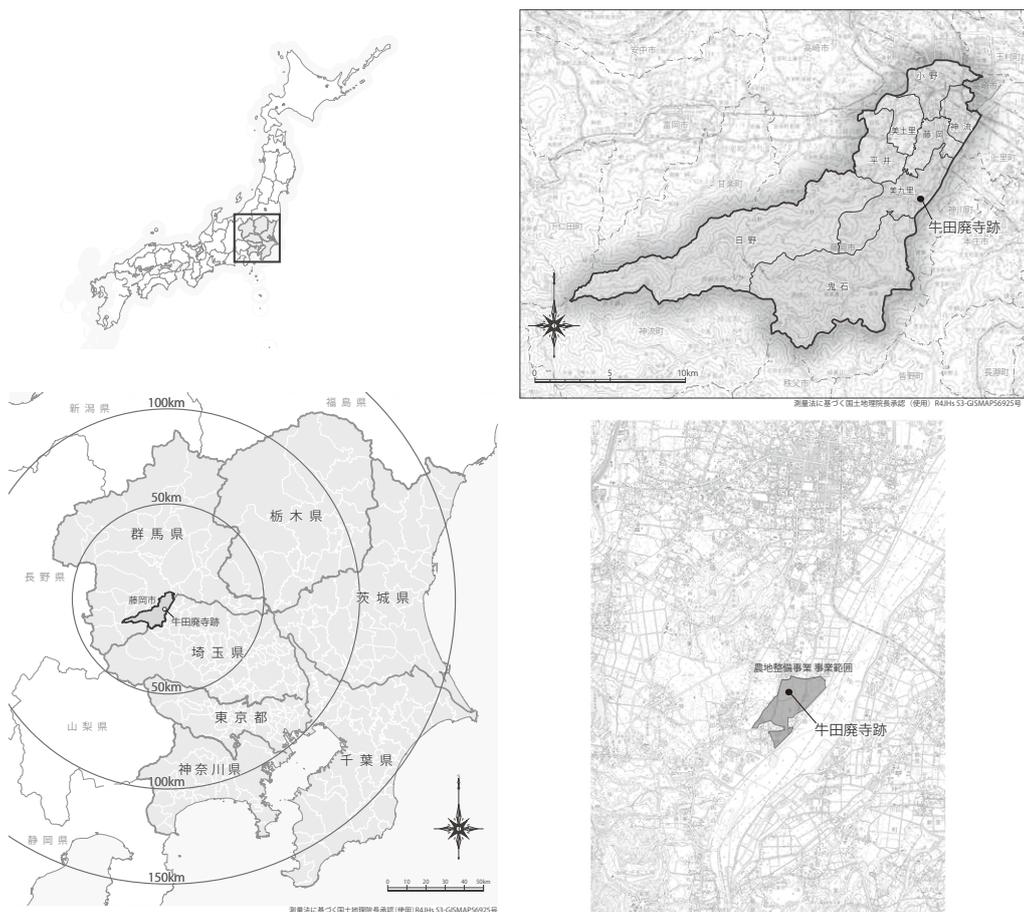
藤岡市は群馬県南西部に位置し、面積は180.29km<sup>2</sup>で東西に長く伸びる地形である。周囲を烏川・鎭川・鮎川・神流川といった複数の河川に囲まれており、市の北端はこれらの河川の合流地となっている。藤岡市の現在の中心地が存在する藤岡台地は、鮎川と神流川による砂礫の運搬作用によって形成された扇状地である。これらの河川周辺には多くの水田が作られている沖積地（藤岡低地）が広がる。南部には関東山地に連なる丘陵・山間部があり、変化に富んだ地形を形成している。

川除屋敷裏遺跡全体の微地形については既発掘調査報告書で記述しているため〔藤岡市教委2020・2023〕、ここでは牛田廃寺跡がある1区に絞り記載する。

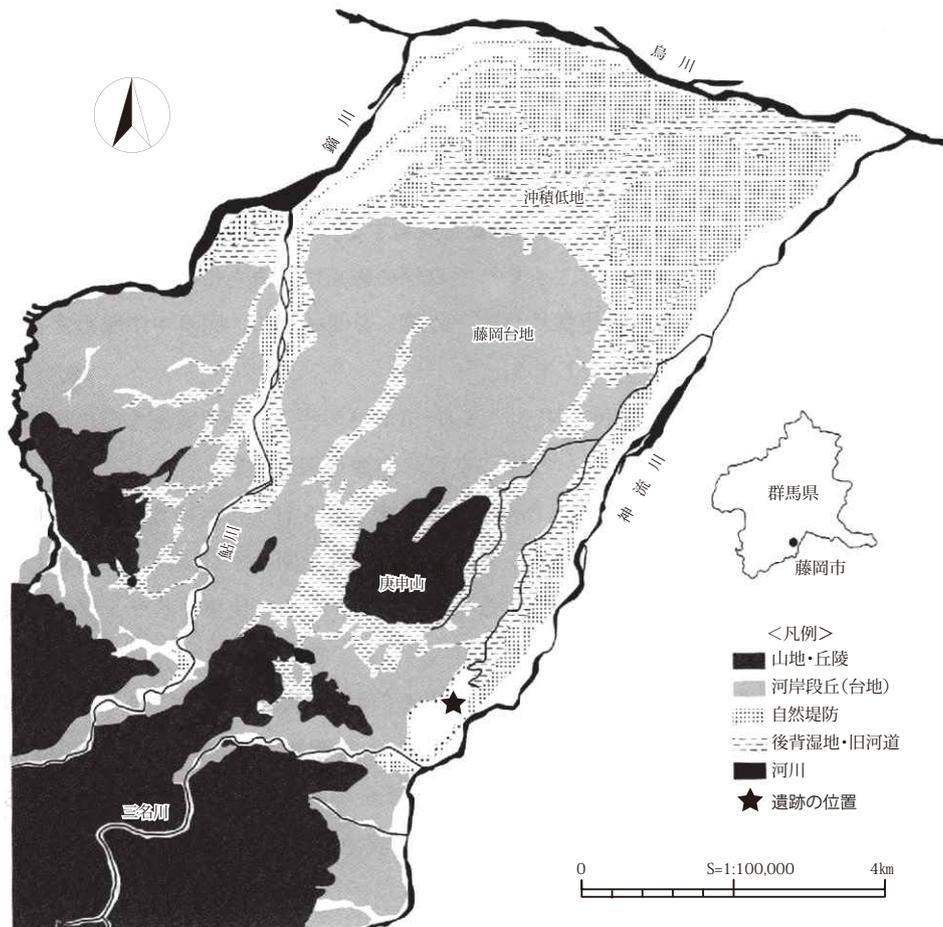
牛田廃寺跡が発見された川除屋敷裏遺跡1区は、事業地の北側に位置し、藤岡台地から東に200m程度離れた箇所に所在する。1区の牛田廃寺跡が見つかった現況の標高は97.400m程度である。東を流れる神流川の標高は、93.000mであり、比高差4.4mを計る。一方、西側の藤岡台地上端部は106.000mであるので、8.6mの比高差がある。1区が位置する箇所は、藤岡台地の縁が「く」の字に屈曲する地点であり、やや奥まった箇所となる。

事業地内には、台地上から流れる尻無川から連続する3面をコンクリートで固めた古い水路が南北方向に流れており、1区の東側を北方に流下し、農業用水として使用されている。水路周辺を調査のため掘削した際には、水路周辺から砂礫が検出されたため、尻無川の流路を用水路として使用している可能性が指摘できる。

1区は調査前は水田として利用されていた。調査前に事業地内の踏査を行ったが、他の場所と同様に牛田廃寺跡周辺からは遺物はまったく採集することができず、調査前に寺院の存在を予測することは不可能であった。現況は

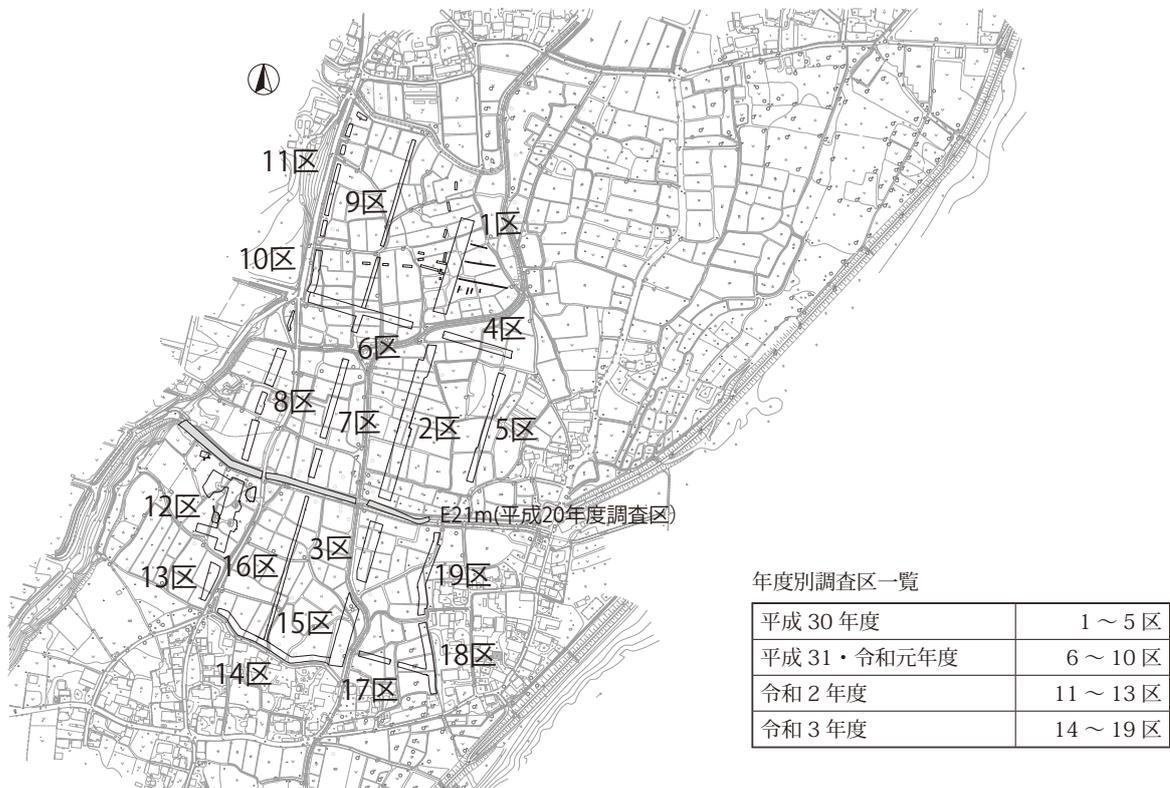


第1図 遺跡位置図



藤岡市教育委員会2020「C58・C62大林E遺跡」より引用・一部改変

第2図 藤岡市の地形



第3図 調査区位置図

平坦な地形であり、調査で検出された基壇の存在などを地表面から確認することはできなかった。また現在の水田の区割りに寺院の痕跡は反映されておらず、地表面から寺院もしくは遺跡の痕跡を発見することは困難であった。当該地は、神流川沿いの低地に位置し、洪水による被害を受けている可能性が高く、そのため旧地表の情報は土砂で覆いつくされてしまったと思われる。

#### 参考文献

藤岡市教育委員会 2020 『群馬県藤岡市牛田廃寺跡発掘調査概要報告書』 藤岡市教育委員会

藤岡市教育委員会 2023 『群馬県藤岡市牛田古墳群 (E32c 川除屋敷裏遺跡 12区)』 藤岡市教育委員会

## 第2節 周辺の微地形と遺跡との対応関係

現地での踏査及び各土地の標高が記載された事業計画平面図から、低地部にも僅かな比高差が存在することが把握できた。便宜的に第1面（標高：約94.8～97.0m）、第2面（標高：97.3～98.6m）・第3面（99.8～101.0m）・第4面（98.8～101.3m）として区分したこれらの区域では、調査により遺跡のあり方にもある程度の違いがあることが明らかとなった（第4図）。

まず神流川沿いの第1面と第4面の東側では試掘調査の結果、遺構・遺物は全く確認されなかった。第1・4面では、第2・3面で安定的に堆積しているAs-B軽石（1108年降下）が見られず、神流川の氾濫で流されている可能性が高い。

現在遺跡が確認されているのは第2面と第3面であり、ここではAs-B軽石が安定的に堆積している。第2面ではAs-B軽石と確認面の間に、土師器碎片が混じる黒褐色土層が20cm程度堆積していた。成因は不明だが広域に堆積しており、神流川の氾濫によるものである可能性が高い。第2面には牛田廃寺跡をはじめとして7～10世紀の時期の住居跡が多数検出されている。遺跡の密度に偏りがあり、第2面の南側で住居跡が夥しく重複して発見された。一方、牛田廃寺跡の周辺でも住居跡は検出されているものの、南側に比べると散発的である。また牛田廃寺跡周辺では、6世紀や9・10世紀といった時期の住居が多く、寺院が存続していた時期には、周辺に住居は作られなかったようだ。また第2面の藤岡台地寄りの地点には、数基の古墳が存在している。

第3面はもっとも藤岡台地寄りの地点で、藤岡台地上から尻無川が流れる箇所当たる。この一帯だけ台地から舌状に張り出し、第2面より1m程度標高が高い。令和元年度にこの地点の調査を実施したところ、As-B軽石



第4図 牛田川除地区の微地形

が覆土に混入する土坑群や同時期と考えられる墓坑が検出されており、第2面と比較して新しい時期の遺構が検出された。住居も検出されているが、第2面と比較してその数は少数である。

第3面は尻無川からの土砂による堆積作用によって形成されたと思われる、第3面下からは2基の埋没古墳（牛田古墳群1・7号古墳）が検出された。As-A 軽石、As-B 軽石の堆積状況から、As-B 軽石降下後（1108年）からAs-A 軽石降下以前（1783年）の約600年の間に埋没し、現在の地形が形成されたことが確認された。

西側に控える藤岡台地端の標高は、105m程度で低地部との比高差は最大10m程度である。台地上でもこれまで調査が行われているが、古墳時代後期を主体とした夥しい住居跡が重複する大集落や大規模な群集墳（小林古墳群）が検出されており、台地の上下でも遺跡群に時期差が指摘できる。

### 第3節 歴史的環境（第5図）

藤岡市には数多くの遺跡が存在する。特に牛田廃寺跡に先行する古墳時代には1500基にも及ぶ大量の古墳が作られているが、牛田廃寺跡と同時期の奈良時代の遺跡の検出例は多くはない。

寺院跡では、牛田廃寺跡から3kmほど南の神流川左岸に、緑野寺と称された広厳山般若浄土院浄法寺（天台宗）が存在する。8世紀後半に道忠によって創建されたといわれる浄土院浄法寺（緑野寺）は、道忠教団による東国布教の中心となっていた。浄土院浄法寺（緑野寺）には、『続日本後紀』の承和元年（834）5月15日の条に関東の国司に対して、一切経の書写が命じられ、その教本が浄土院浄法寺（緑野寺）にあるとの記載があり、当時大きな影響力を持っていた寺院であった。室町時代の康応元年（1389）の『大石能重打渡状』（神奈川県明王院文書）には、「浄法寺九郎入道跡平塚・牛田・岩井事」と記され、室町時代には、浄法寺と牛田に何らかの関係性があったことが確認できる〔群馬県史編纂委編1984〕。現在の浄法寺周辺からは8世紀から中世にかけての瓦が採集されており、発掘調査はされていないが、古代においてもこの周辺に瓦葺の建物が存在していたことは確実である。

このほかに藤岡市で古代寺院と推定される遺跡として、藤岡市上栗須・篠塚に所在する水窪遺跡、山王久保遺跡がある。水窪遺跡からは、昭和26～36年にかけて多数の瓦が出土したとの記録があり、山王・秋間系第2段階の複弁7弁軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが採集されている。水窪遺跡は窯跡や寺院跡、山王久保遺跡は官衙〔木津1997〕と推測されているが、発掘調査はされておらず、遺跡の性格に関しては不明である。当該地は現在、住宅地になっており、再調査することは難しい。

藤岡市内で調査された瓦窯跡は、金山窯跡と下日野金井窯址群があり、いずれも山間部から連なる丘陵の沢沿いに構築されている。下日野金井窯址群は藤岡市金山の沢沿いで発見され、a・c・d・f・g地点から16基の窯跡が検出された。金山窯跡は広義では下日野金井窯址群g地点に含まれる。これらの窯跡からは多量の須恵器と瓦が出土し、7世紀末から9世紀後半までの操業が確認された。上野国分寺跡との同范関係も確認されており、上野国分寺跡に瓦を供給していたことが明らかとなっている。また金山窯跡・下日野金井窯址群から出土している重弧文軒平瓦や単弁6弁軒丸瓦などと同系・同范の瓦が牛田廃寺跡でも出土しており、この窯跡群から牛田廃寺跡へ瓦を供給していたことが明らかとなった。

このほかにも瓦・須恵器を焼成した竹沼窯址群や、古墳時代の埴輪窯跡である本郷埴輪窯跡・猿田Ⅱ遺跡などが発見されており、古代から窯業が極めて盛んな地域であった。

藤岡市内では確実な官衙遺跡は現在までのところ見つかっていないが、いくつか可能性がある遺跡が存在する。藤岡市上栗須遺跡群では「延別緑印」の文字が記された銅印が採集されているほか、コ字状に配列する掘立柱建物跡や大形のカマドを持つ住居、また奈良時代の水路などが検出されており、官衙的な性格をもつ遺跡である可能性が高い。近接した箇所には、山王久保遺跡・水窪遺跡が存在する。株木遺跡では、12軒の住居を切って構築された基壇と礎石を持つ建物跡が発見されている。時期は9世紀と推定され、この遺構には瓦は伴わないが、基壇や鉄釘などの鉄製品・鉄滓から官衙的な性格を持つ遺跡と考えられた。詳細は不明だが株木遺跡の周辺で、昭和28年頃水田の開田中に多量の瓦が出土したとの記録が存在する。

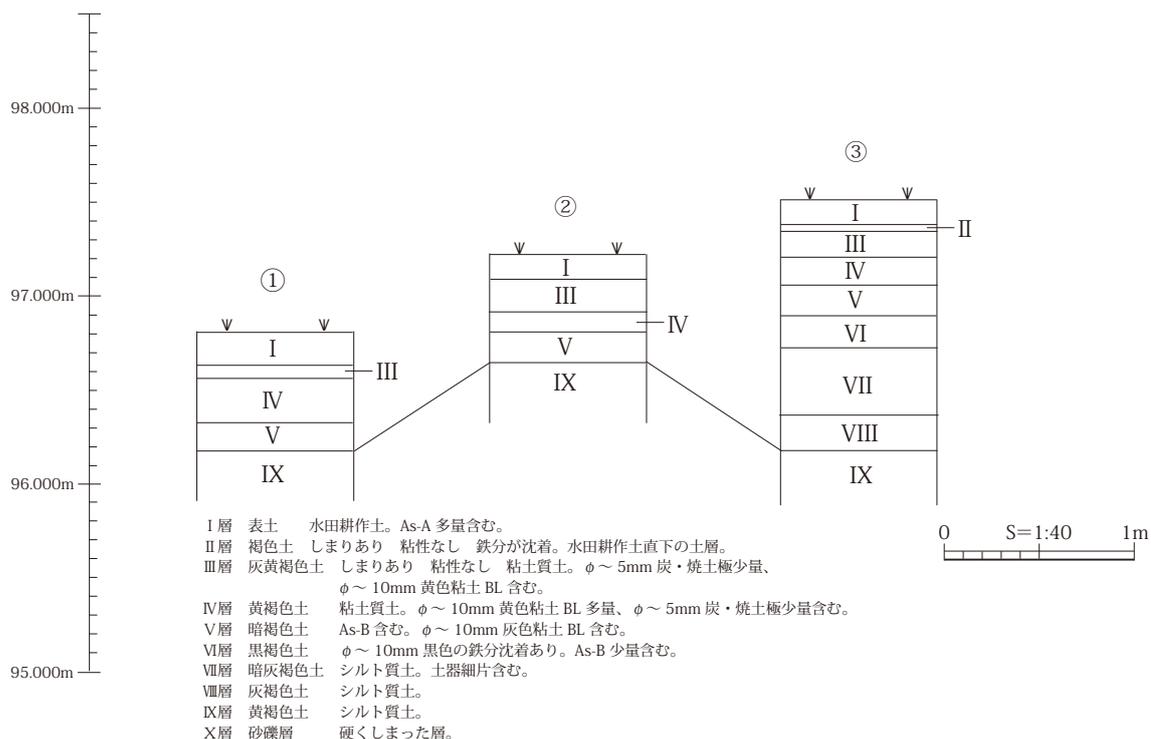


第5図 牛田廃寺跡の位置と古代を中心とした周辺の遺跡

### 第3章 基本層序

1区調査区内の3箇所では基本層序を確認した。砂礫層（IX層）の深度に差が見られ、牛田廃寺跡1号建物跡付近が最も高く、そこから離れると徐々に砂礫層（IX層）の深度が深くなることが確認された。

そのため、堆積土層にも相違があり、①・②地点では、③地点で見られたVI・VII・VIII層の堆積は見られない。さらに①・②地点ではAs-B軽石を含むV層は、砂礫層（IX層）直上に堆積している。1号建物跡の基壇上では、V層は検出されておらず、周囲より高かったため削平され残存していないものと考えられる。1号建物跡付近のV層内には、一定量の瓦が含まれていたが、1号建物跡から離れるにつれて瓦は検出されなくなる。



第6図 1区 基本層序

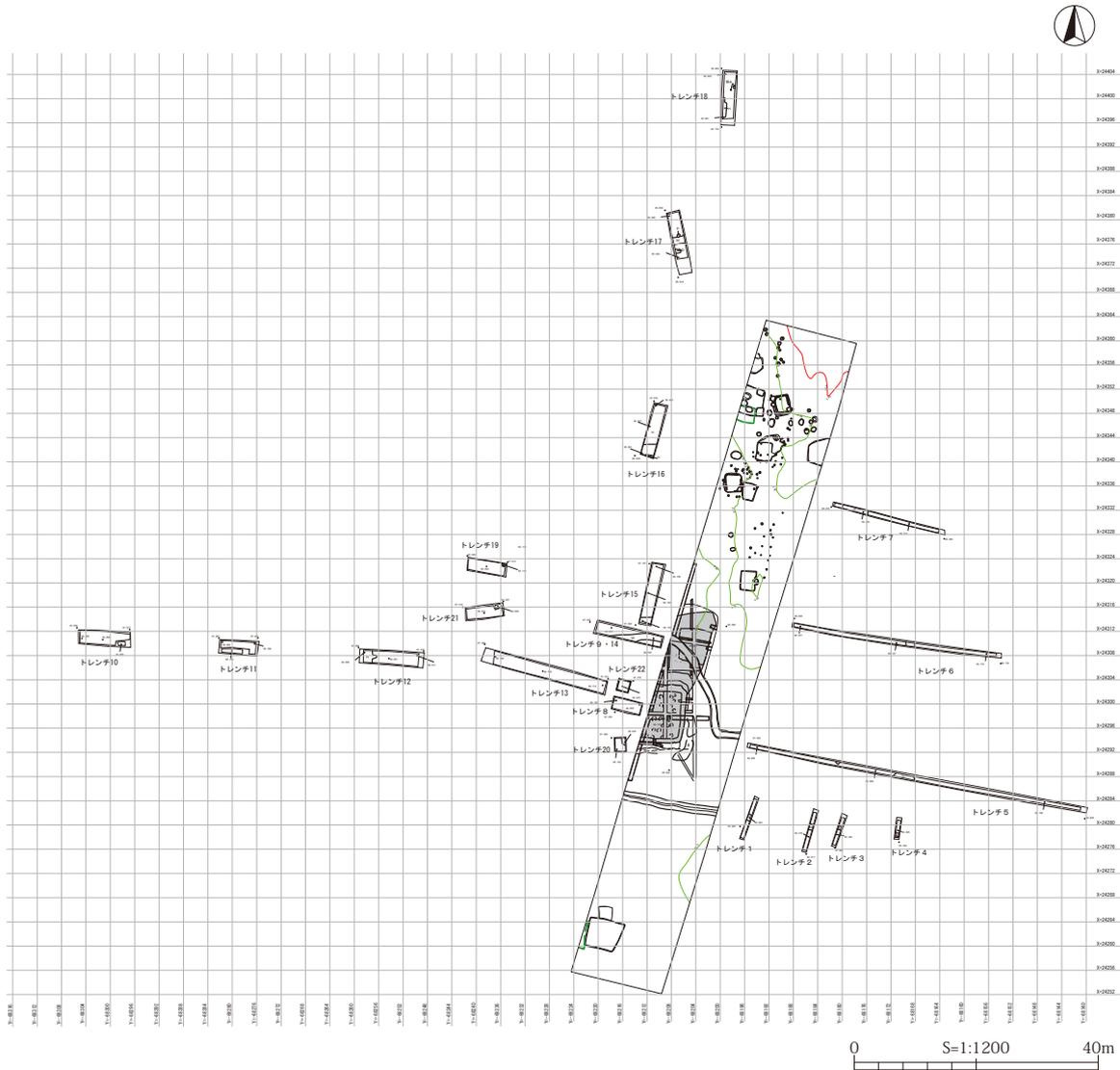
### 第4章 検出された遺構と遺物

#### 第1節 川除屋敷裏遺跡1区と牛田廃寺跡の概要

牛田廃寺跡は、川除屋敷裏遺跡1区で発見された8世紀第2四半期創建の古代寺院跡である。先述したように牛田廃寺跡を含む川除屋敷裏遺跡は、神流川左岸の低地に位置している。調査前の現況では、水田として利用されており、平坦な地形を呈していた。1区東側には、台地上から流れる尻無川が用水路となり北流している。調査前の現地踏査では、遺物などは全く採集することができず、遺跡の有無を判断することは出来なかった。

藤岡市がこれまで実施した分布調査においても同様であり、1区周辺や川除屋敷裏遺跡の大部分は包蔵地として登録されていなかった。遺跡が初めて把握されたのは、平成20年に藤岡南部地区基盤整備事業に伴い実施された発掘調査が初めてであり、古墳～古代に及ぶ集落跡の存在が明らかとなった。今回の牛田川除地区基盤整備事業に伴う発掘調査で、遺跡の広がりや内容がかなり明確となっている。

1区からは、牛田廃寺跡と竪穴住居跡、土坑、溝が検出されている。竪穴住居跡は、牛田廃寺跡と平面的に重複せず、牛田廃寺跡を避けて構築されている。時期は10世紀代のものが多く、牛田廃寺跡が営まれていた期間には、周囲に竪穴住居跡は少数であった。寺域を区画する溝などは見つかっていないが、寺域と居住部分はある程度、区別されていたと考えられる。



第7図 川除屋敷裏遺跡1区 牛田廃寺跡・トレンチ全図

## 第2節 牛田廃寺跡の立地

牛田廃寺跡が位置する箇所は、藤岡台地上から流れる森沢川の侵食により、藤岡台地が「く」字状になる地形変換点付近にある。1区周辺は、現況では平坦な地形で、他調査区との高低差はほとんど感じない。しかし、1区では地表面からの地山までの深度が50～60cm程度と浅く、特に牛田廃寺跡がある箇所が最も浅くなる。検出される地山も、他の地点は暗黄褐色を呈する粘土質土であるのに対し、1区は硬く締まった砂礫層が地山であった。

牛田廃寺跡の現状保存が決定した後、牛田廃寺跡の範囲を把握し保存箇所を確定するため、周辺の試掘を実施し、地山の状況がある程度把握できた(第7図)。

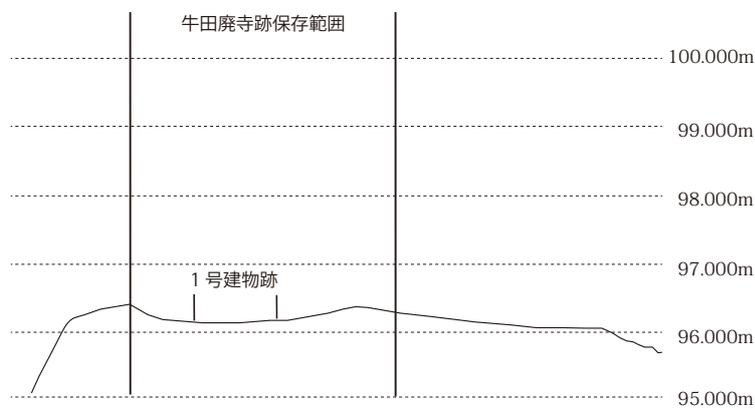
第8・9図は1区及び試掘トレンチで確認された砂礫層までの深度を元に作成したエレベーション図である。南北方向(第8図)では、牛田廃寺跡が検出された範囲がもっとも砂礫層のレベルが高く、北側に向かって緩やかに傾斜している。一方、南側は急激にレベルが下がっており、砂礫層が地下に潜っていることが見て取れる。実際に1区南端では砂礫層は検出されず、暗黄褐色粘土質土が地山として検出されている。

第9図は、東西方向のエレベーション図である。南北方向と同様に牛田廃寺跡がある範囲が最もレベルが高く、

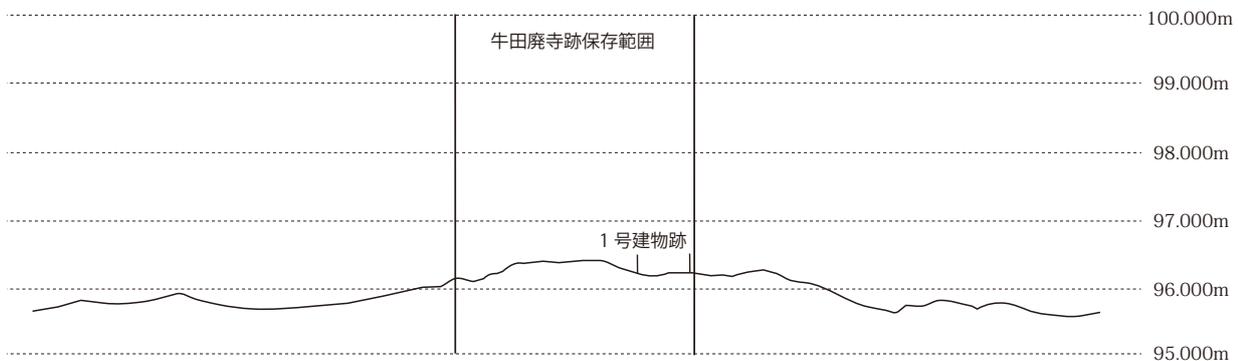
東西のレベルは緩やかに下降している。

1区で確認される砂礫層は、他の調査区ではより下部の層で検出される砂礫層と同様であり、1区だけ下層の砂礫層が盛り上がり高いレベルで検出されていると予測される。1号建物跡が造営された箇所の地山砂礫層が窪んでいるが（第8・9図）、これは1号建物跡基礎を掘り込み地業で構築する都合上、ある程度の掘削を行うことができる土壌が存在する箇所を選地した結果と捉えることができる。

1区で検出された地山砂礫層は、北側から細長く伸びる馬の背状の形状であった可能性が高い。「産総研 地質調査総合センター」の「地質図ナビ」を確認すると牛田廃寺跡が位置する箇所は、南北に帯状に分布する河川堆積物となっており、自然堤防と考えられる。周囲と異なる地質の箇所に牛田廃寺を選地したことがこの図からも明らかである（第10図）。砂礫層は硬く締まっており、粘土質土より強固な地盤を形成している。このような特徴を持つ箇所は1区以外にはなく、この固い地盤を持つ箇所を選定し、牛田廃寺を選地した可能性が高い。牛田廃寺の遺跡内におけるミクロ的な選地は、砂礫層の有無という地質的な要因が関係していると考えられる。



第8図 牛田廃寺跡 地山砂礫層エレベーション図（南北方向）



第9図 牛田廃寺跡 地山砂礫層エレベーション図（東西方向）



第10図 牛田廃寺の位置と地質

20万分の1日本シームレス地質図V2（出典：産総研地質調査総合センター、資質図更新日：2022年3月11日） <https://gbank.gsj.jp/seamless>

## 第3節 牛田廃寺跡 遺構

### 第1項 1号建物跡

#### 発見当初の様相

1号建物跡は、川除屋敷裏遺跡1区中央付近から検出された(第11図)。1区の表土除去時に1号建物跡周辺で瓦が散布する状況が確認されていたが、この場所に寺院が存在しているという認識はなく、当初は近隣に所在する本郷埴輪窯跡との類推から、瓦窯跡の灰原ではないかと推測していた。

確認面より1段高い箇所には寺院基壇が存在し、一部南側の瓦集積を削ってしまったが、それ以後は瓦が集中する上面で掘削を止め、人力での作業に移行した。1号建物跡と認識した範囲には瓦片が大量に散布していたが、1号建物跡周辺で最も濃く、発掘調査の進展により1号建物跡に大量の瓦が伴うことが追認された。確認時には瓦散布範囲とほぼ重なるように黄色粘土が認められ、寺院に伴う何らかの遺構と考えられた。

#### 基壇(第14図)

主軸：N-1°-E 東西長：10.6m 南北長：9.3m 基壇高：[0.2m]

掘り込み地業と版築を施工し、外装を持つ基壇が検出されている。礎石建物であったと考えられるが、上面が削平されており、礎石や礎石根石は検出されていない。基壇高は0.2m程度残存している。基壇の形状は、東西長：10.6m、南北長：9.3mの東西にわずかに長い長方形を呈し、主軸はほぼ真北を向く。

基壇上面には、2cm程度の厚さで黄色粘土を貼っており、中央部分に黄色粘土がない方形のプランが確認された。建物の痕跡である可能性が考えられるが、調査ではそれを証明する所見は得られていない。黄色粘土は、基壇外側に流れており、基壇外周で検出された瓦集積を被覆している。基壇上の黄色粘土検出面では、10cm程度の河川礫の散布が認められた。礫が集中する箇所はなく、性格は不明だが、掘り込み地業の版築覆土にはほとんど含まれない。

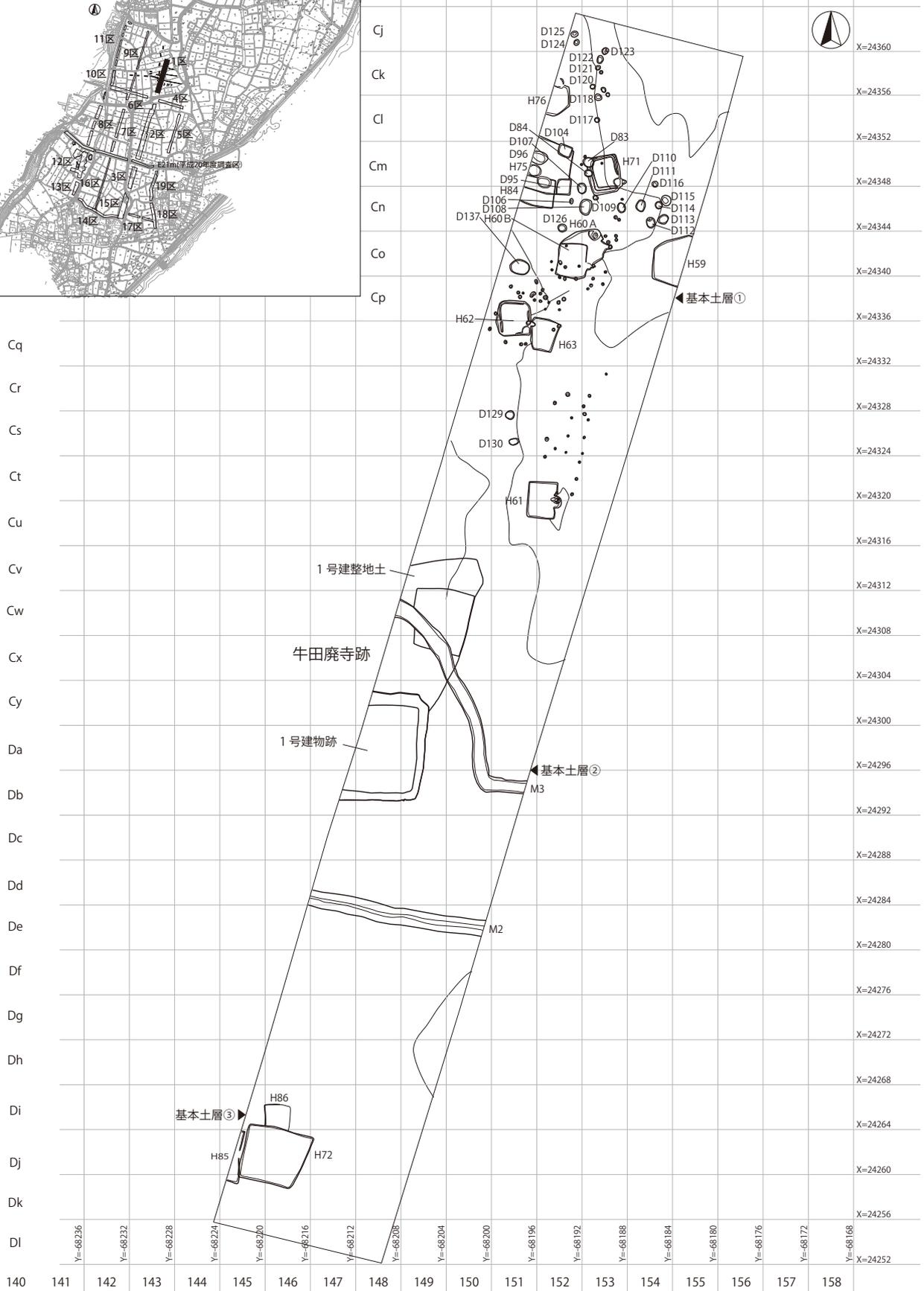
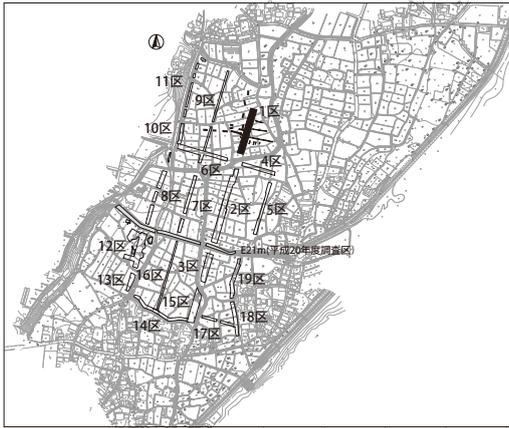
牛田廃寺跡の1号建物跡や他地点では炭化物や焼土は見られず、火災の痕跡は確認されていない。

#### 掘り込み地業・版築(第14・17図)

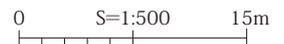
1号建物跡の基壇は、掘り込み地業・版築を行い、地盤改良を行っている。掘り込み地業にあたっては、砂礫層であるⅨ層は、掘り込んでいない。調査区内における掘り込み地業の掘り込み深度は、Ⅷ層上面から5～25cm程度であり、地点によって大きな差が見られた。これは砂礫層であるⅨ層が東から西に向かって傾斜しているためである。Ⅸ層は極めて締まりが強い砂礫層であり、強固なⅨ層を利用し基壇を構築していた。Ⅷ層を掘り込んでいたが、全てを掘り切っておらず、南北セクションでは、底面直上にⅧ層の掘り残しが見られ、その土層だけ締まりがない土層であった。1区では、Ⅸ層が検出される深度が他の調査区と比べ非常に浅く、このことが1区に寺院を選地した理由の1つと考えられる(第8・9図)。

掘り込み地業の範囲は、北側では基壇外装外側10cmほどで立ち上がり確認できるため、基壇外装とほぼ対応するが、南側は基壇外装から外側に1.2mのところ立ち上がりが見られ、対応しない。東は、基壇外装が検出されておらず、判然としないが基壇のプランから推測すると概ね対応している可能性が高い。西は調査区外のため不明である。南側のみ掘り込み地業の範囲がやや広い。南北セクションの観察では、南の基壇外装から外側に50cm程の箇所にも立ち上がりが見られ、その立ち上がりを境にして版築土の土色が異なっていた(第17図)。丸瓦・平瓦の分類と比率から、大規模な改修を行っている可能性が高く、この2つの立ち上がり土色の違いも寺院の改修を示唆しているかもしれない。

掘り込み内には、土色が異なるシルト質土を10cm程度の厚さで交互に積み上げ、版築している。版築は、最大50cm程度が残存していたが、上面が削平されているため本来はより厚かったと考えられる。基壇中央付近が最も厚く、東に行くに従い薄くなるが、これはⅨ層砂礫層の傾斜と関連している。版築土は、基本的に灰黄色と黄褐色の土を交互に積み上げているが、土色の違いはわずかであった。これらの版築土は極めて硬くしまっており、入念な突き固めを行っている。検出面最上部では、基壇端部1m程度の範囲に黄色土が貼られているのが確認された。



第 11 図 1 区 全体図・グリッド配置図



版築土の土色・土質は、地山Ⅷ層と類似しており、掘り込み地業で掘削した土を版築土に使用していると考えたい。版築土内には、10cm 程度の小礫がわずかに見られたが、集中する箇所や層はない。また版築土内からは、極少量の土器の細片が検出されたが、瓦は全く出土せず、1・2号整地土とは対照的である。検出された土器は、土師器・須恵器の細片で、古墳前期の土器片も検出されている。

#### 基壇外装（第 14・15・18 図）

基壇には外装が施されているのが確認された。場所によって部材が異なる。南面は、瓦と礫を併用し、北・西面は自然石で構築している。東面は遺存状態が悪く、残存していなかった。

南面は礫を併用した瓦積基壇が 3m 程の範囲で検出され、残存高は 0.2m 程である。南東角部は遺存していない（第 18 図）。南面東側では基壇中心部分で 3.3m ほど外装が抜ける箇所があるが、そもそも存在しないのか遺存していないのか判断できなかった。調査区西壁で自然石が 1 石検出されており、外装の続きと考えられる。トレンチ 20 は基壇南西角を確認するため設定したが、外装は遺存していなかった。

検出された瓦積基壇は、調査中に牛田廃寺跡の現状保存が決定したため、記録を取り解体せずにそのまま埋め戻しを行ったため、表面的な調査しか行っていない。使用されている瓦は、確認できた範囲では、平瓦 A1 類を主に使用しており、2 点の軒平瓦 A 類が混じていた。軒平瓦 A 類はいずれも凸面を上にし、瓦当面を基壇正面に向け、瓦当文様が見えるように配置している。解体していないため、確定はできないが、使用瓦に平瓦 A1 類・軒平瓦 A 類以外の瓦の使用が見られないため、補修瓦である平瓦 B 類で補修される以前もしくは補修時に不要な瓦で作られたものである蓋然性が高い。

使用されている瓦は不定形の破片であり、形状は整っていない。表面的な観察では人為的な打ち割りなどは確認できず、大きさも様々であり、偶発的に割れた瓦片を使用しているように見える。表面的な観察では、すべて瓦の凸面を上にして積んでいるが、向きは揃っておらず乱雑である。最下部には地覆石は見られない。瓦積基壇正面には検出時に土が堆積しており、その堆積土の上に大量の瓦が検出された。1 号建物跡の最終段階には、検出された瓦積基壇部分は土に埋もれて見えていなかったと考えられる。部分的に礫が使用されており、北・西面と同様に珪岩・結晶片岩・砂岩といった自然石を使用しているが、1 石だけ牛伏砂岩を使用している。表面上、牛伏砂岩には工具痕などは見られず、切石かは不明である。各石材の大きさ・形状は不揃いで、規格性は見られない。石材は南面の西よりに見られ、瓦積とは完全には重複しない。

北面では、自然石を用いて基壇外装を行っているが、遺存状態は不良であった。北・東側には瓦集積と黄色粘土の境に根石の抜き取り痕と見られる円形プランが複数確認された。瓦集積と黄色粘土の境には、根石と思われる石材がまばらに検出されたが、原位置を留めておらず、向きは揃っていない。使用されている石材は、結晶片岩・砂岩・珪岩である。

西面は調査区外であったが、基壇の範囲を確定するためトレンチ 8・20・22 を設定し、確認を行った（第 15 図）。上面を検出し平面・断面の記録を作成したのみで、それ以上の掘り下げは行っていない。遺物もほとんど取り上げず、埋め戻した。基壇外装は、トレンチ 20 では全く遺存しておらず、トレンチ 22 では、2 石だけ確認され、いずれも状態が悪い。トレンチ 8 が最も良く遺存しており、自然石を用いた外装が検出された。チャートを主に使用しており、少数の結晶片岩、砂岩が混じる。検出されたのは 1 石だけで根石と思われる。石の大きさ・形状は他の箇所と同じで揃っていない。トレンチ 8 のみ外装から内側に 0.5m 程のところには石列がさらに 1 列検出されたが、調査範囲が限られるため、性格は不明である。

東面に関しては北東で抜き取り痕らしき円形プランが検出されたが、遺存状態が悪く、礫などは検出できなかった。現状保存が決定し調査を途中で終了したため、東面に関しては全体的に掘り下げが甘く、根石が残存している可能性がある。

#### 基壇外周（第 14・19～22 図）

基壇外装の外側約 1m の範囲から、大量の瓦が検出された。遺物の出土は基壇の外周で密集しており、基壇内部

ではごく少ない。遺物は瓦が主で、そのほかに鉄釘やごくわずかの土師器・須恵器の出土が見られた。瓦集積は、基壇外装外側の約1mの範囲に集中しており、建物の軒からそのまま落下したような出土状態であったが、場所によって出土量が濃淡がある。南・西面が最も多く、北面がややまばらで、東面では少ない。表土掘削時の不備から南面の瓦集積の一部を削ってしまっている。

#### 雨落溝（第14図）

基壇の南・東で浅く幅広の溝が確認され、軒から垂れた雨水が形成した雨落溝と判断した。西側の状況は調査区外のため不明である。幅は0.6～1.5mで場所によってやや異なる。深さは10cm程度と浅く、地山が砂礫の箇所ではプランが途切れてしまっている。北側では、瓦集積の下から溝のプランが検出された。

北・東・南面で雨落溝が検出されたことから、建物の屋根形態は、切妻造りではなく、寄棟もしくは入母屋造りであった可能性が高い。

#### 瓦の出土状況と分布（第19～22図）

##### 1区調査区内1号建物跡部分

基壇外装の周囲数メートルの範囲に集中するが、そこから離れると密度が極端に薄くなり、瓦の出土は見られなくなる。外装内側にはほとんど分布しない。東側の分布は散漫で、南・北・西側で集中している。

1区調査区内で検出した遺物は、微細図を作成し、No.をつけ取り上げを行った。

出土した瓦は、軒丸瓦A～D類、軒平瓦A～C類、平瓦はA1・A2・B類、丸瓦はA1・A2・B・C1・C2類など、すべての種別の瓦が検出されている。出土比率に関しては、第1・3・4・5表に示した。

種別ごとに微細図を色分けし、接合関係を示したものが第19～22図となる。接合関係では、174（平瓦A1類）のみ南北の離れた箇所で見合っている他は、近接する瓦との接合が多数である。また、1号建物跡での瓦の接合率は非常に高く、原位置からそれほど移動していないと判断される。第20図の瓦集中部では、東西方向に丸・平瓦がおおむね交互に出土している。

軒先瓦については、南北で検出されているが、北側には小片が多く、大形の個体はすべて南側で検出されており、南面にしか軒先瓦を葺いていなかった可能性がある。

平瓦と丸瓦は隅角数を計数し、個体数を割り出した。全体では、平瓦A1類：27.75個体、平瓦A2類：0.5個体、平瓦B類：29.75個体、丸瓦A1類：11.5個体、丸瓦B類：15.5個体、丸瓦C1類：0.5個体、丸瓦C2類：0.5個体となり、平瓦B類・丸瓦B類がわずかに多い結果となっている。

北・南側では検出された平・丸瓦の種別の多寡に相違がある（第21図）。南側では、丸瓦A類・平瓦A類の出土が多い。一方、北側では、南側ではあまり見られなかった丸瓦B類・平瓦B類の出土が卓越し、北側に新しい時期の丸・平瓦が多いという傾向が認められた。これは北屋根の方が瓦の劣化が早かったためかもしれない。

東側では、丸瓦B類の大破片が多く検出され、北側の傾向と類似しているが、遺存状態が悪く実態を現しているかは不明である。

道具瓦は少数であるが、検出されており、北側にやや多い。南側では、南東隅付近で隅切り平瓦（208）が検出されている。

瓦のほかに、鉄釘も多数、検出された（第30図）。

##### トレンチ8・20・22

1号建物跡の西側範囲を確認するために設定した試掘トレンチである。黄色粘土及び基壇外装の外側に瓦集積が検出されている。瓦微細図とトレンチの断面図を作成後、埋め戻しを行ったため、各瓦の種別比率は不明である。トレンチ20瓦集積表面から軒丸瓦A1類（9）と軒平瓦B2類（98）が1点ずつ出土し、2点だけ取り上げを行った。トレンチ8・22の検出面では、軒先瓦は確認されていない。

### 1号建物跡の平面形の推定（第12図）

礎石が残っていないため建物規模や構造は不明だが、基壇内部に見られた黄色粘土及び方形プラン、雨落溝から建物の形態を推定したい。

基壇外装の範囲は、南北9.3m、東西10.6の東西にやや長い長方形である。基壇外装の内周には80～100cm程度の幅で黄色粘土が薄く堆積しており、さらにその内側に黄色粘土が見られない一回り小さい方形プランが確認された。トレンチ8では全面に黄色粘土が堆積し、平面ではプランの続きを確認することはできなかったが、トレンチ8南壁にサブトレを入れたところ基壇外装付近がもっとも黄色粘土が厚いことが確認された。そのためトレンチ8までプランが続くという想定で検証する。

プラン外側の黄色粘土は場所によって幅が微妙に異なるが、粘土の範囲を目安に線を引くとプランの大きさは南北9m、東西8m程度となる。近隣で基壇を持つ礎石建物としては、高崎市黒熊中西遺跡2・3号建物跡がある。基壇上に四面庇付建物が検出され、大きさは2号建物跡が東西11.1m・南北8.4m、3号建物跡は東西10.5m・南北8.4mと牛田廃寺跡1号建物跡と比較的近い大きさである。黒熊中西遺跡2・3号建物跡共に5間×4間で柱間2.1m（7尺）であった。

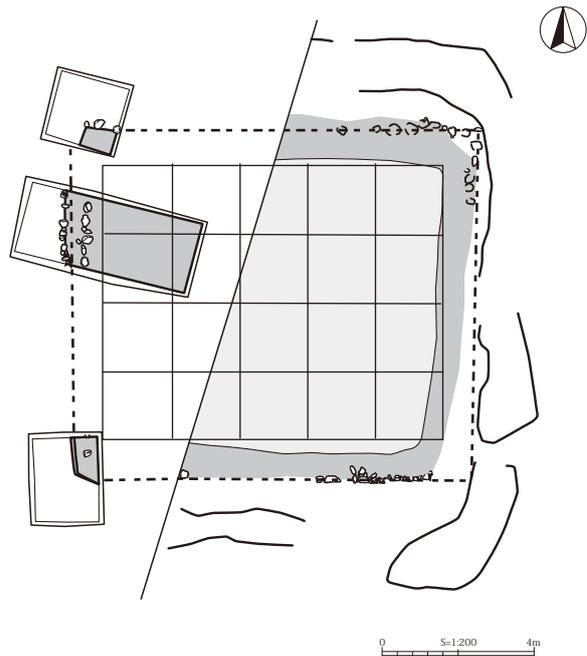
これを牛田廃寺跡1号建物跡に当てはめると、柱間2.1m（7尺）であると桁行は長すぎて黄色粘土にかかってしまい、またそれ以上だと基壇外側にでてしまい適当ではない。第12図で示したように柱間1.8m（6尺）と設定すると、1号建物跡のプラン範囲にほぼ収まり適当と考える。この場合の建物規模は、東西9.0m、南北7.2mで、東西に長い長方形を呈する。第12図の建物推定外形線から基壇外側で検出された雨落溝の距離は、南北で2m程度、東はやや短く1m程度であり、軒出を反映している可能性が高い。

建物の平面形状から、1号建物跡は金堂であったと考えたい。

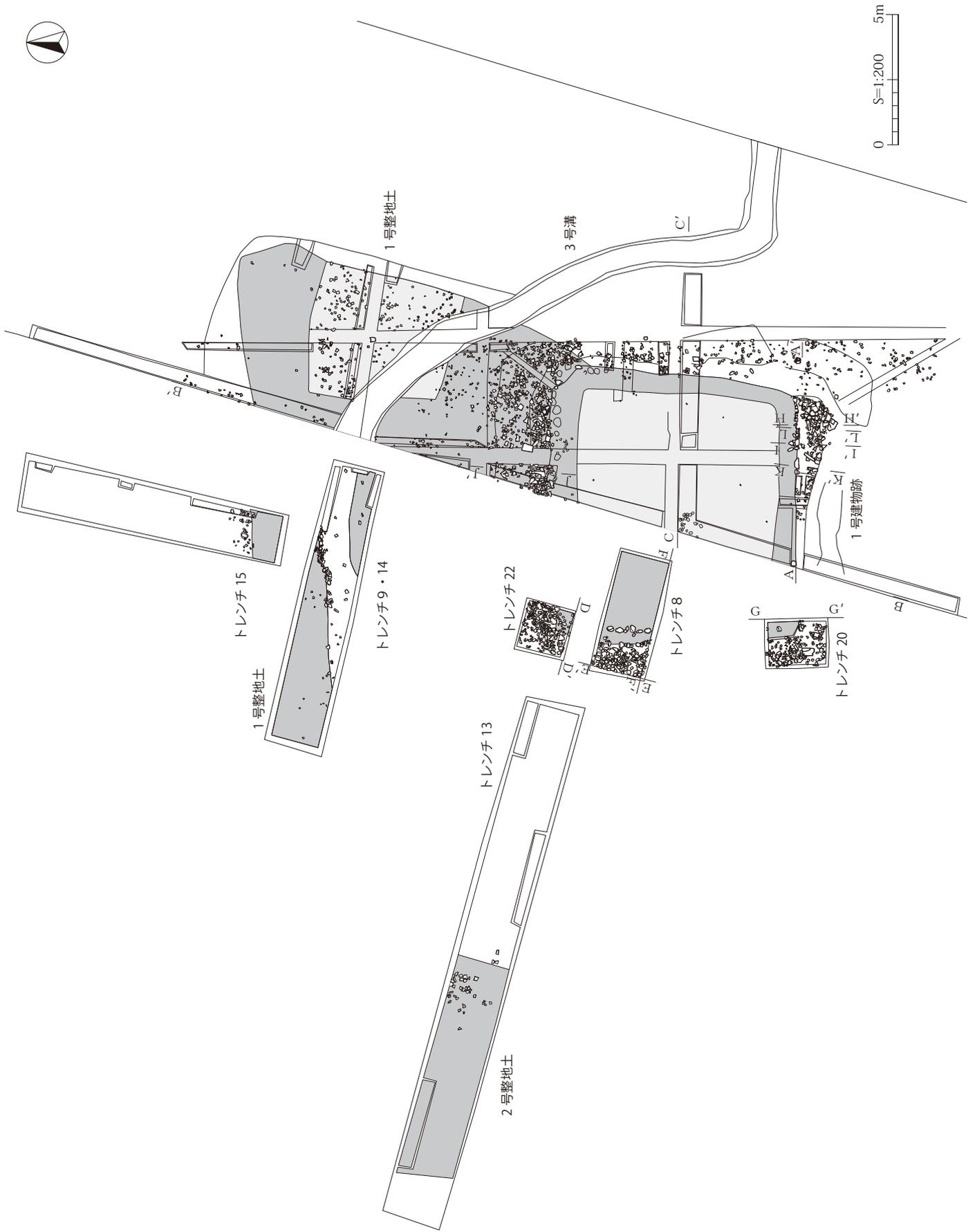
### まとめ

1号建物跡は、建物基礎に掘り込み地業と版築を施した基壇を持つ瓦葺の建物である。建物の正確な平面形は不明であるが、東西9m・南北7.2m程度の長方形の建物プランが想定され、金堂と考えられる。周辺からは、1・2号整地土が見つかったが、明確な建物痕跡は1号建物跡のみであり、現在のところ単堂の寺院との評価が適当であろう。

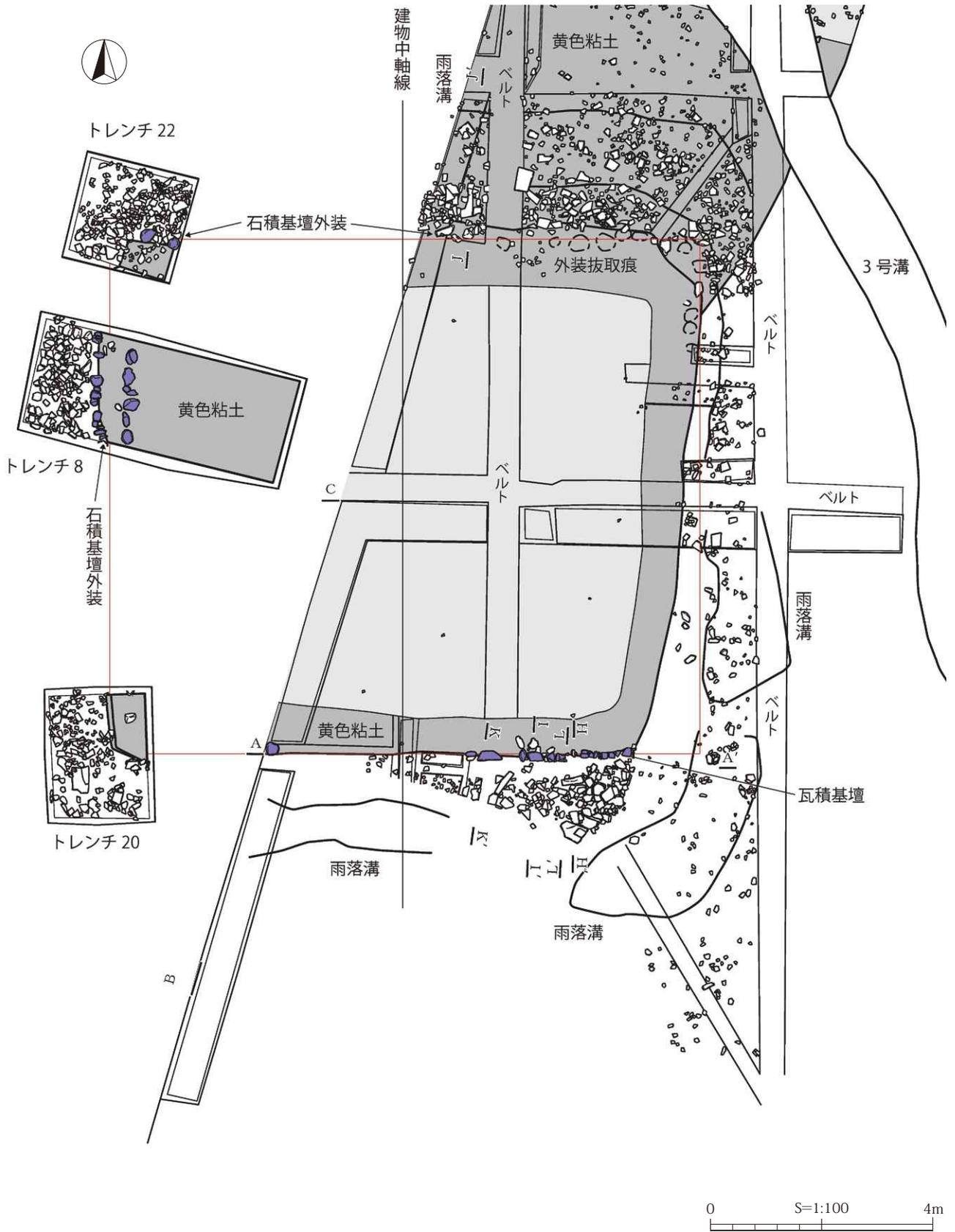
創建時期は、創建瓦の型式学的な検討から「8世紀第2四半期」であり（第5章第2節参照）、廃絶時期は1号整地土を切る3号溝と2号整地土から出土した須恵器坏の年代から「9世紀後半」には廃絶していたと考えたい。川除屋敷裏遺跡の竪穴住居跡数は10世紀に入ると激減し、遺跡は一気に衰退することが判明しており、牛田廃寺の廃絶と連動している可能性が高い。



第12図 1号建物跡 建物規模推定図



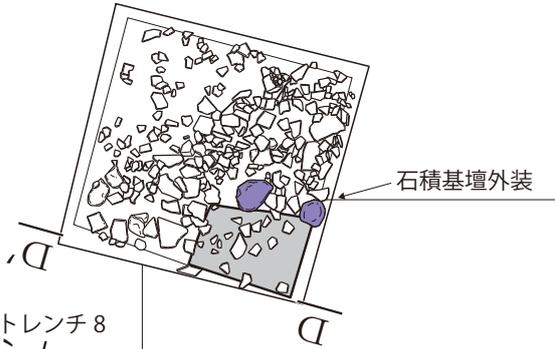
第13図 川除屋敷裏遺跡1区 牛田廃寺跡 遺構配置図



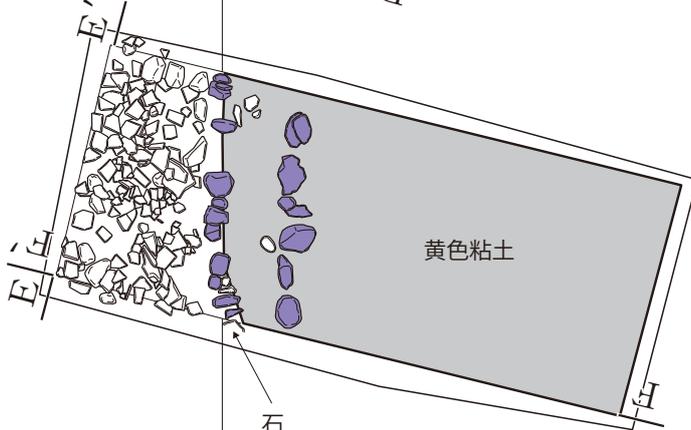
第 14 図 1 区 1 号建物跡平面図

トレンチ 22・8・20 平面図・断面図

トレンチ 22

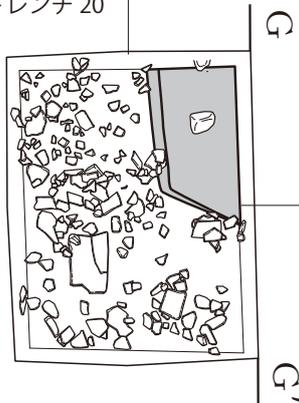


トレンチ 8



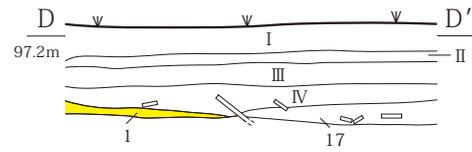
石積基壇外装

トレンチ 20



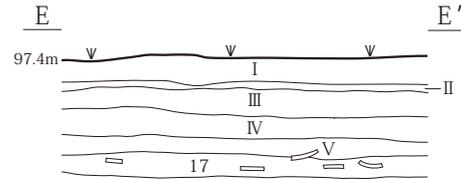
0 S=1:60 1m

トレンチ 22 断面図

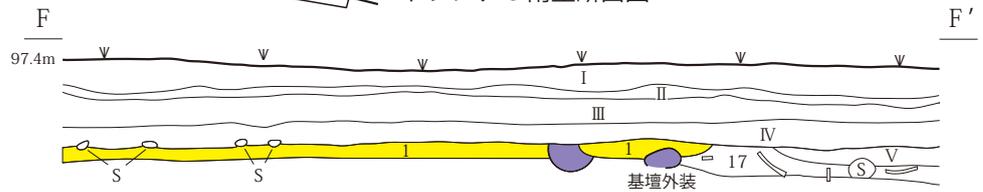


- 1. 黄色土 (5Y8/6) 粘土質土。基壇内周に貼られている土。
- 17. 暗黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりあり 粘性なし  
瓦集積の直下の土層。瓦小片僅かに含む。

トレンチ 8 西壁断面図

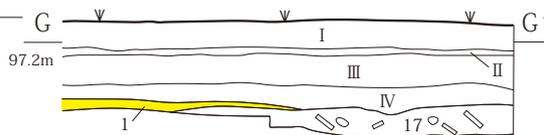


トレンチ 8 南壁断面図



- 1. 黄色土 (5Y8/6) 粘土質土。基壇内周に貼られている土。
- 17. 暗黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりあり 粘性なし  
瓦集積の直下の土層。瓦小片僅かに含む。

トレンチ 20 断面図

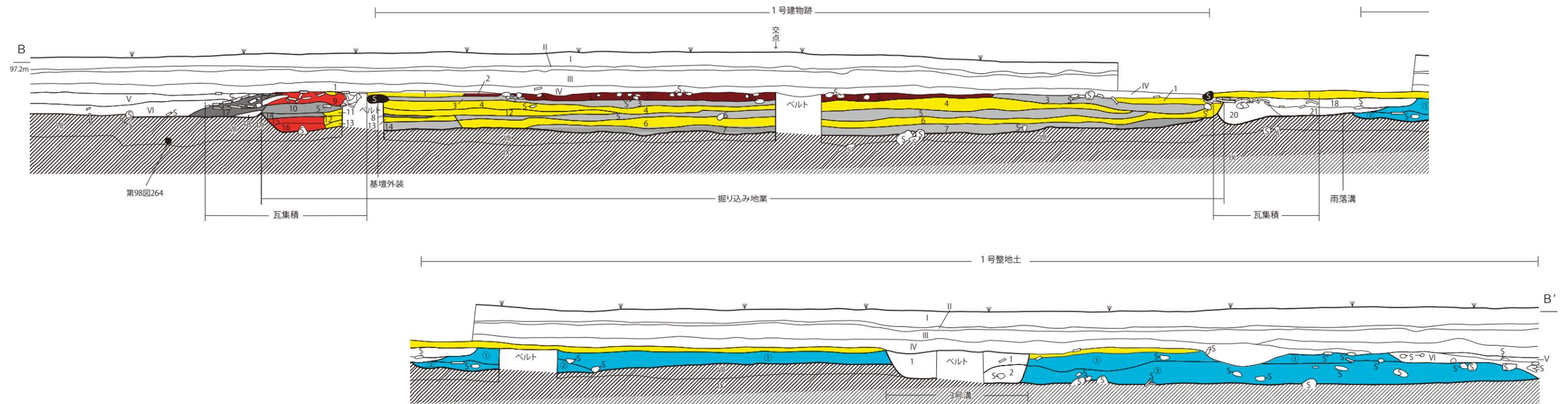


- 1. 黄色土 (5Y8/6) 粘土質土。基壇内周に貼られている土。
- 17. 暗黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりあり 粘性なし  
瓦集積の直下の土層。瓦小片僅かに含む。

0 S=1:40 1m

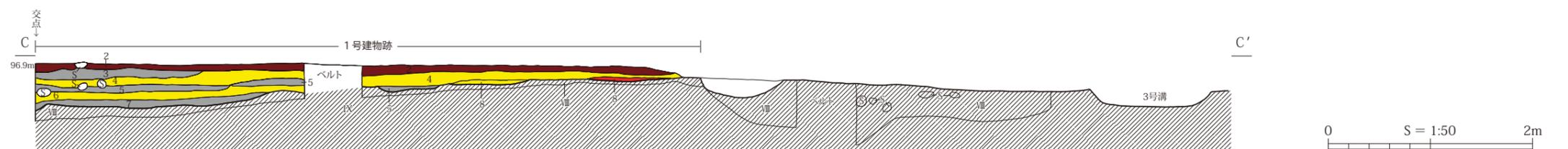
第 15 図 1 区 トレンチ 22・8・20 平面図・断面図

南北断面図

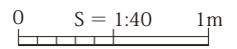
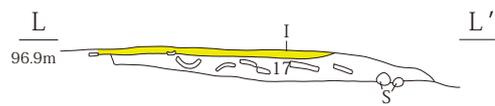
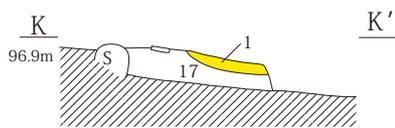
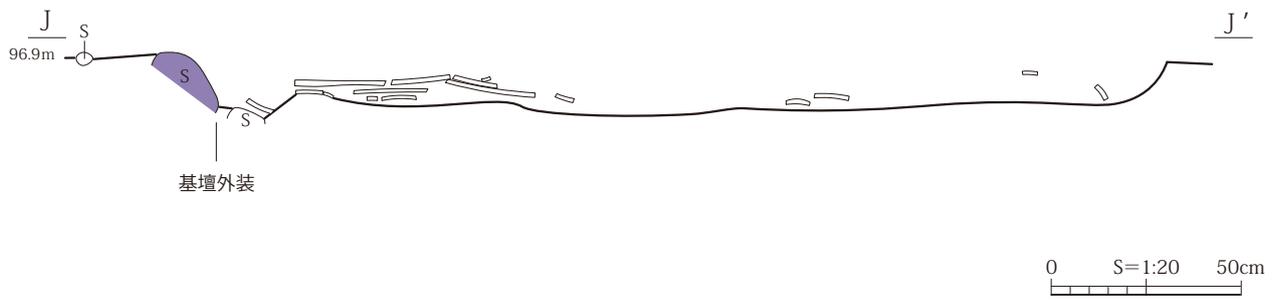
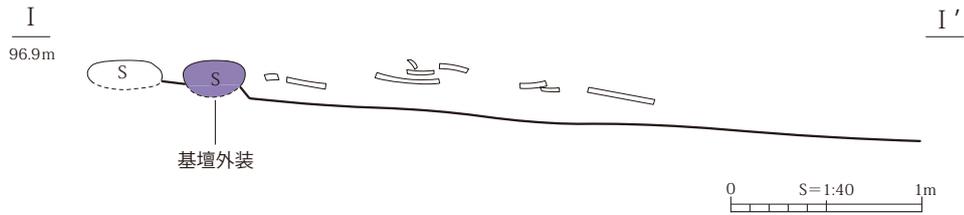
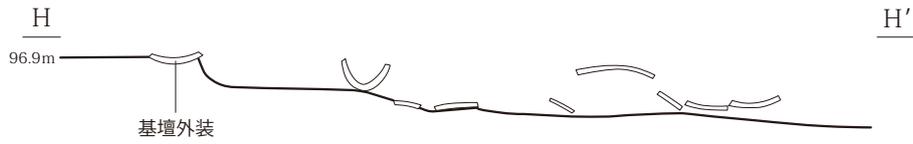


- 1号建物跡
1. 黄色土 (5Y8/6) 粘土質土。基礎内周に貼られている。
  - 1b. 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黄褐色 BL が多く混じる層。
  2. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 50\text{mm}$  礫を含む。  
極少量の土師器・瓦破片を含む。
  3. 灰褐色土 (7.5YR6/2) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 10\text{mm}$  褐色粘土 BL 含む。
  4. 浅黄色土 (2.5Y7/3) しまりあり 粘性なし 土師器破片極少量含む。
  5. 暗灰黄土 (2.5Y5/2) しまりあり 粘性なし 砂質土。褐色の BL まだらに含む。
  6. にぶい黄土 (2.5Y6/3) しまりあり 粘性なし 砂質土。
  7. 暗灰黄土 しまりあり 粘性なし 砂質土。
  8. 赤褐色土 (7.5YR5/8) しまりあり 粘性なし 砂質土。明るい褐色の土層。
  9. 褐色土 (7.5YR4/4) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 10\text{mm}$  マンガン BL 含む。  
 $\phi \sim 10\text{mm}$  土器片極少量含む。
  10. 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりあり 粘性なし 小礫少量含む。
  11. にぶい黄褐色土 (10YR7/4) しまりあり 粘性なし
12. にぶい黄褐色土 (10YR7/2) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 10\text{mm}$  灰色の粘土 BL 含む。  
 $\phi \sim 11\text{mm}$  灰色の粘土少量 BL 含む。
13. にぶい黄褐色土 (10YR7/2) しまりあり 粘性なし
  14. 灰黄褐色土 (10YR3/2) しまりあり 粘性なし 遺物粒極少量、 $\phi \sim 5\text{mm}$  の小礫少量含む。
  15. 褐灰色土 (10YR5/1) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 5\text{mm}$  の礫少量含む。
  16. 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 20\text{mm}$  礫少量、 $\phi \sim 10\text{mm}$  礫含む。
  17. 暗黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりあり 粘性なし 瓦集積の直下の土層。瓦小片僅かに含む。
  18. 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり 粘性なし 雨落溝覆土。
  19. 暗褐色土 (10YR4/4) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 150\text{mm}$  礫含む。土器小片少量含む。  
底部が欠損した半円形の土器が出土。掘り込みは見られないことから、  
1号基礎の一部の可能性高い。地鎮に関する遺物か？
  20. にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 10\text{mm}$  灰色粘土 BL 含む。  
瓦集積直下の土層。
  21. 暗褐色土 (10YR4/4) しまりあり 粘性なし 瓦小片を僅かに含む。雨落溝覆土。
  22. 暗灰黄 しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 5\text{mm}$  礫含む。22層上面に瓦片少量検出。
- 1号整地土
- ①. 暗褐色土 (10YR4/6) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 50\text{mm}$  礫・ $\phi \sim 10\text{mm}$  褐色 BL・土器含む。
  - ②. 暗褐色土 (10YR5/6) しまりあり 粘性なし  $\phi \sim 50\text{mm}$  礫・土器・瓦片含む。
  - ③. 暗褐色土 (10YR5/6) しまりあり 粘性なし 土器・瓦片含む。 $\phi \sim 300\text{mm}$  中型礫少量含む。

東西断面図

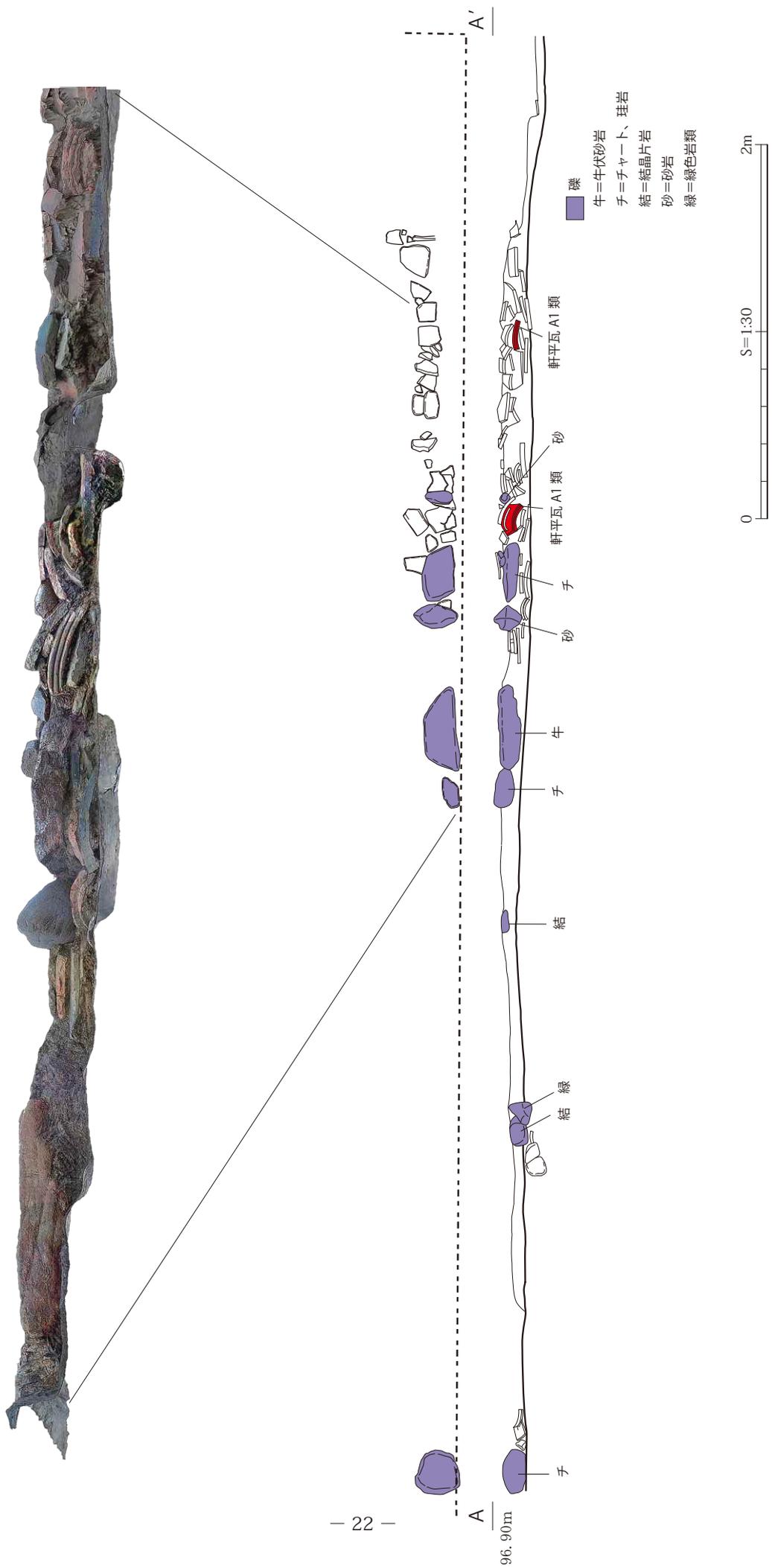


第16図 1号建物跡 南北断面図・東西断面図

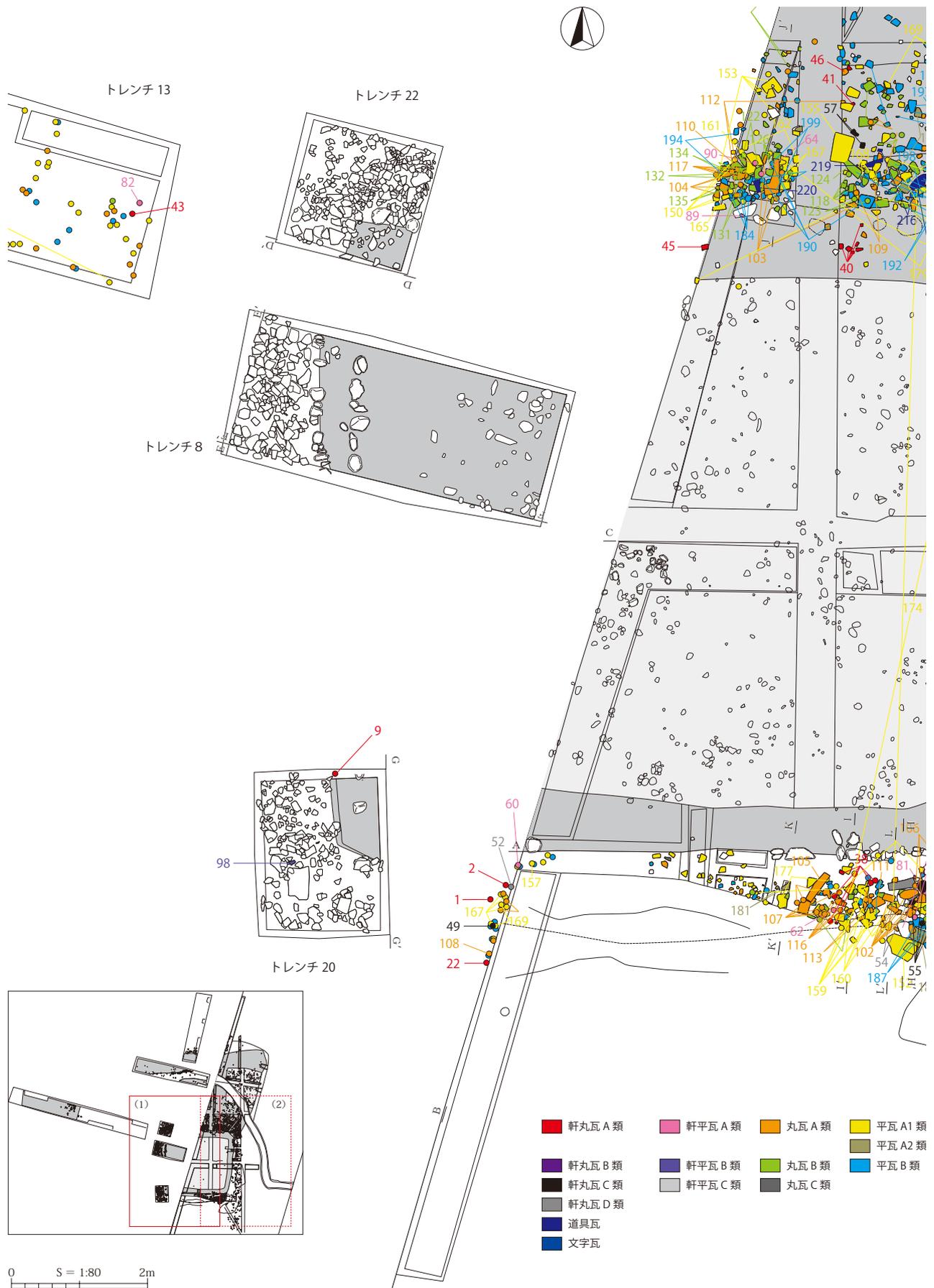


- 1. 黄色土 (5Y8/6) 粘土質土。基壇内周に貼られている土。
- 17. 暗黒褐色土 (7.5YR3/1) しまりあり 粘性なし  
瓦集積の直下の土層。瓦小片僅かに含む。

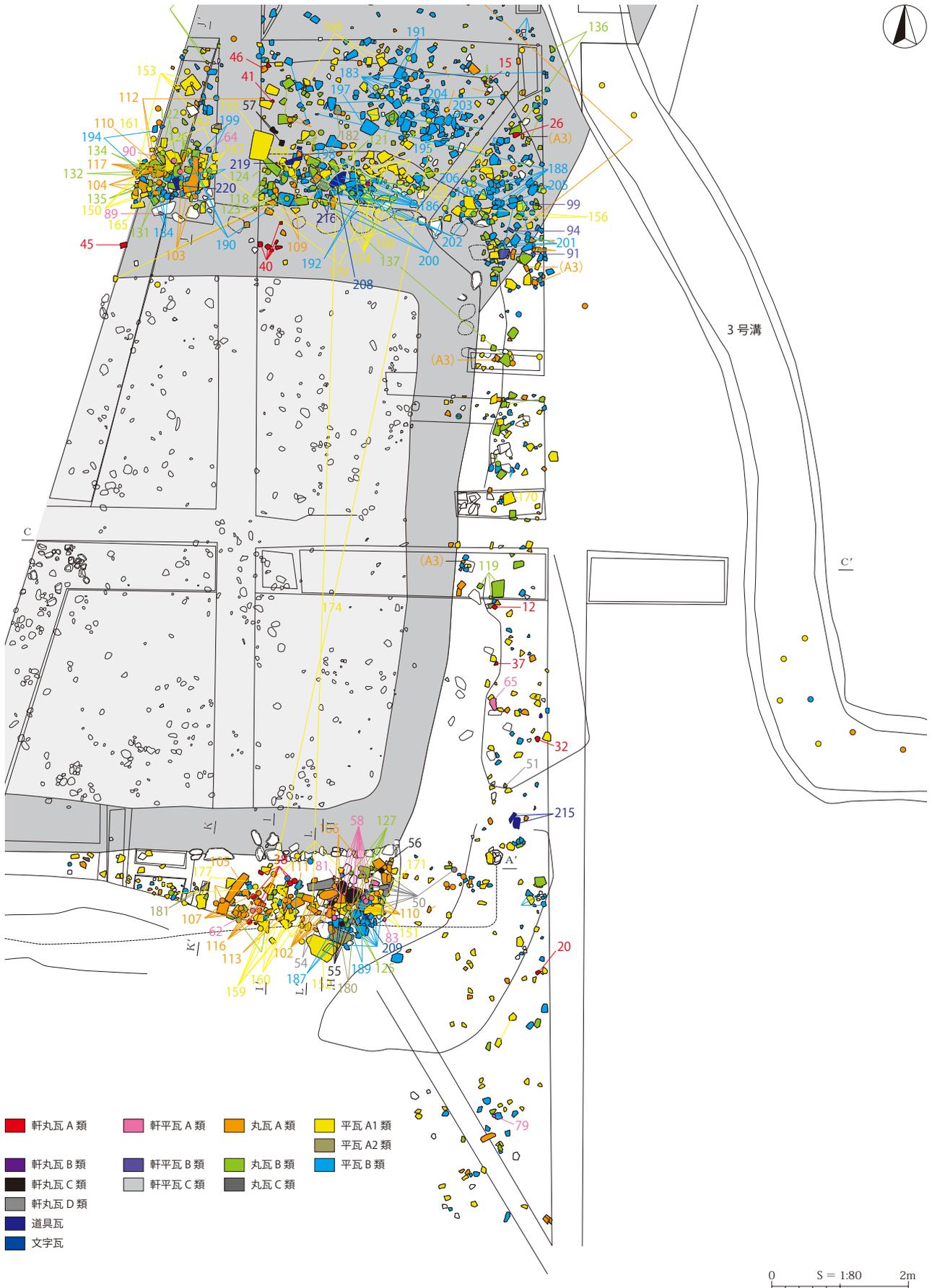
第 17 図 1 号建物跡 エレベーション図



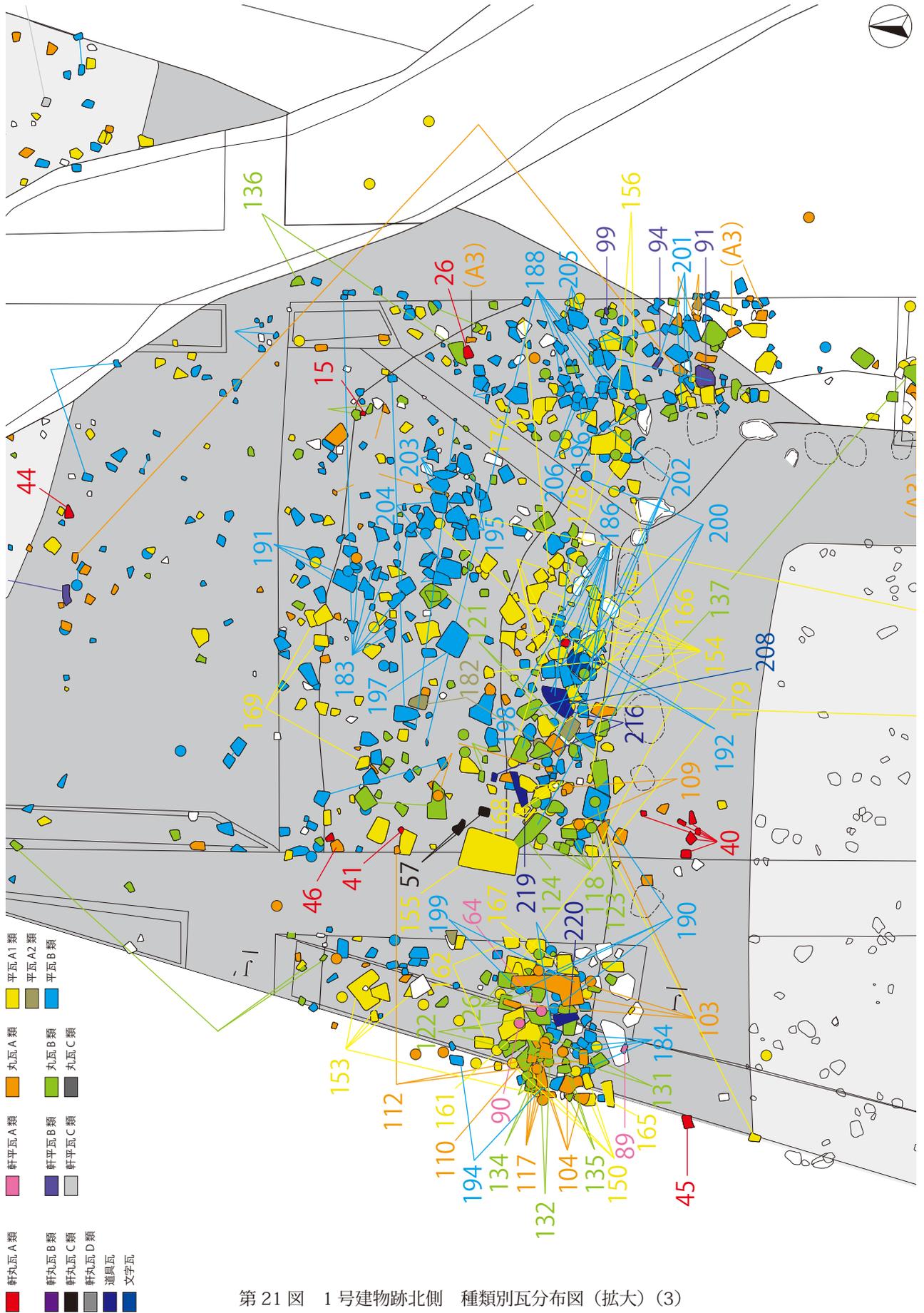
第18図 1号建物跡 南面瓦積基壇平面図・立面図・オルソ図

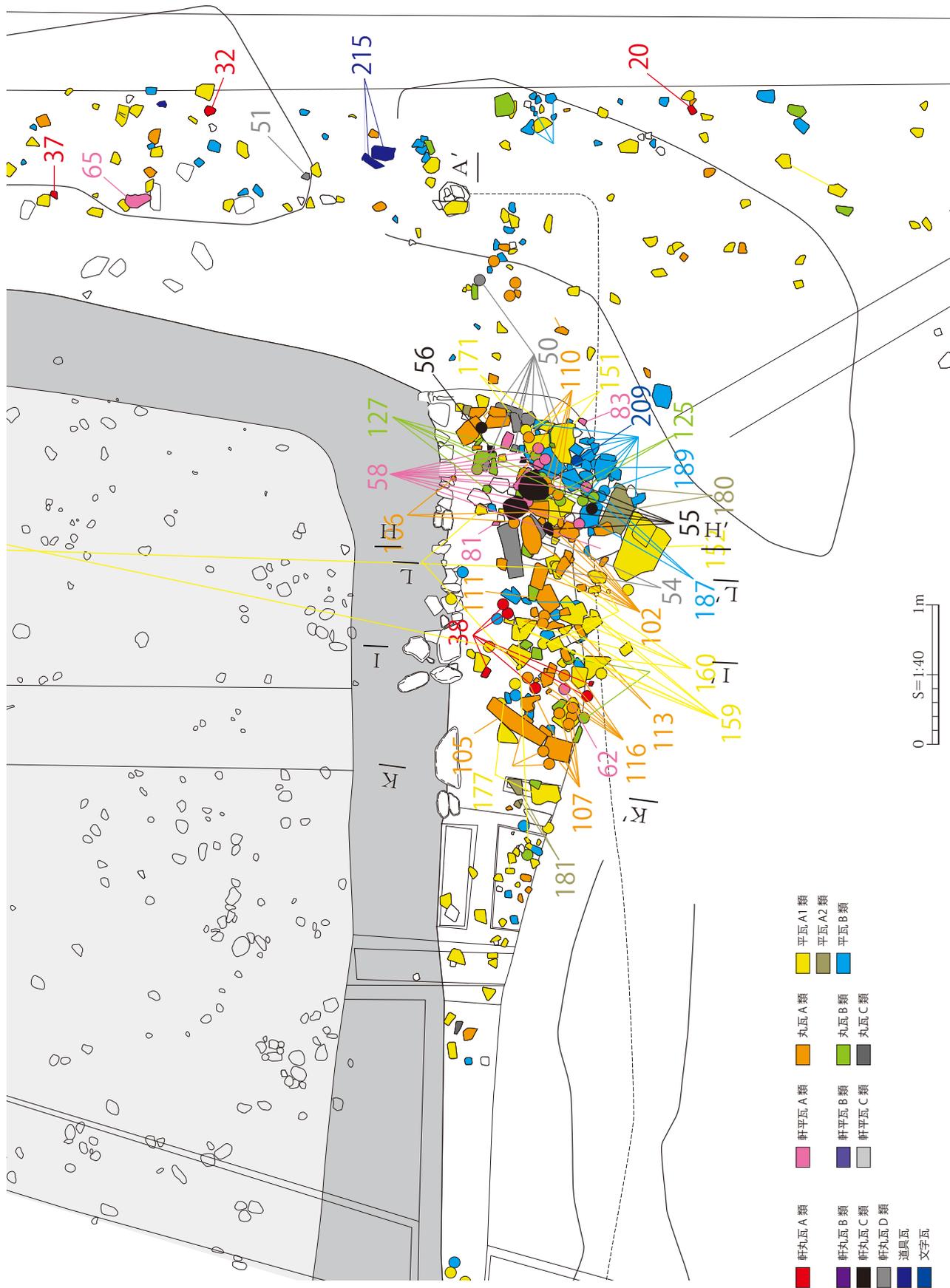


第 19 図 1 号建物跡 種類別瓦分布図 (1)



第 20 图 1 号建物跡 種類別瓦分布图 (2)





第 22 図 1 号建物跡南側 種類別瓦分布図 (拡大) (4)

## 第2項 1号整地土（旧：2号建物跡）

東西長：[19.0] m 南北長：14.0m

### 1号整地土（第23～27図）

1号建物跡の北側で確認された整地土の範囲を1号整地土と呼ぶ。発掘調査時や『牛田廃寺跡発掘調査概要報告書』（藤教委2020）では、この整地土を2号建物跡と捉えたが、その後の検討の結果、1号整地土と名称を変更した。

1号整地土は、1区調査区内で確認された整地土と上面の黄褐色粘土層の範囲を目安に設定した。1号整地土の範囲は、1区南北セクション及びトレンチ9・14、15の観察から南北14m、東西は19m以上の範囲に及ぶ。西側範囲が調査では検出できなかったが、東西方向に長い長方形のプランになると考えられる。中心付近を9世紀後半の3号溝に切られている。表面のプラン確認では、東側に1号建物跡と同様の黄色粘土が抜ける方形のプランが確認されたが、遺構の痕跡かは判断できなかった。また1号整地土では、1号建物跡のような瓦の集中は認められない。

### 整地土（第23図）

整地土は、Ⅷ層上面に盛土され、明確な掘り込みは認められない。整地土の厚さは、最大40cm程度であり、Ⅷ層の凹凸によって層厚は異なっている。整地土は①～③層に分層できるが、1号建物跡のような版築は行われていない。整地土内には、瓦片や礫が混ざっており、土層は極めて硬くしまっている。1号建物跡の掘り込み地業には、遺物や礫はほとんど含まれていなかったことと対照的である。瓦の混入の有無から、1号整地土の方が1号建物跡より新しいと考えられる。1号整地土は1号建物跡と連続しており、明確な区切りはない。

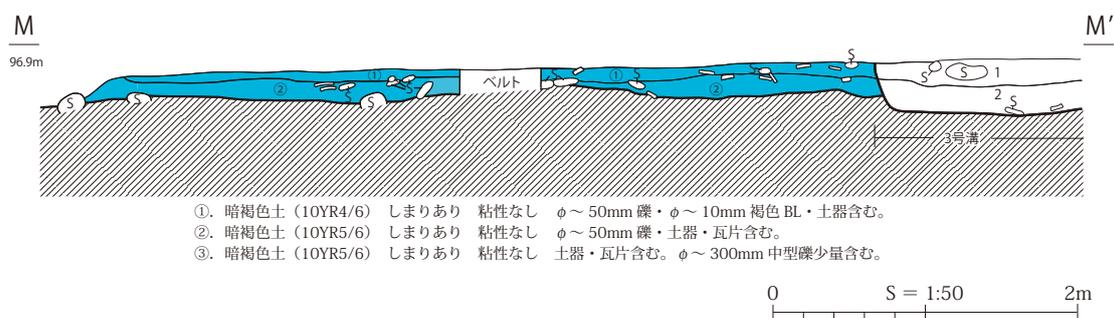
整地土表面には、1号建物跡と同様の黄色土（1層）が10cm程度の厚さで堆積していた。東側では黄色土が堆積していない方形のプランが確認されたが、礎石や柱穴といった建物の痕跡を検出することはできなかった。1号整地土は、9世紀後半の土師器甕が底面から検出された3号溝に切られており、9世紀後半にはその役割を終えていた可能性が高い。この事実は、牛田廃寺の廃絶年代について考える際に、極めて重要である。

### 遺物の出土状況と分布

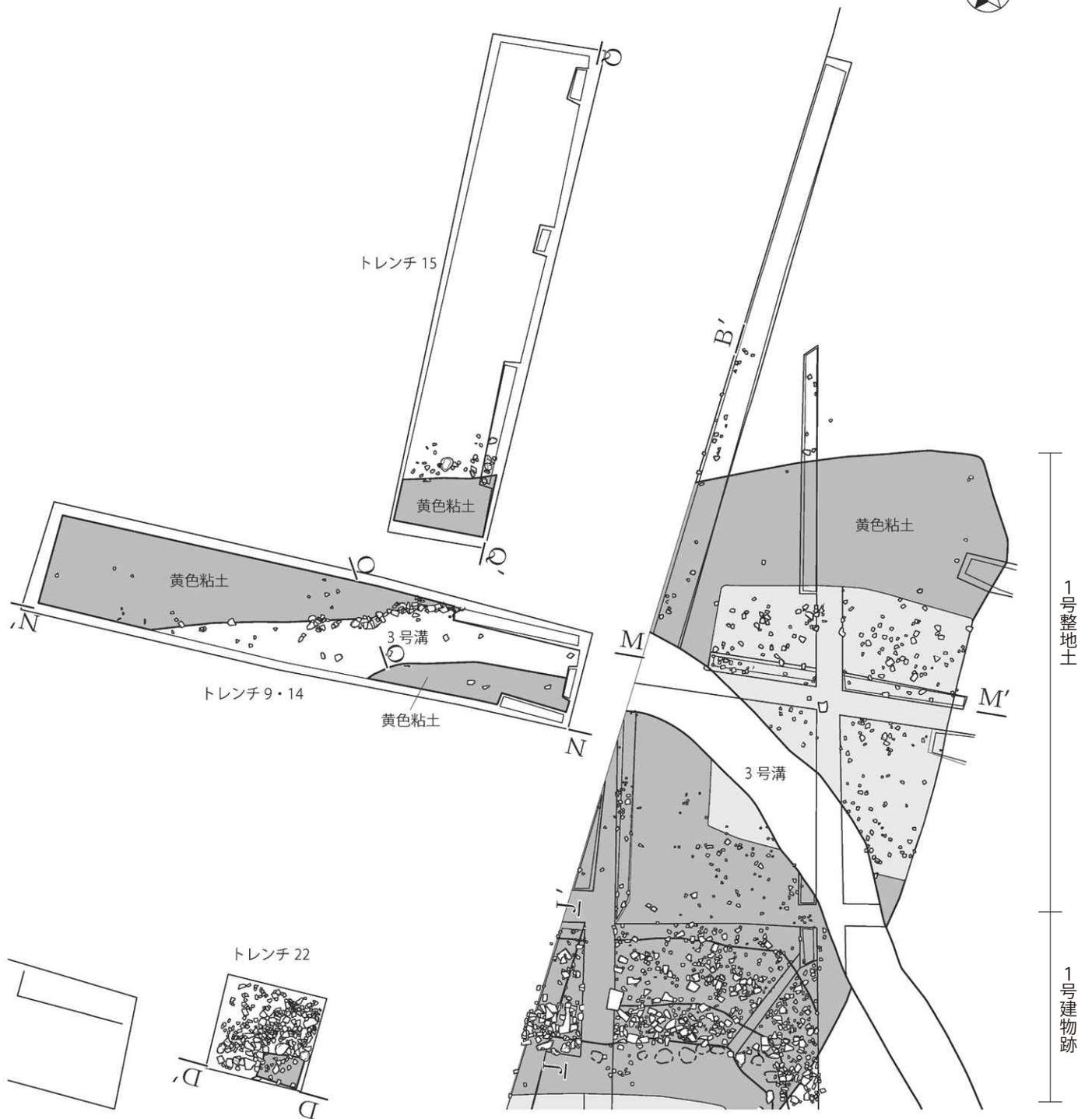
整地土内に瓦などの遺物が含まれており、1号建物跡のように瓦が集中する箇所は見られない。検出された瓦は小片で、接合関係はほとんどみられなかった。平面図（第24図）のトーンの薄い方形部分で瓦が集中しているように見えるが、これは当初、方形部分を遺構と想定し5cm程度掘り下げた結果であり、整地土中に含まれる遺物が検出されているためである。検出面ではあまり遺物は散布しておらず、整地土中に遺物が包含されている。1号整地土での遺物の接合はほとんどなく、遺物は原位置をたもっていないと考えられる。

一部の瓦は、1号建物跡の瓦と接合関係が確認できたため、包含されている瓦は1号建物跡に葺かれていた瓦である可能性が高い。1号建物跡の掘り込み地業内から瓦は検出されておらず、1号整地土と対照的であり、1号整地土の方が後に構築されたことを示している。1号整地土に何らかの建物があった場合、屋根は瓦葺ではなかったと考えられる。1号整地土は遺跡の現状保存が決定したため掘り下げはせず、表面で検出された遺物の記録をとり、取り上げを行っている。

検出された遺物は、小片が多く、軒丸瓦、軒平瓦のみを図示した。

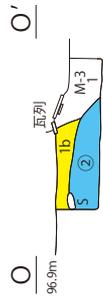
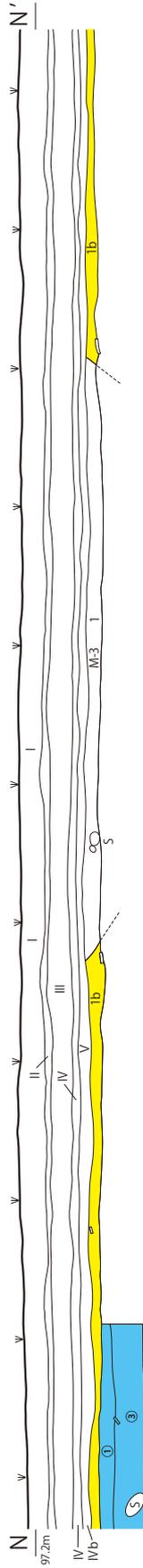


第23図 1号整地土 東西断面図



第 24 図 1 号整地土全体図

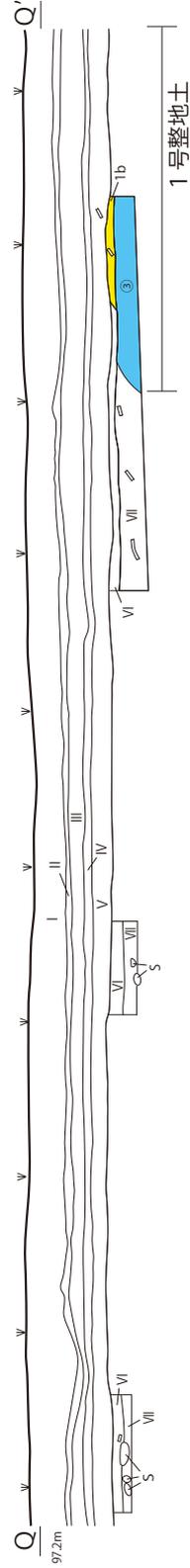
トレンチ 9・14



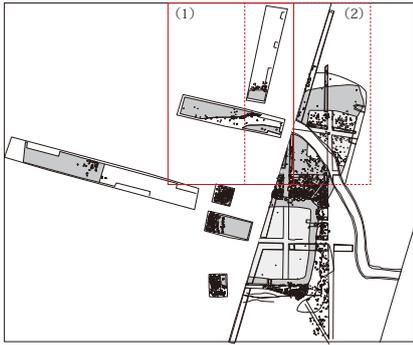
②. 暗褐色土 (10YR5/6) しまりあり 粘性なし  
 $\phi \sim 50\text{mm}$  礫・土器・瓦片含む。

Ib. 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黄褐色 Bl が多く混じる層。  
 ①. 暗褐色土 (10YR4/6) しまりあり 粘性なし  
 $\phi \sim 50\text{mm}$  礫・ $\phi \sim 10\text{mm}$  褐色 Bl・土器含む。  
 ②. 暗褐色土 (10YR5/6) しまりあり 粘性なし  
 $\phi \sim 50\text{mm}$  礫・土器・瓦片含む。  
 ③. 暗褐色土 (10YR5/6) しまりあり 粘性なし  
 土器・瓦片含む。 $\phi \sim 300\text{mm}$  中型礫少量含む。

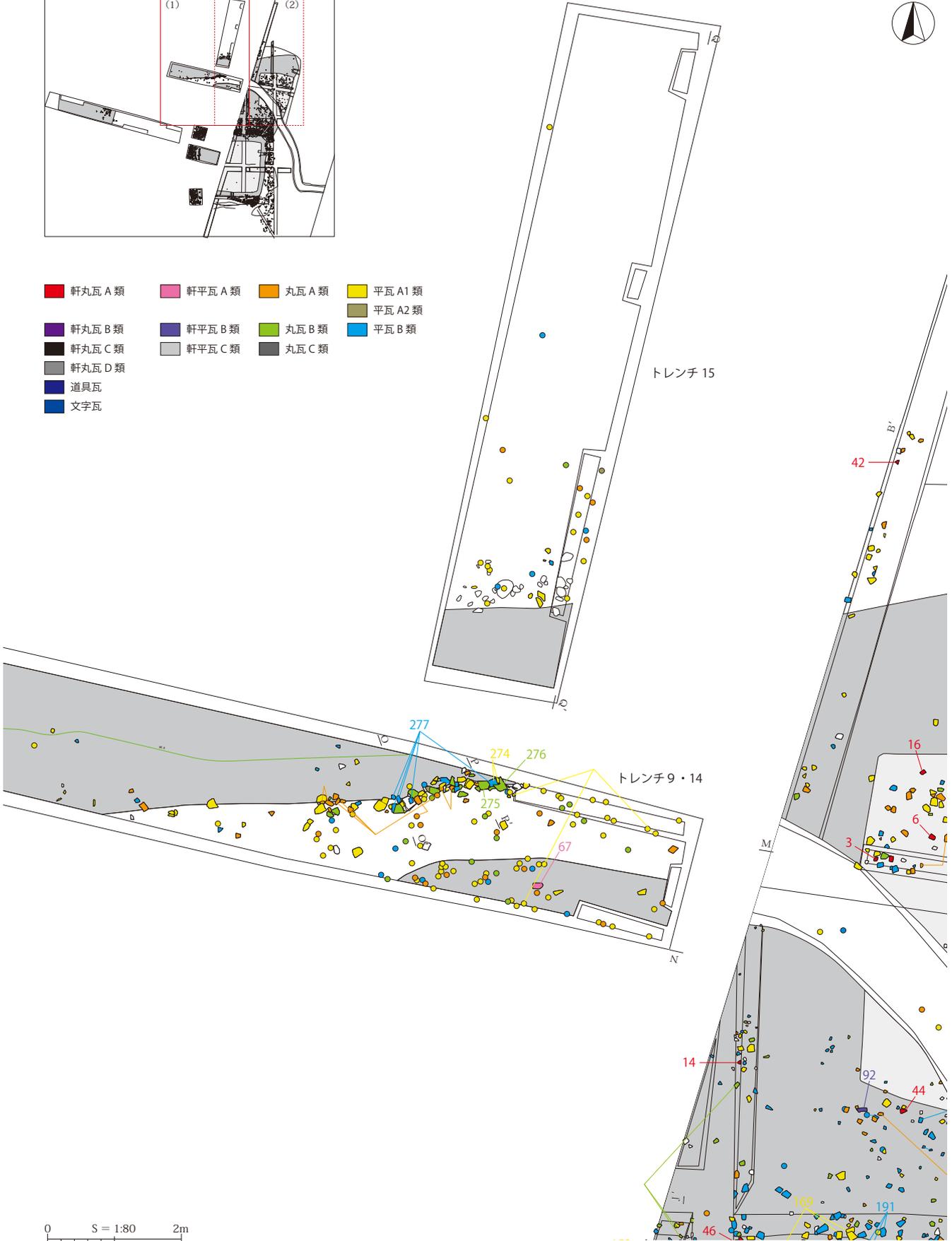
トレンチ 15



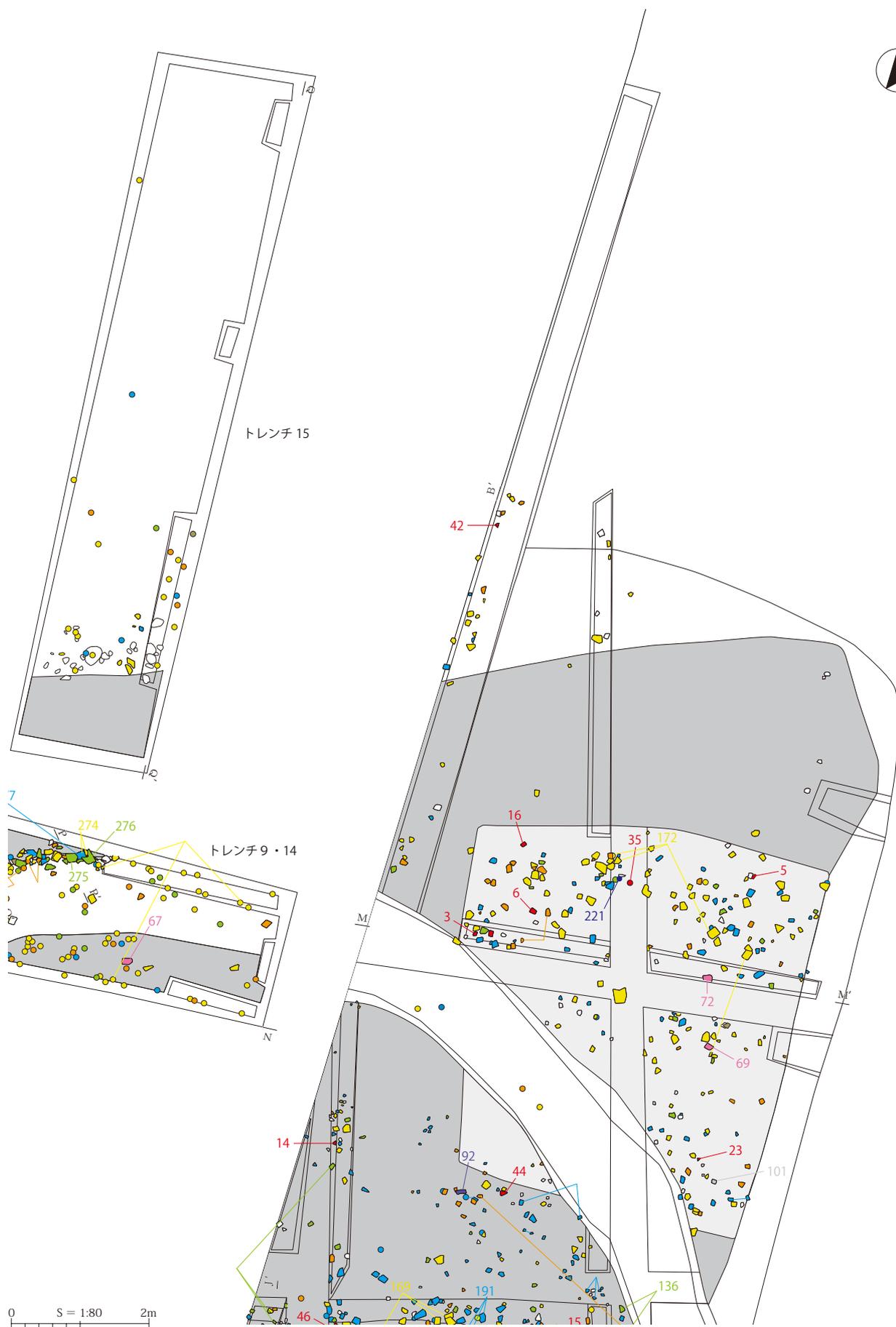
第25図 トレンチ 9・14、15 断面図



- |  |   |  |   |
|--|---|--|---|
| <span style="color: red;">■</span> 軒丸瓦 A 類       | <span style="color: pink;">■</span> 軒平瓦 A 類 | <span style="color: orange;">■</span> 丸瓦 A 類   | <span style="color: yellow;">■</span> 平瓦 A1 類 |
| <span style="color: purple;">■</span> 軒丸瓦 B 類    | <span style="color: blue;">■</span> 軒平瓦 B 類 | <span style="color: green;">■</span> 丸瓦 B 類    | <span style="color: olive;">■</span> 平瓦 A2 類  |
| <span style="color: black;">■</span> 軒丸瓦 C 類     | <span style="color: grey;">■</span> 軒平瓦 C 類 | <span style="color: darkgrey;">■</span> 丸瓦 C 類 | <span style="color: cyan;">■</span> 平瓦 B 類    |
| <span style="color: lightgrey;">■</span> 軒丸瓦 D 類 |   |  |   |
| <span style="color: darkblue;">■</span> 道具瓦      |   |  |   |
| <span style="color: blue;">■</span> 文字瓦          |   |  |   |



第 26 図 1 号整地土 種類別瓦分布図 (1)



第 27 図 1 号整地土 種類別瓦分布図 (2)

## トレンチ 15

1号整地土の北端を確認するために設定した。南側で1号整地土の上面黄色土が検出され、そのすぐ外側で小片の瓦がやや集中して出土した。

軒先瓦は確認されていない。平瓦はA・A2・B類、丸瓦はA1類、B類が検出されている。破片数は、平瓦A1類：22点（54%）、平瓦A2類：1点（2%）、平瓦B類：18点（44%）であり、丸瓦A1類：7点（54%）、丸瓦B類：6点（46%）となる（第2表）。平瓦A1類、丸瓦A類が半数以上の比率となる。

## トレンチ 9・14

1号整地土の西端を確認するために設定したトレンチであるが、西端は確認できなかった。トレンチ内には、東側の調査区と同様に3号溝が検出され、整地土を切っている。

整地土上面には、遺物は少なく、西側の調査区での出土傾向と一致する。3号溝内と縁の部分から大量の瓦が検出されている。

軒先瓦は確認されていない。平瓦はA・B類、丸瓦はA1類、B類が検出されている。破片数は、平瓦A1類：100点（40%）、平瓦B類：148点（60%）であり、丸瓦A1類：40点（58%）、丸瓦B類：29点（42%）となる（第2表）。丸瓦C類、文字瓦・道具瓦の出土はない。平瓦ではB類がやや多く、丸瓦はA1類が多い。

トレンチ内での接合関係はあまり見られない。3号溝の縁に瓦が集中していたが、それ以外では分布は散漫で小破片が多い。

## まとめ

発掘調査では、1号整地土の性格について十分把握することはできなかったが、牛田廃寺跡に関係する何らかの活動痕跡であったことは間違いない。

掘り込みを行わず、盛土で基壇を作った建物の例として、県内では多胡正倉跡SB03や黒熊中西遺跡1・2・3・5号建物跡などがあげられる。黒熊中西遺跡3号建物跡基壇盛土には土器片が混入しており、掘り込みをせず平坦な場所に盛土を行い、基壇としている建物である。1号整地土もこのような建物基礎である可能性も考えられ、その解明は今後の課題としたい。

## 第3項 2号整地土（旧：3号建物跡）（第28・29図）

### 整地土の範囲

トレンチ13の西寄りで検出された整地土である。当初は3号建物跡として把握していたが、調査箇所が限られ、性格が不明確なため名称を変更した。サブトレンチを設定し一部を掘り下げたが、その他の箇所は上面を検出し、記録作成後に埋め戻しを行った。

トレンチ13は1号建物跡の西に設定したトレンチである。2号整地土は、1号建物跡北西角から西に13m程度の箇所検出された。硬くしまった整地土が40cm程度の厚みで堆積していた。部分的な掘り下げしかしていないが、整地土中には砂礫や瓦片が混じっており、1号整地土と似た土層である。隣接するトレンチ12・21では、検出されておらず、東西方向では約20mの範囲に収まる可能性が高い。南北ではトレンチを設定できなかったため、広がり不明である。

### 遺物の出土状況と分布

トレンチ内からは瓦片が検出されているが、東側では小片が多い。2号整地土の東端付近で瓦を含む遺物の集積が検出された。

瓦は、平瓦A1・A2・B類、丸瓦A1類、B類が検出されている。破片数は、平瓦A1類：171点（67%）、平瓦A2類：5点（2%）、平瓦B類：78点（31%）であり、丸瓦A1類：68点（97%）、丸瓦B類：2点（3%）となる（第2表）。丸瓦C類、文字瓦、道具瓦の出土はない。平瓦A1類、丸瓦A類が半数以上の占めており、特に2号整地土付近で平瓦A類の大破片が検出され、接合しており、顕著である。

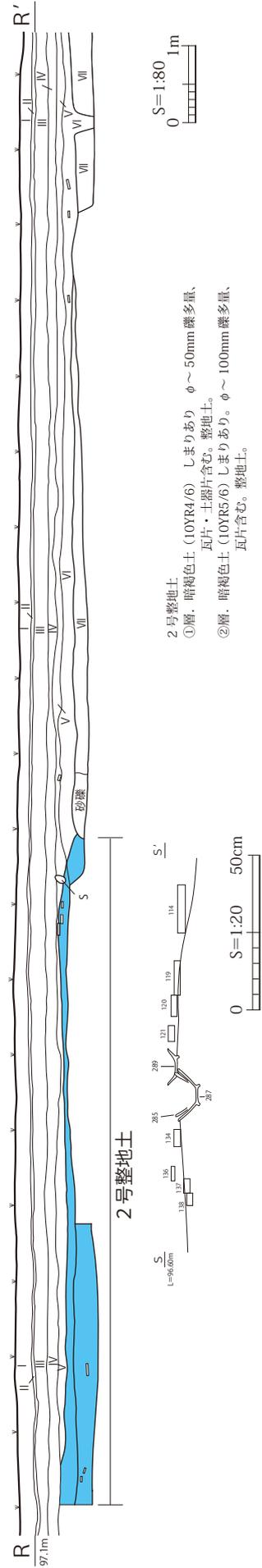
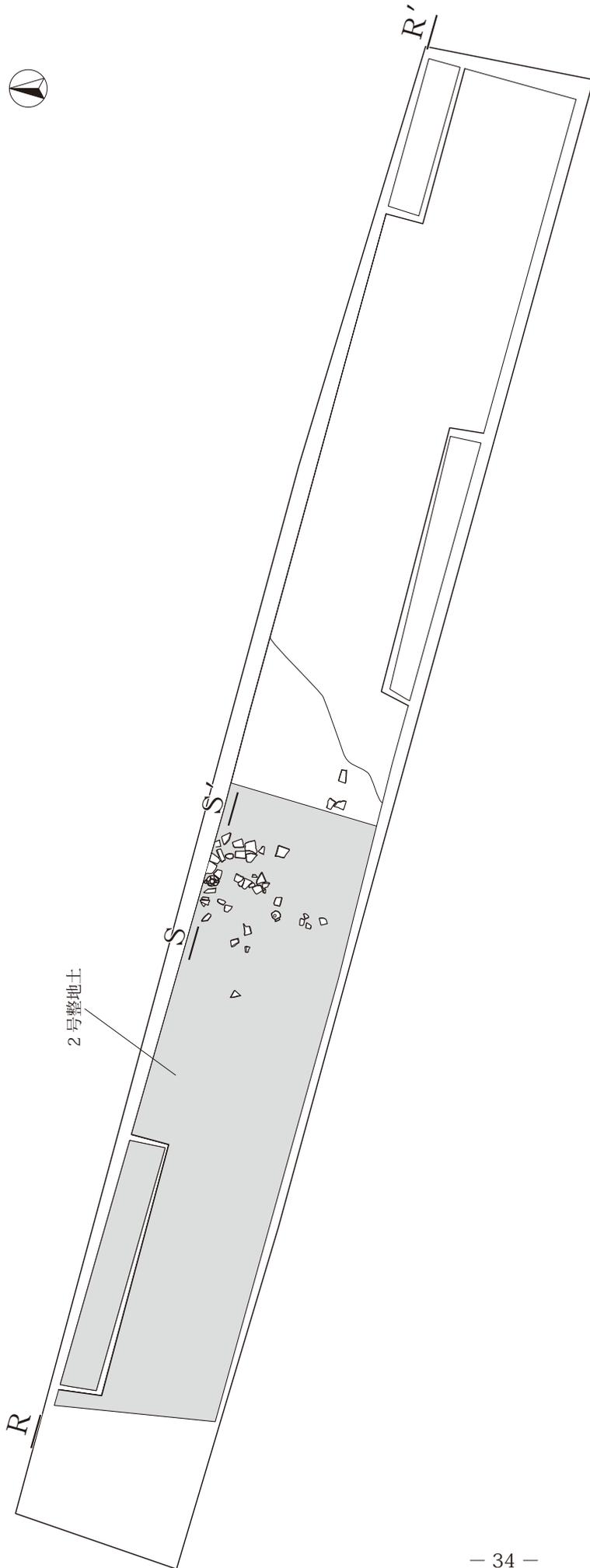
整地土端部に瓦が集中するという特徴は、1号建物跡と似るため2号整地土も建物基礎との解釈が可能かもしれ

ないが、周辺の発掘調査も含めた検討が今後必要である。

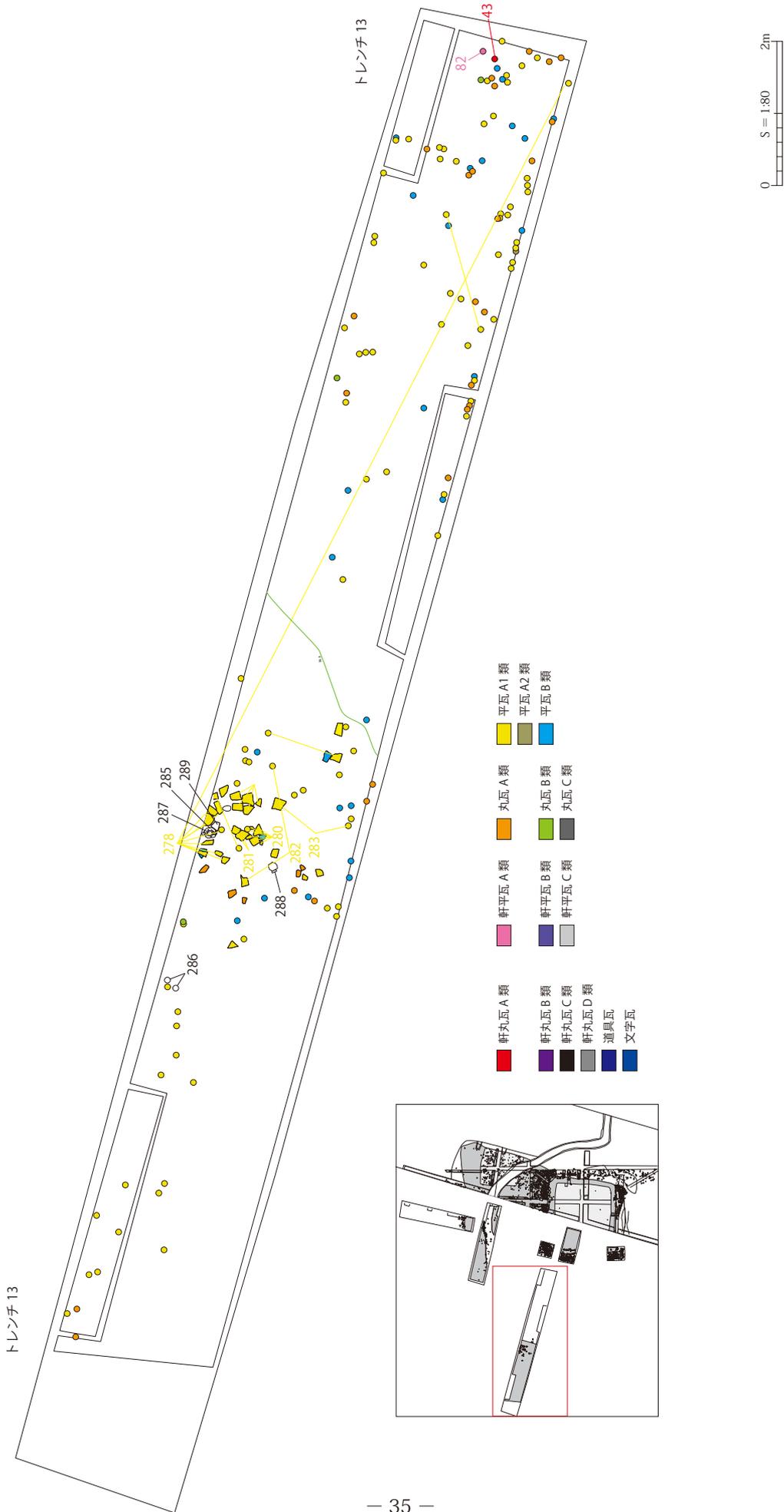
トレンチ 13 で特筆されるのが、須恵器坏の出土である（第 101 図）。口唇部に油煙の痕跡が認められるものがあり（第 101 図 285・287・288）、灯明皿として使用されていたものであろう。2 号整地土東端の瓦が集中する付近で見ついている。第 101 図 285・287 は、287 が正位で置かれ、その上に 285 が正位で重なって出土した。さらに、近接する周囲から 289 の須恵器坏が検出された。時期は 9 世紀後半に比定され、牛田廃寺跡の廃絶時期について示唆的である。

#### まとめ

2 号整地土においても、性格や範囲について十分把握することはできなかった。1 号整地土と同様に建物基礎の可能性が考えられ、今後の課題としたい。



第28図 トレンチ13 平面図・断面図



第 29 図 トレンチ 13 種類別瓦分布図



第 30 図 1 区 鉄製品出土位置図

## 第4節 牛田廃寺跡の出土遺物

牛田廃寺跡の発掘調査では、1号建物跡の周囲から原位置を保った状態で大量の瓦が発見された。1号建物跡外や集落跡からも瓦は検出されているが、明確な瓦葺建物として把握できたのは1号建物跡だけであり、本来これらは1号建物跡に帰属する瓦である可能性が高い。

そのため特に軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦に関しては組成を把握するため、1号建物跡以外から出土したものも加え図版を構成した。出土場所が判断できるように、図版遺物番号横に出土箇所を記した。第1表には、軒丸瓦・軒平瓦の出土地点と出土数をまとめている。

丸瓦・平瓦は出土地点別に掲載した。第2表には丸瓦・平瓦の全体及び出土地点別の破片数・重量・隅角数・個体数をまとめた表を掲載した。

第1表 軒先瓦出土地点表

種類	分類	1号建物跡	1号整地土	1区グリッド	トレンチ9・14	トレンチ13	トレンチ20	トレンチ22	1区一括	6区一括	9区一括	住居跡	2号溝	3号溝	計
軒丸瓦	A1類	9	6	4	2	1	1	0	7	0	1	1	2	2	36
	A2類	4	2	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	9
	B類	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2
	C類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	D類	7	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8
軒平瓦	A類	9	3	7	1	1	0	1	8	1	0	0	1	1	33
	B1類	3	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	B2類	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	C類	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
計	35	13	14	4	3	1	1	17	2	1	3	3	3	100	

第2表 種類別出土平瓦・丸瓦計数表

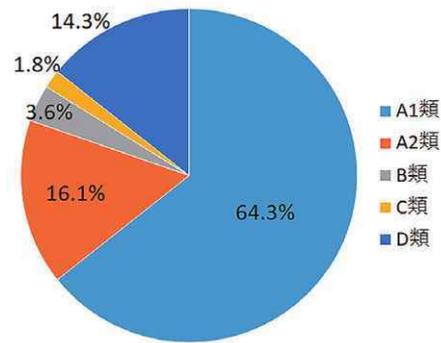
種別	類型	全体				1号建物跡				1区グリッド				一括				トレンチ5				
		破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	
平瓦	A1類	1785	257.74	212	53	515	141.63	111	27.75	417	30.26	34	8.5	345	39.14	35	8.75	8	1.43	1	0.25	
	A2類	26	9.26	10	2.5	8	1.62	2	0.5	3	0.49	1	0.25	6	3.67	2	0.5	0	0	0	0	
	B類	2093	161.82	217	54.25	695	95.69	119	29.75	596	25.13	48	12	330	19.03	25	6.25	1	0.16	0	0	
	合計	3904	428.82	439	109.75	1218	238.94	232	58	1016	55.88	83	20.75	681	61.84	62	15.5	9	1.59	1	0.25	
丸瓦	A1類	783	79.07	87	21.75	183	42.37	46	11.5	225	10.89	18	4.5	160	12.67	6	1.5	11	1.43	4	1	
	A2類	4	0.72	2	0.5	0	0	0	0	3	0.66	2	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	
	B類	427	55.48	89	22.25	217	37.88	62	15.5	54	2.96	1	0.25	88	8.53	19	4.75	1	0.25	0	0	
	C1類	5	1.18	2	0.5	5	1.18	2	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	C2類	7	1.51	2	0.5	7	1.51	2	0.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	1226	137.96	182	45.5	412	82.94	112	28	282	14.51	21	5.25	248	21.2	25	6.25	12	1.68	4	1		
種別	類型	トレンチ8				トレンチ9・14				トレンチ13				トレンチ15				トレンチ20				
		破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	
		A1類	14	1.02	0	0	100	13.46	8	2	171	16.04	12	3	22	1.61	0	0	41	1.6	1	0.25
		A2類	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2.45	5	1.25	1	0.34	0	0	1	0.02	0	0
		B類	17	0.95	1	0.25	148	7.64	9	2.25	78	4.64	3	0.75	18	0.67	1	0.25	57	1.29	0	0
合計	31	1.97	1	0.25	248	21.1	17	4.25	254	23.13	20	5	41	2.62	1	0.25	99	2.91	1	0.25		
丸瓦	類型	A1類	12	0.36	1	0.25	40	2.43	2	0.5	68	4.28	5	1.25	7	0.43	0	0	6	0.18	0	0
		A2類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		B類	1	0.06	1	0.25	29	3.17	6	1.5	2	0.37	0	0	6	0.2	0	0	4	0.13	0	0
		C1類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		C2類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	13	0.42	2	0.5	69	5.6	8	2	70	4.65	5	1.25	13	0.63	0	0	10	0.31	0	0		
種別	類型	トレンチ21				トレンチ22				2号溝				3号溝								
		破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数	破片数	重量(kg)	隅角数	個体数					
		A1類	1	0.06	0	0	25	0.92	0	0	51	4.21	3	0.75	75	6.36	7	1.75				
		A2類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.24	0	0	1	0.43	0	0				
		B類	0	0	0	0	62	1.93	4	1	29	1.02	1	0.25	62	3.67	6	1.5				
合計	1	0.06	0	0	87	2.85	4	1	81	5.47	4	1	138	10.46	13	3.25						
丸瓦	類型	A1類	3	0.17	1	0.25	16	0.63	1	0.25	16	0.9	0	0	36	2.33	3	0.75				
		A2類	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.06	0	0	0	0	0	0				
		B類	0	0	0	0	7	0.28	0	0	0	0	0	0	18	1.65	0	0				
		C1類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
		C2類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
合計	3	0.17	1	0.25	23	0.91	1	0.25	17	0.96	0	0	54	3.98	3	0.75						

## 第1項 軒丸瓦

以下の4種5細別の軒丸瓦が発見された。

第3表 軒丸瓦種類別出土点数・グラフ

	種別	点数	重量 (kg)
軒丸瓦	A1類	36	9.911
	A2類	9	2.477
	B類	2	0.589
	C類	1	2.760
	D類	8	9.888
合計		56	25.625



第4表 軒丸瓦計測表

分類名	瓦当文様	瓦当部径	瓦当文様径	蓮子数	中房径	蓮弁長	蓮弁幅(中心)	子葉長	間弁長	厚み	備考
軒丸瓦 A1類	複弁6弁	16.9～17.7	12.7	1+6	4.4	4.0	2.8	2.2	4.0	2.2～2.8	同范
軒丸瓦 A2類	複弁6弁	[16.2]	[12]	1+6	4.1	3.7	2.6	1.9	3.7	1.4	
軒丸瓦 B類	単弁8弁	14.4	10.4	1+4	4.1	2.8	1.5	0	—	1.4-1.8	
軒丸瓦 C類	単弁5弁	—	[10.3]	1	[1.6-1.8]	[3.4]	[1.8]	[2.8]	—	[0.7-1.4]	下日野金井窯跡群同范資料で計測
軒丸瓦 D類	単弁4弁	15.2	8.2	1	1.7	2.5-3	1.9	2.2-2.7	—	1.5-2.1	

[ ] 推定 単位: cm

### 軒丸瓦 A1類: 複弁6弁軒丸瓦 (第31～35図)

36点出土し、牛田廃寺跡で最も出土数が多い。「山王廃寺系」軒丸瓦である。小片を含め全て図示している。

B～D類は瓦当文様が隆線で見られるが、A1類はなだらかな凹凸で表現され、もっとも写実的である。しかし、偶数弁であるが、蓮弁の割り付けは均等ではない。間弁は蓮弁と接続し、先端は中房に達する。直径は16.5～17cmほど、内区径12cmとA～D類の中で最も大形である。蓮子は1+8で、外側の蓮子が1つだけやや外側に飛び出しており、范の同定の目安の1つとなる(第31図)。蓮弁や蓮子のはっきり出ているものとやや薄いものがある。周縁部は素文の直立縁で内区より上に突出しているものが多く、内側には瓦范の当たり痕は見られず、ナデの痕跡が確認できるものがあり、周縁部を瓦范とは別に作出している。周縁部幅は1.5～1.7cm、瓦当部の厚さは2～2.5cm程度である。瓦当部裏面は、平行叩きの痕跡が残る個体が複数あり(第31図)、平行叩き→ナデという順序で調整を行っている。

丸瓦の接着位置に対する瓦当文様の向きは一定しておらず、規則性は見られない。円形の瓦当范で天地は決まっていなかった可能性が高い。

軒丸瓦 A1類の丸瓦は、丸瓦 A1類と同様の特徴を持つものであるが、丸瓦 A1類と異なり、凸面に平行叩き痕を明瞭に残している。平行叩きは瓦当部周縁部から連続して施文されている。丸瓦には瓦当部端から5～7cm程度の箇所から凸面から開けた釘穴を持つが、釘穴には釘を刺したような擦れ痕などは見られず、使われていなかった可能性が高い。

胎土の色調には大まかに2種類あり、赤褐色・灰色である。もっとも多いのは赤褐色のものであるが、灰色の個体も断面を見ると赤褐色を呈しており、やや還元が進んだ状態のものであると考えられる。

同范軒丸瓦は、群馬県上野国分寺、埼玉県神川町臼樹原遺跡で出土例がある。ただし臼樹原遺跡資料は、瓦当部と丸瓦の接合方法が、牛田廃寺軒丸瓦 A2類と同じである。上野国分寺例〔住谷編1982〕は実見しておらず不明である。

### 軒丸瓦 A1類の製作技法について

A1類の製作工程について模式図を第38図上段に示した。瓦当部断面の観察では、周縁部である外区と内区の間には粘土の継ぎ目が見え、周縁部と内区の製作工程は区別される。まず内区のみを作成する。この場合、瓦范は内

区のみ形態が想定される。A類には裏面中央に平行叩き痕が残るものがあり、瓦范に粘土を詰めた際に叩き締められている(第31図)。

その後、周縁部を形作っていくが、周縁部平面に粘土板の継ぎ目が見える個体があり、瓦当部の作成後、5cm程度の幅の粘土板を瓦当部側面に巻き周縁部を作り、丸瓦を接合するという順序が考えられる。周縁部内面にはナデ調整が行われる。瓦当部と丸瓦との接合は、直接接合する接着法によっており、瓦当部及び丸瓦には接着のための加工はない。無加工の接合のためかA1類では瓦当部と丸瓦が剥離した状態のものが非常に多い。瓦当部裏面の丸瓦が剥落した部分には、周縁部を瓦当部内区に接合するため、周縁部と瓦当部内区の境目を内から外に向かって指頭で強く押した痕跡があり、境目が窪んでいるのが確認できた(第31図)。この瓦当部裏面の窪みは複数の軒丸瓦A1類で確認されている。

周縁部平面は調整されておらず、いびつで潰れており、丸瓦接合の際には瓦当面を下にして接合を行ったのだろう。

周縁部の内側には調整のナデが確認される(第31図)。部分的に瓦范の端部痕が残存しているものもある。

丸瓦と瓦当部を接着後、接合部の内外面に薄く粘土を塗り、外面には平行叩きを施したのちナデ調整を行っているが、平行叩き痕が完全に消えているものは少ない。内面はナデ調整をしている(第31図)。A類には丸瓦全体が残っている個体がなく、外面の粘土の添加と平行叩きがどの範囲まで行われているかははっきりと分からないが、丸瓦の1/3程度までは行われている。

群馬県内で「山王廃寺系」以外の周縁部が別作りの軒丸瓦は、金井廃寺軒丸瓦4型が挙げられるが[大江ほか1979]、類例は少ない。埼玉県寄居町馬騎の内廃寺では、丸瓦に瓦当部内区を嵌め込んで軒丸瓦を製作する資料が出土しており、「馬騎の内技法」が提唱され、群馬県との関係が指摘されている[埼玉県県史編さん室編1982、高橋ほか1984]。

群馬県内で同范と考えられるものに上野国分寺採集例と埼玉県神川町皂樹原遺跡がある(第137図)。また複弁6弁の同文異范のものは、上野国分寺、上野国分尼寺や高崎市吉井町雑木味遺跡、高崎市多胡正倉跡出土例がある。複弁6弁軒丸瓦は大江正行の編年[大江1988]では第4段階(730～740年代)に当たるが、第4段階とされている上野国分寺や雑木味遺跡例と牛田廃寺跡A1類を比較すると、牛田廃寺跡A1類は直径や中房径が大きいことや1+8の蓮子などの形質が第3段階(710～730年代)に近い。年代的な位置付けに関しては、第5章第2節で行った。

軒丸瓦A1類が牛田廃寺跡の創建時の軒丸瓦である。色調が赤褐色を呈するものが多く、軒丸瓦A1類と軒平瓦A類、平瓦A1類、丸瓦A1類と調整・色調が共通する(巻頭写真図版4)。創建時には軒丸瓦A1類・軒平瓦A類・平瓦A1類・丸瓦A1類がセットとして1号建物跡の屋根に葺かれていたと考えられる。



軒丸瓦 A1 類



軒丸瓦 A2 類



中房と蓮子の配置 (A1 類)



蓮弁と間弁 (A1 類)



周縁部内側の調整 (A1 類)



周縁部作出技法 d1 類 (A1 類)



瓦当部側面の枷痕カ (A1 類)



周縁部内側の調整 (A1 類)



瓦当部裏面の平行叩き痕と周縁部裏の指押え痕跡 (A1 類)



瓦当部側面の平行叩き痕跡 (A1 類)



丸瓦部の釘穴 (A1 類)



瓦当部裏面の調整 (A1 類)



中房と蓮子の配置 (A2 類)



蓮弁と間弁 (A2 類)

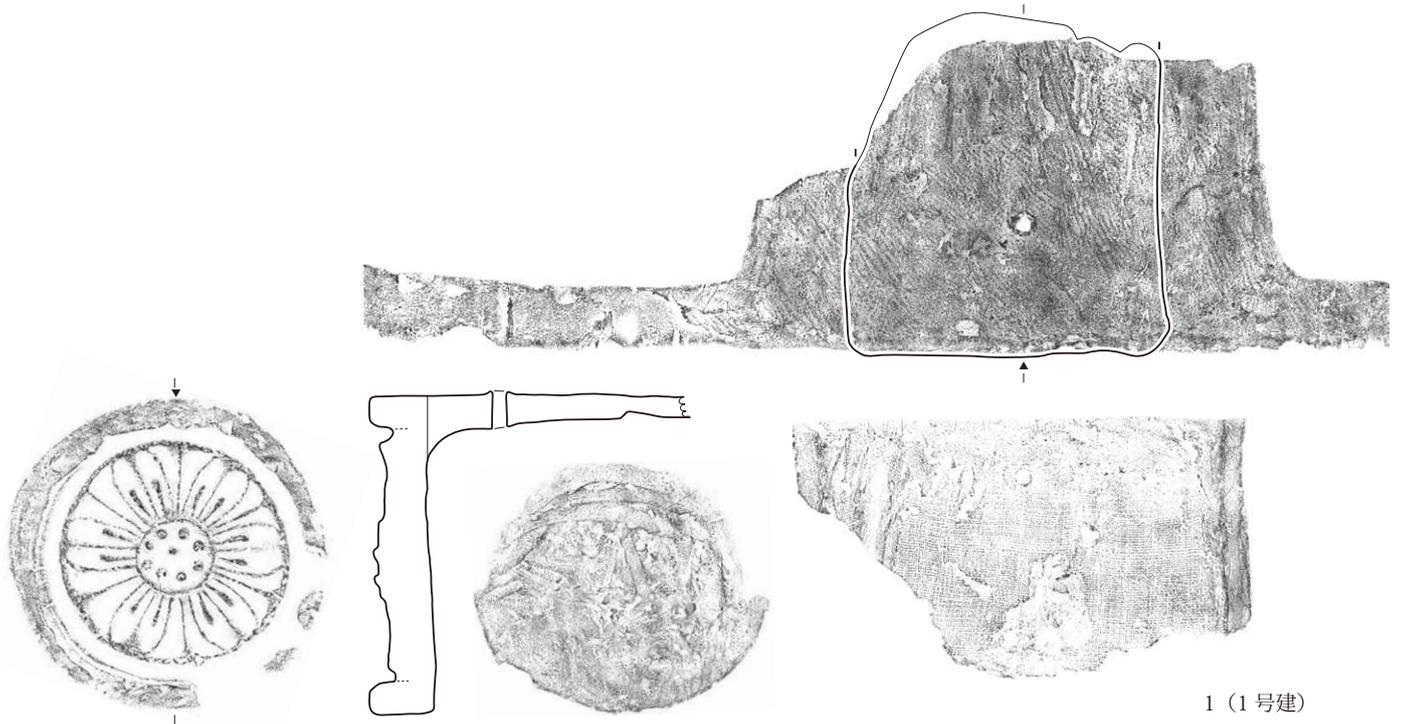


周縁部作出技法 d2 類 (A2 類)

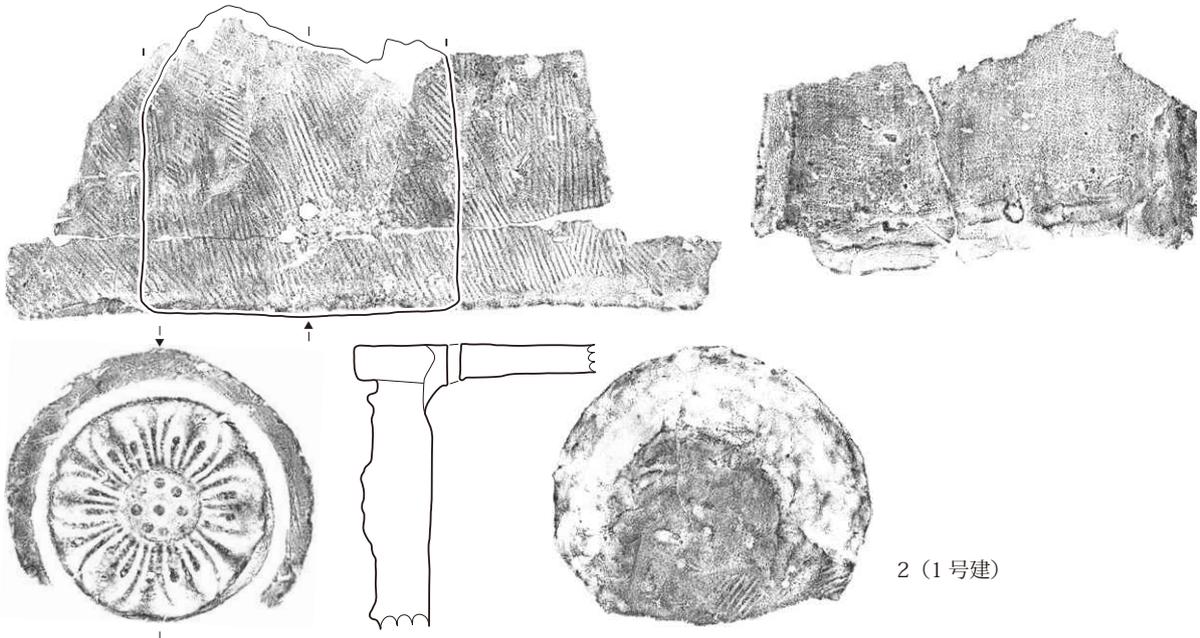


瓦当部と周縁部の剥落状況 (A2 類)

第 31 図 軒丸瓦 A1・A2 類 細部の写真



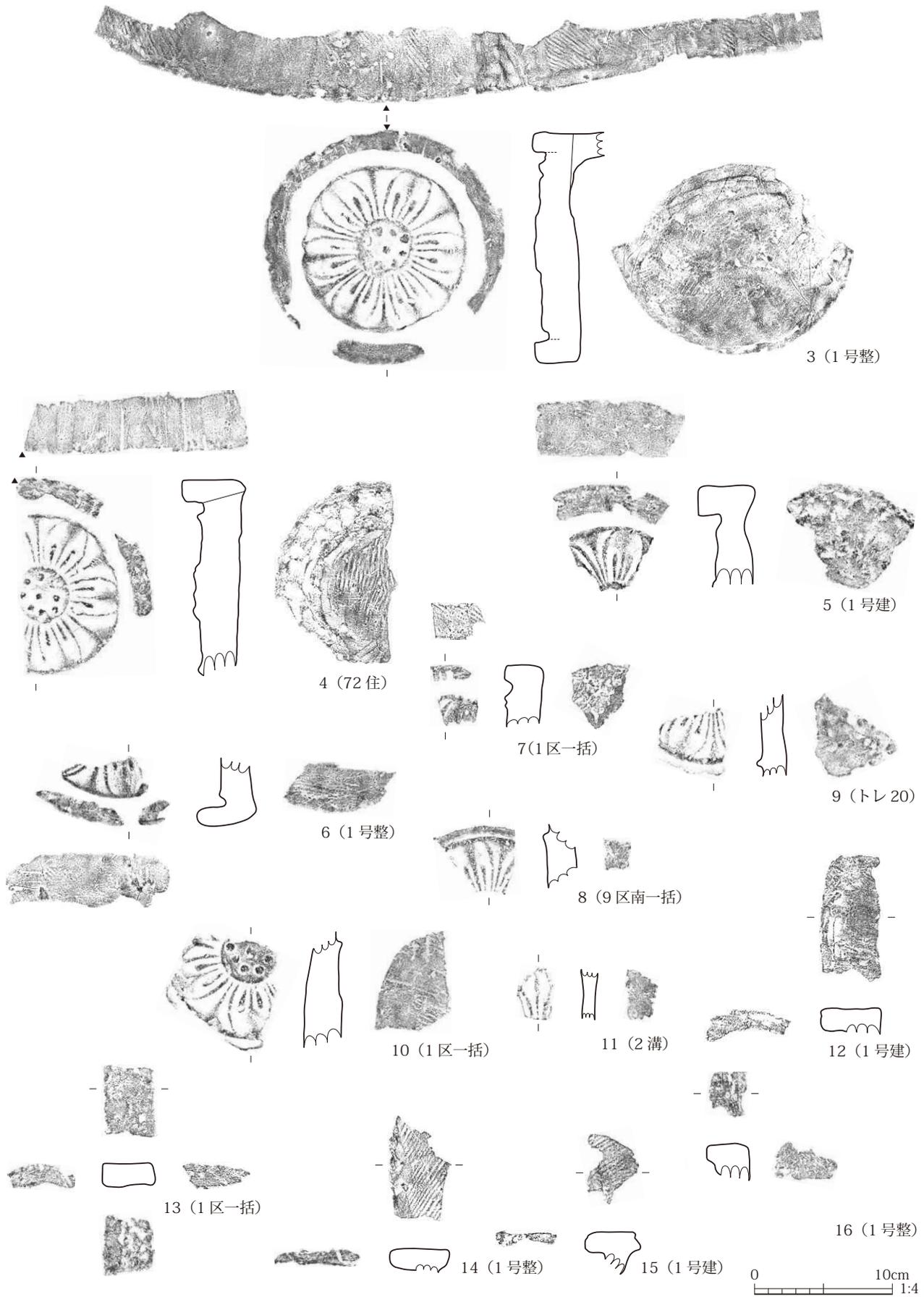
1 (1号建)



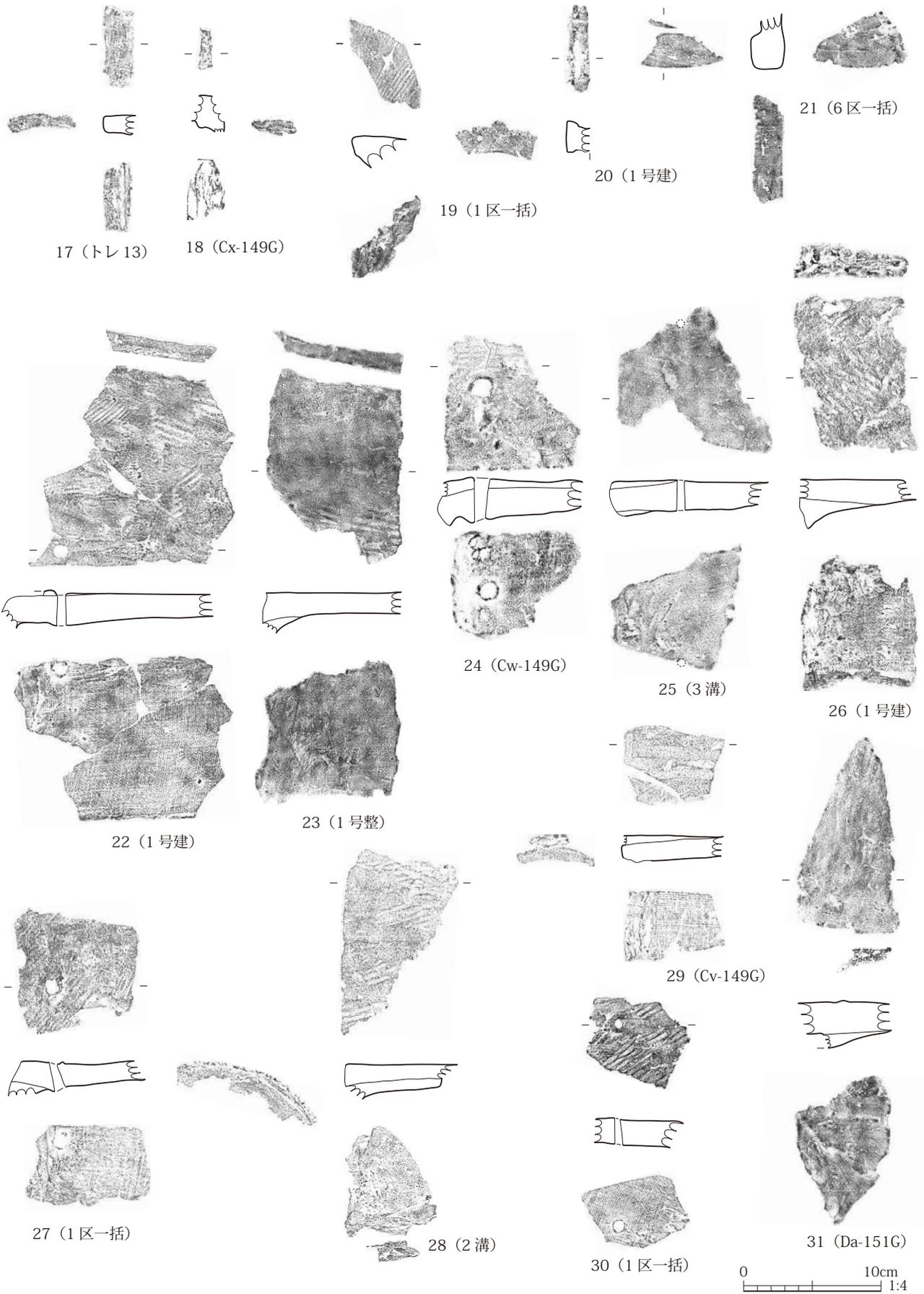
2 (1号建)

0 10cm  
1:4

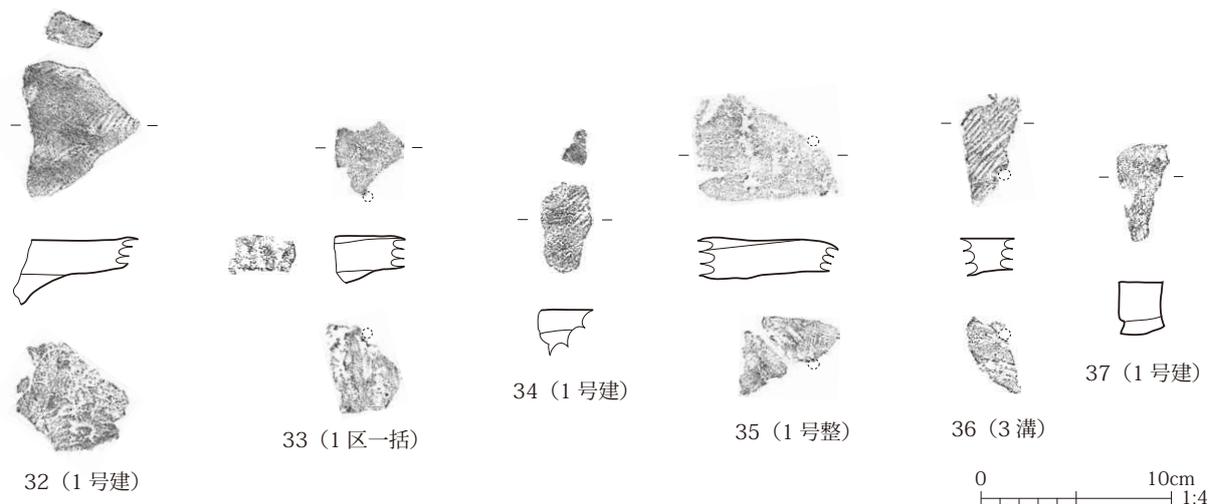
第32図 軒丸瓦A1類(1)



第33図 軒丸瓦A1類(2)



第34図 軒丸瓦A1類(3)



第35図 軒丸瓦 A1 類 (4)

#### 軒丸瓦 A2 類：複弁 6 弁軒丸瓦 (第 36・37 図)

A1 類と同範であるが、外面色調が黒灰色で焼きが硬く、瓦当部と丸瓦の接合方法が A1 類と異なることから区分した。『概報』[藤岡市教委 2020] では、A1 類に含めていた。小片を含め全て図示し、丸瓦部分のみの個体も特徴が一致する場合は、軒丸瓦 A2 類に含めた。

9 点出土しており、A1 類に比べ少ない。瓦当文様は A1 類と同範であるが、表面に自然釉が付着しており、文様が不鮮明なものが多い。蓮子は 1 + 8 であるが、A1 類より蓮子が高く、范の掘り直しが行われている可能性がある。

周縁部は素文の直立縁であるが、粘土板を貼り付けて別に作出しており、A1 類と同様に周縁部分だけ剥落している個体が多い。瓦当部の厚さは 1.3cm 程度で A1 類に比べやや薄い。

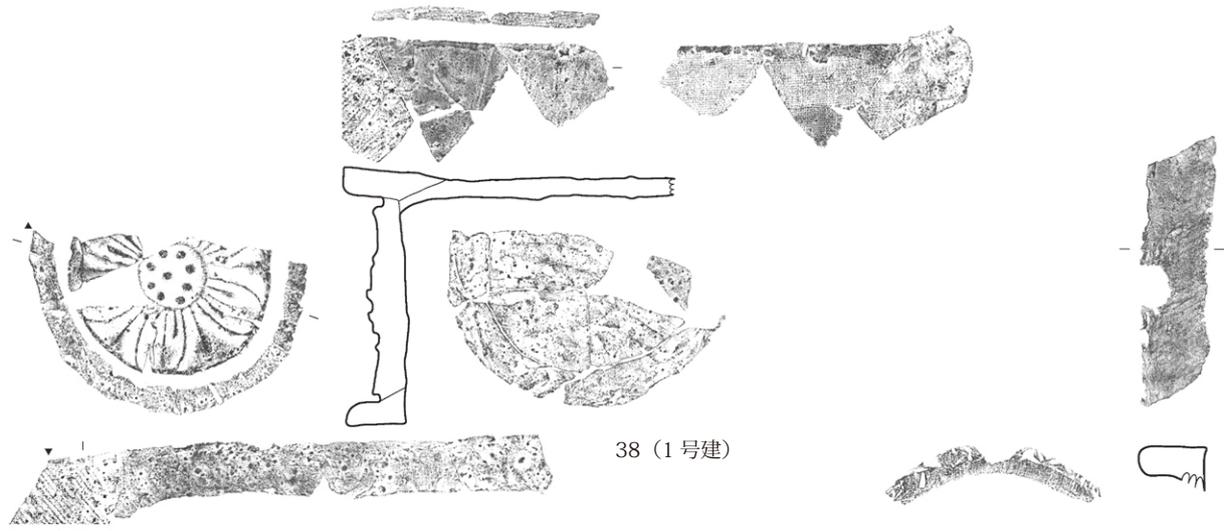
後述するが、周縁部が丸瓦の補強粘土を兼ねており、A1 類とは異なり接着が強固である。丸瓦部には、A1 類にみられた釘穴は確認できない。

丸瓦は、型木に粘土紐を巻き付け製作している。凸面に平行叩きを密に施した後、横方向のナデを施すが平行叩きを完全に消していない。凹面には細かい布目が残り、布の閉じ目をナデ消している。丸瓦 A 類と似るが、器壁が薄く、焼きは硬い。

胎土の色調は、外面が黒灰色、内面が赤褐色を呈する。

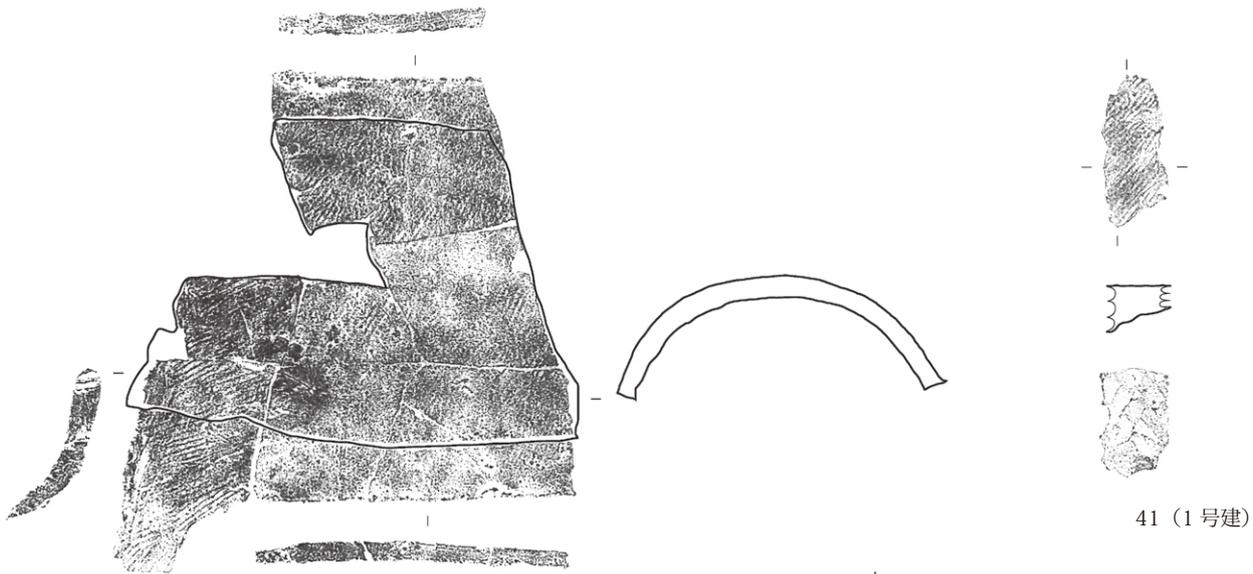
瓦当部と丸瓦の接着方法に、A1 類と差異がある (第 38 図)。接着法ではあるが、A1 類が瓦当部裏面上端に丸瓦を接着しているのに対し、A2 類では丸瓦を瓦当部上端より 1cm 程度下に配置し、周辺部を作出する粘土を丸瓦上端まで覆い周縁部と丸瓦補強粘土を一体化させることで、丸瓦の接合部を補強している (第 38 図)。この接合方法の採用によってか、軒丸瓦 A2 類の瓦当部と丸瓦が A1 類のように剥落しているものは見られない。

軒丸瓦 A2 類と同範で同様の製作技法をとる資料は、埼玉県神川町臼樹原遺跡で確認されている。臼樹原遺跡資料は、瓦当文様がややだれており、牛田廃寺の軒丸瓦 A2 類より後出する可能性が高い。瓦当部と丸瓦の接合方法は牛田廃寺軒丸瓦 A2 類と同様で、丸瓦が明確に剥落したものは見られない。臼樹原遺跡では、軒丸瓦 A2 類だけが検出されており、軒丸瓦 A1 類は見られず時期差を示していると考えられ、軒丸瓦 A1 類→A2 類という序列が想定できる。



38 (1号建)

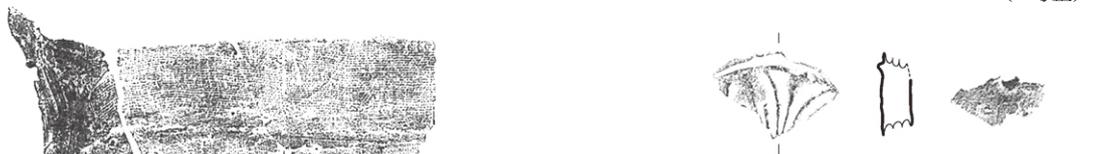
39 (72住)



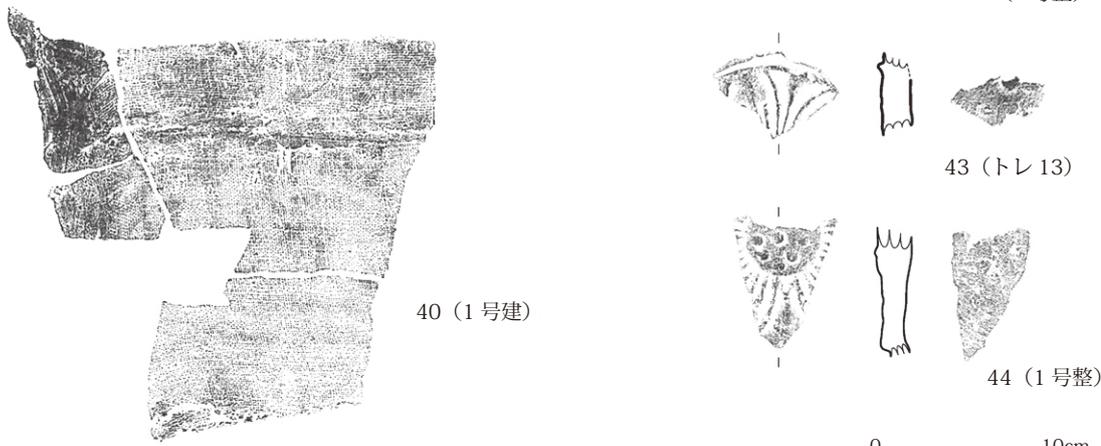
41 (1号建)



42 (1号整)



43 (トレ 13)

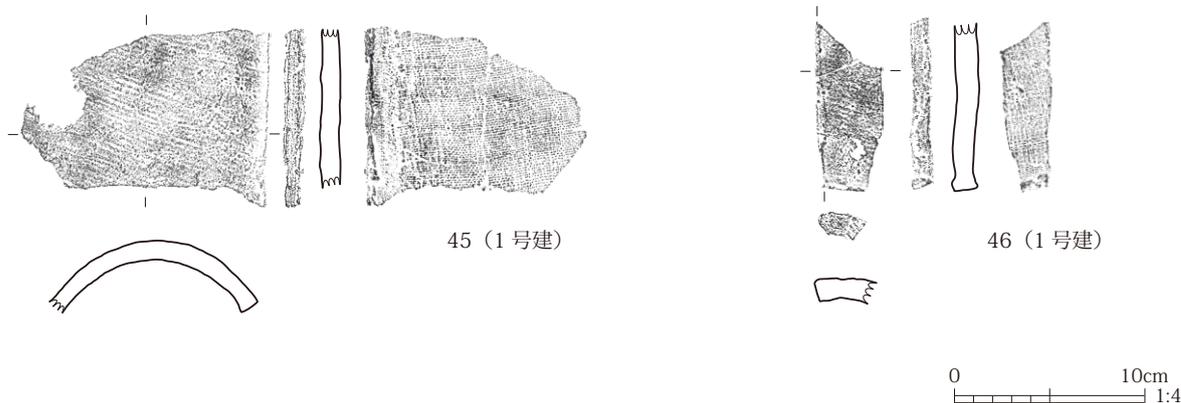


40 (1号建)

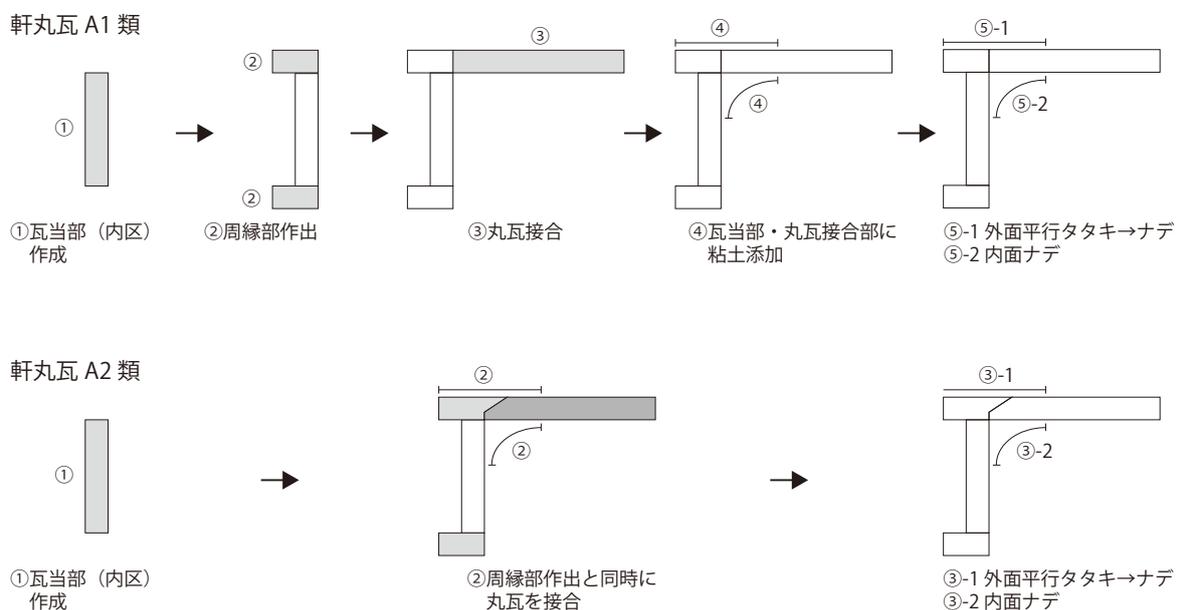
44 (1号整)



第36図 軒丸瓦A2類(1)



第 37 図 軒丸瓦 A2 類 (2)



第 38 図 軒丸瓦 A1 類・A2 類製作工程模式図

軒丸瓦 B 類：単弁 8 弁軒丸瓦 (第 39・40・41 図)

単弁 8 弁の軒丸瓦で 2 点出土している。図示したもので全てである。2 個体とも寺院遺構外で検出されており、第 40 図：47 は寺院遺構に隣接する 61 号住居跡内から出土した。灰色を呈し、直径 14cm、内区径は 10cm ほどで A 類よりやや小さい。蓮子は 1 + 4 で外側の蓮子はやや横に広がる。文様は隆線で表現され、A 類に見られた写実的な凹凸はなく、簡略化されている。蓮弁は 2 本の隆線で表され、両端が開放している。周縁部は素文の直立縁であるが、A 類と比べ低く幅が狭い。瓦当面に蓮弁がずれるほどの大きな范割れがあり (第 39 図)、范割れは周縁部内面の外端まで確認できる。

製作工程の模式図を第 41 図に示した。断面の観察から、瓦当部内に粘土の継ぎ目が見え、2 枚の粘土を重ねている。最初に 1 枚目の粘土を瓦范に薄く詰めている。周縁部内側に范の当たり痕が確認でき、周縁部外端まで范割れ痕が存在するため、ここまでは瓦范があったと考えられる。断面を見る限り、瓦范に詰めた 1 枚目の粘土部分と周縁部には、粘土の継ぎ目は見えないため、最初に瓦范に粘土を詰める際に同時に周縁部も形作っていると思われる。A 類と異なり、瓦当部と丸瓦の接合部分は剥離しておらず、時間をおかずに一体的な製作を行った可能性が高い。丸瓦と瓦当部の接合面には外傾する粘土の継ぎ目を確認でき、瓦当部裏面を外削ぎ状に調整し、その後間

をおかずに丸瓦を接合もしくは製作したようだ。

瓦当部と丸瓦との接合・製作については、2通りの可能性が考えられる。

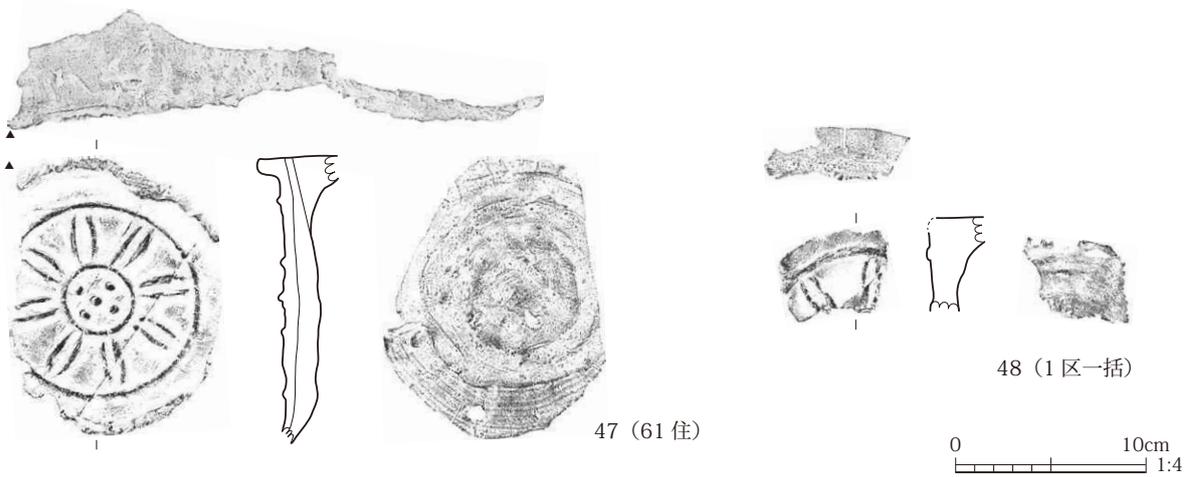
1つ目は、完成した完形の丸瓦に瓦当部分の2枚目の粘土を貼り付け、瓦范に詰めた1枚目の粘土と接合し、丸瓦の半分を切り離すという工程である(第41図:工程②-a)。2つ目は、泥条盤築技法による製作である(第41図:工程②-b)。高崎市多胡正倉跡から粘土紐を積み上げて丸瓦を製作する泥条盤築技法で製作された軒丸瓦が見つかっており、実見したところB類に見られた断面の粘土の継ぎ目や裏面の調整痕などが非常によく似ていた。軒丸瓦B類は、泥条盤築技法での製作の可能性が高いが、丸瓦部分が残存していないため、明確に判断できない(第41図:工程②-b)。模式図では、2通りの製作工程を併記した(第41図:工程②-a, ②-b)。丸瓦の接合箇所は、断面の状況から接合前に断面が外削ぎ状になるように調整が施されているようだ。

丸瓦を接合又は製作後は、丸瓦下半部は切り取られ、その痕跡が瓦当部裏面縁に残されている。切り離し個所の断面は外削ぎ状を呈し、丸瓦接合部と対応するため、接合前の調整に沿って切り取られたと考えられる。(第41図:工程③)。外面は平行叩きの後にナデ調整され、平行叩き痕はほとんど消される。内面は丸瓦接合部を同心円状にナデ調整している(第41図:工程④)。瓦当部裏面の調整も泥条盤築技法で製作された多胡正倉跡出土の複弁6弁軒丸瓦と良く類似している。

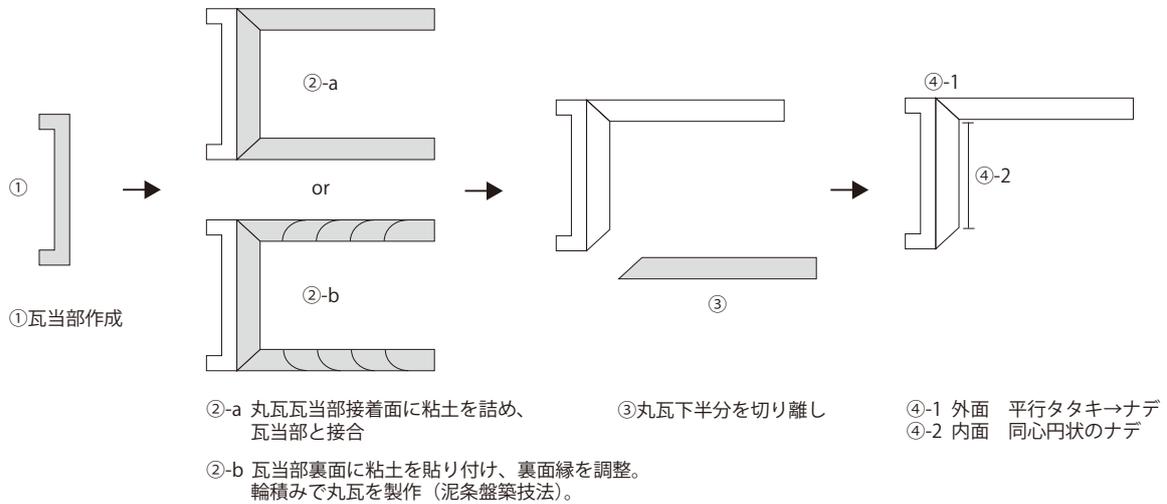
B類は上野国分寺E103や藤岡市鮎川採集資料に極めてよく類似するが、瓦当部の直径が異なり同范ではない。今のところ同范軒丸瓦の出土は確認できない。



第39図 軒丸瓦B類 細部の写真



第40図 軒丸瓦B類



第41図 軒丸瓦B類製作工程模式図

軒丸瓦C類：単弁6弁軒丸瓦（第42・43図）

瓦当部が2/3ほど欠損しているが、県内出土の同范資料との比較から単弁6弁の意匠であることがわかる。1点出土している。他遺跡の同范資料を参考にすると直径は14cm程、内区径は9cmである。中房は小さく蓮弁は1つで、放射状に蓮弁を6弁配するが、時計回りにやや蓮弁が傾いており整然としていない。蓮弁には1本の縦隆線で子葉を表し、隆線で文様が出出されている。蓮弁間にV字状の間弁がほどこされる。周縁部は平坦である。瓦当部裏面には無絞りの布目痕が残り、一本作りによる製作である。布目は細かい。瓦当部は丸瓦とは別粘土であり、接合部の角度は直角に近い。内面の瓦当と丸瓦接合部はナデており、接合部を補強している。丸瓦凸面は、ナデ調整され叩き痕などは見られない。凸面には、「×」の記号が線刻されている。焼きは硬質で黒灰色を呈する。

軒丸瓦C類はV字状の間弁を最低2つ描いており、上野国分寺C003Bに該当する。上野国分寺C003にはV字状間弁が1つだけのもの（C003A）と、瓦范を彫り直してV字状間弁が複数あるもの（C003B）の2つがある。C類はD類と型式学的な特徴や製作技法が類似し、近似する年代的位置が想定される。

C003Aは上野国分寺〔前沢・高井1988、橋本ほか2018〕・上野国分寺僧寺・尼寺中間地域〔木津ほか1991〕、上野国分尼寺〔松島・梅澤1970、松島ほか1971〕、C003Bは上野国分寺〔前沢・高井1988、橋本ほか2018〕・下日野金井窯跡群〔古郡2005〕で同范資料が確認されており、下日野金井窯跡群を除けば上野国分寺・上野国分尼寺とその周辺に検出されている。藤岡市下日野金井窯跡群で同范資料が見つかったため、藤岡市域で製作されていたことは確実である。



軒丸瓦 C 類



蓮弁と間弁 (C 類)



瓦当部裏面の布目と丸瓦接合部の調整 (C 類)

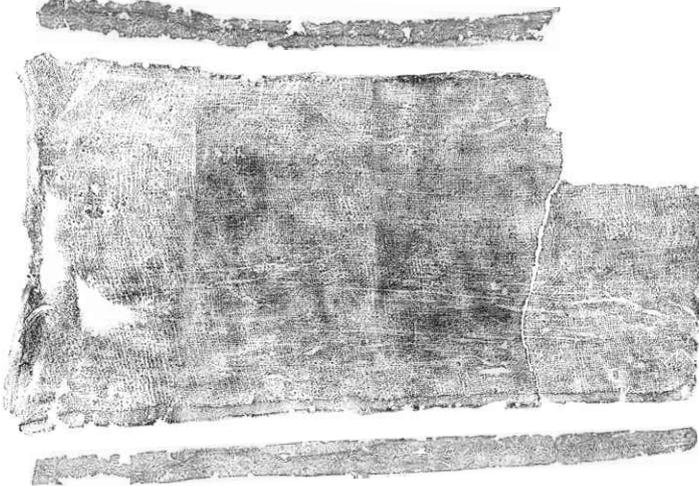
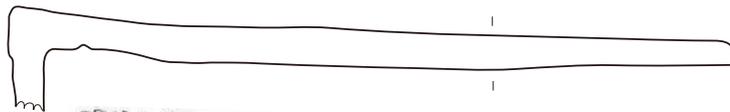
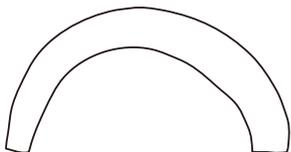
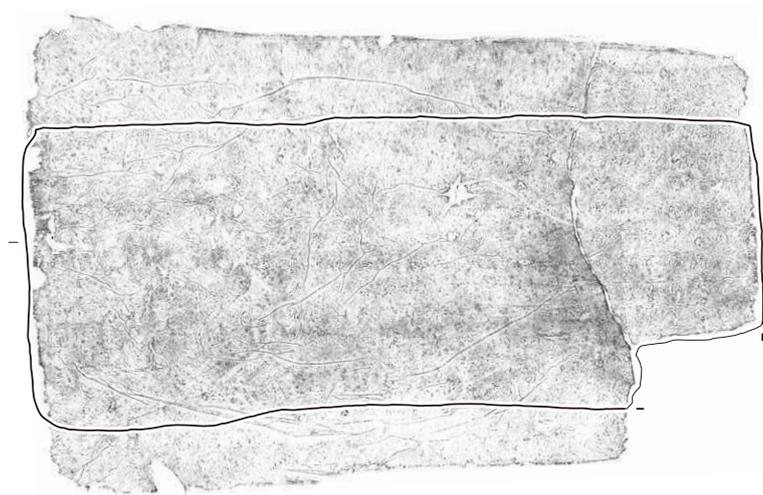


瓦当部と丸瓦接合部の角度 (C 類)



丸瓦凸面の調整 (C 類)

第 42 図 軒丸瓦 C 類 細部の写真



0 10cm 1:4

49 (1号建)

第 43 図 軒丸瓦 C 類

軒丸瓦 D 類：単弁 4 弁軒丸瓦（第 44～47 図）

単弁 4 弁の軒丸瓦で 8 点出土している。図示したもので全てである。

1 号建物跡南面に集中している。焼きは硬質で黒灰色を呈する。瓦当文様は、内区径が小さく、平坦で広い周縁部を持つが、周縁部の幅が一定しない。中房は小さく蓮子は 1 つのみで、B・C 類と同様に隆線で文様を構成しているが、隆線が細く C 類に近い。蓮弁は十字に 4 弁配し、縦隆線で子葉が 1 本表現されている。蓮弁は均等に割り付けられておらず、不揃いである。瓦当部の厚さは薄く、瓦当部裏面には無絞りの布目がつき、製作技法は一本作りである。瓦当部作出後に丸瓦の半分を切り離している。丸瓦凸面はナデられているが、平行叩き痕が残っているものがある（第 46 図：54）。第 45 図 50、第 46 図 54 の丸瓦凸面には文字が線刻されており、「大」（第 46 図 54）と「二」（第 45 図 50）が記されている。

瓦当部は丸瓦と同じ供土で作出していると考えられ、瓦当部の厚さは薄い。瓦当部と丸瓦の接合部角度は軒丸瓦 C 類に比べなだらかであり、丸瓦凸面にも盛り上がりが見られる。

県内資料では、住谷修氏のコレクション中に 1 点同范資料と思われるものが存在し、上野国分寺から採集されたものである [杉山・高井 2008]。



軒丸瓦 D 類



中房と蓮弁（D 類）

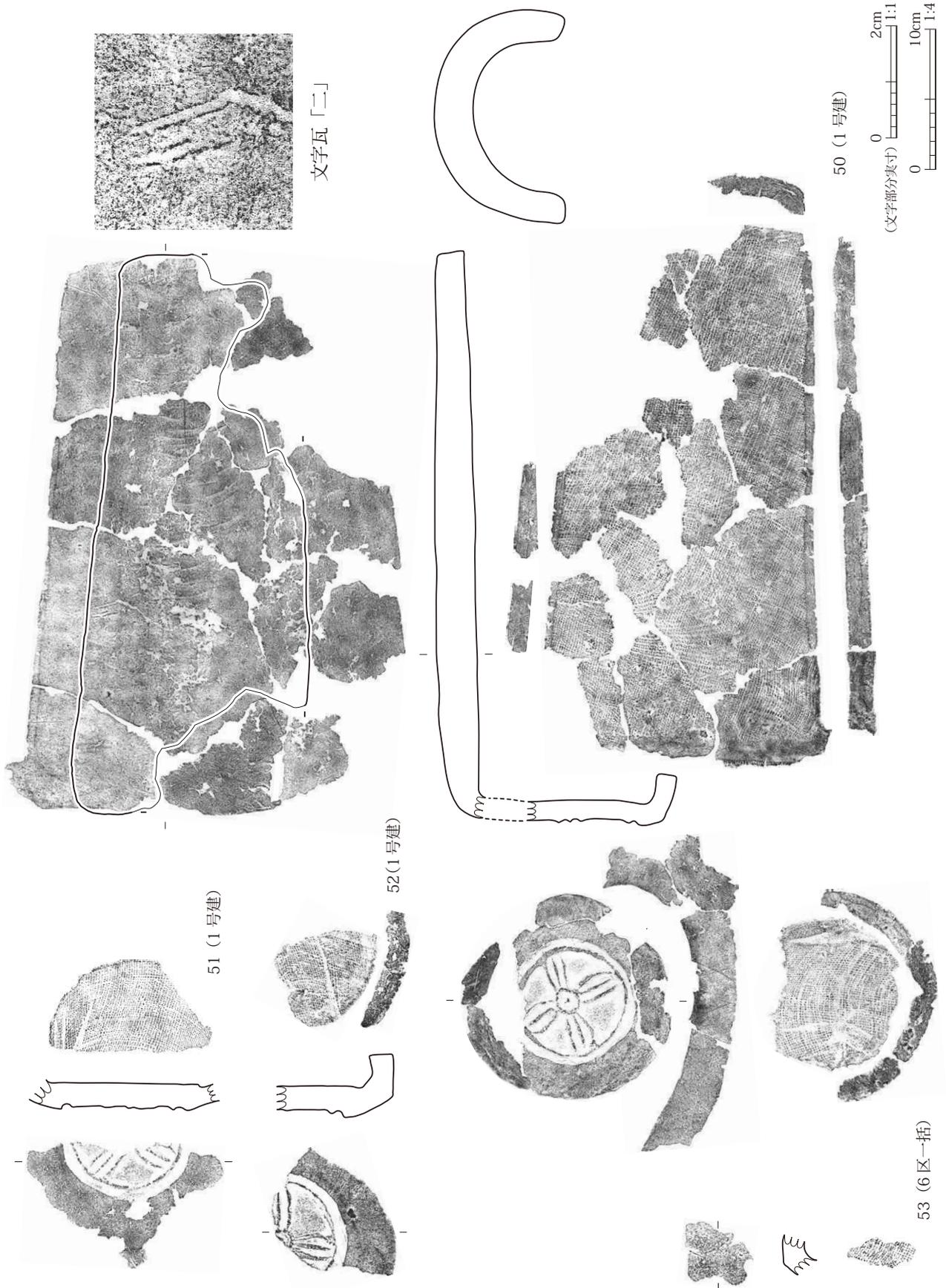


瓦当面裏面の布目と丸瓦接合部の調整（D 類）

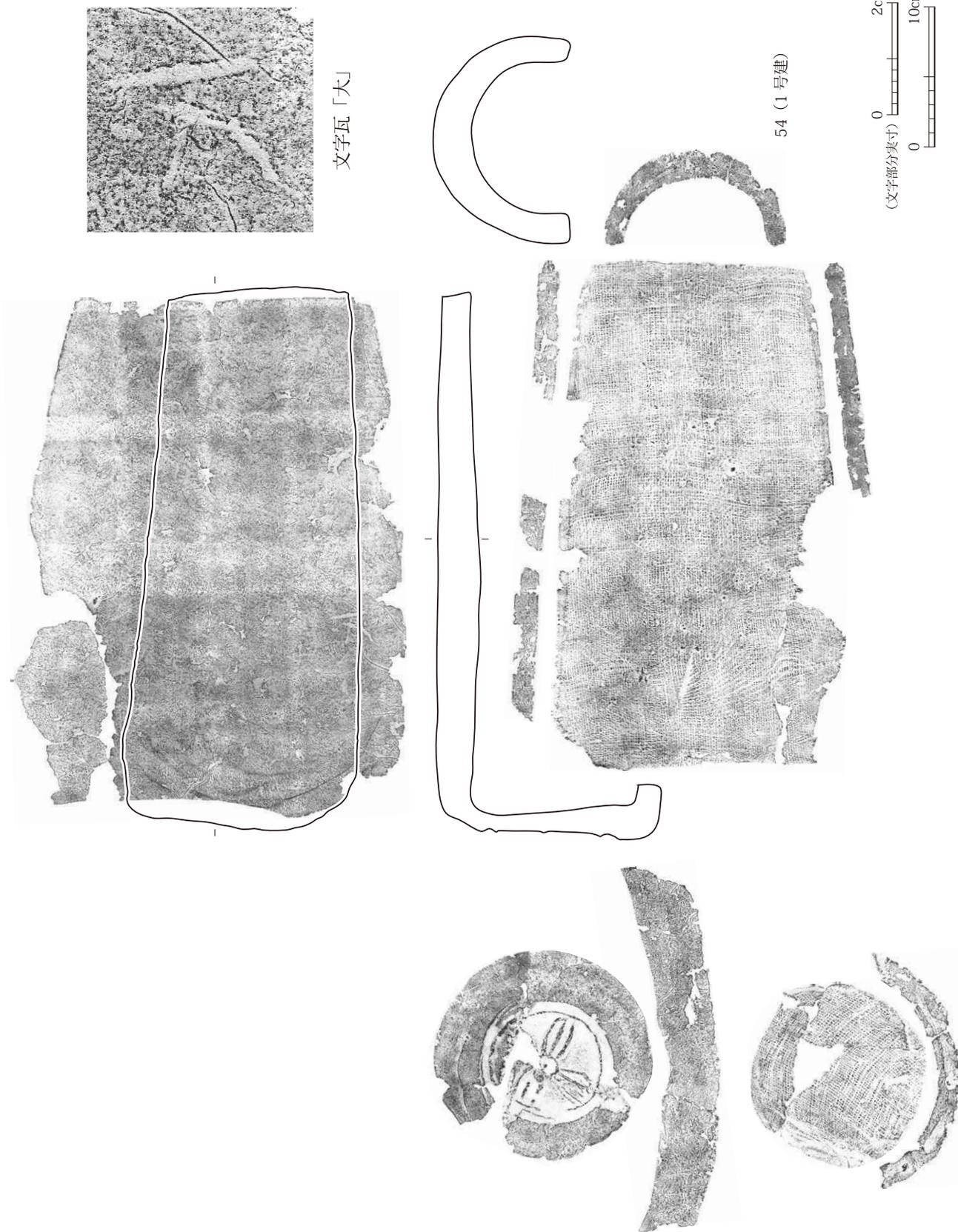


瓦当部と丸瓦接合部の角度（D 類）

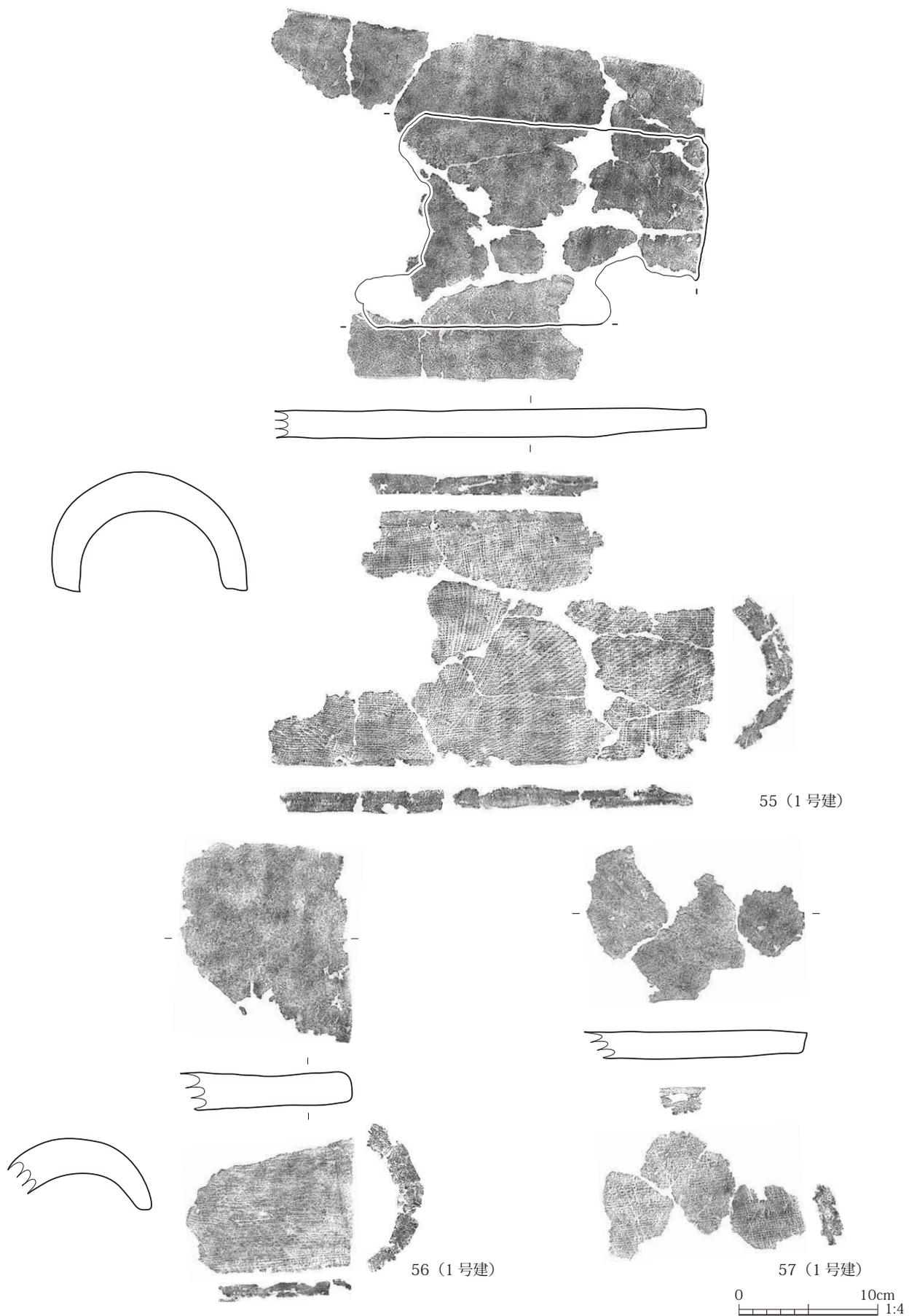
第 44 図 軒丸瓦 D 類 細部の写真



第 45 图 軒丸瓦 D 類 (1)



第46図 軒丸瓦D類(2)



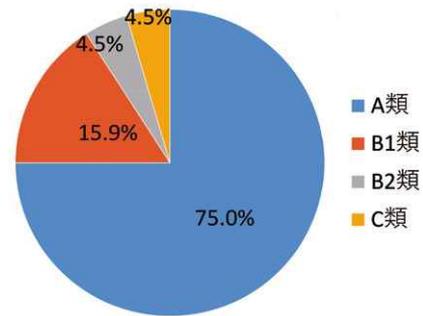
第47図 軒丸瓦D類(3)

## 第2項 軒平瓦

以下の3種4細別の軒平瓦が発見された。

第5表 軒平瓦種類別出土点数・グラフ

	種別	点数	重量 (kg)
軒平瓦	A類	33	17.852
	B1類	7	1.476
	B2類	2	0.184
	C類	2	0.430
合計		44	19.942

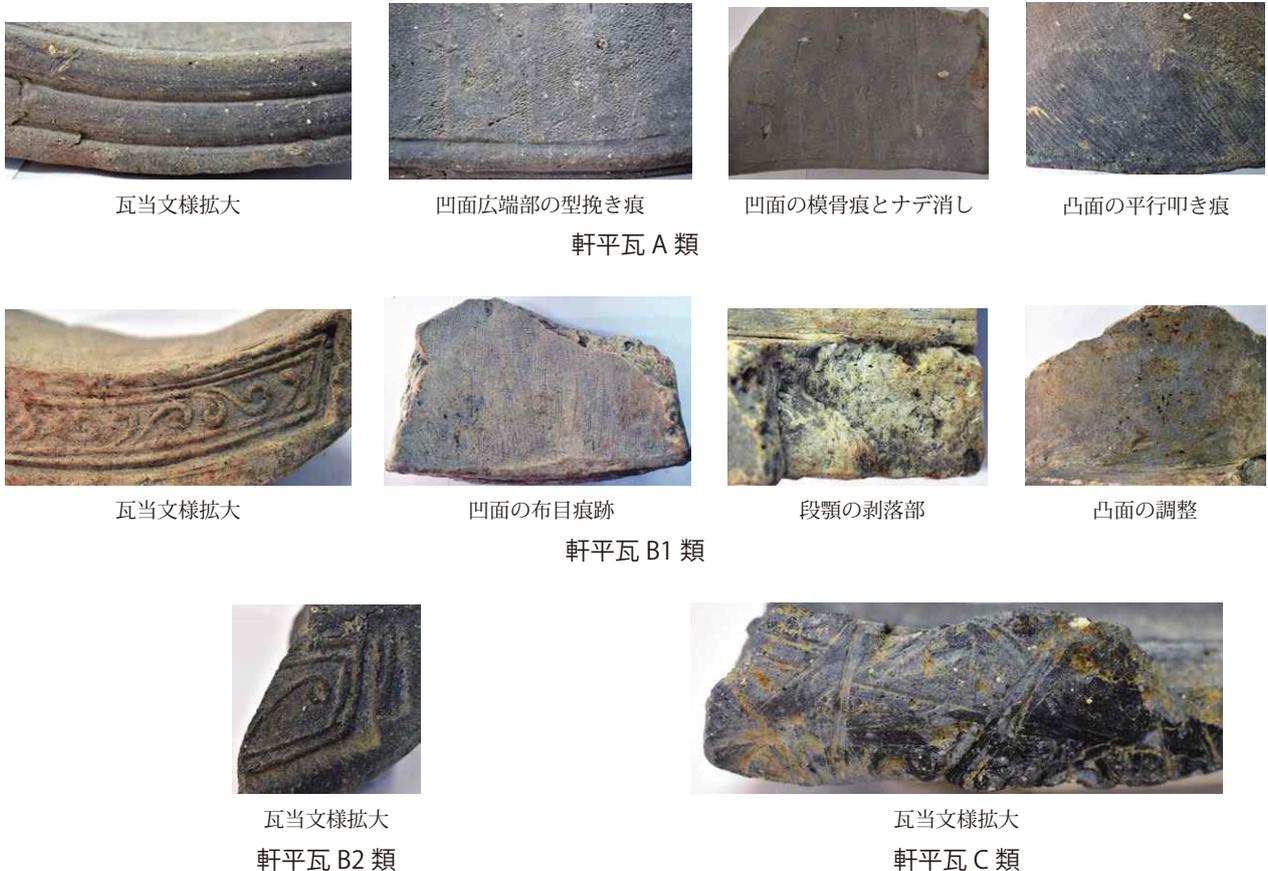


### 軒平瓦 A類：重弧文軒平瓦（第48～53図）

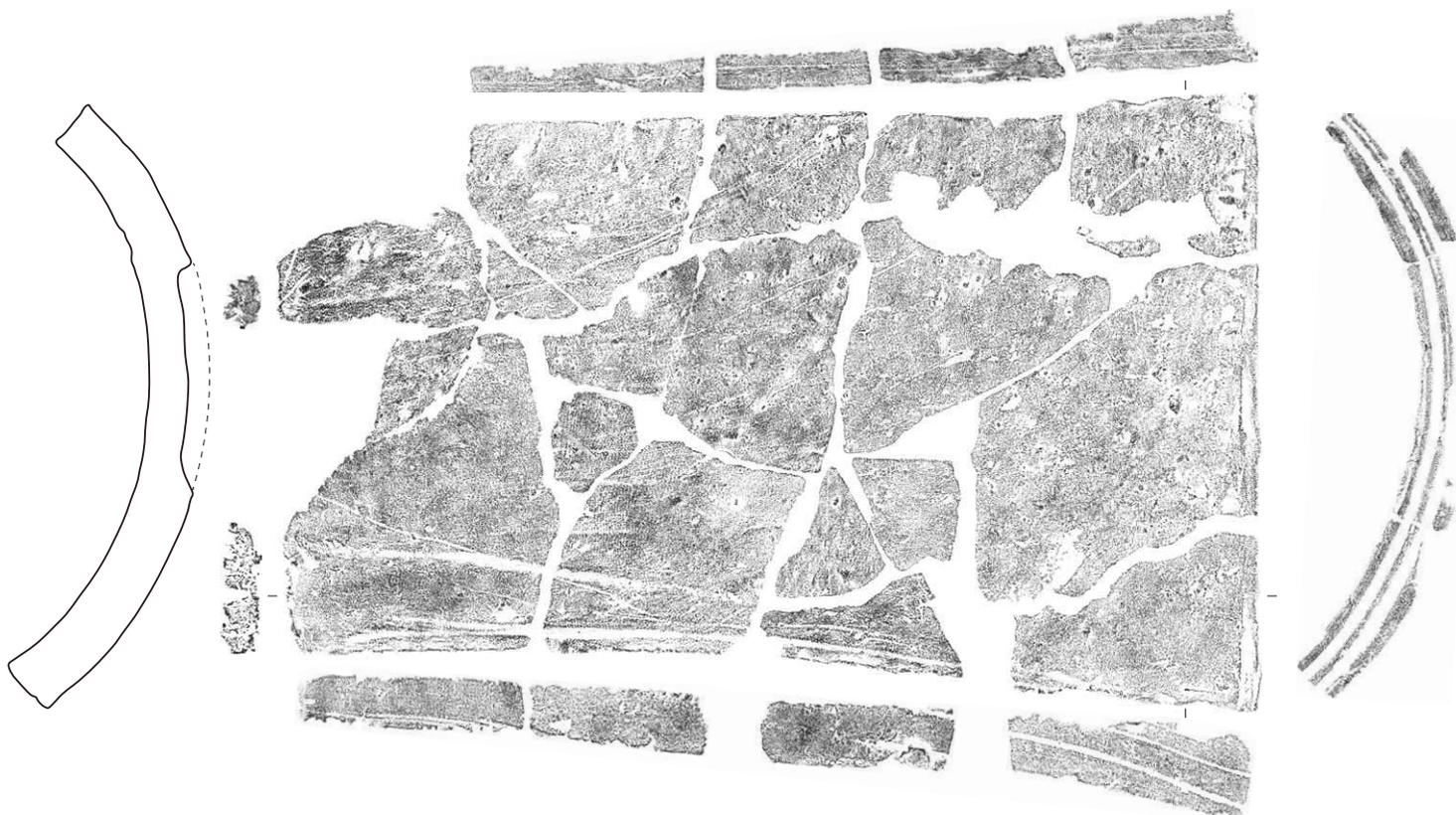
瓦当面に型挽きの重弧文を施文するもの。33点出土している。小片まで含め全て図示した。

重弧文断面はやや四角く浅い。両端は開放している。瓦当表面には磨かれたような光沢はない。平瓦凸面に粘土を添加し、重弧文を施文する瓦当部を作り出している。瓦当部両側縁には型引きの工具痕が見られ、段ができている。顎の形態は無顎である。凹面には模骨痕が残り、桶巻き作りによるものと考えられる。凹面がナデられているものが多く、布目が確認できない個体もある。一方、模骨痕の突出部のみをナデ消して縞状になっている個体もあり、平瓦A1類と共通したクセが見られる。凸面には、平行叩き痕が残るものとナデにより消されているものがある（第48図）。色調は赤褐色のものが目立つが、灰色や暗い色調のものもあり、軒丸瓦A1類と傾向が類似する。

藤岡市下日野金井窯跡群から同様の特徴を持つ重弧文軒平瓦が見つかっており、藤岡市域で製作されたものである可能性が高い。1号建物跡で主に検出されており、軒平瓦の中でもっとも検出数が多い。1号建物跡南辺で検出された瓦積基壇には、軒平瓦A類が使用されていた。



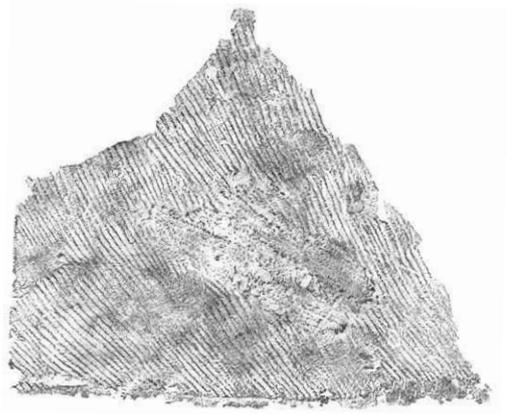
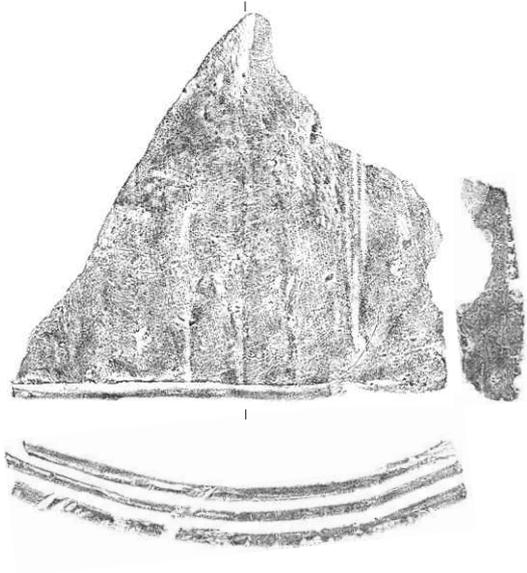
第48図 軒平瓦A類・B1類・B2類・C類 細部の写真



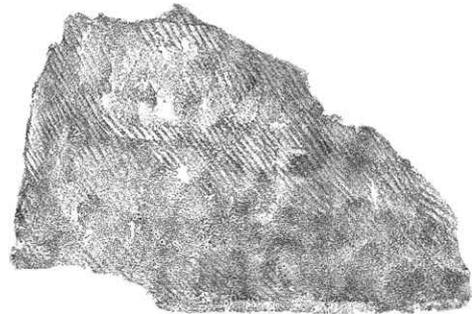
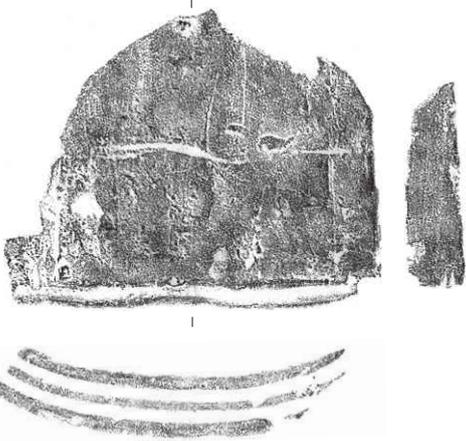
58 (1号建)

0 10cm  
1:4

第49図 軒平瓦A類(1)



59 (トレ22)



60 (1号建)



61 (1区一括)



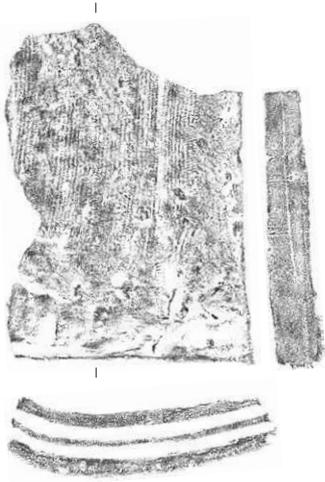
第50図 軒平瓦A類(2)



62 (1号建)



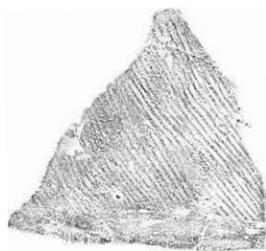
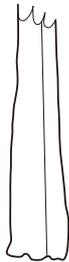
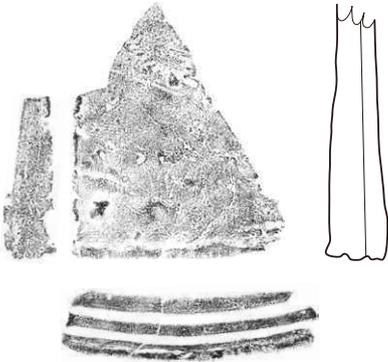
63 (Cw-149G)



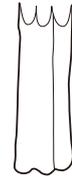
64 (1号建)



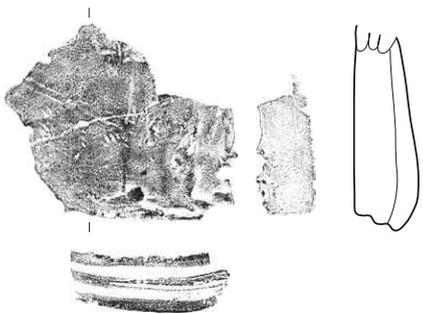
65 (1号建)



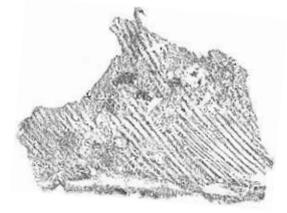
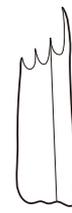
66 (1区一括)



67 (トレ9・14)



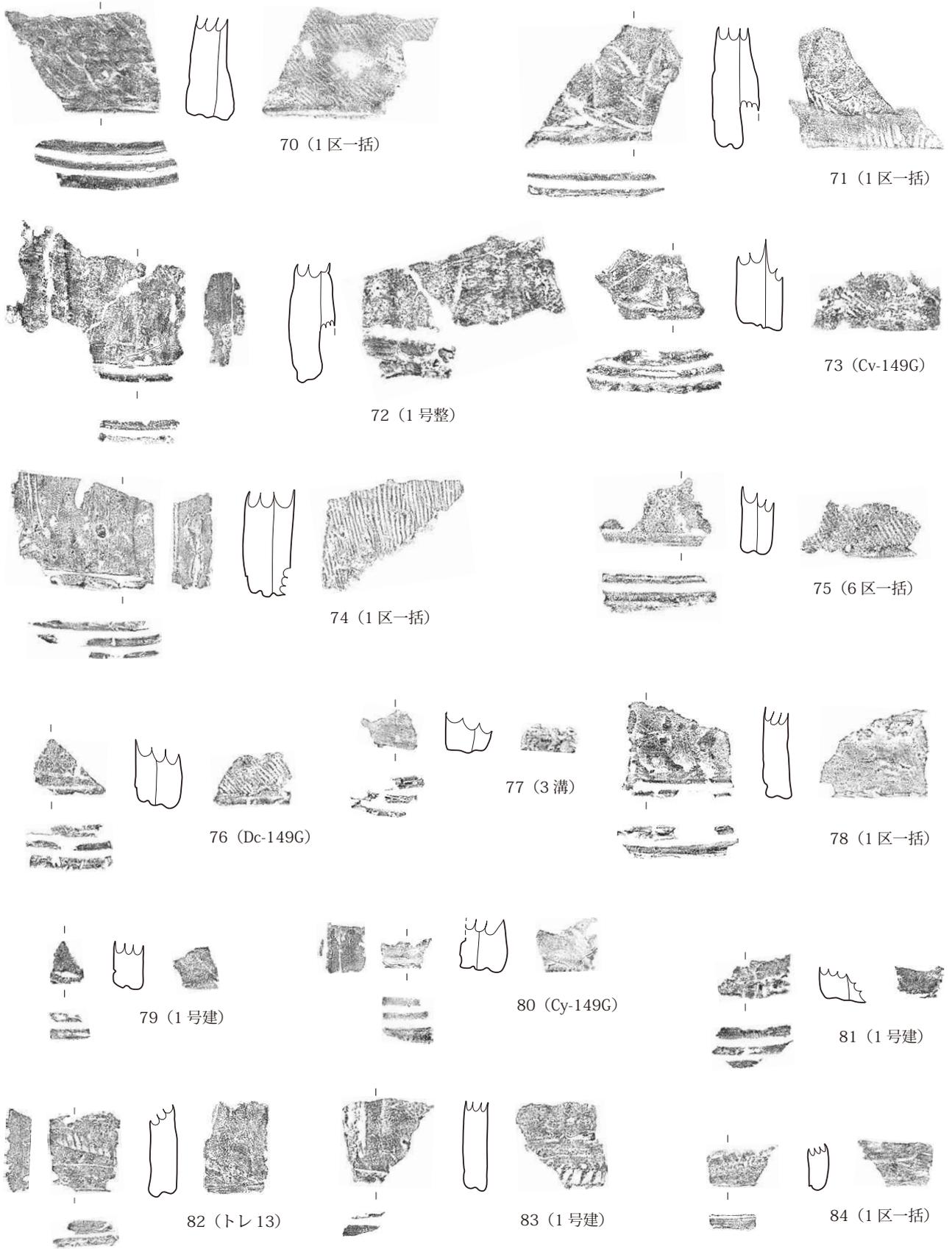
68 (Db-148G)



69 (1号整)

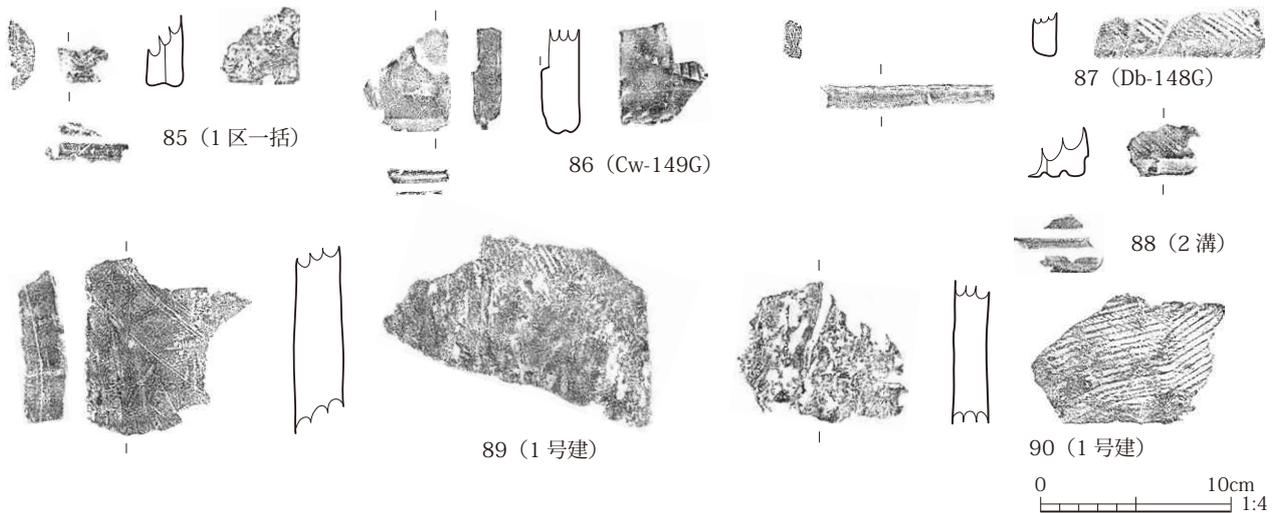


第51図 軒平瓦A類(3)



0 10cm  
1:4

第52図 軒平瓦A類(4)



第 53 図 軒平瓦 A 類 (5)

#### 軒平瓦 B 類 (第 54・55 図)

范による唐草文を施文した軒平瓦である。9 点出土している。小片を含め全て図示した。凸面に粘土が添加され瓦当面を作出している。顎の形態は段顎である。B1 類と B2 類は范が異なるが、どちらも右偏向唐草文である。軒平瓦 A 類に比較し出土数は少なく、小片が多い。

#### 軒平瓦 B1 類 (第 54 図)

7 点出土した。上野国分寺 P004 と同范のもの。右偏向唐草文である。2 重界線で区画し、主葉・支葉とともに巻き込みがある。顎は段顎で、B2 類と同様である。凸面は丁寧にナデられているが、段顎が剥落している箇所には平行叩き痕が確認できた。凹面には布目痕が残り、調整はされておらず、また明確な模骨痕は確認できないため、一枚作りと思われる。

胎土はやや明るい灰色を呈する。文様が判別できない 2 点 (第 54 図 95・96) も同様の胎土であることから B1 類に該当する可能性が高い。

#### 軒平瓦 B2 類 (第 55 図)

2 点出土した。上野国分寺 P003 と同范のもの。右偏向唐草文である。2 重界線で区画し、主葉・支葉とともに巻き込みがあるが、B1 類に比べ細長く、巻き込みは小さい。顎は段顎で、凸面に断面が四角い粘土を貼り付け、瓦当面を作っている。凸面はナデられ、また凹面の残存状態は悪いが、わずかに遺存している箇所には布目痕が残っているため、B1 類と同様、一枚作りの可能性が高い。胎土は黒灰色の暗い色調で、軒丸瓦 C・D 類と類似する。小片が 2 点だけ 1 号建物跡から出土した。

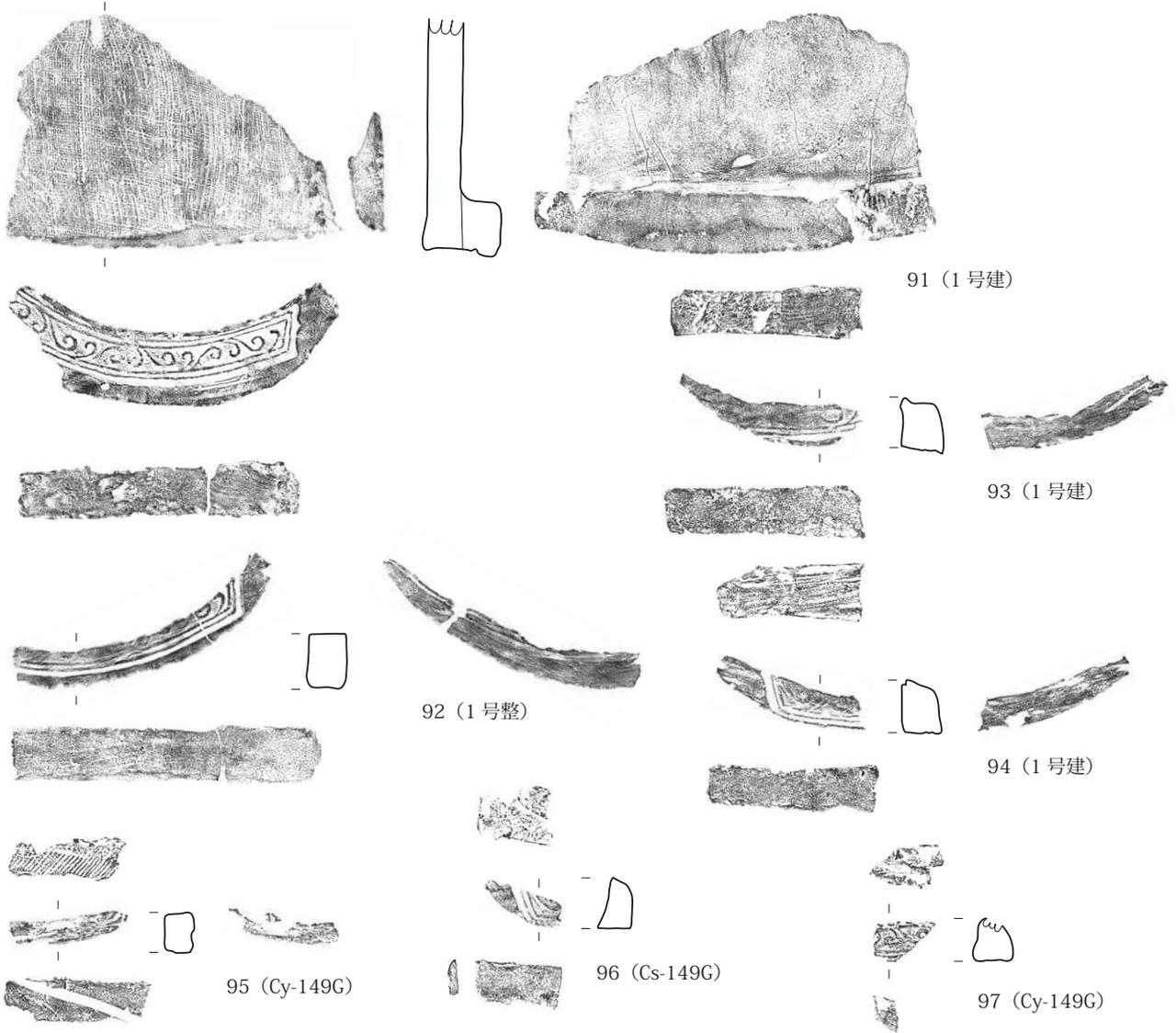
B1・2 類とも上野国分寺 [前沢・高井 1988、橋本ほか 2018] 及び国分寺中間地域 [木津ほか 1991] から同范資料が検出されている。B1 類は藤岡市下日野金井窯跡群 [古郡 2005]、上野・金山瓦窯跡 [坂詰 1966] で同范資料が見つかっており、藤岡市域で製作されたことが判明している。

#### 軒平瓦 C 類 (第 56 図)

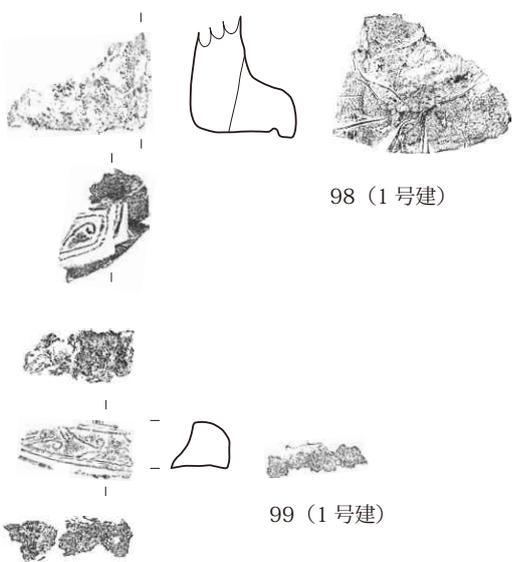
瓦当面に×字状の乱雑な線刻を連続して施したものである。2 点出土した。図示したもので全てである。

瓦当面は、広端部に粘土を添加し作出しており、凹凸面には粘土添加はしていない。広端部に添加した粘土は整形しておらず、乱雑である。瓦当面作出後に、沈線で×字状の文様を連続して描くが、文様のパターンはなく、かなり乱雑に施文している。施文工具にやや差異があり、100 が多裁竹管状の浅い沈線であるのに対し、101 は沈線の断面が V 字状になる。凹面には粘土板の剥ぎ取り痕が残る。100 には僅かに模骨痕が認められ、模骨痕突出部をナデ消しており、桶巻作りによる製作と考えられる。軒平瓦 A 類・平瓦 A1 類と同様の特徴を有する。凸面は、平行叩き後に丁寧にナデが施され、平行叩き痕はほとんど消えてしまっている。

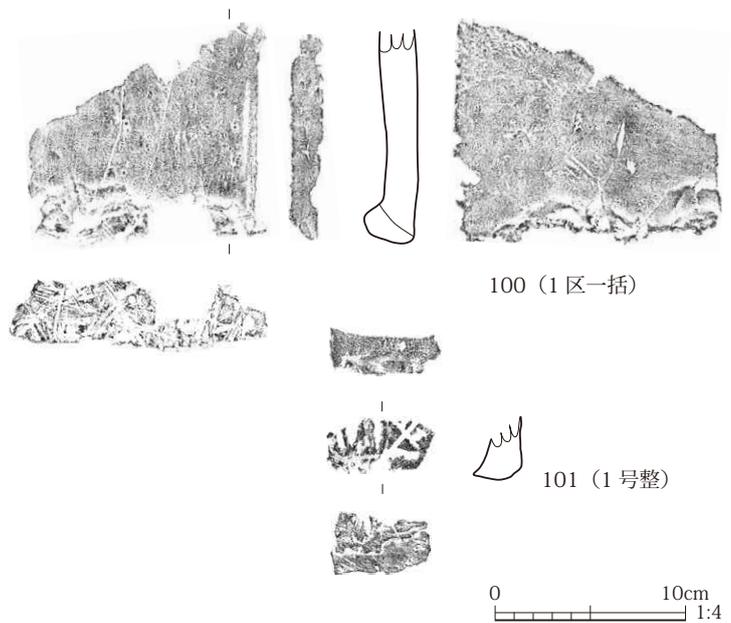
色調は、黒色及び褐色を呈している。



第54图 軒平瓦 B1 類



第55图 軒平瓦 B2 類



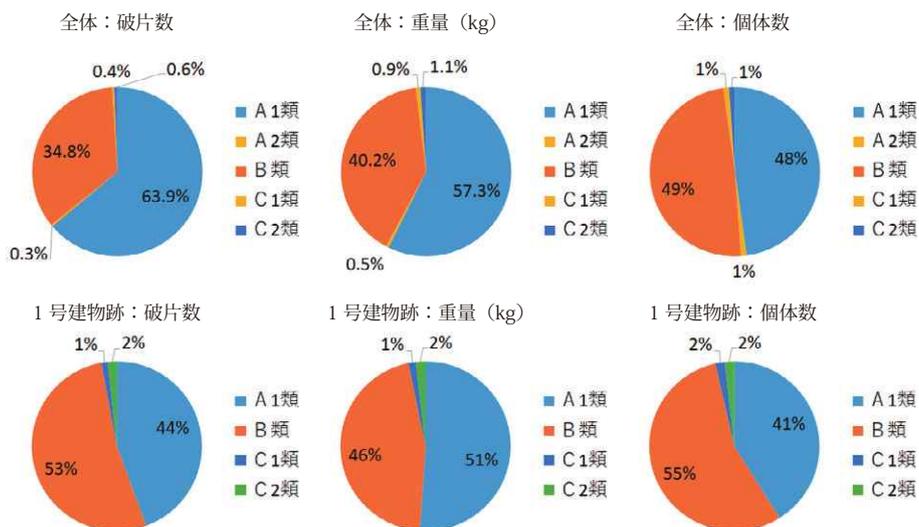
第56图 軒平瓦 C 類

### 第3項 丸瓦

以下の3種5細別の丸瓦が発見された。

第6表 丸瓦種類別出土点数・グラフ

種別	類型	全体				1号建物跡			
		破片数	重量 (kg)	隅角数	個体数	破片数	重量 (kg)	隅角数	個体数
丸瓦	A1類	783	79.07	87	21.75	183	42.37	46	11.5
	A2類	4	0.72	2	0.5	—	—	—	—
	B類	427	55.48	89	22.25	217	37.88	62	15.5
	C1類	5	1.18	2	0.5	5	1.18	2	0.5
	C2類	7	1.51	2	0.5	7	1.51	2	0.5
合計		1226	137.96	182	45.5	412	82.94	112	28



#### 丸瓦 A1類 (第58～61 図 102～115)

無段式丸瓦。上方がすばまった円筒を半裁している。牛田廃寺跡全体で783点、79.07kg、個体数では丸瓦中で48%の出土が認められた。丸瓦で最も出土量が多い。大きさは、全長：約48cm、狭端幅：約12cm、広端幅：約18cm、厚さ：約2cm程度である。

凸面には、平行叩き後にヨコナデ調整が行われるが、平行叩き痕が残存しているものが多い。凹面には細かい布目が残され、布の縦じ目をナデ消しているものが存在する。側縁に分割界線があるもの多く、ある場合には側面内側際にほぼ必ず位置する。ないものも一定数あるが、側面端部を面取りする際に消されている可能性がある。側縁端部は面取りをしている。粘土板接合部がなく、輪積み痕がはっきり残るもの多く、丸瓦の型木に粘土紐を巻き付けて製作していると考えられる。

色調は、内外面が褐色を呈するもの多く、灰色の個体もある。

凸面の平行叩きや色調の特徴が、軒丸瓦 A類・軒平瓦 A類・平瓦 A1類と類似する。

#### 丸瓦 A2類 (第61 図 116・117)

無段式丸瓦。上方がすばまった円筒を半裁している。牛田廃寺跡全体で4点、0.72kg、丸瓦中で1%の出土が認められた。丸瓦 A1類に比べ、数は非常に少ない。大きさは、全長：約42cm、狭端幅：約11cm、広端幅：約17cm、厚さ：約2cm程度で、丸瓦 A1類よりやや小さい。

凸面には、縄叩きもしくは平行叩き後にヨコナデ調整が行われるが、叩き痕は徹底的にナデ消され、ほとんど確認できない。

凹面には細かい布目が残され、側縁に分割界線があるもの多く、ある場合には側面内側際に位置する。側縁端部

を面取りしている。輪積み痕は不明瞭であるが、粘土板接合部がないため、丸瓦 A1 類と同様に型木に粘土紐を巻き付けて製作していると考えられる。

色調は、内外面が灰色を呈する。



凸面の調整（平行叩き→ヨコナデ）



凹面側縁の分割界線



凸面の調整（縄叩き→ナデ）



凹面に見られる輪積み痕と布目

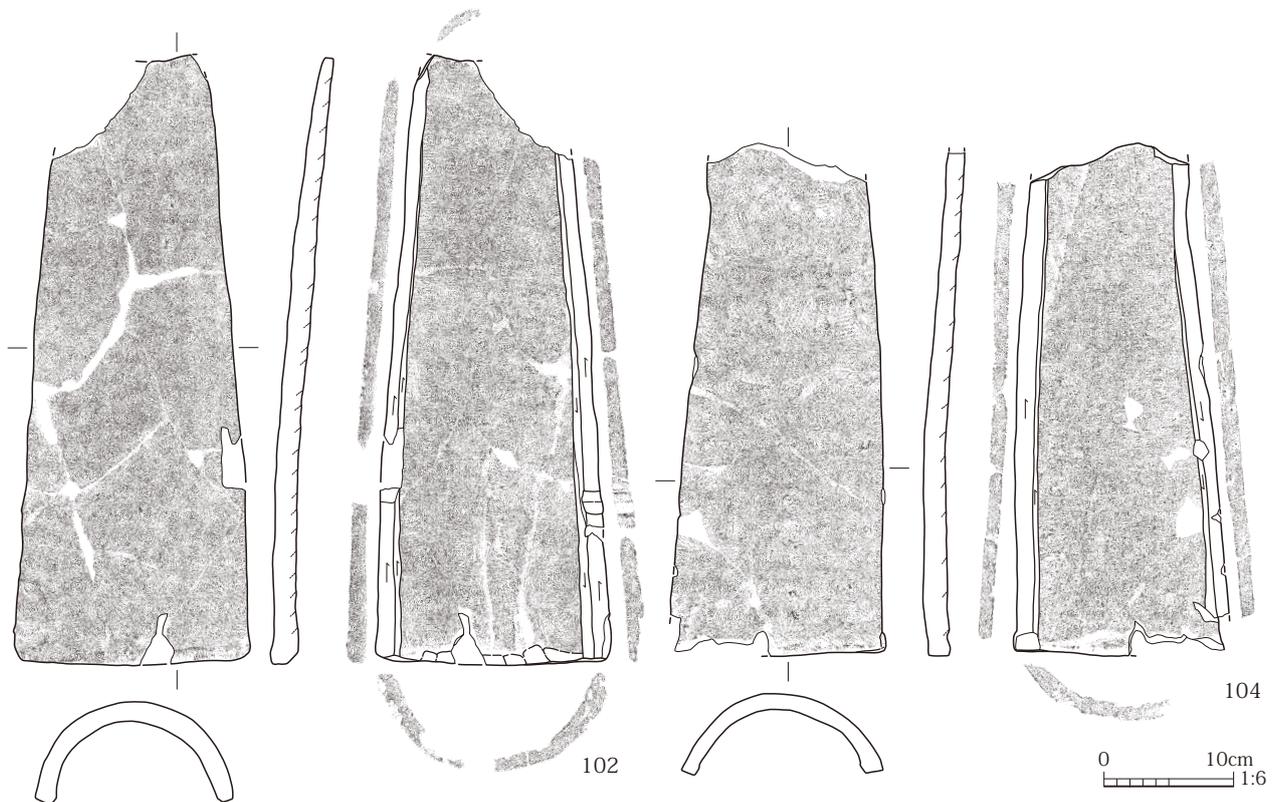


凹面側縁の分割界線

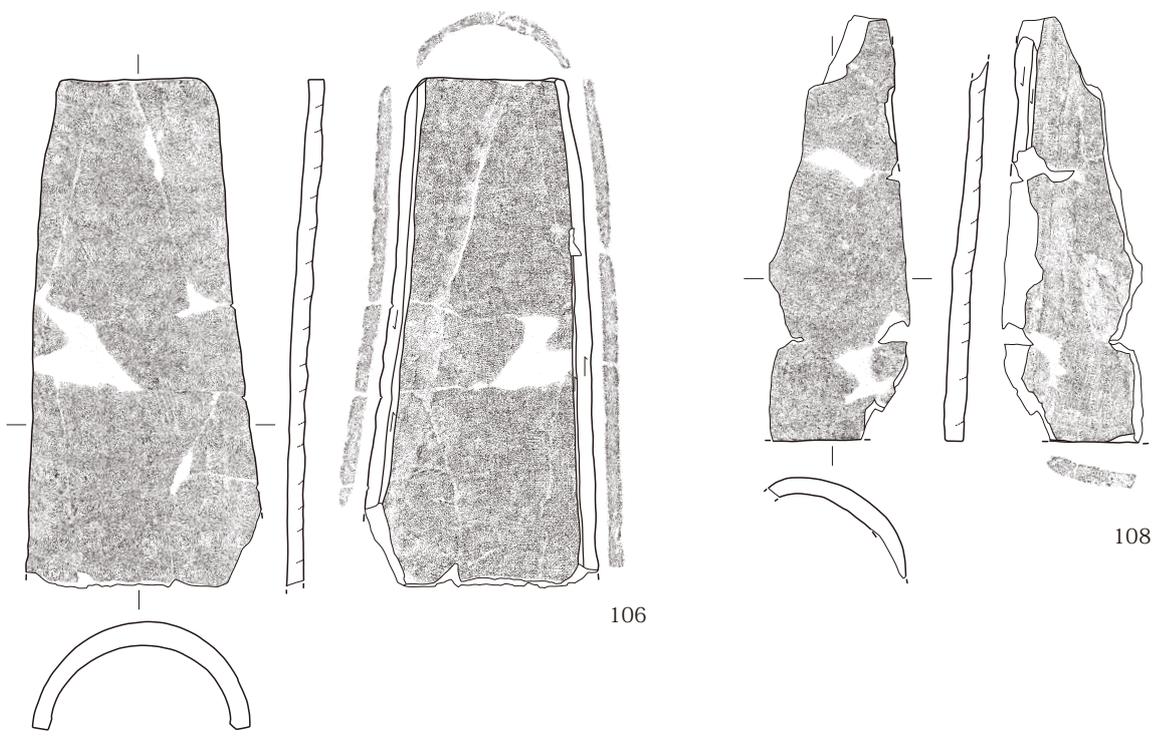
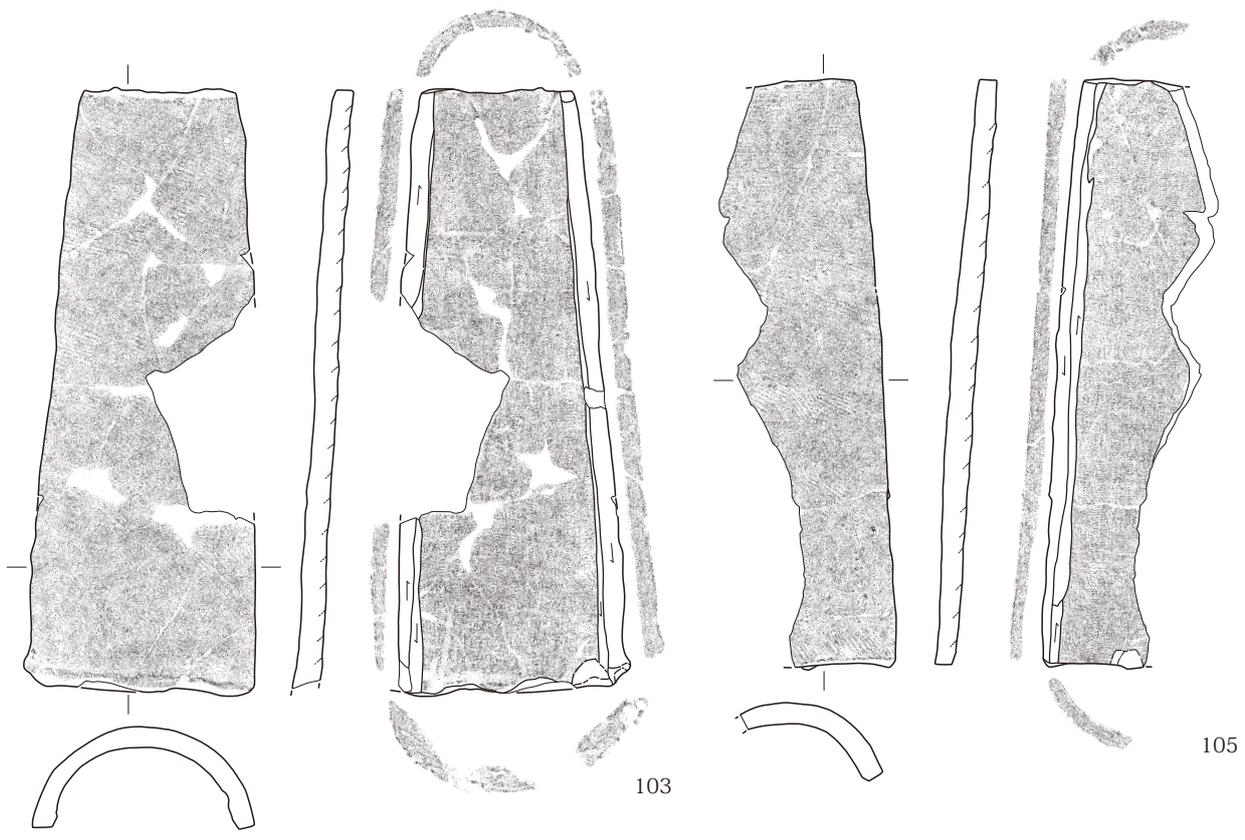
丸瓦 A1 類

丸瓦 A2 類

第 57 図 丸瓦 A1 類・A2 類 細部の写真

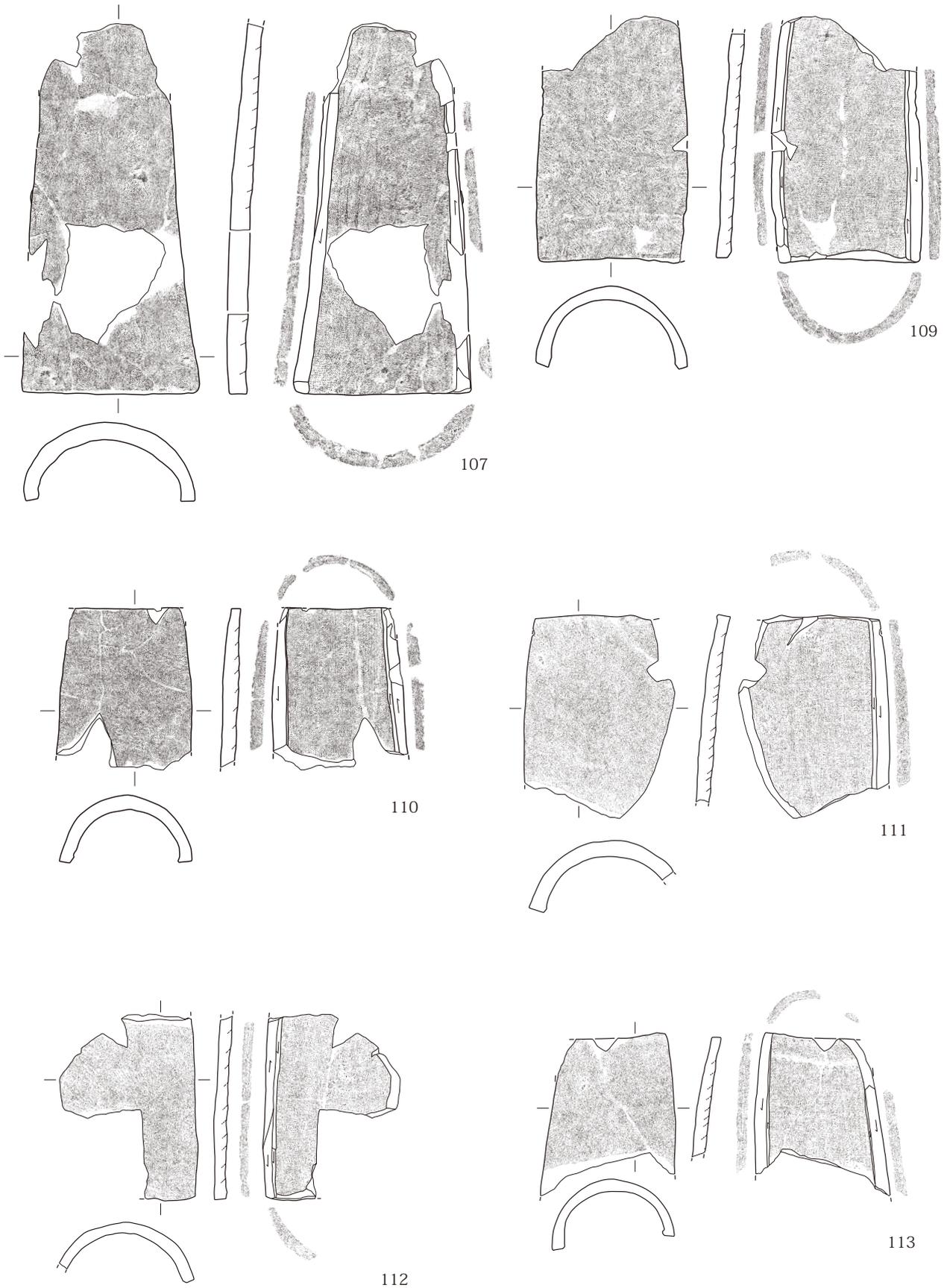


第 58 図 1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (1)



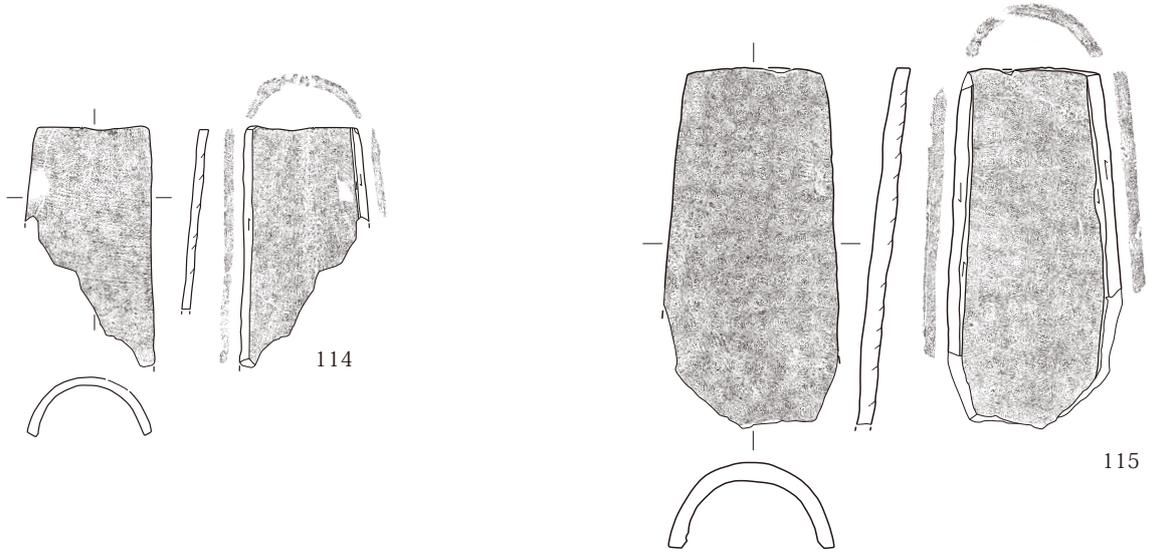
0 10cm  
1:6

第 59 图 1 号建物跡 丸瓦 A1 類 (2)

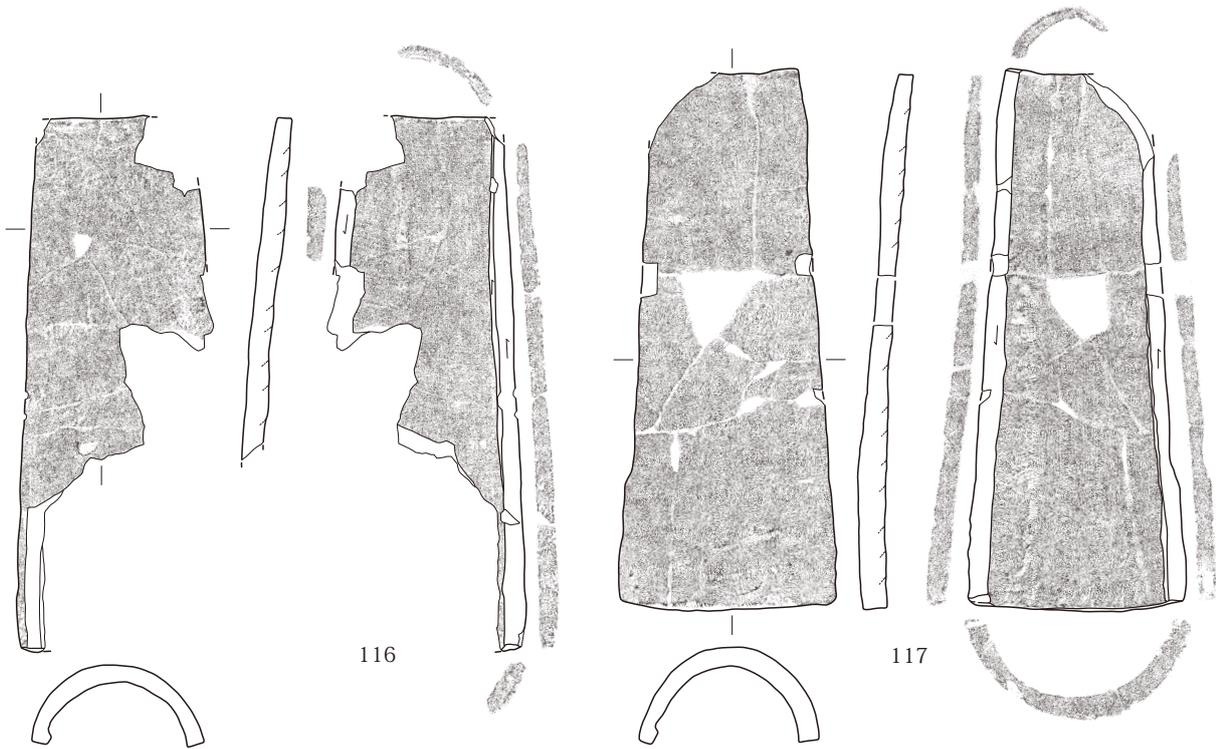


第60図 1号建物跡 丸瓦A1類(3)

丸瓦A1類



丸瓦A2類



0 10cm  
1:6

第61図 1号建物跡 丸瓦A1類(4)・丸瓦A2類

丸瓦 B 類 (第 62 ~ 66 図 : 118 ~ 137)

無段式丸瓦。丸瓦一枚作りの可能性がある一群である。牛田廃寺跡全体で 427 点、55.48kg、個体数では丸瓦中で 49% の出土が認められた。平瓦 B 類と調整・胎土が類似しており、破片での同定は困難である。

丸瓦のカーブが緩く、円形の型木の使用を想定しづらい。凸面はタテ削りもしくはタテナデで調整を行っている。ナデによる縦方向の稜が残る個体がある。凹面は荒い布目のものが多い。布の縦じ目は確認できず、分割界線も見られない。粘土板合せ目も確認できないことから、1 枚作りの可能性が高い。ただ、一枚作りの根拠となる側縁の布目痕が見られないため、今後検討を重ねる必要がある。凹面側縁は調整していないものが多いが、5mm 程度の面取りを行っている個体が少数ある。狭・広端部の調整はない。

色調は内外面が、褐色・灰色を呈するものが多い。色調にムラがあり、マーブル状になる個体が多い。

平瓦 B 類と技法・色調・胎土が極めて良く類似する。藤岡市下日野金井窯跡群 g 地点灰原で丸瓦 B 類が出土しており、下日野金井窯跡群で製作されたことがわかる。同地点からは、軒丸瓦 C 類、軒平瓦 B1 類が共に出土しており、年代推定の手がかりとなる。

近隣での丸瓦一枚作りの類例として「多胡正倉跡丸瓦 2C 類 (無段式粘土板凸面台成形)」があるが、同一のものかは不明である。

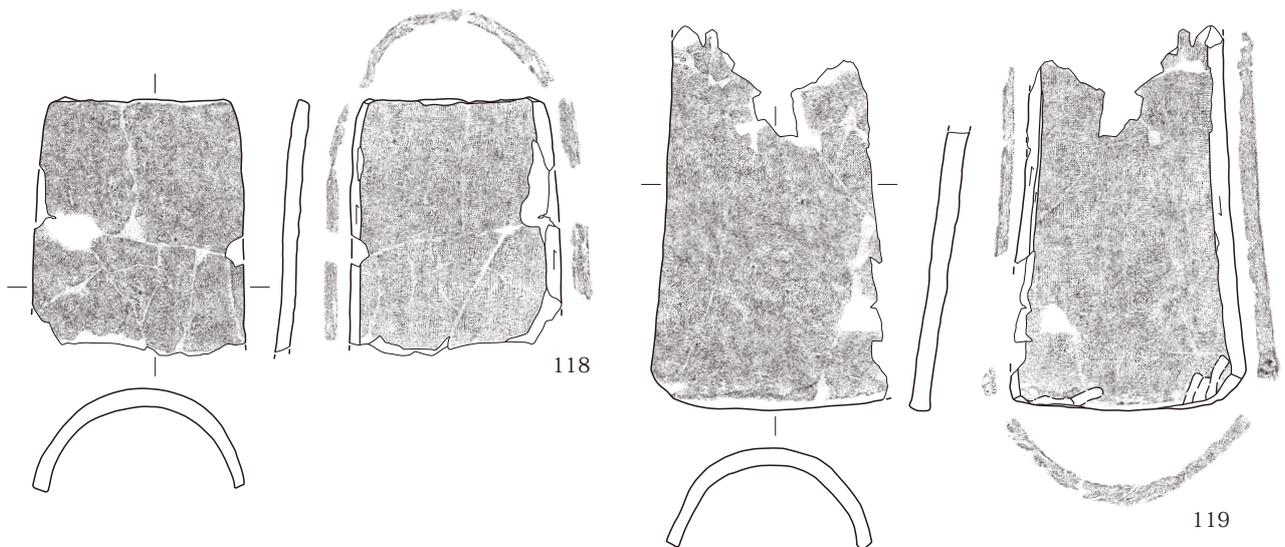


凸面の調整 (ナデ)

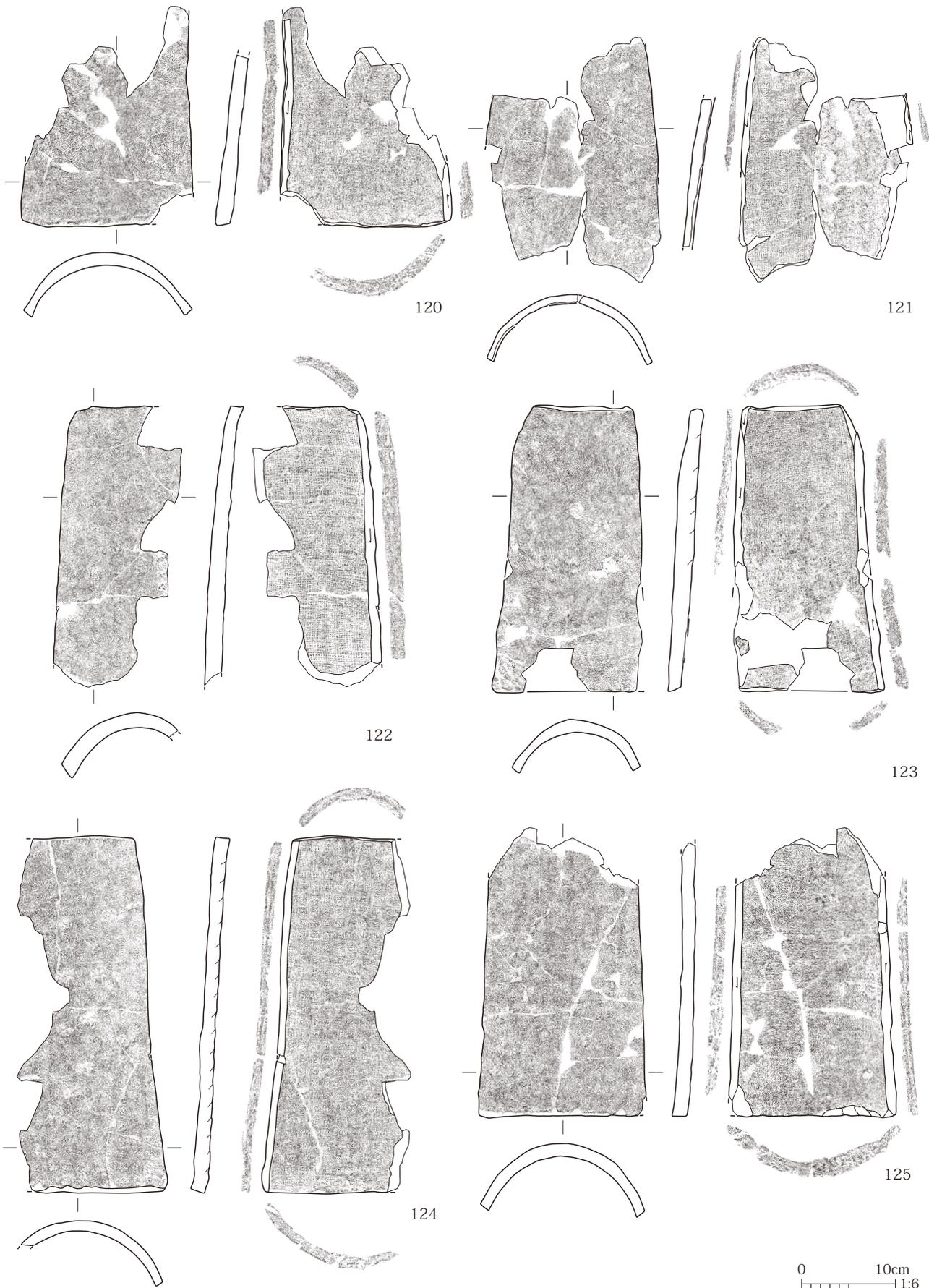


凹面の様相。細かく割れている

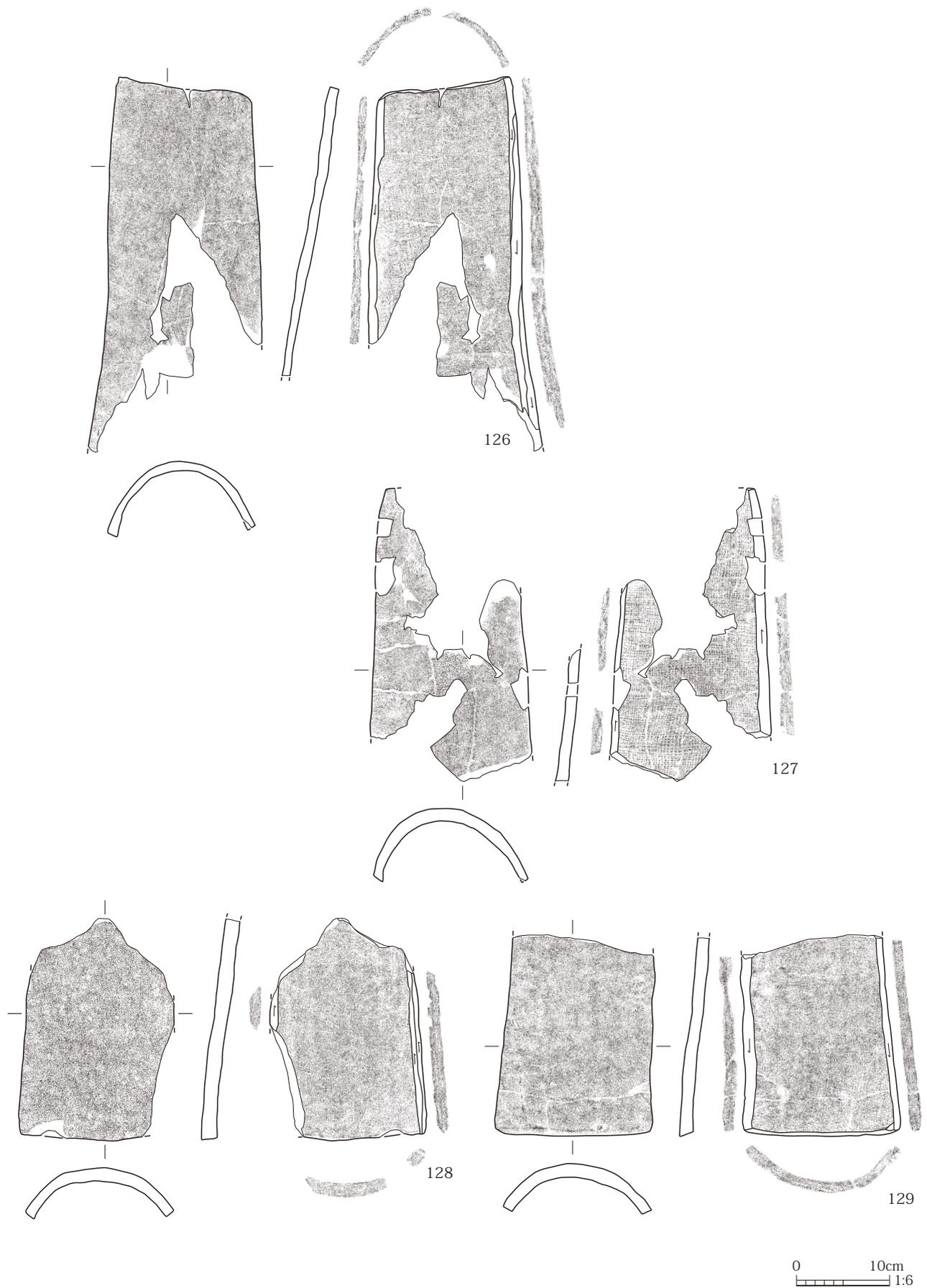
第 62 図 丸瓦 B 類 細部の写真



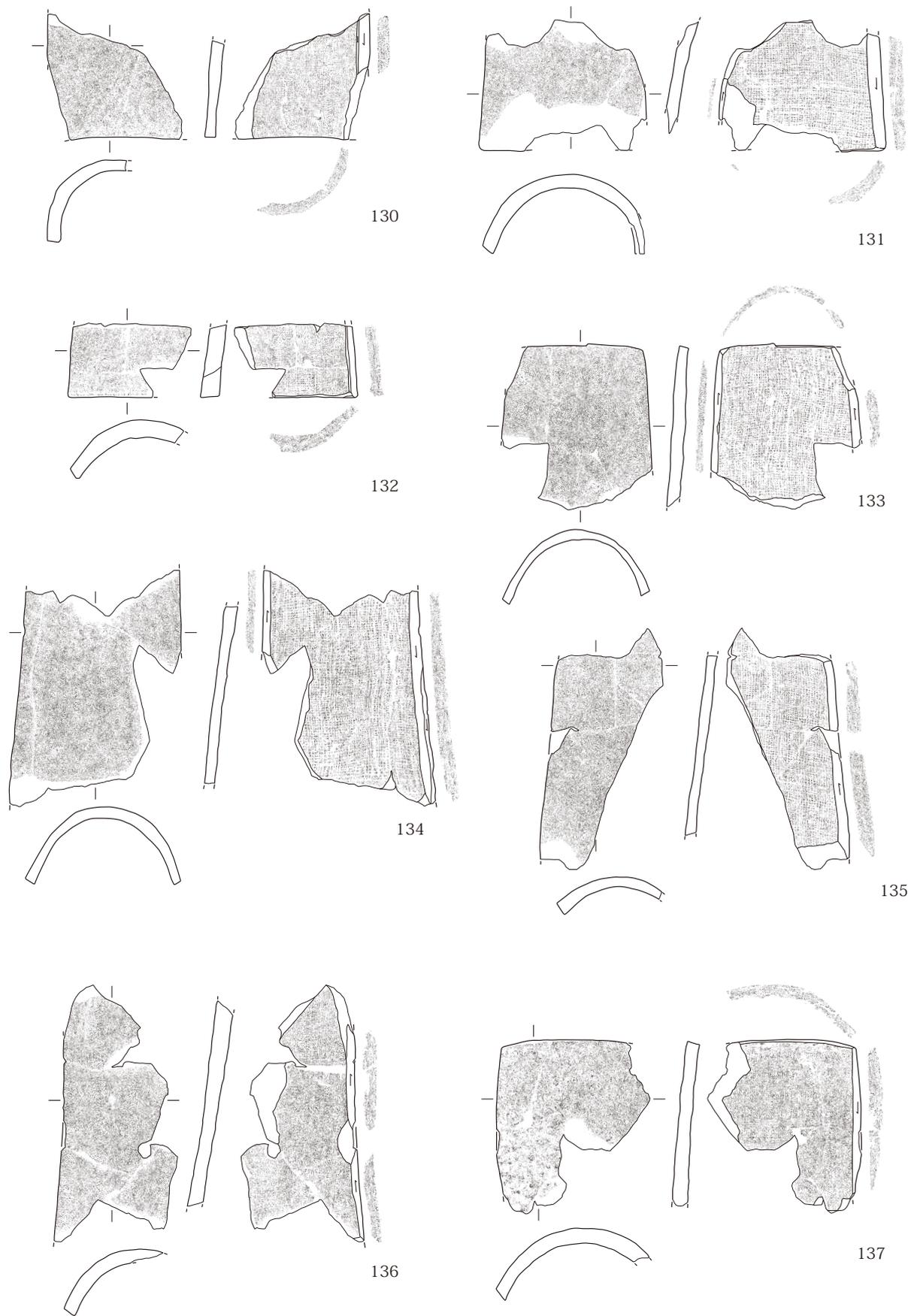
第 63 図 1 号建物跡 丸瓦 B 類 (1)



第64図 1号建物跡 丸瓦B類(2)



第65図 1号建物跡 丸瓦B類(3)



第66図 1号建物跡 丸瓦B類(4)

丸瓦 C1 類 (第 68 図 138 ~ 142)

牛田廃寺跡全体で 5 点、1.18kg の出土が認められた。すべて 1 号建物跡から見つかった。出土しているものは全て図示した。泥条盤築技法で作られた丸瓦である。全体が残っている個体がないため、大きさは不明である。厚みは 1.2cm 程度である。

凸面はタテナデ後に狭端部 4cm 程をヨコナデ調整している。叩きの痕跡は見られない。第 68 図 138 の凸面広端側の表面が剥がれており、葺足の痕跡の可能性はある。狭端部は外削ぎ状の断面を呈する

凹面にはヨコナデ調整がされるが、輪積みの凹凸痕が明瞭に残存している。

丸瓦 C2 類 (第 67・69・70 図 143 ~ 149)

牛田廃寺跡全体で 7 点、1.51kg の出土が認められた。すべて 1 号建物跡から見つかった。全て図示した。泥条盤築技法で作られた丸瓦である。全体が残っている個体がないため、大きさは不明である。厚みは 2 ~ 3cm で丸瓦 C1 類より厚みがある。

凸面には縄叩きが施されるが、ナデ調整は行わず、縄叩き痕がそのまま残される。凸面の側縁をケズリにより外削ぎ状に調整している。

凹面はヨコナデ調整がされ、輪積みの凹凸痕が明瞭に残存している。

丸瓦 C1 類



凸面の調整 (ケズリ)



凹面に見られる輪積み痕とナデ調整

丸瓦 C2 類

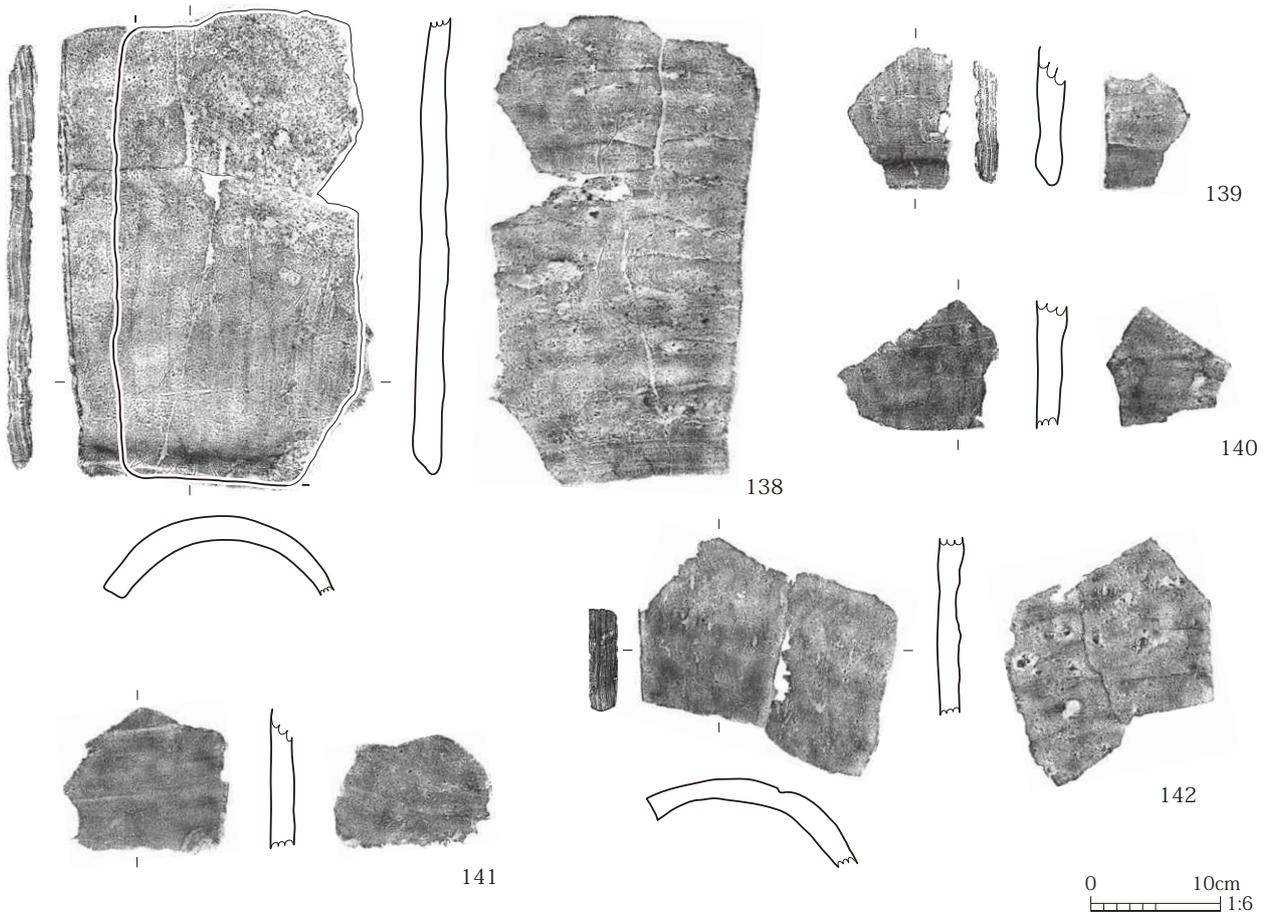


凸面の調整 (縄叩き)

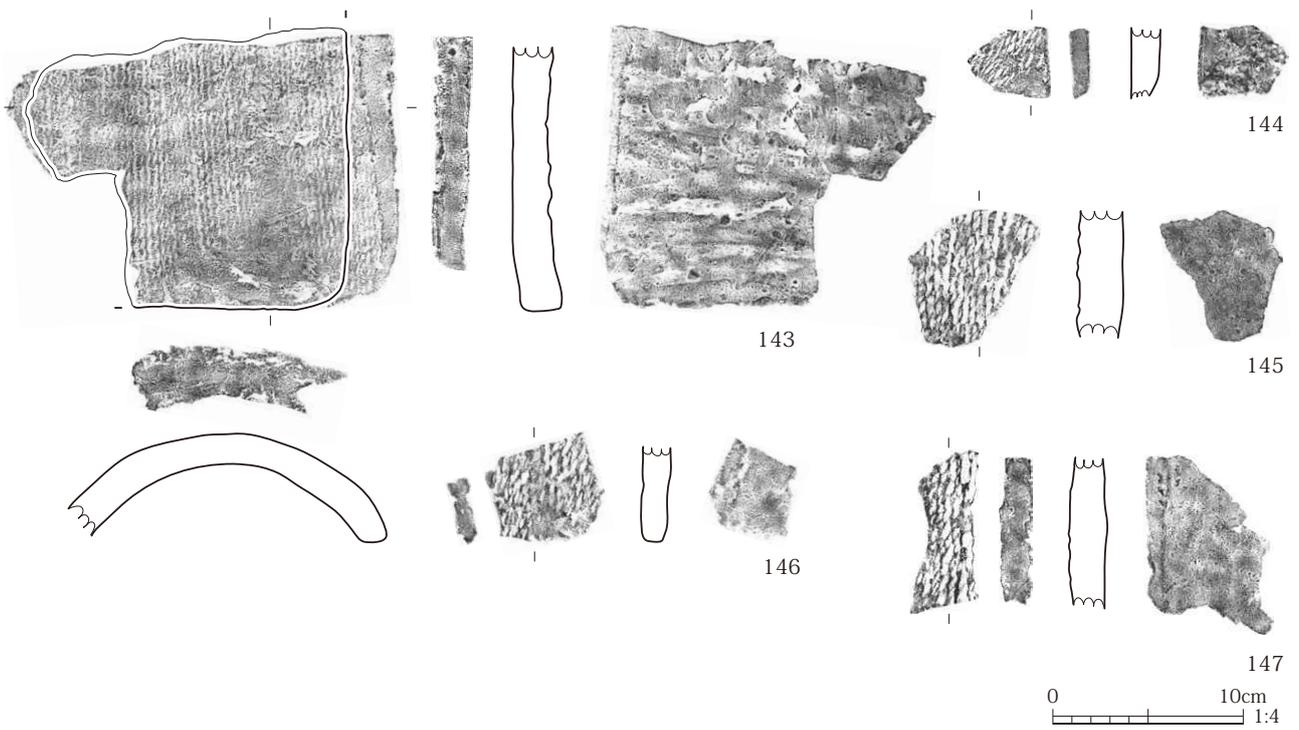


凹面に見られる輪積み痕とナデ調整

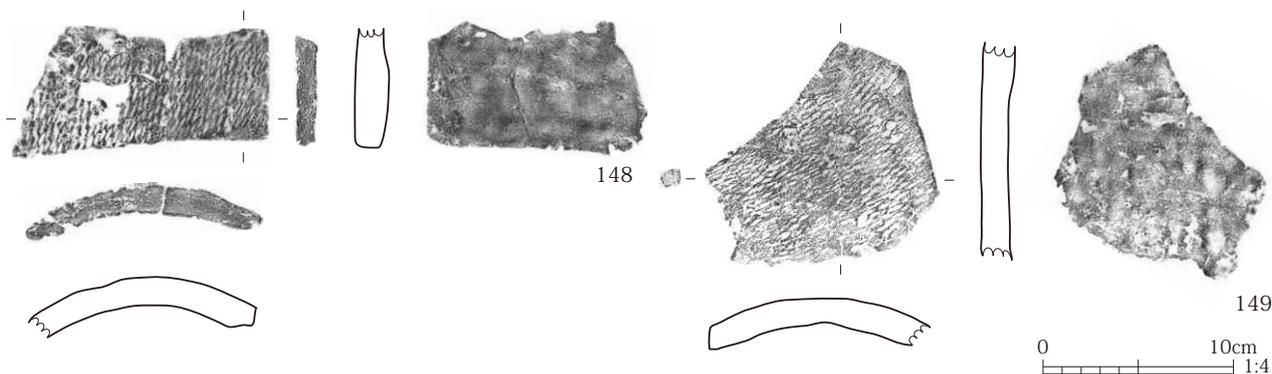
第 67 図 丸瓦 C1 類・C2 類 細部の写真



第68图 1号建物跡 丸瓦C1類



第69图 1号建物跡 丸瓦C2類(1)



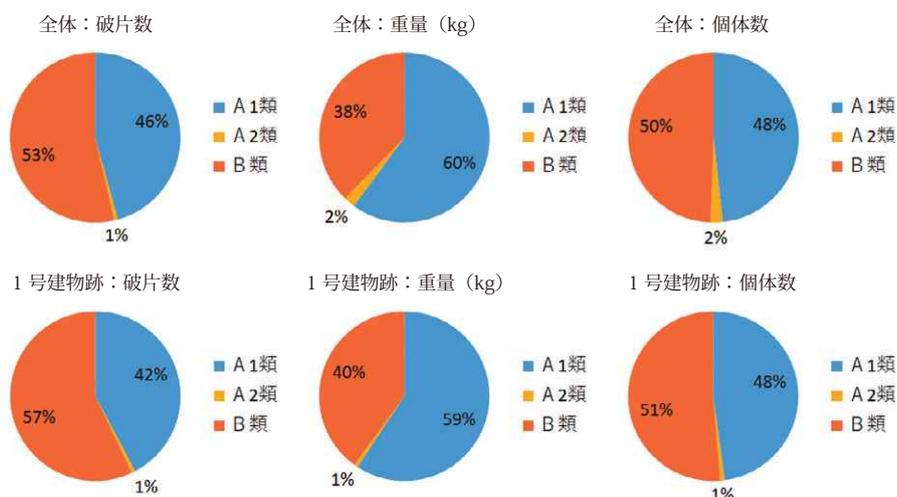
第70図 1号建物跡 丸瓦C2類(2)

#### 第4項 平瓦

以下の2種3細別の平瓦が発見された。

第7表 平瓦種類別出土点数・グラフ

種別	類型	全体				1号建物跡			
		破片数	重量 (kg)	隅角数	個体数	破片数	重量 (kg)	隅角数	個体数
平瓦	A1類	1785	257.74	212	53	515	141.63	111	27.75
	A2類	26	9.26	10	2.5	8	1.62	2	0.5
	B類	2093	161.82	217	54.25	695	95.69	119	29.75
合計		3904	428.82	439	109.75	1218	238.94	232	58



#### 平瓦 A1類 (第72～80図 150～178)

桶巻作りで作られた平瓦である。牛田廃寺跡全体で 1785 点、257.74kg の出土が認められ、個体数比は全体で 48% である。大きさが異なる 2 種類があり、全長：約 50cm、狭端幅：約 25cm、広端幅：約 30cm、厚さ：約 2cm の一群と、全長：約 40cm、狭端幅：約 25cm 広端幅：約 28cm、厚さ：約 2cm の一群があり、2 つの異なる桶を使用していたことがわかる。完形資料を見ると、前者は平面形が細長い台形を呈するが、後者はやや寸詰まりの長方形に近い形をとるものが多い。ただし、破片資料ではどちらか判別できないため、分類は行わなかった。

凸面には平行叩きを施し、回転台を使用し外面をヨコナデしているが、平行叩き痕を消きっていない。凹面には、粘土板の糸切痕が残る。布目は細かいものが多い。平瓦 A1 類の模骨痕は浅いものも多く、顕著ではない。さらに模骨痕の突出部をナデ消しているため、判別が難しい。凹面はナデと布目の縞状になっており、平瓦 A1 類の大きな特徴である。この特徴は軒平瓦 A 類の凹面と共通している。凹面端部の調整は基本的に行わないが、わずかに面取りを行っている個体も存在する。狭・広端部にも調整はない。色調は褐色を呈するものが最も多いが、灰

色のものも存在する。粘土板の合わせ目が観察できる個体には、図に▲を付して位置を示した。

凹面の模骨痕突出部をナデ消した縞状の痕跡と、色調の特徴は軒平瓦 A 類と強い共通性が認められる。

#### 平瓦 A2 類 (第 71・81 図)

桶巻作りで作られた平瓦である。牛田廃寺跡全体で 26 点、9.26kg の出土が認められた。個体数比は全体で 2% である。全長：約 40cm、狭端幅：約 20cm、広端幅：約 25cm、厚さ：約 2.5cm で平瓦 A1 類よりやや小さい。

凸面は、縄叩きを施した後にナデ消しており、縄叩き痕はほとんど確認できない。凹面には、粘土板の糸切痕が残るが、密で細かい。布目は細かい。模骨痕は明瞭に残り、突出部はナデを行っている。凹面の側面・狭端部・広端部には、3cm 程度の面取りが行われている。色調は灰白色を呈する。

#### 平瓦 A1 類



凹面の模骨痕とナデ消し



凸面の調整 (平行叩き→ヨコナデ)



凹面の粘土合わせ目とナデ消し

#### 平瓦 A2 類

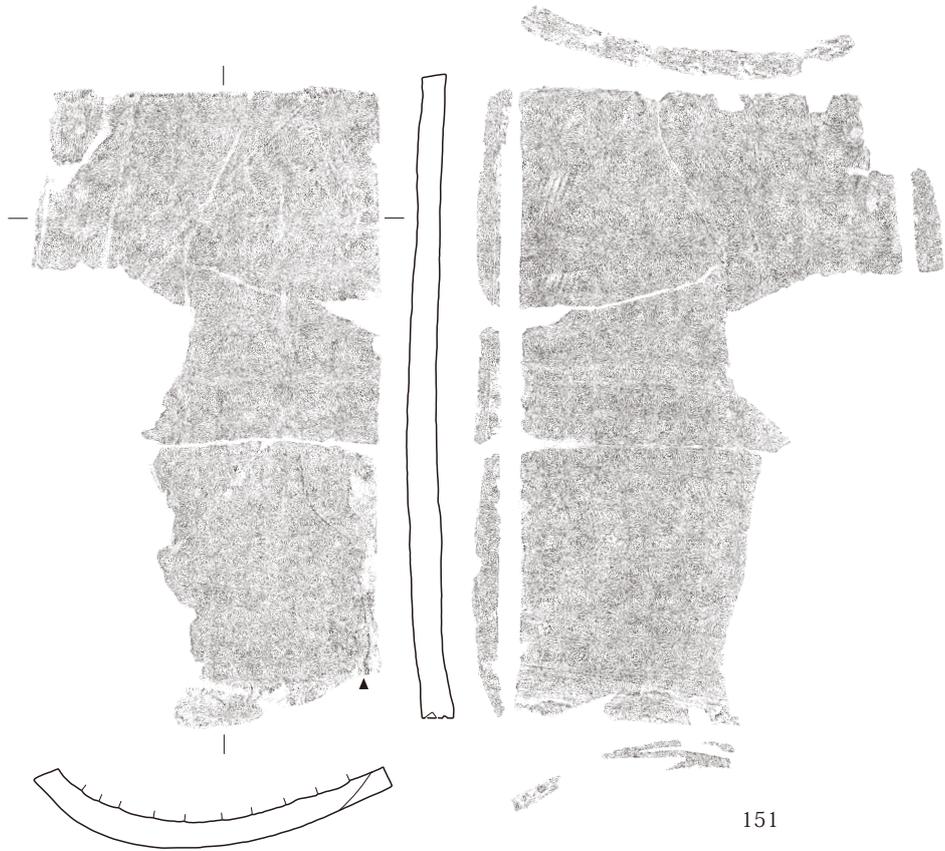
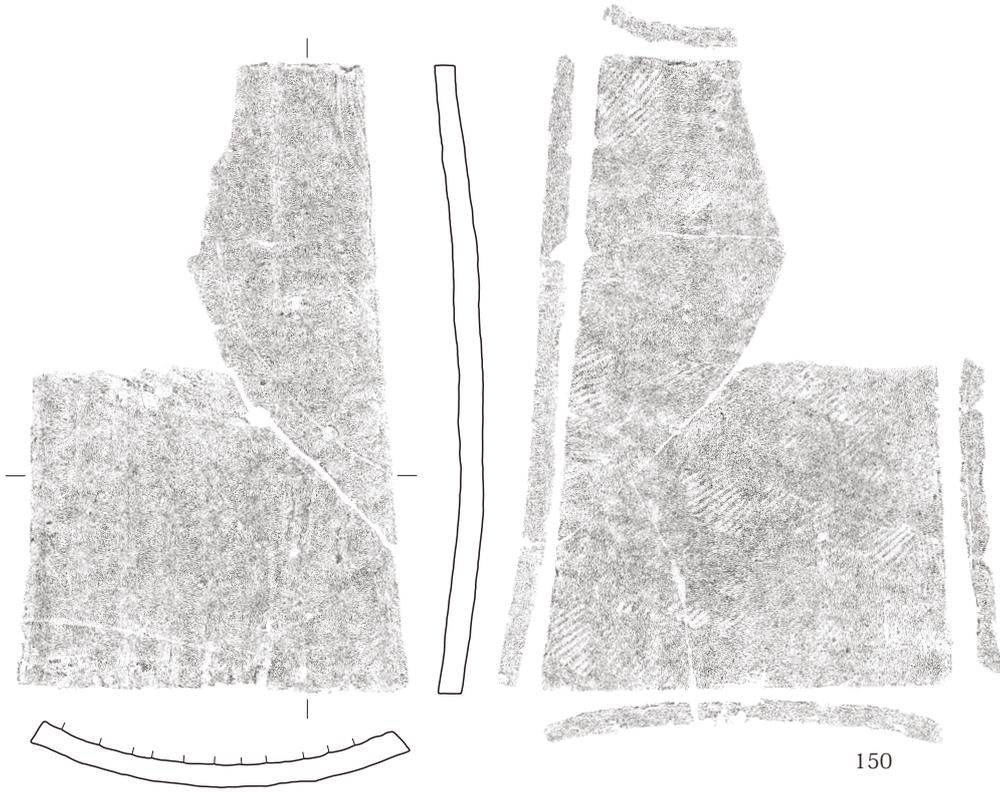


凹面の布目



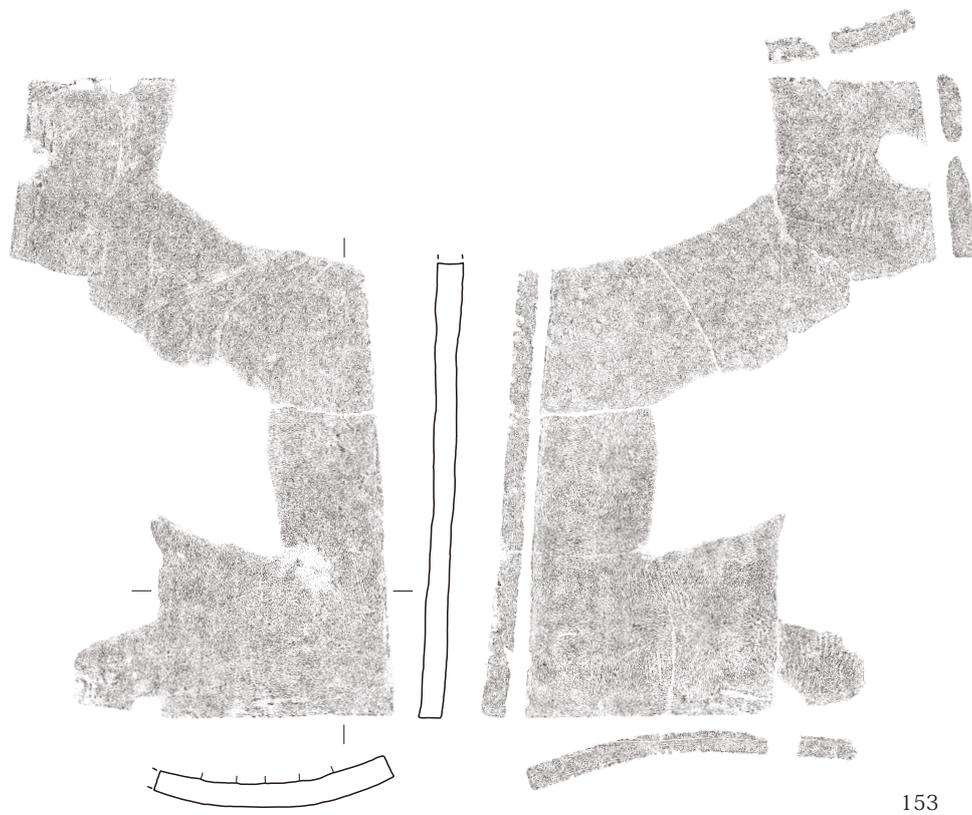
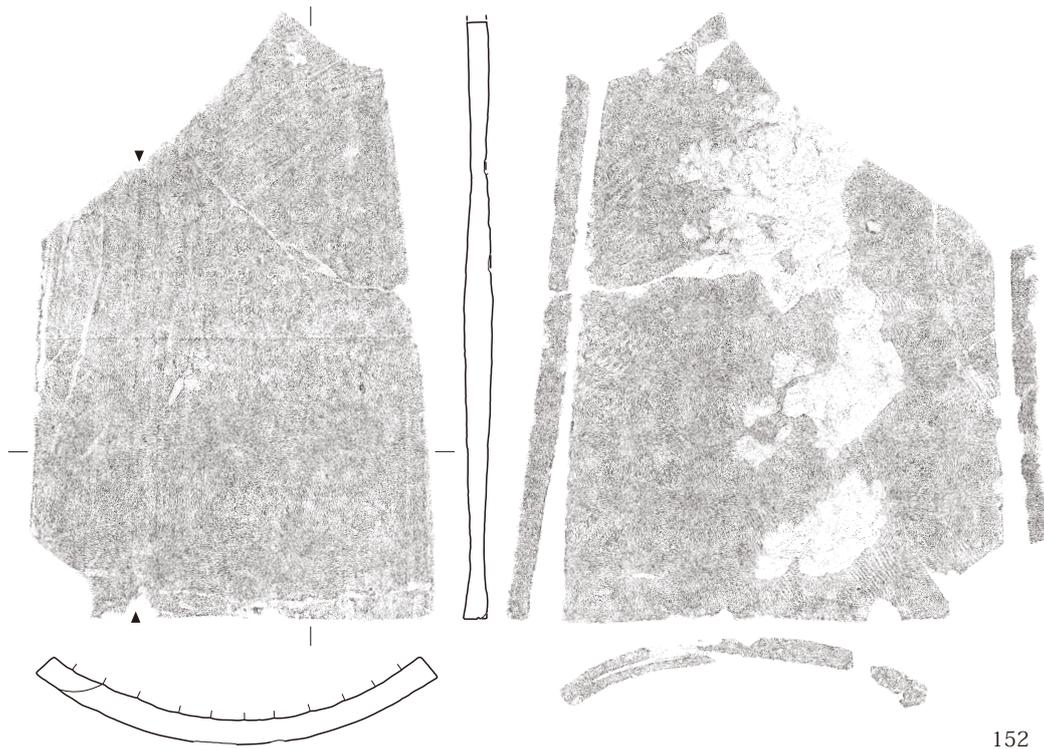
凸面の調整 (ナデ)

第 71 図 平瓦 A1 類・A2 類 細部の写真



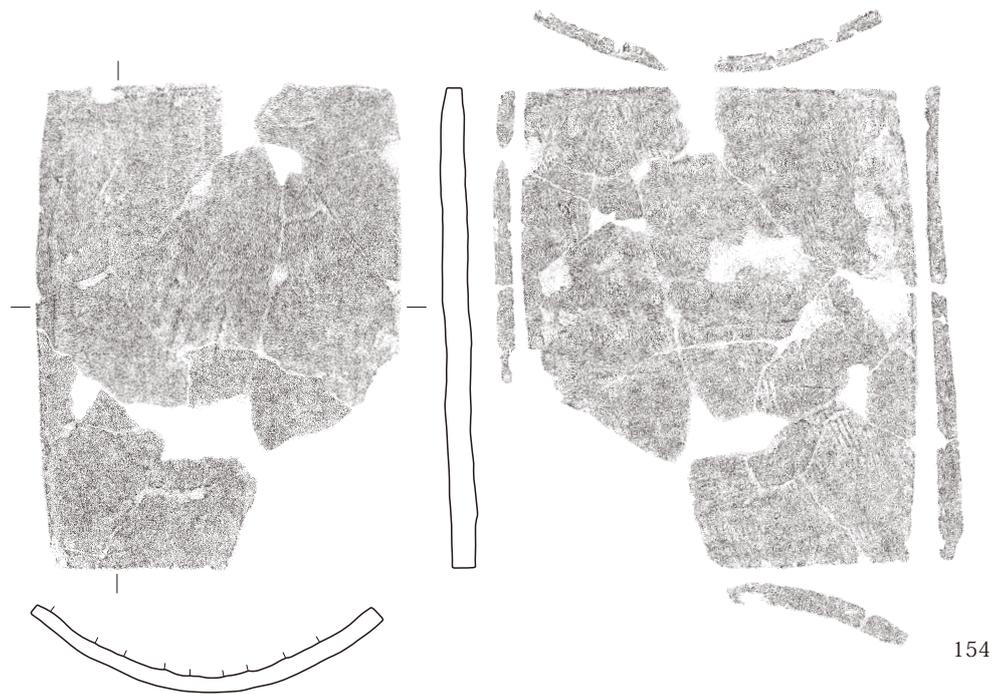
0 10cm  
1:6

第72図 1号建物跡 平瓦A1類(1)

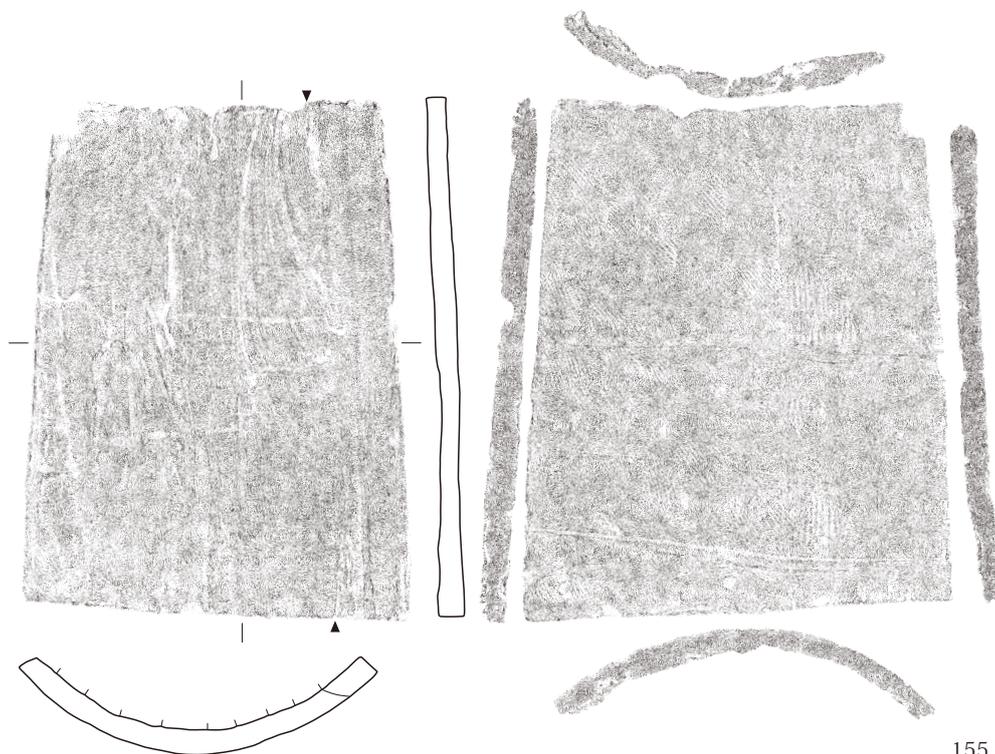


0 10cm  
1:6

第73图 1号建物跡 平瓦A1類(2)



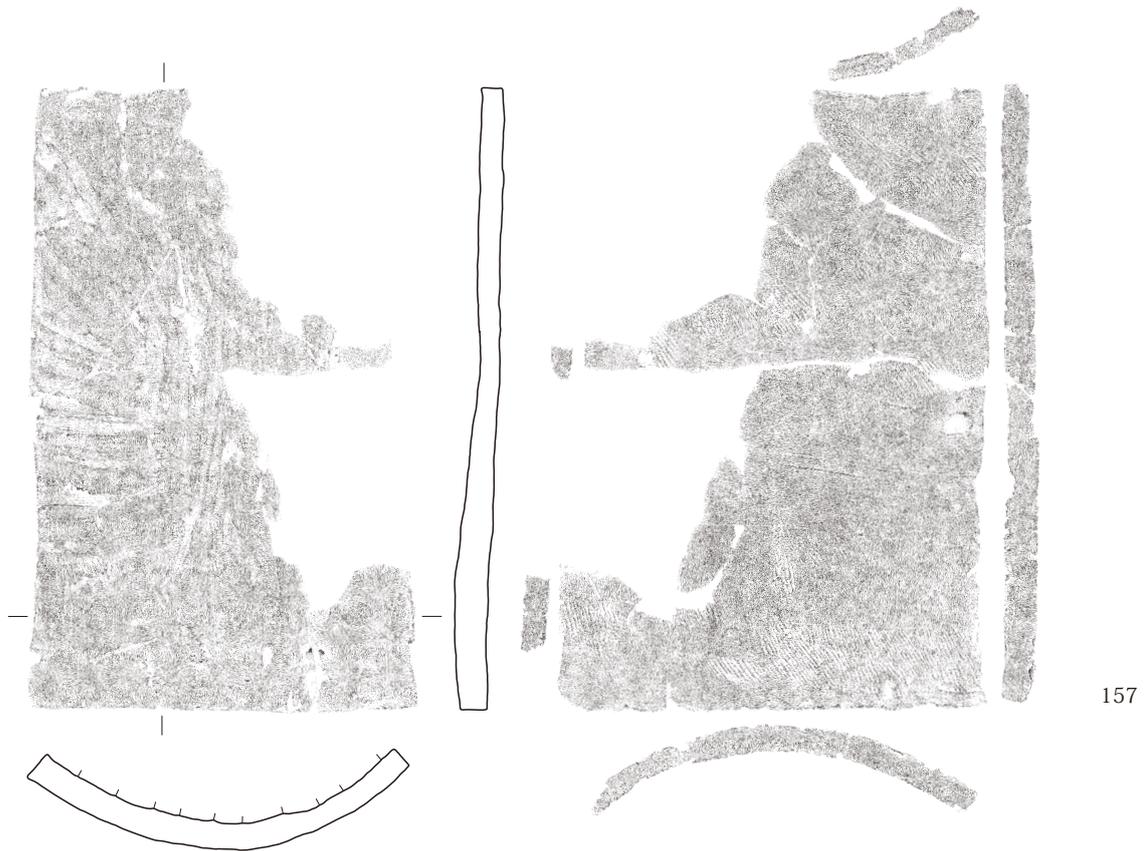
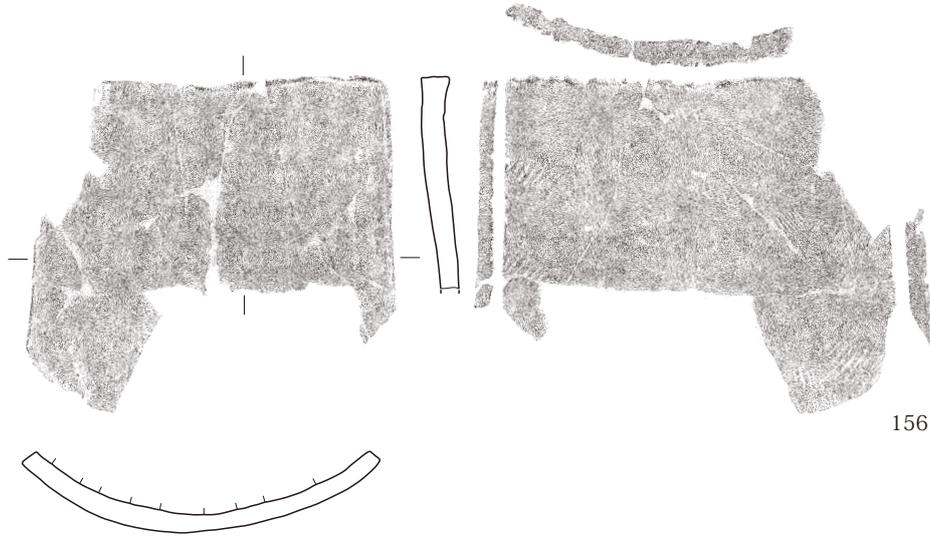
154



155

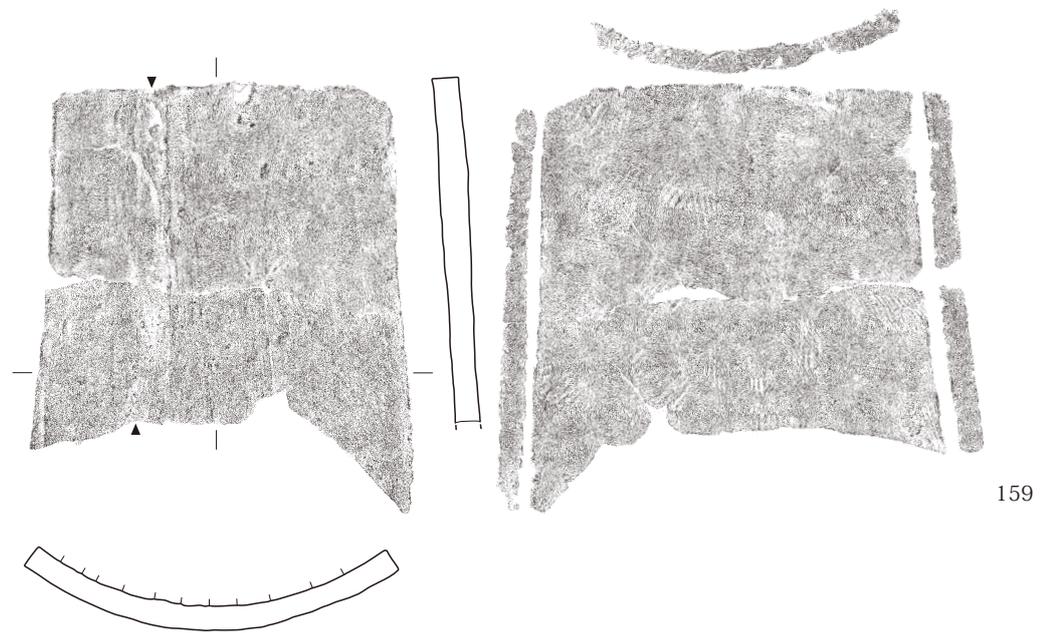
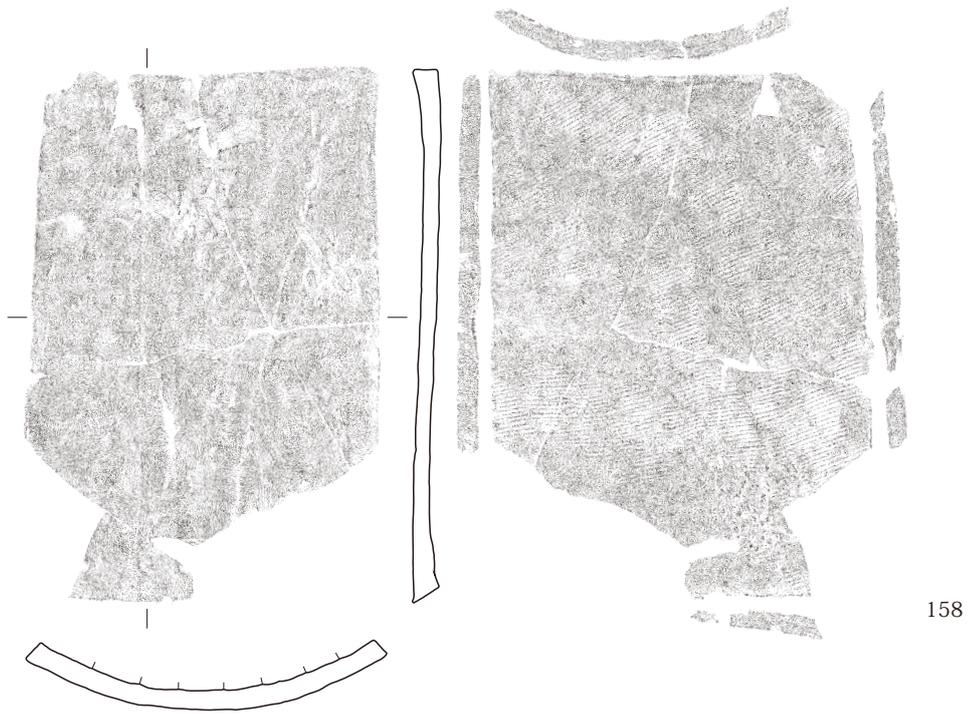
0 10cm  
1:6

第74図 1号建物跡 平瓦A1類(3)



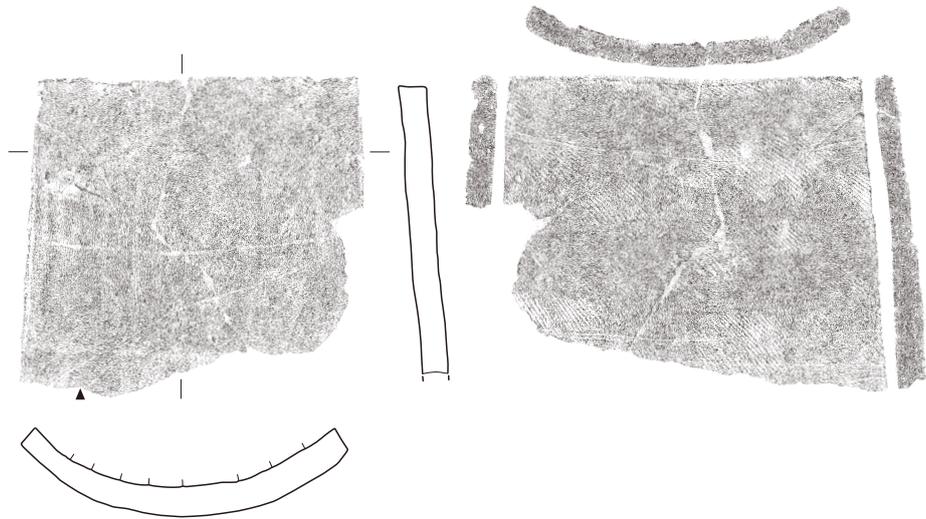
0 10cm  
 ──── 1:6

第 75 図 1 号建物跡 平瓦 A1 類 (4)

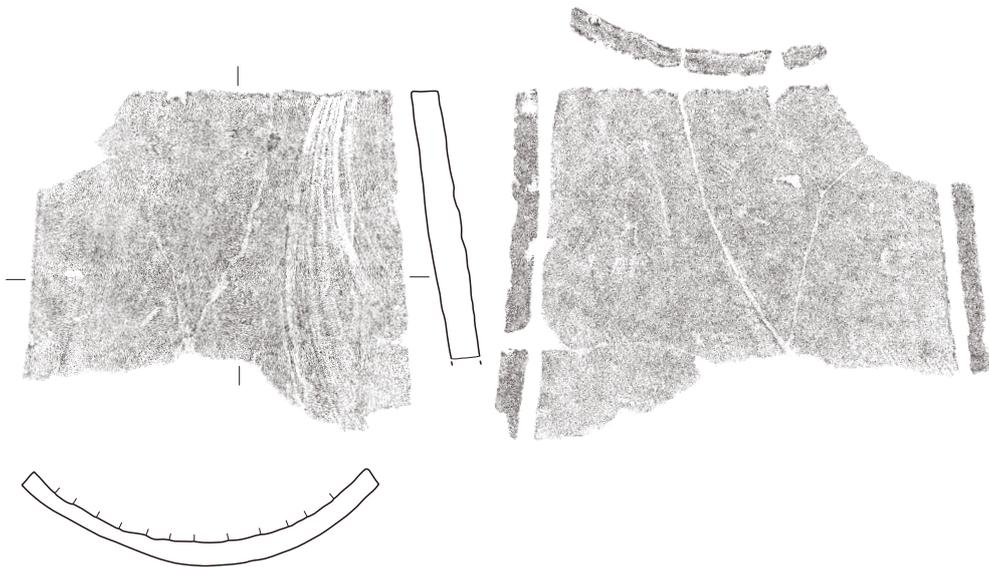


0 10cm  
 ──── 1:6

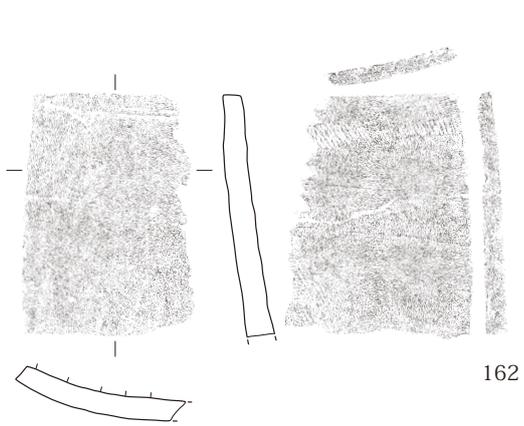
第76図 1号建物跡 平瓦A1類(5)



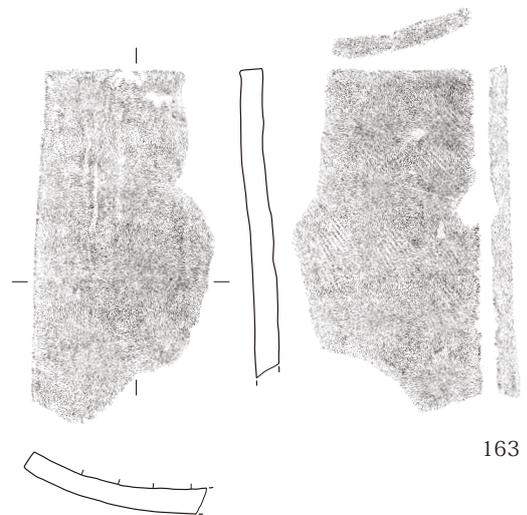
160



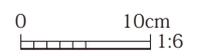
161



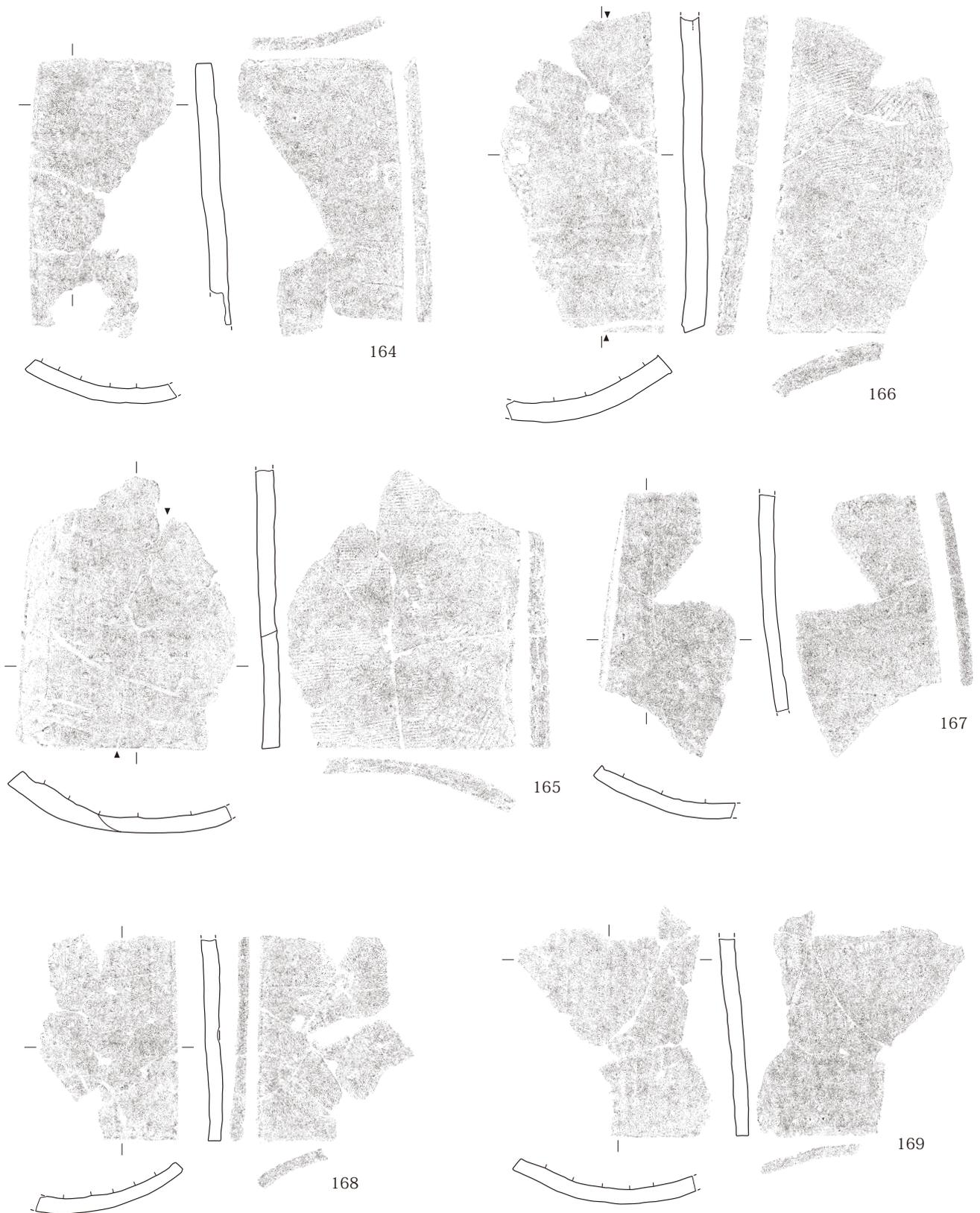
162



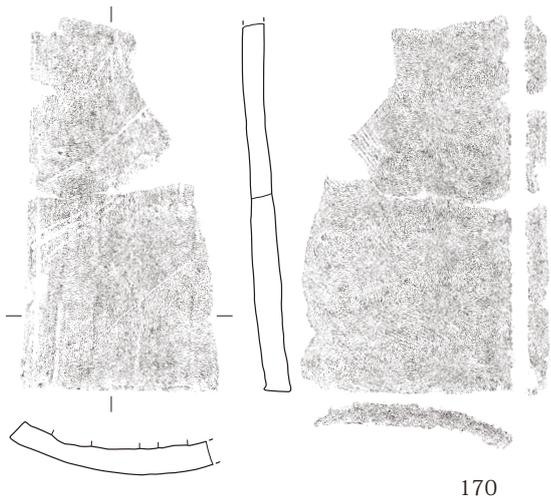
163



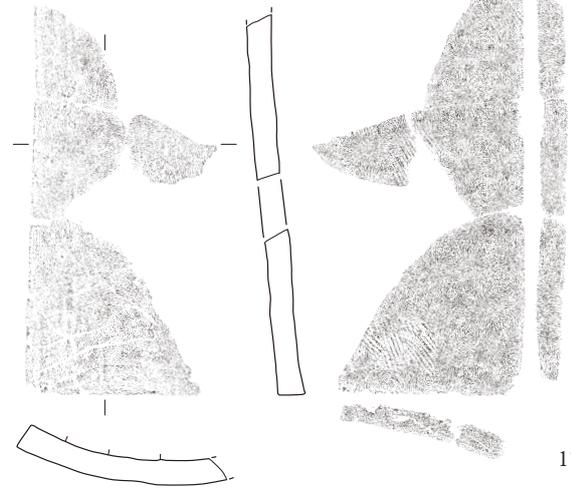
第 77 图 1 号建物跡 平瓦 A1 類 (6)



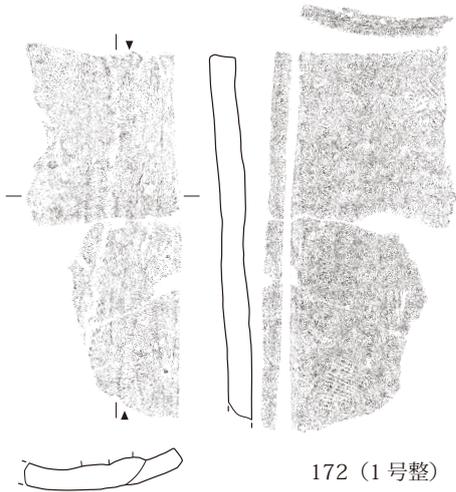
第 78 图 1 号建物跡 平瓦 A1 類 (7)



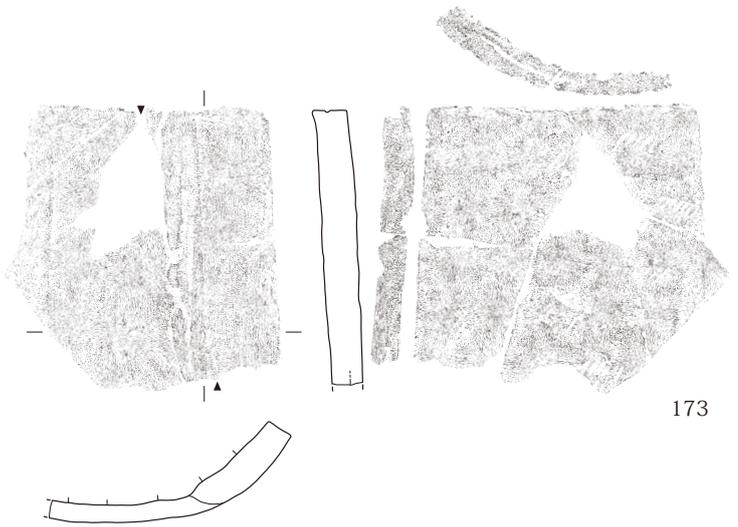
170



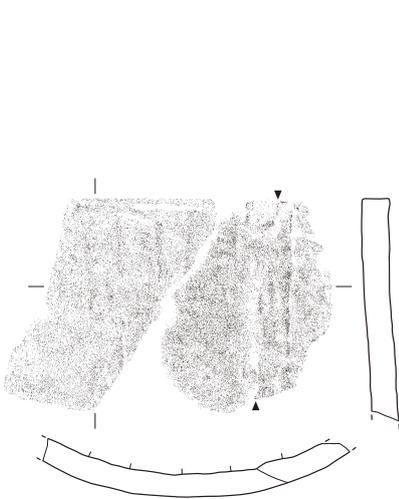
171



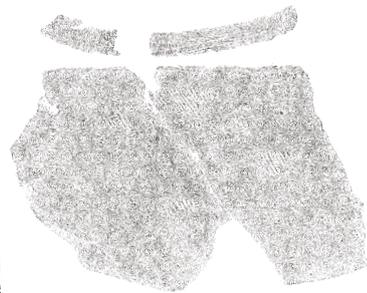
172 (1号整)



173



174



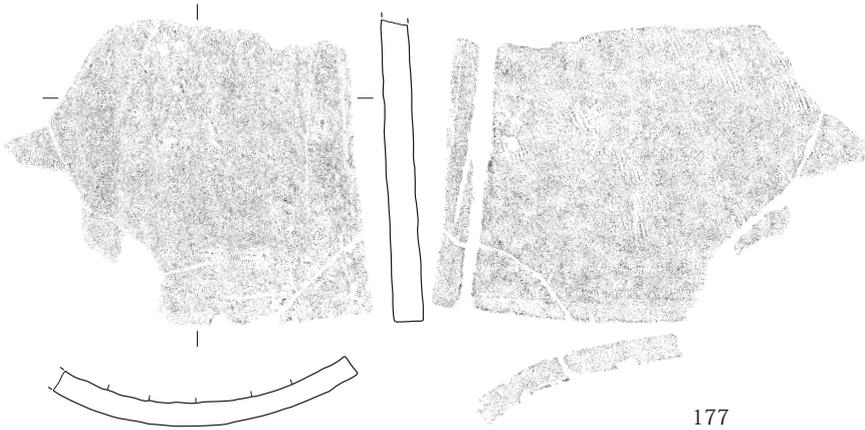
175

0 10cm  
1:6

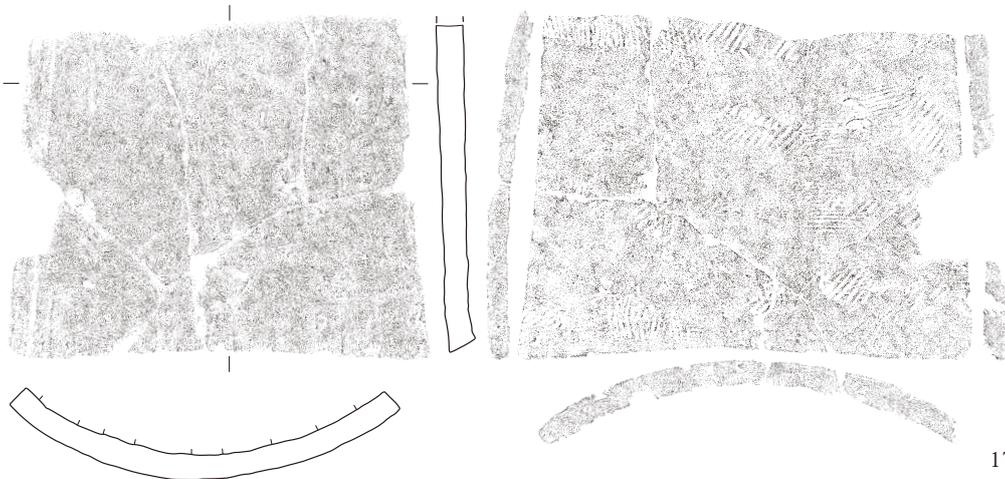
第79图 1号建物跡・1号整地土 平瓦A1類(8)



176



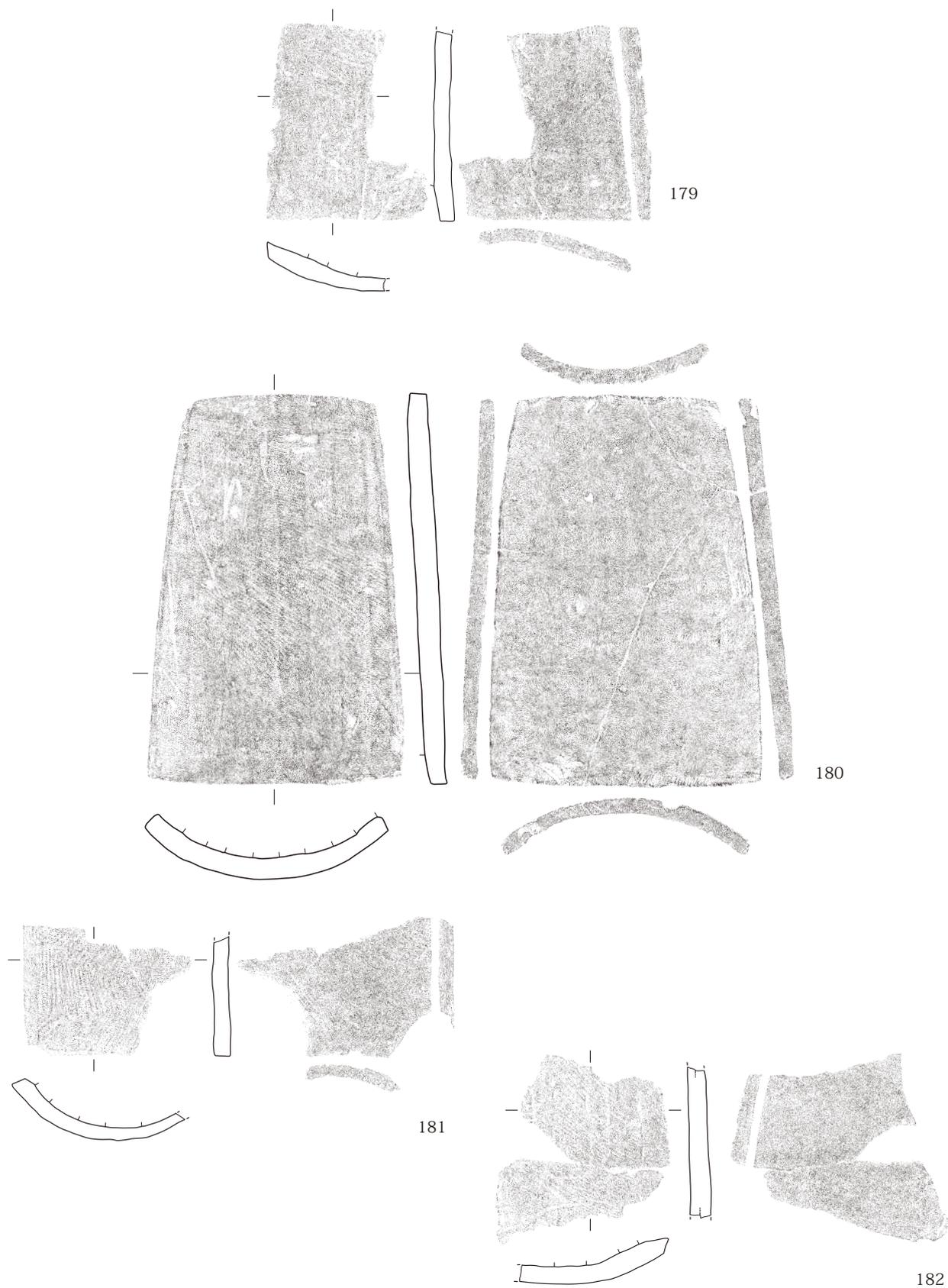
177



178

0 10cm  
1:6

第80图 1号建物跡 平瓦A1類(9)



第 81 図 1 号建物跡 平瓦 A2 類

平瓦B類 (第83～91図 183～206)

一枚作りの平瓦である。牛田廃寺跡全体で 2093 点、161.82kg の出土が認められた。個体数比は全体で 50% である。破片数は平瓦 A1 類より多いが、平瓦 B 類が細かく割れて出土していることに起因する。全長：約 40cm、狭端幅：約 40cm、広端幅：約 23cm、厚さ：約 1.5cm 程度である。

凸面には縦ナデが施され、平滑である。表面にタテナデによる稜が残るものがある。叩き痕が明確に確認できるものは少ない。凸面に黒い粘土状の塊が付着していることが多く、水洗しても取れない。凹面の布目は荒いものも多く、糸切痕は見られない。凹面の側面・狭端部・広端部の調整は見られない。割れ方に特徴があり、細かく板状に割れているものが多い。

また粘土板の合わせ目があるものは見られない。一枚作りの特徴の 1 つである側面に布目が残る個体はなかったが、粘土板切り取り痕がないこと、粘土板の合わせ目がないことから 1 枚作りの平瓦と判断し分類した。

色調は、褐色や灰色を呈するものが多いが、表面がマーブル状のムラがあり均一ではない。胎土には赤褐色の鉱物を含むものが多い。全体的に焼きが甘く、軟質である。

整形や色調が、丸瓦 B 類に類似する。

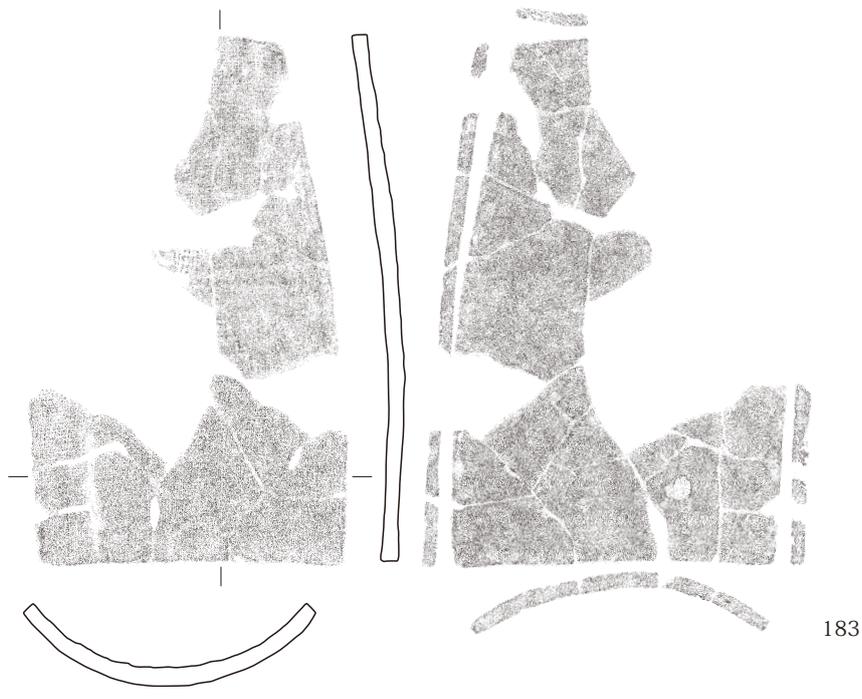


凹面の布目

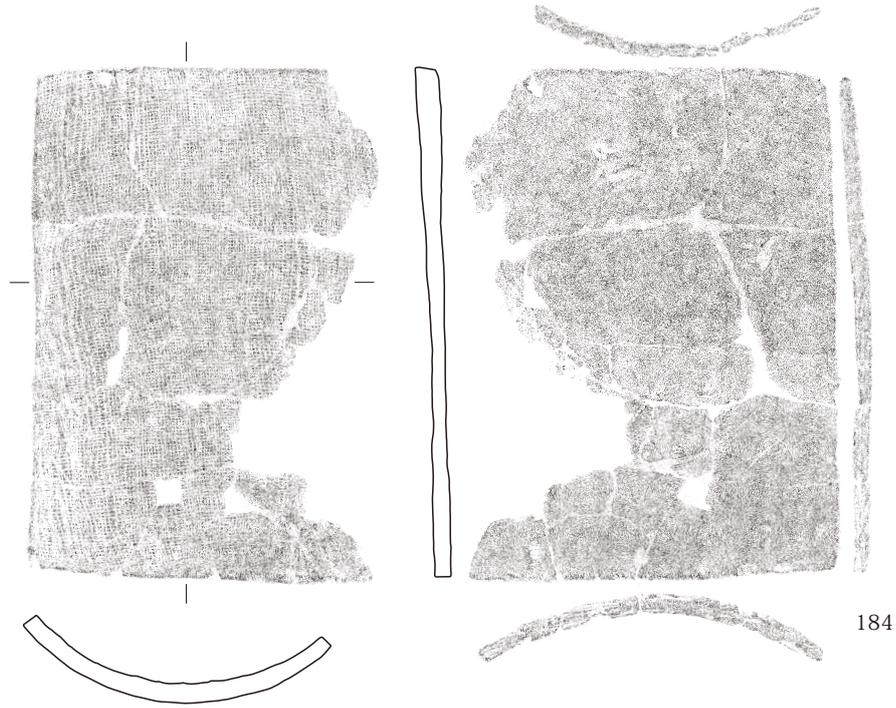


凸面の調整 (ナデ)

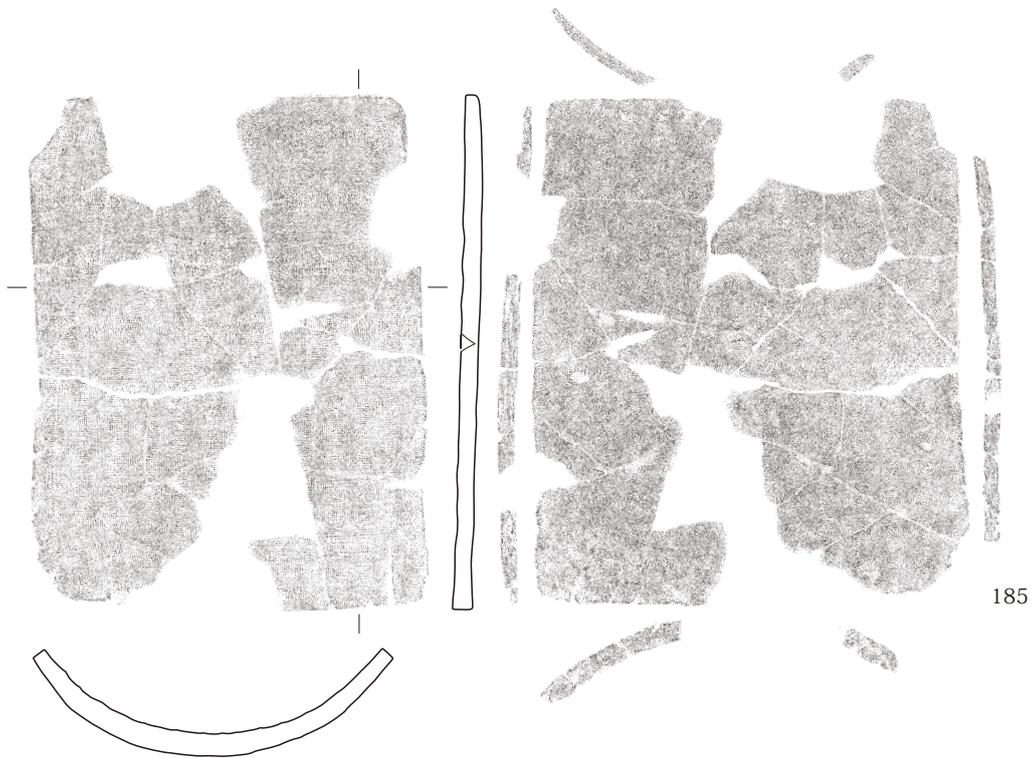
第 82 図 平瓦 B 類 細部の写真



第 83 図 1 号建物跡 平瓦 B 類 (1)



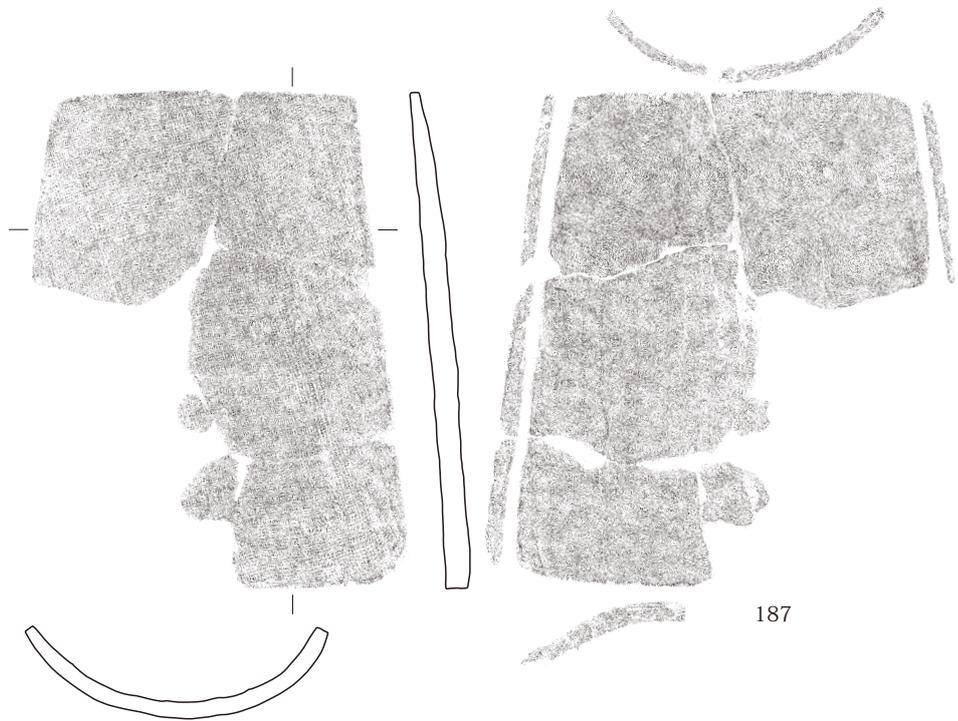
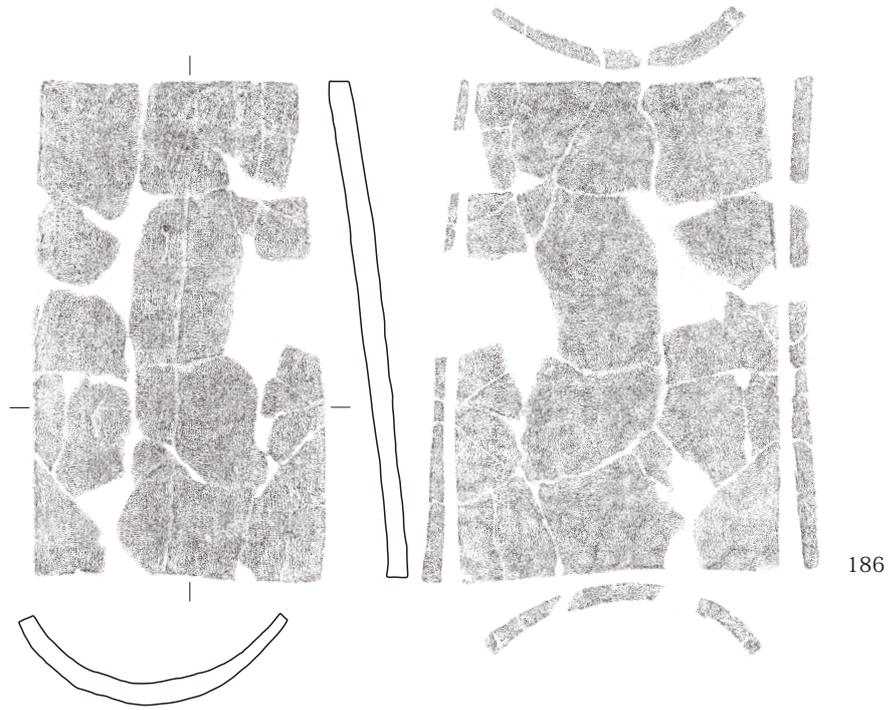
184



185

0 10cm  
1:6

第84図 1号建物跡 平瓦B類(2)

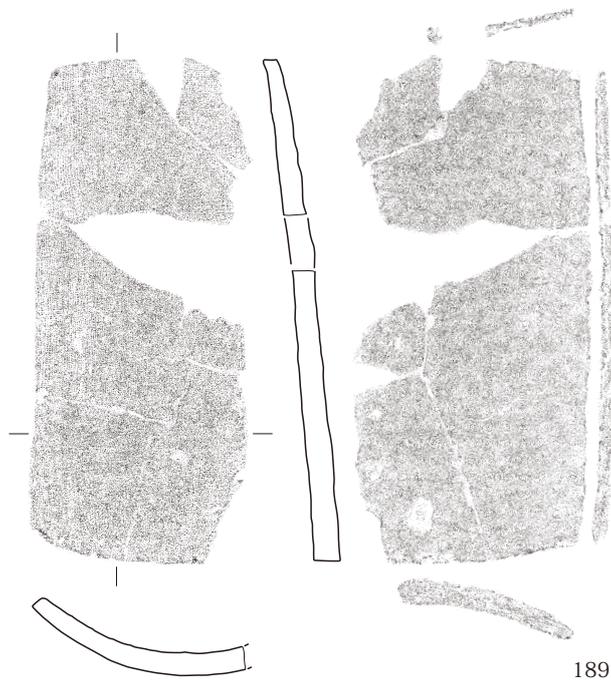


0 10cm  
1:6

第85図 1号建物跡 平瓦B類(3)



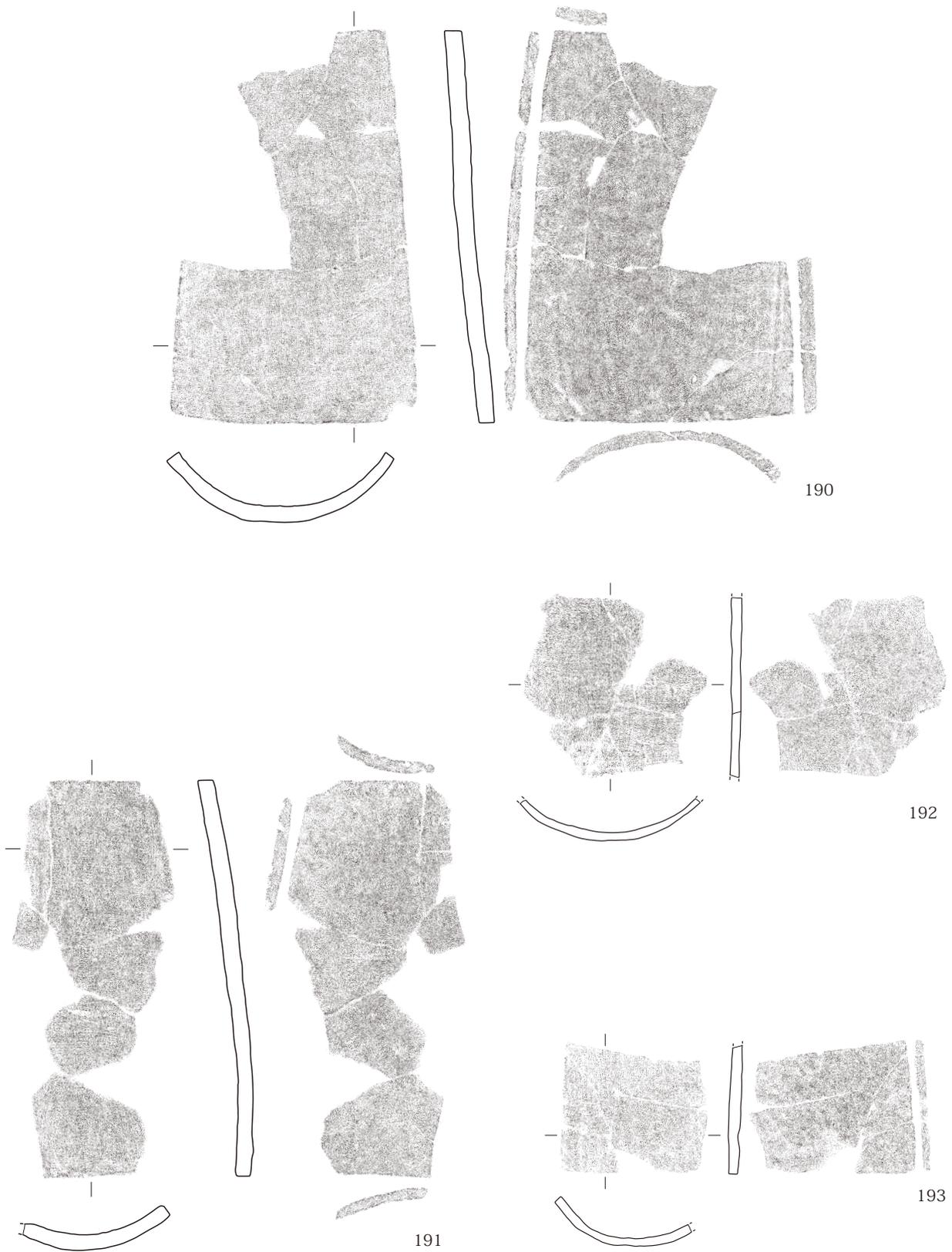
188



189

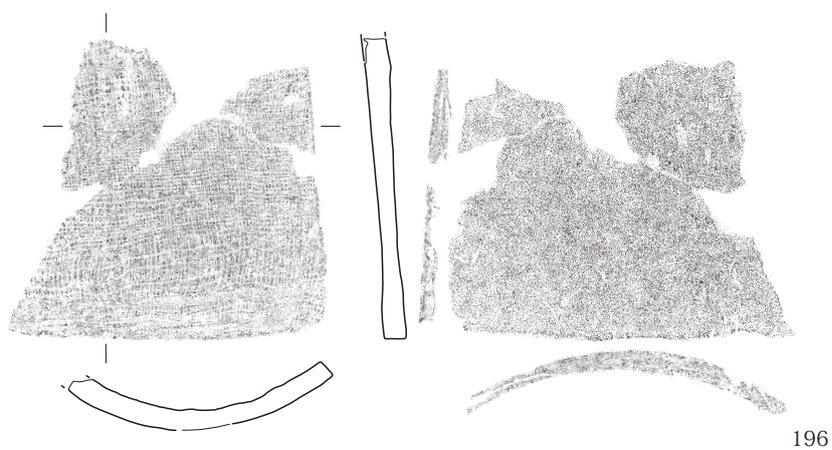
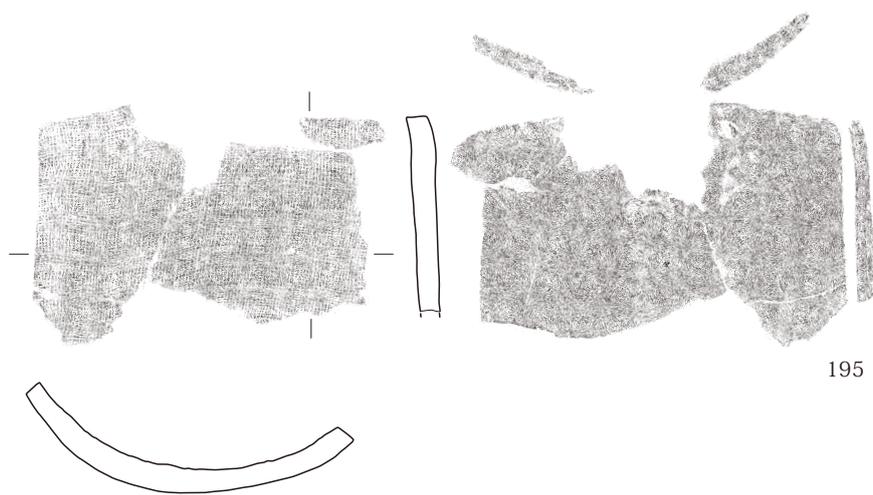
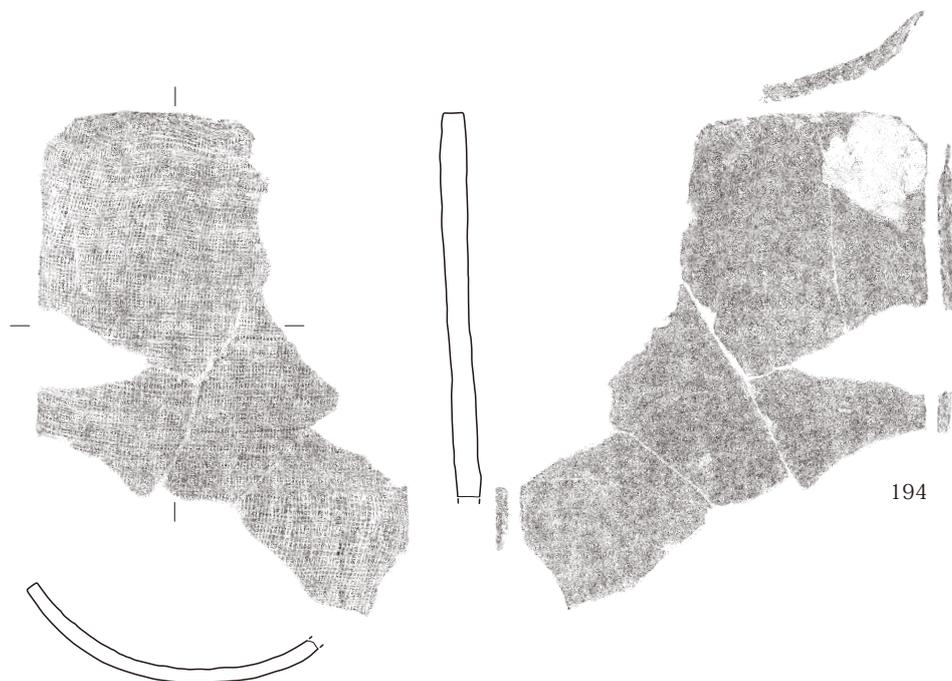
0 10cm  
 ──── 1:6

第86図 1号建物跡 平瓦B類(4)



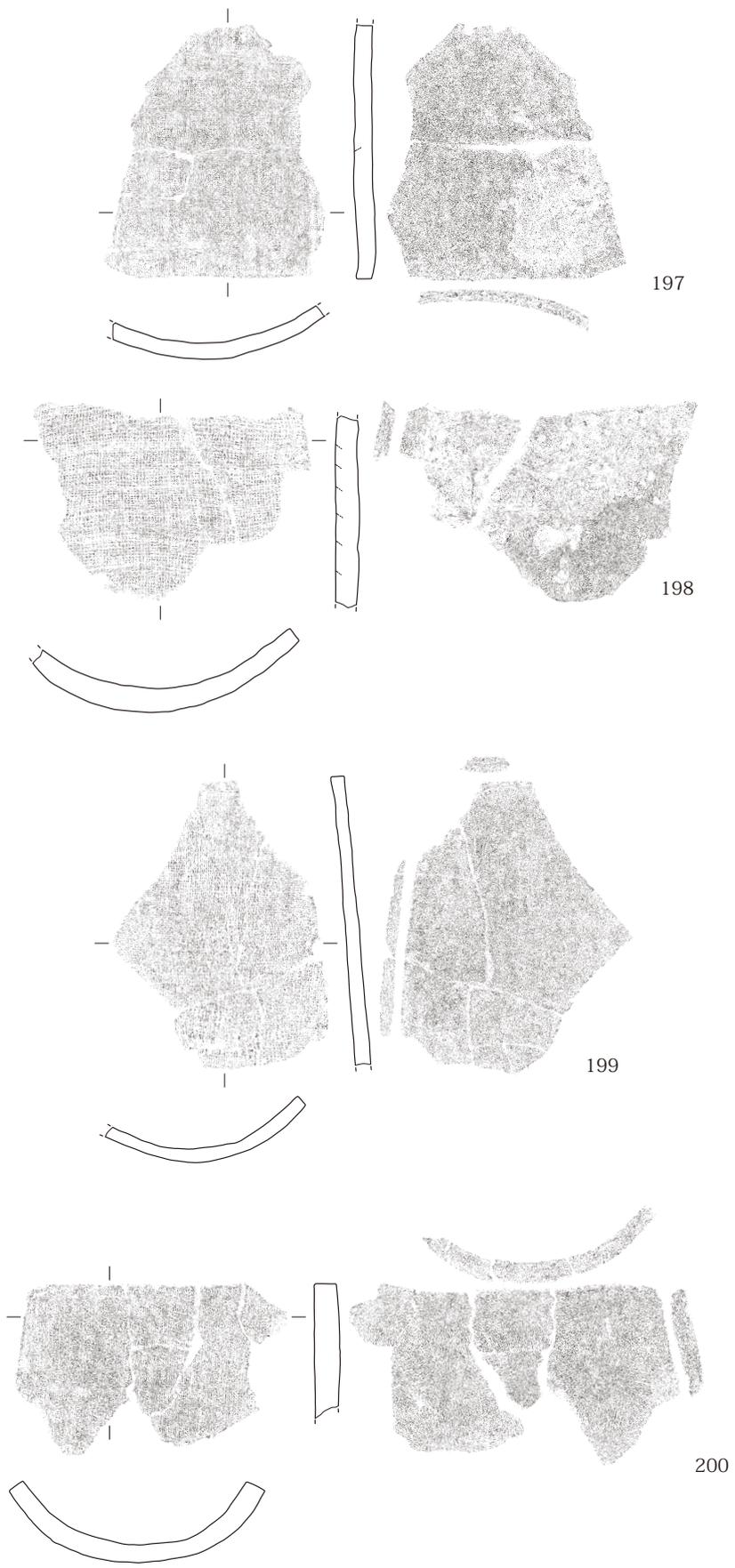
第 87 图 1 号建物跡 平瓦 B 類 (5)

0 10cm  
1:6

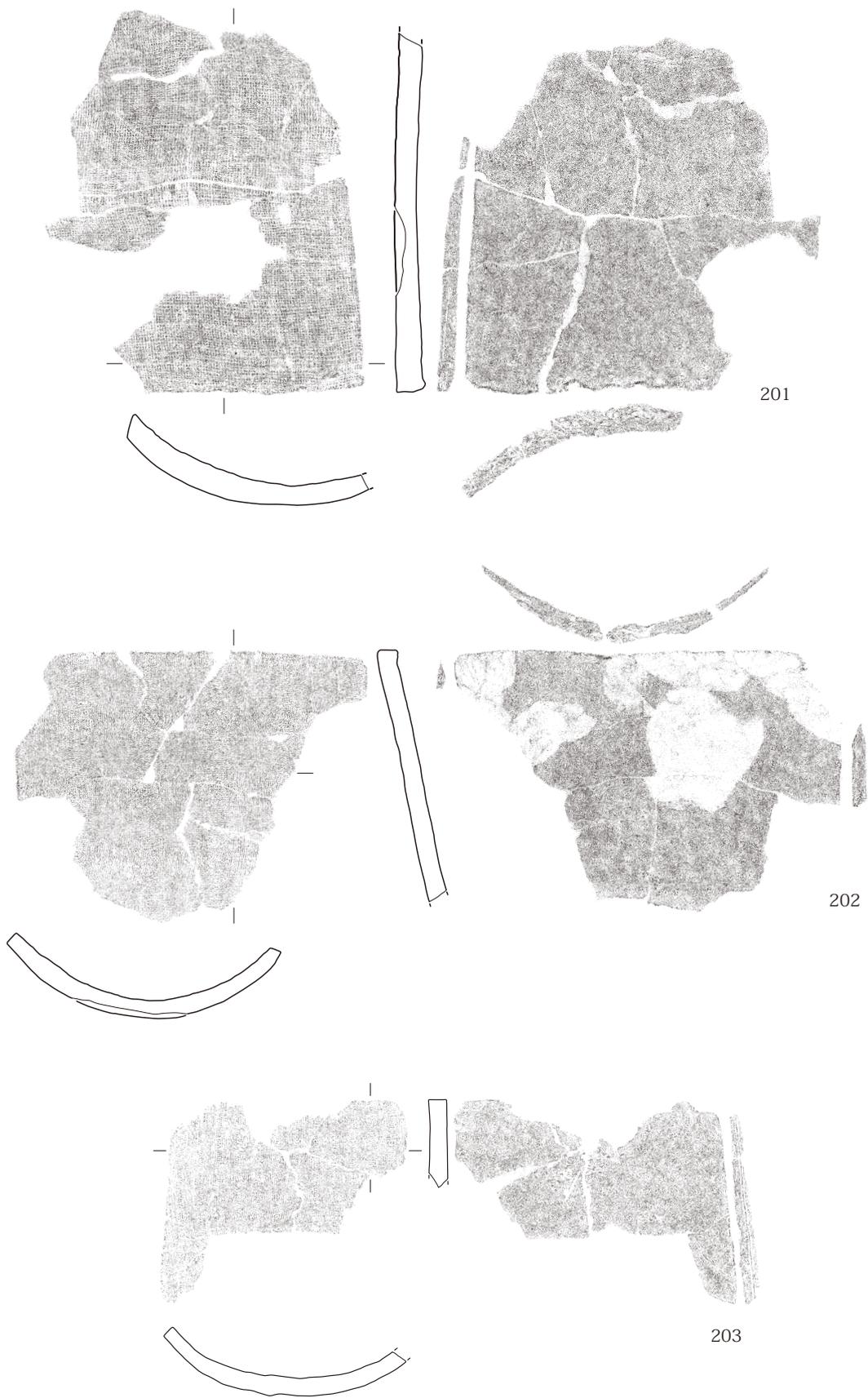


0 10cm  
1:6

第88图 1号建物跡 平瓦B類(6)



第 89 図 1 号建物跡 平瓦 B 類 (7)



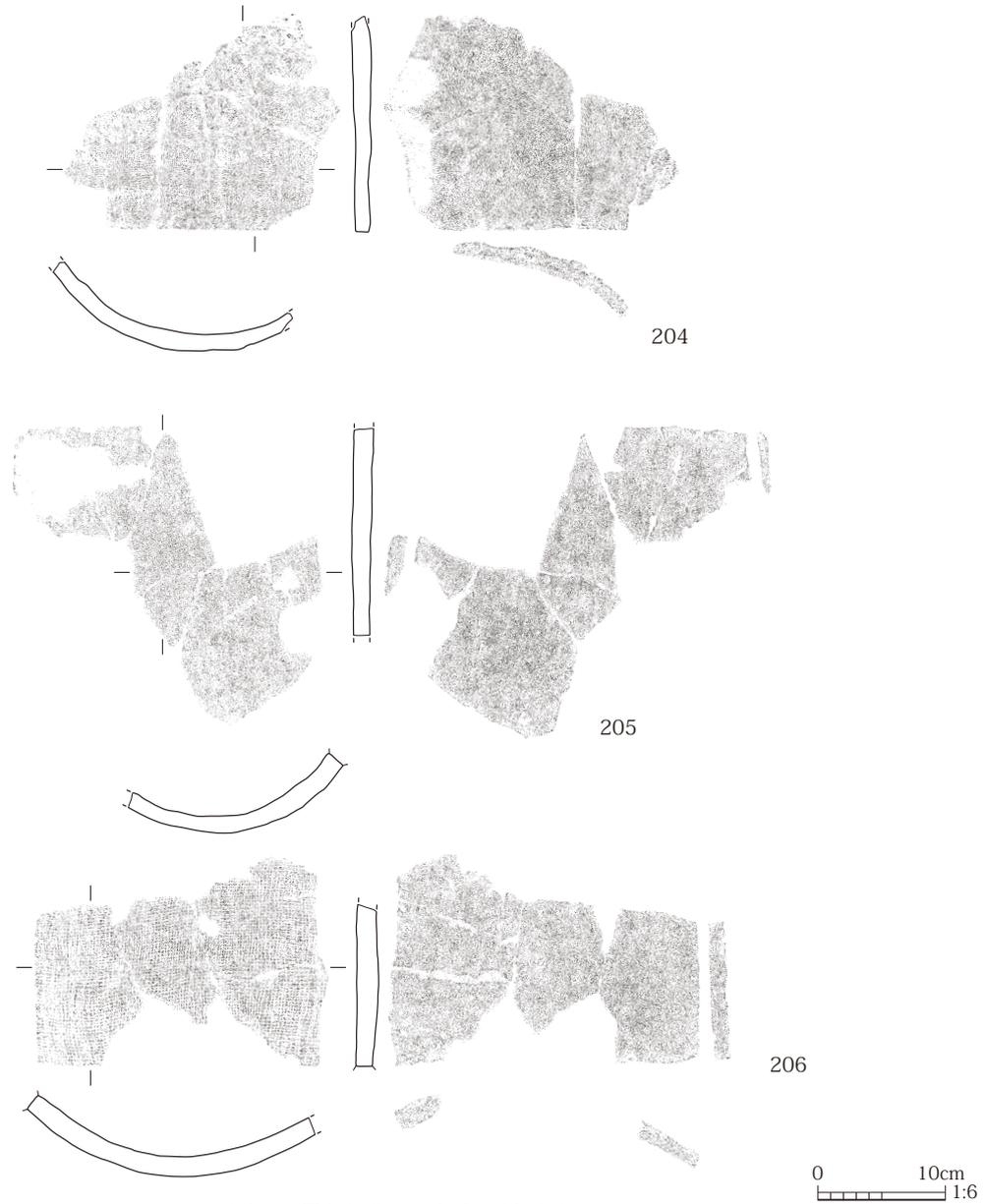
201

202

203

0 10cm  
1:6

第90图 1号建物跡 平瓦B類(8)



第91図 1号建物跡 平瓦B類 (9)

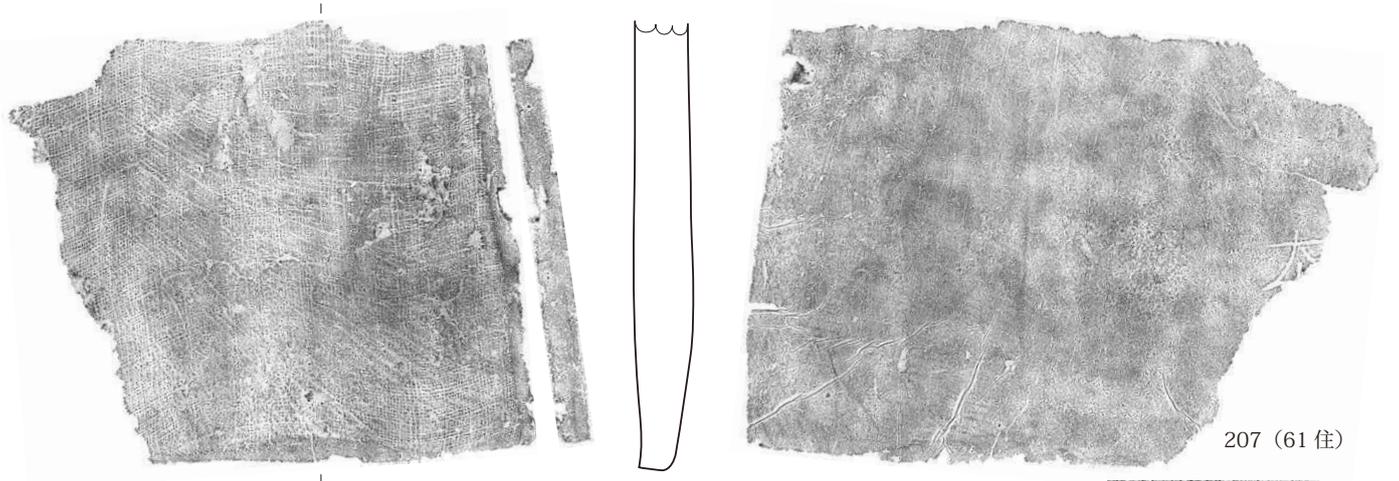
#### 第5項 文字瓦 (第92～93図、第8表)

文字瓦は10点出土している。住居跡から出土したものが3点あり、各住居跡図版でも掲載しているが、ここでもまとめて掲載した。線刻とスタンプのものがある。線刻は、「大」(第64図54)1点。「大十」(第92図207・208)2点。「田」(第92図209)1点。「二」(第45図50(軒丸瓦D類))1点・判別不能(第92・93図210・211・212)3点である。刻印は、**㊦**が1点(第93図214)と、二重罫のみが残存しているもの(第93図213)が出土している。

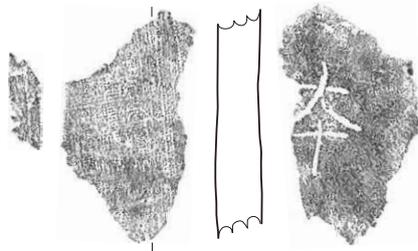
第92図207は1区61号住居跡の、第93図214は3区106号住居跡カマドの構築材として使用されており、意図的に文字瓦を選択している可能性が高い。

文字が施される瓦の種別は、平瓦が多い。さらに、創建瓦には、文字を施すものは少なく、補修瓦に多いという傾向がある。軒先瓦でも同様の傾向が見られる。

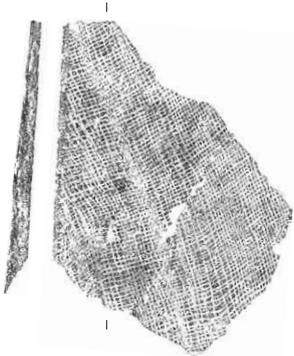
文字が判別できたものは、全て上野国分寺とその周辺の遺跡で類例が存在する。軒丸瓦・軒平瓦だけでなく文字瓦にも、上野国分寺との強い関係性が窺える。特に**㊦**は上野国分寺とその周辺で一定数見つかっており、上野国分寺・上野国分尼寺・国分寺中間地域・元総社蒼海地区遺跡群などで類例が存在する。



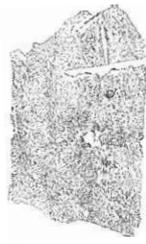
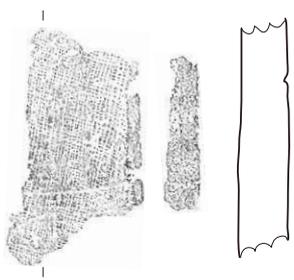
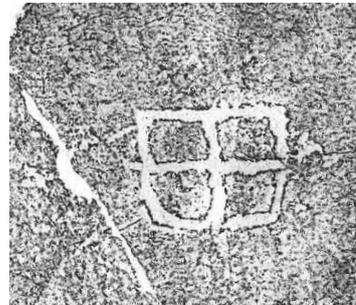
207 (61住)



208 (1号建)



209 (1号建)



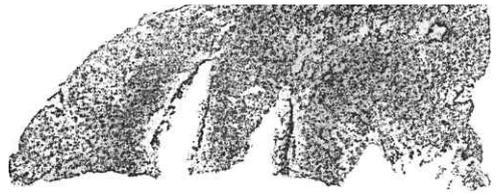
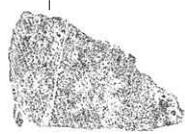
210 (61住)



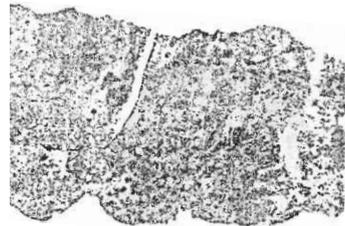
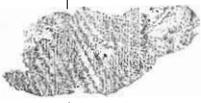
(文字部分実寸) 0 2cm 1:1

0 10cm 1:4

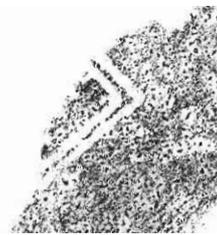
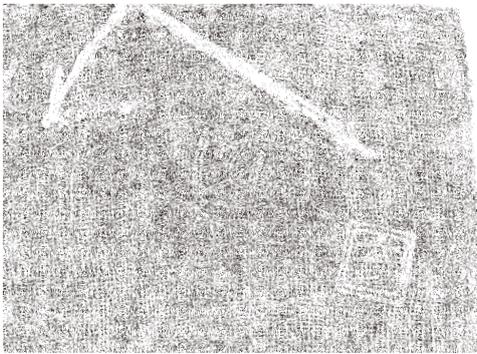
第92図 文字瓦 (1)



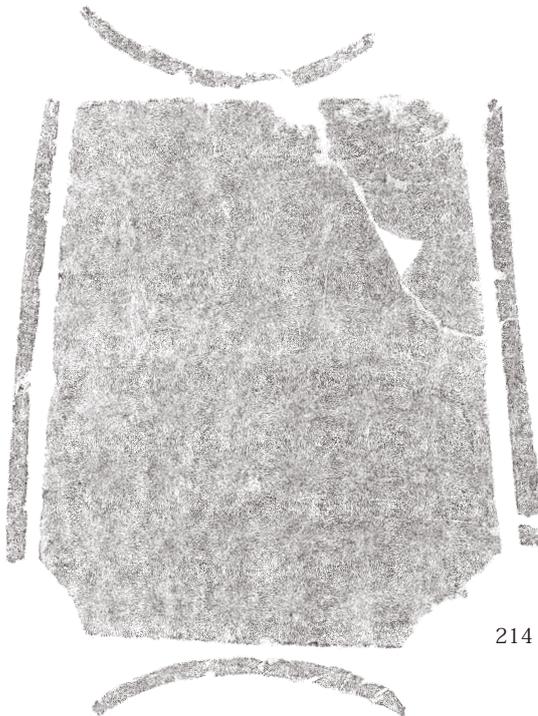
211 (トレ13)



212 (トレ13)



213 (1区一括)



214 (106住)



0 2cm  
(文字部分実寸) 1:1

0 10cm  
1:4

第93図 文字瓦(2)

第8表 出土文字瓦一覧表

No.	内容	種別・記載位置	出土場所	文字タイプ・備考	備考
50	「二」	軒丸瓦 D 類・凸面	1 区 1 号建物跡	ヘラ書き	第 45 図
54	「大」か	軒丸瓦 D 類・凸面	1 区 1 号建物跡	ヘラ書き	第 46 図
207	「大十」	平瓦 A2 類カ・凸面	1 区 61 号住居跡	ヘラ書き	第 92 図
208	「大十」	平瓦 A2 類カ・凸面	1 区 1 号建物跡	ヘラ書き	第 92 図
209	「田」	軒平瓦 B2 類カ・凸面	1 区 1 号建物跡	ヘラ書き	第 92 図
210	不明	軒丸瓦 D 類・凸面	1 区 61 号住居跡	ヘラ書き	第 92 図
211	「三」か	平瓦 A 類・凹面	1 区トレンチ 13 一括	ヘラ書き	第 93 図
212	不明	平瓦 A 類・凸面	1 区トレンチ 13	ヘラ書き	第 93 図
213	𠄎か	平瓦 A2 類・凹面	1 区一括	刻印	第 93 図
214	𠄎	平瓦 B 類・凹面	3 区 106 号住居跡	刻印	第 93 図

## 第6項 道具瓦

### 隅切瓦（第94図）

2点検出されている。215は焼成前に平瓦A1類と同様の特徴を持つ平瓦端部を斜めに切り落とし、製作している。1点だけの出土であるが、端部以外の特徴は平瓦A1類と同じであるため、破片では判別できない。そのため、平瓦A1類とした中にも隅切瓦が含まれている可能性が高い。

216は平瓦B類の破片を焼成後に打ち割って、先端を鋭角な形状に整形した隅切瓦である。216は割れ口に敲打痕が認められたため同定できたが、明確でない場合、割れが意図的なのかたまたまなのか判断することは難しい。216と同様に他の瓦と同定した中に、意図的に打ち割った瓦が含まれている可能性は否定できない。

### 熨斗瓦（第95図）

3点出土した。全て1号建物跡からの出土である。平瓦B類を転用し、製作された道具瓦である。全長：19～20cm、幅：9～10cm、厚さ：1～1.5cmの長方形を呈する。凹面には布目が残り、粘土板糸切り痕は見られない。凸面はナデ調整され、叩き痕は見られない。色調は灰色を呈し、焼成が甘く、側面割れ面を焼成後に平坦になるように調整している。

調整・色調・胎土が、平瓦B類と共通しており、平瓦B類を転用し製作している。小片では平瓦B類との判別は難しいため、平瓦B類と分類した中に熨斗瓦が含まれている可能性が高い。

## 第7項 鉄製品

### 鉄製品（第96・97図）

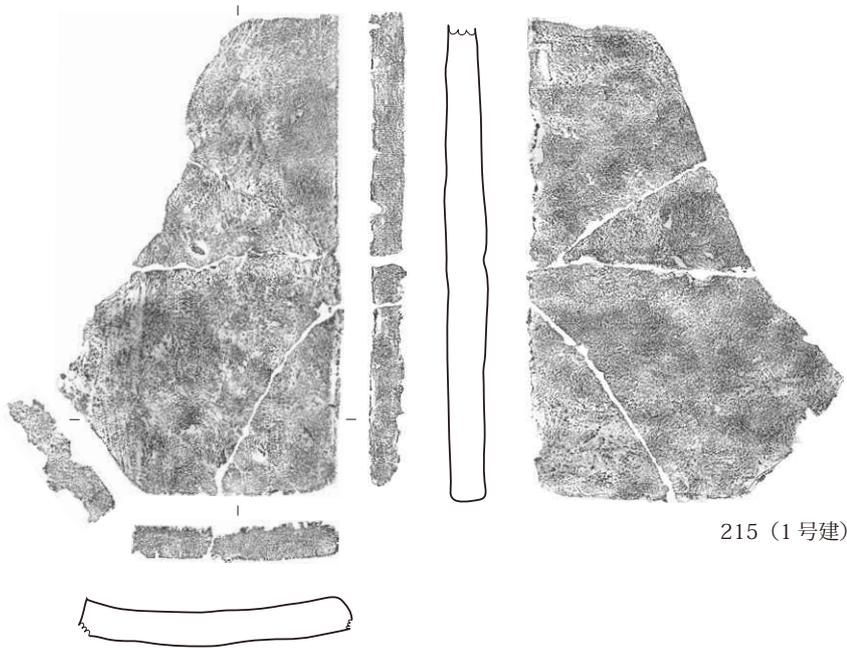
牛田廃寺跡からは、鉄釘が31点出土している。1号建物跡周囲の瓦集積範囲内で多数見つかると、特に北側で数多く検出された。大きさにばらつきがあり、3つに分類できる。最も小さいものは長さ5cm程度で釘頭はL字に曲がり（222）、他のものと比べ細く、出土は1点だけである。次は223～228・232といった12～14cmほどの釘で頭は平坦で潰れており、228・232は釘先が曲がっている。最も大きいものは229の19cmで、20cm近い大形の釘で1点だけ出土した。破片のものも多いが、太さなど勘案すると12～14cm程度の釘が、最も出土点数が多いと言える。牛田廃寺跡の周辺に展開する川除屋敷裏遺跡では、覆土から鉄釘が出土する住居跡が一定数あり、牛田廃寺跡から持ち運ばれた可能性が高い。

鉄製品では鉄釘が最も多く出土したが、その他に鉄鏃2点、刀子1点、鏃と思われるもの1点、馬具（引手）1点、環状（256）及び板状（259～261）の種別不明の鉄製品が検出されている。特に馬具（引手）が出土したことは、牛田古墳群周溝で検出された牛馬骨との関連を考える上で興味深い。

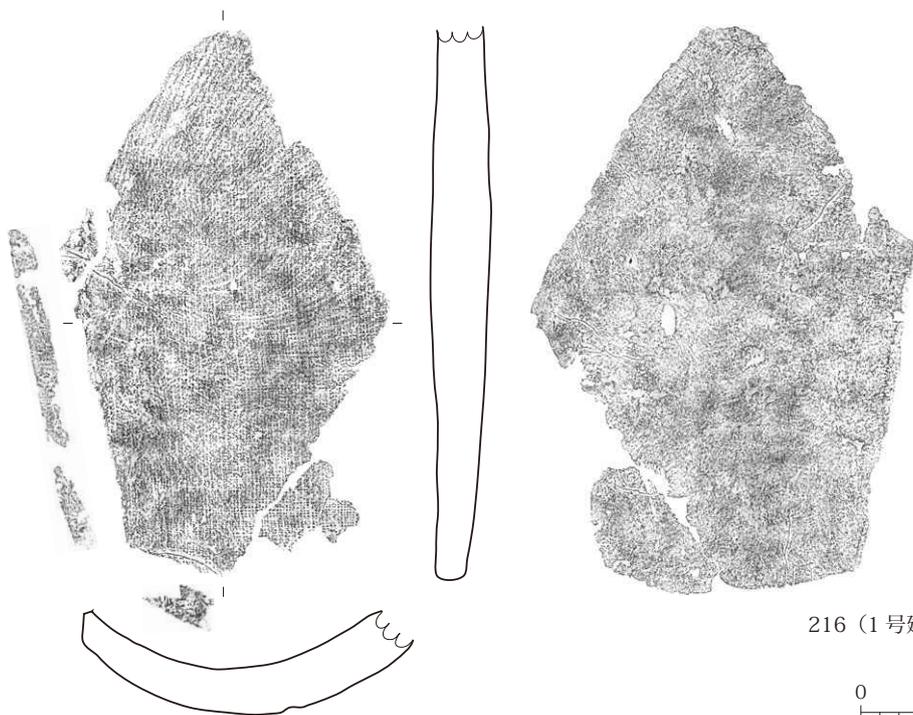
土器類

牛田廃寺跡 1号建物跡からは少数だが、土器も検出されている。6世紀から9世紀にかけての須恵器・土師器が主であり、ほとんどが小片である。第98図は、1号建物跡の瓦集積に混じって出土しており、周辺から混入した遺物であろう。灯明皿など仏教系遺物の出土はない。

第98図 263の土師器小形鉢は底部が欠損した状態で1号建物跡南面から1m程の箇所から検出された。南北セクション部分の断ち割りをを行った際、Ⅷ層中から正位で出土した。掘り込みや遺構プランは確認できず、また他の遺物は出土していない。遺構に伴うものか不明である。鉄鉢形土器の形態にやや近い。



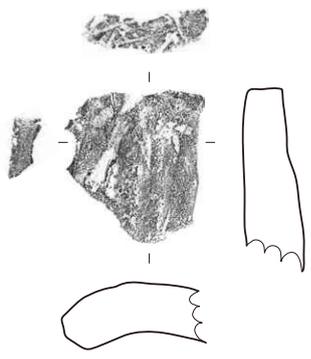
215 (1号建)



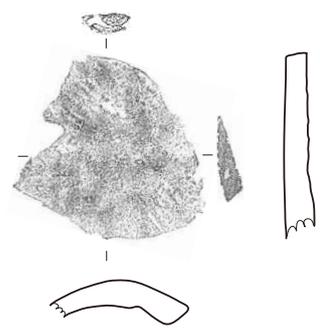
216 (1号建)



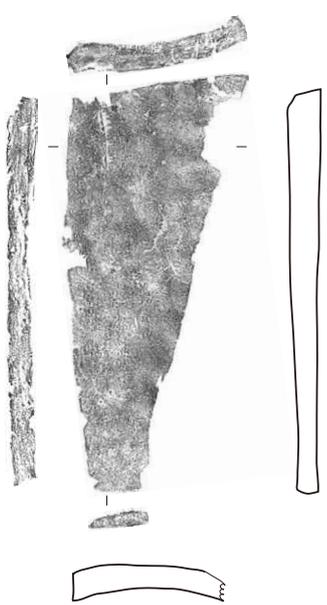
第94図 1号建物跡 道具瓦(隅切瓦)(1)



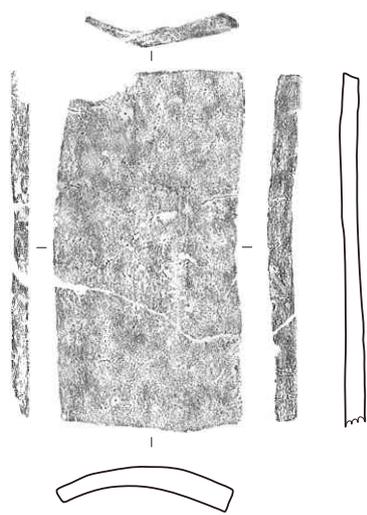
217 (1区一括)



218 (1区一括)



219 (1号建)



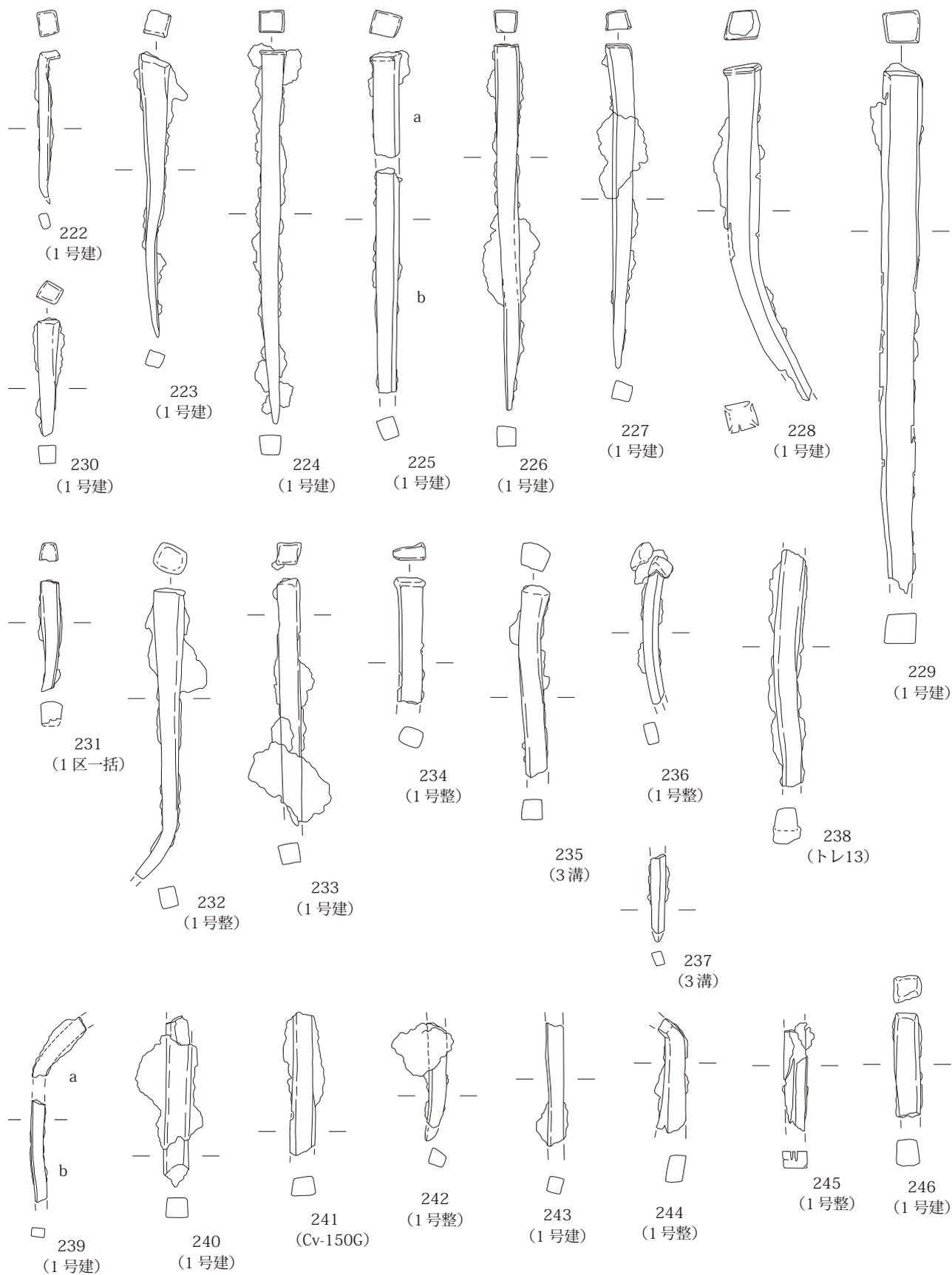
220 (1号建)



221 (1号整)

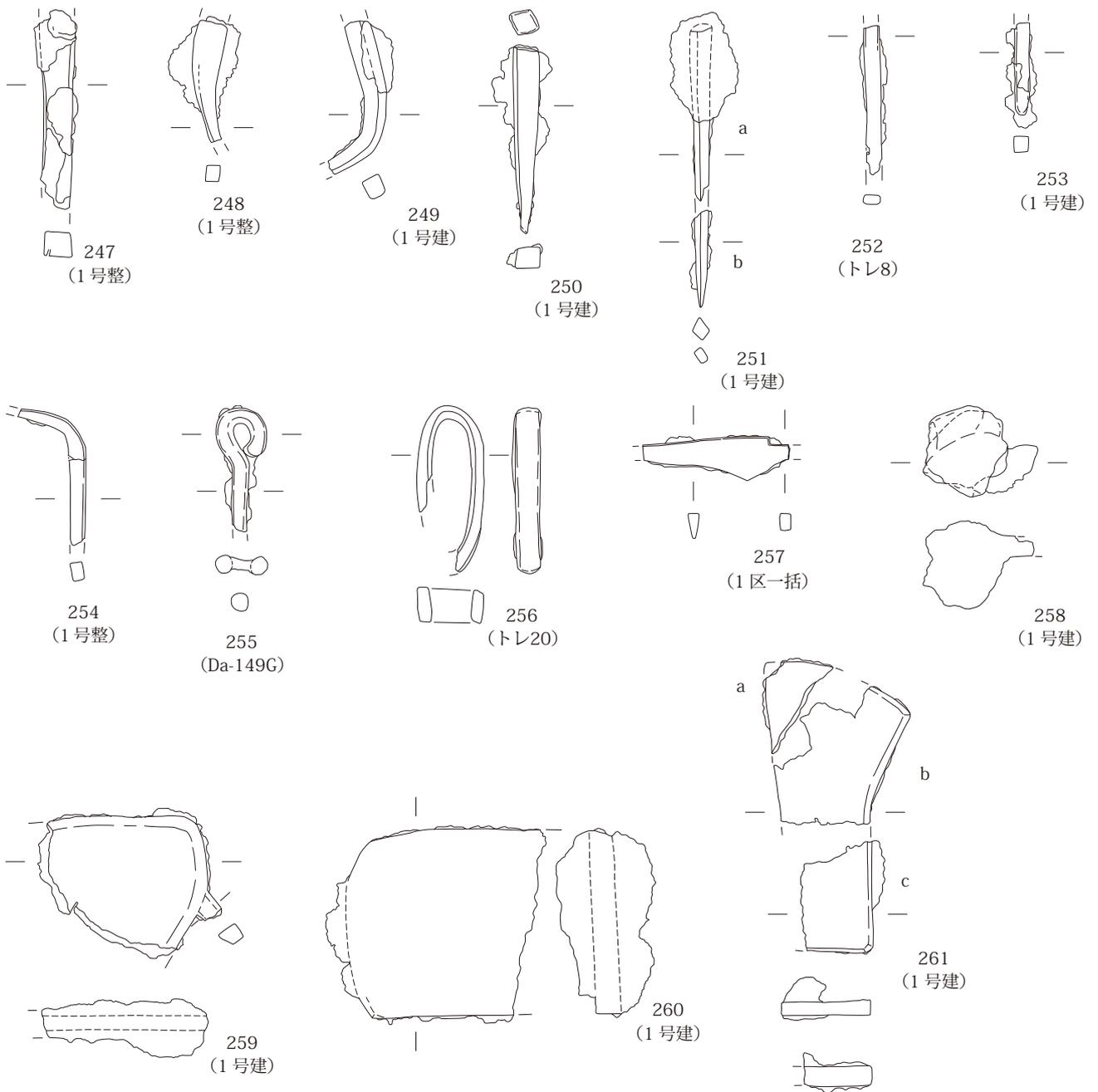


第95图 1号建物跡・1号整地土 道具瓦(熨斗瓦)(2)

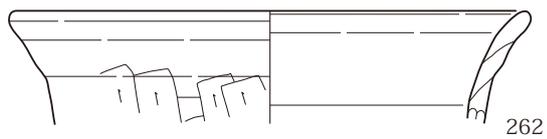


0 5cm  
1:2

第96図 1区 鉄製品 (1)



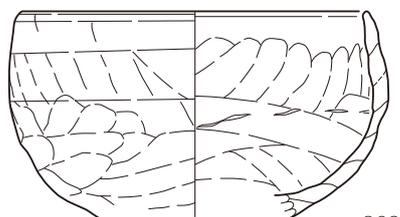
第97図 1区 鉄製品 (2)



262



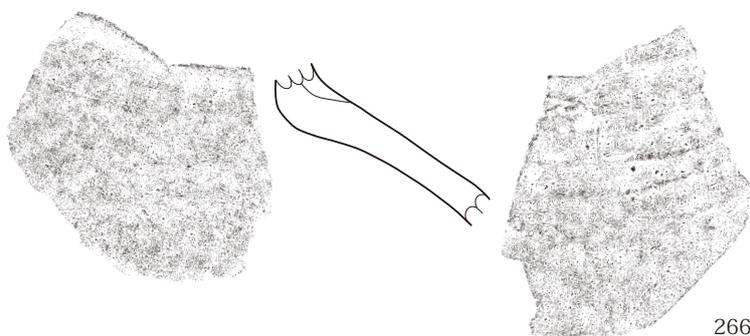
264



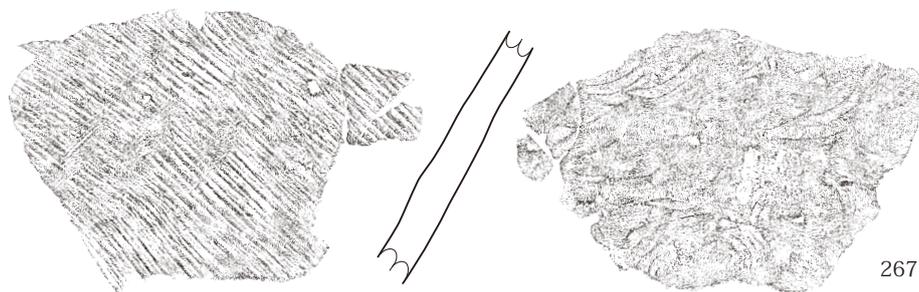
263



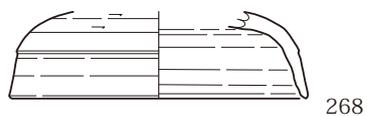
265



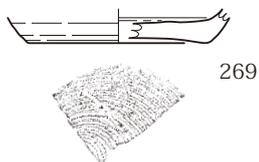
266



267



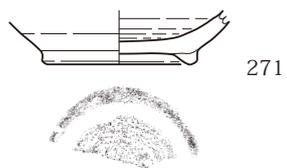
268



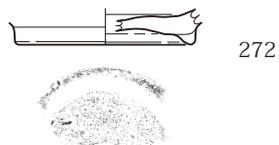
269



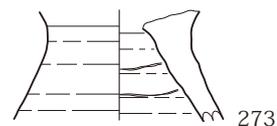
270



271



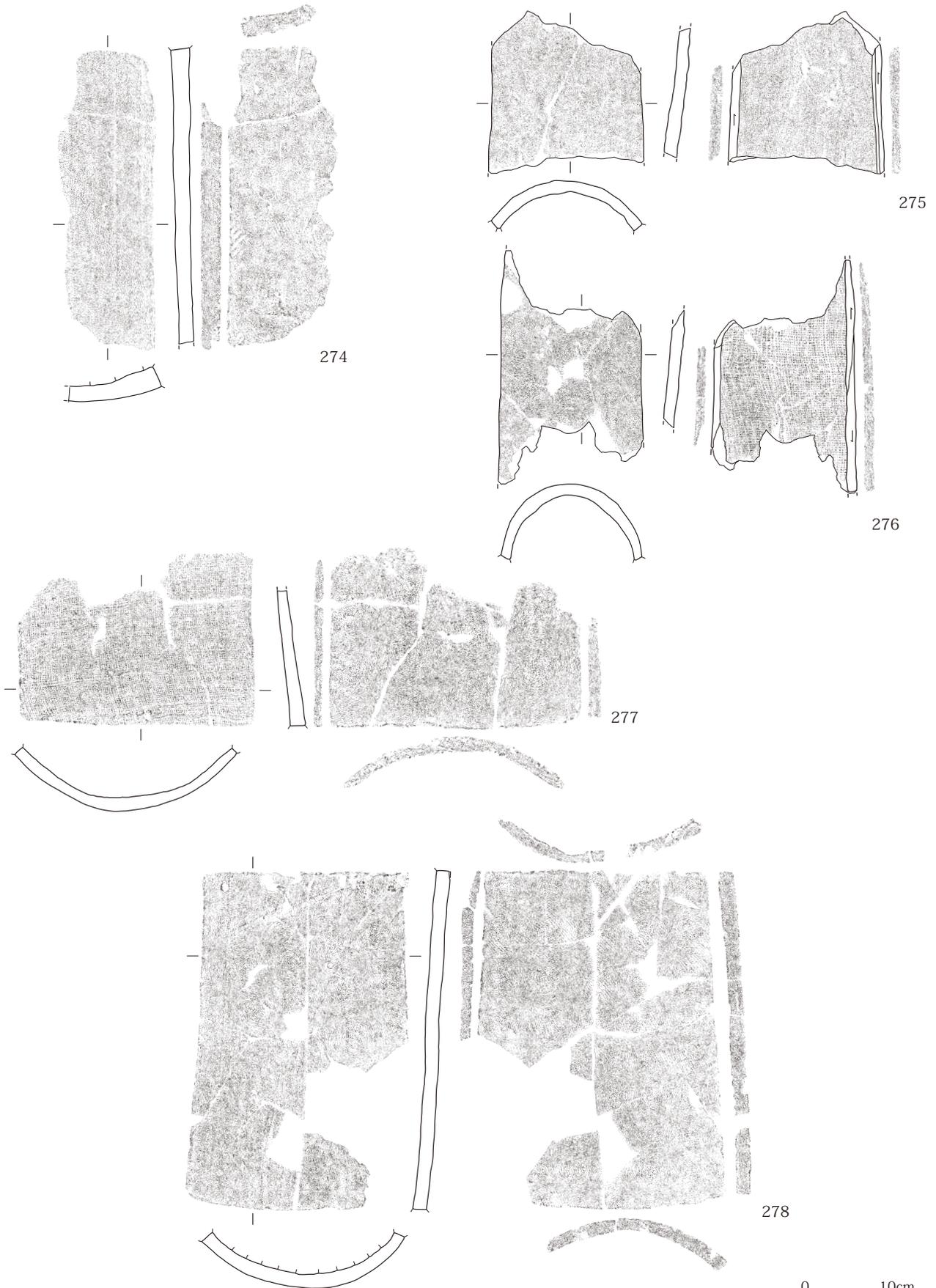
272



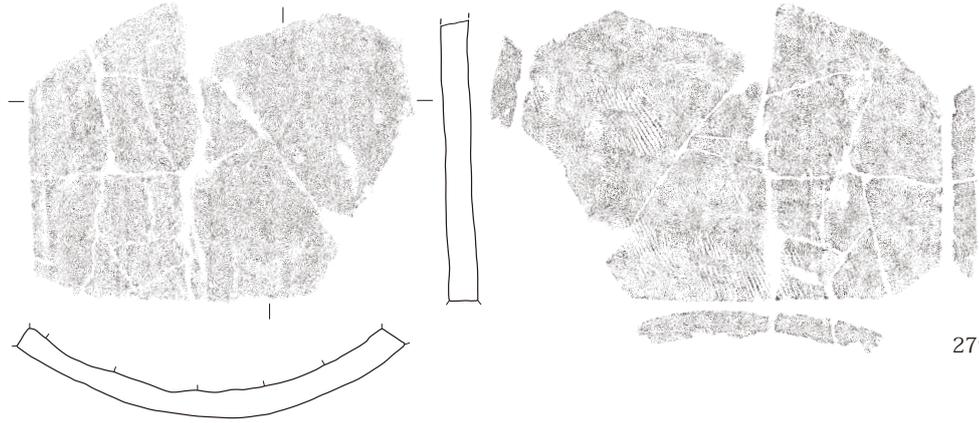
273



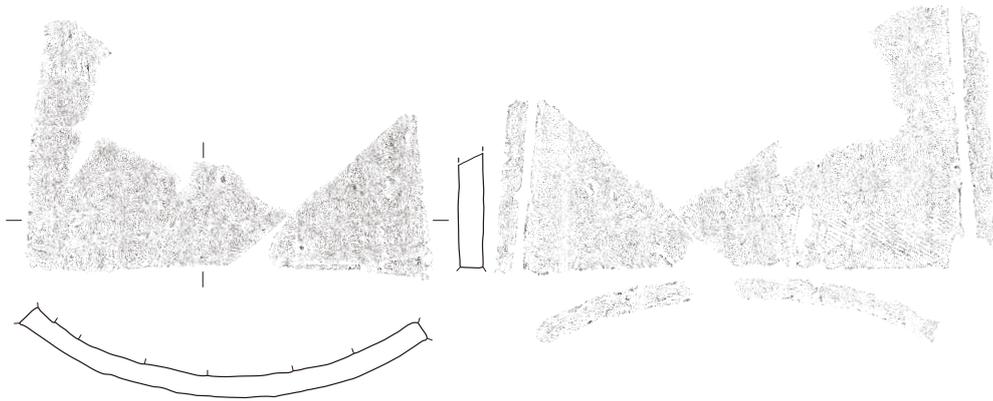
第98图 1区 1号建物跡 土器



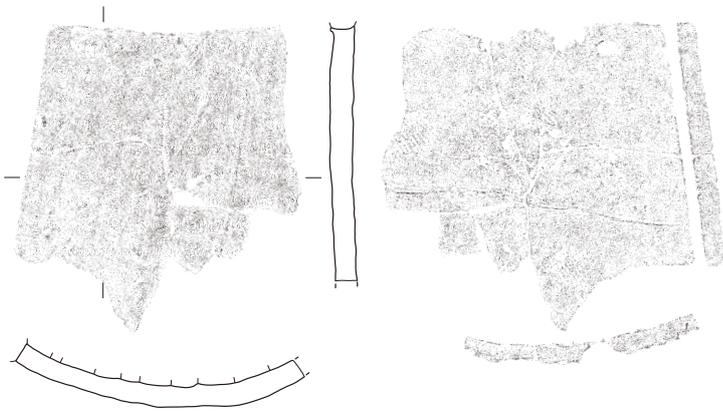
第99図 トレンチ9・14 瓦



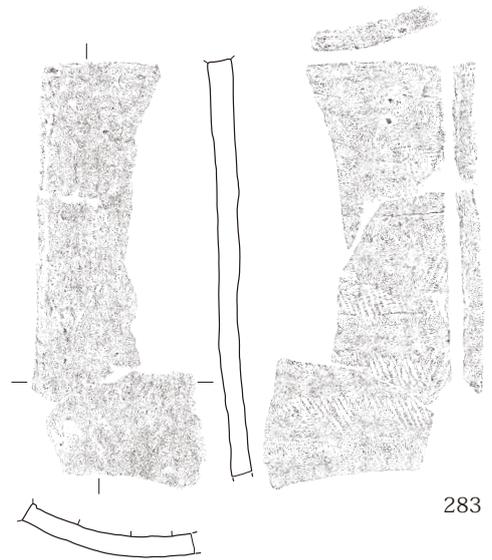
279



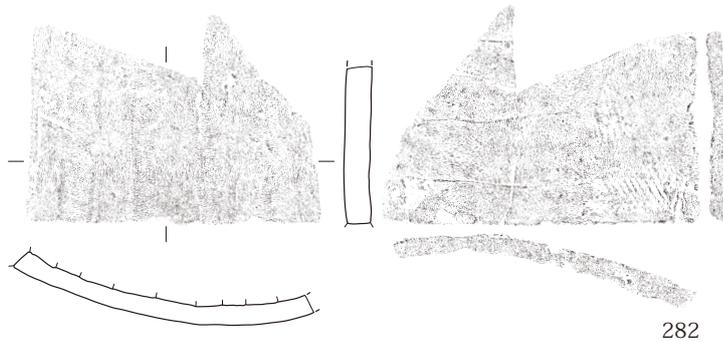
280



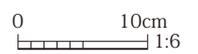
281



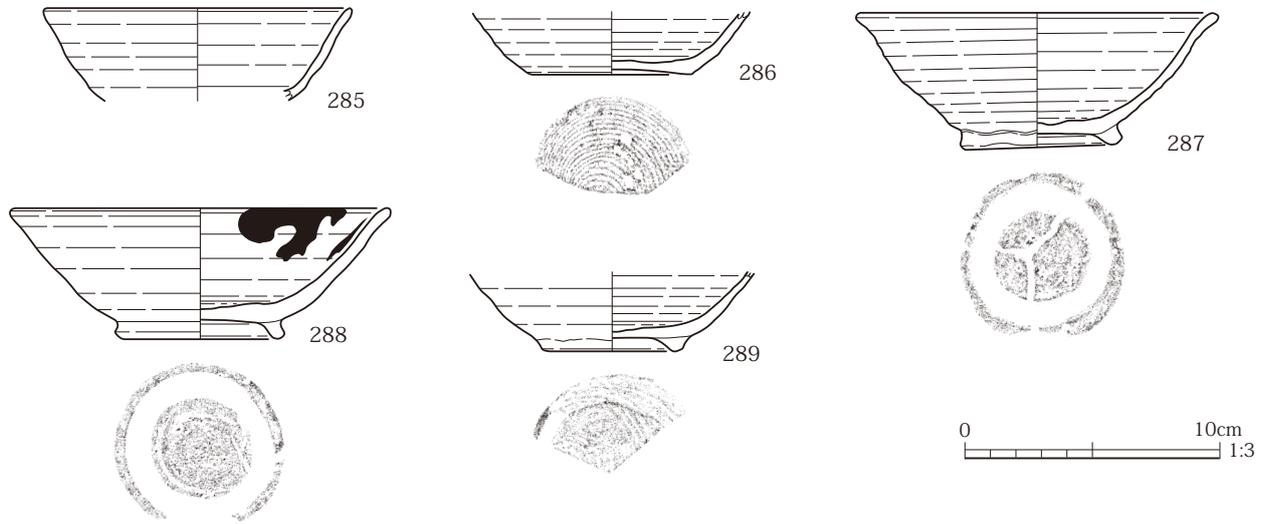
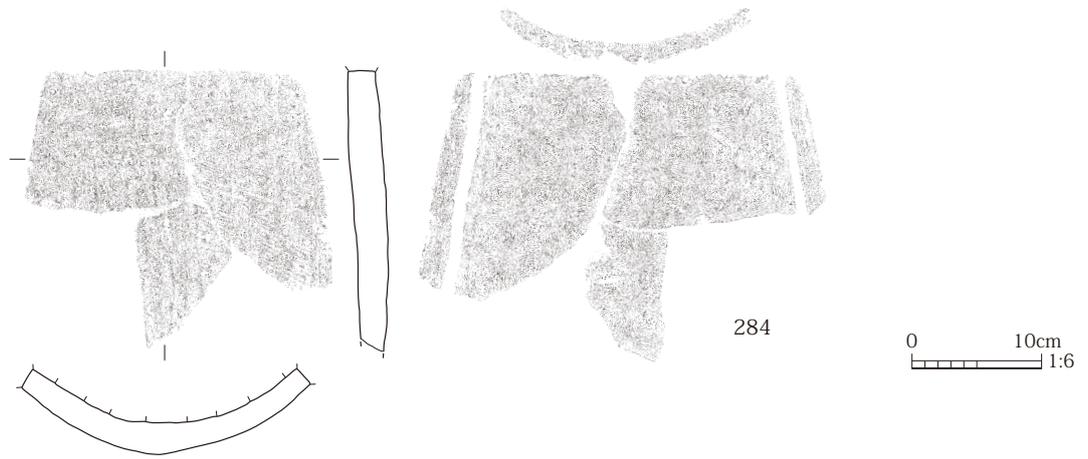
283



282



第100図 トレンチ13 瓦(1)



第101図 トレンチ13 瓦(2)・土器

第9表 牛田廃寺跡出土遺物観察表(1) 瓦

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第32図	1	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) 17.3 (丸瓦部) [17.5] 幅:[14.3] 厚さ:(瓦当面) 2.7 (丸瓦部) 1.5 重量:[1,939]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量、 黒色粒少量	瓦当面完形。周縁部内外面:ヨコナデ、一部に范痕あり。側面:平行タタキ、枷痕あり。丸瓦凹面:布目→瓦当接合部補強粘土→ヨコナデ。凸面:平行タタキ→ナデ。釘穴あり。	1863
1号建物跡	第32図	2	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) 16.5 (丸瓦部) [16.5] 幅:[14.5] 厚さ:(瓦当面) 3.6 (丸瓦部) 1.9 重量:[1,835]	酸化 灰白色 (7.5Y7/1)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	瓦当面ほぼ完形。周縁部一部剥落。内外面:ナデ。瓦当文様の一部が周縁部内面ナデ時に指が当たり一部欠損。側面:平行タタキ。裏面:平行タタキ→ナデ。丸瓦凹面:布目→補強粘土→ナデ。凸面:平行タタキ→タテナデ。釘穴あり。	1848
1号整地土	第33図	3	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) 17.7 幅:— 厚さ:(瓦当面) 3.0 (丸瓦部) 1.9 重量:[1,338]	酸化 褐色 (5YR6/8)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量	瓦当面完形。周縁部内外面:ナデ。側面:平行タタキ→ナデ。裏面:平行タタキ→ナデ、補強粘土あり。丸瓦凸部:平行タタキ→タテナデ。	208
72号住居跡	第33図	4	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [15.0] 幅:— 厚さ:(瓦当面) 3.1 重量:[576]	酸化 褐色 (5YR6/8)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	瓦当面半分残存。周縁部内外面:ナデ。側面:タテナデ。裏面:中心に平行タタキ、丸瓦接合部指頭痕あり。丸瓦:剥落。周縁部:一部剥落。	24
1号建物跡	第33図	5	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [8.2] 幅:— 厚さ:2.32 重量:[247]	酸化 褐色 (5YR6/6)	片岩、白色石英、 赤褐色粒、黒色 粒少量	周縁部内外面:ナデ。側面:平行タタキ→ナデ。瓦当部表面:摩滅。裏面:丸瓦接合部に指頭痕あり。	47
1号整地土	第33図	6	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [4.5] 幅:— 厚さ:2.1 重量:[142]	酸化 にぶい褐色 (5YR6/3)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量	周縁部内外面:ナデ。側面:平行タタキ→ヨコナデ。裏面:ナデ。	215
1区	第33図	7	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [107] 幅:— 厚さ:2.6 重量:[81]	酸化 にぶい褐色 (7.5YR6/3)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量	周縁部内面及び界線内:ヨコナデ。側面:平行タタキ→ナデ。裏面:ナデ。	一括
9区南	第33図	8	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [4.7] 幅:— 厚さ:2.0 重量:[55]	酸化 灰褐色 (5YR5/2)	白色石英、赤褐色粒少量、 片岩、 黒色粒少量	瓦当裏面:剥がれ。	一括
トレンチ20	第33図	9	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [6.0] 幅:— 厚さ:2.0 重量:[70]	酸化 灰白色 (10YR7/1)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量	瓦当裏面:ナデ。	ZI1838
1区	第33図	10	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [8.5] 幅:— 厚さ:2.7 重量:[182]	酸化 灰オリーブ色 (5Y6/2)	白色石英、片岩、 赤褐色粒少量	瓦当裏面:ナデ。	一括
2号溝	第33図	11	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [3.8] 幅:— 厚さ:2.2 重量:[11]	酸化 褐色 (7.5YR4/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒	瓦当裏面:ナデ。	一括
1号建物跡	第33図	12	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [2.0] 幅:— 厚さ:1.7 重量:[91]	還元 灰黄褐色 (10YR5/2)	白色石英、黒色 粒	周縁部が剥離したもの。内外面:ナデ。側面:平行タタキ→ナデ。裏面:ナデ。	1194
1区	第33図	13	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [1.7] 幅:[5.0] 厚さ:1.6 重量:[42]	酸化 褐色 (7.5YR6/6)	赤褐色粒、片岩	周縁部内外面:ナデ。側面:ヨコナデ。裏面:ナデ。	一括
1号整地土	第33図	14	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [1.7] 幅:— 厚さ:1.6 重量:[55]	酸化 褐色 (7.5YR7/6)	片岩、赤褐色粒、 黒色粒少量	周縁部が剥離したもの。周縁部内外面:ナデ。側面:平行タタキ。	589
1号建物跡	第33図	15	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [3.4] 幅:[4.3] 厚さ:1.5 重量:[43]	酸化 にぶい褐色 (5YR6/3)	白色石英、赤褐色粒少量	周縁部が剥離したもの。周縁部内外面:ヨコナデ。側面:平行タタキ→ナデ。	563
1号整地土	第33図	16	軒丸瓦A1類	長さ:瓦当面 [2.6] 幅:— 厚さ:[2.8] 重量:[52]	酸化 灰白色 (10YR7/1)	白色石英、片岩	周縁部側面:ナデ。裏面:ナデ。瓦当との接合部。	165
トレンチ13	第34図	17	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [1.4] 幅:[5.7] 厚さ:1.2 重量:[27]	酸化 赤褐色 (10YR5/3)	白色石英、片岩、 赤褐色粒	周縁部内外面:ナデ。側面:ナデ。	一括
1区 グリット Cx-149	第34図	18	軒丸瓦A1類	長さ:(瓦当面) [2.6] 幅:[4.6] 厚さ:2.8 重量:[32]	酸化 褐色 (5YR6/6)	片岩、赤褐色粒	周縁部欠損。	一括

第 10 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (2) 瓦

( ): 推定値、[ ]: 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1 区	第 34 図	19	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [4.0] 幅:[7.5] 厚さ:2.3 重量:[70]	酸化 暗赤灰色 (7.5R4/1)	白色石英、片岩	丸瓦凹面:補強粘土→ナデ。凸面: 平行タタキ。瓦当との接合部。	一括
1 号建物跡	第 34 図	20	軒丸瓦 A1 類	長さ:(瓦当部) [2.5] 幅:— 厚さ:[2.3] 重量:[33]	酸化 橙色 (7.5YR7/6)	片岩、白色石英、 赤褐色粒少量	周縁部内外面:ナデ。側面:ナデ。 瓦当部:剥落。	1579
6 区	第 34 図	21	軒丸瓦 B 類カ	長さ:[4.1] 幅:— 厚さ:2.5 重量:[61]	還元 灰白色 (5Y7/2)	白色石英、片岩	周縁部側面:ナデ。表面:ナデ。裏面: ナデ。	表採
1 号建物跡	第 34 図	22	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [15.4] 幅:[12.3] 厚さ:2.5 重量:[497]	酸化 明褐色 (5YR7/1)	白色石英、片岩	丸瓦凹面:布目→補強粘土、補強 粘土部分ナデ。凸面:平行タタキ →タテナデ。瓦当接合部分に指頭 痕あり。釘穴あり。	1860
1 号整地土	第 34 図	23	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [10.2] 幅:[11.5] 厚さ:2.7 重量:[358]	酸化 橙色 (5YR7/6)	片岩、白色石英、 赤褐色粒少量、 黒色粒少量	丸瓦凹面:布目→補強粘土→ナデ。 凸面:平行タタキ→タテナデ。	257
南北セク ション深堀 グリッド Cw-149	第 34 図	24	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [8.5] 幅:[9.7] 厚さ:2.3 重量:[286]	酸化 橙 (5YR6/6)	白色石英、赤褐 色粒、黒色粒少 量、片岩	丸瓦凹面:布目→ナデ、丸瓦接合 のため接合箇所に押捺。凸面:補 強粘土→平行タタキ→ナデ。瓦当 との接合部。釘穴あり。	一括
3 号溝	第 34 図	25	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [9.6] 幅:[9.5] 厚さ:2.6 重量:[252]	酸化 灰黄色 (2.5Y7/2)	白色石英、赤褐 色粒、黒色粒少 量、片岩	丸瓦凹面:布目→ナデ、瓦当面接 合部に補強粘土。凸面:タテナデ。 瓦当との接合部。釘穴あり。	一括
1 号建物跡	第 34 図	26	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [8.5] 幅:[11.0] 厚さ:3.5 重量:[312]	酸化 橙色 (5YR6/8)	片岩、白色石英、 赤褐色粒、黒色 粒少量	丸瓦凹面:布目→補強粘土→ナデ。 凸面:平行タタキ→ナデ。瓦当接 合部分に指頭痕あり。	477
1 区	第 34 図	27	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [9.2] 幅:[8.9] 厚さ:3.1 重量:[203]	酸化 橙色 (7.5YR7/6)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	丸瓦凹面:布目→補強粘土、補強 粘土部分ヨコナデ。凸面:平行タ タキ→ナデ。釘穴あり。	一括
2 号溝	第 34 図	28	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [8.4] 幅:[12.5] 厚さ:2.3 重量:[241]	酸化 黄灰色 (2.5Y6/1)	白色石英、赤褐 色粒ごく少量、 片岩、黒色粒少 量	丸瓦凹面:布目→ナデ、補強粘土 あり。凸面:平行タタキ→タテナデ。 瓦当との接合部。	4
南北トレン チグリット Cv-149 (1 号整地土)	第 34 図	29	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [7.5] 幅:[6.0] 厚さ:2.0 重量:[105]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	白色石英、片岩、 黒色粒少量	丸瓦凹面:布目。丸瓦接合部の補 強粘土、補強粘土の剥離痕あり。 凸面:補強粘土→タテナデ。	一括
1 区	第 34 図	30	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [7.1] 幅:[6.0] 厚さ:2.0 重量:[116]	還元 灰色 (7.5Y6/1)	白色石英、片岩、 赤褐色粒	丸瓦凹面:布目。凸面:平行タタ キ→ナデ。釘穴あり。	一括
1 区 グリット Da-151	第 34 図	31	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [7.6] 幅:[12.0] 厚さ:3.3 重量:[248]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英、片岩、 赤褐色粒	丸瓦凹面:丸瓦接合のため補強粘 土→布目、指頭痕あり。凸面:平 行タタキ→ナデ。瓦当との接合部。	一括
1 号建物跡	第 35 図	32	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [7.5] 幅:[7.5] 厚さ:1.8 重量:[103]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	丸瓦凹面:布目→補強粘土→ナデ。 凸面:平行タタキ→ナデ。瓦当接 合部に指頭痕あり。	1540
1 区	第 35 図	33	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [4.0] 幅:[5.3] 厚さ:2.5 重量:[53]	酸化 橙色 (7.5YR7/6)	片岩、赤褐色粒 少量、黒色粒少 量、白色石英	凹面:補強粘土→ヨコナデ。凸面: タテナデ→摩滅。瓦当との接合部。 釘穴あり。	一括
1 号建物跡	第 35 図	34	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [2.7] 幅:[4.8] 厚さ:[2.5] 重量:[35]	酸化 暗赤灰色 (7.5R3/1)	白色石英、片岩、 赤褐色粒	丸瓦凸面:平行タタキ→ナデ。凹 面に補強粘土あり。瓦当との接合 部。	一括
1 号整地土	第 35 図	35	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [8.2] 幅:[7.5] 厚さ:2.1 重量:[107]	酸化 黄灰色 (2.5Y6/1)	白色石英、片岩	丸瓦凹面:布目。凸面:タテナデ。 凸面に瓦当接合のため補強粘土あ り。瓦当との接合部。釘穴あり。	193
3 号溝	第 35 図	36	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [3.0] 幅:[5.0] 厚さ:2.0 重量:[37]	還元 黄灰色 (2.5Y6/1)	白色石英、大粒 の片岩	丸瓦凹面:タテナデ。凸面:平行 タタキ。釘穴あり。	Cx-149
1 号建物跡	第 35 図	37	軒丸瓦 A1 類	長さ:(丸瓦部) [2.7] 幅:[5.0] 厚さ:2.7 重量:[37]	酸化 にぶい黄橙色 (10YR6/4)	赤褐色粒、白色 石英	丸瓦凸面:ナデ→補強粘土あり。 瓦当との接合部。	1209
1 号建物跡	第 36 図	38	軒丸瓦 A2 類	長さ:(瓦当部) [15.2] (丸瓦部) [18.6] 幅:— 厚さ:(瓦当部) 2.0 (丸瓦部) 1.3 重量:[648]	酸化 灰色 (7.5Y6/1)	白色石英	周縁部から瓦当部剥落。周縁部内 外面:ナデ。側面:平行タタキ→ ナデ。裏面:ナデ。表面に自然釉 付着。丸瓦凹面:布目→補強粘土 →ヨコナデ。凸面:平行タタキ→ ナデ。	1300,1641, 1642,1790, 1791.Db-148

第 11 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (3) 瓦

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
72号住居跡	第36図	39	軒丸瓦 A2 類	長さ:(瓦当面) [12.2] 幅:— 厚さ:1.8 重量:[118]	還元 暗赤灰色 (10R4/1)	白色石英	瓦当部剥落。周縁部内外面:ナデ。 周縁内側に一部范痕残る。側面: 平行タタキ→ナデ、指頭痕あり。 裏面:ナデ。	13
1号建物跡	第36図	40	軒丸瓦 A2 類	長さ:(丸瓦部) [22.5] 幅:[17.4] 厚さ:1.1 重量:[672]	還元 暗緑灰色 (5G4/1)	白色石英、片岩	瓦当部剥落、周縁部のみ残存。周 縁部粘土と丸瓦の接着粘土が共有。 丸瓦凹面:布目、縦じ目をナデ消し。 凸面:平行タタキ→ナデ。	729,731,732, 734,735,736, Db-149
1号建物跡	第36図	41	軒丸瓦 A2 類	長さ:(丸瓦部) [3.2] 幅:[7.5] 厚さ:2.4 重量:[62]	還元 暗赤灰色 (2.5YR3/1)	白色石英、片岩	丸瓦の瓦当部接着部分。丸瓦凹面: ナデ。凸面:平行タタキ→ナデ。	637
1号整地土	第36図	42	軒丸瓦 A2 類	長さ:(瓦当面) [7.0] 幅:— 厚さ:1.9 重量:[58]	還元 灰色 (5Y4/1)	片岩、白色石英	周縁部剥落。裏面:ナデ。	6
トレンチ 13	第36図	43	軒丸瓦 A2 類	長さ:(瓦当面) [4.5] 幅:— 厚さ:1.5 重量:[46]	還元 灰色 (N5/)	白色石英	周縁部剥落。裏面:ナデ。	
1号整地土	第36図	44	軒丸瓦 A2 類	長さ:(瓦当面) [7.7] 幅:— 厚さ:1.8 重量:[73]	還元 オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	白色石英、赤褐 色粒少量、黒色 粒少量	周縁部剥落。裏面:ナデ。	299
1号建物跡	第37図	45	軒丸瓦 A2 類	長さ:(丸瓦部) [8.3] 幅:[10.9] 厚さ:1.0 重量:[136]	還元 にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	白色石英、片岩	丸瓦凹面:布目。凸面:平行タタ キ→ナデ。	811,Cy-149
1号建物跡	第37図	46	軒丸瓦 A2 類	長さ:(丸瓦部) [8.6] 幅:[3.5] 厚さ:1.1 重量:[45]	還元 赤灰色 (2.5YR6/1)	白色石英、片岩	丸瓦凹面:布目。凸面:平行タタ キ→ナデ。	611,Cy-148
61号住居跡	第40図	47	軒丸瓦 B 類	長さ:(瓦当面) [15.2] (丸瓦部) [5.2] 幅:(狭端部) [11.8] 厚さ:2.0 重量:[496]	還元 褐灰色 (7.5YR6/1)	白色石英、片岩	瓦当部:瓦当面に大きな范割痕。 周縁部上端歪む。側面:ヨコナデ。 裏面:同心円状のナデ。泥条盤築 技法か。裏面:側縁に丸瓦半裁痕 あり。丸瓦凹面:ヨコナデ。凸面: タテナデ。	1
1区	第40図	48	軒丸瓦 B 類	長さ:(瓦当面) [5.3] (丸瓦部) [2.8] 幅:— 厚さ:1.5 重量:[93]	還元 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色石英、黒色 粒少量	周縁部上端欠損。瓦当面に大きな 范割痕あり。側面:ナデ。裏面: ヨコナデ。丸瓦凸面:タテナデ。	一括
1号建物跡	第43図	49	軒丸瓦 C 類	長さ:(瓦当面) [15.0] (丸瓦部) 37.8 幅:(狭端部) [12.0] 厚さ:(瓦当面) 1.6 (丸瓦部) 2.3 重量:[2,760]	還元 暗青灰色 (5B4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	内面:布目、絞り目なし。周縁部 側面:ナデ。丸瓦凹面:布目。瓦 当と丸瓦別作り。瓦当と丸瓦接 合部ナデ。凸面:タテナデ。線刻「×」 一本作り。	1850
1号建物跡	第45図	50	軒丸瓦 D 類	長さ:(瓦当面) 15.2 (丸瓦部) 40.0 幅:(狭端部) [11.5] 厚さ:(瓦当面) 1.5 (丸瓦部) 2.5 重量:[3,173]	還元 暗緑灰色 (5G4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	丸瓦凹面:布目。瓦当と丸瓦接合 部ナデ。瓦当面・丸瓦共土、瓦当 面は丸瓦を同じ粘土を折り曲げて 作成。凸面:ナデ。瓦当周縁部側面: ナデ。一本作り。	1372,1385, 1386,1389, 1430,1473, 1759,Db-149
1号建物跡	第45図	51	軒丸瓦 D 類	長さ:(瓦当面) [13.7] 幅:— 厚さ:1.6 重量:[199]	還元 暗緑灰色 (10G3/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	周縁部側面:ナデ。裏面:布目、 絞り目なし。一本作り。	1525
1号建物跡	第45図	52	軒丸瓦 D 類	長さ:(瓦当面) [8.7] 幅:— 厚さ:2.3 重量:[344]	還元 暗青灰色 (5B4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	周縁部側面:ナデ。裏面:布目、 絞り目なし。一本作り。	688,689, Cy-148
6区	第45図	53	軒丸瓦 D 類	長さ:[4.0] 幅:[5.4] 厚さ:1.7 重量:[41]	還元 青灰色 (5B5/1)	白色石英	凹面:布目。凸面:ナデ。一本作り。 瓦当部折り曲げ、瓦当部の周縁部 分。	表採
1号建物跡	第46図	54	軒丸瓦 D 類	長さ:(瓦当面) 15.8 (丸瓦部) 38.0 幅:(狭端部) 13.0 厚さ:(瓦当面) 1.7 (丸瓦部) 2.1 重量:[3,741]	還元 暗緑灰色 (5G4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	丸瓦凹面:布目。粘土板剥ぎ取り 痕あり。瓦当面・丸瓦共土、瓦当 面は丸瓦を同じ粘土を折り曲げて 作成。凸面:ナデ。瓦当周縁部側面: ナデ。裏面:絞り目なし。一本作り。	1360,1406
1号建物跡	第47図	55	軒丸瓦 D 類	長さ:(丸瓦部) [30.8] 幅:14.0 厚さ:2.7 重量:[1,625]	還元 暗緑灰色 (5G4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	丸瓦凹面:布目。粘土板剥ぎ取り 痕あり。凹面側縁:ケズリ。凸面: ナデ。焼成・胎土は軒丸瓦 D 類と 同じ。	1362,1395, 1410,1763, 1778,Db-149
1号建物跡	第47図	56	軒丸瓦 D 類	長さ:(丸瓦部) [12.0] 幅:(狭端部) [11.0] 厚さ:2.7 重量:[462]	還元 暗緑灰色 (10G3/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	丸瓦凹面:布目。狭端部:ケズリ。 凸面:ナデ。焼成・胎土は軒丸瓦 C 類と同じ。	1756

第 12 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (4) 瓦

( ): 推定値、[ ]: 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第47図	57	軒丸瓦D類	長さ: (丸瓦部) [16.0] 幅: [11.2] 厚さ: 2.3 重量: [344]	還元 暗青灰色 (5B4/1)	白色石英、片岩、 黒色粒	丸瓦凹面: 布目。粘土板剥ぎ取り 痕あり。凸面: ナデ。焼成・胎土 は軒丸瓦D類と同じ。	688,689, Cy-148
1号建物跡	第49図	58	軒平瓦A類	長さ: [51.0] 幅: [32.4] 厚さ: 3.5 重量: [5,420]	酸化 にぶい橙色 (5YR6/4)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→広端縁ヨコナデ→タ テナデ、ナデのため布目不鮮明。 広端縁に指頭痕あり。凸面: 粘土 添加→平行タタキ→回転ヨコナデ →重弧文施文。瓦当面: 重弧文	1388,1402, 1403,1428, 1447,1449, 1457,1458, 1762,1760, 1761,1762, 1764,1768, 1770,Do-148, Do-149
トレンチ 22	第50図	59	軒平瓦A類	長さ: [21.4] 幅: [24.5] 厚さ: 3.2 重量: [1,586]	還元 灰オリーブ色 (7.5Y4/2)	白色石英、片岩	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ。 凸面: 広端部粘土添加瓦当面作出 →平行タタキ→部分的にナデ→ 凸面広端縁ナデ。瓦当面: 重弧文。	1837
1号建物跡	第50図	60	軒平瓦A類	長さ: [15.5] 幅: [23.0] 厚さ: 3.4 重量: [1,317]	酸化 橙色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ →広端縁ヨコナデ。凸面: 粘土添 加→平行タタキ→広端縁ヨコナデ →重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	1845
1区	第50図	61	軒平瓦A類	長さ: [18.3] 幅: [18.0] 厚さ: 3.2 重量: [1,147]	酸化 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ →広端縁ヨコナデ。凸面: 粘土添 加→タテナデ→広端縁ヨコナデ→ 重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	一括
1号建物跡	第51図	62	軒平瓦A類	長さ: [14.8] 幅: [12.0] 厚さ: 3.4 重量: [464]	酸化 灰黄色 (2.5YR7/2)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 粘土添 加→平行タタキ→広端縁ヨコナデ →重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	1801
南北セク ション深堀 グリッド Cw-149	第51図	63	軒平瓦A類	長さ: [11.7] 幅: [11.2] 厚さ: 3.3 重量: [590]	還元 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ →広端縁ヨコナデ。凸面: 粘土添 加→タテナデ→広端縁ヨコナデ→ 重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	一括
1号建物跡	第51図	64	軒平瓦A類	長さ: [19.0] 幅: [14.5] 厚さ: 3.1 重量: [940]	酸化 明黄褐色 (10YR7/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ →広端縁ナデ。凸面: 粘土添加→ 平行タタキ→広端縁ヨコナデ→重 弧文施文。瓦当面: 重弧文。	1670
1号建物跡	第51図	65	軒平瓦A類	長さ: [16.3] 幅: [10.7] 厚さ: 3.2 重量: [640]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ。 凸面: 粘土添加→平行タタキ→重 弧文施文。瓦当面: 重弧文。粘土 板合わせ目あり。	1551
1区	第51図	66	軒平瓦A類	長さ: [13.5] 幅: [14.0] 厚さ: 3.2 重量: [529]	酸化 橙色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→タテナデ→広端縁ヨ コナデ。凸面粘土添加→平行タタ キ→広端縁ヨコナデ→重弧文施文。 瓦当面: 重弧文。	一括
トレンチ 9・14	第51図	67	軒平瓦A類	長さ: [8.5] 幅: [12.5] 厚さ: 2.7 重量: [374]	酸化 黄褐色 (7.5YR7/8)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ、 凹面側縁ケズリ。凸面: 広端部粘 土添加瓦当面作出→平行タタキ。 瓦当面: 重弧文。	29
1区 グリッド Db-148	第51図	68	軒平瓦A類	長さ: [10.2] 幅: [13.6] 厚さ: 3.4 重量: [530]	酸化 にぶい橙色 (5YR6/4)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 広端部 粘土添加瓦当面作出→平行タタキ →凸面広端部ヨコナデ。瓦当面: 重弧文。粘土板接合部。	一括
1号整地土	第51図	69	軒平瓦A類	長さ: [10.4] 幅: [14.6] 厚さ: 3.3 重量: [507]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英、赤褐 色粒、黒色粒	凹面: 布目、模骨痕。凸面: 瓦当 部分作出粘土添加→平行タタキ。 瓦当面: 重弧文。凸面表面に黒色 粘土付着。	127
1区	第52図	70	軒平瓦A類	長さ: [8.0] 幅: [10.5] 厚さ: 3.5 重量: [370]	還元 青灰色 (5B6/1)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: ナデ→広端縁ヨコナデ。凸 面: 粘土添加→平行タタキ→広端 縁ヨコナデ→重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	一括
1区	第52図	71	軒平瓦A類	長さ: [9.4] 幅: [10.2] 厚さ: 3.2 重量: [288]	酸化 橙色 (5YR7/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ。 凸面: 平行タタキ→広端部粘土添 加瓦当面作出→平行タタキ。瓦当 面: 重弧文。	一括
1号整地土	第52図	72	軒平瓦A類	長さ: [9.0] 幅: [14.2] 厚さ: 3.0 重量: [469]	酸化 褐色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ。 凸面: 瓦当部分作出粘土添加→ナ デ、摩滅。瓦当面: 重弧文。	110
南北ト深堀 ZIグリッド Cv-149 (1号整地土)	第52図	73	軒平瓦A類	長さ: [6.3] 幅: [10.3] 厚さ: 3.4 重量: [272]	酸化 褐色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 粘土添 加→平行タタキ→広端縁ヨコナデ →重弧文施文。瓦当面: 重弧文。	一括
1区	第52図	74	軒平瓦A類	長さ: [7.8] 幅: [9.7] 厚さ: 3.4 重量: [390]	酸化 褐色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、 赤褐色粒、黒色 粒少量	凹面: 布目→模骨痕部分タテナデ、 凹面側縁ケズリ。凸面: 広端部粘 土添加瓦当面作出→平行タタキ。 瓦当面: 重弧文。	一括
6区	第52図	75	軒平瓦A類	長さ: [5.1] 幅: [8.5] 厚さ: 2.4 重量: [115]	酸化 褐色 (7.5YR6/8)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	凹面: ナデ。凸面: 平行タタキ→ ナデ、広端縁ヨコナデ。瓦当面: 重弧文一条。	表採

第 13 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (5) 瓦

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1 区 グリッド Dc-149	第 52 図	76	軒平瓦 A 類	長さ: [4.0] 幅: [6.4] 厚さ: 3.3 重量: [98]	還元 暗灰青色 (5B4/1)	白色石英	凹面: 布目→ナデ。凸面: 平行タタキ→広端縁ナデ→平行タタキ、瓦当部分作出粘土添加。瓦当面: 重弧文。	一括
3 号溝	第 52 図	77	軒平瓦 A 類	長さ: [3.0] 幅: [5.8] 厚さ: 3.3 重量: [53]	酸化 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色石英	凹面: ナデ、指頭痕あり。凸面: ナデ、瓦当部分作出粘土添加。瓦当面: 重弧文。	Cy-150
1 区	第 52 図	78	軒平瓦 A 類	長さ: [7.0] 幅: [7.9] 厚さ: 1.8 重量: [147]	酸化 にぶい赤色 (7.5R4/4)	白色石英、赤褐色色粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 粘土剥がれ。平行タタキ→ヨコナデ。瓦当面: 重弧文。	一括
1 号建物跡	第 52 図	79	軒平瓦 A 類	長さ: [3.5] 幅: [3.3] 厚さ: 2.0 重量: [26]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: ナデ。凸面: ナデ。瓦当面: 重弧文。凸面の添加粘土剥がれたもの。	1600
1 区 グリッド Cy-149	第 52 図	80	軒平瓦 A 類	長さ: [3.8] 幅: [4.2] 厚さ: 3.4 重量: [79]	酸化 褐色 (7.5YR7/6)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: ナデ。凸面: 摩滅、広端部粘土添加瓦当面作出。瓦当面: 重弧文。	一括
1 号建物跡	第 52 図	81	軒平瓦 A 類	長さ: [3.5] 幅: [6.6] 厚さ: 2.9 重量: [52]	酸化 褐色 (7.5YR7/6)	片岩、赤褐色色粒、黑色粒	凹面: ヨコナデ。凸面: 粘土添加→重弧文施文、一部分剥落。瓦当面: 重弧文。	1361
トレンチ 13	第 52 図	82	軒平瓦 A 類	長さ: [6.6] 幅: [4.7] 厚さ: 1.8 重量: [87]	酸化 褐色 (7.5YR6/8)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: 布目→広端縁ナデ。凸面: 瓦当部分添加粘土剥落、平行タタキ。瓦当面: 重弧文。	5
1 号建物跡	第 52 図	83	軒平瓦 A 類	長さ: [6.4] 幅: [7.0] 厚さ: 1.5 重量: [86]	酸化 黄灰色 (2.5YR5/1)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: 布目→タテナデ→広端縁ナデ。凸面: 瓦当部添加粘土剥がれ、平行タタキ→ヨコナデ。瓦当面: 重弧文。	1427
1 区	第 52 図	84	軒平瓦 A 類	長さ: [3.2] 幅: [5.4] 厚さ: 1.4 重量: [27]	酸化 褐色 (5YR6/6)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: ヨコナデ。凸面: ヨコナデ。瓦当面: 重弧文。凸面の添加粘土剥がれたもの。	一括
1 区	第 53 図	85	軒平瓦 A 類	長さ: [4.2] 幅: [4.3] 厚さ: 1.7 重量: [30]	酸化 にぶい赤褐色 (7.5R5/3)	白色石英	凹面: ナデ。凸面: ヨコナデ。瓦当面: 重弧文。凸面の添加粘土剥がれたもの。	一括
南北セクション深堀 グリッド Cw-149	第 53 図	86	軒平瓦 A 類	長さ: [5.5] 幅: [4.3] 厚さ: 1.9 重量: [635]	酸化 褐色 (5YR7/8)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 平行タタキ→ヨコナデ、瓦当部分の添加粘土剥がれ。瓦当面: 重弧文。	一括
1 区 グリッド Db-148	第 53 図	87	軒平瓦 A 類	長さ: [2.4] 幅: [9.2] 厚さ: [1.2] 重量: [38]	還元 灰黄色 (2.5Y6/2)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: ナデ。凸面: 平行タタキ→端部ヨコナデ。凸面の添加粘土剥がれたもの。	一括
2 号溝	第 53 図	88	軒平瓦 A 類	長さ: [3.0] 幅: [6.1] 厚さ: [3.0] 重量: [33]	酸化 黄褐色 (7.5YR7/8)	白色石英、赤褐色色粒、黑色粒	凸面: 平行タタキ。瓦当面: 重弧文。	一括
1 号建物跡	第 53 図	89	軒平瓦 A 類	長さ: [10.5] 幅: [14.0] 厚さ: 2.6 重量: [388]	酸化 黄褐色 (7.5YR7/8)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 平行タタキ→ナデ。粘土板接合部。平瓦 A 類の可能性あり。	752
1 号建物跡	第 53 図	90	軒平瓦 A 類	長さ: [6.8] 幅: [9.2] 厚さ: 1.5 重量: [125]	酸化 にぶい褐色 (7.5YR5/4)	白色石英、片岩、赤褐色色粒、黑色粒少量	凹面: 布目→ナデ。凸面: 平行タタキ。凸面の添加粘土剥がれたもの。	1667
1 号建物跡	第 54 図	91	軒平瓦 B1 類	長さ: [14.0] 幅: [19.0] 厚さ: 4.5 重量: [1,044]	還元 淡黄色 (2.5Y8/3)	白色石英、白色粒	凹面: 布目。凸面: 瓦当部段頸の粘土貼り付け→ナデ。段頸貼り付け部分に平行タタキ。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	1743
1 号整地土	第 54 図	92	軒平瓦 B1 類	長さ: [2.7] 幅: [16.4] 厚さ: 2.0 重量: [157]	還元 淡黄色 (2.5Y8/3)	白色粒、黑色粒、赤褐色色粒	段頸部が剥落したもの。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	315
1 号建物跡	第 54 図	93	軒平瓦 B1 類	長さ: [2.9] 幅: [11.0] 厚さ: [2.2] 重量: [109]	還元 淡黄色 (2.5Y8/4)	白色粒、黑色粒、赤褐色色粒	段頸部が剥落したもの。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	313
1 号建物跡	第 54 図	94	軒平瓦 B1 類	長さ: [3.0] 幅: [9.8] 厚さ: [2.2] 重量: [78]	還元 灰白色 (5Y8/1)	黑色粒	段頸部が剥落したもの。剥落部分に平行タタキ (ネガティブ)。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	1000
1 区 グリッド Cy-149	第 54 図	95	軒平瓦 B1 類	長さ: [2.1] 幅: [8.2] 厚さ: 1.6 重量: [41]	還元 灰白色 (5Y8/1)	白色粒少量	段頸部が剥落したもの。剥落部分に平行タタキ (ネガティブ)。側縁に太い沈線あり。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	一括

第 14 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (6) 瓦

( ): 推定値、[ ]: 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1区 グリッド Cx-149	第 54 図	96	軒平瓦 B1 類	長さ: [3.0] 幅: [4.6] 厚さ: 2.5 重量: [22]	還元 灰色 (7.5Y6/1)	白色粒少量	段頸部が剥落したもの。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	一括
1区 グリッド Cy-149	第 54 図	97	軒平瓦 B1 類	長さ: [2.9] 幅: [3.5] 厚さ: 2.7 重量: [25]	還元 灰白色 (7.5Y8/1)	白色粒少量	段頸部が剥落したもの。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P004 と同範。	一括
1号建物跡	第 55 図	98	軒平瓦 B2 類	長さ: [6.5] 幅: [7.2] 厚さ: [6.3] 重量: [135]	還元 暗青灰色 (5B4/1)	白色石英、白色 粒	凹面: 布目。凸面: 瓦当部段頸の 粘土貼り付け→ヨコナデ。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P003 と同範。	1836
1号建物跡	第 55 図	99	軒平瓦 B2 類	長さ: [3.0] 幅: [6.5] 厚さ: 2.2 重量: [49]	還元 暗青灰色 (5B4/1)	白色粒少量、片 岩、白色石英	段頸部が剥落したもの。瓦当面: 右偏向唐草文。上野国分寺 P003 と同範。	912
1区	第 56 図	100	軒平瓦 C 類	長さ: [11.1] 幅: [13.3] 厚さ: 2.6 重量: [378]	還元 灰色 (N4/)	白色石英	凹面: 布目。凸面: 平行タタキ? →ヨコナデ。広端縁に粘土を添加。 瓦当部を作出し、沈線で X 字状の 文様施文。	一括
1号整地土	第 56 図	101	軒平瓦 C 類	長さ: [3.0] 幅: [5.6] 厚さ: [2.0] 重量: [52]	酸化 橙色 (5YR6/6)	赤褐色粒	凹面: ヨコナデ。凸面: ヨコナデ。 広端縁に粘土を添加。瓦当部を 作出し、沈線で X 字状の文様施文。	261
1号建物跡	第 58 図	102	丸瓦 A1 類	長さ: [48.4] 幅: (広端部) 18.6 厚さ: 2.0 重量: [2,390]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	大粒の白色石 英、チャート	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ、広 端面に面取り状のケズリ、布目。 凹面: 側面・広端面に面取り状の ケズリ、縦位に布合わせ目痕、輪 積痕。	1355,1356, 1411,1414, 1415,1416, 1418,1419, 1460,1564, 1780
1号建物跡	第 59 図	103	丸瓦 A1 類	長さ: 47.8 幅: (狭端部) 12.1 (広端部) 17.0 厚さ: 2.0 重量: [2,690]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	片岩、白色石英、 チャート、軟質 赤褐色粒	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側縁に縦位の割付線、縦位に 布合わせ目痕、輪積痕が明瞭。	701,786,790, 791,791 下
1号建物跡	第 58 図	104	丸瓦 A1 類	長さ: [40.8] 幅: [16.8] 厚さ: 1.8 重量: [2,300]	還元 灰色 (N6/)	片岩、チャート、 白色石英	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、縦 位に布合わせ目痕。	757,761,773, 1649,1655
1号建物跡	第 59 図	105	丸瓦 A1 類	長さ: 46.5 幅: [11.3] 厚さ: 2.1 重量: [1,480]	還元 灰色 (N4/)	白色石英、チャ ート	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面・広端面に面取り状のケ ズリ、縦位に布合わせ目痕。	1292
1号建物跡	第 59 図	106	丸瓦 A1 類	長さ: 40.3 幅: (狭端部) 11.4 厚さ: 1.9 重量: [1,900]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/3)	片岩、白色石英、 軟質赤褐色粒、 角閃石	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、輪 積痕明瞭。	1370,1407, 1408,Db-149
1号建物跡	第 60 図	107	丸瓦 A1 類	長さ: [39.5] 幅: (広端部) 18.8 厚さ: 2.0 重量: [2,080]	酸化 灰白色 (5Y7/1)	片岩、白色石英、 チャート、軟質 赤褐色粒、骨針	粘土紐巻き付け成形。凸面: 縦方 向のへラケズリ。凹面: 側面・広 端面に面取り状のケズリ、縦位に 指ナデ。	1291,1295, 1803~1806, Db-148, Db-149
1号建物跡	第 59 図	108	丸瓦 A1 類	長さ: [33.9] 幅: [10.8] 厚さ: 1.5 重量: [900]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	大粒の白色石 英、片岩、軟質 赤褐色粒	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面・広端面に面取り状のケ ズリ、縦方向に指ナデ。	1851
1号建物跡	第 60 図	109	丸瓦 A1 類	長さ: [26.3] 幅: [15.9] 厚さ: 1.5 重量: [1,280]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、チャ ート	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ、そ の後縦方向のナデ、狭端面に面取 り状のケズリ。凹面: 縦方向の指 ナデ。	705 下,1823, Cy-148
1号建物跡	第 60 図	110	丸瓦 A1 類	長さ: [17.0] 幅: [14.3] 厚さ: 1.7 重量: [720]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	白色石英、片岩、 砂岩	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ。	1404,1765, 1766,1769, 1774
1号建物跡	第 60 図	111	丸瓦 A1 類	長さ: [21.4] 幅: [15.7] 厚さ: 1.5 重量: [780]	還元 灰色 (10Y6/1)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、縦 方向の指ナデ、輪積痕明瞭。	1348,Db-148
1号建物跡	第 60 図	112	丸瓦 A1 類	長さ: [19.9] 幅: [14.2] 厚さ: 1.4 重量: [540]	還元 灰オリーブ色 (5Y6/2)	白色石英、凝灰 岩	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、輪 積痕明瞭。	640,754,805, Cx-148
1号建物跡	第 60 図	113	丸瓦 A1 類	長さ: [17.2] 幅: [14.0] 厚さ: 1.3 重量: [550]	還元 灰色 (5Y6/1)	白色石英、チャ ート、軟質赤褐色 粒	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面・広端面に面取り状のケ ズリ、分割線、輪積痕明瞭、狭端 部上位に布合わせ痕。	1324,1336
1号建物跡	第 61 図	114	丸瓦 A1 類	長さ: [24.0] 幅: (狭端部) 11.0 厚さ: 1.0 重量: [520]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色石英、軟質 赤褐色粒、片岩、 砂岩	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、縦 位に布合わせ目痕。	1341,1344, 1345

第 15 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (7) 瓦

( ) : 推定値, [ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第 61 図	115	丸瓦 A1 類	長さ: [28.3] 幅: [13.9] 厚さ: 1.5 重量: [1,160]	還元 灰色 (N6/)	片岩、白色石英、 砂岩	粘土紐巻き付け成形。凸面: 平行 タタキ後に横方向の回転ナデ。凹 面: 側面に面取り状のケズリ、横 位に布合わせ目痕、輪積痕が明瞭。	728
1号建物跡	第 61 図	116	丸瓦 A2 類	長さ: 42.4 幅: [14.8] 厚さ: 1.8 重量: [1,190]	還元 灰白色 (N7/)	チャート、片岩	粘土紐巻き付け成形。凸面: 縄タ タキ後に横方向の回転ナデ。凹面: 片側面に面取り状のケズリ、側縁 に縦位の割付線、縦位に布合わせ 目痕、下位に輪積痕が明瞭。	1306,1307, 1310,1312, 1313,1319, 1794
1号建物跡	第 61 図	117	丸瓦 A2 類	長さ: 42.3 幅: (広端部) 17.0 厚さ: 2.1 重量: [2,180]	還元 灰黄色 (2.5Y7/2)	チャート、片岩、 白色石英	粘土紐巻き付け成形。凸面: 縄タ タキ後に横方向の回転ナデ。凹面: 側面に面取り状のケズリ、側縁に 縦位の割付線、縦位に布合わせ目 痕。	775,781,783, 803,806,810, 810 下
1号建物跡	第 63 図	118	丸瓦 B 類	長さ: [20.5] 幅: (狭端部) 14.3 厚さ: 1.5 重量: [860]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	軟質赤褐色粒、 白色石英、微細 な白雲母粒多量	粘土板成形。凸面: タタキ面が明瞭、 タタキ後にナデ、タール状の付着 物。	703,706,707, 821,1833
1号建物跡	第 63 図	119	丸瓦 B 類	長さ: [30.5] 幅: [18.4] 厚さ: 1.5 重量: [1,260]	酸化 にぶい褐色 (7.5YR6/3)	凝灰岩、白色石 英、軟質赤褐色 粒	粘土板成形。凸面: ナデ、タール 状の付着物。	1189,1190, 1192
1号建物跡	第 64 図	120	丸瓦 B 類	長さ: [24.2] 幅: [18.7] 厚さ: 1.7 重量: [960]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/3)	チャート、白色 石英、軟質赤褐 色粒	粘土板成形。凸面: ナデ、タール 状の付着物。凹面: 広端部の隅は 内側に折り曲げ隅切り。	1138,1141
1号建物跡	第 64 図	121	丸瓦 B 類	長さ: [27.0] 幅: [18.7] 厚さ: 1.0 重量: [1,600]	酸化 橙色 (2.5YR6/8)	大粒の白色石 英、凝灰岩、片岩、 骨針	粘土板成形。凸面: ナデ、タール 状の付着物。	536,726, 1081,Cy-149
1号建物跡	第 64 図	122	丸瓦 B 類	長さ: [30.9] 幅: [12.5] 厚さ: 1.8 重量: [930]	還元 浅黄色 (2.5y7/3)	白色石英、片岩、 黄褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後にナデ。凹面: タール状 の付着物。	791 周辺, 804,817
1号建物跡	第 64 図	123	丸瓦 B 類	長さ: 31.3 幅: (狭端部) 14.0 厚さ: 2.1 重量: [890]	酸化 にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	大粒の片岩、白 色石英、砂岩	粘土板成形。凸面: タタキ面が明瞭、 タタキ後にナデ、タール状の付着 物。凹面: タール状の付着物。	707,798 下, Cy-148
1号建物跡	第 64 図	124	丸瓦 B 類	長さ: 39.2 幅: [15.1] 厚さ: 1.6 重量: [1,500]	酸化気味 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	白色石英、凝灰 岩、軟質赤褐色 粒、微細な白雲 母粒多量	粘土板成形。凸面: タタキ面が明瞭、 タタキ後にナデ、タール状の付着 物。	696
1号建物跡	第 64 図	125	丸瓦 B 類	長さ: [31.8] 幅: (広端部) (18.7) 厚さ: 1.5 重量: [1,470]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	片岩、白色石英、 軟質赤褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ面が明瞭、タタキ後にナデ、 広端部に布目、タール状の付着物。 凹面: タール状の付着物。	1401,1402
1号建物跡	第 65 図	126	丸瓦 B 類	長さ: [41.5] 幅: (狭端部) 14.8 厚さ: 1.3 重量: [1,330]	還元 灰白色 (N7/3)	白色石英、片岩、 チャート、軟質 赤褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ面が明瞭、タタキ後に縦方 向のナデ。凹面: タール状の付着物。	787,791 下, 818,819, Cy-148
1号建物跡	第 65 図	127	丸瓦 B 類	長さ: [32.5] 幅: [17.5] 厚さ: 1.3 重量: [880]	還元 灰白色 (5Y7/2)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後にナデ。	1368,1373, 1445,1448, 1762,1775, 1776,Db-149
1号建物跡	第 65 図	128	丸瓦 B 類	長さ: [24.6] 幅: [16.5] 厚さ: 1.6 重量: [1,010]	還元 浅黄色 (2.5Y7/2)	白色石英、砂岩、 軟質赤褐色粒、 微細な白雲母粒	粘土板成形。凸面: タタキ後に縦 方向のナデ。凹面: 横骨状の痕跡。	1684
1号建物跡	第 65 図	129	丸瓦 B 類	長さ: [22.2] 幅: (広端部) 17.1 厚さ: 1.5 重量: [940]	還元 浅黄色 (2.5Y7/2)	片岩、白色石英、 凝灰岩、軟質赤 褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ面が明瞭、タタキ後にナデ。 凹面: 粘土板の接合痕明瞭。	1827
1号建物跡	第 66 図	130	丸瓦 B 類	長さ: [13.4] 幅: [12.1] 厚さ: 1.4 重量: [300]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色石英、砂岩、 片岩、軟質赤褐 色粒	粘土板成形。凸面: タタキ面明瞭、 タタキ後に縦方向のナデ。凹面: 側面に面取り状のケズリ。	1166 下, 1167 下
1号建物跡	第 66 図	131	丸瓦 B 類	長さ: [13.8] 幅: [17.3] 厚さ: 1.4 重量: [560]	還元ざみ 浅黄 (2.5Y7/3)	チャート、白色 石英、軟質黄褐 色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後に縦方向のナデ。	780798
1号建物跡	第 66 図	132	丸瓦 B 類	長さ: [7.9] 幅: [11.9] 厚さ: 1.9 重量: [270]	還元 暗灰色 (N3/)	白色石英、片岩、 黒色塊	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後に縦方向のナデ。凹面: 側面・広端面に面取り状のケズリ。	772 周辺, 1656,1657
1号建物跡	第 66 図	133	丸瓦 B 類	長さ: [17.6] 幅: [15.5] 厚さ: 1.4 重量: [540]	酸化 にぶい黄褐色 (10YR7/3)	白色石英、凝灰 岩、軟質赤褐色 粒、黒色塊	粘土板成形。凸面: タタキ面明瞭、 タタキ後に縦方向のナデ。	782
1号建物跡	第 66 図	134	丸瓦 B 類	長さ: [24.9] 幅: [16.8] 厚さ: 1.3 重量: [810]	還元 浅黄色 (2.5Y7/3)	軟質赤褐色粒、 片岩、凝灰岩	粘土板成形。凸面: タタキ面明瞭、 タタキ後に縦方向のナデ。	1648,1654

第 16 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (8) 瓦

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第66図	135	丸瓦B類	長さ:[25.6] 幅:[11.4] 厚さ:1.5 重量:[410]	還元 灰色 (7.5Y6/1)	白色石英、片岩、 暗褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後に縦方向のナデ。	760,762,763
1号建物跡	第66図	136	丸瓦B類	長さ:[27.1] 幅:[12.4] 厚さ:1.7 重量:[680]	酸化気味 灰オリーブ色 (5Y6/3)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒、 黄褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面: タタキ後にナデ。	359,476, Cx-148
1号建物跡	第66図	137	丸瓦B類	長さ:[18.4] 幅:[16.1] 厚さ:1.7 重量:[520]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	片岩、チャート、 軟質赤褐色粒、 黒色塊	粘土板成形。凸面:タタキ後にナデ。	1077,1093
1号建物跡	第68図	138	丸瓦C1類	長さ:[24.5] 幅:[12.5] 厚さ:1.6 重量:[735]	還元 褐灰色 (10YR6/1)	白色石英	凹面:ヨコナデ。端部に僅かな段 差あり。凸面:タテナデ→端部ヨ コナデ。端部内削ぎ状。上半部表 面剥がれ。泥条盤築技法。	1369
1号建物跡	第68図	139	丸瓦C1類	長さ:[7.3] 幅:[5.2] 厚さ:1.0 重量:[52]	還元 灰色 (7.5Y4/1)	白色石英	凹面:ヨコナデ。端部に僅かな段 差あり。凸面:タテナデ→端部ヨ コナデ。端部が内削ぎ状。泥条盤 築技法。	1364
1区 グリッド Db-148	第68図	140	丸瓦C1類	長さ:[6.9] 幅:[7.2] 厚さ:1.5 重量:[79]	還元 黄橙色 (2.5Y5/3)	白色石英、赤褐 色粒、黒色粒少 量	凹面:ヨコナデ、輪積痕残る。凸面: ヨコナデ。泥条盤築技法。	一括
1区	第68図	141	丸瓦C1類	長さ:[7.6] 幅:[8.7] 厚さ:1.2 重量:[96]	還元 浅黄橙色 (10YR8/3)	白色石英	凹面:ヨコナデ。凸面:回転ヨ コナデ。泥条盤築技法。	一括
1区 グリッド Db-148	第68図	142	丸瓦C1類	長さ:[9.7] 幅:[12.0] 厚さ:1.3 重量:[224]	還元 灰白色 (5Y8/1)	片岩、白色石英、 黒色粒	凹面:ヨコナデ、輪積痕残る。凸面: タテナデ。泥条盤築技法。	一括
1区	第69図	143	丸瓦C2類	長さ:[18.8] 幅:[18.8] 厚さ:2.1 重量:[764]	還元 青灰色 (5B6/1)	白色石英、片岩	凹面:ヨコナデ、輪積痕残る。側 縁に面取り条のケズリ。凸面:縄 タタキ。端部ナデ。泥条盤築技法。	一括
1区	第69図	144	丸瓦C2類	長さ:[3.5] 幅:[4.3] 厚さ:1.6 重量:[28]	還元 灰色 (5Y6/1)	白色石英	凹面:剥落。凸面:縄タタキ。泥 条盤築技法。	一括
1区	第69図	145	丸瓦C2類	長さ:[7.0] 幅:[6.7] 厚さ:2.2 重量:[133]	還元 緑灰色 (10G5/1)	白色石英	凹面:ナデ。凸面:縄タタキ。泥 条盤築技法。	一括
1号建物跡	第69図	146	丸瓦C2類	長さ:[4.7] 幅:[5.3] 厚さ:1.3 重量:[55]	還元 浅黄色 (2.5Y7/4)	白色石英、赤褐 色粒	凹面:ナデ。凸面:縄タタキ。泥 条盤築技法。	一括
1区 グリッド Cy-149	第69図	147	丸瓦C2類	長さ:[8.2] 幅:[6.3] 厚さ:1.9 重量:[112]	還元 灰白色 (7.5Y8/1)	白色石英	凹面:ヨコナデ。側縁に面取り条 のケズリ。凸面:縄タタキ。泥条 盤築技法。	一括
1号建物跡	第70図	148	丸瓦C2類	長さ:[7.0] 幅:[12.5] 厚さ:1.6 重量:[176]	還元 青灰色 (5B6/1)	白色石英、黒色 粒	凹面:ヨコナデ、輪積痕残る。側 縁に面取り条のケズリ。凸面:縄 タタキ。泥条盤築技法。	1248
1区 グリッド Cw-150	第70図	149	丸瓦C2類	長さ:[11.5] 幅:[11.5] 厚さ:1.3 重量:[245]	酸化 明黄褐色 (10YR7/6)	白色石英、片岩	凹面:ヨコナデ、輪積痕残る。凸面: 縄タタキ。泥条盤築技法。	一括
1号建物跡	第72図	150	平瓦A1類	長さ:50.2 幅:(広端部)31.2 厚さ:2.0 重量:[4,400]	還元 灰色 (N6/)	大粒の白色石 英、片岩	粘土板桶巻き成形。凹面:広端部 は布袋外のため模骨痕明瞭、全体 に糸切り痕。凸面:平行タタキ後 に横方向の回転ナデ。	755,758, 772周辺, 1654,1655下
1号建物跡	第72図	151	平瓦A1類	長さ:51.0 幅:[27.8] 厚さ:2.5 重量:[3,900]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	大粒の白色石 英、片岩、	粘土板桶巻き成形。凹面:模骨痕 明瞭、全体に糸切り痕。凸面:平 行タタキ後に横方向の回転ナデ、 広端部に二重線。	1400,1766, Db-149, Dc-149
1号建物跡	第73図	152	平瓦A1類	長さ:[48.8] 幅:[31.8] 厚さ:2.3 重量:[4,670]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	大粒の白色石 英、片岩、軟質 赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面:糸切り 後に模骨痕を縦方向の指ナデで平 滑、広端部縦方向のナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1453
1号建物跡	第73図	153	平瓦A1類	長さ:51.1 幅:[28.7] 厚さ:2.0 重量:[3,150]	酸化 にぶい褐色 (7.5YR6/3)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面:側面部 分的に面取り状のケズリ、模骨痕 を縦方向の指ナデで平滑、狭端部 横方向のナデ。凸面:平行タタキ 後に横方向の回転ナデ。	671,672,674, 675,799
1号建物跡	第74図	154	平瓦A1類	長さ:38.5 幅:(狭端部)27.9 厚さ:2.0 重量:[3,100]	酸化 にぶい褐色 (5YR6/3)	大粒の片岩、白 色石英、砂岩、 軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面:側面に 面取り状のケズリ、糸切り痕、模 骨痕は明瞭。凸面:平行タタキ後 に全体にナデ。	829,841,842, 844,1046, 1049,1083, Cy-149

第 17 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (9) 瓦

( ) : 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第74図	155	平瓦 A1 類	長さ: 40.8 幅: (狭端部) (26.0) (広端部) 29.8 厚さ: 1.9 重量: 4.680	酸化 にぶい橙色 (2.5YR6/4)	大粒の片岩・白色石英、砂岩、骨針	粘土板桶巻き成形、凹面: 糸切り痕、模骨痕は縦方向の指ナデで消す。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	687
1号建物跡	第75図	156	平瓦 A1 類	長さ: [27.0] 幅: (狭端部) (26.8) 厚さ: 1.9 重量: [1.620]	還元 灰色 (N6/)	片岩、白色石英	粘土板桶巻き成形、凹面: 糸切り痕、模骨痕は縦方向の指ナデで消す。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1004,1011, 1011下, Cy-149
1号建物跡	第75図	157	平瓦 A1 類	長さ: 50.0 幅: (広端部) 31.0 厚さ: 2.5 重量: [5.000]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	大粒の白色石英、チャート、片岩	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕を縦方向の指ナデで平滑、側縁に横の指ナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	710,1039, 1043,Cy-149
1号建物跡	第76図	158	平瓦 A1 類	長さ: 42.3 幅: (狭端部) (26.8) 厚さ: 1.7 重量: [3.150]	還元 灰色 (N6/)	大粒の白色石英、砂岩、チャート	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕部分的に指ナデで消す、側面・広端部の一部に面取り状のケズリ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	714下, 717,719
1号建物跡	第76図	159	平瓦 A1 類	長さ: [34.7] 幅: (狭端部) (26.7) 厚さ: 2.4 重量: [3.000]	還元 灰色 (N5/)	片岩、白色石英	粘土板桶巻き成形、凹面: 糸切り痕、模骨痕は縦方向の指ナデで消す。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1326~1328, 1346,1351, 1795.Db-148
1号建物跡	第77図	160	平瓦 A1 類	長さ: [25.3] 幅: (狭端部) 25.1 厚さ: 2.4 重量: [2.540]	還元 灰色 (N5/)	白色石英、チャート	粘土板桶巻き成形、凹面: 糸切り痕、模骨痕は縦方向の指ナデで消す。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1315,1323, 1325,1413, Db-149
1号建物跡	第77図	161	平瓦 A1 類	長さ: [27.7] 幅: [29.6] 厚さ: 2.6 重量: [2.380]	酸化 橙色 (5YR7/6)	大粒の片岩、白色石英、チャート、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形、凹面: 糸切り後に縦方向の指ナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	785
1号建物跡	第77図	162	平瓦 A1 類	長さ: [19.3] 幅: [15.2] 厚さ: 2.0 重量: [860]	酸化 にぶい橙色 (5YR6/4)	大粒の片岩、チャート、白色石英	粘土板桶巻き成形、粘土板は部分的に2枚合わせ。凹面: 側面に面取り状のケズリ、狭端部はヨコナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	679,741
1号建物跡	第77図	163	平瓦 A1 類	長さ: [29.3] 幅: [14.3] 厚さ: 2.0 重量: [1,000]	酸化 橙色 (7.5YR6/6)	大粒の片岩、白色石英、チャート、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕を縦方向の指ナデで平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1847
1号建物跡	第78図	164	平瓦 A1 類	長さ: [34.7] 幅: [17.7] 厚さ: 2.0 重量: [1,200]	還元 灰色 (N5/)	大粒の白色石英、砂岩	粘土板桶巻き成形。凹面: 縦ナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	710,1039, 1043,Cy-149
1号建物跡	第78図	165	平瓦 A1 類	長さ: [29.5] 幅: [23.5] 厚さ: 1.9 重量: [2,000]	還元 灰白色 (N7/)	大粒の片岩、白色石英、砂岩	粘土板桶巻き成形、粘土板は部分的に2枚合わせ。凹面: 模骨痕を縦方向の指ナデで平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	814
1号建物跡	第78図	166	平瓦 A1 類	長さ: 34.8 幅: [17.8] 厚さ: 2.1 重量: [1,960]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	白色石英、凝灰岩、骨針	粘土板桶巻き成形。凹面: 側面に面取り状のケズリ、狭端部斜方向の指ナデ、その他部分的に縦方向の指ナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1065,1070, 1070下
1号建物跡	第78図	167	平瓦 A1 類	長さ: [27.8] 幅: [14.7] 厚さ: 1.6 重量: [800]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、片岩	粘土板桶巻き成形。凹面: 糸切り痕、側縁に分割線。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	743,797
1号建物跡	第78図	168	平瓦 A1 類	長さ: [22.3] 幅: [16.2] 厚さ: 1.5 重量: [760]	酸化 にぶい赤褐色 (5YR5/4)	白色石英、片岩、砂岩、チャート、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕明瞭、糸切り痕、タール状の付着物。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	695,711,712, 715下,728, Cy-148
1号建物跡	第78図	169	平瓦 A1 類	長さ: [25.2] 幅: [19.6] 厚さ: 1.7 重量: [920]	酸化気味 にぶい黄褐色 (10YR7/3)	チャート、白色石英、黄褐色粒	粘土板桶巻き成形、粘土板は部分的に2枚合わせ。凹面: 糸切り後、模骨痕を縦方向の指ナデにより平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	418,402,409, Cx-149
1号建物跡	第79図	170	平瓦 A1 類	長さ: [30.8] 幅: [16.4] 厚さ: 2.1 重量: [1,300]	酸化 にぶい橙色 (5YR6/4)	大粒の白色石英、片岩、凝灰岩	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕明瞭、模骨痕を縦方向の指ナデで平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1171, 廃土
1号建物跡	第79図	171	平瓦 A1 類	長さ: [33.8] 幅: [16.6] 厚さ: 2.0 重量: [1,100]	酸化 灰赤色 (2.5YR6/2)	チャート、片岩、骨針、白色石英	粘土板桶巻き成形。凹面: 糸切り後、模骨痕を縦方向の指ナデにより平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1384,1392, Db-149, Dc-149
1号整地土	第79図	172	平瓦 A1 類	長さ: [31.0] 幅: [12.4] 厚さ: 2.1 重量: [1,080]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR6/4)	大粒の片岩、白色石英、軟質赤褐色粒、チャート	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕明瞭、模骨痕を縦方向の指ナデにより平滑、縦位に布合わせ目痕。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	151,154下, 195
1号建物跡	第79図	173	平瓦 A1 類	長さ: [22.2] 幅: [22.6] 厚さ: 2.8 重量: [1,730]	還元 灰色 (N5/)	大粒の片岩、白色石英、チャート	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕明瞭、模骨痕を縦方向の指ナデで消す。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1849,1850, 1852,1862

第 18 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (10) 瓦

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第 79 図	174	平瓦 A1 類	長さ: [17.7] 幅: [25.4] 厚さ: 2.1 重量: [1,430]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕 明瞭、糸切り後、模骨痕を縦方向 のナデにより平滑。凸面: 平行タ タキ後に横方向の回転ナデ。	521,1343
1号建物跡	第 79 図	175	平瓦 A1 類	長さ: [29.6] 幅: [16.5] 厚さ: 3.0 重量: [1,360]	還元 灰白色 (2.5Y7/1)	大粒の白色石 英、チャート	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕 を縦方向のナデで消す。凸面: 平 行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1850,1861
1号建物跡	第 80 図	176	平瓦 A1 類	長さ: [34.2] 幅: [22.0] 厚さ: 2.1 重量: [1,560]	酸化 にぶい橙色 (2.5YR6/4)	片岩、白色石英、 軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕 を縦方向のナデで消す。凸面: 平 行タタキ後に横方向の回転ナデ。	865,869,870, Cy-149
1号建物跡	第 80 図	177	平瓦 A1 類	長さ: [24.6] 幅: [28.7] 厚さ: 2.3 重量: [1,960]	還元 黄灰色 (2.5Y7/2)	白色石英、チャ ート、軟質赤褐色 粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 糸切り 後に模骨痕を縦方向のナデで消す。 凸面: 平行タタキ後に横方向の回 転ナデ。	1289,1808, Db-148
1号建物跡	第 80 図	178	平瓦 A1 類	長さ: [28.2] 幅: (広端部) 33.2 厚さ: 2.1 重量: [2,780]	還元 灰白色 (5Y7/2)	白色石英、砂岩 チャート、黄褐 色塊	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕 明瞭、糸切り後に模骨痕を縦方向 のナデで消す、側縁に分割線。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	1026,1027, 1085 下, Cy-149
1号建物跡	第 81 図	179	平瓦 A2 類	長さ: [20.4] 幅: [17.3] 厚さ: 1.7 重量: [880]	還元 淡黄色 (2.5Y8/3)	白色石英、チャ ート、砂岩	粘土板桶巻き成形、凹面: 側面・ 広端面は幅広の面取り状のケズリ、 糸切り痕。凸面: 平行タタキ後に 横方向の回転ナデ。	744,843
1号建物跡	第 81 図	180	平瓦 A2 類	長さ: 39.5 幅: (狭端部) 18.3 (広端部) 24.5 厚さ: 2.3 重量: 3,550	還元 灰白色 (7.5Y8/1)	片岩、白色石英	粘土板桶巻き成形、凹面: 側面・ 狭端面・広端面は面取り状のケズ リ、模骨痕は明瞭。凸面: 平行タ タキ後に横方向の回転ナデ、布目 あり。	1454,1462
1号建物跡	第 81 図	181	平瓦 A2 類	長さ: [13.6] 幅: [18.2] 厚さ: 1.7 重量: [520]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	白色石英、チャ ート	粘土板桶巻き成形。凹面: 側面・ 広端面に面取り状のケズリ、糸切 り痕。凸面: 平行タタキ後に横方 向の回転ナデ。	1285,1288
1号建物跡	第 81 図	182	平瓦 A2 類	長さ: [18.4] 幅: [16.0] 厚さ: 2.0 重量: [860]	還元 灰白色 (7.5Y8/1)	白色石英、チャ ート	粘土板桶巻き成形、粘土板は 2 枚 合わせ。凹面: 側面は幅広の面取 り状のケズリ、糸切り後に模骨痕 を縦方向のナデで平滑。凸面: 平 行タタキ後にナデ。	552,1086 下
1号建物跡	第 83 図	183	平瓦 B 類	長さ: 42.3 幅: (広端部) 22.7 厚さ: 1.5 重量: [1,360]	還元 灰色 (N6/)	チャート、炭化 材、軟質赤褐色 粒	粘土板 1 枚作り。凹面: 側面に面 取り状のケズリ。凸面: 全体にナデ。	361,389, 392 下,427, 429,434, 436 下,438, 441,526, Cx-149, Cy-149
1号建物跡	第 84 図	184	平瓦 B 類	長さ: 40.6 幅: [27.1] 厚さ: 1.9 重量: [2,900]	酸化 橙色 (5YR6/6)	大粒の白色石英・ 片岩、砂岩、骨針、 軟質赤褐色粒	粘土板 1 枚作り、粘土板は带状。 凹面: やや粗い布目。凸面: 全体 にナデ。	772 周辺, 807 ~ 809, 1651,1652, Cy-148
1号建物跡	第 84 図	185	平瓦 B 類	長さ: 41.0 幅: (狭端部) (27.5) (広端部) (28.7) 厚さ: 1.9 重量: [3,220]	還元 灰白色 (7.5Y7/)	片岩、白色石英、 軟質赤褐色粒	粘土板 1 枚作り。凹面: やや粗い 布目。凸面: 全体にナデ。	1391,1424 ~ 1426,1432 ~ 1435,1437 ~ 1444,1463, 1779
1号建物跡	第 85 図	186	平瓦 B 類	長さ: 40.0 幅: (狭端部) 19.8 (広端部) 21.3 厚さ: 1.8 重量: [2,080]	還元 灰白色 (5Y7/2)	砂岩、白色石英、 凝灰岩	粘土板 1 枚作り、粘土板は带状。 凹面: 中央縦位に布合わせ目痕。 凸面: 全体にナデ。	831,1044, 1050,1053, 1056,1064, 1065 下, 1067 ~ 1069, 1070,1075, 1708,Cy-148, Cy-149, 注記なし
1号建物跡	第 85 図	187	平瓦 B 類	長さ: 39.8 幅: (狭端部) 21.6 厚さ: 2.0 重量: [2,700]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、片岩	粘土板 1 枚作り。凹面: 側面部分 的に面取り状のケズリ。凸面: 平 行タタキ後にナデ。	1423,1455, 1456
1号建物跡	第 86 図	188	平瓦 B 類	長さ: 40.6 幅: [17.3] 厚さ: 1.5 重量: [1,640]	還元 浅黄橙色 (10YR8/3)	軟質赤褐色粒、 片岩、チャート	粘土板 1 枚作り。凸面: 側面に面 取り状のケズリ、縦方向のナデ。	558,879, 1007,1012, 1013,1017, 1020,Cx-149
1号建物跡	第 86 図	189	平瓦 B 類	長さ: 41.2 幅: [18.3] 厚さ: 2.1 重量: [1,760]	還元 灰白色 (5Y7/2)	大粒の白色石 英、片岩、黄褐 色粒	粘土板 1 枚作り。凸面: 縦方向の ナデ、布目。	1394,1446, Db-149
1号建物跡	第 87 図	190	平瓦 B 類	長さ: 40.4 幅: (広端部) 23.0 厚さ: 2.0 重量: [2,060]	還元 灰色 (5Y6/)	白色石英、片岩、 微細な白雲母粒 多量	粘土板 1 枚作り。凸面: 縦方向の ナデ。	708,791 周辺, 1645 ~ 1647
1号建物跡	第 87 図	191	平瓦 B 類	長さ: 41.0 幅: [15.8] 厚さ: 1.7 重量: [1,221]	還元 浅黄色 (2.5Y7/4)	軟質赤褐色粒、 片岩、砂岩	粘土板 1 枚作り。凸面: 全体にナデ。	390,394,395, Cx-149

第 19 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (11) 瓦

( ): 推定値、[ ]: 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
1号建物跡	第87図	192	平瓦B類	長さ:[18.5] 幅:[18.3] 厚さ:1.0 重量:[400]	酸化気味 にぶい橙色 (10YR7/4)	白色石英、凝灰 岩、黄褐色粒	粘土板1枚作り。凸面:タタキ面 明瞭、タタキ後にナデ。	1713,1714
1号建物跡	第87図	193	平瓦B類	長さ:[13.7] 幅:[14.8] 厚さ:1.2 重量:[360]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、透明 石英、黄褐色粒	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凸面:タタキ後に縦方向のナデ。	942,Cy-149
1号建物跡	第88図	194	平瓦B類	長さ:[40.2] 幅:[22.8] 厚さ:2.0 重量:[1,980]	還元 灰白色 (N7/)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凹面:粗い布目。凸面:全体にナデ。	680,1654
1号建物跡	第88図	195	平瓦B類	長さ:[19.0] 幅:[25.9] 厚さ:2.2 重量:[1,320]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、片岩、 骨針	粘土板1枚作り。凹面:粗い布目。 凸面:全体にナデ。	508,518, 518下,522
1号建物跡	第88図	196	平瓦B類	長さ:[24.2] 幅:[24.7] 厚さ:2.0 重量:[1,440]	酸化 橙色 (5YR7/6)	赤チャート、片 岩、軟質赤褐色 粒、白色石英	粘土板1枚作り。凹面:やや粗い 布目。凸面:全体にナデ、ター ル状の付着物。	1014, 1031下, 1018
1号建物跡	第89図	197	平瓦B類	長さ:[23.2] 幅:[18.9] 厚さ:1.7 重量:[1,000]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、片岩、 チャート、軟質 赤褐色粒	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凸面:タタキ後に縦方向のナデ。	544
1号建物跡	第89図	198	平瓦B類	長さ:[17.8] 幅:[23.2] 厚さ:2.2 重量:[1,130]	酸化気味 灰黄色 (2.5YR7/2)	白色石英、片岩、 軟質赤褐色粒、 角閃石、骨針	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凸面:タタキ面明瞭、タタキ後に 縦方向のナデ。	826
1号建物跡	第89図	199	平瓦B類	長さ:[26.1] 幅:[18.1] 厚さ:1.2 重量:[800]	酸化気味 にぶい橙色 (10YR7/3)	軟質赤褐色粒、 黒色粒	粘土板1枚作り。凸面:タタキ面 明瞭、タタキ後にナデ。	791下,792
1号建物跡	第89図	200	平瓦B類	長さ:[15.7] 幅:(狭端部) 22.4 厚さ:2.2 重量:[1,360]	酸化気味 灰色 (N4/)	チャート、白色 石英、炭化材、 凝灰岩	粘土板1枚作り、粘土板は部分的 に2枚合わせ。凹面:ター ル状の 付着物。凸面:タタキ面明瞭、タ タキ後に縦方向のナデ。	696下,728, 1077,1711, 1727
1号建物跡	第90図	201	平瓦B類	長さ:[37.9] 幅:[29.1] 厚さ:2.5 重量:[2,710]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	大粒の白色石 英、片岩、軟質 赤褐色粒	粘土板1枚作り。凹面:やや粗い 布目。凸面:全体にナデ。	936,991, 1000下, 1742
1号建物跡	第90図	202	平瓦B類	長さ:[26.5] 幅:[28.5] 厚さ:1.9 重量:[1,820]	酸化 橙色 (5YR7/6)	大粒の軟質赤 褐色粒、片岩、 チャート	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凸面:全体にナデ、ター ル状の付 着物。	1022下, 1707,1825, 1826
1号建物跡	第90図	203	平瓦B類	長さ:[18.8] 幅:[23.3] 厚さ:1.7 重量:[930]	還元 灰色 (N6/)	白色石英、片岩、 炭化材	粘土板1枚作り。凸面:タタキ後 にナデ。棒状工具による「/」線。	494,503下, 505,518下
1号建物跡	第91図	204	平瓦B類	長さ:[17.5] 幅:[18.7] 厚さ:1.5 重量:[670]	酸化気味 灰色 (N5/)	片岩、白色石英、 軟質赤褐色粒	粘土板1枚作り。凸面:タタキ後 に縦方向のナデ。	512,512下, 531
1号建物跡	第91図	205	平瓦B類	長さ:[23.5] 幅:[20.6] 厚さ:1.5 重量:[640]	還元 浅黄色 (2.5Y7/3)	チャート、白色 石英、黄褐色粒、 黒色塊	粘土板1枚作り。凸面:タタキ面 明瞭、タタキ後に縦方向のナデ。	903,909,920, Cy-149
1号建物跡	第91図	206	平瓦B類	長さ:[17.4] 幅:[22.8] 厚さ:1.4 重量:[840]	還元 灰白色 (N7/)	白色石英、軟質 赤褐色粒、片岩、 砂岩	粘土板1枚作り、粘土板は帯状。 凸面:タタキ後に縦方向のナデ。	1743,1736, 1738
61号住居跡	第92図	207	文字瓦 平瓦A2カ	長さ:[23.5] 幅:[25.0] 厚さ:3.1 重量:[2,731]	還元 黄褐色 (10YR5/6)	白色石英	凹面:布目、側縁に面取り状のケ ズリ。粘土板切り離し時の条痕 あり。凸面:タテナデ。すず付着。 カマドの構築材に転用。線刻「大十」 か。	59
1号建物跡	第92図	208	文字瓦 平瓦A2カ	長さ:[12.5] 幅:[7.0] 厚さ:2.5 重量:[286]	酸化 橙色 (5YR6/8)	白色石英	凹面:布目。凸面:ナデ。凸面に 線刻「大十」。	1091
1号建物跡	第92図	209	文字瓦 平瓦カ	長さ:[17.2] 幅:[13.2] 厚さ:1.6 重量:[501]	還元 青灰色 (5B6/1)	白色石英	凹面:布目。凸面:ナデ。凸面に 線刻「田」。	1767
61号住居跡	第92図	210	文字瓦 軒丸瓦Dカ	長さ:[13.0] 幅:[7.0] 厚さ:2.1 重量:[307]	還元 青灰色 (5PB5/1)	白色石英、チャー ト	凹面:布目、側縁に面取り状のケ ズリ。凸面:ナデ。凸面に線刻。 判別不可。	25
トレンチ13	第93図	211	文字瓦 平瓦A	長さ:[6.7] 幅:[10.0] 厚さ:2.2 重量:[158]	還元 灰赤色 (2.5YR5/2)	白色石英、片岩	凹面:布目→ナデ。凸面:ナデ。 凸面に線刻「三」か。	Z13

第20表 牛田廃寺跡出土遺物観察表(12) 瓦・鉄製品

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称
トレンチ 13	第93図	212	文字瓦 平瓦 A	長さ: [4.7] 幅: [10.5] 厚さ: 2.4 重量: [158]	還元 灰黄色 (2.5YR7/2)	片岩、白色石英、 黒色粒	凹面: 布目、模骨痕。粘土板切り 離し時の条痕あり。凸面: ナデ。 凸面に線刻。判別不可。	一括
1区	第93図	213	文字瓦 平瓦 A2 カ	長さ: [11.0] 幅: [11.5] 厚さ: 2.1 重量: [307]	酸化 灰白色 (10YR8/1)	白色石英	凹面: 布目。凸面: ナデ。凹面に スタンプ二重開いの「方」か。	一括
106号住居跡	第93図	214	文字瓦 平瓦 B類	長さ: 44.0 幅: (狭端部) 26.3 (広端部) (33.0) 厚さ: 2.7 重量: [5,000]	酸化 浅黄色 (2.5y7/4)	片岩、チャート、 白色石英、軟質 赤褐色粒	粘土板1枚作り。凹面: 狭端部に 棒状工具による「ハ」、ヘラ描きに よる「勾」、刻印「方」の字。凸面: 平行タタキ後に全体にナデ。	H-106, No. 27
1号建物跡	第94図	215	平瓦 A類 道具瓦 (隅切平瓦)	長さ: [25.5] 幅: [14.8] 厚さ: 2.9 重量: [251]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色石英、片岩、 チャート、黒色 粒、赤褐色粒	凹面: 布目→タテナデ、模骨痕あり。 凸面: 平行タタキ→回転ヨコナデ。 平瓦 A を焼成前に端部斜め切り取 り。	1520,1521, 1522
1号建物跡	第94図	216	平瓦 道具瓦 (隅切平瓦)	長さ: [30.4] 幅: [17.4] 厚さ: 2.5 重量: [1,584]	還元 青灰色 (5BG6/1)	白色石英、黒色 粒、片岩	凹面: 粘土板切り離し痕、布目。 凸面: タテナデ。焼成後、両端部 打ち割り。	691,1073
1区	第95図	217	丸瓦 A類 道具瓦カ (隅切丸瓦)	長さ: [10.0] 幅: [8.2] 厚さ: 2.9 重量: [251]	酸化 橙色 (5YR6/6)	片岩、白色石英、 赤褐色粒、黒色 粒	凹面: 布目。凸面: タテナデ。丸 瓦 A を焼成前に端部斜め切り取 り。	一括
1区	第95図	218	丸瓦 A類 道具瓦 (隅切丸瓦)	長さ: [9.9] 幅: [9.0] 厚さ: 1.6 重量: [141]	還元 灰白色 (10YR7/1)	白色石英、赤褐 色粒、黒色粒	凹面: 布目、輪積痕あり。凸面: 平行タタキ→ヨコナデ。丸瓦 A を 焼成前に端部斜め切り取 り。	一括
1号建物跡	第95図	219	道具瓦 (熨斗瓦)	長さ: [21.2] 幅: [9.5] 厚さ: 1.7 重量: [310]	還元 灰白色 (2.5Y7/1)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	凹面: 布目。凸面: タテナデ、平 瓦 B と同じ調整・胎土。	694
1号建物跡	第95図	220	道具瓦 (熨斗瓦)	長さ: [18.8] 幅: [9.0] 厚さ: 1.2 重量: [311]	還元 にぶい黄橙色 (10YR7/1)	片岩、白色石英、 赤褐色粒	凹面: 布目。凸面: タテナデ、平 瓦 B と同じ調整・胎土。	802
1号整地土	第95図	221	道具瓦 (熨斗瓦)	長さ: [20.3] 幅: [11.7] 厚さ: 1.3 重量: [419]	還元 灰白色 (7.5Y7/1)	白色石英、黒色 粒	凹面: 布目。凸面: ナデ。平瓦 B と同じ調整・胎土。平瓦 B を半裁 している可能性があるが、端部摩 滅しているため不明。	191
遺構名	図No.	No.	種別	残存	法量 (cm)		備考	注記
1号建物跡	第96図	222	釘	ほぼ完形	長さ: [5.2]、幅: 0.6、厚さ: 0.3、重量: 3.868g			No.3
1号建物跡	第96図	223	釘	完形	長さ: 10.2、幅: 0.6、厚さ: 0.55、重量: 16.186g			No.18
1号建物跡	第96図	224	釘	完形	長さ: 13.4、幅: 0.75、厚さ: 0.7、重量: 28.875g			No.9
1号建物跡	第96図	225a	釘	1/3	長さ: [3.8]、幅: 1.0、厚さ: 0.7、重量: 7.590g		225b と同一	No.15b
1号建物跡	第96図	225b	釘	2/3	長さ: [8.1]、幅: 0.7、厚さ: 0.65、重量: 17.702g		225a と同一	No.15a
1号建物跡	第96図	226	釘	完形	長さ: 13.1、幅: 0.7、厚さ: 0.7、重量: 35.346g			No.10
1号建物跡	第96図	227	釘	完形	長さ: 11.6、幅: 0.7、厚さ: 0.6、重量: 22.704g			No.17
1号建物跡	第96図	228	釘	4/5	長さ: [12.3]、幅: 1.05、厚さ: 1.0、重量: 38.9590g			表採
1号建物跡	第96図	229	釘	4/5	長さ: [19.0]、幅: 1.1、厚さ: 1.0、重量: 89.820g			表採
1号建物跡	第96図	230	釘	2/3	長さ: 4.1、幅: 0.6、厚さ: 0.6、重量: 8.868g			No.10
1区	第96図	231	釘	完形	長さ: 4.0、幅: 0.9、厚さ: 0.7、重量: 4.317g			一括
1号整地土	第96図	232	釘	5/4	長さ: [10.5]、幅: 0.75、厚さ: 0.6、重量: 24.025g			No.2
1号建物跡	第96図	233	釘	2/3	長さ: [8.8]、幅: 0.7、厚さ: 0.7、重量: 31.274g			No.4
1号整地土	第96図	234	釘	1/3	長さ: [4.5]、幅: 0.8、厚さ: 0.6、重量: 6.900g			No.54
3号溝	第96図	235	釘	1/2	長さ: [6.95]、幅: 0.7、厚さ: 0.6、重量: 12.705g			No.1
1号整地土	第96図	236	釘	2/3	長さ: [5.4]、幅: 0.7、厚さ: 0.45、重量: 7.660g			No.5
3号溝	第96図	237	釘	1/2	長さ: [2.7]、幅: 0.5、厚さ: 0.3、重量: 1.953g			No.1
トレンチ 13	第96図	238	釘	1/2	長さ: [8.5]、幅: 0.8、厚さ: 0.8、重量: 27.377g			
1号建物跡	第96図	239a	釘	破片	長さ: [3.4]、幅: 0.65、厚さ: 0.4、重量: 6.673g		239b と同一	No.8a
1号建物跡	第96図	239b	釘	破片	長さ: [5.2]、幅: 0.65、厚さ: 0.4、重量: 6.072g		239a と同一	No.8b
1号建物跡	第96図	240	釘	1/3	長さ: [6.1]、幅: 0.8、厚さ: 0.7、重量: 24.656g			No.19
Cv-150G	第96図	241	釘	1/4	長さ: [5.2]、幅: 0.9、厚さ: 0.6、重量: 12.695g			
1号整地土	第96図	242	釘	破片	長さ: [3.7]、幅: 0.6、厚さ: 0.5、重量: 11.058g			No.3
1号建物跡	第96図	243	釘	1/4	長さ: [4.4]、幅: 0.6、厚さ: 0.5、重量: 5.116g			No.16
1号整地土	第96図	244	釘	1/5	長さ: [4.1]、幅: 1.0、厚さ: 0.6、重量: 9.648g			No.6
1号整地土	第96図	245	釘	破片	長さ: [3.9]、幅: 0.9、厚さ: 0.6、重量: 4.715g			No.2
1号建物跡	第96図	246	釘	1/5	長さ: [3.8]、幅: 0.9、厚さ: 0.8、重量: 8.993g			No.5
1号整地土	第97図	247	釘	1/5	長さ: [6.3]、幅: 0.9、厚さ: 0.8、重量: 19.309g			一括
1号整地土	第97図	248	釘	2/3	長さ: [4.0]、幅: 0.55、厚さ: 0.45、重量: 13.973g			No.14
1号建物跡	第97図	249	釘	1/3	長さ: [4.9]、幅: 0.7、厚さ: 0.6、重量: 9.720g			表採
1号建物跡	第97図	250	釘	完形	長さ: 6.0、幅: 0.8、厚さ: 0.65、重量: 9.765g			No.13
1号建物跡	第97図	251a	釘	2/3	長さ: [5.6]、幅: 0.5、厚さ: 0.4、重量: 16.163g		251b と同一	No.9
1号建物跡	第97図	251b	釘	1/3	長さ: [3.1]、幅: 0.5、厚さ: 0.3、重量: 1.494g		251a と同一	No.9
トレンチ 8	第97図	252	鏃	茎部破片	長さ: [4.7]、幅: 0.55、厚さ: 0.3、重量: 3.81g			
1号建物跡	第97図	253	鏃	茎部破片	長さ: [3.0]、幅: 0.5、厚さ: 0.45、重量: 3.318g			No.7

第 21 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (13) 鉄製品・土器・瓦

( ) : 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	図 No.	No.	種別	残存	法量 (cm)				備考	注記	
1号整地土	第97図	254	鋸か	1/2	長さ:[4.4]、幅:0.6、厚さ:0.35、重量:3.340g					No.11	
1号建物跡 (Da-149G)	第97図	255	馬具(引手)	1/2	長さ:[3.9]、幅:1.6、径:0.5、重量:6.823g					Da-149G	
トレンチ 20	第97図	256	環状不明	3/4	長さ:5.25、幅:2.1、厚さ:1.0、重量:11.541g				刀装具(貴金具)か。		
1区	第97図	257	刀子	1/3	長さ:[4.6]、刃部幅:0.7、刃部厚さ:0.45、柄部幅:0.45、柄部厚さ:0.35、重量:5.723g				一括		
1号建物跡	第97図	258	不明	破片	長さ:[3.4]、幅:[2.9]、厚さ:2.7、重量:26.470g				表採		
1号建物跡	第97図	259	不明	破片	長さ:[5.3]、幅:[4.6]、厚さ:0.4、重量:49.194g				断面四角の鉄製品が附着?	No.645	
1号建物跡	第97図	260	不明	破片	長さ:[6.0]、幅:5.9、厚さ:0.8、重量:150.003g					No.12	
1号建物跡	第97図	261a	不明	破片	長さ:[2.7]、幅:、厚さ:0.4、重量:6.931g				261b・cと同一か	No.19a	
1号建物跡	第97図	261b	不明	破片	長さ:[4.4]、幅:2.8、厚さ:0.4、重量:29.864g				261a・cと同一か	No.19b	
1号建物跡	第97図	261c	不明	破片	長さ:[3.5]、幅:[2.2]、厚さ:0.6、重量:15.367g				261a・bと同一か	No.19c	
遺構名	図 No.	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
1号建物跡	第98図	262	土師器 甕	口縁部 1/6	口径:(20.0) 底径:— 器高:[4.4]	内外:にぶい 橙	片岩粒・ 赤色粒・ 白色粒	良好	外:口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内:口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	6C	
1号建物跡	第98図	263	土師器 小形鉢	底部欠損	口径:13.4 底径:— 器高:[8.1]	外:橙、内: にぶい橙	褐色粒・ 白色粒	良好	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ後、下半ナデ。内:口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	6C	
1号建物跡	第98図	264	須恵器 甕	口縁部 1/8	口径:(23.2) 底径:— 器高:[7.0]	内外:灰白	白色粒	還元焰	外:タタキ。口縁部回転ナデ。胴部タタキ後、ヘラナデ。内:タタキ。当て道具痕(同心円文)を残す。	6C	
1号建物跡	第98図	265	須恵器 甕	口縁部小片	口径:— 底径:— 器高:[3.9]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロク口整形。口縁部回転ナデ。内:ロク口整形。口縁部回転ナデ。	古代	
1号建物跡	第98図	266	須恵器 甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:灰白	石英・ 褐色粒・ 白色粒	還元焰	外:タタキ。頸部回転ナデ。胴部タタキ後、ナデ。内:タタキ。頸部～胴部回転ナデ。	古代	
1号建物跡	第98図	267	須恵器 甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:灰白	白色粒	還元焰	外:胴部タタキ(平行タタキ目)。内:タタキ。胴部ナデ(当て道具痕を残す)。	古代	
1号建物跡	第98図	268	須恵器 蓋	口縁部 1/6	口径:(11.4) 底径:— 器高:[3.4]	外:褐灰、 内:灰	白色粒	還元焰	外:ロク口整形。口縁部回転ナデ。天井部回転ヘラケズリ。内:ロク口整形。口縁部～天井部回転ナデ。	6C 中頃	
1号建物跡	第98図	269	須恵器 杯	底部 1/4	口径:— 底径:(7.0) 器高:[1.3]	内外:灰	褐色粒・ 白色粒	還元焰	外:ロク口整形。体部回転ナデ。底部回転糸切り。内:ロク口整形。体部～底部回転ナデ。	9C	
1号建物跡	第98図	270	須恵器 高台付杯	底部 2/3	口径:— 底径:6.9 器高:[1.4]	内外:灰	褐色粒・ 白色粒	還元焰	外:ロク口整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁周縁回転ナデ。内:ロク口整形。体部～底部回転ナデ。	9C末 ～ 10C初	
1号建物跡	第98図	271	須恵器 高台付杯	底部 1/3	口径:— 底径:(6.0) 器高:[2.1]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロク口整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁回転ナデ。内:体部～底部回転ナデ。	9C末 ～ 10C初	
1号建物跡	第98図	272	須恵器 高台付杯	底部 1/3	口径:— 底径:(7.0) 器高:[1.4]	内外:浅黄	片岩粒・ 輝石・ 白色粒	還元焰 不良	外:ロク口整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁回転ナデ。内:ロク口整形。底部回転ナデ。	9C末 ～ 10C初	
1号建物跡	第98図	273	須恵器 高盤	台部上半	口径:— 底径:— 器高:[4.3]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロク口整形。台部回転ナデ。内:ロク口整形。台部回転ナデ。	6C後半 ～ 7C	
出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)		焼成・色調	胎土	成・整形技法など		取上げ名称	
トレンチ 9・14	第99図	274	平瓦 A 類	長さ:[33.1] 幅:[11.5] 厚さ:2.0 重量:[1,070]		酸化気味 にぶい黄橙色 (10YR7/4)	大粒の白色石 英、片岩、軟質 黄褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面:模骨痕明瞭、模骨痕を縦方向のナデで消す。凸面:平行タタキ後に横方向の回転ナデ。		71.72	
トレンチ 9・14	第99図	275	丸瓦 B 類	長さ:[17.6] 幅:[16.8] 厚さ:1.5 重量:[660]		還元 灰白色 (5Y7/2)	白色石英、片岩、 チャート、軟質 赤褐色粒	粘土板成形、粘土板は帯状。凸面:タタキ面明瞭、タタキ後にナデ。凹面:側面に面取り状のケズリ。		74	
トレンチ 9・14	第99図	276	丸瓦 B 類	長さ:[25.3] 幅:[15.6] 厚さ:1.6 重量:[680]		還元 灰色 (N6/)	片岩、黄褐色粒	粘土板成形。凸面:タタキ後に回転ナデ。		69	
トレンチ 9・14	第99図	277	平瓦 B 類	長さ:[24.8] 幅:(広端部) 30.2 厚さ:1.8 重量:[1,770]		酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	大粒の片岩・白 色石英、軟質赤 褐色粒	粘土板1枚作り。凸面:全体にナデ。		71.129,138, 139	

第 22 表 牛田廃寺跡出土遺物観察表 (14) 瓦・土器

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

出土地点	図 No.	No.	分類	法量 (cm・g)	焼成・色調	胎土	成・整形技法など	取上げ名称			
トレンチ 13	第 99 図	278	平瓦 A 類	長さ: 46.0 幅: (狭端部) 27.0 厚さ: 2.0 重量: [3,690]	酸化 橙色 (7.5YR7/6)	大粒の白色石英、片岩、角閃石、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕を縦方向の指ナデで平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	8,119 ~ 122, 124,137,139, 140,Z13 一括			
トレンチ 13	第 100 図	279	平瓦 A 類	長さ: [24.5] 幅: [31.0] 厚さ: 2.2 重量: [2,145]	酸化 明褐色 (7.5YR5/8)	大粒の白色石英、片岩、凝灰岩、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 模骨痕明瞭、部分的に縦方向のナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	Z13 一括			
トレンチ 13	第 100 図	280	平瓦 A 類	長さ: [21.2] 幅: (広端部) (32.7) 厚さ: 2.1 重量: [1,370]	酸化 灰色 (10Y6/1)	白色石英、片岩、チャート	粘土板桶巻き成形。凹面: 布袋外は模骨痕明瞭、部分的に縦方向のナデ。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	126,127, 129 ~ 131			
トレンチ 13	第 100 図	281	平瓦 A 類	長さ: [24.5] 幅: [22.8] 厚さ: 1.8 重量: [1,270]	酸化 にぶい橙色 (7.5YR7/4)	大粒のチャート、白色石英、軟質赤褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 糸切り後、模骨痕は縦方向の指ナデにより平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ、タール状の付着物。	132,134, Z13 一括			
トレンチ 13	第 100 図	282	平瓦 A 類	長さ: [33.3] 幅: [13.8] 厚さ: 1.8 重量: [1,000]	還元 灰色 (N6/)	大粒の片岩・白色石英、黄褐色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 狭端部ナデ、模骨痕は縦方向のナデにより平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ、タール状の付着物。	106,135, Z13 一括			
トレンチ 13	第 100 図	283	平瓦 A 類	長さ: [16.5] 幅: [24.7] 厚さ: 2.1 重量: [1,010]	還元 灰色 (N5/)	白色石英、黒色粒	粘土板桶巻き成形。凹面: 側面は面取り状のケズリ、模骨痕明瞭、模骨痕は縦方向のナデにより平滑。凸面: 平行タタキ後に横方向の回転ナデ。	111,112, 192			
トレンチ 13	第 101 図	284	平瓦 A2 類	長さ: [23.2] 幅: (狭端部) 20.2 厚さ: 2.5 重量: [1,450]	酸化気味 浅黄色 (2.5Y7/4)	白色石英、凝灰岩	粘土板桶巻き成形。凹面: 側面・広端面は幅広の面取り状のケズリ、模骨痕は縦方向の指ナデで平滑。凸面: 側面に面取り状のケズリ、平行タタキ後に横方向の回転ナデを入れ、最後に縦方向のナデ。	一括			
遺構名	図 No.	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
トレンチ 13	第 101 図	285	須恵器 坏	口縁部 2/3	口径:(12.0) 底径:— 器高:[3.7]	内外: 灰白	褐色粒・白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。口縁部～体部回転ナデ。 内: ロクロ整形。口縁部～体部回転ナデ。	9C	口唇部に油煙付着。
トレンチ 13	第 101 図	286	須恵器 坏	底部 1/2	口径:— 底径:(6.2) 器高:[2.5]	内外: 灰	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。体部部回転ナデ。底部回転糸切り。内: ロクロ整形。体部～底部回転ナデ。	9C 後半	
トレンチ 13	第 101 図	287	須恵器 高台坏境	ほぼ完形	口径: 14.0 底径: 6.4 器高: 5.4	内外: 灰白	輝石・白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。底部回転糸切り後、ナデ。高台貼付時に周縁回転ナデ。内: ロクロ整形。口縁部～底部回転糸切り。	9C 後半	口唇部内面に油煙付着。
トレンチ 13	第 101 図	288	須恵器 高台坏境	1/3	口径:(14.6) 底径: 6.6 器高: 5.2	外: 黒灰、 内: 灰	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁回転ナデ。 内: ロクロ整形。口縁部～底部回転ナデ。	9C 後半	口唇部内面に油煙付着。
トレンチ 13	第 101 図	289	須恵器 高台坏境	底部 1/3	口径:— 底径:(5.6) 器高:[3.2]	内外: 黒褐	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁回転ナデ。 内: ロクロ整形。体部～底部回転ナデ。	9C 後半	

## 第5節 1区で検出された遺構・遺物

### 第1項 1区の概要

もともと北側に位置する調査区で、平成30年度に発掘調査を実施した。1区からは牛田廃寺跡のほか、竪穴住居跡13軒、土坑15基、溝2条が検出されている。2・3区と異なり地表から50～60cm程度で硬い砂礫層である地山に到達し、他の調査区とは基盤面の状況が異なっている。1区の状況や東・西に設定した試掘トレンチの様相から、この部分だけ微高地状に砂礫層が高かった自然堤防と考えられる。1区南端では、砂礫層である確認面まで1m以上と徐々に深くなっていくことが確認できた。牛田廃寺1号建物跡は瓦葺きの建物であり建物重量が極めて重いことから、硬い地盤が地表から浅い位置に存在する1区に寺院を選地した可能性が高い。

牛田廃寺跡の北側と南側に遺構が認められた。牛田廃寺跡に重複・近接している住居はなく、3号溝が重複しているだけであることから、ある程度の寺域としての意識は最後まで存在した可能性が高い。北側では10世紀の住居跡・土坑が主体である。60A・60B・62号住居跡・96号土坑からは灰釉陶器が多数検出された。また瓦を使ったカマドを持つ9世紀後半の61号住居跡が検出されており、牛田廃寺は9世紀後半には廃絶していたことが推測される。10世紀の住居跡は寺院廃絶後に形成されたと考えられ、これまであまり住居が分布していなかった箇所に住居が形成される。10世紀の住居は、重複はあまりしておらず、住居規模は小さい。

南側では3軒の住居が重複して見つかっている。北側とは時期が異なり、8世紀代に構築されている。72号住居跡にはカマドがなく柱穴も見当たらなかった。覆土内には大形の平瓦や軒丸瓦、また幅広い時期の遺物が廃棄されている。

### 第2項 1区検出の住居跡・土坑・溝

#### 59号住居跡(第102・110図、第26表、図版14・53)

遺存状態：掘り込みは浅く、残りは悪い。1/3ほどが東側調査区外に及ぶ。重複遺構：なし。主軸方位：N-4°-E 平面形：不整形か。覆土：極めて浅い。As-B軽石を含むV層下面から掘り込んでいた。床面：砂礫層(IX層)を床面とする。壁溝：確認されていない。柱穴：確認されていない。貯蔵穴：確認されていない。カマド：確認されていない。掘り方：なし。出土遺物：住居中央付近の床面からやや浮いた遺物がまとまって検出された。

所見：羽釜が出土したことから10世紀の住居跡と考えられる。

#### 60A号住居跡(第103・111・112図、第26表、図版15・53・54)

遺存状態：60B号住居に切られている。重複遺構：H-60B 主軸方位：N-71°E 平面形：方形か。覆土：覆土内には大形の礫が多量に廃棄されていた。床面：平坦。砂礫層(IX層)を床面とする。壁溝：なし。柱穴：なし。貯蔵穴：カマド向かって左側で検出。覆土内からは大形土器片が出土。カマド：東壁やや南よりに付設。両袖に結晶片岩の棒状礫を使用している。カマド覆土上層から大型の土師器・須恵器片が多量に出土。掘り方：なし。出土遺物：鉄釘が2点出土した。牛田廃寺から持ち運ばれたものである可能性が高い。また灰釉陶器が1点検出された。

所見：時期は10世紀前半と考えられる。

#### 60B号住居跡(第103・112・113図、第26・27表、図版15・54・55)

重複遺構：H-60Aを切っている。主軸方位：N-97°E 平面形：長方形。覆土：多量の大形の礫が廃棄されていた。床面：平坦。砂礫層(IX層)を床面とする。壁溝：なし。柱穴：なし。貯蔵穴：なし。カマド：東壁やや南よりに付設。両袖及び支脚に結晶片岩の棒状礫を使用している。カマド付近からカマド構築材と思われる焼けた方形の牛伏砂岩2点が見つかっている。掘り方：なし。出土遺物：覆土中に多量の礫が廃棄されており、その中に俵型の大形礫が含まれていた。形状から牛田廃寺の基壇外装使用礫と形状が類似する。また焼けた牛伏砂岩も

牛田廃寺に伴うものの可能性が高い。灰釉陶器 2 点と緑釉陶器 1 点、また鉄釘 1 点、鉄槍 1 点が検出されている。掲載遺物は床面直上付近で見つかっている。  
所見：時期は 10 世紀後半と考えられる。

61 号住居跡（第 102・114～118 図、第 27・28 表、図版 15・16・55～59）

重複遺構：なし。 主軸方位：N-94°E 平面形：長方形。 床面：平坦で砂礫層（IX層）を床面とする。 壁溝：なし。 柱穴：なし。 貯蔵穴：なし。 カマド：東壁中央に付設。カマドは造り替えられており、瓦を用いたカマド向かって右側で壁面が赤化した旧カマドの掘り方が検出されている。旧カマド掘り方の左に瓦を用いて新たなカマドを構築している。平瓦片を立てて側壁とし、裏側には河原石と小さい瓦片で裏ごめを行っている。カマド内部には瓦を支えるための棒状礫が検出された。右壁構築材の瓦には「大十」と書かれた文字瓦が使われていた。煙道には平瓦凹面を上にし、瓦を斜めに寝かした状態で設置している。構築材の瓦には、2 次焼成の痕跡が認められる。 掘り方：なし。 出土遺物：覆土中からも多くの瓦片が検出され、瓦当面がほぼ完形の軒丸瓦 B 類（22）も検出された。近接する牛田廃寺から持ち運ばれた瓦であろう。

所見：H-61 のみ瓦の出土量が際立って多い。瓦を使ったカマドは I 区では H-61 のみである。カマド構築材の瓦に文字瓦が使われていたが、3 区 106 号住居跡カマドにも文字瓦が使用されており、意図的に文字瓦を選択し、使用していた可能性が高い。時期は 9 世紀後半と考えられ、牛田廃寺廃絶後に構築された住居である可能性が高い。

62 号住居跡（第 104・119 図、第 28 表、図版 16・17・59）

重複遺構：H-63 を切っている。 主軸方位：N-88°E 平面形：方形。 床面：平坦で砂礫層（IX層）を床面とする。 壁溝：あり。北東及び南西コーナーで途切れる。 柱穴：なし。 貯蔵穴：カマド向かって右側で検出。覆土中には大形の礫と須恵器環（5～7）が検出された。 カマド：東壁南よりに付設。右袖に結晶片岩棒状礫を使用している。左袖は残存していない。 掘り方：なし。 出土遺物：住居中央から長方形の礫が出土した。地山には含まれない形状であることから、1 号建物跡などの基壇外周に使用されていたものの可能性が考えられる。灰釉陶器 3 点（9～11）、瓦片（12）が床面直上から検出された。

所見：時期は 10 世紀後半と考えられる。

63 号住居跡（第 104・120 図、第 28 表、図版 16・60）

重複遺構：P-35、P-36、H-63 に切られている。 主軸方位：N-14°E 平面形：不整形。 床面：平坦で砂礫層（IX層）を床面とする。 壁溝：なし。 柱穴：なし。 貯蔵穴：なし。 カマド：なし。 掘り方：なし。 出土遺物：覆土中から灰釉陶器及び緑釉陶器が検出された。

所見：時期は 10 世紀後半と考えられる。

71 号住居跡（第 104・121 図、第 28 表、図版 17・60）

重複遺構：D-83・84 に切られる。 主軸方位：N-72°E 平面形：方形。 床面：平坦で砂礫層（IX層）を床面とする。 壁溝：あり。 柱穴：なし。 貯蔵穴：なし。 カマド：東壁南端に敷設、袖部は残存しておらず遺存状態は不良である。 掘り方：なし。 出土遺物：覆土中に大量の大型礫が廃棄されている。遺物の出土は少ない。

所見：覆土中に大形礫が廃棄されていた。住居時期は 8 世紀と考えられる。

72 号住居跡（第 105・121～126 図、第 29・30 表、図版 17・60～63）

重複遺構：H-85・86 を切る。 主軸方位：N-109°E 平面形：不整形 覆土：覆土の最上層には土師器や須恵器細片を含む暗褐色土層が堆積している。 床面：やや凹凸がある。 壁溝：なし。 柱穴：なし。 貯蔵穴：なし。 カマド：なし。 掘り方：なし。 出土遺物：覆土中には 5 世紀後半～7 世紀後半までの時期の遺物が出土した。また土製品や手捏ね土器なども検出されている。また瓦が多く見つかっており、軒丸瓦 A1 類が 2 点出

土した。また羽口も出土しており、付近で製鉄が行われていた可能性が高い。

所見：覆土中から幅が広い時期の遺物が検出されており、他の住居と様相が異なる。一枚作りの瓦が出土しているため、寺院の後半期か廃絶後に構築された遺構である可能性が高い。カマド等がないため住居かは不明。

#### 75号住居跡（第106・127図、第30表、図版17・64）

遺存状態：西側が調査区外に及ぶ。重複遺構D-95・96・104に切られる。H-84を切る。主軸方位：N-17°E  
平面形：方形か。覆土：覆土は浅く遺存状態は悪い。床面：平坦で所々に拳大の礫が検出された。壁溝：なし。  
柱穴：なし。貯蔵穴：検出されていない。カマド：検出されていない。掘り方：なし。出土遺物：土師器  
坏及び須恵器坏・甕が検出された。瓦小片が2点検出されている。

所見：時期は8世紀前半と考えられる。

#### 76号住居跡（第106・127図、第30・31表、図版17・64）

遺存状態：半分程が西側調査区外に及ぶ。重複遺構：なし。主軸方位：N-18°E 平面形：方形か。覆土：  
人頭大の大形礫が床面直上に大量に廃棄されていた。床面：平坦。壁溝：なし。柱穴：検出されていない。  
貯蔵穴：検出されていない。カマド：北壁に敷設。半分は西側調査区外に及ぶ。袖石に結晶片岩の棒状礫が使用  
されている。掘り方：なし。出土遺物：7世紀後半から末と思われる土師器・須恵器が床面直上にまとめて  
検出された。

所見：時期は7世紀後半と考えられる。

#### 84号住居跡（第106図）

遺存状態：西側が調査区外に及ぶ。重複遺構：H-75に切られる。主軸方位：N-108°E 平面形：方形か。覆土：  
覆土は浅く遺存状態は悪い。床面：平坦。壁溝：なし。柱穴：確認されていない。貯蔵穴：確認されていない。  
カマド：確認されていない。掘り方：なし。出土遺物：土師器が数点検出されたが図示できる遺物はない。

所見：時期は不明だが、8世紀前半の75号住居跡を切っていることから、8世紀前半以後に構築されたと考えられる。

#### 85号住居跡（第105・128図、第31表、図版18・64）

遺存状態：住居の大半が西側調査区外に及ぶ。重複遺構：H-72に切られる。主軸方位：N-105°E 平面形：  
方形か。床面：平坦。壁溝：なし。柱穴：確認されていない。貯蔵穴：確認されていない。カマド：東壁  
中央に敷設。カマド煙道がH-72に切られている。結晶片岩の棒状礫を袖石に使用している。右袖に3本、左袖に  
2本を立てて並べており、また天井にも結晶片岩礫を架設していた。掘り方：なし。出土遺物：出土遺物は少  
ない。土師器が数点検出されている。

所見：時期は7世紀後半と考えられる。

#### 86号住居跡（第105・128図、第31表、図版18・64・65）

重複遺構：H-72に切られる。主軸方位：N-93°E 平面形：方形。床面：平坦。壁溝：なし。柱穴：なし。  
貯蔵穴：なし。カマド：なし。掘り方：なし。出土遺物：覆土上層から大形の土師器片がまとめて検出された。  
時期は7世紀前半と考えられる。4世紀の甕も検出されており、周辺に4世紀の遺構が存在する可能性が考えられる。

所見：時期は7世紀前半と考えられる。規模が小さく、カマド等もないため住居かは不明。

#### 2号溝（第107・131図、第33表、図版20・66）

遺存状態：東西が調査区外に及ぶ。重複遺構：なし。断面形：断面は底面や平底で狭いV字状を呈する。覆土：  
覆土上層にAs-B軽石の堆積が認められた。下層には含まれない。出土遺物：覆土中からは瓦片が多数出土して  
いる。また土師器・須恵器の小片も出土した。M-2の範囲を確定するために東側に試掘トレンチを入れた際、トレ

ンチ 1 の M-2 覆土上面から灯明皿（第 131 図 1）が出土した。

所見：当初は寺院遺構を画する溝であると想定していたが、北側では対応する溝は検出されていない。さらに東側の延長を把握するためトレンチ 1～4 を設定したが、途中で北へ屈曲せず、東へ真っ直ぐ続くことが確認されたため、寺院の区画溝ではないと判断した。また覆土に As-B 軽石が含まれており、寺院遺構より後出する溝である可能性が高い。また 2 号整地土を切っている 3 号溝も同様の覆土であることから、3 号溝と同時期の所産である可能性が高く、牛田廃寺と直接の関係は想定できない。

### 3 号溝（第 108・131 図、第 33 表、図版 20・66）

遺存状態：東西が調査区外に及ぶ。 重複遺構：1 号整地土を切る。 断面形：底面は平坦で緩やかに立ち上がる。

覆土：暗褐色の粘土質土。覆土中に As-B 軽石が含まれる。 出土遺物：覆土中からは瓦片が多数出土した。

所見：1 号整地土を切って構築しており、トレンチ 9・14 でもその延長が検出されている。調査区東側でクランク状に折れ曲がっている。調査区東端の底面付近でコ字状の口縁部を持つ土師器甕が検出されている。土器の時期は 9 世紀後半であり、その頃には 3 号溝は構築されていたと考えられる。牛田廃寺跡の廃絶年代を推定する上で重要である。

第 23 表 1 区 住居跡観察表

住居番号	平面形状	主軸方向	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	カマド			時期	重複関係	備考
						位置	最大長	最大幅			
H-59	台形か	N-4°E	4.30	3.00	0.18	—	—	—	10C 後半		
H-60a	方形か	N-71°E	4.30	3.20	0.22	東	0.65	0.88	10C 前半	H60a → 60b	灰釉陶器、釘 2 点
H-60b	正方形	N-97°E	3.10	2.50	0.32	東	0.60	0.59	10C 後半	H60a → 60b	緑釉・灰釉陶器、釘、槍各 1 点
H-61	長方形	N-94°E	3.30	2.60	0.28	東	0.91	1.02	9C 後半		カマド構築材に瓦使用、軒丸瓦、釘 1 点
H-62	正方形	N-88°E	3.10	3.10	0.32	東	0.81	0.10	10C 後半	H63 → 62	灰釉陶器、瓦、釘 1 点
H-63	台形	N-14°E	2.90	2.20	0.18	—	—	—	10C 後半	H63 → 62	瓦、緑釉・灰釉陶器
H-64	欠番										
H-71	正方形	N-72°E	3.40	2.90	0.20	東	1.14	0.74	8C		瓦、釘 1 点
H-72	長方形か	N-109°E	5.50	5.00	0.32	—	—	—	7C 後半	H86 → 72 → 85	瓦、軒丸瓦、羽口
H-75	方形か	N-17°E	4.70	3.50	0.08	—	—	—	8C 前半	H84	瓦、釘、刀子各 1 点
H-76	不明	N-18°E	3.00	1.80	0.38	北	0.83	0.66	7C 後半		
H-84	方形か	N-108°E	2.70	2.40	0.11	—	—	—	不明	H75	遺物なし
H-85	不明	N-105°E	4.50	0.70	0.52	—	—	—	7C 後半	H72 → 85	
H-86	方形か	N-93°E	2.20	2.00	0.28	—	—	—	7C 前半	H86 → 72	

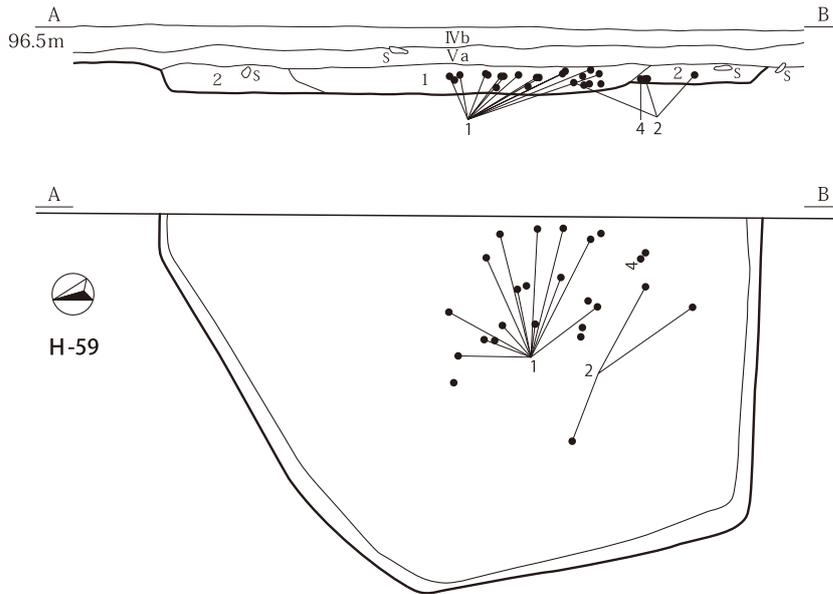
第 24 表 1 区 土坑観察表 (1)

遺構名	平面形状	断面形状	主軸方向	規模			備考
				長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	
D-83	凹形	逆台形状	—	0.92	0.89	0.14	灰釉陶器、H-71 を切る
D-84	凹形	逆台形状	—	0.69	0.60	0.28	H-71 を切る
D-95	方形	逆台形状	N-10°E	1.40	1.23	0.20	墨書土器「有」、H-75 を切る
D-96	楕円形力	半円状	N-104°E	(1.21)	1.09	0.18	灰釉陶器、瓦、鉄鏝 1、H-75 を切る
D-104	長方形	逆台形状	N-111°E	1.20	0.99	0.18	H-75 を切る
D-108	楕円形	逆台形状	N-13°E	1.36	1.01	0.17	
D-112	楕円形	弧状	N-170°E	0.94	0.73	0.21	
D-113	楕円形	弧状	N-54°E	0.98	0.69	0.20	

第 25 表 1 区 土坑観察表 (2)

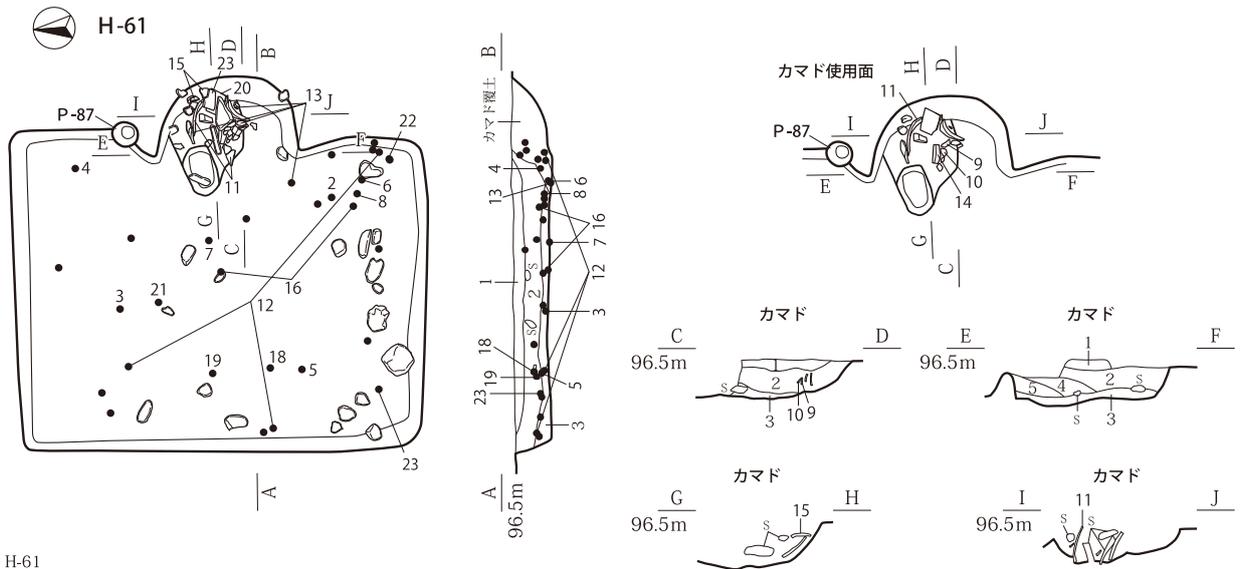
遺構名	平面形状	断面形状	主軸方向	規模			備考
				長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	
D-115	凹形	逆台形状	—	0.92	0.82	0.46	
D-117	凹形	箱状	—	0.45	0.42	0.37	
D-121	凹形	逆台形状	—	0.41	0.36	0.13	
D-123	凹形	弧状	—	0.61	0.50	0.18	
D-125	凹形	逆台形状	—	0.63	0.52	0.43	
D-126	凹形	逆台形状	—	0.73	0.65	0.15	
D-137	楕円形	逆台形状	N-91°E	1.72	1.31	0.22	

59号住居跡



- H-59
- 1. 黒褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  小礫、 $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量含む。
  - 2. 黒褐色土 粘性あり しまりあり 拳大礫多量含む。

61号住居跡

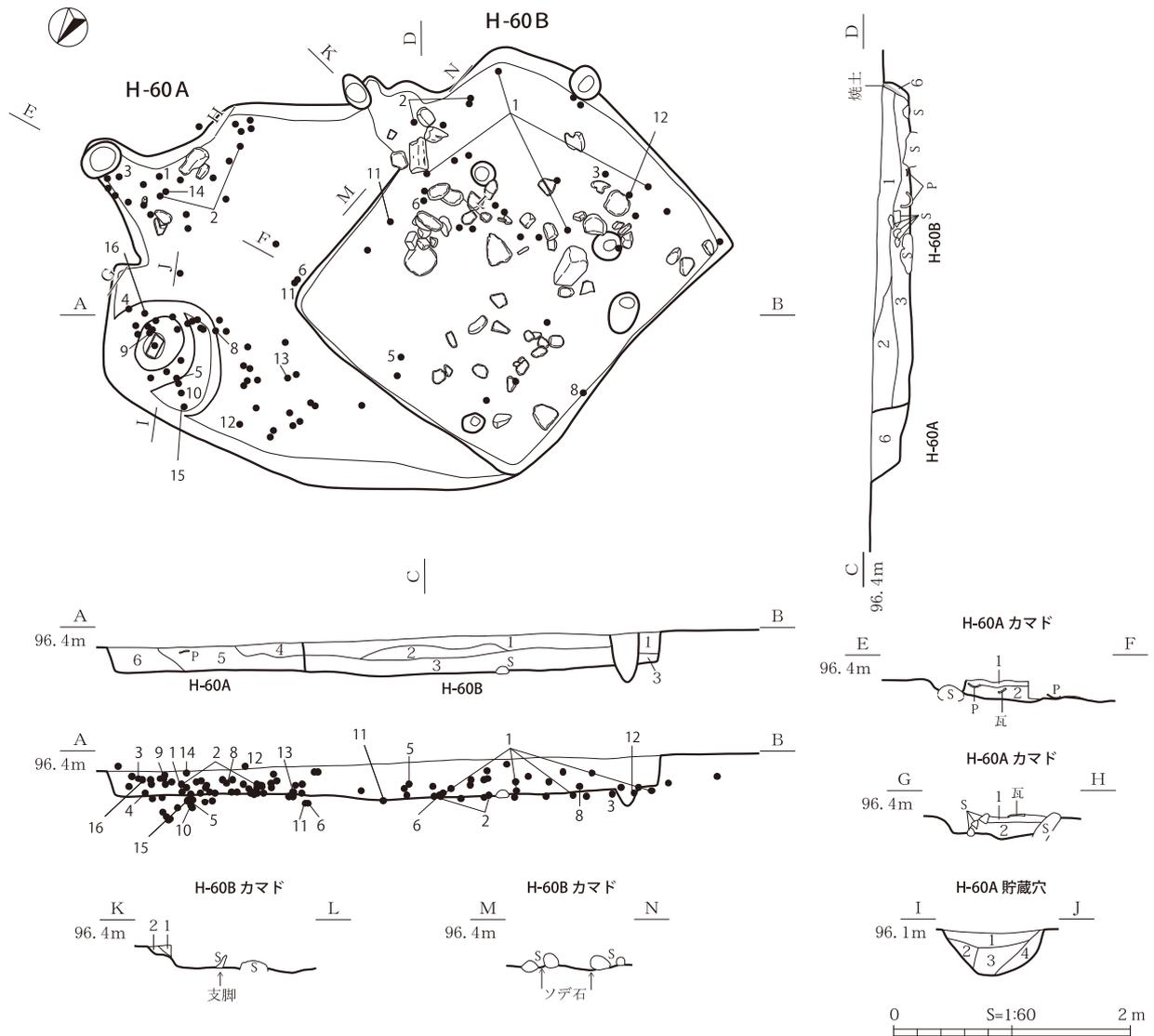


- H-61
- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 20\text{mm}$  小礫少量含む。
  - 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 50\text{mm}$  礫含む。 $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量含む。
  - 3. 黒褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 20\text{mm}$  炭多量含む。

- H-61 カマド
- 1. 黒褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭・焼土少量含む。
  - 2. 黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  炭・焼土少量含む。粘土質土。
  - 3. 黒褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  炭多量、焼土少量含む。
  - 4. 黄褐色土 粘性あり しまりあり 粘土質土。
  - 5. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量含む。

第102図 59・61号住居跡 平面図・断面図

60A・60B号住居跡



H-60

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 1\text{mm}$  焼土少量含む。
- 2. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり 黄色粘土まだらに混じる。
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土・ $\phi \sim 20\text{mm}$  礫含む。
- 4. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  粘土 BL 少量含む。
- 5. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  粘土 BL 少、 $\phi \sim 20\text{mm}$  小礫含む。
- 6. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  小礫多量含む。

H-60A カマド

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭多量、焼土少量含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭・焼土・瓦片含む。

H-60A 貯蔵穴

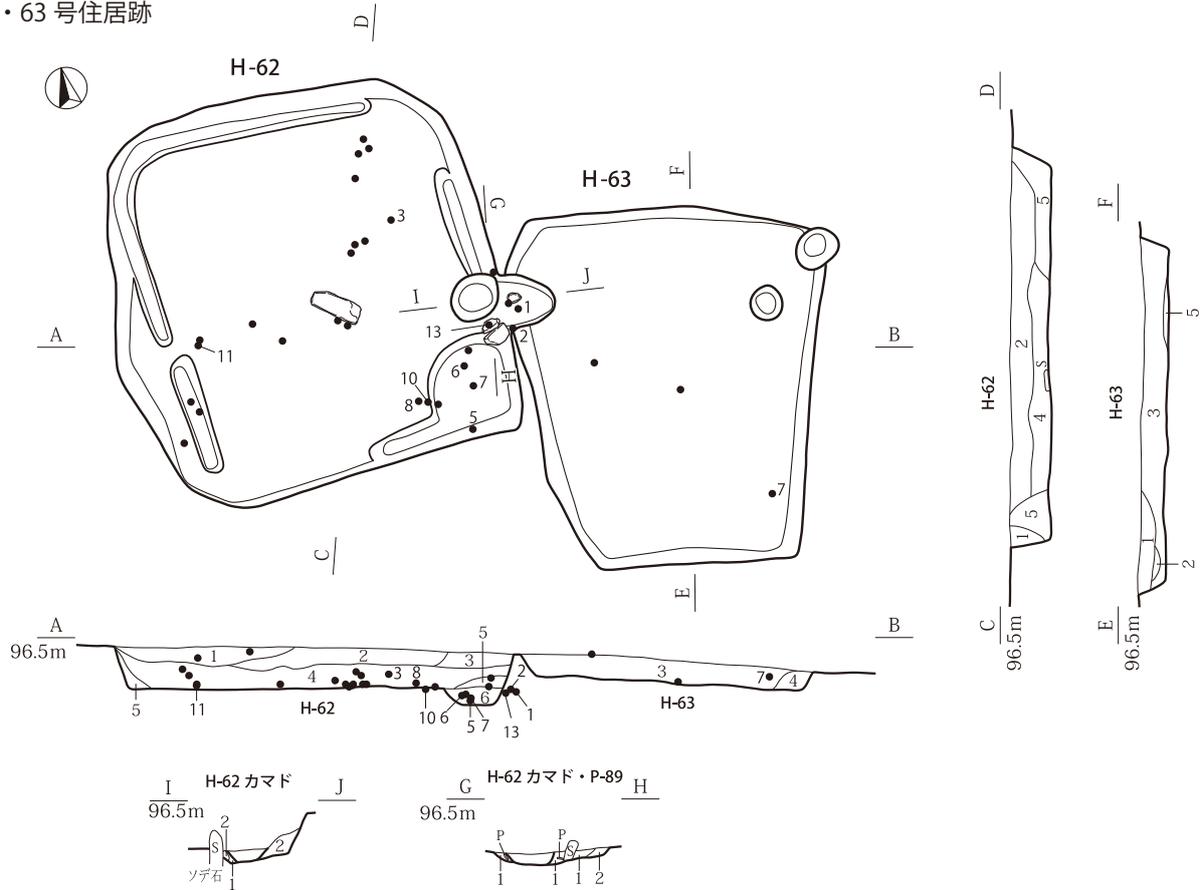
- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭多量、焼土少量含む。
- 2. 黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭少量含む。
- 3. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  粘土 BL・ $\phi \sim 10\text{mm}$  炭含む。
- 4. 暗褐色土 粘性あり しまりあり 砂質土。

H-60B カマド

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土多量含む。
- 2. 黄褐色土 粘性あり しまりあり 粘土主体の土。

第 103 図 60A・60B 号住居跡 平面図・断面図

62・63号住居跡



H-62

- 1. 黒褐色土 粘性あり しまりあり As-B 含む。
- 2. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量含む。
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  礫少量含む。
- 4. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭・焼土・ $\phi \sim 20\text{mm}$  礫含む。
- 5. 暗褐色土 粘性あり しまりあり 礫多量に含む。
- 6. 暗黄褐色土 粘性ややあり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  炭少量含む。

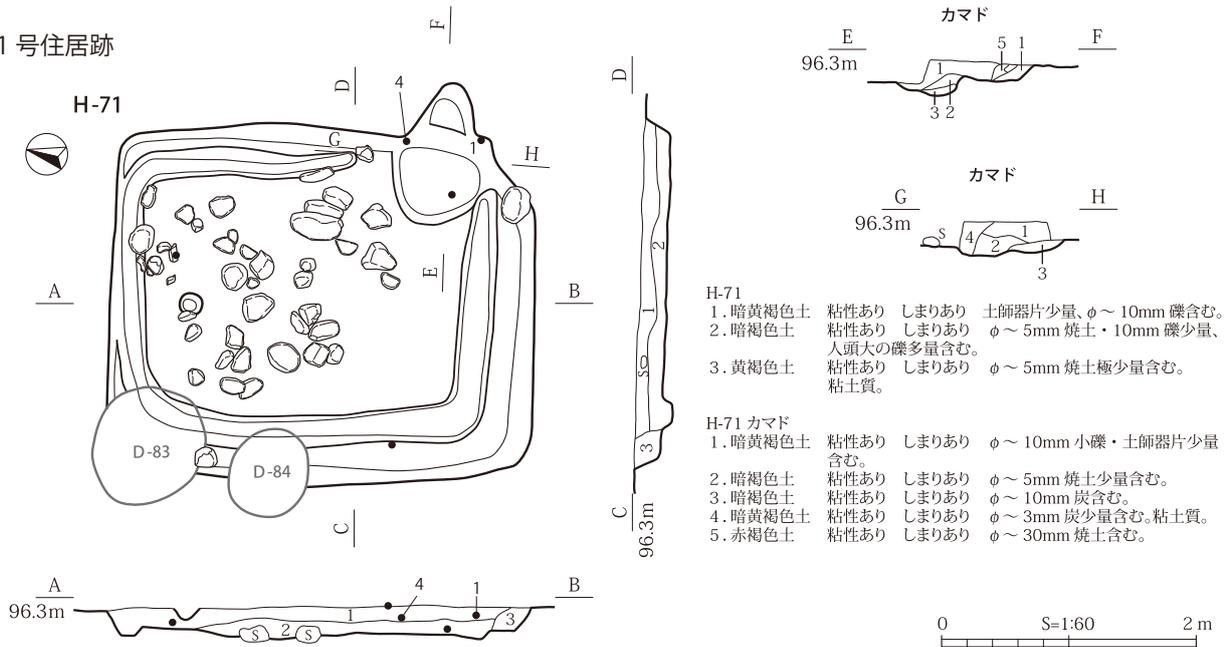
H-62 カマド

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭・焼土極僅かに含む。
- 2. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり 粘土質の固い土。

H-63

- 1. 黒褐色土 粘性あり しまりあり As-B 含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 20\text{mm}$  炭多量含む。
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量、 $\phi \sim 20\text{mm}$  礫含む。
- 4. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭・焼土含む。
- 5. 黄褐色土 粘性あり しまりあり 粘土質。

71号住居跡



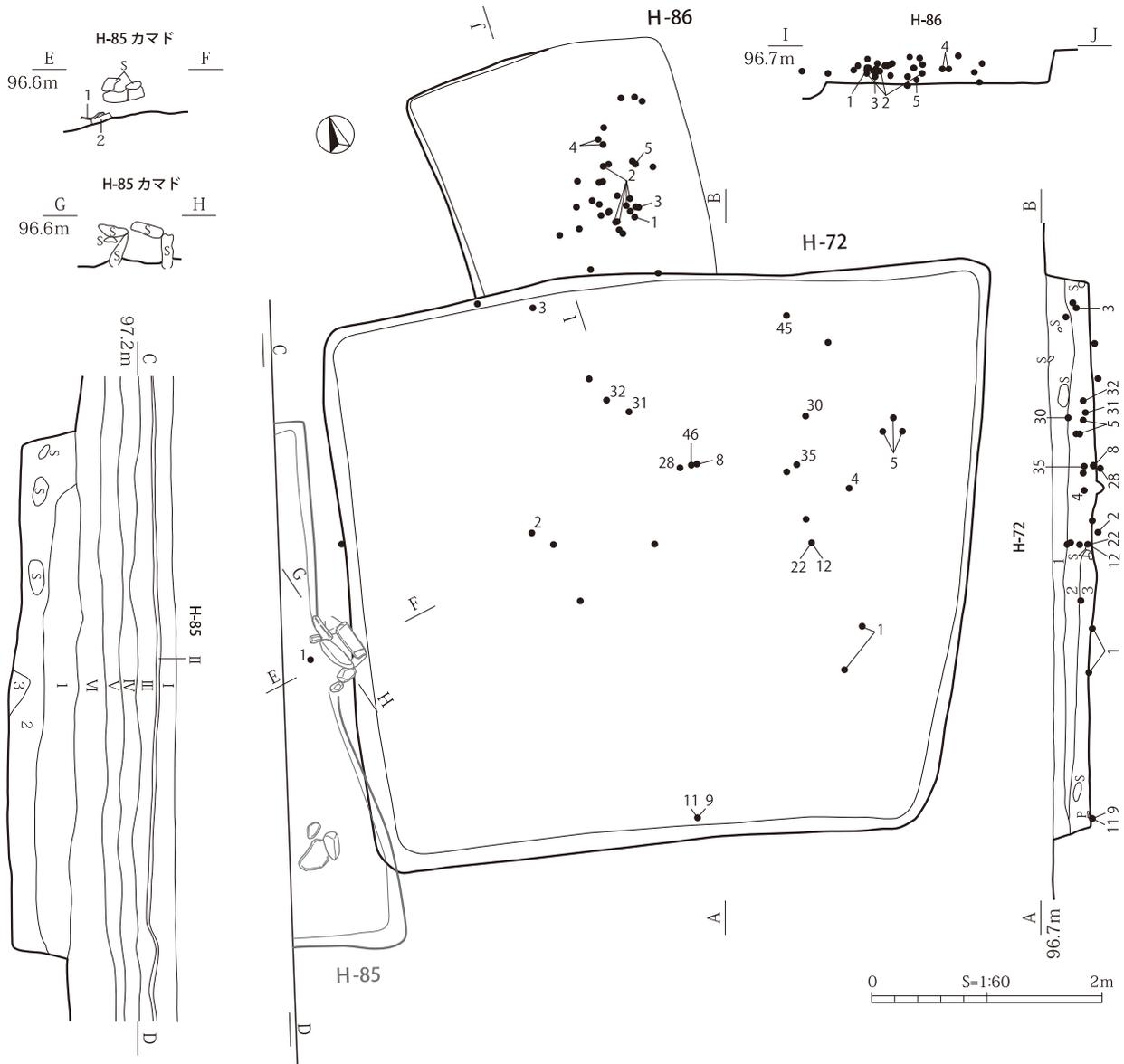
H-71

- 1. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり 土師器片少量、 $\phi \sim 10\text{mm}$  礫含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土・ $10\text{mm}$  礫少量、人頭大の礫多量含む。
- 3. 黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土極少量含む。粘土質。

H-71 カマド

- 1. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  小礫・土師器片少量含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土少量含む。
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  炭含む。
- 4. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 3\text{mm}$  炭少量含む。粘土質。
- 5. 赤褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 30\text{mm}$  焼土含む。

第 104 図 62・63・71号住居跡 平面図・断面図



H-85

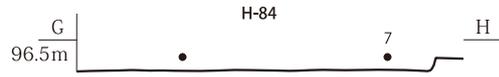
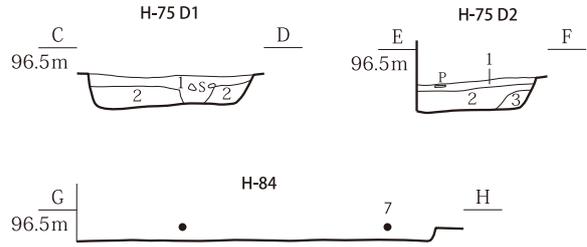
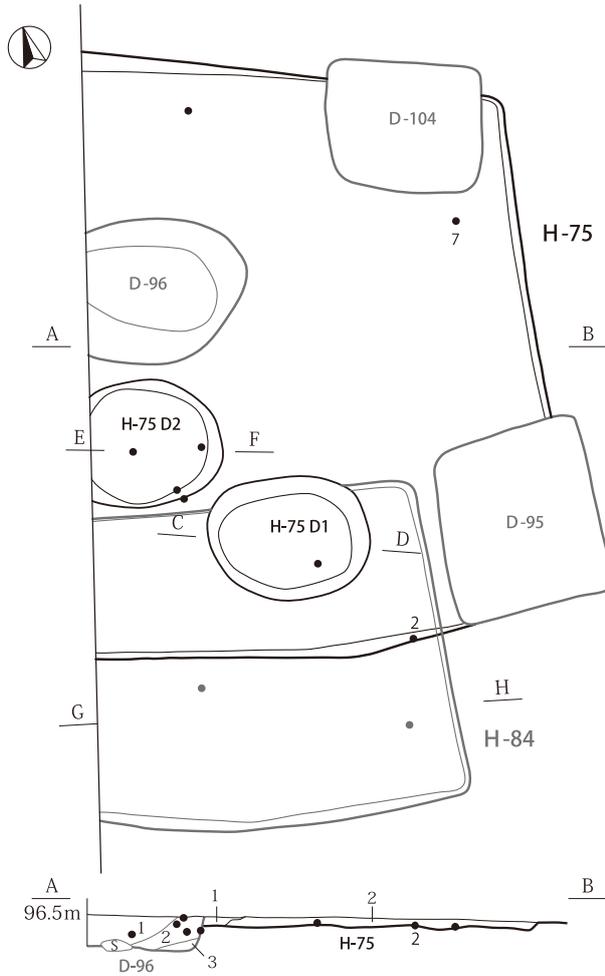
1. 暗褐色土 粘性ややあり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  炭含む。
2. 暗黄褐色土 粘性ややあり しまりあり  $\phi \sim 10\text{mm}$  焼土・炭・  
 $\phi \sim 200\text{mm}$  礫含む。
3. 暗黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 砂混じりの土。

H-72

1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  炭少量、土器小片含む。
2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり  $\phi \sim 5\text{mm}$  焼土極少量含む。
3. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり

第 105 図 72・85・86号住居跡 平面図・断面図

75・84号住居跡・96号土坑



H-75

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~10mm 土器片少量含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~10mm 粘土ブロック少量含む。

H-75 D1

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり
- 2. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり

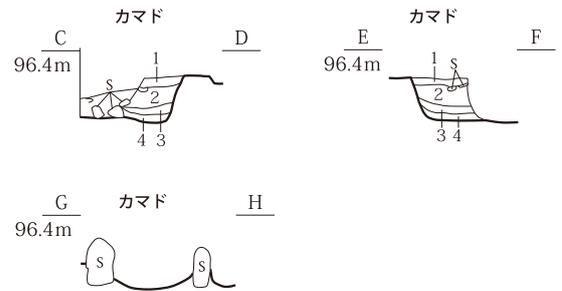
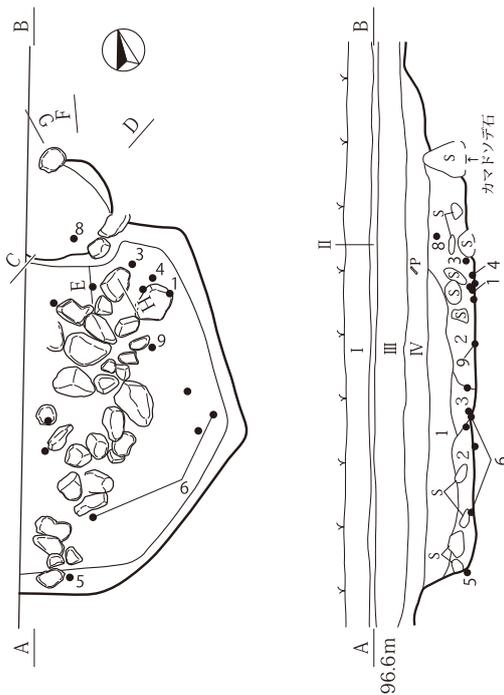
H-75 D2

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり
- 2. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり
- 3. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり

D-96

- 1. 黒褐色土 粘性あり しまりあり φ~5mm 焼土・φ~5mm 炭少量含む。
- 2. 黒褐色土 粘性あり しまりあり φ~15mm 炭多量、φ~5mm 焼土少量、黄色の粘土粒含む。
- 3. 暗黄褐色土 粘性あり しまりあり φ~20mm 黄色粘土BL 多量、φ~5mm 炭・焼土少量含む。

76号住居跡

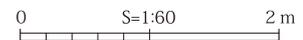


H-76

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~5mm 炭・焼土少量含む。
- 2. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~20mm 炭含む。2層下面に遺物多い。床面。
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~5mm 炭少量含む。

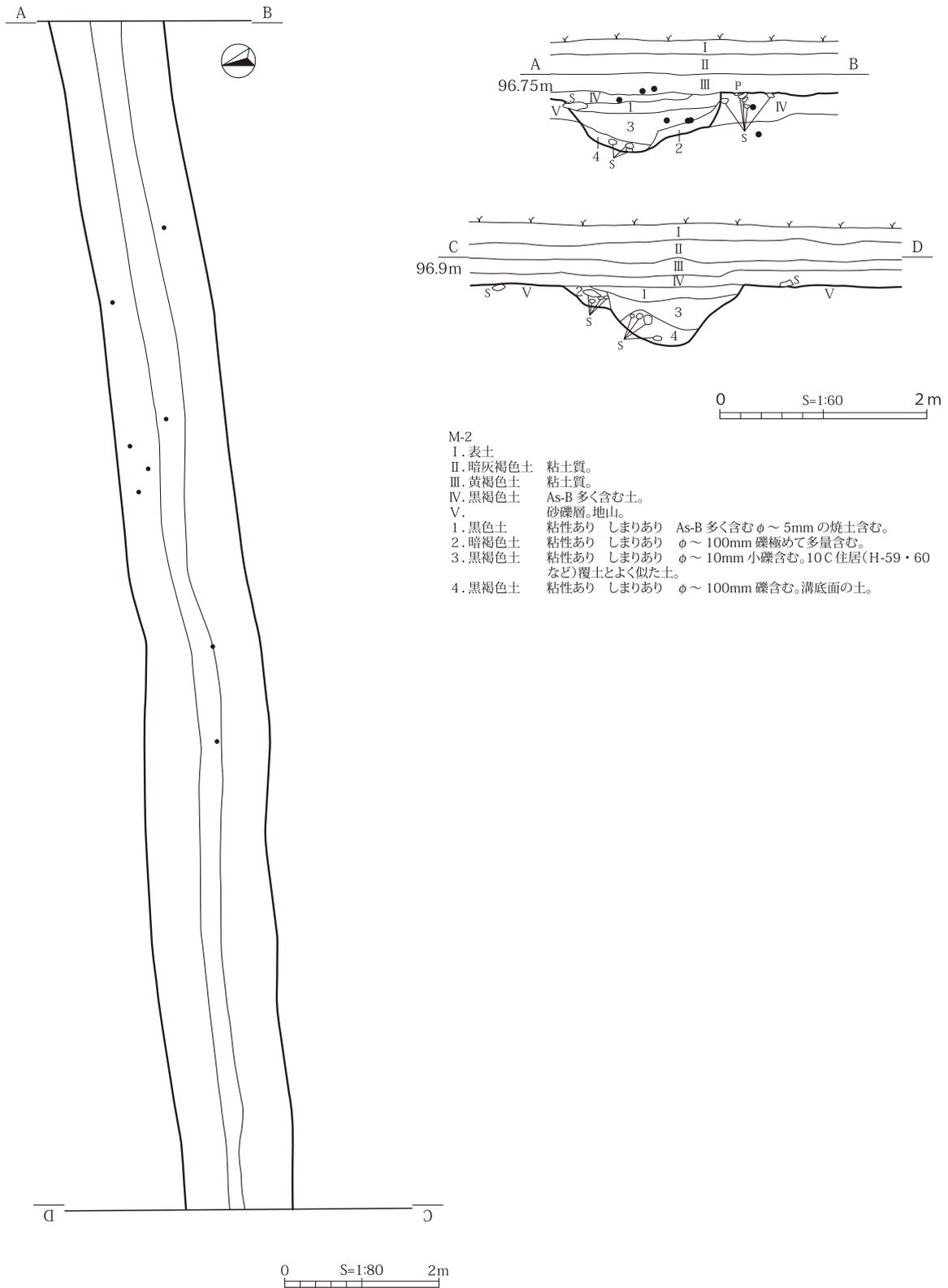
H-76 カマド

- 1. 暗褐色土 粘性あり しまりあり
- 2. 黄褐色土 粘性あり しまりあり 粘土質土。カマドの天井の崩落土か？
- 3. 暗褐色土 粘性あり しまりあり φ~10mm 焼土BL 多量に含む。天井崩落土。
- 4. 暗褐色土 粘性なし しまりあり φ~20mmBL 含む土。灰多量含む。



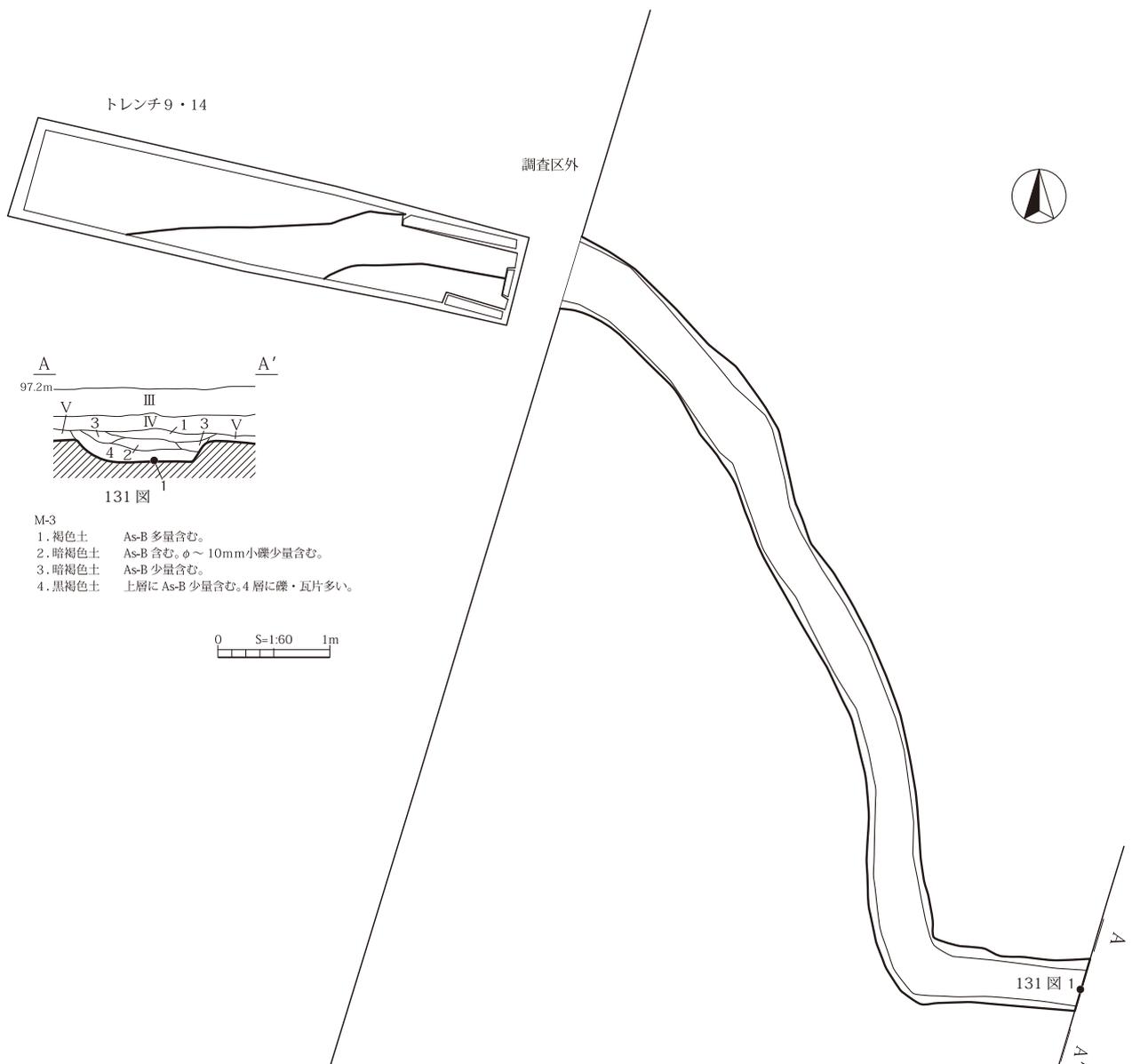
第106図 75・84号住居跡・96号土坑・76号住居跡 平面図・断面図

2号溝



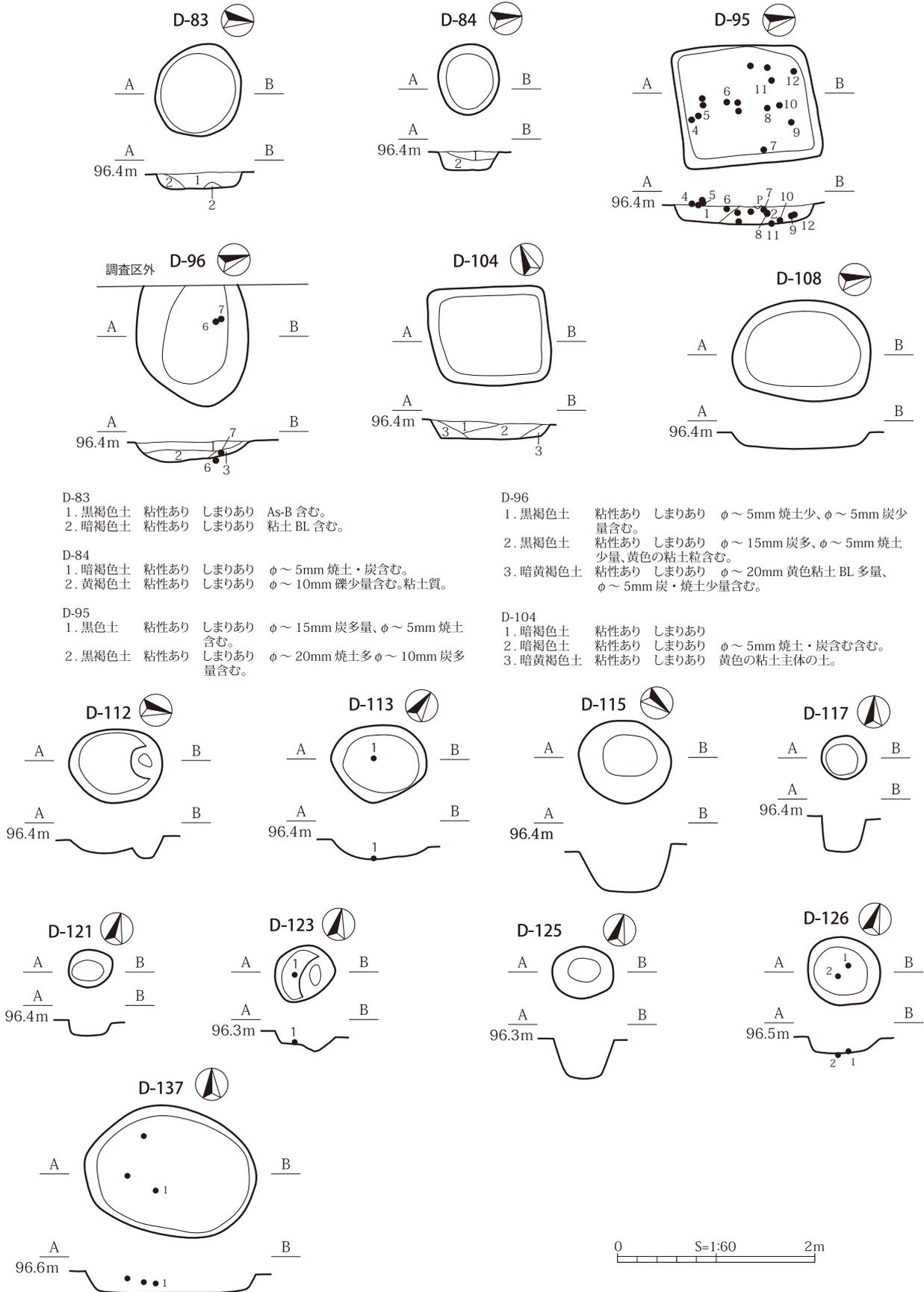
第 107 図 2号溝 平面図・断面図

3号溝

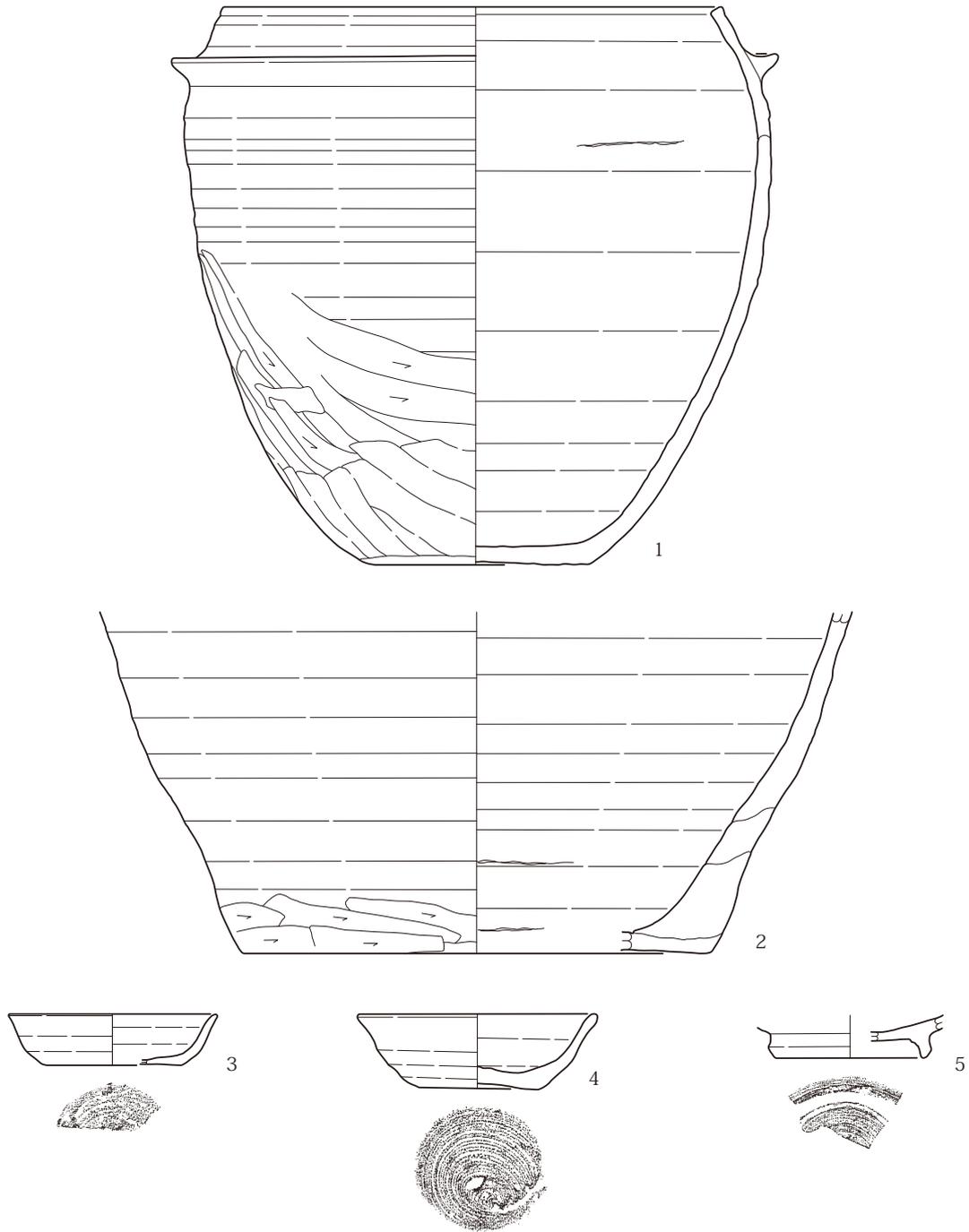


第 108 図 3号溝 平面図・断面図

土坑



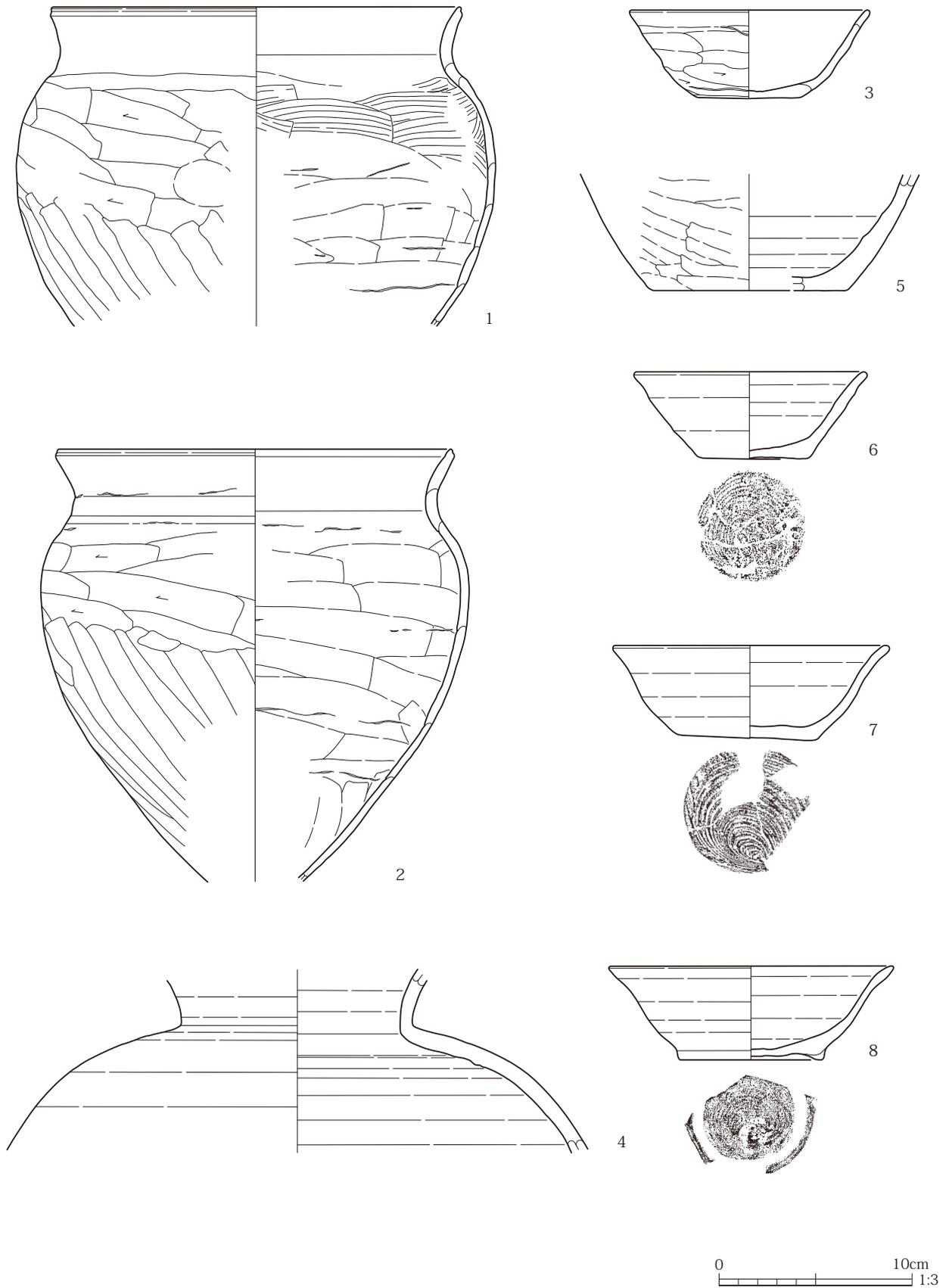
第 109 図 土坑 平面図・断面図



0 10cm 1:3

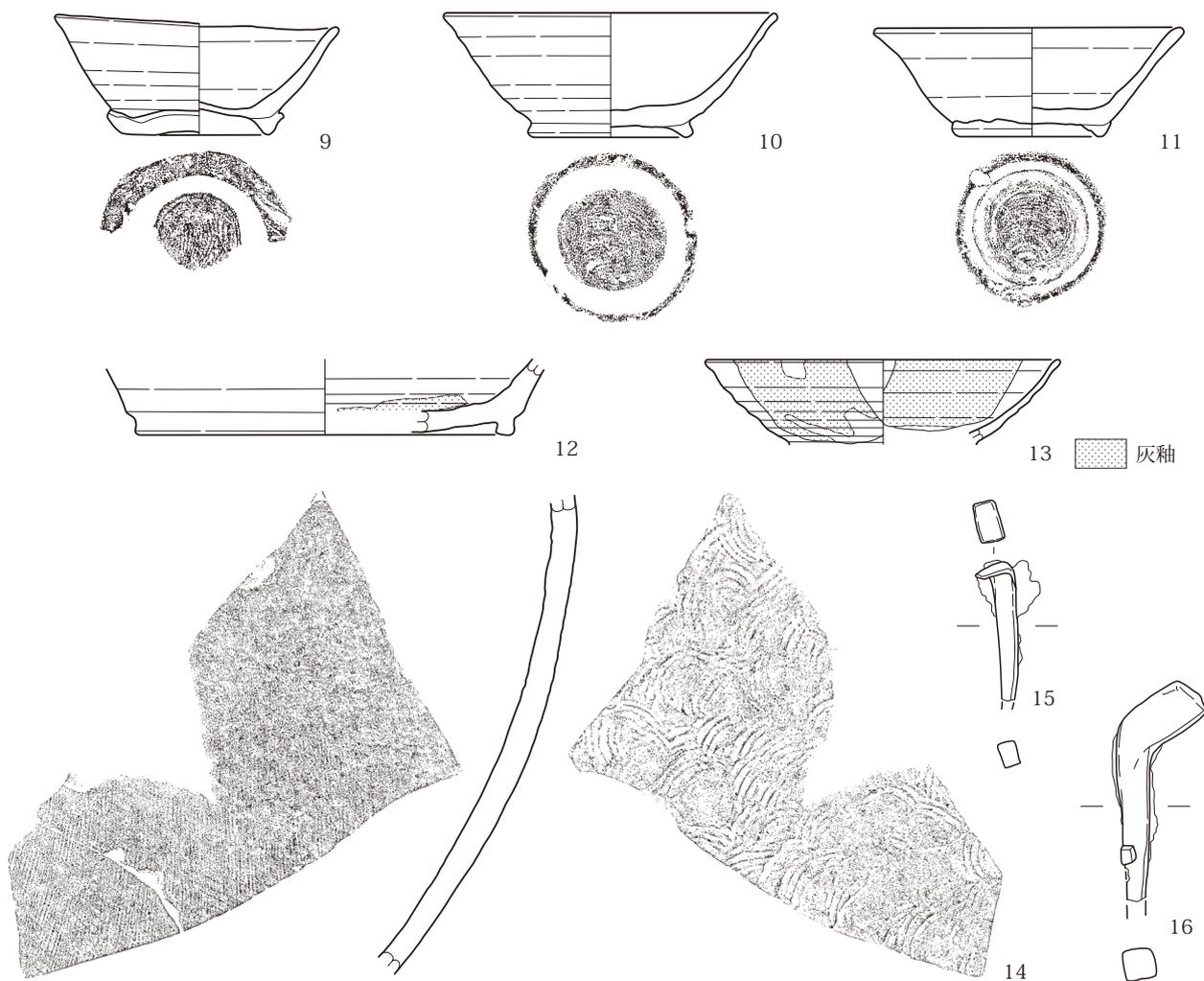
第 110 图 59 号住居跡出土遺物

60A 号住居跡 (1)

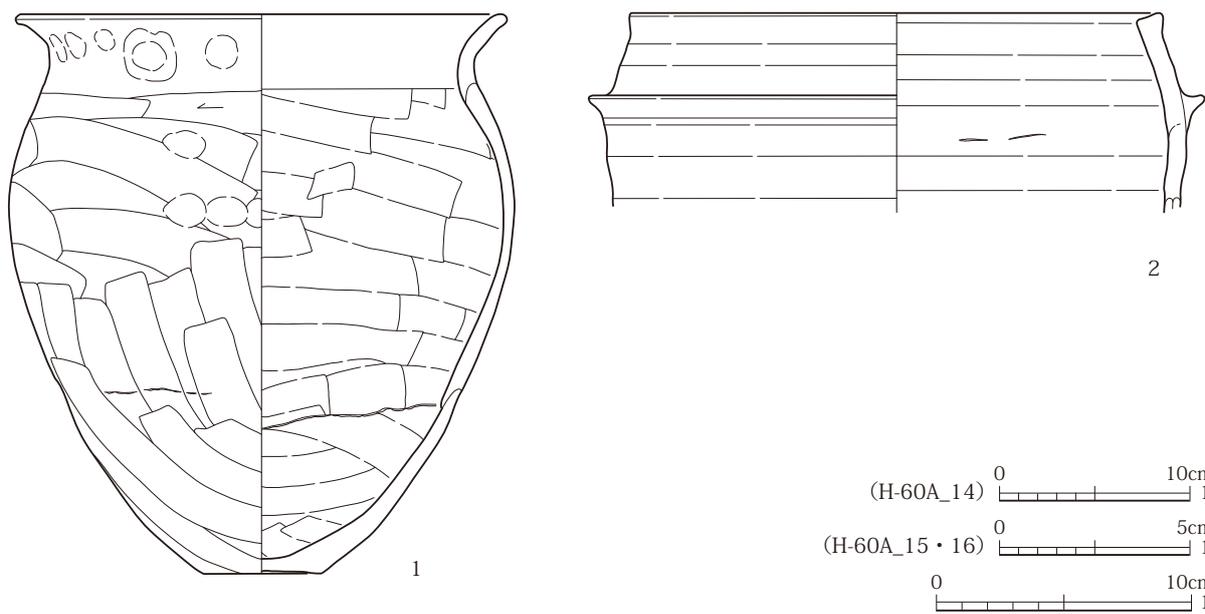


第 111 图 60A 号住居跡 (1) 出土遺物

60A 号住居跡 (2)

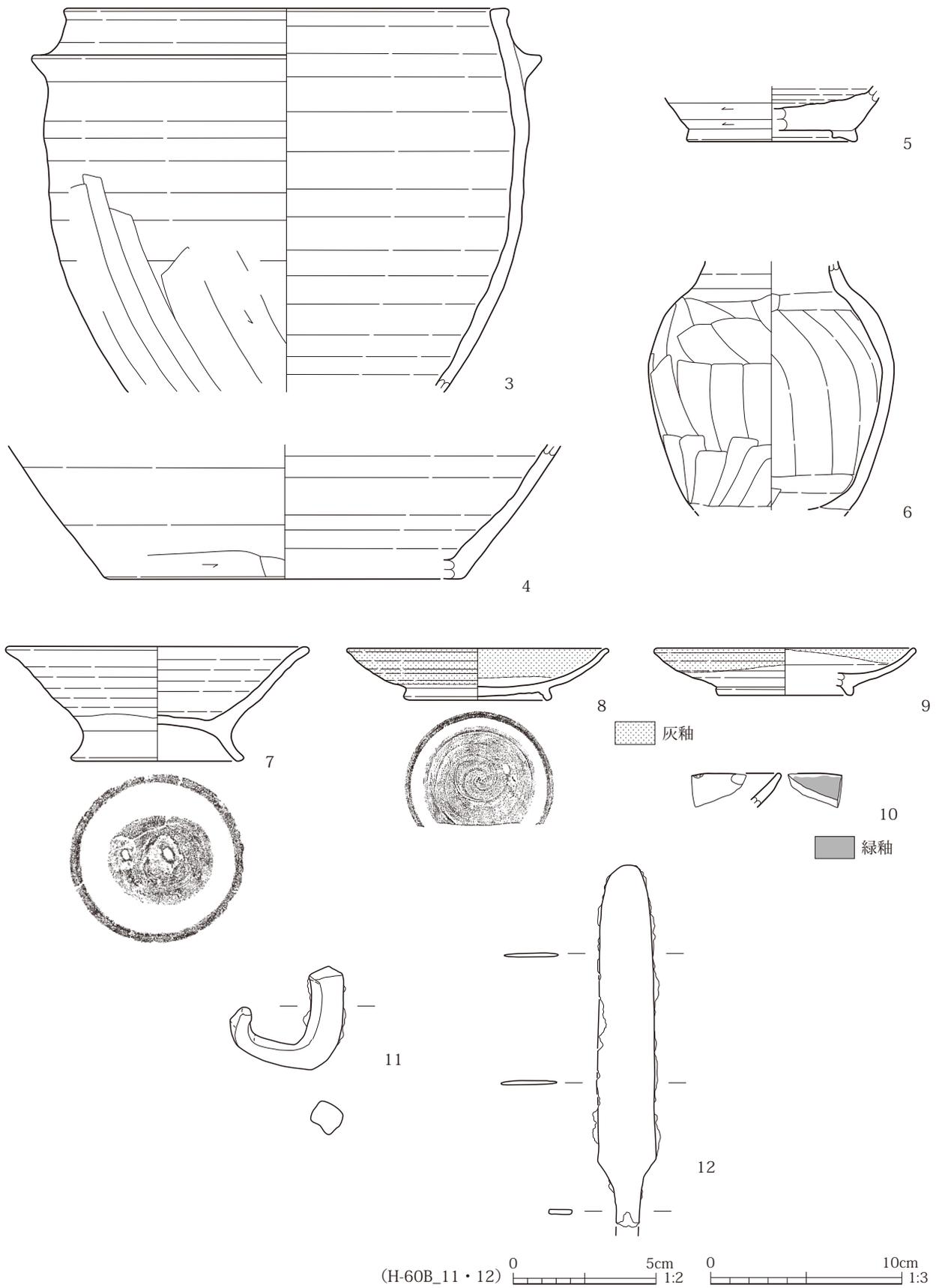


60B 号住居跡 (1)



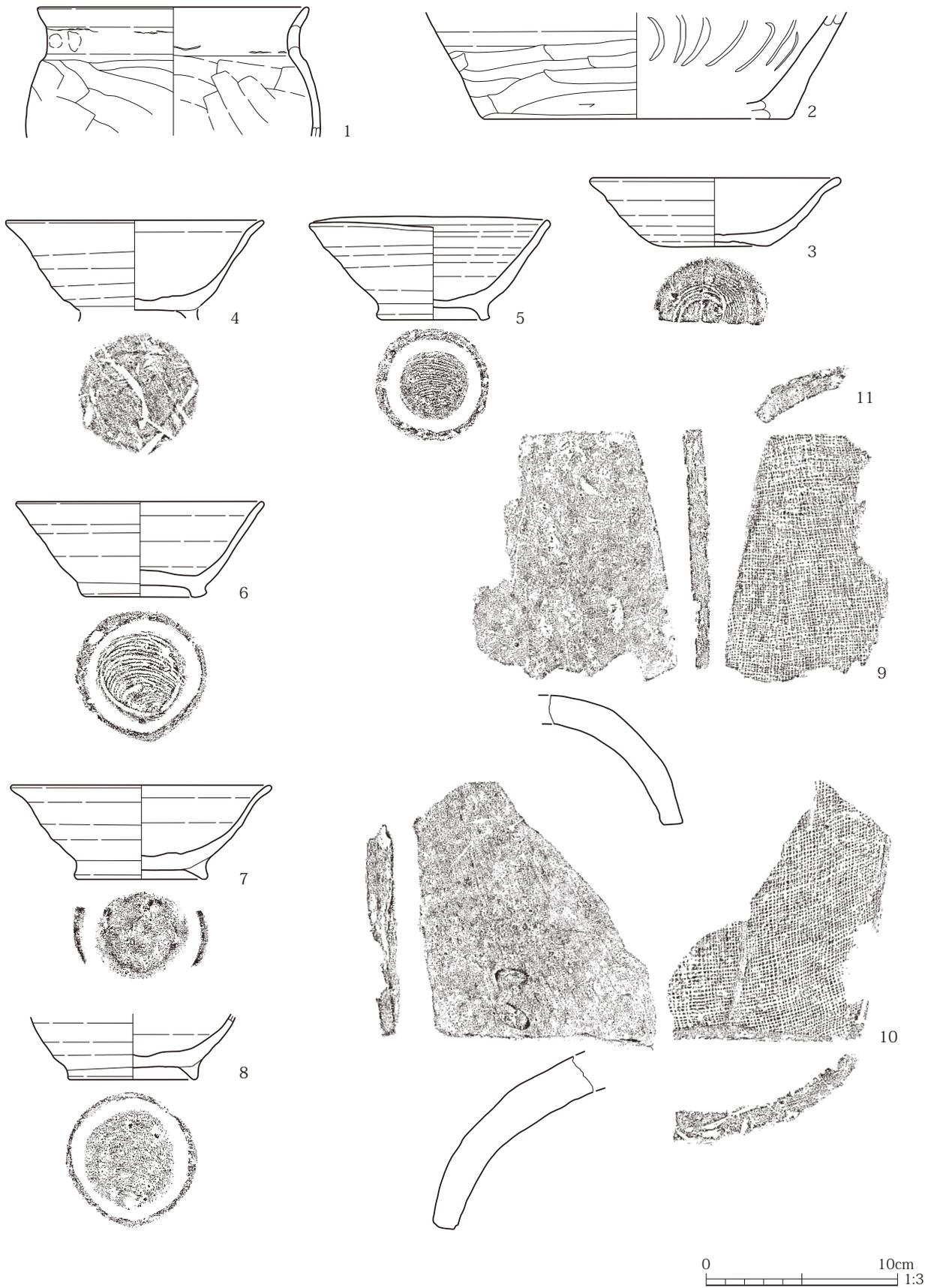
第 112 图 60A 号住居跡 (2)・60B 号住居跡 (1) 出土遺物

60B 号住居跡 (2)



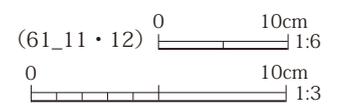
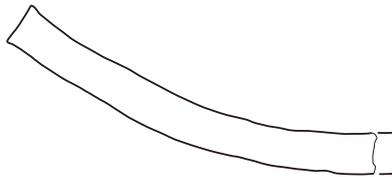
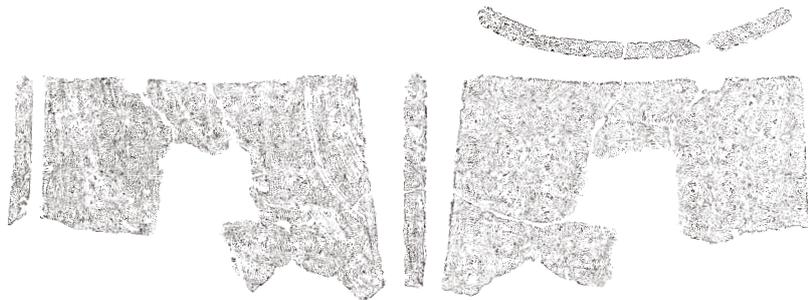
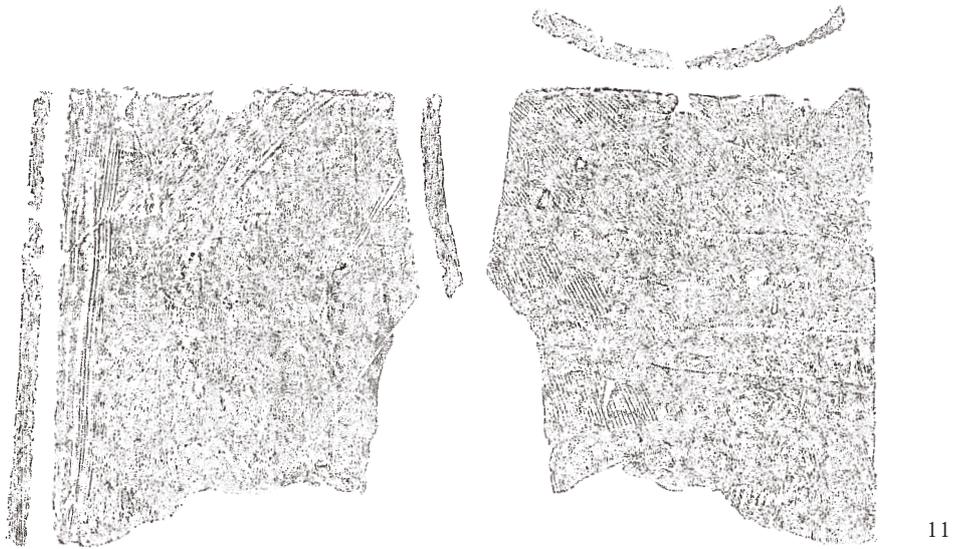
第 113 図 60B 号住居跡 (2) 出土遺物

61号住居跡(1)



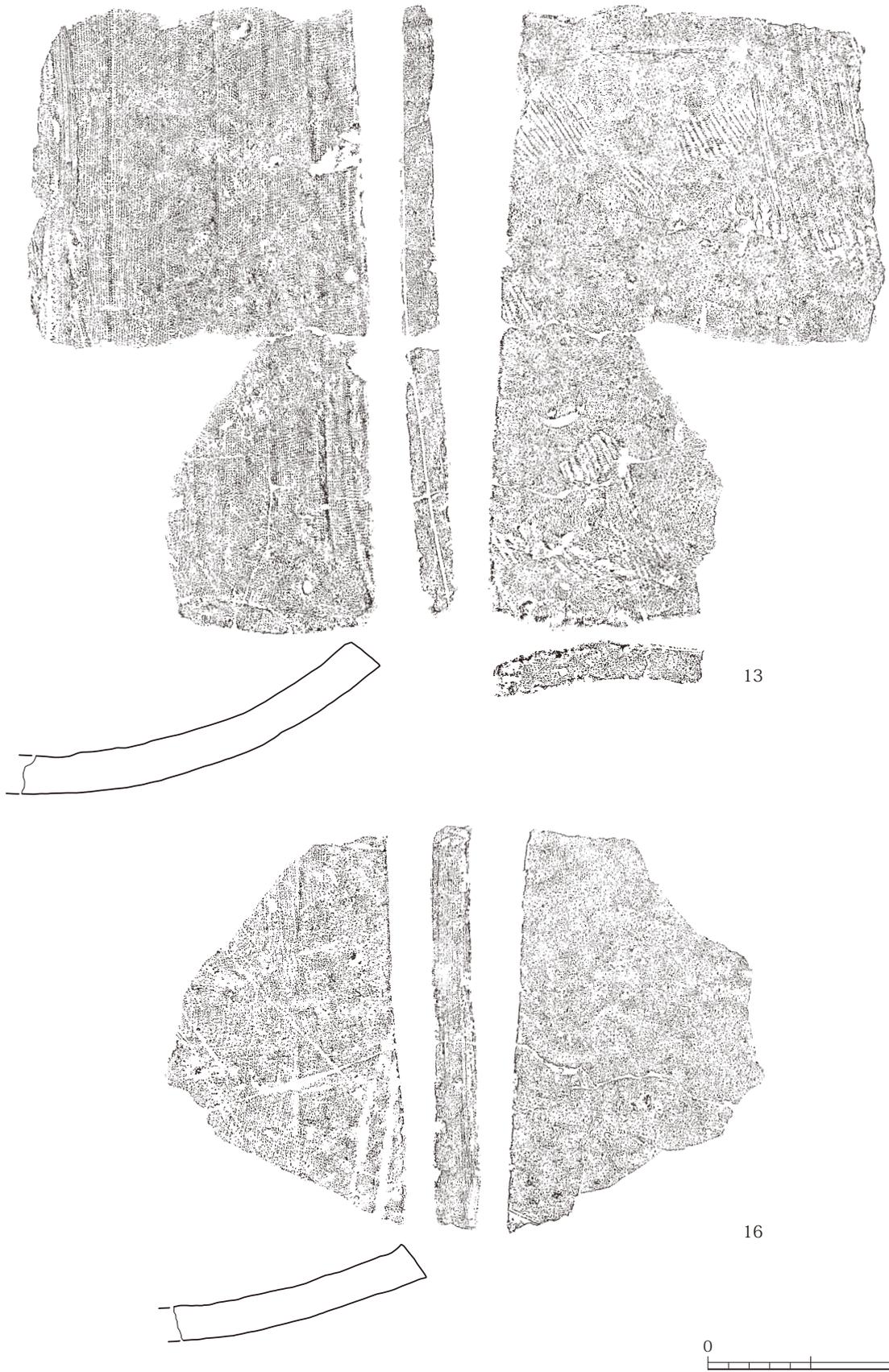
第114图 61号住居跡(1)出土遺物

61号住居跡(2)

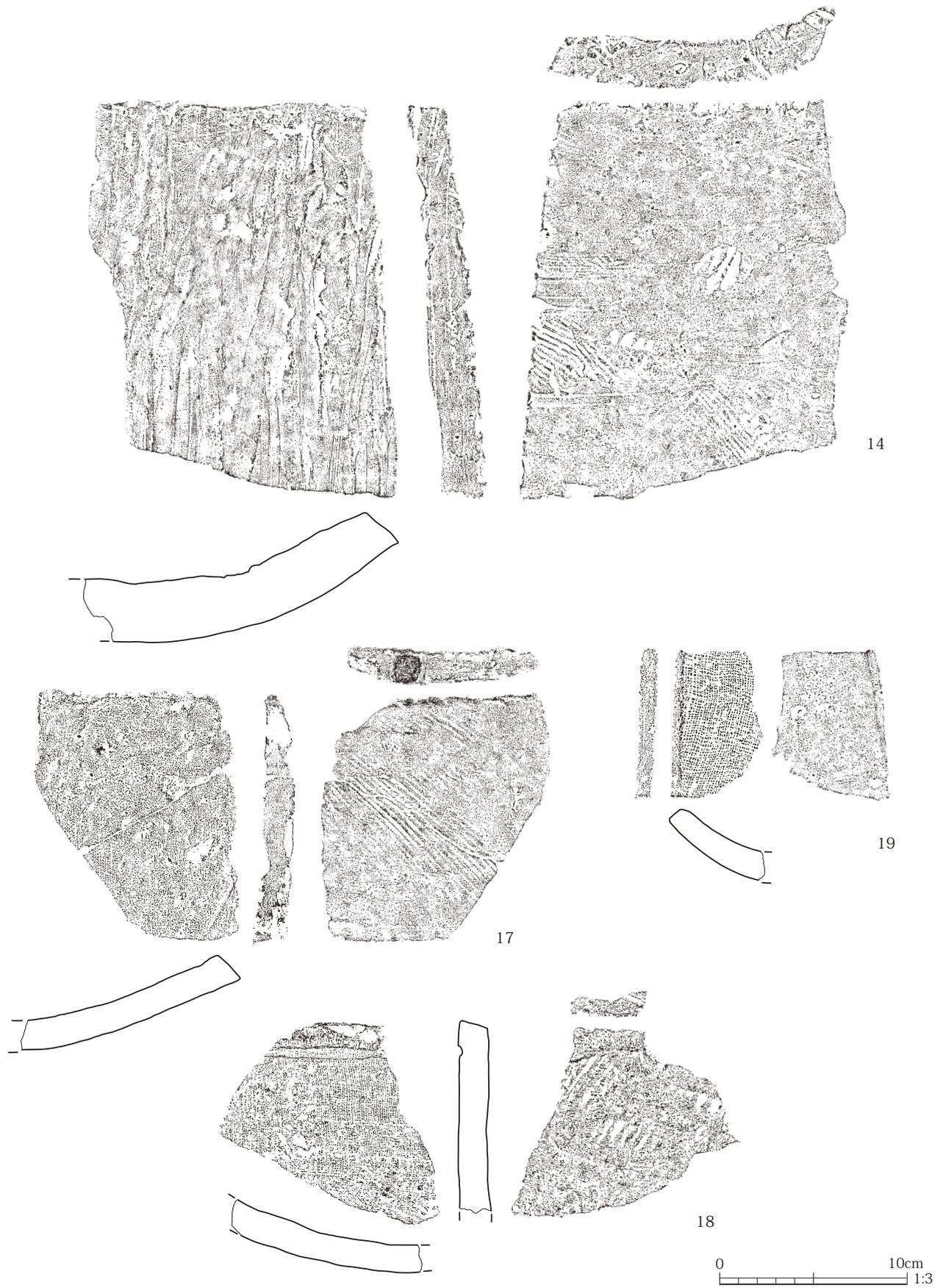


第115図 61号住居跡(2)出土遺物

61号住居跡(3)

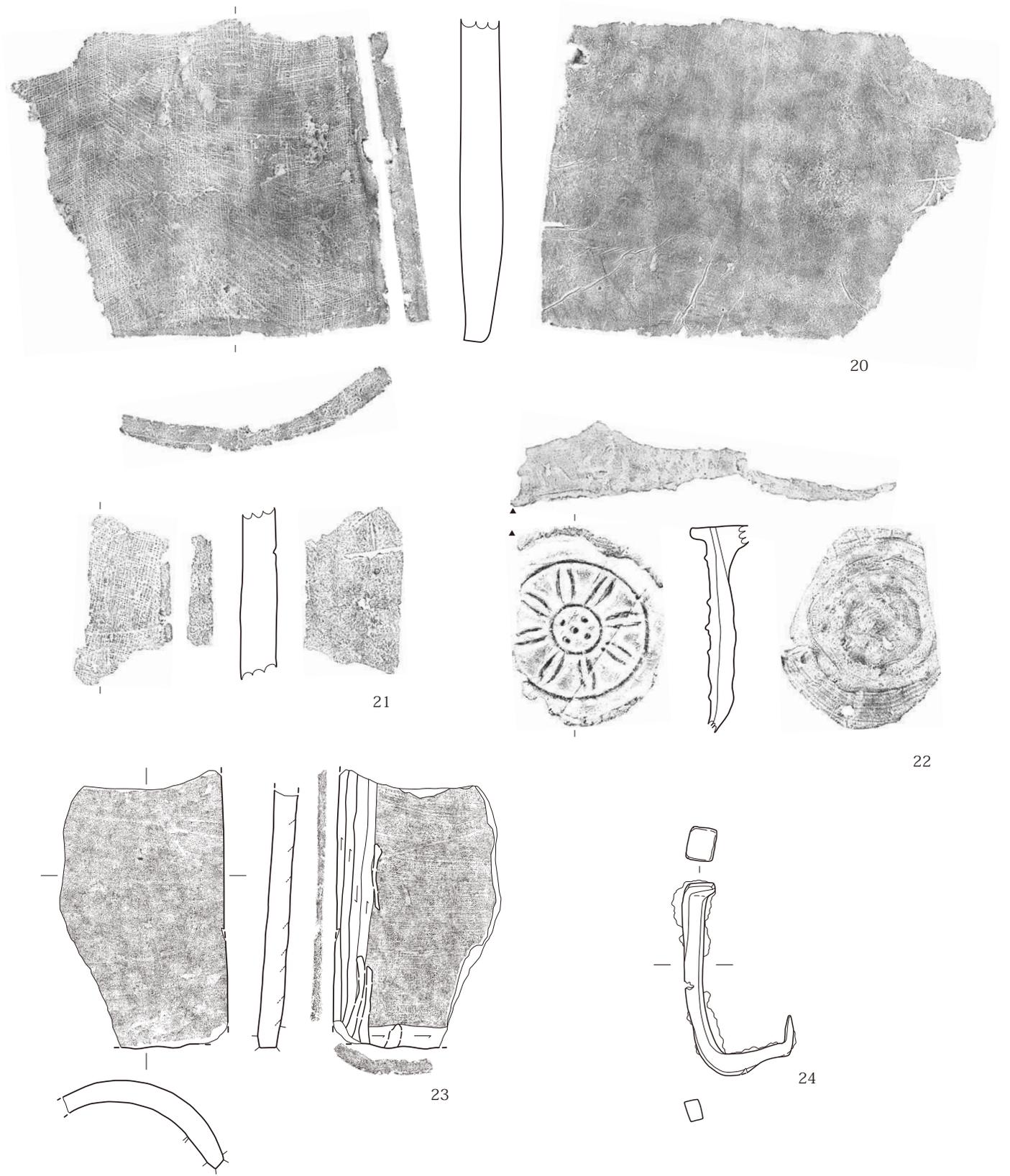


第116図 61号住居跡(3)出土遺物



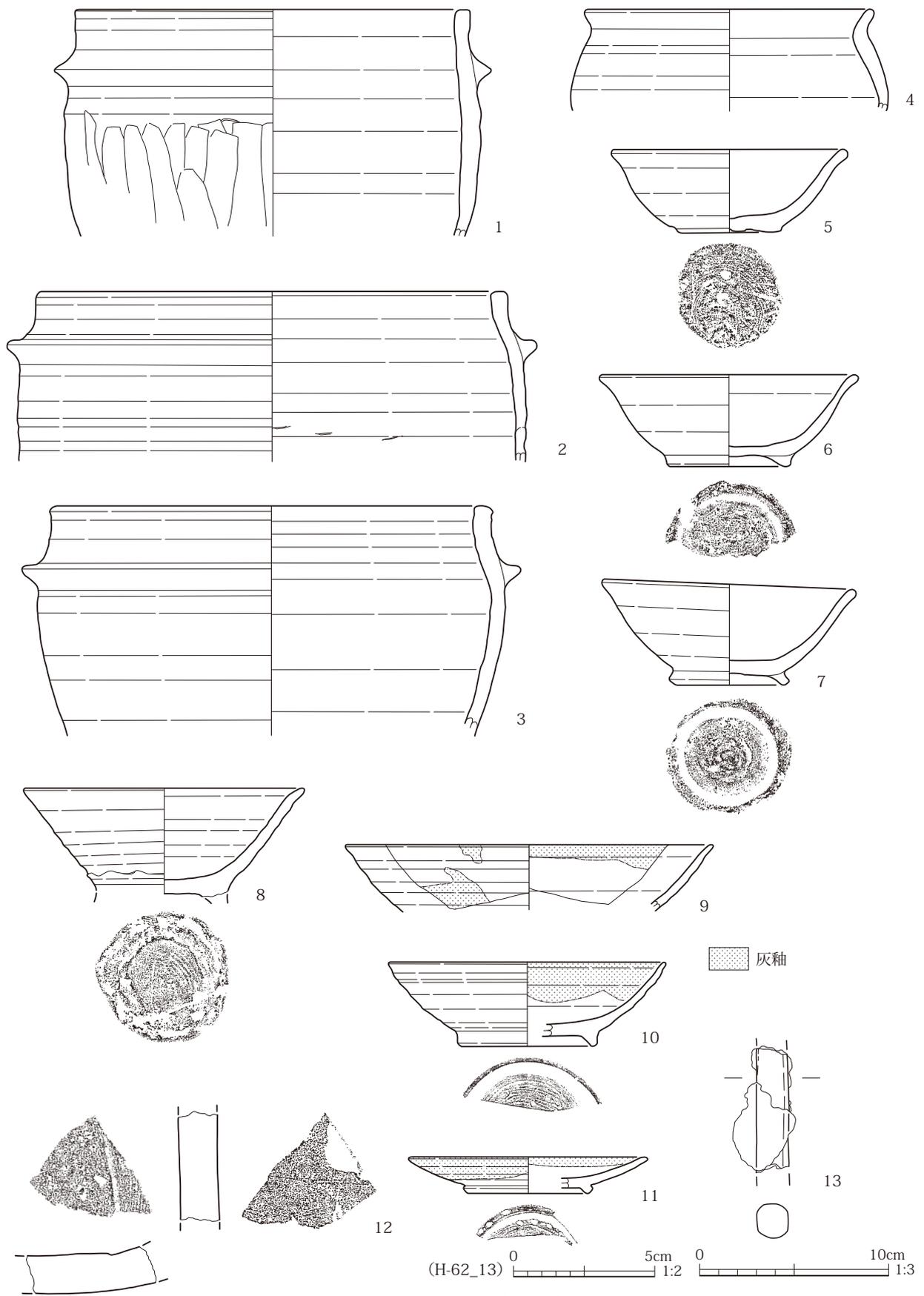
第117图 61号住居跡(4)出土遺物

61号住居跡(5)



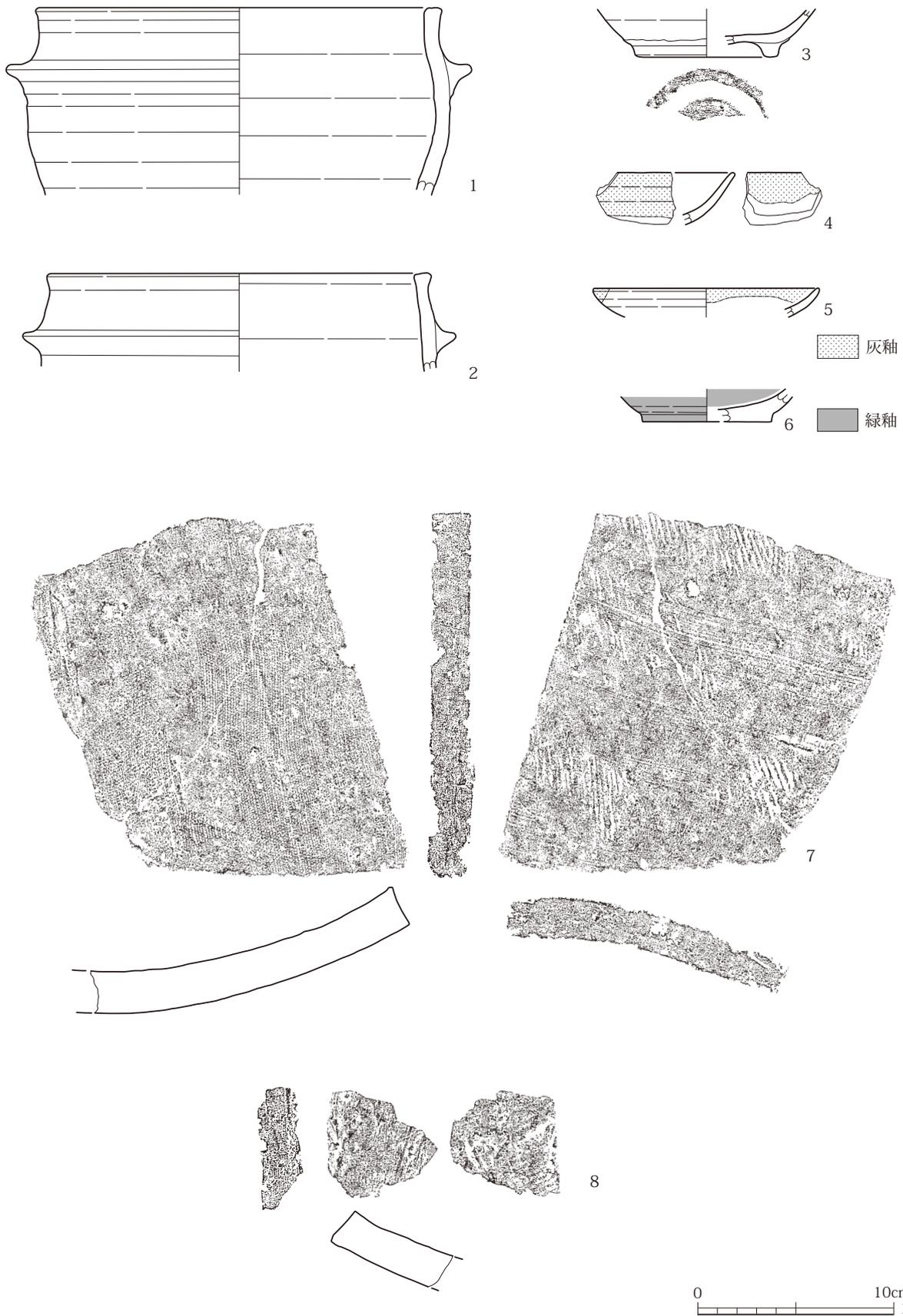
(H-61\_24) 0 5cm 0 10cm  
1:2 1:3

第118图 61号住居跡(5)出土遺物



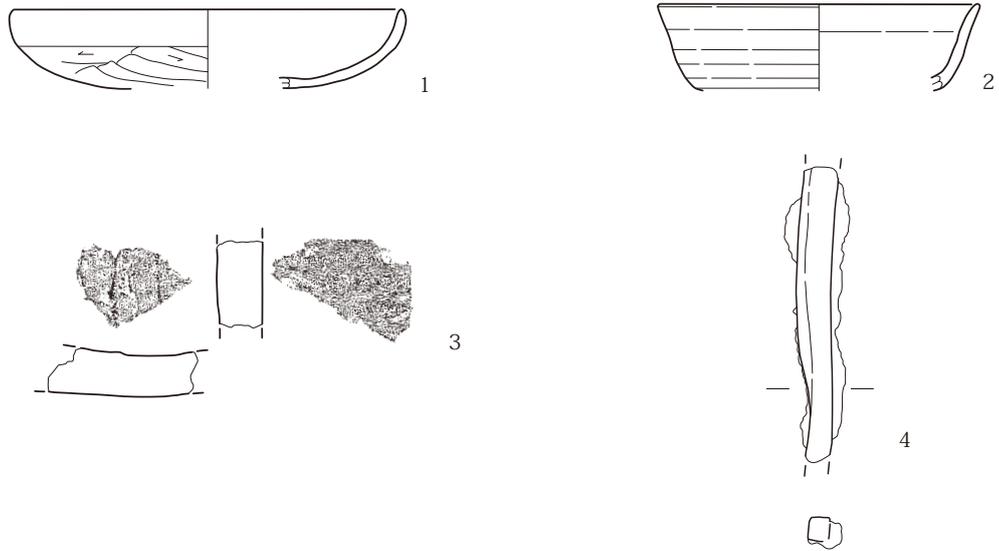
第 119 图 62 号住居跡出土遺物

63号住居跡

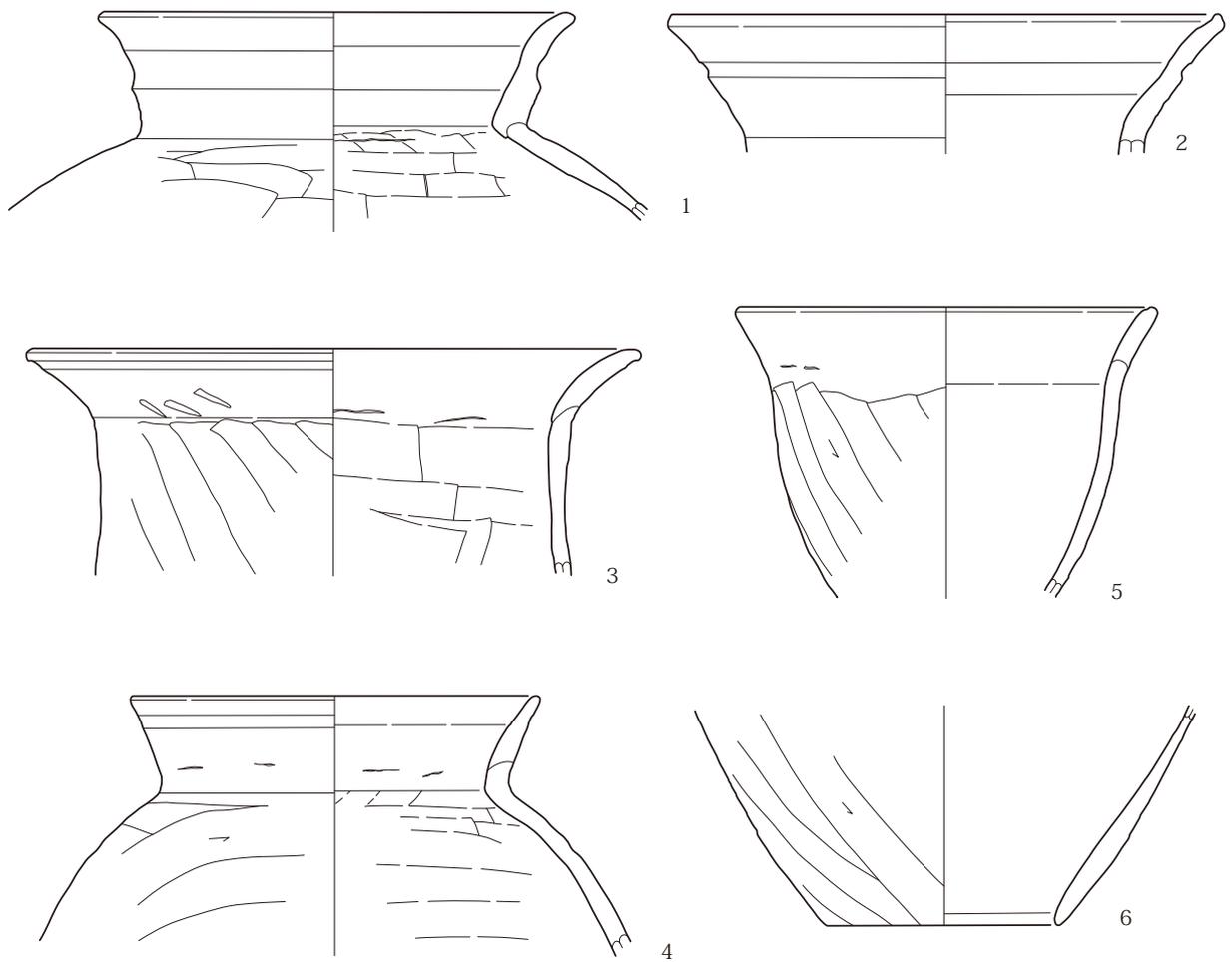


第 120 図 63号住居跡出土遺物

71 号住居跡



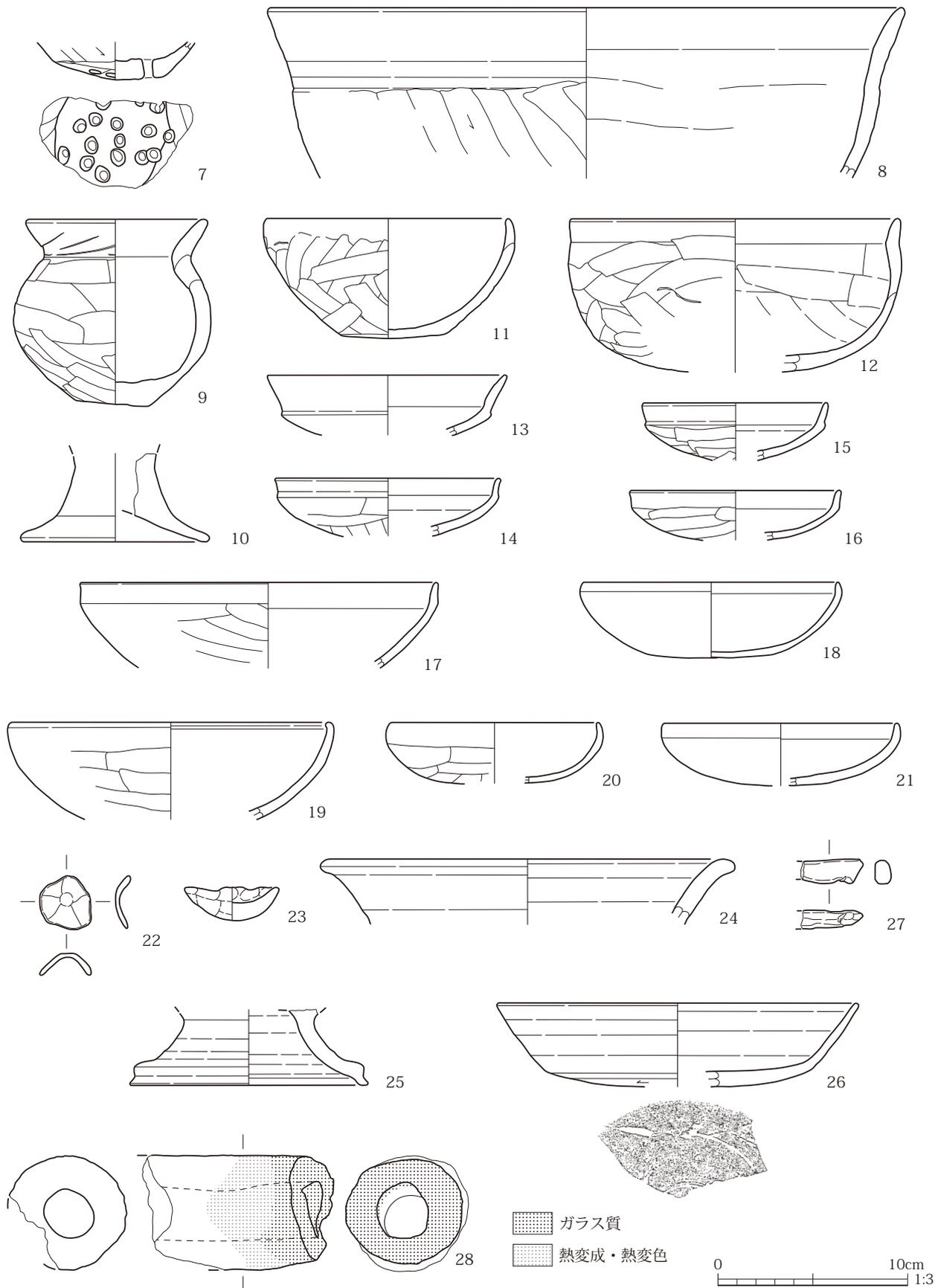
72 号住居跡 (1)



(H-71\_4) 0 5cm 1:2 0 10cm 1:3

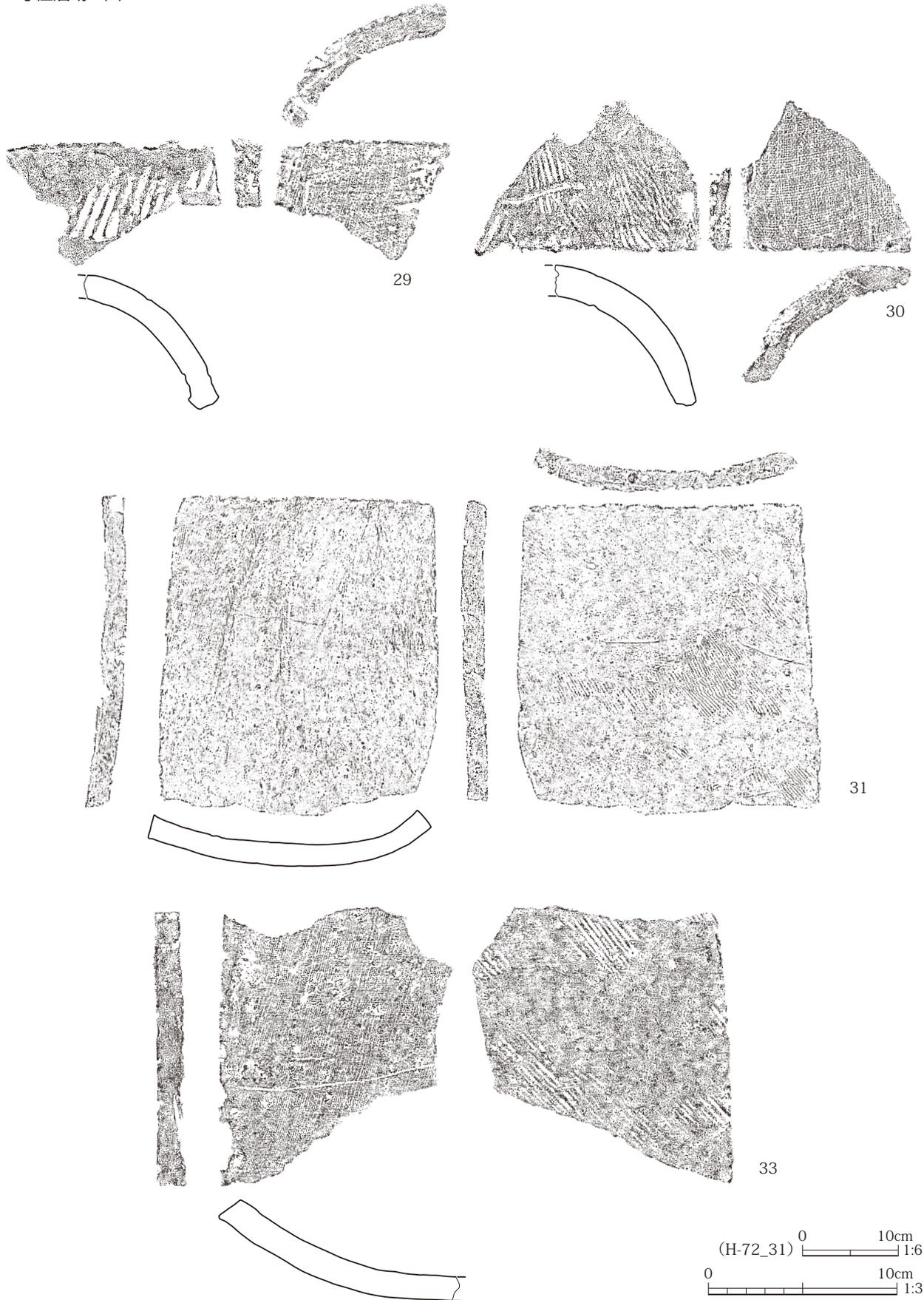
第 121 图 71 号住居跡・72 号住居跡 (1) 出土遺物

72号住居跡(2)



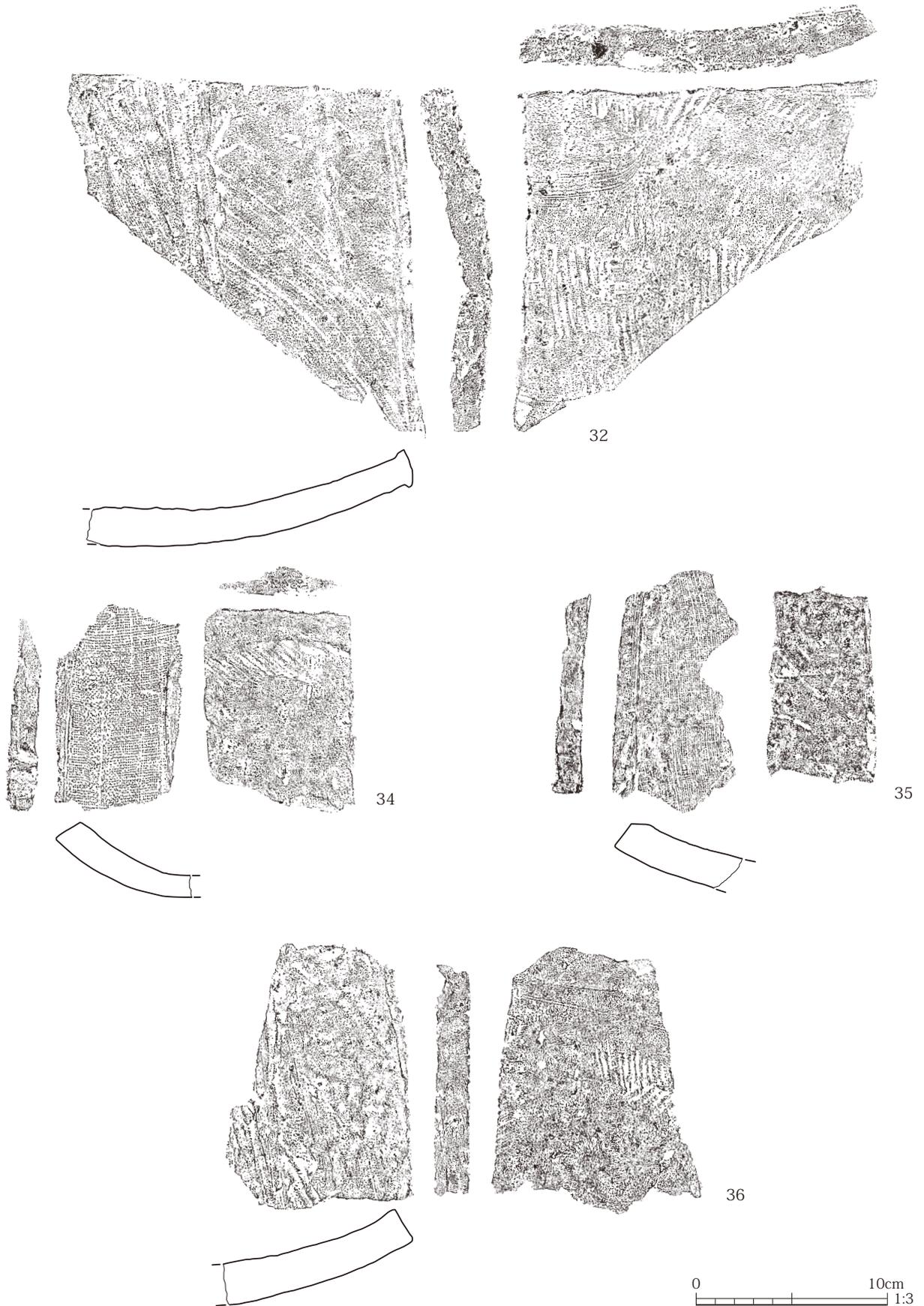
第122図 72号住居跡(2)出土遺物

72号住居跡(3)



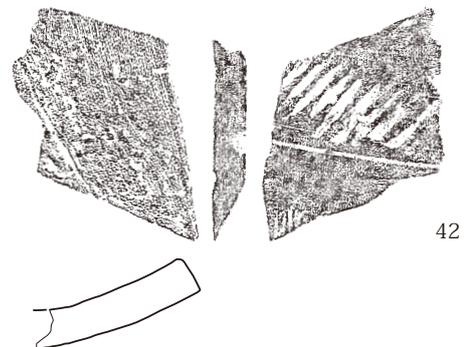
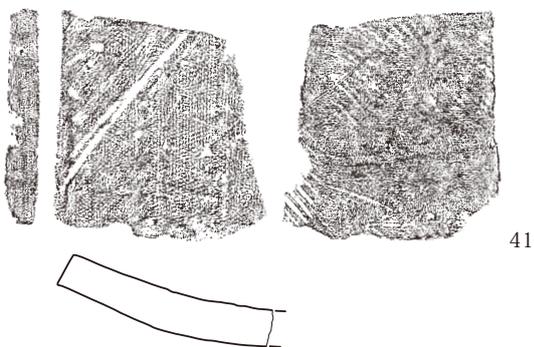
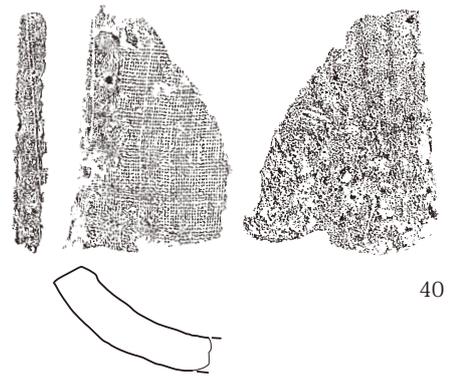
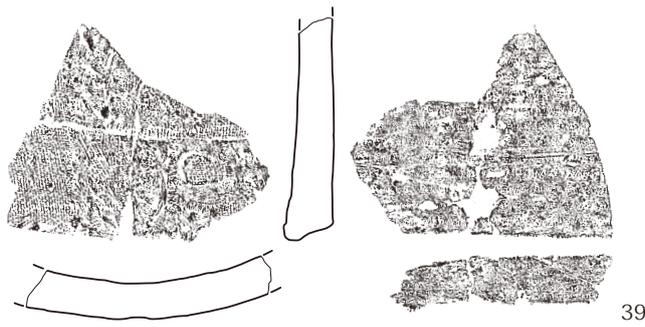
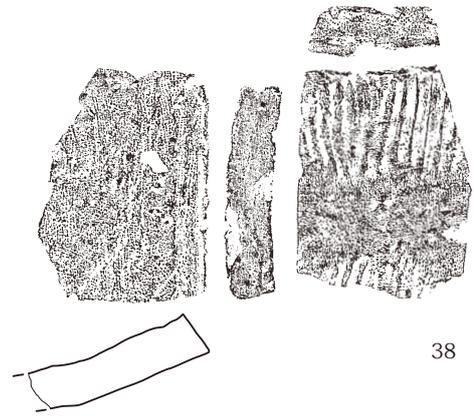
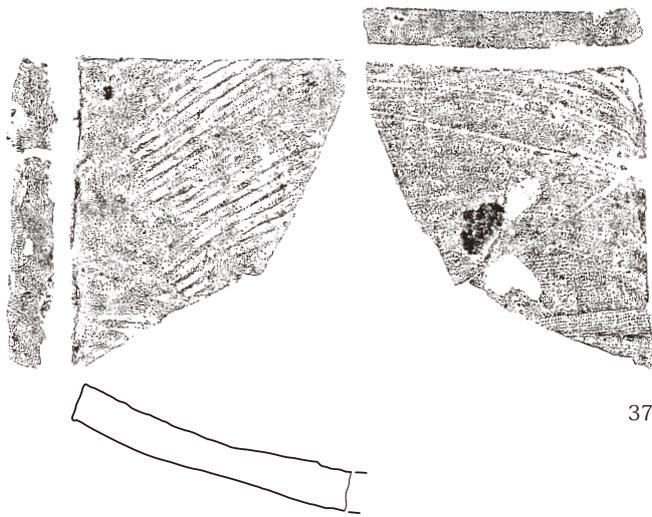
第123図 72号住居跡(3)出土遺物

72号住居跡(4)



第124図 72号住居跡(4)出土遺物

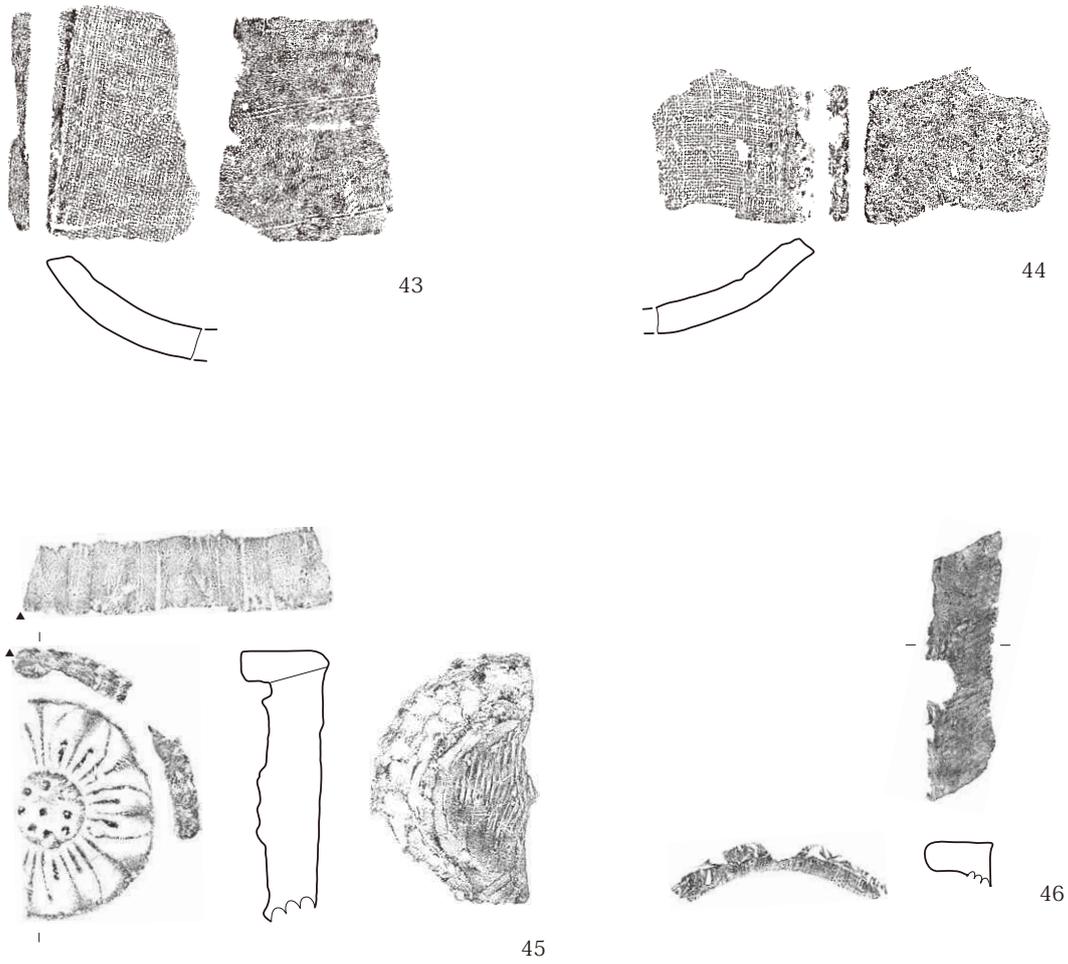
72号住居跡(5)



0 10cm 1:3

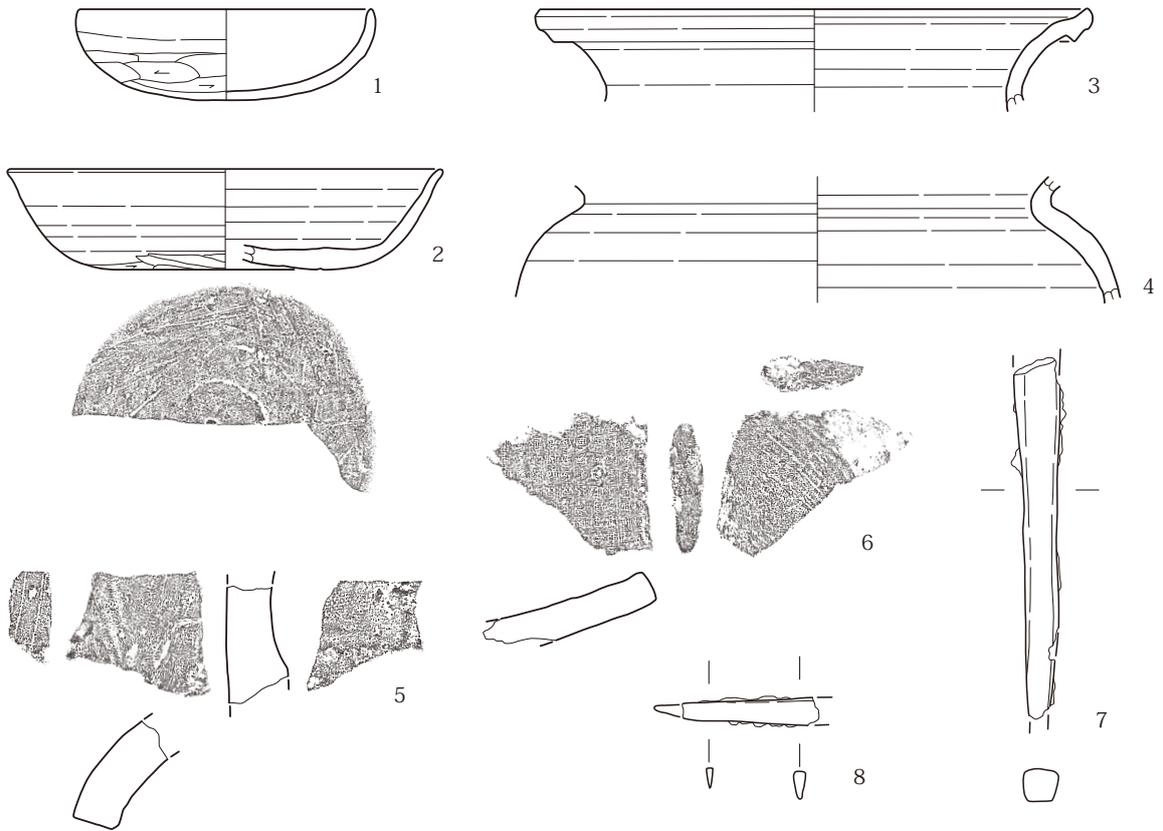
第125図 72号住居跡(5)出土遺物

72号住居跡(6)

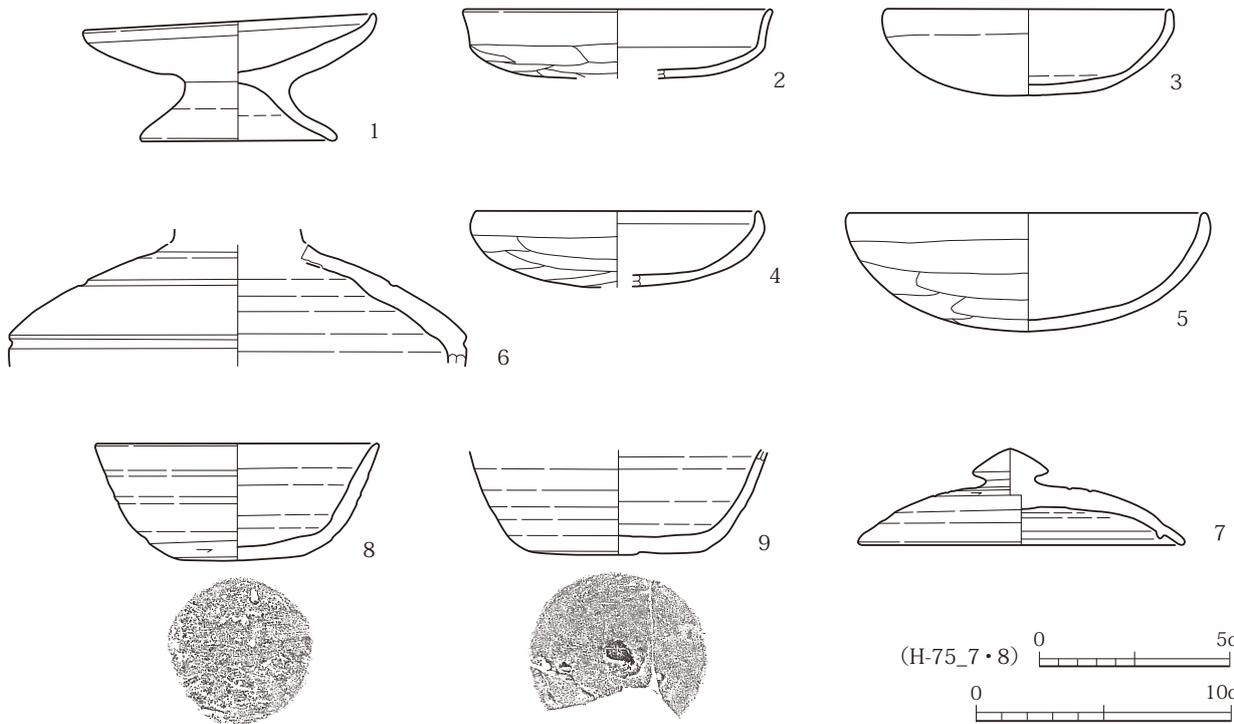


第126图 72号住居跡(6)出土遺物

75 号住居跡

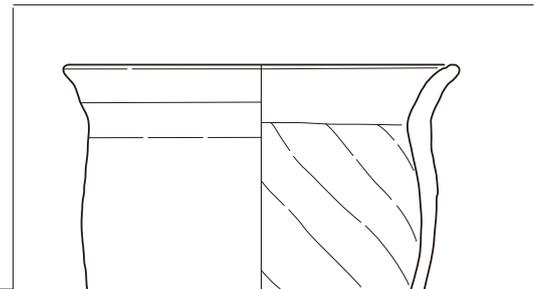
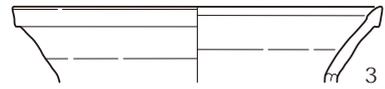
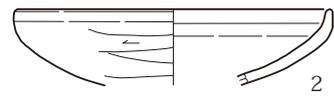
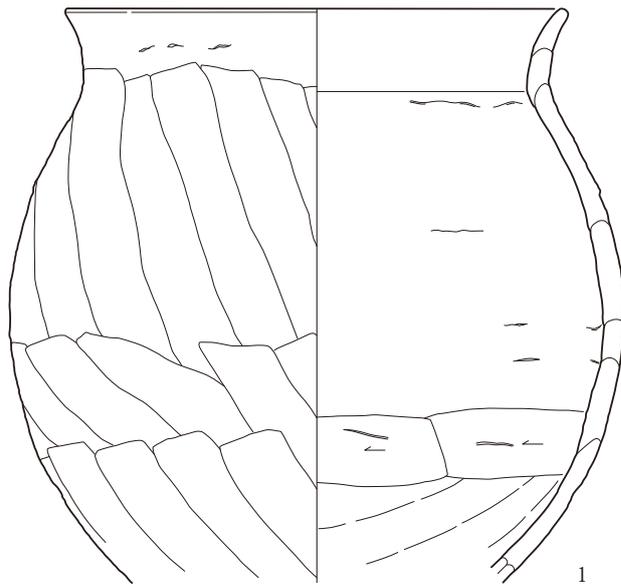


76 号住居跡

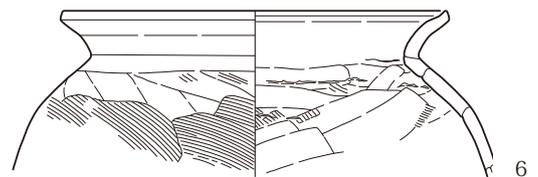
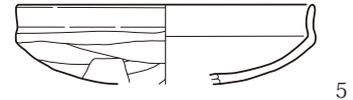
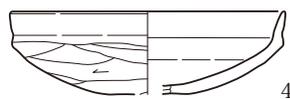
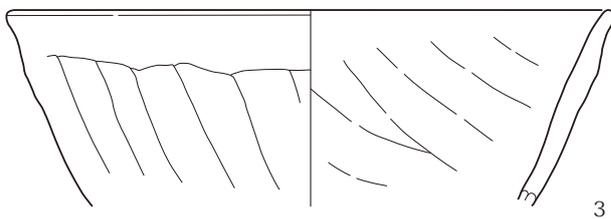
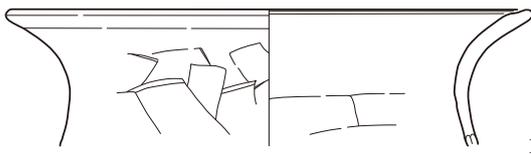


第 127 图 75・76 号住居跡出土遺物

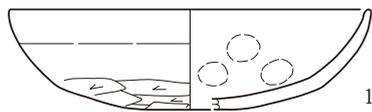
85 号住居跡



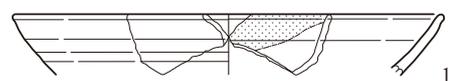
86 号住居跡



82 号土坑

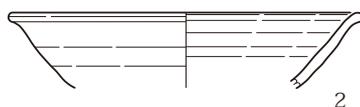
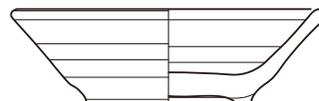
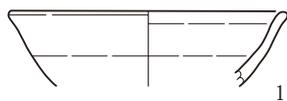


83 号土坑



灰釉

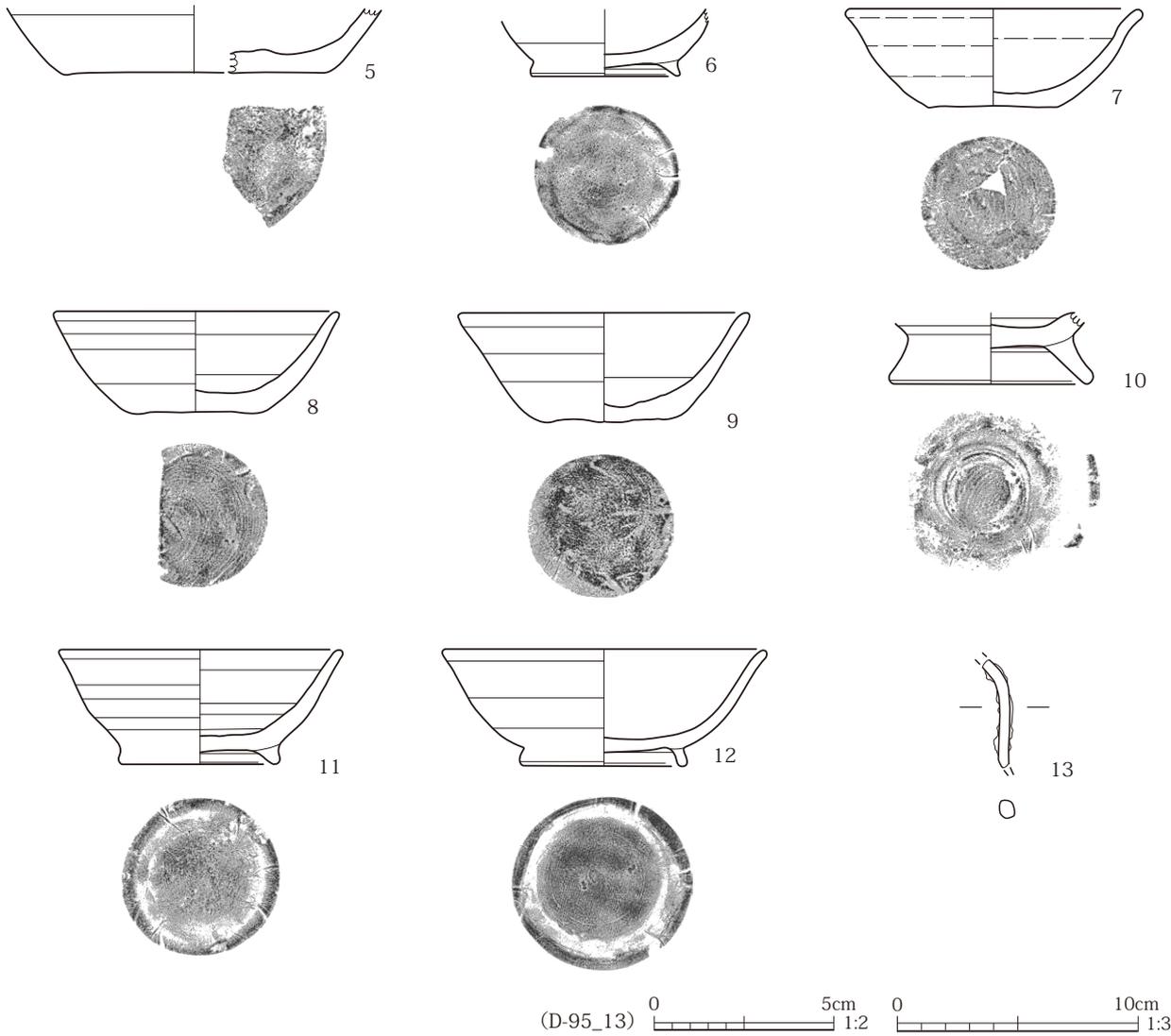
95 号土坑 (1)



0 10cm 1:3

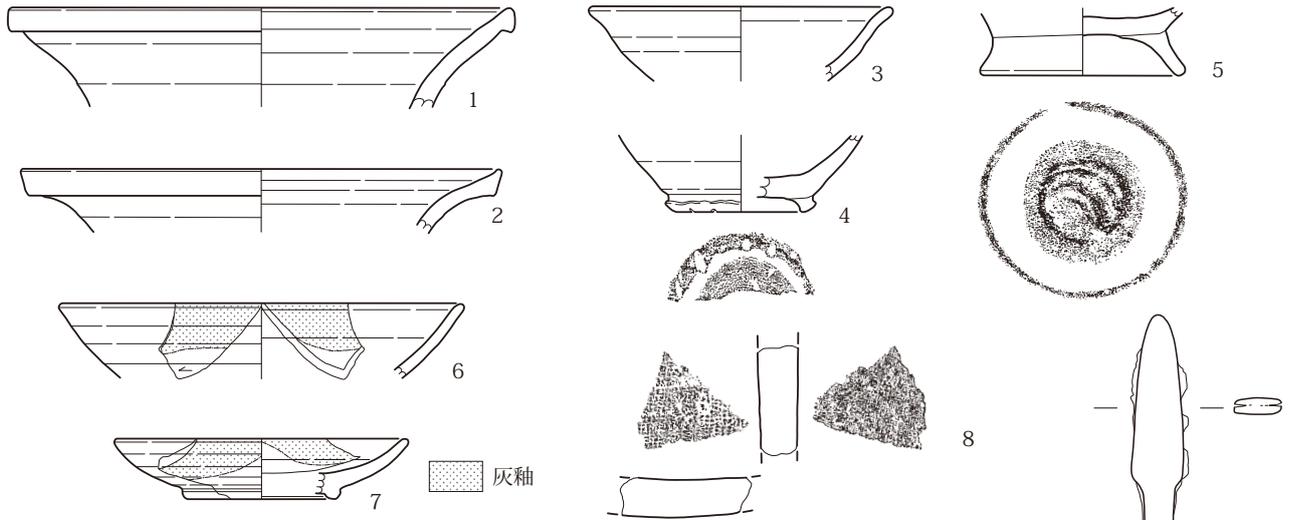
第 128 图 85・86 号住居跡・82・83 号土坑・95 号土坑 (1) 出土遺物

95号土坑(2)

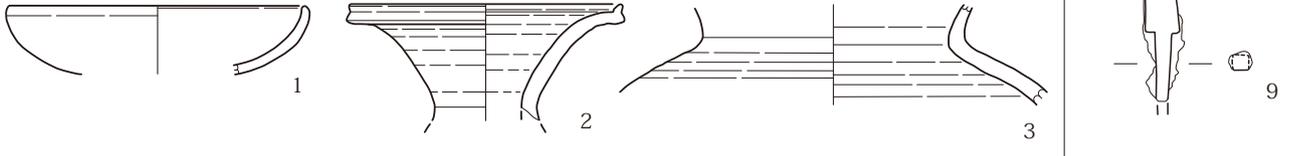


第129图 95号土坑(2)出土遗物

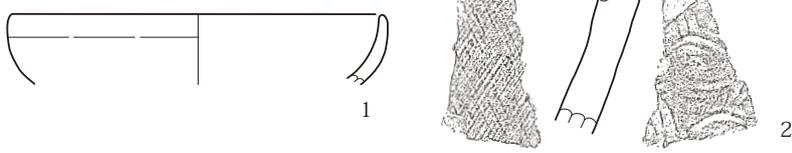
96号土坑



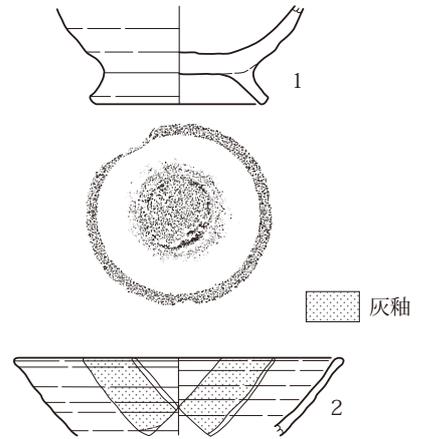
104号土坑



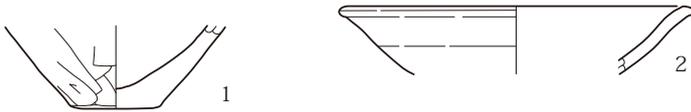
108号土坑



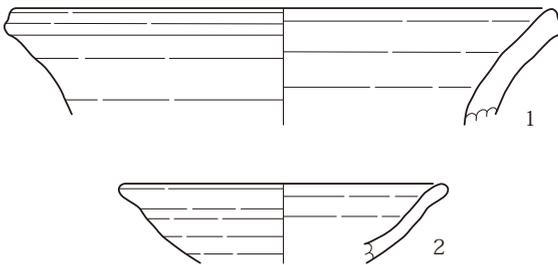
113号土坑



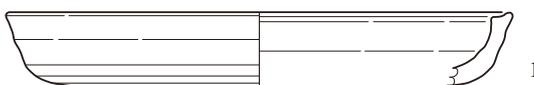
112号土坑



115号土坑



117号土坑



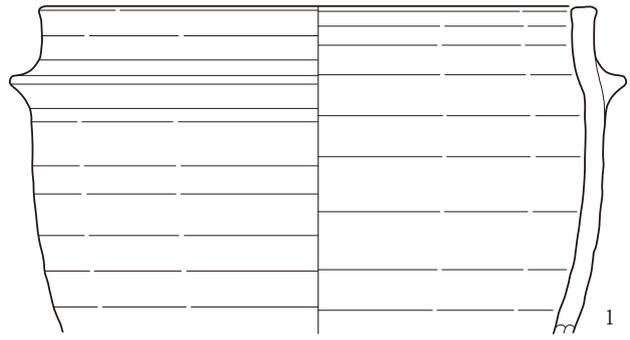
(D-96\_9·D-117\_2) 0 5cm 0 10cm 1:2 1:3

第130图 96·104·108·112·113·115·117号土坑出土遗物

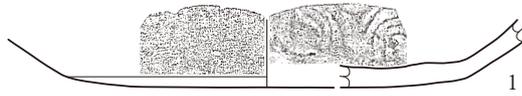
121 号土坑



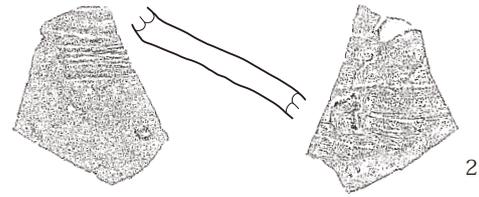
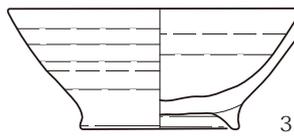
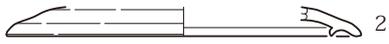
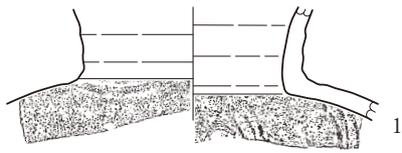
123 号土坑



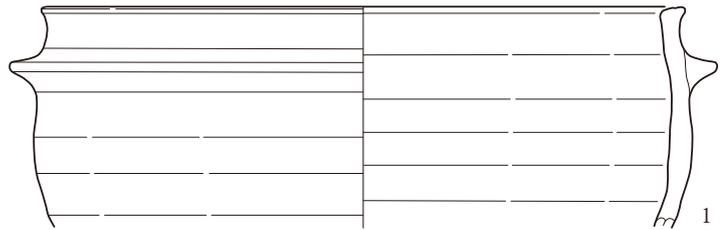
125 号土坑



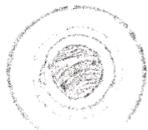
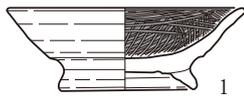
126 号土坑



137 号土坑

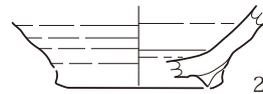


2 号溝

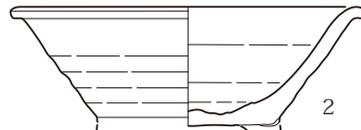
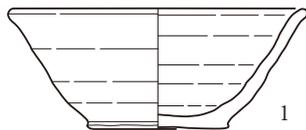


■ 黑色处理

3 号溝



遺構外



0 10cm 1:3

第 131 图 121 · 123 · 125 · 126 · 137 · 254 号土坑 · 2 · 3 号溝 · 遺構外出土遺物

第26表 1区出土遺物観察表(1)

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-59	1	須恵器羽釜	口縁部 2/3、胴部 3/4、底部ほぼ完形	口径：21.9 底径：9.7 器高：24.8	内外：橙	片岩・白色粒・褐色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。胴部下半斜方向のヘラケズリ後、下端斜方向のヘラナデ。底部ヘラケズリ後ナデ。鏝貼付。内：ロクロ整形。	10C 後半	内面摩耗。
H-59	2	須恵器甕	胴部下半～底部 1/4	口径：— 底径：(20.5) 器高：[15.2]	外：にぶい橙、内：にぶい黄橙	石英・角閃石・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形後、胴部下端横方向のヘラケズリ。底部ナデ。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-59	3	須恵器杯	1/5	口径：(9.2) 底径：(6.0) 器高：2.3	内外：橙	片岩・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-59	4	須恵器杯	口縁部～体部 2/3、底部完形	口径：10.5 底径：5.3 器高：3.4	内外：橙	角閃石・白色粒・褐色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-59	5	灰釉陶器皿	底部～高台部 1/4	口径：— 底径：(6.6) 器高：[1.9]	素地：灰白	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。	10C	
H-60A	1	土師器甕	口縁部～胴部中位 1/4	口径：(21.4) 底径：— 器高：[16.8]	外：橙、内：にぶい赤褐	雲母・白色粒	良好	外：口縁部ヨコナデ。胴部横方向のヘラケズリ後、斜縦方向のヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部横・斜方向のヘラナデ。	10C 前半	
H-60A	2	土師器甕	口縁部～胴部 1/5	口径：(20.8) 底径：— 器高：[22.7]	外：にぶい褐、内：にぶい赤褐	片岩・石英・白色粒	普通	外：口縁部ヨコナデ。胴部横方向のヘラケズリ後、斜縦方向のヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上～中位横方向、下位縦方向のヘラナデ。	10C 前半	
H-60A	3	土師器杯	ほぼ完形	口径：12.5 底径：5.4 器高：4.6	内外：明赤褐	石英・白色粒	良好	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。	10C 前半	
H-60A	4	須恵器壺	頸部～胴部上位 1/5	口径：— 底径：— 器高：[9.6]	内外：暗灰	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形。内：ロクロ整形。	10C	
H-60A	5	須恵器壺	胴部下位～底部 1/6	口径：— 底径：(10.0) 器高：[6.1]	内外：灰白	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形後、胴部下位ヘラナデ。底部ヘラナデ。内：ロクロ整形。	10C	
H-60A	6	須恵器杯	ほぼ完形	口径：12.2 底径：5.5 器高：4.6	外：にぶい橙、内：浅黄橙	白色粒	酸化焰	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。内：ロクロ整形。	10C 前半	
H-60A	7	須恵器杯	4/5	口径：14.4 底径：7.2 器高：5.0	外：浅黄橙、内：にぶい黄橙	角閃石・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。内：ロクロ整形。	10C 前半	
H-60A	8	須恵器碗	口縁部 1/8、体部 1/4、底部～高台部 1/2	口径：(14.8) 底径：(7.5) 器高：4.9	内外：灰白	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。	10C 前半	
H-60A	9	須恵器碗	口縁部～体部 2/3、底部～高台部 1/2	口径：11.7 底径：(7.2) 器高：5.0	内外：暗灰	角閃石・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。	10C 前半	
H-60A	10	須恵器碗	口縁部～体部 1/4、底部～高台部完形	口径：(13.7) 底径：6.8 器高：5.2	内外：にぶい黄橙	角閃石・雲母・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部(回転糸切り後)ナデ。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。器表面摩耗。	10C 前半	
H-60A	11	須恵器碗	口縁部～体部 4/5、底部～高台部完形	口径：12.8 底径：6.1 器高：4.6	外：灰黄褐、内：黄灰	石英・雲母・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。	10C 前半	
H-60A	12	灰釉陶器瓶	底部～高台部 1/3	口径：— 底径：(15.5) 器高：[3.1]	素地：灰白、釉薬：緑灰	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。底部ナデ。高台貼付時に周縁回転ナデ。内：ロクロ整形。底面に灰釉。	10C	
H-60A	13	灰釉陶器碗	口縁部～体部 1/8	口径：(14.6) 底径：— 器高：[3.5]	素地：灰白、釉薬：灰白	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。体部下位回転ヘラケズリ。灰釉漬け掛け。内：ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 前半	
H-60A	14	須恵器大甕	胴部破片	口径：— 底径：— 器高：—	外：灰、内：黄灰	白色粒	還元焰	外：平行タタキ。自然釉付着。内：同心円の当て具痕。	10C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)						備考
H-60A	15	鉄製品釘	3/4	長さ：[3.8]、幅：0.65、厚さ：0.45、重量：[6.384g]						
H-60A	16	鉄製品釘	1/3	長さ：[6.2]、幅：0.9、厚さ：0.9、重量：[19.671g]						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-60B	1	土師器甕	口縁部～胴部 2/3、底部 3/4	口径：19.4 底径：4.6 器高：22.3	内外：にぶい橙	片岩・石英・チャート・白色粒	普通	外：口縁部ヨコナデ、指押え。胴部横・縦方向のヘラケズリ、指押え。底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部横・斜方向のヘラナデ。底部ヘラナデ。	10C 後半	
H-60B	2	須恵器羽釜	口縁部～胴部上位 1/5	口径：(21.0) 底径：— 器高：[8.0]	外：にぶい褐、内：明赤褐	角閃石・雲母・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。鏝貼付。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-60B	3	須恵器羽釜	口縁部 1/3、胴部 1/4	口径：(23.4) 底径：— 器高：[20.4]	外：黄灰、内：浅黄	片岩・石英・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形後、胴部下半に縦方向のヘラケズリ。鏝貼付。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-60B	4	須恵器甕	胴部下位～底部 1/8	口径：— 底径：(19.0) 器高：[7.2]	外：灰、内：にぶい褐	石英・白色粒	還元焰	外：ロクロ整形後、胴部下端に横方向のヘラケズリ。底部ナデ。内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-60B	5	須恵器壺	胴部下端～高台部 1/2	口径：— 底径：(9.0) 器高：[2.5]	内外：灰白	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形後、胴部下端に回転ヘラケズリ。底面回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。内：ロクロ整形。	10C 後半	

第 27 表 1 区出土遺物観察表 (2)

( ) : 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-60B	6	須恵器壺	頸部～胴部 1/2	口径：— 底径：— 器高：[13.2]	外：暗灰黄、内：灰黄	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形後、胴部に縦・斜方向のヘラケズリ。 内：ロクロ整形後、胴部に横・斜方向のヘラナデ。	10C 後半	
H-60B	7	須恵器碗	口縁部～体部 1/5、底部～高台部ほぼ完形	口径：(16.0) 底径：9.1 器高：6.1	外：にぶい赤褐、内：灰褐	角閃石・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り後ナデ。高台貼付時に周縁ナデ。 内：ロクロ整形。	10C 後半	
H-60B	8	灰釉陶器皿	口縁部 1/8、体部 1/4、底部～高台部 3/4	口径：(13.8) 底径：7.8 器高：2.8	素地：灰黄、釉薬：灰黄	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。高台貼付時に周縁ナデ。灰釉漬け掛け。 内：ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 前～中葉	
H-60B	9	灰釉陶器皿	1/8	口径：(13.8) 底径：(7.0) 器高：2.6	素地：灰白、釉薬：灰黄	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。高台貼付時に周縁ナデ。灰釉漬け掛け。 内：ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 中～後半	
H-60B	10	緑釉陶器	口縁部破片	口径：— 底径：— 器高：—	素地：にぶい黄橙、釉薬：オリープ灰	緻密	還元焰	外：ロクロ整形。わずかに凹む。外面釉なし。内：ロクロ整形。	10C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)						備考
H-60B	11	鉄製品釘	完形	長さ：4.4、幅：1.0、厚さ：0.85、重量：15.704g						
H-60B	12	鉄製品槍	茎部欠損	長さ：[12.8]、刃部幅：2.0、刃部厚さ：0.1、茎部幅：0.75、茎部厚さ：0.15、重量：[23.169g]						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-61	1	土師器小形甕	口縁部～胴部上位 1/4	口径：(14.3) 底径：— 器高：[6.8]	外：にぶい赤褐、内：灰赤	石英・白色粒	良好	外：口縁部ヨコナデ、指押え。胴部上位斜方向のヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部上位横・斜方向のヘラナデ。	9C 後半	
H-61	2	須恵器甕	胴部下端～底部 1/6	口径：— 底径：(16.0) 器高：[5.6]	外：灰褐、内：灰	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形後、胴部下端ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内：ロクロ整形後、無文の当て具痕。	9C	
H-61	3	須恵器環	1/3	口径：13.2 底径：(5.9) 器高：3.7	外：明褐灰、内：灰褐	角閃石・雲母・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。 内：ロクロ整形。	9C 後半	内面摩耗。
H-61	4	須恵器碗	口縁部～底部ほぼ完形、高台部欠損	口径：13.5 底径：— 器高：4.8	内外：にぶい黄橙	雲母・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部高台貼付時にナデ。内：ロクロ整形。	9C 後半	内面摩耗。
H-61	5	須恵器碗	ほぼ完形	口径：12.7 底径：5.9 器高：5.5	内外：灰	白色粒	還元焰	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。 内：ロクロ整形。	9C 後半	
H-61	6	須恵器碗	口縁部～体部 1/3、底部～高台部完形	口径：(13.0) 底径：6.8 器高：5.1	内外：浅黄橙	片岩・白色粒・褐色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。 内：ロクロ整形。	9C 第 4	
H-61	7	須恵器碗	口縁部 1/8、体部 1/4、底部ほぼ完形、高台部 1/2	口径：(13.7) 底径：7.0 器高：5.0	外：浅黄、内：灰黄	雲母・白色粒白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部ナデ。高台貼付時に周縁ナデ。 内：ロクロ整形。全体的に摩耗。	9C 後半	
H-61	8	須恵器碗	体部下位～高台部ほぼ完形	口径：— 底径：6.8 器高：[3.5]	外：灰白、内：灰黄	片岩粒・白色粒	還元焰不良	外：ロクロ整形。底部ナデ。高台貼付時に周縁ナデ。 内：ロクロ整形。	9C 後半	内外面ともに摩耗。
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-61	9	瓦丸瓦	破片	厚さ：1.7、重量：[261.00g] / 凹凸面：橙 / 石英・角閃石・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凸面：ヘラナデ。凹面：布目痕。狭端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	10	瓦丸瓦	破片	厚さ：2.1、重量：[442.82g] / 凹凸面：灰 / 石英・黒色鉱物粒・白色粒 / 還元焰 / 凸面：ヘラナデ。凹面：布目痕、面取り。広端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	11	瓦平瓦	広端部欠損	長さ：[37.0]、狭端幅：26.0、厚さ：1.6、重量：[2.680g] / 凹凸面：橙 / 片岩・褐色粒・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面：布目痕後ヘラナデ。凸面：平行タタキ後ヘラナデ。狭端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	12	瓦平瓦	破片	長さ：[18.5]、狭端幅：25.0、厚さ：1.8、重量：[1.146.33g] / 凹面：灰褐、凸面：灰赤 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕後ヘラナデ。凸面：ヘラナデ。狭端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	13	瓦平瓦	破片	厚さ：1.9、重量：[1.602.97g] / 凹面：にぶい橙、凸面：灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕後ヘラナデ、模骨痕あり。凸面：平行タタキ後ヘラナデ。広端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	14	瓦平瓦	破片	厚さ：3.3、重量：[1.829.72g] / 凹凸面：橙 / 海綿骨針・石英・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面：布目痕後ヘラナデ、指紋残る。凸面：平行タタキ後ヘラナデ。狭端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	15	瓦平瓦	破片	厚さ：1.7、重量：[679.54g] / 凹凸面：褐灰 / 白色粒・褐色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕後ヘラナデ。凸面：擬格子タタキ後ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	16	瓦平瓦	破片	厚さ：1.7、重量：[544.42g] / 凹凸面：橙、凸面：にぶい橙 / 片岩・白色粒・褐色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面：布目痕後ヘラナデ。凸面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	17	瓦平瓦	破片	厚さ：1.7、重量：[393.33g] / 凹凸面：にぶい黄橙 / 石英・角閃石・白色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕後ヘラナデ。凸面：平行タタキ後ヘラナデ。狭端面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	18	瓦平瓦	破片	厚さ：1.6、重量：[244.15g] / 凹凸面：黄灰 / 角閃石・白色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕後一部ナデ。端部に沈線あり。凸面：平行タタキ後ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	19	瓦平瓦	破片	厚さ：1.5、重量：[93.09g] / 凹面：淡黄、凸面：淡黄橙 / 石英・白色粒 / 還元焰 / 凹面：布目痕。凸面：ヘラナデ。側面：ヘラナデ。				8C 後半～9C 前半		
H-61	20	瓦文字瓦	破片	長さ：[23.5]、幅：[25.0]、厚さ：3.1、重量：[2.731g] / 還元焰 / 黄褐色 (10YR5/6) / 白色石英 / 凹面：布目、側面に面取り状のケズリ。粘土板切り難し時の条痕あり。凸面：タテナデ。すず付着。カマドの構築材に転用。線刻「大十」か。						
H-61	21	瓦文字瓦	破片	長さ：[13.0]、幅：[7.0]、厚さ：2.1、重量：[307g] / 還元焰 / 青灰色 (5PB5/1) / 白色石英、チャート / 凹面：布目、側面に面取り状のケズリ。凸面：ナデ。凸面に線刻「T」か。判別不可。						
H-61	22	瓦軒丸瓦 B	破片	長さ：(瓦当面) [15.2]、(丸瓦部) [5.2]、幅：(狭端部) [11.8]、厚さ：2.0、重量：[496g] / 還元焰 / 褐灰色 (7.5YR6/1) / 白色石英、片岩 / 瓦当面 瓦当面：瓦当面に大きな范割痕。周縁部上端歪む。側面：ヨコナデ。裏面：同心円状のナデ。泥条盤築技法か。裏面：側縁に丸瓦半裁痕あり。丸瓦凹面：ヨコナデ。凸面：タテナデ。						

第 28 表 1 区出土遺物観察表 (3)

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-61	23	瓦丸瓦	破片	厚さ: 2.0、重量: [1200g]、長さ [25.5]、幅 [15.0] / 灰白色 / チャート・白色石英・凝集石英粒 / 還元焰 / 粘土紐巻き付け成形? 凹面: 側面・広端面に幅広のケズリ、広端面に横方向の凹線、糸切り痕。凸部: 側面に面取り状のケズリ、タタキ後に横方向の回転ナデ。						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)					備考	
H-61	24	鉄製品釘	完形	長さ: 7.25、幅: 0.7、厚さ: 0.5、重量: 20.155g						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-62	1	須恵器羽釜	口縁部 1/8、胴部上半 1/4	口径: (20.4) 底径: 一 器高: [11.8]	内外: 橙	角閃石・雲母・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形後、胴部上半縦方向のヘラケズリ。鏝貼付。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	2	須恵器羽釜	口縁部~胴部上位 1/9	口径: (24.4) 底径: 一 器高: [8.9]	内外: 橙	角閃石・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。鏝貼付。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	3	須恵器羽釜	口縁部~胴部上半 1/6	口径: (22.9) 底径: 一 器高: [12.0]	外: 灰白、内: 黄灰	石英・角閃石・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。鏝貼付。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	4	小形ロクロ甗	口縁部~胴部上位 1/5	口径: (15.0) 底径: 一 器高: [5.3]	内外: にぶい橙	石英・角閃石・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	5	須恵器環	口縁部 3/4、体部~底部完形	口径: 12.2 底径: 5.3 器高: 4.4	外: 橙、内: にぶい橙	雲母・白色粒・褐色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。底部回転糸切り。内: ロクロ整形。全体的に摩耗。	10C 後半	
H-62	6	須恵器碗	口縁部 1/4、体部 1/3、底部~高台部 1/2	口径: (13.4) 底径: (6.4) 器高: 4.8	外: にぶい褐、内: 褐灰	雲母・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	7	須恵器碗	口縁部 3/4、体部~高台部完形	口径: 13.1 底径: 6.2 器高: 5.5	外: 灰白、内: 褐灰	片岩・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。底部ナデ。高台貼付時に周縁ナデ。 内: ロクロ整形。	10C 後半	内外面ともに摩耗。
H-62	8	須恵器碗	口縁部~体部 1/2、底部完形	口径: (14.5) 底径: 一 器高: [5.7]	内外: にぶい橙	角閃石・白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-62	9	灰釉陶器碗	口縁部~体部 1/7	口径: (19.0) 底径: 一 器高: [3.5]	素地: 灰白、釉薬: オリーブ黄	緻密	還元焰不良	外: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。内: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 中~後半	
H-62	10	灰釉陶器碗	口縁部 1/8、体部 1/4、底部~高台部 1/3	口径: (14.3) 底径: (7.2) 器高: 4.4	素地: 灰白、釉薬: 灰オリーブ	緻密	還元焰不良	外: ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。高台貼付時に周縁回転ナデ。灰釉漬け掛け。 内: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 中~後半	
H-62	11	灰釉陶器皿	1/3	口径: (12.4) 底径: (6.6) 器高: 1.9	素地: 灰白、釉薬: 灰オリーブ	緻密	還元焰	外: ロクロ整形。高台貼付時に周縁回転ナデ。灰釉漬け掛け。 内: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 中~後半	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-62	12	瓦平瓦	破片	厚さ: 2.0、重量: [81.28] g / 凹凸面: にぶい橙 / 石英・白色粒 / 還元焰 / 凹面: 布目、横骨痕。凸面: ヘラナデ。				8C 後半~9C 前半		
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)					備考	
H-62	13	鉄製品釘	破片	長さ: [4.4]、幅: 1.1、厚さ: 1.05、重量: [21.114]g						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-63	1	須恵器羽釜	口縁部 1/10、胴部上位 1/8	口径: (20.8) 底径: 一 器高: [9.7]	外: にぶい黄橙、内: 黄灰	石英・白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。鏝貼付。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-63	2	須恵器羽釜	口縁部 1/8	口径: (19.7) 底径: 一 器高: [5.1]	外: 橙、内: にぶい褐	白色粒	還元焰不良	外: ロクロ整形。鏝貼付。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-63	3	須恵器碗	体部下位~高台部 1/3	口径: 一 底径: (7.3) 器高: [2.5]	内外: にぶい黄橙	角閃石・雲母・白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。高台貼付時に周縁ナデ。内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-63	4	灰釉陶器碗	口縁部~体部破片	口径: 一 底径: 一 器高: 一	素地: 灰白、釉薬: 灰白	緻密	還元焰	外: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。内: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 後半	
H-63	5	灰釉陶器皿	口縁部 1/5	口径: (11.6) 底径: 一 器高: [1.5]	素地: 灰白、釉薬: 灰白	緻密	還元焰	外: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。内: ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C 後半	
H-63	6	緑釉陶器壺か	底部 1/4	口径: 一 底径: (6.6) 器高: [1.7]	素地: 灰白、釉薬: 明オリーブ灰	緻密	還元焰	外: ロクロ整形。底面ナデ。 内: ロクロ整形。	10C 後半	
H-63	7	瓦平瓦	破片	厚さ: 2.2、重量: [1,082.0g] / 凹凸面: にぶい赤褐 / 石英・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面: 布目痕後ヘラナデ。凸面: 平行タタキ後ヘラナデ。側面: ヘラナデ。				8C 後半~9C 前半		
H-63	8	瓦平瓦	破片	厚さ: 2.0、重量: [96.80g] / 凹凸面: 灰 / 石英・白色粒 / 還元焰 / 凹面: 布目痕後ヘラナデ。凸面: 平行タタキ後ヘラナデ。側面: ヘラナデ。				8C 後半~9C 前半		
H-71	1	土師器環	口縁部~体部 1/8	口径: (15.6) 底径: 一 器高: 3.2	内外: にぶい橙	角閃石・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部~体部摩耗。	8C	
H-71	2	須恵器環	口縁部~体部 1/9	口径: (12.9) 底径: 一 器高: [3.5]	外: 灰白、内: 灰	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。内: ロクロ整形。	8C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-71	3	瓦平瓦	破片	厚さ: 1.8、重量: [47.57g] / 凹面: 橙、凸面: にぶい橙 / 片岩・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面: ヘラナデ。凸面: ヘラナデ。				8C 後半~9C 前半		
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)					備考	
H-71	4	鉄製品釘	1/2	長さ: [8.0]、幅: 0.65、厚さ: 0.6、重量: [25.596]g						

第29表 1区出土遺物観察表(4)

( ): 推定値, [ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-72	1	土師器壺	口縁部ほぼ完形、胴部上位1/8	口径: 19.2 底径: — 器高: [8.4]	内外: にぶい橙	片岩・石英・白色粒	良好	外: 口縁部ヨコナデ。胴部上位横方向のヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。胴部上位横方向のヘラナデ。	5C 後半	
H-72	2	土師器壺	口縁部 1/4	口径: (22.5) 底径: — 器高: [5.6]	内外: にぶい橙	片岩・白色粒・褐色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。 内: 口縁部ヨコナデ。	5C 後半	
H-72	3	土師器甕	口縁部~胴部上位1/8	口径: (24.8) 底径: — 器高: [9.2]	外: にぶい橙、内: にぶい褐	角閃石・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。胴部上位斜方向のヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。胴部上位横方向のヘラナデ。	7C 後半	
H-72	4	土師器甕	口縁部 1/7、胴部上位 1/5	口径: (16.5) 底径: — 器高: [10.6]	外: 橙、内: にぶい黄橙	片岩・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。胴部上位横・斜方向のヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。胴部横方向のヘラナデ。	7C 後半	
H-72	5	土師器小形甕	口縁部 1/4、胴部 1/5	口径: (17.0) 底径: — 器高: [11.8]	内外: 橙	片岩・角閃石・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。胴部斜縦方向のヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	7C 後半	
H-72	6	土師器大形甕	胴部下位~底部 1/4	口径: — 底径: (9.4) 器高: [9.0]	外: 橙、内: にぶい橙	片岩・石英・白色粒	普通	外: 胴部下半縦方向のヘラケズリ。 内: 胴部下半ヘラナデ後、下端部ヘラケズリ。	7C 後半	
H-72	7	土師器小形甕	底部破片	口径: — 底径: — 器高: [2.0]	外: 橙、内: にぶい橙	石英・白色粒	良好	外: 底部ヘラケズリ。内: 底部ヘラナデ。多孔、残 16 孔。	6C ~ 7C 前半	
H-72	8	土師器大形鉢	口縁部~体部上半 1/5	口径: (33.8) 底径: — 器高: [9.1]	外: にぶい褐、内: にぶい黄橙	片岩・石英・黒色鉱物粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部上半斜縦方向のヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。体部上半横方向のヘラナデ。	7C 後半	
H-72	9	土師器罎	口縁部ほぼ完形、胴部~底部 3/4	口径: 9.6 底径: 3.8 器高: 10.0	内外: 橙	片岩・石英・チャート・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。胴部横方向のヘラケズリ後、下半斜方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	5C 後半	
H-72	10	土師器高環	脚部 1/5	口径: — 底径: 10.0 器高: [4.7]	外: にぶい橙、内: 橙	片岩・石英・白色粒	普通	外: 脚部ナデ。裾部ヨコナデ。 内: 裾部ヨコナデ。	6C ~ 7C	
H-72	11	土師器鉢	口縁部 1/2、体部 2/3、底部ほぼ完形	口径: (12.8) 底径: 5.5 器高: 6.4	内外: にぶい橙	片岩・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部斜・横方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	6C ~ 7C	
H-72	12	土師器鉢	口縁部 1/4、体部~底部 1/5	口径: (17.5) 底径: — 器高: [8.2]	内外: にぶい褐	片岩・黒色鉱物粒・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。体部上半横方向のヘラナデ。体部下半~底部斜方向のヘラナデ。	6C ~ 7C	
H-72	13	土師器環	口縁部~体部 1/8	口径: (12.6) 底径: — 器高: [3.2]	内外: 橙	白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。 内: 口縁部ヨコナデ。	7C 後半	内外面ともに表面摩耗。
H-72	14	土師器環	口縁部~体部 1/5	口径: (12.0) 底径: — 器高: [3.1]	内外: 橙	白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部~体部上半ヨコナデ。体部下半ヘラナデ。	7C 後半	
H-72	15	土師器環	口縁部~体部 1/4	口径: (9.8) 底径: — 器高: [3.1]	内外: 橙	石英・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	7C 後半	
H-72	16	土師器環	口縁部~体部 1/3	口径: (11.2) 底径: — 器高: [2.7]	内外: 橙	角閃石・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。体部摩耗。	7C 後半	
H-72	17	土師器環	口縁部~体部 1/8	口径: (18.0) 底径: — 器高: [4.6]	内外: 橙	白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部ヨコナデ。体部摩耗。	7C 後半	
H-72	18	土師器環	1/4	口径: (13.6) 底径: — 器高: 4.0	内外: 橙	黒色鉱物粒・白色粒	普通	外: 摩耗。内: 摩耗。	7C 後半	
H-72	19	土師器環	口縁部~体部 1/8	口径: (16.9) 底径: — 器高: [5.2]	内外: 橙	角閃石・白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部~体部摩耗。	7C 後半	
H-72	20	土師器環	口縁部~体部 1/4	口径: (11.1) 底径: — 器高: [3.2]	内外: 橙	白色粒	普通	外: 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内: 口縁部~体部摩耗。	7C 後半	
H-72	21	土師器環	1/4	口径: (12.3) 底径: — 器高: 3.4	内外: 橙	白色粒	普通	外: 摩耗。内: 摩耗。	7C 後半	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-72	22	土製品不明	ほぼ完形	長さ: 2.9、幅: 2.7、厚さ: 0.3、重量: 3.76g / 内外: 橙 / 白色粒 / 普通 / 内外面ナデ。				—		
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-72	23	土師器手捏ね	1/3	口径: (5.0) 底径: — 器高: 1.8	外: にぶい橙、内: にぶい褐	片岩・白色粒	普通	外: 口縁部~底部ナデ。 内: 口縁部~底部ナデ、指押え。	—	
H-72	24	須恵器甕	口縁部 1/8	口径: (22.0) 底径: — 器高: [3.5]	内外: 灰	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。内: ロクロ整形。	—	
H-72	25	須恵器台付盤	脚部 1/4	口径: — 底径: (12.6) 器高: [4.1]	内外: 灰	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。内: ロクロ整形。	7C 後半~8C 前半	
H-72	26	須恵器環	口縁部~体部 1/4、底部 1/4	口径: (19.2) 底径: (13.7) 器高: [4.5]	外: 灰、内: 灰白	白色粒	還元焰	外: ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。内: ロクロ整形。底部ヘラナデ。	7C 第4~8C 第1	

第30表 1区出土遺物観察表(5)

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-72	27	土製品 不明	破片	長さ:[3.3]、幅:1.2、厚さ:0.9、重量:[4.23g] / にぶい橙 / 片岩・白色粒 / 普通 / ナデ調整。				—	把手か。	
H-72	28	土製品 羽口	2/3	長さ:[10.1]、幅:6.1、厚さ:1.8、重量:[261.62g] / 片岩・白色粒 / 良好 / 内外面ナデ調整。				—		
H-72	29	瓦 丸瓦	破片	厚さ:1.3、重量:[120.28g] / 凸面:黄灰、凹面:灰黄 / 片岩・白色粒 / 還元焰 / 凸面:平行タタキ後ヘラナデ。凹面:ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	30	瓦 丸瓦	破片	厚さ:1.6、重量:[192.67g] / 凹凸面:にぶい橙 / 石英・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凸面:平行タタキ後ヘラナデ。凹面:布目痕。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	31	瓦 平瓦	広端部欠損	長さ:[35.0]、幅:30.7、厚さ:2.3、重量:[4.500g] / 凹凸面:灰褐 / 片岩・石英・白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	32	瓦 平瓦	破片	厚さ:2.0、重量:[832.33g] / 凹面:灰、凸面:暗灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	33	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.5、重量:[427.40g] / 凹凸面:にぶい黄橙 / 片岩・白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	34	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.6、重量:[197.72g] / 凹凸面:灰白 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	35	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.9、重量:[229.21g] / 凹凸面:にぶい赤褐 / 片岩・白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕。側縁面取り。凸面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	36	瓦 平瓦	破片	厚さ:2.3、重量:[452.97g] / 凹凸面:灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	37	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.7、重量:[293.67g] / 凹凸面:灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	38	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.7、重量:[187.83g] / 凹面:灰、凸面:灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	39	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.5、重量:[172.10g] / 凹凸面:灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。広端面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	40	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.7、重量:[157.79g] / 凹凸面:褐灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕。凸面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	41	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.1、重量:[195.66g] / 凹凸面:にぶい橙 / 石英・黒色鉱物粒・白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	42	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.5、重量:[124.74g] / 凹面:にぶい橙、凸面:明赤褐 / 片岩・白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面:布目痕。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	43	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.3、重量:[128.34g] / 凹面:灰白、凸面:灰黄 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目痕。凸面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-72	44	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.1、重量:[75.08g] / 凹面:灰黄褐、凸面:灰黄 / 還元焰 / 白色粒 / 凹面:布目痕後ヘラナデ。凸面:平行タタキ後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。						
H-72	45	瓦 軒丸瓦 A1	破片	長さ(瓦当面) [15.0]、幅:一、厚さ(瓦当面) 3.1、重量:[576g] / 酸化焰 / 橙色 (5YR6/8) / 片岩、白色石英、赤褐色粒 / 瓦当部半分残存。周縁部内外面:ナデ。側面:タテナデ。裏面:中心に平行タタキ、丸瓦接合部指頭痕あり。丸瓦:剥落。周縁部:一部剥落。						
H-72	46	瓦 軒丸瓦 A2	破片	長さ:[12.2]、幅:一、厚さ:1.8、重量:[118g] / 還元 / 暗赤灰色 (10R4/1) / 白色石英 / 瓦当面 瓦当部剥落。周縁部内外面:ナデ。周縁内側に一部范痕残る。側面:平行タタキ→ナデ、指頭痕あり。裏面:ナデ。						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-75	1	土師器 環	1/4	口径:(11.5) 底径:一 器高:3.6	内外:橙	石英・角閃石・ 白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位~底部ヘラケズリ。内:口縁部~底部摩耗。	8C前半	
H-75	2	須恵器 環	1/3	口径:(17.1) 底径:(10.0) 器高:4.0	内外:灰 白	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。底部手持ちヘラケズリ。内:ロクロ整形。底部ヘラナデ。	8C前半	
H-75	3	須恵器 甕	口縁部 1/8	口径:(22.0) 底径:一 器高:[4.1]	外:にぶ い橙、内: にぶい黄 橙	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	8C	
H-75	4	須恵器 甕	頸部~肩部 1/9	口径:一 底径:一 器高:[5.0]	外:灰白、 内:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	8C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
H-75	5	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.8、重量:[65.52g] / 凸面:にぶい橙、凹面:にぶい黄橙 / 角閃石・白色粒・褐色粒 / 還元焰 (不良) / 凸面:ヘラケズリ。凹面:布目痕後ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
H-75	6	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.3、重量:[61.45g] / 凹凸面:にぶい黄橙 / 白色粒 / 還元焰 (不良) / 凹面:布目痕。凸面:ヘラナデ。狭端面:ヘラナデ。側面:ヘラナデ。				8C後半~ 9C前半		
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)				備考		
H-75	7	鉄製品 釘	1/2	長さ:[9.5]、幅:0.9、厚さ:0.85、重量:18.165g						
H-75	8	鉄製品 刀子	1/4	長さ:[3.55]、幅:0.6、厚さ:0.2、重量:2.347g						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-76	1	土師器 高環	ほぼ完形	口径:11.6 底径:7.8 器高:5.1	内外:橙	石英・角閃石・ 白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。坏部~脚部器表面摩耗。裾部ヨコナデ。内:口縁部~底部に小円形の剥離。脚部摩耗。裾部ヨコナデ。	7C後半	
H-76	2	土師器 環	口縁部 1/4、 体部 1/3	口径:(12.2) 底径:一 器高:[2.7]	外:にぶ い橙、内: 橙	片岩・石英・白 色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内:口縁部~体部摩耗。	7C後半	
H-76	3	土師器 環	完形	口径:11.2 底径:一 器高:3.4	内外:に ぶい橙	角閃石・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部~底部摩耗。内:口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	7C後半	
H-76	4	土師器 環	1/2	口径:(11.2) 底径:一 器高:[3.0]	内外:に ぶい橙	石英・角閃石・ 白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内:口縁部~体部摩耗。	7C後半	
H-76	5	土師器 環	1/2	口径:14.1 底径:一 器高:4.7	内外:橙	石英・角閃石・ 白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内:口縁部~底部摩耗。	7C後半	外面摩耗。

第31表 1区出土遺物観察表(6)

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
H-76	6	須恵器瓶	肩部破片	口径:— 底径:— 器高:[4.9]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。肩部中位と下端にそれぞれ沈線が1条ずつめぐる。内:ロクロ整形。	7C後半	長頸瓶か。
H-76	7	須恵器蓋	口縁部3/4、天井部～摘み部ほぼ完形	口径:12.9 摘み径:3.0 器高:3.8	外:にぶい橙、内:浅黄橙	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。天井部回転ヘラケズリ。擬宝珠形摘み貼付。内:ロクロ整形。	7C後半	
H-76	8	須恵器坏	口縁部～体部1/3、底部完形	口径:(11.2) 底径:5.0 器高:4.7	内外:灰白	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ。底面ヘラナデ。内:ロクロ整形。	7C後半	
H-76	9	須恵器坏	体部1/4、底部3/4	口径:— 底径:7.0 器高:[4.2]	外:にぶい橙、内:浅黄橙	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。底部ヘラ切り後ナデ。内:ロクロ整形。	7C後半	
H-85	1	土師器甕	口縁部～胴部1/4	口径:(19.8) 底径:— 器高:[22.8]	内外:にぶい橙	片岩・石英・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。胴部斜縦方向のヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ後下位に横方向のヘラケズリ。	7C	
H-85	2	土師器坏	口縁部～体部1/8	口径:(12.4) 底径:— 器高:[3.0]	外:にぶい褐、内:橙	白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	7C後半	
H-85	3	須恵器壺	口縁部1/8	口径:(14.5) 底径:— 器高:[3.0]	外:灰、内:灰白	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	7C	
H-86	1	土師器甕	口縁部1/6、胴部上位1/8	口径:(20.8) 底径:— 器高:[5.4]	内外:橙	角閃石・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。胴部上位斜方向のヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。胴部横方向のヘラナデ。	7C前半	
H-86	2	土師器小形甕	口縁部6/7、胴部1/3、底部完形	口径:15.6 底径:4.9 器高:16.3	外:明赤褐、内:にぶい赤褐	片岩・黒色鉱物粒・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。胴部上～中位器表面剥離、下位斜方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。胴部上～中位斜方向のヘラナデ。胴部下位横方向のヘラナデ。底部ヘラナデ。	7C前半	
H-86	3	土師器大形鉢	口縁部～体部1/6	口径:(24.0) 底径:— 器高:[7.8]	内外:橙	片岩・チャート・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部斜縦方向のヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。体部斜方向のヘラナデ。器表面摩耗。	7C前半	
H-86	4	土師器坏	1/3	口径:(10.9) 底径:— 器高:3.3	内外:橙	角閃石・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	7C前半	
H-86	5	土師器坏	1/4	口径:(11.8) 底径:— 器高:3.2	内外:橙	角閃石・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内:口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	7C前半	
H-86	6	土師器甕	口縁部～胴部上位1/4	口径:(15.3) 底径:— 器高:[6.6]	外:にぶい褐、内:明赤褐	石英・黒色鉱物粒・白色粒・褐色粒	良好	外:口縁部～頸部ヨコナデ。胴部上位斜方向のヘラナデ・ハケメ。内:口縁部ヨコナデ。胴部上位横・斜方向のヘラナデ・ハケメ。	4C	
D-82	1	土師器坏	1/5	口径:(14.3) 底径:— 器高:[5.4]	内外:橙	石英・角閃石・白色粒	良好	外:口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半～底部ヘラケズリ。内:口縁部～体部横ナデ、指押え。底部ヘラナデ。	8C	
D-83	1	灰釉陶器碗	口縁部～体部破片	口径:— 底径:— 器高:[2.4]	素地:灰白、釉薬:オリープ灰	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
D-95	1	須恵器坏	口縁部～体部1/5	口径:(11.0) 底径:— 器高:[3.0]	内外:橙	石英・黒色鉱物粒・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	10C前半	
D-95	2	須恵器坏	口縁部～体部1/8	口径:(14.0) 底径:— 器高:[3.0]	内外:褐灰	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	10C前半	
D-95	3	須恵器坏	口縁部～体部1/5	口径:(12.0) 底径:— 器高:[3.4]	内外:にぶい橙	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	10C前半	外面に墨書あり。
D-95	4	須恵器高台付坏	1/3	口径:(12.4) 底径:(6.2) 器高:4.2	内外:橙	白色粒・赤褐色粒・片岩	酸化焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。	10C前半	
D-95	5	土師器甕	底部1/5	口径:— 底径:— 器高:[2.7]	内外:暗赤灰	赤色粒・片岩	酸化焰	内外:ナデ。底部:ケズリ。	10C	
D-95	6	須恵器高台付椀	口縁部欠損	口径:— 底径:6.2 器高:[3.0]	内外:橙	赤褐色粒・片岩	酸化焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。	10C	口縁部を意図的に打ち割り。内外面摩滅。
D-95	7	須恵器高台付坏	口縁部3/4欠損	口径:(12.4) 底径:5.6 器高:4.1	内外:褐灰	白色粒	還元焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。底部:回転糸切りか。	10C前半	高台すべて剥落。
D-95	8	須恵器坏	2/3	口径:(12.0) 底径:(6.0) 器高:4.2	暗緑灰	白色粒	還元焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ。底部:回転糸切り。	10C前半	内面摩滅。
D-95	9	須恵器坏	4/5	口径:(12.2) 底径:6.0 器高:4.5	内:灰白 外:青灰	白色粒	還元焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ。底部:回転糸切り。	10C	内外面摩滅。
D-95	10	須恵器高台付椀	底部のみ	口径:— 底径:8.2 器高:[3.0]	内外:褐灰	赤褐色粒・白色粒	還元焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。底部:回転糸切り。	10C	
D-95	11	須恵器高台付坏	完形	口径:12.0 底径:6.6 器高:4.8	内:黄灰 外:淡黄	赤褐色粒・白色粒	還元焰	内外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。底部:回転糸切りか。	10C	内外面摩滅。

第32表 1区出土遺物観察表(7)

( ): 推定値、[ ] : 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
D-95	12	灰釉陶器 高台付椀	1/3	口径:(13.6) 底径:6.8 器高:4.9	内外:灰 白、釉薬: 灰	緻密	還元焰	外:ロクロ成形。高台貼付。灰釉 漬け掛け。内:ロクロ成形。底部: 回転糸切り。	10C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)					時期	備考
D-95	13	鏝か	破片	長さ:[3.0]、径:0.5、重量:1.215 g						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
D-96	1	須恵器 甕	口縁部 1/8	口径:(19.9) 底径:— 器高:[4.0]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	古代	
D-96	2	須恵器 甕	口縁部 1/8	口径:(19.0) 底径:— 器高:[2.5]	内外:灰 白	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。自然釉付着。 内:ロクロ整形。自然釉まばらに 付着。	古代	
D-96	3	須恵器 坏	口縁部~体部 1/8	口径:(12.0) 底径:— 器高:[3.0]	内外:暗 灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	10C	
D-96	4	須恵器 碗	体部~高台部 1/3	口径:— 底径:(5.9) 器高:[3.1]	内外:に ぶい黄橙	石英・黒色鋇物 粒・白色粒・褐色 色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。高台貼付時に底 面ナデ。内:ロクロ整形。	10C	
D-96	5	須恵器 碗	底部~高台部 ほぼ完形	口径:— 底径:8.1 器高:[2.7]	内外:橙	石英・チャート・ 黒色鋇物粒・白色 色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。高台貼付時に底 面ナデ。内:ロクロ整形。	10C	
D-96	6	灰釉陶器 碗	口縁部~体部 1/9	口径:(16.0) 底径:— 器高:[3.0]	素地:灰 白、釉薬: 灰黄	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。体部下位回転ヘ ラケズリ。灰釉漬け掛け。 内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
D-96	7	灰釉陶器 皿	1/8	口径:(11.6) 底径:(6.1) 器高:2.4	素地:灰 白、釉薬: 灰オリーブ	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。高台貼付。灰釉 漬け掛け。 内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴					時期	備考
D-96	8	瓦 平瓦	破片	厚さ:1.6、重量:[35.64g] / 凹面:灰、凸面:灰 / 白色粒 / 還元焰 / 凹面:布目。凸面: ヘラナデ。					8C後半~ 9C前半	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)					時期	備考
D-96	9	鉄製品 鏝	茎部欠損	長さ:[10.05]、鏝身部幅:1.2、鏝身部厚さ:0.4、頸部幅:0.75、頸部厚さ:0.5、茎部幅:0.35、 茎部厚さ:0.4、重量:[18.393g]						
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
D-104	1	土師器 坏	口縁部~体部 1/5	口径:(11.8) 底径:— 器高:[2.7]	内外:橙	石英・黒色鋇物 粒・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部摩耗。 内:口縁部ヨコナデ。体部摩耗。	7C後半	
D-104	2	須恵器 壺	口縁部 1/5	口径:(10.8) 底径:— 器高:[4.6]	内外:橙 にぶい黄橙	黒色鋇物粒・白 色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	—	
D-104	3	須恵器 甕	頸部~肩部破 片	口径:— 底径:— 器高:[4.0]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	—	
D-108	1	土師器 坏	口縁部~体部 破片	口径:(14.7) 底径:— 器高:[2.8]	内外:橙	石英・黒色鋇物 粒・白色粒	普通	外:口縁部ヨコナデ。体部摩耗。 内:摩耗。	8C	
D-108	2	須恵器 甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:黄 灰	白色粒	還元焰	外:平行タタキ。 内:同心円の当て具痕。	—	
D-112	1	土師器 甕	胴部下端~ 底部 1/4	口径:— 底径:(3.6) 器高:[3.3]	外:褐灰、 内:にぶ い黄橙	片岩・石英・黒 色鋇物粒・白色 粒・褐色粒	普通	外:胴部下端斜方向のヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。内:摩耗。	7C	
D-112	2	須恵器 碗	口縁部~体部 1/8	口径:(14.0) 底径:— 器高:[2.7]	内外:に ぶい黄橙	石英・白色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。摩耗。 内:ロクロ整形。摩耗。	9C	
D-113	1	須恵器 碗	体部下半 1/3、 底部~高台部 ほぼ完形	口径:— 底径:7.0 器高:[3.9]	外:にぶ い橙、内: にぶい黄 褐	石英・白色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。高台貼付時に底 面ナデ。内:ロクロ整形。	10C	内外面摩耗。
D-113	2	灰釉陶 碗	口縁部~体部 1/8	口径:(13.0) 底径:— 器高:[3.1]	素地:灰 白、釉薬: 器高:灰黄	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。 内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
D-108	2	須恵器 甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:黄 灰	白色粒	還元焰	外:平行タタキ。 内:同心円の当て具痕。	—	
D-112	1	土師器 甕	胴部下端~ 底部 1/4	口径:— 底径:(3.6) 器高:[3.3]	外:褐灰、 内:にぶ い黄橙	片岩・石英・黒 色鋇物粒・白色 粒・褐色粒	普通	外:胴部下端斜方向のヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。内:摩耗。	7C	
D-112	2	須恵器 碗	口縁部~体部 1/8	口径:(14.0) 底径:— 器高:[2.7]	内外:に ぶい黄橙	石英・白色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。摩耗。 内:ロクロ整形。摩耗。	9C	
D-113	1	須恵器 碗	体部下半 1/3、 底部~高台部 ほぼ完形	口径:— 底径:7.0 器高:[3.9]	外:にぶ い橙、内: にぶい黄 褐	石英・白色粒	還元焰 不良	外:ロクロ整形。高台貼付時に底 面ナデ。内:ロクロ整形。	10C	内外面摩耗。
D-113	2	灰釉陶 碗	口縁部~体部 1/8	口径:(13.0) 底径:— 器高:[3.1]	素地:灰 白、釉薬: 器高:灰黄	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。 内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
D-108	2	須恵器 甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:黄 灰	白色粒	還元焰	外:平行タタキ。 内:同心円の当て具痕。	—	
D-112	1	土師器 甕	胴部下端~ 底部 1/4	口径:— 底径:(3.6) 器高:[3.3]	外:褐灰、 内:にぶ い黄橙	片岩・石英・黒 色鋇物粒・白色 粒・褐色粒	普通	外:胴部下端斜方向のヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。内:摩耗。	7C	

第33表 1区出土遺物観察表(8)

( ): 推定値、[ ]: 残存値を表す

遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
D-112	2	須恵器碗	口縁部～体部1/8	口径:(14.0) 底径:— 器高:[2.7]	内外:にぶい黄橙	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。摩耗。 内:ロクロ整形。摩耗。	9C	
D-113	1	須恵器碗	体部下半1/3、底部～高台部ほぼ完形	口径:— 底径:7.0 器高:[3.9]	外:にぶい橙、内:にぶい黄褐	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。高台貼付時に底面ナデ。内:ロクロ整形。	10C	内外面摩耗。
D-113	2	灰釉陶碗	口縁部～体部1/8	口径:(13.0) 底径:— 器高:[3.1]	素地:灰白、釉薬:灰黄	緻密	還元焰	外:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。 内:ロクロ整形。灰釉漬け掛け。	10C	
D-115	1	須恵器甕	口縁部1/8	口径:(21.6) 底径:— 器高:[4.7]	内外:黄灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	—	
D-115	2	須恵器环	口縁部～体部1/4	口径:(13.0) 底径:— 器高:[3.2]	外:にぶい橙、内:灰黄褐	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。	10C	
D-117	1	須恵器盤	口縁部～体部1/12	口径:(20.0) 底径:— 器高:[2.9]	外:にぶい黄橙、内:灰黄褐	石英・白色粒	還元焰やや不良	外:ロクロ整形。体部下半回転ヘラケズリ。内:ロクロ整形。	7C後半～8C前半	
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm) / 色調 / 胎土 / 焼成 / 成・整形の特徴				時期	備考	
D-117	2	土製品土錘	両端部欠損	長さ:□6.1□、幅:2.2、孔径:0.3、重量:21.80g / にぶい黄橙 / 赤色粒・白色粒 / 酸化焰 / ナデ。				古代		
遺構名	No.	種別	残存	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	成・整形の特徴	時期	備考
D-121	1	土師器甕	胴部下端～底部1/2	口径:— 底径:(4.2) 器高:[2.1]	外:にぶい橙、内:橙	石英・白色粒・褐色粒	普通	外:胴部下端横・斜方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内:胴部下端～底部ヘラナデ・指押え。	8～9C	
D-123	1	須恵器羽釜	口縁部～胴部上半1/8	口径:(22.0) 底径:— 器高:[13.0]	外:橙、内:黄灰	石英・黒色鉱物粒・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。鏝貼付。内:ロクロ整形。	10C	
D-123	2	須恵器甕	胴部破片	口径:— 底径:— 器高:—	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形後、部分的なカキメ。内:ロクロ整形後ヘラナデ。	古代	
D-125	1	須恵器甕	胴部下端～底部1/4	口径:— 底径:(16.0) 器高:[2.7]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:胴部下端ヘラナデ。底部ヘラケズリ。内:胴部下端～底部同心円の当て具痕。	—	
D-126	1	須恵器甕	頸部～肩部1/5	口径:— 底径:— 器高:[4.5]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:頸部～肩部ロクロ整形。肩部に自然釉付着。内:頸部ロクロ整形。肩部同心円の当て具痕。	—	
D-126	2	須恵器蓋	口縁部1/9	口径:(14.0) 摘み径:— 器高:[1.1]	内外:黄灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。内:ロクロ整形。かえりをもつ。	8C	
D-126	3	須恵器高台付环	完形	口径:12.0 底径:6.2 器高:4.8	内:黒外:にぶい赤褐	片岩・白色粒	酸化焰	内外:ロクロ整形。底部:糸切り。(高台貼付)。	10C	外面摩滅。
D-137	1	須恵器羽釜	口縁部～胴部上位1/8	口径:(25.4) 底径:— 器高:[8.8]	外:にぶい黄橙、内:灰白	石英・黒色鉱物粒・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。鏝貼付。内:ロクロ整形。	10C	
M-2	1	須恵器小形高台付埴	完形	口径:9.2 底径:5.4 器高:3.3	外:褐灰、内:黒	褐色粒・白色粒	酸化焰	外:ロクロ整形。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁回転ナデ。内:ロクロ整形。口縁部～底部回転ナデ後、細密なミガキ。	10C後半	内面黒色処理。
M-3	1	土師器甕	口縁部1/7	口径:(21.0) 底径:— 器高:[4.6]	内外:にぶい褐	輝石・褐色粒・白色粒	良好	外:口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内:口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	9C後半	
M-3	2	須恵器高台付埴	底部1/4	口径:— 底径:(7.0) 器高:[3.3]	内外:灰	白色粒	還元焰	外:ロクロ整形。体部～高台部回転ナデ後、高台貼付。内:ロクロ整形。体部～底部回転ナデ。	9C末～10C初	
遺構外	1	須恵器环	1/2	口径:(11.8) 底径:(5.6) 器高:4.8	内外:灰	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。底部摩耗。回転糸切りカ。内:ロクロ整形。	10C第1	
遺構外	2	須恵器碗	口縁部～体部1/3、底部完形、高台部欠損	口径:(14.0) 底径:— 器高:[4.8]	内外:灰黄褐	石英・白色粒	還元焰不良	外:ロクロ整形。底部回転糸切り。内:ロクロ整形。	10C第1	

## 第5章 総括

### 第1節 瓦から見る牛田廃寺跡1号建物跡の創建—改修—廃絶

ここでは、瓦を分類・同定し計数を行った結果をもとに、牛田廃寺跡の創建—改修—廃絶についてみていきたい。牛田廃寺跡(試掘トレンチ含む)から検出された瓦は、総数 5230 点、重量 612.38kg に及ぶ。特に 1 号建物跡の基壇周囲から瓦の集積が検出され、雨落溝が基壇を周回するため入母屋もしくは寄棟造りの屋根形態であったと推定される。

検出された瓦の主要なものは、下日野金井窯跡群〔藤岡市教委 2005〕や竹沼窯址群切通シ窯址〔藤岡市教委 1997〕といった藤岡市内で調査された窯跡で同種の瓦が検出されているため、市内で焼かれた瓦を使用していることは間違いない。

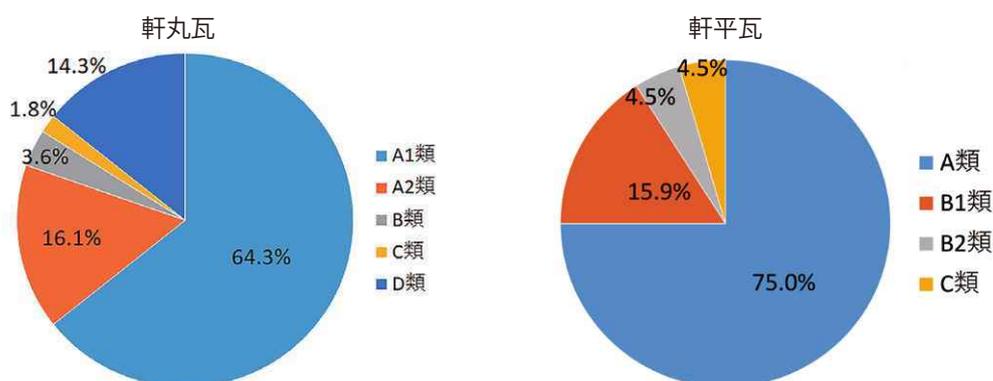
牛田廃寺跡から出土した瓦は、一括として取り上げたもの以外は、大多数は微細図を作成し、No を付して取り上げを行ったため、原位置の把握が可能である。

#### 第1項 軒先瓦の種別と出土比率

軒丸瓦は 4 種 5 細別、軒平瓦は 3 種 4 細別が検出されており、比率は第 132 図の通りである。軒丸瓦では、A1 類が 64.3% と過半数を占めており、同范であるが丸瓦の接合方法が異なる A2 類と合わせると 80.4% を占める。他の軒丸瓦は、B 類：3.6%、C 類：1.8%、D 類：14.3% という比率となっており、出土は少数である。

軒平瓦は、A 類が 75% と過半数を占め最も多く出土する。他は、B1 類：15.9%、B2 類：4.5%、C 類：4.5% という比率で出土数はわずかである。

出土量及び瓦当文様の種別から、軒丸瓦 A1 類と軒平瓦 A 類が 1 号建物跡の創建瓦と考えることができるだろう。



第 132 図 牛田廃寺跡 軒先瓦（軒丸瓦・軒平瓦）種類別比率グラフ

#### 第2項 平瓦・丸瓦の種別と出土比率

種別ごとの傾向と比率（第 133 図）

次に平瓦・丸瓦の出土比率を見ていこう。平瓦は A1 類・A2 類・B 類の 2 種 3 細別、丸瓦は A1 類・A2 類・B 類・C1 類・C2 類の 3 種 5 細別に分類した。なお、大きく分けると、平瓦 A 類は桶巻作り、平瓦 B 類は 1 枚作りで製作されている。丸瓦は、A 類は型木を用いたもの、B 類は不確定ながら一枚造りの可能性がある丸瓦、C 類は泥条盤築技法で製作されている。このうち平瓦 A・B 類と丸瓦 A・B 類が多数を占めており、大きく 2 種類の製作技法を用いた丸・平瓦が主体を為している。

平瓦・丸瓦は軒先瓦のように、1 種類だけ突出した比率を示すものではなく、異なる傾向が確認された。

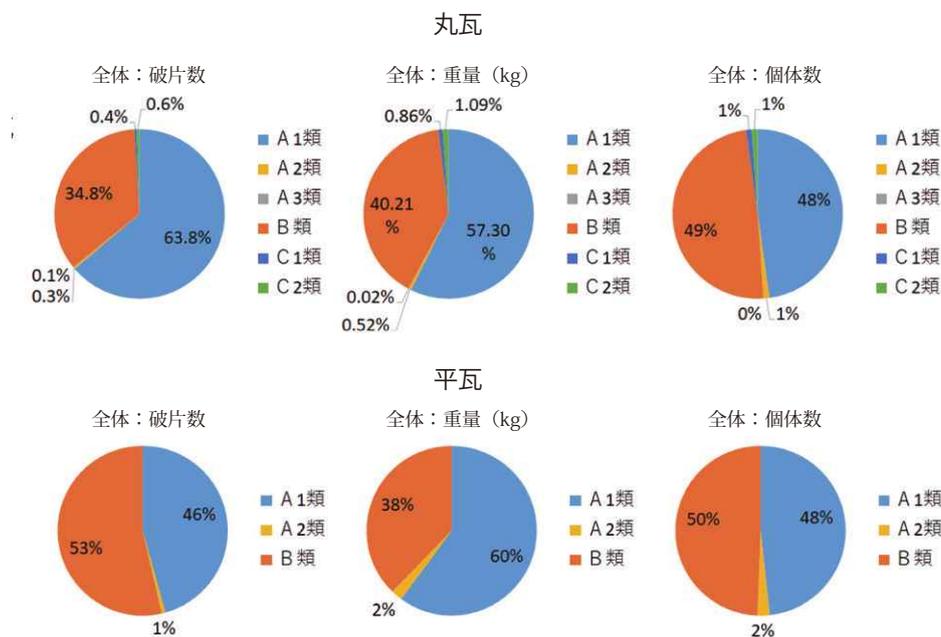
平瓦は全体で、点数は A1 類：1785 点、A2 類：26 点、B 類：2093 点、重量が A1 類：257.74kg、A2 類：9.26kg、B 類：161.82kg となっている。総隅角数を 4 で割り算出した個体数は、A1 類：53 個体、A2 類：2.5 個体、B 類：54.25 個体となる。

個体数の比率は、平瓦 A1 類：48%、平瓦 A2 類：2%、平瓦 B 類：50% である。平瓦 A・B 類がほぼ同量存在するという結果となった。点数で平瓦 B 類が多いのは、B 類が細かく割れているものが多いためであり、重量で A 類が優っているのは、器壁が厚いためである。

丸瓦は全体で、点数が A1 類：783 点、A2 類：4 点、B 類：427 点、C1 類：5 点、C2 類：7 点、重量が A1 類：79.07kg、A2 類：0.72kg、B 類：55.48kg、C1 類：1.18kg、C2 類：1.51kg である。隅角数から計算した個体数は、A1 類：21.75 個体、A2 類：0.5 個体、B 類：22.25 個体、C1 類：0.5 個体、C2 類：0.5 個体という結果となった。

個体数比率は、丸瓦 A1 類：48%、丸瓦 A2 類：1%、丸瓦 B 類：49%、丸瓦 C1 類：1%、丸瓦 C2 類：1% となり、個体数比率では B 類がわずかに多いという結果となった。平瓦と同様に A・B 類の数量・比率はほぼ均衡しているといっただろう。

平瓦と丸瓦では、異なる特徴を持つ 2 種類の瓦がほぼ同数検出されていることが明らかとなり、軒先瓦でみられた 1 つの種別が卓越するという様相とは異なった結果となった。



第 133 図 牛田廃寺跡 丸瓦・平瓦種類別比率グラフ

### 第 3 項 軒先瓦・丸瓦・平瓦のセット関係 (第 34 表)

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦には、共通した特徴を持つものがある。軒丸瓦 A1 類、軒平瓦 A 類、丸瓦 A1 類、平瓦 A1 類である。この 4 種は、瓦の種類は異なるが、凸面に平行叩きを施すこと、軒平瓦・平瓦凹面の模骨痕突出部をナデ消すクセ、赤褐色・灰色を呈する色調や胎土が互いに極めて類似しており、セット関係を見出すことが可能である。これらは型式学的特徴が合致するため、製作時期が近似することが想定される。

1 号建物跡から出土した瓦において、上記のような類似が見出せるものは、軒丸瓦 A1 類、軒平瓦 A 類、丸瓦 A1 類、平瓦 A1 類のみであり、他の瓦にはこのような関係は見られない。軒丸瓦 A1 類、軒平瓦 A 類、丸瓦 A1 類、平瓦 A1 類は出土量においても多数を占めており、この瓦の組み合わせが当初葺かれた創建瓦のセットと考えられる。

創建瓦以外には、出土数が非常に少ない補修瓦 A タイプ (第 34 表) が存在する。これらは屋根瓦が壊れた際に都度差し替えられた補修瓦であろう。それとは対照的に補修瓦 B タイプ (第 34 表) は、創建瓦とほぼ同量出土しており、限定された時間幅での大規模な改修を示している。創建瓦以外の補修瓦 B タイプの出土量の多さが 1 号建物跡の大きな特色の 1 つである。

第 34 表 瓦のセット関係

推定時期	性格	種別			
		軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦
8 世紀第 2 四半期	創建瓦	A1 類	A 類	A1 類	A1 類
8 世紀第 2 四半期～9 世紀後半	補修瓦 A タイプ (少量)	A2 類	B1 類	A2 類	A2 類
		B 類	B2 類	C1 類	
		C 類		C2 類	
		D 類			
弘仁地震 (弘仁 9 年) 以後 (818 ～)	補修瓦 B タイプ (多量)			B 類	B 類

 特徴が相互に共通し、セット関係がある瓦

#### 第 4 項 平瓦・丸瓦の構成比率と屋根景観

1 号建物跡の丸瓦と平瓦について、隅角数から算出した個体数比率では、1:2.07 となる。一般的な総瓦葺建物における丸瓦・平瓦の個体数比は 1:2.5～3 と想定されており [高崎市教委 2019]、1 号建物跡の個体数比率ではこの基準には当てはまらない。瓦の個体数を見てみると丸瓦が 28 個体、平瓦は 58 個体となっている。1 号建物跡は半分程度を調査し、その部分の瓦は全て取り上げてきた。瓦の遺存状態が悪い箇所もあり、後世に持ち去られた瓦も考えなければならないが、個体数が少なすぎる印象を受ける。多胡正倉跡 SB03 建物跡では、同様の分析で個体数を割り出し、主体を占める丸瓦 1 類が 38 個体、平瓦 1a 類は 79 個体と牛田廃寺跡を上回っている。調査面積や遺存状態、規模も勘案する必要はあるが、周辺集落の住居内からもほとんど瓦は検出されないことから、大多数が持ち運ばれたとは考えづらい。1 号建物跡が総瓦葺きかどうかは今後検討が必要である。

1 号建物跡からは隅切平瓦 (第 94 図 215) が出土しており、基壇外側には雨落溝が周ることが確認されているため、寄棟もしくは入母屋造りの建物であった可能性が高い。

また創建瓦である軒丸瓦 A1 類・軒平瓦 A 類・丸瓦 A1 類・平瓦 A1 類は、赤褐色の色調を呈するものが多く、1 号建物跡の屋根は多彩な色調を呈していたと考えられる。

#### 第 5 項 丸瓦・平瓦の比率から見る牛田廃寺の屋根改修

近隣で軒先瓦だけでなく、丸瓦・平瓦も含めて分類を行い、詳細な計数を行っている遺跡に高崎市多胡正倉跡がある。報告書では、出土した丸瓦・平瓦の点数・重量・隅角数・個体数を計数し、表を掲載しており、牛田廃寺跡と比較するとその相違点を明確にできる (第 35 表)。

多胡正倉跡は寺院では無いが、瓦葺きの総柱礎石建ち建物が検出されており、多胡郡の正倉と評価されている。SB03 建物跡からは多数の瓦が出土しており、この建物の瓦と比較する。

SB03 建物及び周辺からは、丸瓦が点数：799 点・重量：143.7kg、平瓦が点数：2224 点・重量：613.9kg 検出されている。点数での構成比率は、丸瓦：平瓦 = 1 : 2.8 となっており、隅切平瓦の存在とあわせ、寄棟もしくは入母屋造りの総瓦葺建物と想定している。

多胡正倉跡 SB03 建物跡の丸瓦・平瓦の分類別の出土比率を見よう (第 35 表)。丸瓦は丸瓦 1 類が 87.6%、平瓦は平瓦 1a 類が 89.9% とそれぞれ 1 種類の丸・平瓦が大多数を占め、ごく少数の他の瓦が伴うという比率となっている。多数を占める丸瓦 1 類及び平瓦 1a 類が創建瓦であり、他の少数の丸・平瓦は都度の補修に用いられたものと解釈することができる。このような創建瓦の比率が突出する場合、瓦の大規模な葺き替えはせずに建物は廃絶され、その役割を終えたのだろう。

一方、牛田廃寺跡 1 号建物跡では、創建瓦である平瓦 A1 類、丸瓦 A1 類と、それより新しい補修瓦である平瓦 B 類、丸瓦 B 類がほぼ同量出土しており、多胡正倉跡 SB03 建物跡とは対照的である。この現象は、牛田廃寺跡 1 号建物跡では、屋根の大規模な改修工事が行われたことを示していると考えられる。

## 第6項 改修要因の推定

牛田廃寺跡1号建物跡の年代的な位置付けは、創建瓦の軒丸瓦A1類の分析から8世紀第2四半期、廃絶の時期は1号整地土を切る3号溝の時期と2号整地土から検出された須恵器坏の年代から9世紀後半と推測した(第5章第2節)。

1号建物跡での丸・平瓦の比率は通常の補修と考えるには不自然であり、何らかの要因で大量の瓦が破損し、屋根の改修が行われたことを示唆している。牛田廃寺跡の存続期間である8世紀第2四半期から9世紀後半にかけて、瓦が大量に破損するような何らかの要因を推定するならば、818年(弘仁9年)7月に起こった弘仁地震が最も可能性が高い。弘仁地震の様子は、『類聚国史』に記されており、群馬を中心とした関東近県に大きな被害があった。群馬県赤城山南麓の遺跡では、弘仁地震による地割れ、山崩れ、噴砂といった地震痕跡が検出されている[桜岡2013]。さらに上野国分寺や山王廃寺跡では9世紀に修造の痕跡が認められており、地震による被害があったと考えられている[松田1991・2018、高井2013]。

牛田廃寺跡1号建物跡で確認できた丸・平瓦の特徴的な比率も、地震による修造を反映している可能性が高い。その場合、修造に使用された補修瓦Bタイプ(丸瓦B類、平瓦B類)の製作年代は818年7月以降と推測される。

また、丸瓦・平瓦は創建瓦と補修瓦の比率がほぼ同率であったのに対し、軒丸瓦・軒平瓦は創建瓦が大多数を占めている。この事実から補修では、軒丸瓦・軒平瓦は供給されなかった可能性が高い。軒先の補修には既存の軒先瓦を利用したか、補修後の軒先には軒先瓦が無いのか極少数であったのではないかと推測される。なお補修に関する軒先瓦が顕著でない状況は上野国分寺でも指摘されている[高井2013]。

## 第7項 牛田廃寺の廃絶について

牛田廃寺の廃絶時期については、1号整地土を切っている3号溝と2号整地土で見られた須恵器坏から9世紀後半と推測した。さらに1区で検出された9世紀後半の61号住居跡では、カマドに瓦を使用し、住居覆土中にも多量の瓦が検出されたことも牛田廃寺の廃絶を傍証しているといえるだろう。

発掘調査では1号建物跡をはじめその周辺でも顕著な炭化物や焼土は見られず、廃絶の要因は火災ではないことは間違いない。瓦の出土状況は1号建物跡の西・南に密に検出され、鉄釘も瓦に混じって出土していることから、全体の状況は不明だが、西もしくは南西側に倒壊した可能性が考えられる。

牛田川除地区基盤整備事業における川除屋敷裏遺跡の調査では、牛田廃寺跡の他に数多くの住居跡が検出された。道水路部分の限定的な発掘調査にもかかわらず、4年間の調査で400軒ほどの竪穴住居跡が検出され、神流川左岸の低地に寺院を含む大規模集落が展開することが判明した。

竪穴住居跡は、牛田廃寺創建直前の7世紀後半から爆発的に増加し、10世紀になると極めて少なくなる。10世紀には川除屋敷裏遺跡は衰退したと考えられる。牛田廃寺の廃絶は、集落の消滅より1世紀ほど早いと推測される。村落内寺院の分析を行った富永樹之によると「集落消滅の四半世紀～半世紀前に仏堂が消滅する例がかなり多い。」[富永1996] ようだ。

牛田廃寺の周辺では、存続期間中に住居跡はあまり作られず、事業地南側のやや離れた箇所に集中して作られ、寺域と集落を分ける何らかの規制が存在した可能性が高い。廃絶後の10世紀になると、牛田廃寺跡周辺に住居

第35表 多胡正倉跡出土瓦種類別比率表

(高崎市教委2019より作成)

種別	整形	類型	59T-SB03 周辺出土	
			破片数	比率 (%)
丸瓦	紐作	1類	700	87.6
		2類	10	1.3
	粘土板	2b類	2	0.3
		2c類	1	0.0
		3類	5	0.6
	泥条盤築	4a類	61	7.6
		4b類	0	0.0
	不明			20
合計			799	
平瓦	桶巻粘土板	1a類	1999	89.9
		1b類	1	0.0
		2a類	53	2.4
		2b類	22	1.0
		2c類	4	0.2
		2d類	11	0.5
		2類不明	13	0.6
	桶巻・紐	3類	1	0.0
	泥条盤築	4類	0	0.0
	一枚作り	5a類	0	0.0
		5b類	0	0.0
		5c類	2	0.1
		5d類	0	0.0
		5類不明	14	0.6
	不明			104
合計			2224	

が作られるようになり、住居の分布が明らかに異なってくる。牛田廃寺の廃絶と集落（川除屋敷裏遺跡）の衰退が連動しており、有機的な関連性が認められる。

牛田廃寺の近隣には、8世紀後半創建と考えられている緑野寺（浄土院浄法寺）が存在する。道忠によって創建され、一切経を備え、最澄も訪れた寺院である。緑野寺（浄土院浄法寺）は、近隣において精力的な布教活動を実施した道忠及びその弟子たちの集団である道忠教団の本拠地である。牛田廃寺跡の廃絶時期は、道忠教団の衰退時期とも重複しており〔池田 1995〕、この一帯の仏教信仰に関わる動態を推定する上で重要である。

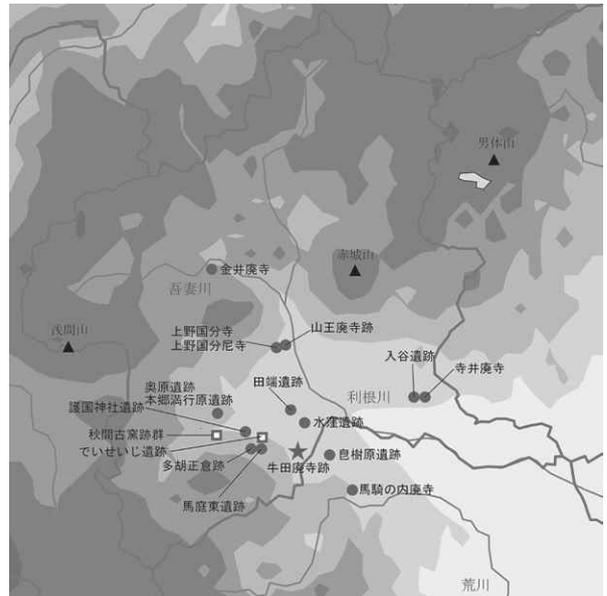
## 第2節 山王廃寺系軒丸瓦の相對編年について—創建年代の検討—

### 第1項 山王廃寺系軒丸瓦とその分布

牛田廃寺の創建年代を考えるにあたっては、創建瓦である軒丸瓦 A1 類（複弁6弁軒丸瓦）の系統の検討と編年的な位置付けを行っていく必要がある。軒丸瓦 A1 類はこれまで明確に把握されていなかった新范種の軒丸瓦であり、編年的位置付けは明確ではない（註1）。軒丸瓦中で最も出土点数が多く、さらに製作技法や色調、胎土といった特徴が軒平瓦 A 類・平瓦 A1 類・丸瓦 A1 類と共通しており、これらが牛田廃寺の創建時に葺かれた瓦のセットと考えられる。この中で最も得られる情報が多く、研究が進んでいるのが軒丸瓦であり、軒丸瓦を用いた年代的な位置付けを行っていくのが適当である。

軒丸瓦 A1 類は、瓦当文様の諸特徴から「山王廃寺系軒丸瓦」と呼ばれる一群であり、類似した同系統の軒丸瓦が主に群馬県西部及び福島県・茨城県の太平洋岸でも分布することが知られている（第134図）（註2）。「山王廃寺系軒丸瓦」の瓦当文様は、川原寺式軒丸瓦と同様に複弁の蓮華文であるが、川原寺式軒丸瓦より蓮弁が扁平で、中房が小さく、周縁部は素文の直立縁であることを特徴とする。

「山王廃寺系軒丸瓦」全体の編年に関しては、大江正行によるものが唯一であり、群馬県内資料の序列が示されているが（第135図）、牛田廃寺跡軒丸瓦 A1 類に関しては新出資料であるため、この編年の中に位置付けられていない。ここでは牛田廃寺跡軒丸瓦 A1 類の年代の推定を行い、牛田廃寺の創建年代を推定していきたい。



第134図 群馬県における山王廃寺系軒丸瓦分布図

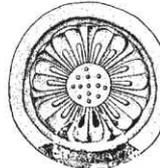
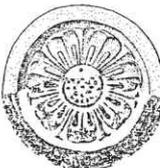
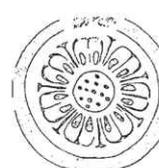
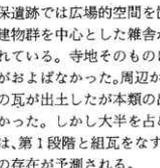
### 第2項 軒丸瓦 A1・A2 類の序列と製作技法について

牛田廃寺跡からは、同范ではあるが製作技法が異なる軒丸瓦 A1・A2 類が出土している。出土量は軒丸瓦 A1 類が36点、軒丸瓦 A2 類が9点と、圧倒的に A1 類が多い。両者には范傷はほとんど確認できず、また瓦当文様に違いは見られないが、瓦当部と丸瓦の接合方法に差異がある。

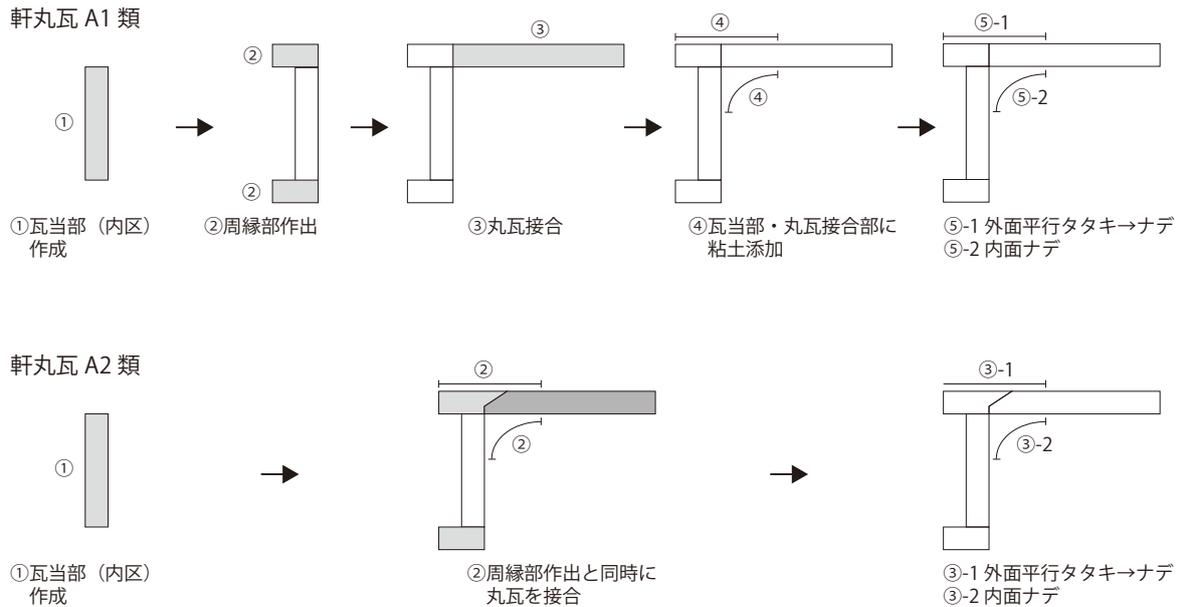
両者はともに瓦当部に丸瓦をそのまま接合する接着法を採用しているが、軒丸瓦 A1 類は瓦当部上端に丸瓦先端を接合し、上下に粘土を添加し補強としている。この方法では接着が弱いため、丸瓦が剥落している個体が非常に多い。これは、山王廃寺系軒丸瓦通有の接合方法であり、前段階から系統的な変遷が辿れる。

軒丸瓦 A2 類は、接着法であることは同様であるが、丸瓦を瓦当部上端の1cm程度下に貼り付け、瓦当部上端と丸瓦上端に粘土を厚く添加し補強をはかっている。補強粘土は周縁部から連続しており、これにより通常の接着

法より接着が強固となり、第 36 図 38・40 も丸瓦は周縁部と接着したままである。この接合技法は、埼玉県神川町臼樹原遺跡でも確認でき製作技法について同様の指摘が既になされている [神川町教委 1990]。臼樹原遺跡の瓦当文様は牛田廃寺と同范であるが [眞保 2020]、ややだれているため牛田廃寺より新しい時期のものである可能性が高い。さらに牛田廃寺では軒丸瓦 A2 類の出土は非常に少なく客体的であり、軒丸瓦 A1 → A2 類という序列が想定できる。軒丸瓦 A2 類の接合方法は、剥落しやすい従来の山王廃寺系軒丸瓦に見られる接着法を改良したものと評価できる。臼樹原遺跡では、この軒丸瓦 A2 類のみが出土しており、遺跡差としても新旧関係の把握が可能である。さらに臼樹原遺跡の重弧文軒平瓦は桶巻作りではなく、泥条盤築技法で製作されており、牛田廃寺跡の次段階の様相を知る上で重要である。

第 1 段 階	 1 秋間八重巻窯跡	 2 山王廃寺=放光寺跡	 3 金井廃寺
	 4 寺井廃寺	 5 入谷遺跡	 6 新保廃寺
第 2 段 階	 7 でえせえじ窯跡	 8 田端廃寺	 9 水窪遺跡
	多胡郡建郡の頃		
第 3 段 階	 10 護国神社遺跡	 11 馬庭東遺跡	 12 奥原遺跡
	 13 雑木見遺跡	 14 上野国分寺跡	<p>14は【上野国分寺跡発掘調査概報2】(群馬県教育委員会)1981による。14は写真照合であるが、13とは弁内子葉の長短が一致し、同范の可能性が極めて高い、実見し、胎土は板鼻層中の特色を持つ。</p>

第 135 図 山王・秋間系複弁 7 葉鏡瓦系譜の諸段階 (大江 1988)



第 136 図 牛田廃寺軒丸瓦 A1 類・A2 類製作工程模式図

### 第 3 項 瓦当文様の分類と比較

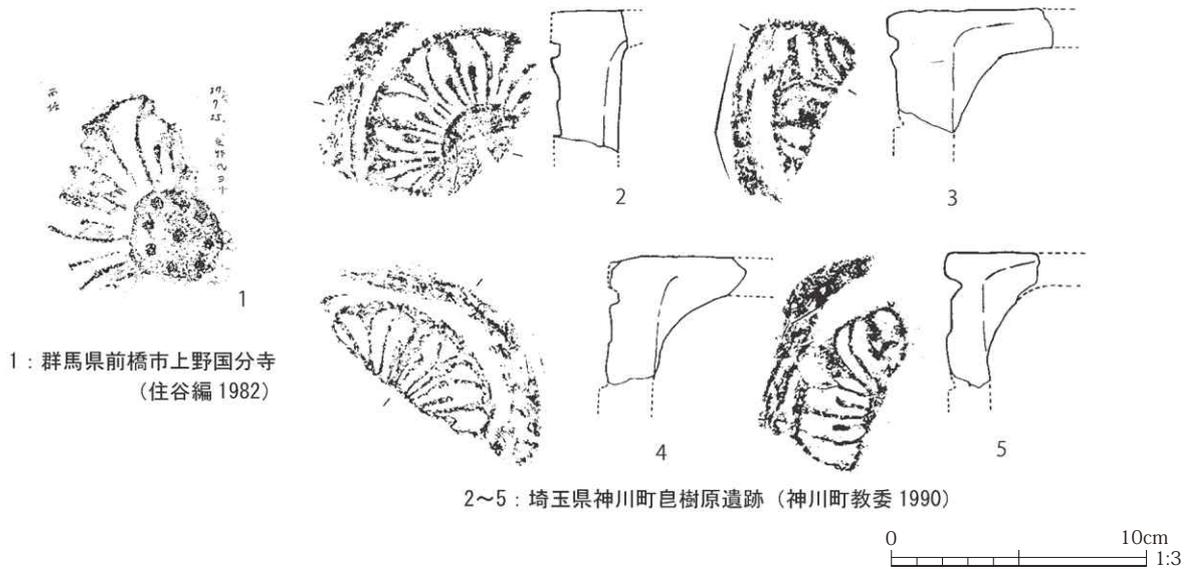
群馬県の山王廃寺系軒丸瓦は、山王廃寺跡例が最も古く、多胡正倉跡・上野国分寺跡が最も新しいと考えられており、蓮弁数が 7 弁から 6 弁へと減じ、中房の蓮子数も減少するという変化の方向性が示された（第 135 図）[大江 1988]。これは資料相互に系統関係を認め、1 系統での変遷を想定したものである。基本的な変遷の流れは異論ないが、瓦当文様の細部を観察すると 2 つの系列に分類できる。

群馬県において山王廃寺系軒丸瓦の范種は、現在のところ 5 范種確認されている。全体的に周縁部が素文直立縁で中房が小さく、蓮弁の厚みがやや薄く扁平であることを特徴とし、共通する。最も古手のものは、山王廃寺跡出土の複弁 7 弁軒丸瓦であり、蓮子数が 1 + 4 + 8、間弁が蓮弁と離れており、周縁部は平滑に調整されている。范傷・調整・色調の相違によって新旧 2 時期に区分できる。群馬県では、山王廃寺跡複弁 7 弁軒丸瓦を祖型とし、他の范種が展開した。他の 4 種類の范種を観察すると、大きく二つの系列に分類できる（第 138 図）。

A 系列は中房径が蓮弁長より大きく間弁が蓮弁と連続し、子葉長が蓮弁長の半分以上の一群で、瓦当文様径が B 系列よりも大きい。馬庭東遺跡・護国神社遺跡・牛田廃寺跡で出土している。7 弁で蓮子が 1 + 8 の馬庭東遺跡・護国神社遺跡例と、6 弁で蓮子が 1 + 8 の牛田廃寺跡が存在する。前者が古く、後者が新しい。前述したように牛田廃寺跡は、丸瓦の接合技法から A1 → A2 類の変遷が想定でき、さらに 2 細分できる。祖型である山王廃寺跡出土の複弁 7 弁軒丸瓦は、蓮弁より中房が大きく、A 系列に近い。

B 系列は、中房径が蓮弁長より小さく、間弁が蓮弁と離れ、子葉長が蓮弁長の半分以下の一群で、瓦当文様径が A 系列より小さい。馬庭東遺跡・水窪遺跡・田端遺跡・でえせえじ遺跡・多胡正倉跡・上野国分寺跡・上野国分尼寺跡で出土している。2 范種あり、7 弁で蓮子が 1 + 4 + 8 の馬庭東遺跡・水窪遺跡・田端遺跡・でえせえじ遺跡例と、6 弁で 1 + 6 の多胡正倉跡・上野国分寺跡・上野国分尼寺例があり前者が古く、後者が新しい。祖型である山王廃寺跡 複弁 7 弁軒丸瓦と比較すると変異が大きい。

大江の変遷案では、これらを 1 系列として蓮子数の変化などから変遷を想定している。しかし、1 系列での変遷では、大江の第 1 段階～第 4 段階（第 135 図）において、A・B 系列とした異なる特徴をもつ資料が交互に繰り返されることになり、スムーズな変遷を説明することは難しい。蓮子の数の増減は確かにある一定の時間差を反映している可能性が高いが、この基準だけでは、これ以外の要素の相違について適切な型式学的な説明を行うことはできない。山王廃寺系軒丸瓦を 2 系列として捉えた方が、瓦当文様の相違をスムーズに説明することができると考える。

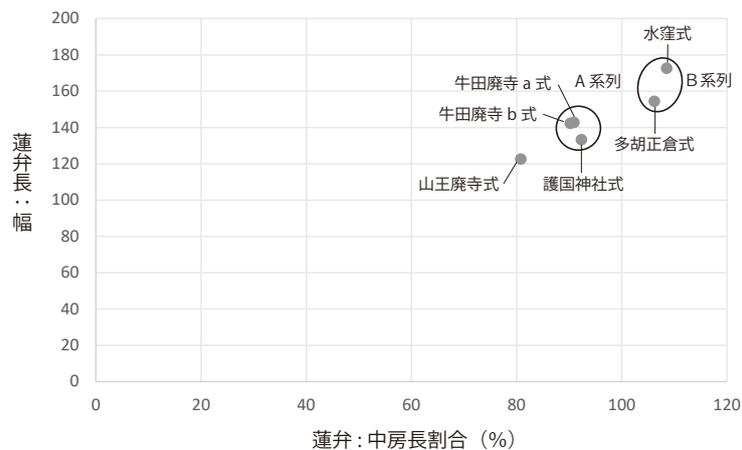


第 137 図 牛田廃寺跡 軒丸瓦 A 類の同范資料

第 36 表 山王廃寺系軒丸瓦計測表

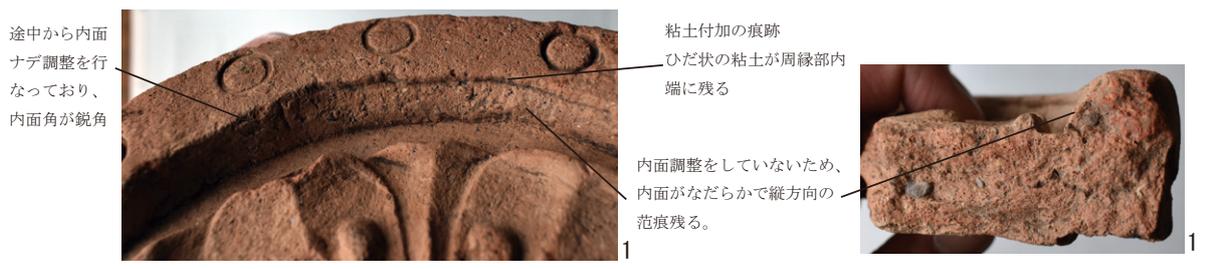
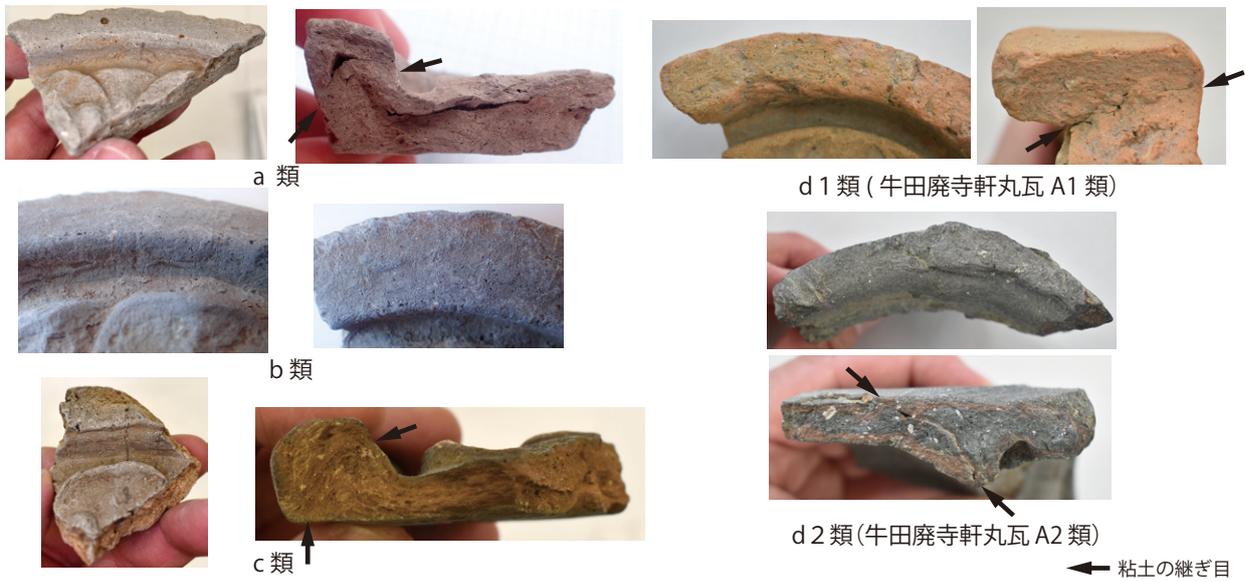
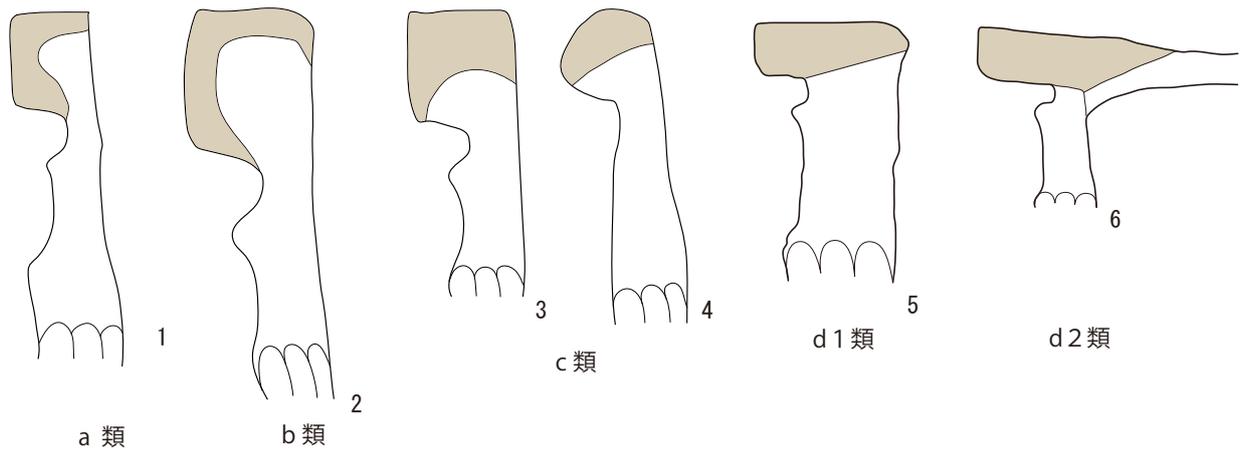
※単位：cm [ ] 内：推定値

観察項目 型式名	蓮弁数	蓮子数	瓦当面径	瓦当 文様径	中房径	蓮弁長	蓮弁幅 (中心)	子葉長	間弁長	同范資料の出土遺跡
山王廃寺 a・b 式	7 弁	1+4+8	17.5	12.0	4.7	3.8	3.1	2.2	3.9	山王廃寺・寺井廃寺・金井廃寺・本郷満行原遺跡
水窪式	7 弁	1+4+8	15.1	10.3	3.5	3.8	2.2	1.9	3.9	水窪遺跡・馬庭東遺跡・田端遺跡・でえせえじ遺跡
護国神社式	7 弁	1+8	15.8	11.3	3.9	3.6	2.7	1.9	3.6	馬庭東遺跡・護国神社遺跡
牛田廃寺 a 式 (牛田軒丸瓦 A1 類)	6 弁	1+6	17.5	12.7	4.4	4.0	2.8	2.2	4.0	牛田廃寺・上野国分寺・ 自樹原遺跡
牛田廃寺 b 式 (牛田軒丸瓦 A2 類)	6 弁	1+6	[15.6]	[12.0]	4.1	3.7	2.6	1.9	3.7	
多胡正倉式	6 弁	1+6		10.3	3.2	3.4	2.2	1.3	3.3	多胡正倉跡・雑木見遺跡・ 上野国分寺・上野国分尼寺



第 138 図 蓮弁・中房長割合グラフ

山王廃寺系軒丸瓦は、大江編年を元に 1 段階、2 段階・・・と呼ばれているが、新范種である牛田廃寺跡軒丸瓦 A 類が発見され、また 2 系列に整理できる可能性が高いことから、この名称をそのまま使用することは難しい。そ



周縁部作出技法 a・c 類併存 (山王廃寺 a 式)



周縁部作出技法 a 類 (山王廃寺 a 式)

周縁部作出技法 c 類 (山王廃寺 b 式)

第 139 図 周縁部作出技法の分類及び細部の特徴 (上段) と周縁部に残された痕跡

のため、ここでは山王廃寺跡出土の複弁7弁軒丸瓦を祖型とし、群馬県に分布する同系統の軒丸瓦について「山王廃寺系」と呼称し、瓦当文様の違いにより区別できる軒丸瓦を標式的な資料を出土した遺跡名を冠して、「～式軒丸瓦」と仮称する。さらに同范の軒丸瓦で製作技法、范傷、遺跡間比較などを通して時間差として細別できるものは、「a.b…」とアルファベット小文字を付して表現した（第36表）（註3）。

#### 第4項 周縁部整形技法に見る系統性

これらの軒丸瓦は、異なる范を使用しているが、周縁部の作出技法に系統性が確認できる。山王廃寺系軒丸瓦の周縁部は全て瓦当面より周縁部が高い直立縁で、素文であることが基本である。通常、周縁部内面には瓦范の痕跡が見られることが普通であるが、山王廃寺系軒丸瓦には瓦范の痕跡がないことが多く、あっても途中で途切れてしまっている。周縁部の角度もほぼ直角であり、范によらない周縁部作出を行っていた可能性が高い。山王廃寺系軒丸瓦では現在のところ5種類の周縁部作出技法が認められる。

##### 周縁部作出技法（第138図・第37表）

- a類：周縁部全体に粘土を添加して作出する。周縁上面をナデて平滑にする。周縁部内面はナデ調整がされ、内面角が角張る。直立縁が形成され内面に范痕は残らない。
- b類：周縁部全体に粘土を添加して作出する。周縁上面の調整は甘く凹凸が残る。周縁部内面はナデ調整がされ、内面角が角張る。直立縁が形成され内面に范痕は残らない。
- c類：周縁部外側に粘土を添加し、周縁部を作出するもの。外側にだけ粘土を添加し整形を行うため、内面はなだらかで范痕が残る。上面を平滑にするかは段階による。
- d1類：周縁部を粘土板で作出するもの。粘土板を瓦当部側面に貼り付ける。粘土板の貼り付けのため、粘土板が剥落しやすい。
- d2類：d1類の変形で周縁部を粘土板で作出し、丸瓦接合部の補強も兼ねるもの。周縁部と丸瓦接合粘土が供土である。瓦当部と丸瓦の接合が強固で丸瓦は外れづらい。

周縁部作出技法a類は、山王廃寺a式軒丸瓦で大多数を占める。山王廃寺b式軒丸瓦になるとa～c類が混在して用いられ、水窪式・護国神社式にはb・c類が多い。これらの周縁部作出技法は、時期ごとに技法が使われるわけではなく、各技法は1時期に、複数併存しているが、周縁部を作出する粘土を全体に施すa類を祖型とし、手順を省略する形でb～d2と変化する方向性が考えられる。

牛田廃寺a式軒丸瓦（軒丸瓦A1類）では、b～d1類が認められ、b・c類が1個体内に共存している。軒丸瓦A2類は、d2類のみ見られる。d1・d2類は、牛田廃寺跡軒丸瓦A1・2類で初めて採用された技法であり、最も新出の要素として把握できる。

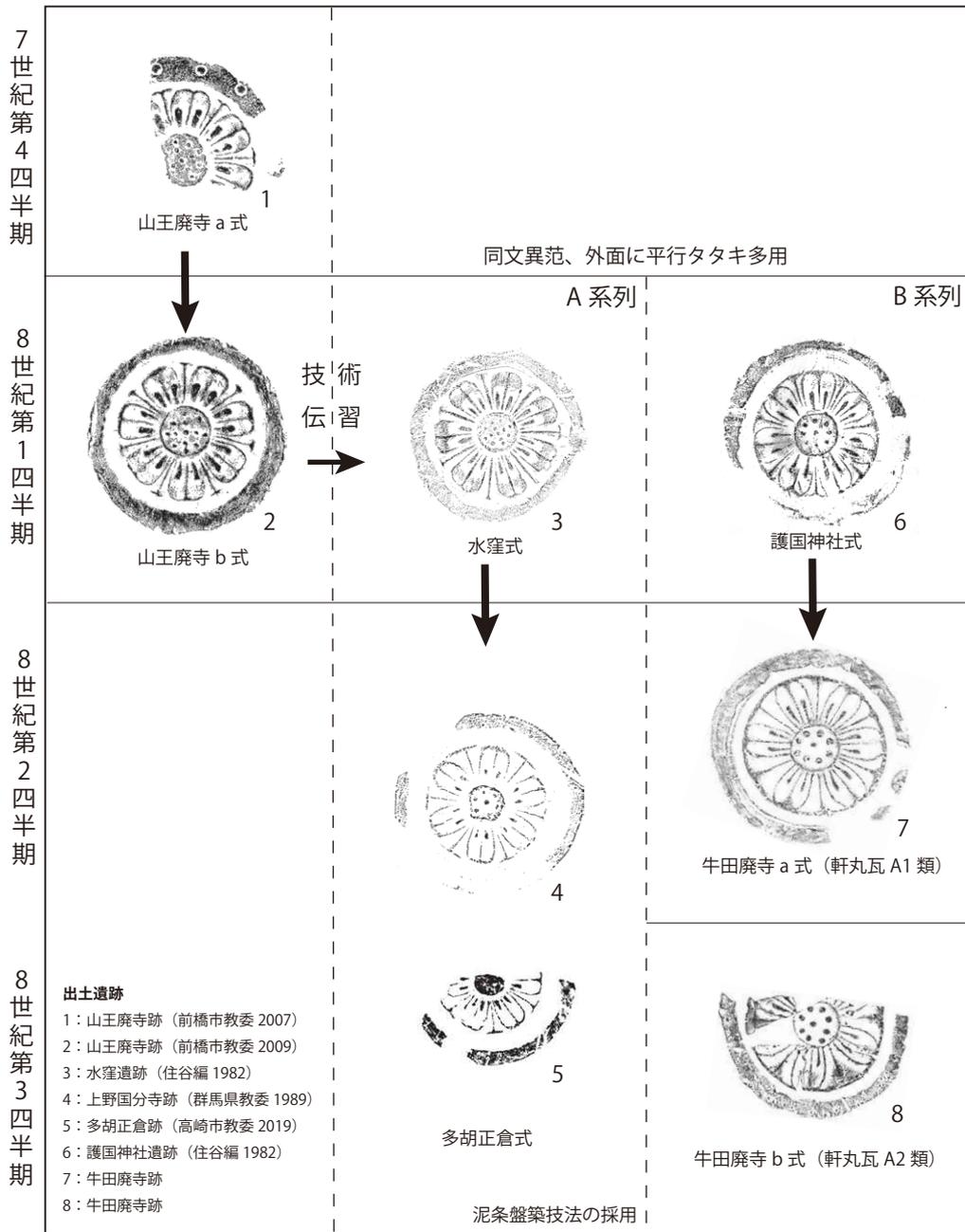
これらの周縁部作出技法は、山王廃寺系軒丸瓦に共通して見られる技法であり、技術を共有している。またこのほかに瓦当部と丸瓦の接合も接着法を採用しており、相互に共通した特徴を持つ。山王廃寺系軒丸瓦は、瓦当文様だけでなく、製作技法においても系統関係を持った工人集団が製作した同系統の軒丸瓦である蓋然性が高い。

#### 第5項 山王廃寺系軒丸瓦の相対編年と製作集団（第139図）

群馬県における山王廃寺系軒丸瓦は、先行研究での指摘の通り、山王廃寺跡例（山王廃寺式軒丸瓦）を祖型として展開した。周縁部整形技法に系統性が見られるが、ここで注意しなければならないのは、山王廃寺式軒丸瓦とそれ以外の軒丸瓦では、瓦当文様だけでなく軒丸瓦側縁と丸瓦凸面（以下 外面と記述）の整形技法に相違がある点である。山王廃寺式軒丸瓦の外面は丁寧なナデ調整がされるが、A・B系列の外面には平行叩き痕が明瞭に残るものが多い。さらに山王廃寺式軒丸瓦周縁部上面は丁寧にナデられ平滑になるが、A・B系列の山王廃寺系軒丸瓦は、丁寧な調整を行わないものが多い。このような違いがある一方、周縁部整形技法や丸瓦との接着方法には共通性が

第 37 表 山王廃寺軒丸瓦 周縁部作出技法対応表

山王廃寺系軒丸瓦	周縁部作出技法					泥条盤築技法
	a	b	c	d1	d2	
山王廃寺 a 式	■		■			
山王廃寺 b 式	■	■	■			
水窪式		■	■			
護国神社式		■	■			
牛田廃寺 a 式		■	■	■		
牛田廃寺 b 式					■	
多胡正倉式						■



第 140 図 山王廃寺系軒丸瓦系統図

見られ、工人間の系統性が想定される。

山王廃寺式軒丸瓦以外で見られる平行叩きは、在地で製作される須恵器に一般的に見られる整形技法であり、山王廃寺式軒丸瓦を製作していた瓦工人在、在地の須恵器工人に製作技法を伝習した可能性が考えられる。その際、周縁部製作技法や瓦当部と丸瓦の接合方法といった軒丸瓦特有の技法についてはオリジナルの手法を採用するが、外面の調整といった須恵器作りでも共通する手法については、日頃使っている方法を採用したと言えるのかもしれない。新しい段階の、多胡正倉式軒丸瓦では丸瓦部分を粘土紐の輪積みで構築する泥条盤築技法で作られ、神川町皂樹原遺跡では軒平瓦も同種の技法で製作されている。さらに前述したように、牛田廃寺跡軒丸瓦 A2 類（牛田廃寺 b 式軒丸瓦）では、瓦当部と丸瓦の接合を山王廃寺系軒丸瓦の伝統的な手法である接着法ではなく、変形した接着法を採用している。このように、山王廃寺系軒丸瓦の新しい段階になると、瓦作りの手法がオリジナルから逸脱し、より在地色の強い方法に変わっていくという過程が垣間見える。

山王廃寺式軒丸瓦は同范を用いているが、各種の特徴により山王廃寺 a・b 式軒丸瓦に新旧 2 細別することが可能である（註 4）。山王廃寺 b 式軒丸瓦の段階には、作り方がやや粗雑になる傾向があり、周縁部作出技法 b 類がよく使われる。さらに、群馬県内で山王廃寺以外に山王廃寺系山王廃寺式軒丸瓦が出土する遺跡が複数あるが、実見できた遺跡の軒丸瓦は全て山王廃寺 b 式軒丸瓦であり、新しい段階のものだけが他の寺院で使用されていることがわかった（註 5）。逆に山王廃寺 a 式軒丸瓦については、他遺跡での出土例は今のところ確認されていない。そのため、山王廃寺系軒丸瓦が周辺寺院に拡散する時期は、山王廃寺 b 式軒丸瓦段階であると推測できる。

山王廃寺 b 式軒丸瓦段階において、おそらく在地の須恵器工人に技術伝習が行われ、同文の范が作成され、一連の山王廃寺系軒丸瓦の生産が開始されたと考えたい。山王廃寺系軒丸瓦の変遷図は第 140 図のとおりである。

これらの年代について、瓦そのものから実年代を導き出すのは至難である。そのため、山王廃寺系の祖型である山王廃寺 a 式軒丸瓦を従来の指摘の通り、7 世紀第 4 四半期と考え、年代の定点とする（前橋市教委 2011）。それ以降の軒丸瓦に関しては、四半期（25 年）区分を機械的に当てはめた。その結果、牛田廃寺 a 式軒丸瓦（軒丸瓦 A1 類）を 8 世紀第 2 四半期として把握し、牛田廃寺の創建もこの時期であるとした（註 6）。749 年（天平勝宝元年）には建立されていたと考えられる上野国分寺で、牛田廃寺式軒丸瓦が採集されており、編年の位置付けに大きな齟齬はないと考える（註 7）。さらに創建瓦である軒平瓦 A 類と平瓦 A1 類には、凹面の模骨痕をナゲ消すクセがある。このクセは伊勢崎市上植木廃寺 2 期の平瓦にも認められ、伊勢崎市上植木廃寺における 2 期の瓦の同定指標の 1 つとなっている（出浦 2009）。2 期の年代的位置は、「8 世紀前半・上野国分寺創建前後」[出浦 2009] と想定され、先述した牛田廃寺創建を 8 世紀第 2 四半期とする推定とも矛盾しない。

註 1：牛田廃寺跡発見後の集成によって、上野国分寺及び埼玉県神川町皂樹原遺跡で同范の軒丸瓦が出土していることが明らかとなった。

註 2：「山王廃寺系」軒丸瓦は、この名称の他にも「山王廃寺式」[岡本 1994] や「山王・秋間系」[大江 1988] と呼ばれている。

註 3：型式の命名方法は、縄文土器型式の方法を参考にした [庄司 1981]。

註 4：山王廃寺跡出土の山王廃寺式軒丸瓦の分析と細別については、別稿を準備している。

註 5：東吾妻町金井廃寺跡例のみ実見することができなかった。しかし、他の寺院の様相から、金井廃寺跡例も山王廃寺 b 式軒丸瓦である可能性が高い。

註 6：2020 年東国古代遺跡研究会第 10 回研究大会において大橋泰夫氏（島根大学）から、牛田廃寺跡の創建年代について上野国分寺に同范軒丸瓦が出土している事実から、牛田廃寺跡の創建時期は、上野国分寺創建後ではないかという趣旨の質問を受けた。上野国分寺跡からは確かに牛田廃寺跡と同范の軒丸瓦が採集されているが、今回の分析で牛田廃寺 a・b 式軒丸瓦として細分できることが明らかとなった。そのため同范資料が出土しているからといって上野国分寺跡と併行するとは限らない。さらに上野国分寺跡では、川原寺式軒丸瓦など明らかに古い軒丸瓦が検出されているため、上野国分寺跡から出土しているから上野国分寺跡に併行するとは言えないだろう。

註 7：『続日本紀』天平勝宝元年 5 月戊寅条。

## 第3節 川除屋敷裏遺跡における牛田廃寺の位置付けと性格

### 第1項 牛田廃寺の形成時期・順序・規模

牛田廃寺は、8世紀第2四半期に創建され、9世紀後半には廃絶していたと考えられる。検出された寺院関係の遺構は、瓦葺きの1号建物跡と整地土が2箇所、整地土は調査面積が狭く、その性格について十分に把握できなかったが、建物の基礎である可能性もある。これら3つの遺構が牛田廃寺跡の中核的な施設であったと考えられるが、明確な伽藍は確認できない。

寺院が構築された地点は、硬い砂礫層が地表近くで検出される自然堤防上であり、強固な砂礫層を利用して牛田廃寺を造営していることが発掘調査で明らかとなっている。周辺に試掘トレンチを設定し、遺跡の把握を行ったが、砂礫層は牛田廃寺周辺にしか確認されず、牛田廃寺から離れると砂礫層が下層に潜っていく様子が確認できた(第8～10図)。瓦も牛田廃寺周辺でしか検出されず、周囲にはほとんど散布しないことから、牛田廃寺の範囲は砂礫層が地表から浅い箇所にはほぼ限定されるといってよい。

牛田廃寺の南には東西に走る2号溝が検出され、当初、寺院の区画溝と考えたが北側では検出されず、東に設定した試掘トレンチでも東にそのまま続き曲がらないことから、区画溝ではないと判断した。

牛田廃寺周辺では、住居跡の検出がなく寺域を画する何らかの意識があったことは確かだが、それは溝等で物理的に区画される類のものではなく、集落域と完全に分離していたわけではない。

1号建物跡と2箇所の整地土の構築順序は、1号建物跡の版築内に瓦が全く含まれておらず、1・2号整地土内には瓦が包含されているため、1号建物跡→1・2号整地土という順で構築されたと想定される。1号建物跡は、平面形がやや東西に長い長方形を呈することから金堂であった可能性が高い。

このように牛田廃寺は、伽藍を持たない小規模寺院であり、寺域と集落との境界は物理的に画されていなかった。牛田廃寺を含む川除屋敷裏遺跡では、同時期の集落が展開し、夥しい数の竪穴住居跡が検出されている。また牛田廃寺創建前に造営された牛田古墳群と牛田廃寺は何らかの有機的な関連性があった蓋然性が高い。

次項は牛田廃寺と集落・古墳との関係について見ていこう。

### 第2項 川除屋敷裏遺跡の遺跡形成過程

#### a. 竪穴住居跡の時期別推移と近隣遺跡との比較

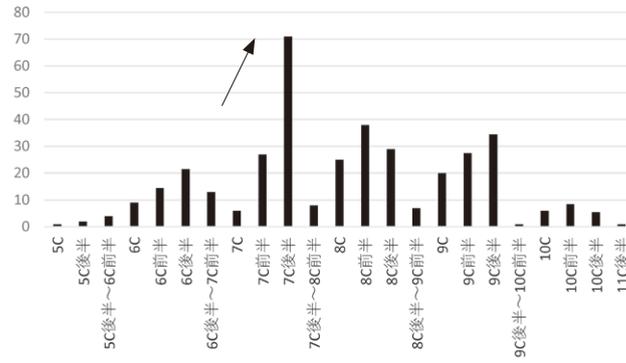
牛田廃寺跡、牛田古墳群を含む川除屋敷裏遺跡では、平成30～令和3年度にかけての調査で400軒以上の竪穴住居跡が検出されている。発掘調査を行ったのは、道水路部分のみであり、調査面積は事業面積の10%にも満たない。実際は検出住居跡の何倍もの住居が存在すると考えられ、神流川左岸の低地に大規模な集落が展開することが明らかとなった。

弥生時代後期樽式土器が出土した土坑が本遺跡で最も古い時期の遺構であるが、住居は検出されておらず、明確な居住痕跡は確認できなかった。川除屋敷裏遺跡で住居が検出されるのは、5世紀後半から10世紀にかけてであるが、各時期で満遍なく存在するわけではなく、時期ごとに偏在している。

検出された竪穴住居跡を時期別に分け、計数したのが第141図である(註2)。5世紀後半に初めて竪穴住居跡が2区で確認されるが少数であり、分布は限定的である。6世紀に入るとやや増え、遺跡の広い範囲で検出されるようになるが同様に数は少ない。増加し始めるのは牛田古墳群が造営される7世紀前半であり、牛田廃寺造営前の7世紀後半に激増する。8世紀に入ると若干減るが高水準で推移する。9世紀前半に減少し、9世紀後半にやや増加する。住居跡は11世紀まで造られるが低調であり、10世紀には川除屋敷裏遺跡の遺跡形成は終了すると考えられる。

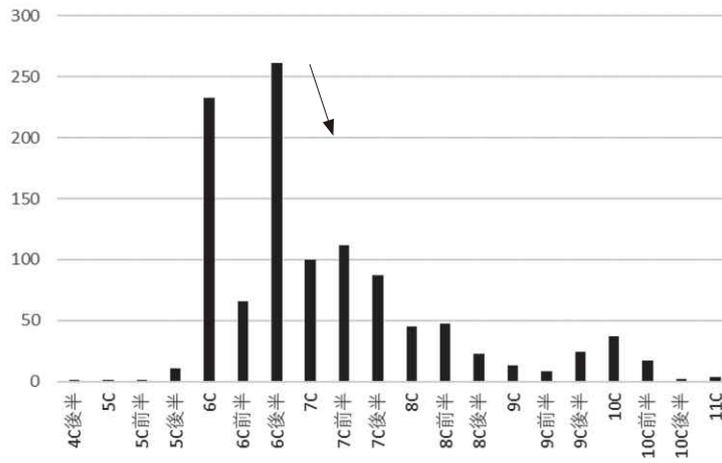
時期別に住居跡数を見た時に特筆されるのは、7世紀後半から8世紀における住居跡の急増である。次に比較のため、近接する藤岡台地上で見つかっている遺跡の住居跡数を時期別に計数し、その相違点を見ていきたい。

軒数



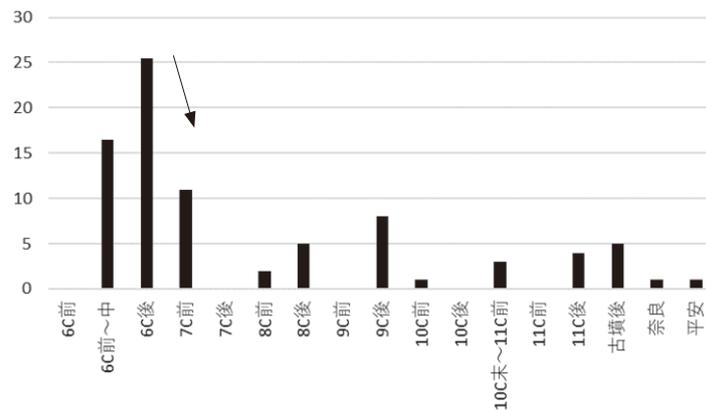
第 141 図 川除屋敷裏遺跡 時期別住居数増減グラフ

軒数



第 142 図 笹川沿岸地区遺跡群 時期別住居数増減グラフ

軒数



第 143 図 神田神明 B 遺跡 時期別住居数増減グラフ

### 笹川沿岸地区遺跡群 (第 142 図)

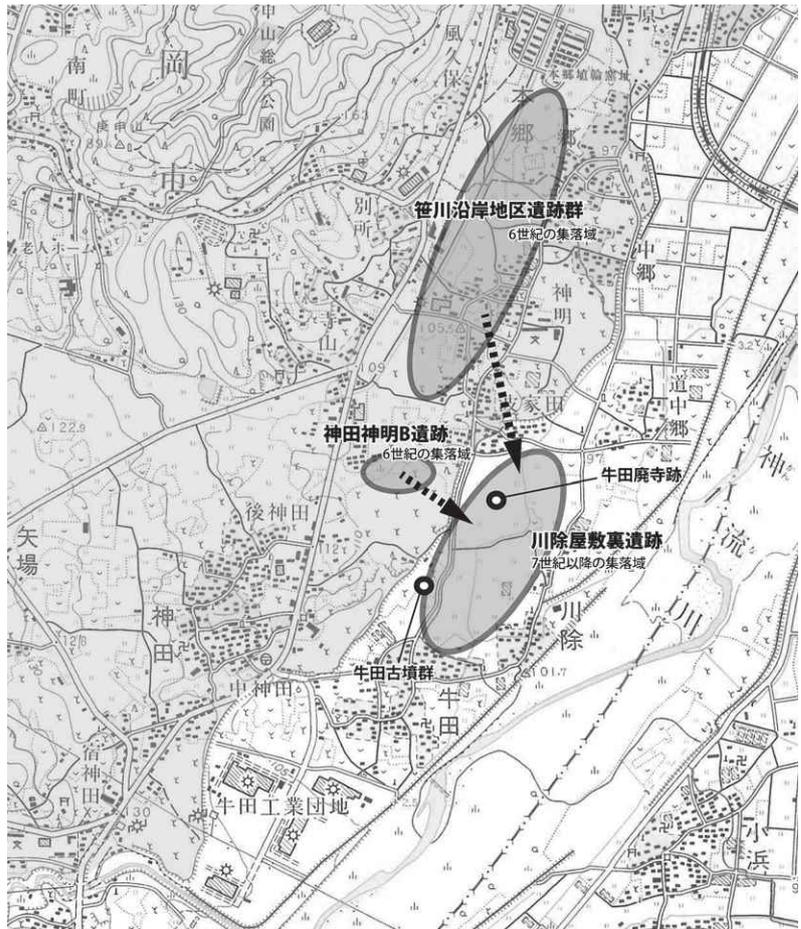
川除屋敷裏遺跡から北に 500m 程の藤岡台地上に展開する古墳時代の大集落である。平成 26～令和 2 年度にかけて県営基盤整備事業笹川沿岸地区遺跡群の発掘調査を実施し、1000 軒を超える竪穴住居跡が検出された。調査面積は、41,596m<sup>2</sup> である。竪穴住居跡は極めて密に重複しており、一定の場所に繰り返し住居が構築されていた。

第 142 図は、時期が明確な住居跡を計数し、表にしたものである。6 世紀代の住居跡が大多数を占める。前段階の 4・5 世紀の住居跡は極めて乏しく、6 世紀に入り住居跡が激増する。しかし、7 世紀には、住居軒数が 6 世紀の約半分になり激減する。8 世紀にはさらに減り、11 世紀まで住居が構築されるが、軒数は極めて少なく、集落は衰退していく。10 世紀後半には遺跡形成は終了していた可能性が高い。

住居件数のピークは 6 世紀であり、その後、急激に減少するという傾向が確認できる。

#### 神田神明 B 遺跡 (第 143 図)

令和元年度に防災公園造成工事に伴い、発掘調査が行われた。川除屋敷裏遺跡すぐ西側の藤岡台地上に存在し、古墳時代の集落が検出された。笹川沿岸地区遺跡群と森沢川を境に接しており、同一遺跡の南端部分として捉えられるかもしれない。第 143



第 144 図 周辺遺跡の動態

図が時期別に住居数を計数した表である。6 世紀から住居跡が検出され、6 世紀後半が最も数が多い。7 世紀になると急減し、その後も住居の形成は低調である。

笹川沿岸地区遺跡群と同様に、住居件数のピークは 6 世紀であり、その後、急激に減少するという傾向が確認できる。

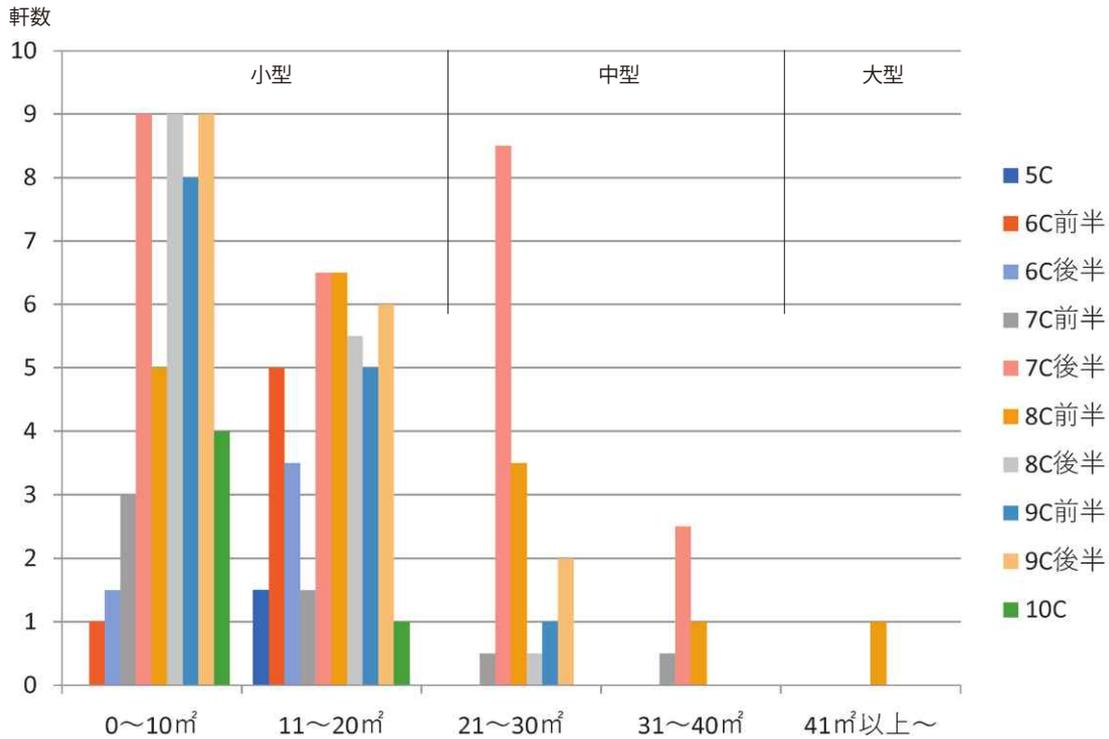
近接した藤岡台地上で調査された遺跡の住居軒数と比較した結果、川除屋敷裏遺跡とは住居軒数のピークが異なることがわかった。低地の川除屋敷裏遺跡では、住居件数のピークは 7・8 世紀でそれ以前の住居跡は少ないが、藤岡台地上の笹川沿岸地区遺跡群及び神田神明 B 遺跡では、6 世紀代の住居が最も多くその後は急減する。台地上と下で時期ごとの住居跡数の変動に相関関係があるといえる。笹川沿岸地区遺跡群及び神田神明 B 遺跡周辺で、6 世紀以後の大規模集落は川除屋敷裏遺跡だけであり、7 世紀台に台地上から台地下の低地へ集落の再編成が行われた蓋然性が高い (第 144 図)。7 世紀に構築された牛田古墳群や 8 世紀第 2 四半期創建された牛田廃寺の造営とも関係すると考えられる。

このようなある時期に突如造営された集落については、「計画村落」(直木 1965・高橋 1979)と呼ばれており、川除屋敷裏遺跡もこれに該当する遺跡である蓋然性が高い。

#### b. 竪穴住居跡の床面積の推移

第 145 図には、川除屋敷裏遺跡の時期が判明し、面積が求められる竪穴住居跡の床面積をまとめた。0～20m<sup>2</sup>を小型、21～40m<sup>2</sup>を中型、41m<sup>2</sup>以上を大型として区分した。60m<sup>2</sup>以上の超大型は川除屋敷裏遺跡では検出されていない。

時期別に見てみると、住居数が少ない 5・6・10 世紀の住居跡は全て 20m<sup>2</sup>以下の小型に区分される。一方、住居が増加する 7・8・9 世紀では、同様に小型住居跡が大多数を占めるが、中型以上の住居跡が出現する。中型



第 145 図 住居跡時期別面積グラフ

住居跡は 7 世紀後半で最も多く、8 世紀前半ではその半分程度の数が検出されている。大型住居跡は、8 世紀前半で 1 軒だけ検出された。

川除屋敷裏遺跡の住居件数のピークと本格的な集落の形成は 7 世紀からであり、中型住居跡の出現もこれらと連動した現象である可能性が高い。

特に 8 世紀前半の 2 区 44 号住居跡は、面積が 50m<sup>2</sup> を超え突出して大きく、検出箇所も住居が密集する場所からやや離れた場所に構築されている。近接した箇所には 1 号掘立柱建物跡が検出されており、大型住居跡と掘立柱建物がセットとして存在していた可能性が高い。大型住居跡には、牛田古墳群や牛田廃寺に関わる当時の上位階層の居住が想定できるだろう。

まとめると川除屋敷裏遺跡では、5・6・10 世紀には小型住居跡が作られ階層性は見られないが、牛田古墳群及び牛田廃寺の継続期間で、集落の主体をなす 7・8・9 世紀には中型住居が出現し、8 世紀には 41 m<sup>2</sup> 以上の大型住居跡が作られる。

### c. 川除屋敷裏遺跡の形成過程

川除屋敷裏遺跡全体の形成過程をまとめると第 38 表のようになる。当該地で最も古い遺構は弥生時代後期樽式土器期の土坑であるが、住居跡は検出されていない。住居が検出され居住が確認されるようになるのは 5 世紀後半からだが数は少なく、6 世紀ではやや増加する。住居数が増え始めるのは、7 世紀前半からで同時期に牛田古墳群の造営が始まり、これらは相互に連動している可能性が高い。この時期から低地の開発が始まったと考えられるが、本格化するのは 7 世紀後半からである。7 世紀後半になると住居跡数が激増し、一定の箇所に集中して作られるようになり、住居面積も大型化する。住居跡が多い傾向は、8～9 世紀まで継続し、8 世紀前半には牛田廃寺が造営され、道路状遺構も構築されるなど、川除屋敷裏遺跡の最盛期として位置付けられる。牛田廃寺は大規模な屋根の葺き替えを行っており、弘仁地震 (818 年) に要因が求められる可能性が高い。地震による被害を受けたが修造を行った事実は、9 世紀前半においては牛田廃寺の存在意義がまだ失われていなかったことを示唆している。弘仁地震の影響か 9 世紀前半に住居軒数は若干減少するが、9 世紀後半に再び増加し、ほぼ同時期に牛田廃寺は廃絶され廃寺となる。集落は 10 世紀まで継続するが規模は非常に小さくなり、川除屋敷裏遺跡は終焉を迎える。

第 38 表 川除屋敷裏遺跡 動態表

川除屋敷裏遺跡	弥生後期	5 世紀	6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀	10 世紀
集落	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
牛田古墳群				■	■		
牛田廃寺跡					■	■	
祭祀（古墳再利用）					■	■	
道路状遺構				■	■	■	■

### 第 3 項 牛田古墳群の形成と古墳の再利用—須恵器祭祀と牛馬の祭祀—

神流川左岸の低地に 7 世紀前～後葉にかけて造営された牛田古墳群は、直径 10～20m 程度の円墳で構成された小規模な群集墳である [藤岡市教委 2023]。藤岡市の古墳では非常に珍しく低地に作られており、立地的な特異性が際立つ。横穴式石室は全て模様積石室であり、模様積石室の編年を行う上で重要な成果が得られた [文挾 2023]。牛田古墳群が造営される 7 世紀前葉は、川除屋敷裏遺跡で住居跡が増加し始める時期と一致しており、低地への人々の進出と古墳造営には有機的な関連性がある可能性が高い。

牛田古墳群は造営を終了した後も、古墳の再利用が図られていることが判明しており、牛田廃寺の継続期間中に古墳周溝において牛馬を使った祭祀を行っていた。出土した牛馬の年代測定を行ったところ、8～9 世紀という年代測定の結果が得られた。[藤岡市教委 2023]。

古墳周溝からは大量の牛馬骨が検出され、分析の結果、最大で馬 28 頭、牛 4 頭が存在したことが明らかとなった。全身が埋設されたと考えられる個体も存在するが、ほとんどが歯のみの出土である。10 歳以下の年齢の個体が 88.5% を占め非常に多く、他遺跡の古代馬の事例とも合致する [宮崎 1995・1996]。

さらに 3 号古墳においては、前庭前付近から祭祀に用いられた須恵器大甕が見つかり、全て位置を記録し取り上げを行った。整理作業において土器の接合を行い、接合関係を検討したところ、馬埋設土坑内で出土した須恵器片と前庭前で出土した須恵器片が接合することが判明した。土坑内で出土した須恵器は小片であるが、非常に遠い位置で出土し接合しており、極めて不自然な接合関係である。これは須恵器を用いた祭祀と牛馬を用いた祭祀が、近接した時間幅で関連性を持って実施されていることを傍証しているといえるだろう。

これらの祭祀を行ったのは、近接する川除屋敷裏遺跡に居住していた人々であったのだろう。この時期は牛田廃寺が作られ、川除屋敷裏遺跡の人々は何らかの形で牛田廃寺との関わりを持っていたと考えられる。仏教という新しい仕組みとシンボルである寺院がこの地域に導入されたにもかかわらず、古墳という前代の象徴を用いた祭祀を実施していたことは、なお根深く在地の信仰が残り、仏教が十分浸透しておらず従来の信仰の完全な代替手段とはなっていなかったことを示唆している。

このような古墳の再利用については、「これは造墓集団が墓地において被葬者の埋葬と共に祖先と自らの帰属意識を強調する効果があり、氏族紐帯の再確認を行う場として機能していたことが考えられる。」[小田 2008] との指摘があり、牛田古墳群においても、古墳造営後も氏族の紐帯を再確認し補強する場として利用されていたのかもしれない。

#### 第4項 牛田廃寺の性格と創建の事由

牛田廃寺の特徴は以下のようにまとめられる。

- ① 8世紀第2四半期創建～9世紀後半廃絶
- ② 伽藍配置を持たず、明確な区画はない。
- ③ 1棟の瓦葺建物と2箇所の整地土から構成、小規模。
- ④ 掘り込み地業、版築を行い、瓦葺きで高度な建築技術を用いる。
- ⑤ 基壇外装に瓦積み基壇を構築。
- ⑥ 顕著な炭化物・焼土は確認されず、寺院廃絶の要因は火災ではない。
- ⑦ 寺院跡周囲には住居跡は作られない。
- ⑧ 低地に構築される。
- ⑨ 集落形成と寺院の造営が連動。
- ⑩ 軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦は上野国分寺と共通。
- ⑪ 牛田古墳群で寺院継続期間中に大甕・牛馬を用いた祭祀を実施。
- ⑫ 集落内の墨書土器・仏教遺物などの出土は少数。

牛田廃寺は神流川左岸の低地に選地し、8世紀第2四半期に造営された。掘り込み地業と版築を行った基壇を持つ瓦葺の建物である1号建物跡と2つの整地土から構成され、明確な伽藍を持たない。その前後の時期に大規模集落が寺院と連動するように形成されており、「計画村落」[直木 1965・高橋 1979]として把握できる(註3)。牛田廃寺は「計画村落」の中に明確な区画施設を持たず造営された寺院であった。

関東地方において同様の特徴を持つ寺院に「村落内寺院」[須田 1985]があり、比較を行ってみたい。

村落内寺院は、千葉県的事例を用いて以下のように定義されている[須田 1985]。

「大規模開発に伴う調査で偶然的に露呈した、新たなタイプの寺院」  
「西暦 800 年前後の時期から 9 世紀末段階に至る 村落内に営まれた寺院」  
「多くが 四面庇付掘立柱建物をもって出現する」  
「律令国家崩壊過程の 9 世紀代の中で展開するところに特色」  
「ほとんどが 堂一字のみの寺」  
「瓦塔を出土する遺跡も少なくなく、」  
「仏堂建物の構造には、掘立柱建物跡、壺地形建物、基壇建物の 3 者がある。」  
「造営上の 技術的水準はきわめて低い」  
「仏堂と倉庫またはこれらと村落を区画する施設は認められず、一定のエイリアをもって存在するが、村落とは未分化の状態であった。」  
「一般的には律令収奪機構である官衙や寺院が、外部との間を隔絶する施設を持つのと比較し顕著な差異を見ることができる。これは逆に 村落共同体内における寺のもつ性格を反映したものと理解できる。」  
「こうした開発村落は、村落内の仏堂が成立する以前から継続的に営まれたのではなく、8 世紀と 9 世紀の交界の時期に開発を目的とし、突然出現した計画村落である。」(下線筆者)

また埼玉県の村落内寺院を分析した井上尚明は、開放的で簡易なつくりの寺院として把握し、区画施設を有しないが、「竪穴住居や掘立柱建物など生活遺構との混在はなく、周囲に空閑地を設定した構造を基本とする傾向にある。」[井上 2006]とした。さらに立地に関しては「自然堤防や扇状地に作られることはなく、水田となるような低地帯を避けていることは明らかであり、建設における占地要件や規制があったことが窺える。」[井上 2006]としている。

さらに村落内寺院には瓦が葺かれないことがほとんどである。

牛田廃寺と村落内寺院の相違点についてみてみよう(第39表)。

第 39 表 牛田廃寺と村落内寺院の比較

	牛田廃寺	村落内寺院
創建時期	8 世紀第 2 四半期	9 世紀代
廃絶時期	9 世紀後半	9 世紀末
立地	低地	低地以外
瓦の有無	○	×
建築技術	高い	低い
伽藍	×	×
寺域区画	×	×
計画村落	○	○
集落での仏教関係遺物の出土	少ない	多い
牛	○	×

第 39 表で表したように牛田廃寺と村落内寺院には、相違点と共通点が存在する。相違点は主に創建時期・立地・寺院の建築手法に見られる。一般的な村落内寺院より早く創建され、村落内寺院があまり選地しない低地に立地する。さらに建物には、掘り込み地業・版築・瓦積基壇といった技術的に高度な手法が用いられており、「造営上の技術的水準はきわめて低い」〔須田 1985〕とされた村落内寺院とは大きな違いがある。牛田廃寺の造営者には一定の資金や権力があつたことが予測される。さらに相違点としては、集落内における仏教系遺物の少なさが挙げられる。村落内寺院及びその周辺からは、寺院を示す墨書土器や仏教系の遺物が出土することが一般的であり、そのような遺物の存在から村落内寺院の存在が推定される場合も多い。しかし牛田廃寺周辺に展開する川除屋敷裏遺跡からは、そのような遺物の出土は希薄である。

一方、共通点は寺院規模と集落との関係性にある。牛田廃寺は明確な伽藍を持たず、非常に小規模な寺院である。牛田廃寺に近接した周辺には、住居は作られずまた集落の本体からは一定の距離が存在し、ある程度の寺域は意識されていたが、寺域内外を明確に区別する区画施設などは検出されておらず、集落とは未分化である。さらに牛田廃寺周辺の川除屋敷裏遺跡は、牛田廃寺造営直前に住居が激増することが判明しており、計画村落と考えられ、このことも村落内寺院と共通した特徴と言える。廃絶の時期も、村落内寺院と一致する。

このようにみた場合、牛田廃寺は村落内寺院と中間的な様相を持つといえる。牛田廃寺は、高度な建築技術で造営され、これまで集落が展開していなかった低地に選地し、計画村落を伴うといった点から、造営要因については在地氏族による耕地開発と考えるのが適当であろう。

梶原義実の分類を参考とすると、牛田廃寺は、「開発拠点型」〔梶原 2017〕とすることができる。開発拠点型は「条理地割が敷設された沖積低地や扇状地など、水田地帯の微高地を選地し、複数寺院が密集して造営。」「高燥地を中心としてあらたな水田開発に伴い、寺田としての確保という経済的事情も存在か。」〔梶原 2017〕と定義された。牛田廃寺は沖積低地に選地しており、対岸の神流川右岸には城土野廃寺や皂樹原遺跡、五明廃寺、精進場遺跡といった寺院と想定される遺跡が近接して複数造営されている。さらに牛田廃寺は、計画村落に合わせて造営された可能性が高く、耕地開発等との関わりが予測され、開発拠点型の定義と合致するだろう。さらに梶原は、「寺院造営が、農業生産とリンクする形で展開した可能性を強く指摘したい。」〔梶原 2013〕と述べ、寺院造営と農業に密接な関係性があることを指摘した。牛田廃寺の造営に関しても新たな耕地開発との関連性を考えたい。

牛田廃寺は新たな耕地開発のためのシンボルとして造営されたと言ってよいだろう。川除屋敷裏遺跡周辺の低地開発は、7 世紀前半に一部始まっている可能性があり、住居跡数の増加と牛田古墳群の造営が開始される。その後、7 世紀後半に開発が本格化し、牛田廃寺造営が開始されたことが読み取れ、牛田古墳群と牛田廃寺の連続性及び造営主体の同一性が示唆される。

地方における寺院の造営については、「地方豪族による氏寺の建立は、国家のうち出した方針に沿って僧尼の活動の場を提供するという実践的側面よりも、むしろその感覚的な側面を重視し、豪壮な伽藍を建立すること自体に意義を見出していたと考えて大禍ないのではないだろうか。」〔本郷 2005〕と指摘された。牛田廃寺造営にもこのような側面があつたのなら、集落における仏教遺物の僅少さについても整合的に理解することができる。つまり、牛

田麿寺は村落内寺院と共通性が存在するが、在地氏族が造営した氏寺であり、氏族のための寺院であった。

牛田古墳群では、牛馬骨が検出され、牛田麿寺や住居跡からは鋤や馬具が出土している。牛は、「奈良後期から平安初期における寺の経営において牛が重要な労働力」で「寺田における牛耕が身近な風景」〔藤本 2003〕と考えられており、寺の重要な構成物と考えられている。牛骨の出土は、牛田麿寺及び川除屋敷裏遺跡の経済力の高さを示していると同時に、牛田麿寺を「堂」ではなく「寺」として把握できる根拠とできるだろう。

造営氏族は、牛田古墳群と関係がある可能性が高く、牛田麿寺造営後もなお牛田古墳群で牛馬骨と須恵器大甕を用いた祭祀を執行している。牛田古墳群で旧来からの祭祀を行うことで、「氏族紐帯の再確認を行う場」〔小田 2003〕として継続的に利用されていたと考えられる。これは裏を返せば「仏教」という思想・仕組みが、在地氏族が必要とする機能を十分に果たしていなかったといえるのではないだろうか。このような状況の中では、集落の構成員に仏教思想や信仰が十分に行きわたらず、醸成されなかった可能性が高く、それが集落内の仏教遺物の僅少さに繋がっていると考えられることができるだろう。

寺院造営にあたっては、「地方在地豪族が、律令体制の完備してゆくなかにあって、従来自分たちの支配下にあった経済的な基盤を、公にするのをのがれるために、土地・奴婢の所有が認められている寺に振り返るかたちで、公収をまぬがれる口実にしたのではないか。」「間壁 1970〕と経済的な側面からも考察がされており、牛田麿寺もこのような流れのなかで造営された可能性が高い。牛田麿寺が造営されたと考えられる 8 世紀第 2 四半期には、霊亀 2 (716) 年の「寺院併合令」の方針転換が天平 7 (735) 年に行われ (註 4)、寺院造営や修造が再び奨励されるようになる時期にあたる。牛田麿寺の造営にもこのような国家的な動向を考慮に入れる必要があるだろう。

牛田麿寺から南に 3km 程の神流川左岸には、緑野寺 (現：浄土院浄法寺) が所在する。牛田麿寺よりやや新しい 8 世紀後半に創建されたと考えられ、牛田麿寺とは時期的に併行するが、今のところ緑野寺で採集されている瓦の比較からは、両者に関係性を見出すことはできない。緑野寺の創建には、道忠という利他行を實踐した高僧が関わっており、道忠教団を組織し、緑野寺などを拠点に布教を展開したと言われている。そのため氏寺である牛田麿寺とは、建立経緯や檀越、その役割が異なる可能性が高く、瓦の相違もそのような造営主体等を反映している可能性がある。

緑野寺は、中世の戦乱において大部分が焼失してしまい、古代の様相についてはほとんどわかっていない。牛田麿寺と緑野寺の関係性、周辺の仏教受容や動態についての解明が今後の課題となる。

註 1：高崎市馬庭東遺跡では、泥条盤築技法の瓦が一定数検出されており異なった様相を示している。

註 2：他遺跡と比較するため、各時期の「中葉」の時期の住居については、前・後葉へ均等に振り分けた。

註 3：計画村落については以下のように把握されている。「ここで計画村落というのは、当該村落の外にある力・公権力-によって計画された村の意味である。」〔直木 1965〕

「ある一定機の時期に突如集落が出現し、ある一定の時期に突如消滅していく集落があることがわかってきました。それがまた大集落である点なども特徴です。」〔高橋 1979〕

註 4：『続日本記』天平 7 年 6 月己丑条。

#### 参考文献

出浦 崇 2009 『新屋敷遺跡 上植木麿寺周辺遺跡Ⅱ 上植木麿寺 埋蔵文化財発掘調査概報』伊勢崎市文化財調査報告書第 94 集 伊勢崎市教育委員会

大江正行 1988 「第 2 節 田端麿寺の推定—瓦類—」『田端遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第 9 集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

岡本東三 1996 『東国の古代寺院と瓦』

亀田浩子・文挾健太郎 2022 「群馬県藤岡市浄土院浄法寺 (緑野寺) 聖徳太子供養塔の基礎的研究—古代石製層塔の新事例—」『日本考古学』第 55 号

梶原義実 2017 『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館

神川町教育委員会 1990 『皂樹原・ひの下遺跡Ⅱ (奈良・平安時代編 1)』

川原嘉久治 1992 「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要 10』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 栗原和彦 2007 「山王廃寺と上毛野氏—出土軒瓦から—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざま—』
- 群馬県教育委員会 2018 『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』群馬県教育委員会
- 群馬県史編さん委員会 編 1984 『群馬県史 資料編6 中世2』
- 群馬県歴史博物館編 1981 『第8回企画展 群馬の古代寺院と古瓦』群馬県歴史博物館
- 群馬歴史考古同人会 編 1982 『第3回 関東古瓦研究会 研究資料No.3』
- 埼玉県史編さん室 編 『埼玉県古代寺院調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
- 坂詰秀一 1966 『上野・金山瓦窯跡』藤岡市教育委員会
- 桜岡正信 2013 「弘仁の大地震・赤城南麓の地震被害」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 庄司 克 1981 「堀之内Ⅱ式土器小考(1)」『貝塚博物館紀要』第7号
- 眞保昌弘 1994 「陸奥国南部に分布する二種の複弁系鏡瓦の歴史的意義について」『古代』第97号 早稲田大学考古学会
- 眞保昌弘 2020 「山王廃寺系複弁蓮華文鏡瓦からみた多胡郡衙の造営」『上野三碑フォーラム 古代多胡郡の実像—多胡郡家と上野三碑—』資料集
- 杉山秀宏・高井佳弘 2008 「住谷コレクション瓦類資料の基礎調査の成果について」『群馬県立歴史博物館紀要』第29号
- 住谷 修 編 1982 『上野瓦集』
- 高井佳弘 2013 「弘仁の地震と上野国の瓦葺き建物—地震の被害と復興—」『古代東国の考古学2 古代の災害復興と考古学』高志書院
- 高崎市教育委員会 2019 『多胡正倉跡』高崎市文化財調査報告書第426集
- 高崎市教育委員会 2023 『上野国分尼寺』高崎市文化財調査報告書第494集
- 高橋一夫 1979 「東国集落の遺跡の検討 報告1. 計画村落について」『古代を考える』第20号 古代を考える會
- 高橋一夫・大江正行・有吉重蔵・坂野和信・酒井清治 1984 「シンポジウム 北武蔵の古代寺院と瓦」『埼玉考古』第22号 埼玉考古学会
- 滝沢 匡・小根澤雪絵 2019 『多胡正倉跡 遺跡範囲確認発掘調査総括報告書』高崎市教育委員会
- 富永樹之 1996 「村落内寺院」の展開(下)『神奈川考古』第32号 神奈川考古同人会
- 直木孝次郎 1960 「日本靈異記にみえる「堂」について」『奈良時代史の諸問題』
- 直木孝次郎 1965 「古代国家と村落—計画村落の視角から—」『ヒストリア』第42号 大阪歴史学会
- 藤岡市教育委員会 2005 『G1 藤岡市下日野金井窯址群 G4 金山下遺跡・金山下古墳群 G3 平井詰城』藤岡市教育委員会
- 藤岡市教育委員会 2012 『川除屋敷裏遺跡・神田丸沢遺跡・神田吠谷戸遺跡・神田池田遺跡・神田神明遺跡・神田吠谷戸B遺跡 平成20・21年度県営経営体育成基盤整備事業に伴う藤岡南部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書』藤岡市教育委員会
- 藤岡市教育委員会 2020 『牛田廃寺跡発掘調査概要報告書』藤岡市教育委員会
- 藤岡市教育委員会 2023 『牛田古墳群(E32c 川除屋敷裏遺跡12区)』藤岡市教育委員会
- 藤本 誠 2003 『『日本靈異記』における仏教施設と在地仏教』『史學』第72巻第1号 三田史学会
- 文挾健太郎 2023 「第6章 総括 第1節 牛田古墳群の編年と性格」『牛田古墳群(E32c 川除屋敷裏遺跡12区)』藤岡市教育委員会
- 本郷真紹 2005 『律令国家仏教の研究』法蔵館
- 前橋市教育委員会 2011 『山王廃寺 平成21年度調査報告』山王廃寺範囲内容確認調査報告書Ⅲ
- 松田 猛 1991 「平安時代初期の地震—『類聚国史』弘仁9年の記事を中心に—」『群馬県史研究』第34号
- 松田 猛 2018 「史料にみる弘仁地震と上野国」『シンポジウム 弘仁地震の実像に迫る—平安の関東地方北西部の大震災—』発表要旨集
- 宮崎重雄 1995 「城北遺跡の獣骨類」『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書150
- 宮崎重雄 1996 「付載 理化学分析 1. 元総社寺田遺跡Ⅵ区・Ⅶ区出土人骨・獣骨の分析」『元総社寺田遺跡Ⅲ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 第4節 藤岡市牛田古墳群出土の馬歯及び牛歯について

宮崎重雄・文挾健太郎

### 第1項 牛田古墳群の調査概要と検出された馬歯及び牛歯について（文挾）

牛田古墳群の発掘調査は、県営農業競争力強化基盤整備事業牛田川除地区に伴う埋蔵文化財発掘調査として藤岡市が実施した。この開発に伴う一連の調査は、平成30年度から令和3年度の4カ年に渡り行われ、牛田古墳群は令和2年度に調査を実施した。牛田古墳群の発掘調査報告書は既に刊行されており〔藤岡市教委2023〕、本来であればそこに報告を掲載すべきであったが、分析すべき遺物量が多く、まとめることができなかつたため、本報告書に掲載することとした。

牛田古墳群は、古墳時代終末期に構築された古墳群である。藤岡市では珍しく低地に構築された古墳群であり、立地上の差異が他古墳群と際立っている。調査では、周溝のみを含め7基の古墳が発見された。石室は盗掘を受け、天井石は残存していなかったが、石室の遺存状態は比較的よい。石室は全て模様積石室であるが、3期に区分でき、7世紀前～後葉に造られたと推定した。埴輪は全く検出されず、須恵器などが周溝・前庭から見つかっている。

ここで問題とする牛馬骨は古墳周溝から検出された。古墳によって多寡があるが、1・2・3・4・6号古墳から検出されており、調査したほぼ全ての古墳から見つかっている。周溝は部分的にしか調査しておらず、さらに多くの牛馬骨が存在したと考えられる。

年代測定の結果、これらの牛馬骨は古代に遡ることが明らかとなり〔藤岡市教委2023〕、この地域における祭祀の様相や古墳再利用の実態を具体的に物語る資料と考えられた。さらに牛馬骨の時期は、周辺に展開する集落や牛田廃寺跡と併行し、何らかの関係性が想定される。

以下では、牛田古墳群における牛馬骨の出土状況を整理し、形質の観察から想定された牛馬の年齢や体高といった分析結果を示す。その後、牛田古墳群における牛馬骨の性格と周辺遺構との関連性について述べていきたい。

その他の牛田古墳群の具体的な内容については、発掘調査報告書〔藤岡市教委2023〕を参照されたい。なお年代測定結果については、発掘調査報告書〔藤岡市教委2023〕に掲載したが、表に一部不備があつたため本考察の後に再掲載した。

### 第2項 牛馬骨の出土位置・状況（第146～148図）（文挾）

#### 1号古墳（第146・147図）

東側周溝内で馬骨が検出されている。6号馬の1個体だけである。調査では、歯だけでなく四肢骨の痕跡も確認されている。6号馬と近接した地点には、須恵器大甕及び結晶片岩製石製品が出土している。年代測定の結果、6号馬は補正14C年代が1310±20年BP、2σの暦年較正值は660-706calAD（47.00%）、727-731calAD（1.16%）、737-773calAD（47.27%）の年代測定値が得られている。

#### 2号古墳（第146・147図）

2号古墳では馬6個体、牛1個体（7・9・10・11・12号馬、1号牛）が識別された。周溝覆土から検出されたのは、9・10・11・12号馬である。9・10号馬は北側の周溝覆土底面付近から、11・12号馬は西側周溝内から検出され、それぞれ近接した位置で見つかった。

周溝内に掘り込まれた土坑から、14号馬（D-766c号土坑）、7号馬・1号牛（D-766b号土坑）が検出された。D-766b号土坑では、馬骨と牛骨が1つの土坑内で共伴している。

年代測定は2点実施した。

10号馬は、補正14C年代が1200±20年BP、2σの暦年較正值は774-777calAD（2.06%）、779-885calAD（93.39%）。

7号馬は、補正14C年代が1180±20年BP、2σの暦年較正值は774-792calAD（16.98%）、796-893calAD

(75.77%)、930-942calAD (2.70%) との結果が得られた。

### 3号古墳・4号古墳 (第146・148・149図)

3・4号古墳の周溝は重複しているが、切り合い関係が判別できなかつたため、一括して扱う。ほとんどの牛馬骨が周溝底面で検出された土坑内から見つかり、他の古墳とやや検出状況が異なる。検出されたのは、馬8個体(1・2・3・4・5・6・15・16号馬)であり、牛は見つかっていない。762・763・764a・764c号土坑は3号古墳南西で検出され、周溝底面を掘り込んでいた。これらの土坑は重複しており、土坑内からは複数個体の牛馬骨が検出された。762・764a・764c号土坑では、四肢骨と思われる痕跡があり、1・4号馬は全身を埋設していた可能性が高い。他の資料に関しては、歯のみが検出された。

3号古墳では、前庭前の周溝立ち上がり付近で複数の須恵器大甕が検出されており、須恵器大甕を用いた祭祀を行っていたことがわかっている。須恵器片は前庭前に最も集中するが、同一片が馬埋設土坑内及びその周辺で出土し、接合しており、牛馬祭祀と大甕を用いた祭祀に関連性が存在する可能性が高い。

3号古墳における須恵器大甕の出土位置は、第149図-1は765a・b土坑内とその周辺、第149図-2は前庭前・765a・b号土坑内・762号土坑内、第149図-3は763号土坑内・前庭前、第149図-4は前庭前周辺と765a号土坑周辺という出土状態を示し、第149図-1・2は複数土坑間で同一個体が検出されている。この接合状況から、須恵器祭祀と牛馬祭祀はある程度近接した時間の中で実施されたことを示しており、2つの祭祀が何らかの関係性を有することは確かであろう。

なお、765b号土坑からは馬骨は検出されていないが、土坑形状が765a号土坑と類似し、765a号土坑と同一須恵器片が出土していることから、同様の性格を持つ土坑と考えてよいだろう。

年代測定は6点実施した。

1号馬は、補正14C年代が1175±20年BP、2σの暦年較正值は774-791calAD(17.11%)、799-813calAD(3.64%)、817-895calAD(67.12%)、925-949calAD(7.58%)

3号馬は、補正14C年代が1190±20年BP、2σの暦年較正值は774-793calAD(16.05%)、795-889calAD(79.40%)

4号馬は、補正14C年代が1240±20年BP、2σの暦年較正值は682-743calAD(44.69%)、760-765calAD(1.08%)、772-776calAD(2.53%)、786-837calAD(38.49%)、847-877calAD(8.66%)

4号馬は、補正14C年代が1225±20年BP、2σの暦年較正值は706-736calAD(14.62%)、773-776calAD(2.04%)、783-880calAD(78.79%)

6号馬は、補正14C年代が1180±20年BP、2σの暦年較正值は774-791calAD(17.14%)、798-814calAD(4.35%)、816-894calAD(68.15%)、927-947calAD(5.62%)

### 6号古墳 (第146・148図)

周溝覆土から大量の牛馬骨が出土した。土坑は検出されず、牛馬骨は周溝底面直上付近に散在していた。四肢骨は検出されておらず、歯のみの出土である。平面的な出土位置に幾つかのまとまりが見られ、a～f集積区として区分し、集積区ごとに分析を行った。

馬12個体(17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28号馬)、牛3個体(2・3・4号牛)が検出され、牛田古墳群の中で最も検出数が多い。

a集積区では、16・17号馬、b集積区では19・20号馬・4号牛、c集積区では21号馬、d集積区では22・23・24号馬・3号牛、e集積区では25号馬、f集積区では27・28号馬・2号牛が検出されている。a・b・d・f集積区で複数個体の牛馬骨が検出されており、集積区は同一個体を示すまとまりでないことが分析の結果明らかとなった。

年代測定は1点実施した。

19・20号馬は、補正14C年代が1255±20年BP、2σの暦年較正值は674-753calAD(71.51%)、757-775calAD(8.38%)、788-827calAD(15.55%)。

### 第3項 牛馬骨の分析について（宮崎）

#### 1. はじめに

牛田古墳群では令和2年度に実施された発掘調査で多数の馬歯と少数の牛歯が出土した。しかし、いずれも保存状態は不良で、本来の歯列を保って取り上げられたものは一例にすぎず、他のすべては遊離歯で、そのほとんどは分裂・破損していた。馬歯の場合、いったん分裂すると復元はきわめて困難で、調査に当たっては可能な部分はアロンアルファなどを使って、復元をこころみだが、その数はごく少数に限られた。

#### 2. 調査方法

- ①歯種判定に当たっては歯冠長、中附歯幅、咬耗度、咬合面の傾斜、歯根の分岐状況、隣接する臼歯との相対的な諸関係を考慮した。
- ②破損した馬歯がほとんどで、中心歯冠高の計測できたのはごくわずかで、多くは頬側歯冠高または舌側歯冠高の計測のみであった。植月（2011）を参考にして頬側歯冠高から3cmを差し引き、筆者独自の発想で舌側歯冠高には3cmを加えて、中心歯冠高とみなした。
- ③年齢の推定法は西中川編（1991）に基づいて作成した西本・松井（1999）による早見表によった。ほかに咬耗度、歯根の形成状況も加味した。
- ④年齢推定・体高推定ともに、できるだけ第二前臼歯・第三後臼歯以外の臼歯を用いるようにした。
- ⑤馬の年齢区分は5歳以下を幼齡馬、6～10歳を前期壯齡馬、11～15歳までを後期壯齡馬、16歳以上を老齡馬とした。
- ⑥体高の推定法は西中川ほか（2015）によった。
- ⑦馬の個体識別は各土坑、集積区ごとに行った。1個体の歯が別の土坑・集積区に分散してないことを前提としている。
- ⑧牛歯については、破損がひどく、歯種判定に不安が残り、年齢は幼齡牛、壯年牛、老齡牛の表現にとどめた。
- ⑨本文中の略語は以下のとおりである。  
P2：第二前臼歯、P3：第三前臼歯、P4：第四前臼歯、M1：第一後臼歯  
M2：第二後臼歯、M3：第三後臼歯
- ⑩本文中の計測値の単位は特記してない限りmmである。

#### 3. 調査結果 馬骨について

##### 762号土坑（3・4号古墳周溝内）

###### ○1号馬（第40表）

長円形の土坑からの出土で、左下顎臼歯が4本（P3、P4、M2、M3）確認された。埋存時には左下顎臼歯は全歯そろっていたのであろう。左の上顎臼歯片も数本分認められるが、多数に分裂している。右下顎臼歯、右上顎臼歯とも確認されてないが、右側がなぜ失われているのか、その理由はわからない。四肢骨の痕跡もあることから、1体分がそのまま埋葬されていた可能性も考えられる。

左P4の歯根が未分岐であることや歯冠高から、推定年齢は5歳前後の幼齡馬である。推定体高は133.3cmで、大きめの中型在来馬に相当する。

##### 763号土坑（3・4号古墳周溝内）

###### ○2号馬（第41表）

長楕円形の土坑からの出土で、4本の右下顎臼歯（P2、P3、P4？、M3）が出土している。

推定年齢は5歳前後の幼齡馬である。推定体高は126.7cmで、小さめの中型在来馬相当である。体高にはやや差があるものの、年齢は1号馬に近く、両者が同一個体である可能性も否定しきれないが、最短距離でも約2m離れた別の土坑から出土していることから、ここでは別個体として扱った。

○ 3号馬 (第 42 表)

763 号土坑には、わずかに咬耗を受けている右下顎 P3、未咬耗の右下顎 P4、右下顎の M1 ? および下顎切歯が認められる。

3 ~ 4 歳程の幼齡馬で、体高は 122.6cm と推定される。2 号馬とは齒種が重複していることや、年齢差・体高差があることで、別個体と考えた。

764a 号土坑 (3・4 号古墳周溝内)

764a 号土坑は広卵円形をなし、2 個体分の馬歯が出土した。どの個体のものか不明の四肢骨の痕跡も認められる。

○ 4号馬 (第 42 表)

右下顎 M3 と右下顎乳白歯と思われる歯がそれぞれ 1 本出土している。同一個体のものであろう。右下顎 M3 は歯根が未分岐で、下内錘に咬耗が及んでいない。推定年齢は 4 ~ 5 歳程度の幼齡馬で、体高は 133.6cm である。

○ 5号馬 (第 42 表)

左右の下顎白歯 1 本ずつの出土で、出土時には歯は下顎に植立していたようである。4 号馬とは年齢的に大きな開きがあり、別個体である。11 歳前後の壯齡馬で、体高は不明である。

765a 号土坑 (3・4 号古墳周溝内)

○ 6号馬 (第 43 表)

大略ヒョウタン型の土坑からの出土で、左右の上顎白歯がほぼ完存状態で残り、牛田古墳群では唯一、本来の齒列を保ったまま取上げられたものである。咬合面は下に向くが、下顎の白歯は見当たらず、当初から下顎を欠いた状態で埋存されたものである。左 M3 と右 P4 はわずかに本来の齒列の位置からずれていた。保存状態は良好であるが、切歯を欠いている。破損・消失したのであろう。年齢は 10 歳前後、体高は 121.6cm と推定され、小型在来馬に相当する。

766b 号土坑 (2 号古墳周溝内)

○ 7号馬 (第 44・46 表)

細長い不規則な形状をした土坑内からの出土である。齒種判定できたのは、上顎白歯が左 3 本 (P3 又は P4、M1 又は M2、M3)、右 3 本 (P3 又は P4、M2、M3)、下顎白歯が右 1 本 (P3 又は P4) である。このほかにも右下顎第一切歯、齒種判定が困難な上顎白歯、下顎白歯が存在するが、同一個体のものと思われる。年齢は 9 ~ 10 歳、体高は 130.6cm と推定される。

1 号古墳周溝内

○ 8号馬 (第 45・48 表)

下顎の白歯は左が 2 本 (P2、P3)、右が 4 本 (P4、M1、M2、M3)、右上顎白歯 1 本 (P4) が確認された。すべて同一個体のものである。年齢は 16 ~ 17 歳程度の老齡馬で、本遺跡で最年長である。体高は 135 ~ 137cm で大きめの中型在来馬相当である。

2 号古墳北側周溝内

○ 9号馬

左上顎? 白歯と思われる白歯片など多数。数本分か。齒冠高 36.6 の壯齡馬で、体高は不明である。

○ 10号馬 (第 47 表)

左上顎 P2、右上顎 P3 又は P4、右上顎 M3 が確認される。9 歳前後の前期壯齡馬で、体高は小型在来馬相当と推定される。

2 号古墳西側周溝内

○ 11号馬

ほぼ 2 本分の右上顎白歯片。齒冠高 56.3+ で、咬耗が進んでなく、齒根は未分岐の幼齡馬である。体高を知る手がかりはない。

12 号馬とは年齢的には同一個体でも矛盾はないが、出土位置が 4m も離れていることから、別個体とした。

○ 12号馬

上顎臼歯 2 本分で、歯冠高はそれぞれ 46.0、45.0 である。未咬耗、歯根未分岐で、幼齡馬のものである。体高を知る手がかりはない。

#### 766c 号土坑 (2 号古墳周溝内)

##### ○ 13 号馬

独立した楕円形の範囲からの出土で、細片化した数 10 片の馬歯は歯種判定不可能であるが、他とは独立した楕円形 (1.6 × 1.2 m) の集中域からの出土していることで、別個体とした。年齢、体高とも不明である。

#### 766c 号土坑 (2 号古墳周溝内)

##### ○ 14 号馬 (第 45・48 表)

著しく分裂・破損しているが、右上顎臼歯 2 本 (P3、P4)、左上顎臼歯 1 本 (M3)、右下顎臼歯 1 本 (M3) を確認する。年齢は 5～6 歳程度の最前期壯齡馬で、体高は 133.4cm と推定される。

#### 764c 号土坑 (3・4 号古墳周溝内)

##### ○ 15 号馬

他の馬歯とはかなり離れた位置の出土である。10 数片に分裂した馬歯で、歯冠高 40.3+ を計測する。幼齡～最前期壯齡馬である。体高は不明。

#### 764c 号土坑 (3・4 号古墳周溝内)

##### ○ 16 号馬 (第 49 表)

左上顎 M1 ?、左上顎 M3 ? の出土で、歯冠高はそれぞれ 49.4、36.0 + である。他にもう 1 本分の歯のある可能性がある。7～6 歳の前期壯年期の個体と推定される。体高不明。

#### 6 号古墳 a 集積区

直径 2m の広楕円形の範囲の中に馬歯が散在している。2 個体分から成る。

##### ○ 17 号馬 (第 56 表)

左上顎臼歯片が少なくとも 5 本分、右上顎臼歯が 2 本分、下顎臼歯片も確認される。右上顎第三後臼歯の歯冠長 26.1、歯冠高は 62.6 で、この値から推定される馬齢は 4～5 歳で、体高は 134.2cm 程である。このほかの上顎臼歯の歯冠高は、29.0+、37.5+、56.3、56.0、53.6、73.0 などがあり、一個体として矛盾はない。

##### ○ 18 号馬 (第 54 表)

右下顎 P2、右下顎 P3、右下顎 M3 が確認される。歯冠高から年齢は 5～6 歳、体高は 137.1cm で、中型在来馬の大きい方に相当する。本遺跡で体高が最大の個体である。

#### 6 号古墳 b 集積区

1.5 × 2.0m の楕円形の狭い範囲内から出土している。2 個体分から成る。

##### ○ 19 号馬 (第 55 表)

左上顎 P2、右上顎 P3、左上顎 P4、左上顎 M3、右上顎 M3 などが確認され、歯冠高から年齢は 9 歳前後と推定される。体高は 123.5cm 程である。

##### ○ 20 号馬 (第 54 表)

右下顎 P3、右下顎 P4、右下顎 M.3 ? などが確認され。歯冠高から年齢は 10～11 歳程度と推定される。体高は 133.1cm 程である。狭い範囲からの出土であることで、19 号と 20 号は同一個体の上顎臼歯、下顎臼歯である可能性は否定しきれないが、3 歳程度の年齢差があると推定されるので、ここでは別個体として扱った。

#### 6 号古墳 c 集積区

##### ○ 21 号馬 (第 57 表)

左上顎 P2、左上顎 P4、左上顎 M3、右上顎 M3、左上顎 P4? などが確認される。他に細歯片多数。下顎歯は見当らあない。6 号馬と同じように当初から下顎を欠いた状態で埋存されたものであろう。6 歳程の前期壯齡馬で、体高は確かな数値を得られない。

#### 6 号古墳 d 集積区

3 個体から成る。22 号馬、23 号馬、25 号馬と呼ぶ。

○ 22 号馬 (第 50 表)

22 号馬は 5 本の右下顎臼歯が確認され、その内の 1 本は舌側歯冠高が 69.0 で咬耗が始まったばかりであり、右下顎 P4 と推定される歯は未咬耗である。3～4 歳前後の幼齡馬と推定される。歯冠長の測定できる歯はなく、体高不明である。

○ 23 号馬 (第 49・51・52 表)

23 号馬は右上顎臼歯 4 本分、下顎臼歯左が 5 本分、右が 4 本分確認できる。歯冠高から 7～6 歳程の前期壯齡馬である。3 本歯冠長の測定可能な歯があり、このうち下顎 P3 と上顎 M2 と推定される歯の歯冠長を用いて算出すると、141.2cm と 125.3cm の体高を得られ、平均 133.3cm である。

○ 24 号馬 (第 53 表)

24 号馬は 3 本の下顎臼歯が認められ、歯冠高は 11～12 歳程の後期壯齡馬であることを示す。歯冠長を計測できる臼歯がなく、体高は求められない。

6 号古墳 e 集積区

○ 25 号馬 (第 49 表)

左上顎 P3 及び P4 の可能性のある 2 本の歯と、上顎臼歯 2 本分の出土である。歯冠高が高く、それぞれ頰側が 61.4、69.4、53.0 +、63.6 + である。4～5 歳前後の幼齡馬である、体高は明らかでない。

6 号古墳 f 集積区

○ 26 号馬

馬歯の破損ははなはだしく、長径 3m の楕円形の範囲の中に散在する。上顎臼歯、下顎臼歯の存在が確認され、歯冠高から同一個体としても矛盾はない。右下顎 M3 の舌側歯冠高は 26.3mm、歯種不明の上顎臼歯の歯冠高は 27.0 である。11～12 歳程の後期壯齡馬である。体高を知ることはできない。

○ 27 号馬 (第 53 表)

左下顎の P3 又は P4 で、頰側歯冠高は 46.0 である。年齢は 6～7 歳と推定され、前期壯齡馬である。体高は不明である。

○ 28 号馬

左下顎乳前臼歯 3 本が認められ、そのうちの 1 本の歯冠長は 19.5 +、後内錘幅 4.5、doubleknot 長 12.5、頰側歯冠高 14.7 である。2.5 歳以下の幼齡馬と推定され、最年少の馬である。体高は不明である。

4. 調査結果 牛骨について

766b 号土坑 (2 号古墳周溝内)

○ 1 号牛 (第 58 表)

左下顎 M1、右下顎 M2、左下顎 M2、右上顎 M3 などが馬骨に混じって出土した。右上顎 M3 の歯根が未分岐であることや他の歯の歯冠高から幼齡牛と判断した。

6 号古墳 f 集積区付近

○ 2 号牛 (第 59 表)

左上顎 M2 が検出され、その歯冠高から幼齡牛と推定される。

6 号古墳 d 集積区

○ 3 号牛 (第 59 表)

右? M2 又は M3 が馬骨に混じって出土し、歯冠高から幼齡牛と判断した。

6 号古墳 b 集積区

○ 4 号牛 (第 59 表)

右下顎 M1 ?、右下顎 M2 ? と他に 2 本分の下顎臼歯片が認められる。馬骨に混じっての出土である。歯冠高は老齡牛であることを示す。

## 5. まとめ（第 60 表）

1. 年齢：年齢区分のわかっている 27 個体のうち、幼齡馬 10 頭（37.0%）、幼齡～壯齡 3 頭（11.1%）、前期壯齡馬 11 頭（40.7%）、後期壯齡馬 1 頭（3.7%）、壯齡馬 1 頭（3.7%）、老齡馬 1 頭（3.7%）である。すなわち年齢の若い馬がほとんどを占め、10 歳以下の年齢の個体の割合が 88.8%である。
2. 体高のわかっている 14 頭のうち小型馬 2 頭、小型～中型馬 2 頭、中型馬 10 頭である。すなわち 74%が中型馬、小型馬 14.3%である。
3. 当遺跡から出土した馬は概して年齢の若い、馬格の大きい個体であることがわかる。
4. 犬歯の検出がなかったため、雌雄の判別はできなかった。
5. 埋存状況：馬の臼歯が、上・下、左・右すべての歯種がそろって出土している例は確認されていない。一方で、765 号土坑の 6 号馬で見ると、明らかに下顎を欠いた状態で埋存している例もある。本遺跡では、ほとんどの個体が全歯ではなく、下顎歯を欠くとか、ある部分を欠いた状態で埋存している印象が強い。
6. 本遺跡では馬歯群の中に牛骨が 4 個体分共存していた。

## 謝辞（宮崎）

本遺跡出土の馬骨を紹介して下さった元前橋市文化財保護課の前原豊氏、藤岡市文化財保護課の関係各位、遺跡出土の馬歯に関する論文の複写を複数提供して下さった元太田市文化財保護課の宮田毅氏、以上の方々には心よりお礼申し上げます。

## 第 4 項 牛田古墳群の再利用—須恵器大甕祭祀と牛馬の祭祀—（文挾・宮崎）

牛田古墳群は造営を終了した後も、古墳の再利用が図られていることが判明しており、出土した牛馬の年代測定を行ったところ、概ね 8～9 世紀という年代測定の結果が得られた（第 145 図）。牛田廃寺の継続期間中においても古墳周溝で牛馬を使った祭祀を行っていた。

分析の結果、最大で馬 28 頭、牛 4 頭が存在したことが明らかとなった。10 歳以下の個体が全体の 88.8%と非常に多く、全身が埋設されたと考えられる個体も存在するが、ほとんどが歯のみの出土であり、祭祀には牛馬の一部を使用していた蓋然性が高い。若い個体が多いという分析結果は、古代の他遺跡でも指摘されている特徴であり [宮崎 1995・1996、中村 2022、植月 2011・2013]、牛田古墳群でも共通した様相が確認された。

牛田古墳群から出土した牛馬は多量であり、牛馬を飼養する生産域の存在が予測される。山梨県の馬骨出土遺跡の分析を行った植月学は、若獣の多出を生産域と馬の出荷という観点から、これらの遺跡を「大規模な生産地（牧）。官営工房を伴い、基準に満たない馬の処理・加工過程までを含むシステム。」 [植月 2011] と捉え、貢進や駅伝馬の基準に満たない幼齡馬を屠殺したためとの見解を示した。牛田古墳群でも若い個体が圧倒的に多く、このような解釈が当てはまる可能性があるが、「基準に満たない」という「基準」を実際の資料から推定するのは非常に困難である。ただ牛田古墳群から検出された馬の馬格は、当時としては馬格が良い中型馬であり、馬格が劣るため淘汰されたとは考えにくいように思われる。

牛馬を用いた祭祀の意味については、雨乞いの儀式が知られている。元々中国の習俗であるが、古代の日本でも行われていたことが、文献から判明している [河上 2005]。このような雨乞いの儀式は、古代だけでなく近現代まで行われていたことがわかっており [松井 1995、植田 2023]、遺跡から検出される牛馬骨についても雨乞いの儀式を想定する見解もある [中村 2022a・b]。

川除屋敷裏遺跡は神流川左岸の低地に位置する「計画村落」であり、牛田廃寺も「開発拠点型」の立地を示す。在地氏族が新たな耕地開発のために集落や寺院を造営した可能性が高く、農業と密接な関係性を有する。そのような場合、日々の天候は川除屋敷裏遺跡の人々にとって非常に重要な要素であり、牛馬骨を用いた祭祀によって雨を得ようと祈願したことは十分に考えられるだろう。

川除屋敷裏遺跡・牛田廃寺からは馬具が見つかっており、牛馬は祭祀に使うだけでなく、集落内で労働力としても使用していたことが想定される。牛は「奈良後期から平安初期における寺の経営において牛が重要な労働力」、「寺田における牛耕が身近な風景」〔藤本 2003〕と考えられており、寺を構成する重要な要素であった。馬についても同様に農耕に使用されていた可能性がある。

2・3・4号古墳においては、馬を埋設した土坑が複数検出されている。3号古墳前庭付近からは古墳祭祀に用いられた須恵器大甕が見つかり、調査では全て位置を記録し、取り上げを行った。整理作業において土器の接合を行い、接合関係を図示にしたところ、馬埋設土坑内で出土した須恵器片と前庭前で出土した須恵器片が接合することが判明した。土坑内で出土した須恵器は小片であるが、非常に遠い位置で出土し接合しており、極めて不自然な接合関係である。これは須恵器を用いた祭祀と牛馬を用いた祭祀が相互に関係性を持っており、近接した時間幅で実施されたことを傍証している。

これらの祭祀を行ったのは、近接する川除屋敷裏遺跡に居住していた人々であった可能性が非常に高い。この時期には牛田廃寺が存在し、川除屋敷裏遺跡の人々は何らかの形で牛田廃寺との関わりを持っていたと考えられる。寺院と仏教という新しい仕組みがこの地域に導入されたにもかかわらず、古墳という前代の象徴を使った祭祀を実施していたことは、なお根強く在地の信仰が残り、在地氏族もそれを利用していたことを表している。このような古墳の再利用については、「これは造墓集団が墓地において被葬者の埋葬と共に祖先と自らの帰属意識を強調する効果があり、氏族紐帯の再確認を行う場として機能していたことが考えられる。」〔小田 2006〕との指摘があり、牛田古墳群においても、古墳造営後も氏族の紐帯を再確認し補強する場及び牛馬を用いた祭祀を行う場として利用されていたのかもしれない。

## まとめ

牛田古墳群では古墳時代以後、牛田廃寺が造営された段階においても、古墳で須恵器大甕祭祀と同時期に牛馬を用いた祭祀を執行していたことが明らかとなった。検出された牛馬個体数は、最大で馬 28 個体、牛 4 個体と非常に多く、10歳以下の若い個体が大多数を占めていることが判明した。若い個体が多い要因については不明であるが、他遺跡の様相とも合致しており、古代に通有の現象と把握される。

川除屋敷裏遺跡及び牛田廃寺の集落展開や立地を見たとき、耕地開発のための「計画村落」であり「開発拠点型」の寺院であることが想定され、牛馬は耕地開発に用いられた可能性が高い。そのような牛馬は、開発の労働力としてだけでなく、祭祀の供物としても用いられたのだろう。

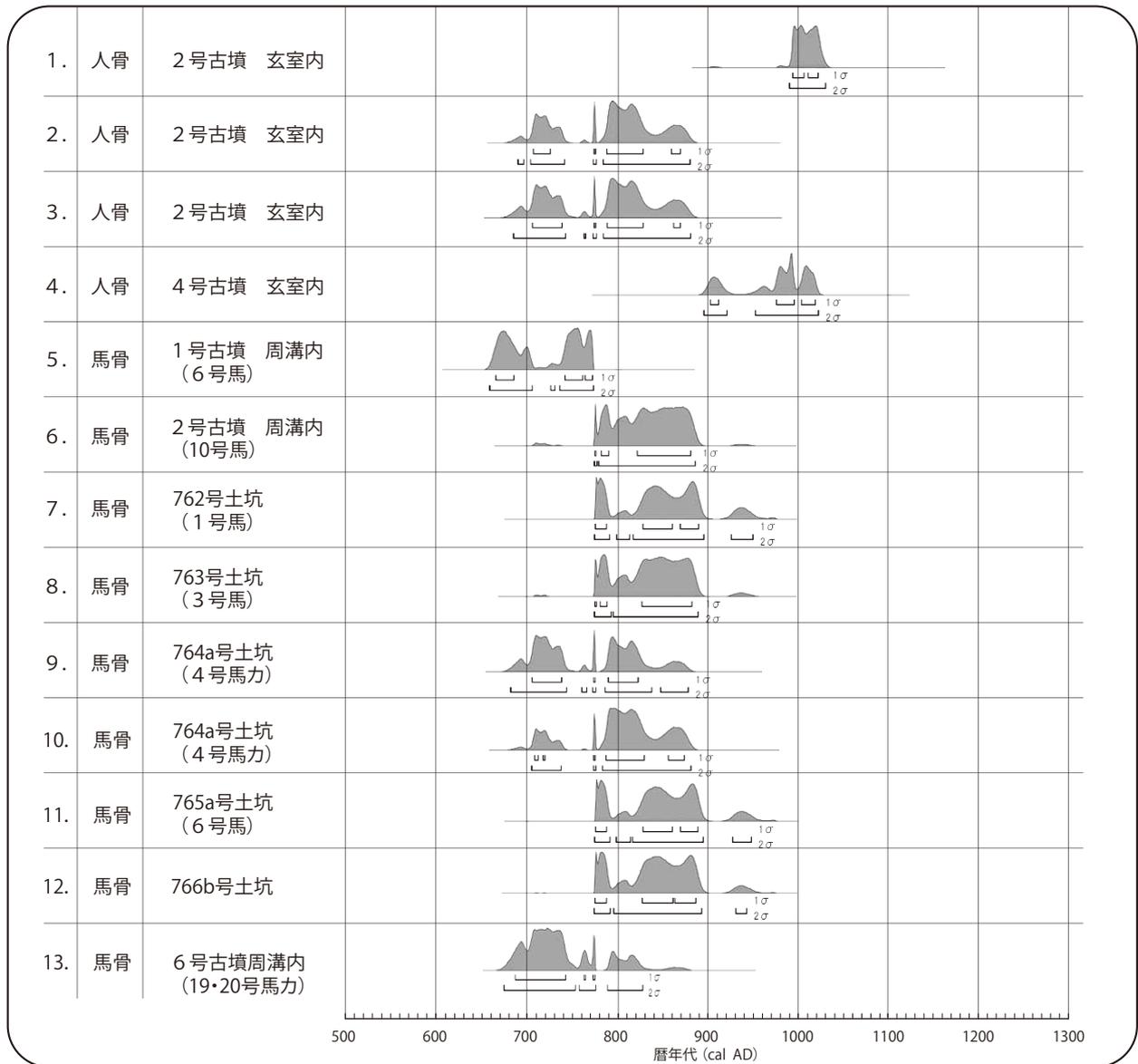
牛田古墳群で検出された馬は非常に多く、これらの馬を供給する生産地が近隣に存在することが予測される。神流川右岸の埼玉県側でも、神川町青柳古墳群 南塚原支群〔神川町教委 1996〕で、周溝内から馬骨が検出されており、牛田古墳群と同様の性格を持つ可能性が高い。また神流川右岸の本庄台地周辺では、古墳時代において馬歯骨・馬具・馬形製品の分布が集中しており、「児玉郡域の本庄台地周辺に馬飼養集団と施設(牧)の存在を想定したい。」〔山川 1996〕として、牧の存在が考えられている。古代には神川町に阿久原牧があったことが知られており、牛田古墳群の多量の馬骨についても近隣に生産地の存在を想定する必要があるだろう。藤岡市浄法寺八塩には八塩温泉があり、現在でも塩泉が湧出している。馬の飼育には塩が必要であり、内陸部の馬飼養についても塩泉の使用を想定しており〔平野 2021、栗島 2022〕、藤岡においても馬飼養の条件は整っていると言える。

ただし、牛田古墳群出土馬歯の炭素・ストロンチウム・酸素同位体分析を実施した結果（第6章第2節）、「牛田古墳群出土馬は少なくとも3つ以上の遺跡周辺域とは異なる産地から持ち込まれた複合集団である可能性が指摘できる。」との分析結果が得られた。出土した馬は、牛田古墳群周辺で飼養された馬ではない可能性が高く、当地での馬の獲得や飼育について複雑な様相が垣間見える。

生産域及び周辺遺跡との関係性と位置付けが今後の課題となる。

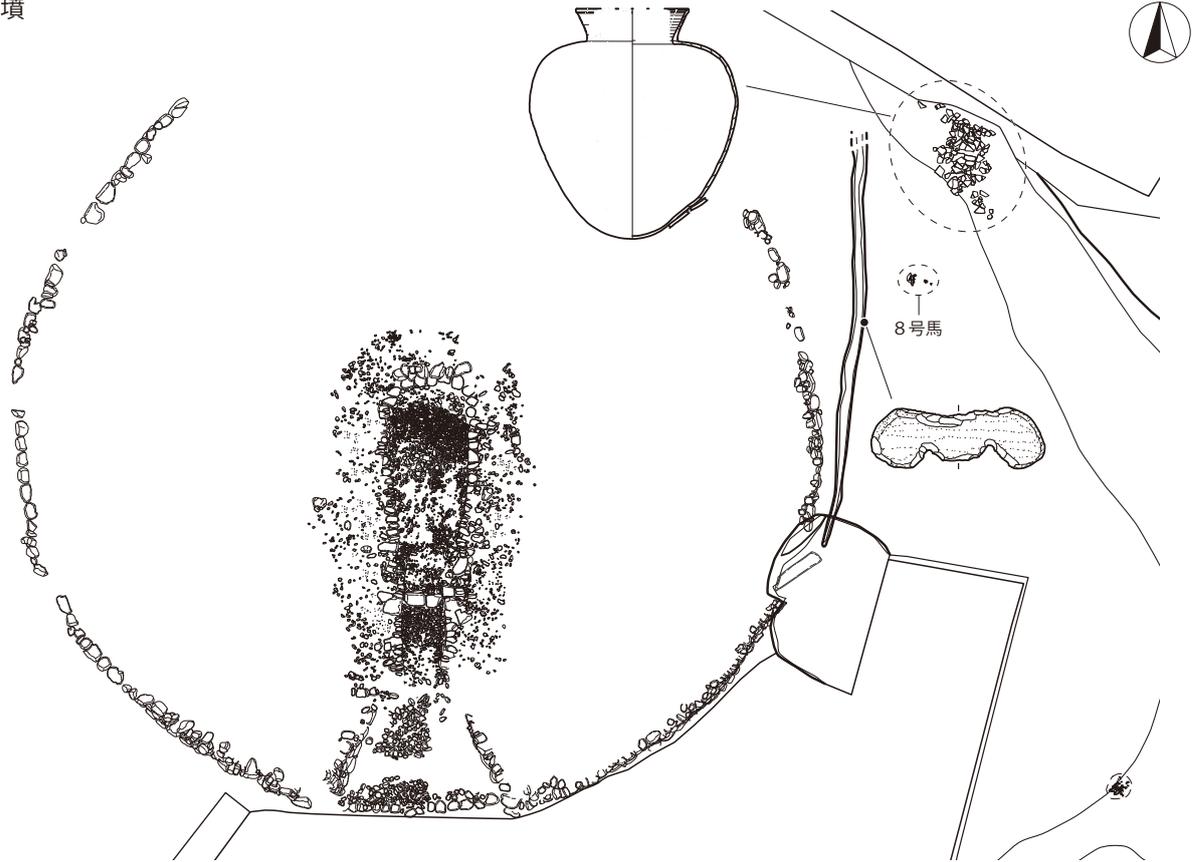
参考文献・引用文献

- 市川健夫 1981 『日本の馬と牛』東京書籍、246pp
- 植月 学 2011 「甲斐における平安・鎌倉時代の馬産—ウマ遺体の分析による検討—」『山梨県考古学協会誌』20：97-114
- 植月 学 2011 「出土馬歯計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28：1-22
- 植月 学 2013 「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納」『山梨県考古学会誌』22：170-182
- 植田 誠 2023 「庶民が信仰した宗教」『週刊朝日ムック 歴史道』29：68-73
- 岡部利雄・松本久喜・三村 一 1953 『日本在来馬に関する研究—特に北海道和種、木曾馬及び御崎馬について』日本学術振興会、209pp
- 加藤嘉太郎 1986 『家畜比較解剖図説—上巻』養賢堂、297PP
- 金子浩昌 1981 「第2号方形周溝墓西溝出土の家牛 (*Bos taurus*) 頭蓋」『伊血子貝塚遺跡』港区伊血子貝塚遺跡調査会・港区教育委員会、476-486
- 河上邦彦 2005 「飛鳥京の水まつり」『水と祭祀の考古学』学生社 261-275
- 栗島義明 2022 「塩泉をめぐる考古学—内陸部における塩分確保—」『利根川』44：26-56
- 群馬県藤岡市教育委員会 2023 『群馬県藤岡市牛田古墳群 (E32c 川除屋敷裏遺跡 12 区)』令和2年度県営農業競争力強化農地整備事業牛田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、イシイ印刷、182pp、PL1-49
- 児玉郡神川町教育委員会 1996 『青柳古墳群 南塚原支群Ⅱ』神川町教育委員会文化財調査報告第14集
- 須川章夫・月瀬 東 1977 『牛の解剖図説—骨学編』文栄堂 300pp
- 中村若枝 2022a 「平塚市新町遺跡第11地点の出土ウマを中心とした動物遺体について—古代・近世に見るウマをめぐる儀礼—」『新町遺跡第11地点発掘調査報告書』256-276、PL35-39
- 中村若枝 2022b 「付編 自然科学分析 第1節 平塚市構之内遺跡第7地点のウマ・ウシを中心とした動物遺体出土例について—古代のウマ・ウシを用いた儀礼とその作法の一端—」『構之内遺跡第7地点発掘調査報告書』103-113、PL6-7
- 西中川駿先生古希記念論集刊行会 (南九州縄文研究会) 2011 『遺跡から出土する動物たち—西中川駿先生古希記念論集—上巻』あすなる印刷、1-453
- 西中川駿先生古希記念論集刊行会 (南九州縄文研究会) 2011 『遺跡から出土する動物たち—西中川駿先生古希記念論集—下巻』あすなる印刷、456-970
- 西中川駿・幸村真由美・吉野文彦・塗木千恵子・松本光春 2015 「馬の臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学』32：1-6
- 西中川駿・松本光春 1991 『古代遺跡出土骨からみた我が国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』197pp
- 西本豊弘・松井 章 1999 『考古学と動物学—考古学と自然科学—②』同成社、210pp
- 野澤 謙 1992 「東亜と日本在来馬の起源、系統」『日本馬学会誌』3 (1)：1-18
- 野村晋一 1977 『概説馬学』西川書店、359pp
- 林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産学会報』28 (5)：301-306
- 林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部 学術報告書』6：146-156
- 林田重幸 1978 『日本在来馬の系統に関する研究』日本中央競馬会、178pp
- 平野 修 2021 「東国の牧遺構」『馬と古代社会』87-106
- 藤本 誠 2003 「『日本霊異記』における仏教施設と在地仏教」『史學』第72巻第1号 三田史学会 1-56
- 松井 章 1995 「古代 中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』61：55-71
- 宮崎重雄 1995 「城北遺跡の獣骨類」『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 150：766-776
- 宮崎重雄 1996 「付載 理化学分析 1. 元総社寺田遺跡Ⅵ区・Ⅶ区出土人骨・獣骨の分析」『元総社寺田遺跡Ⅲ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 234-250、PL92-102
- 山川守男 1996 「北武蔵の古墳時代馬飼養地域」『研究紀要』第12号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 95-112
- Eisenmann, V., Alberdi, M. T., De Giuli, C. and Staesche, U., 1981 Studying Fossil Horses. In Woodburne, N. and Sondaar, P., eds., Collected papers after the "New York International Hipparion Conference, 1981" Vol 1: Methodology. 71pp
- Levine, M. A. 1982 The use of crown height measurements and eruption -wear sequences to age horse teeth. In Wilson, B., Grigson, C. and Payne, S., eds., Ageing and sexing animal bones from archaeological sites (BAR International Series 109). Oxford: British Archaeological Reports. pp223-250

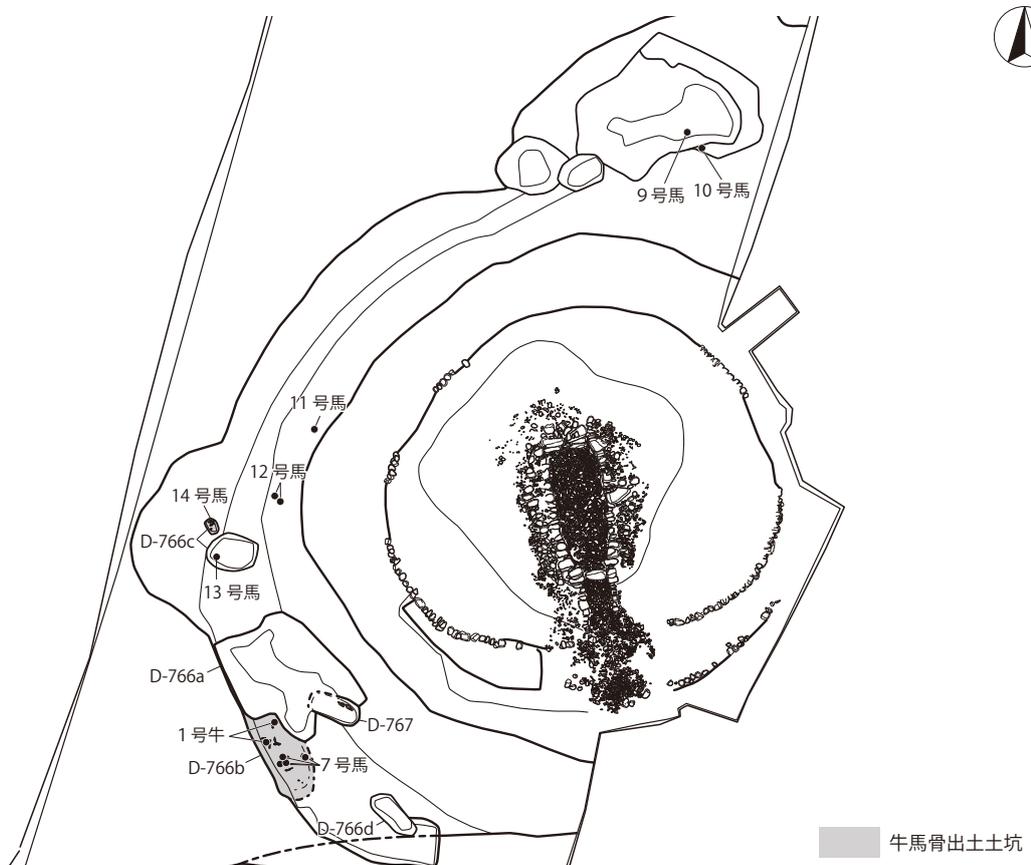


第 146 図 曆年較正年代

1号古墳



2号古墳



第 147 図 牛田古墳群 牛馬骨出土状況 (1)

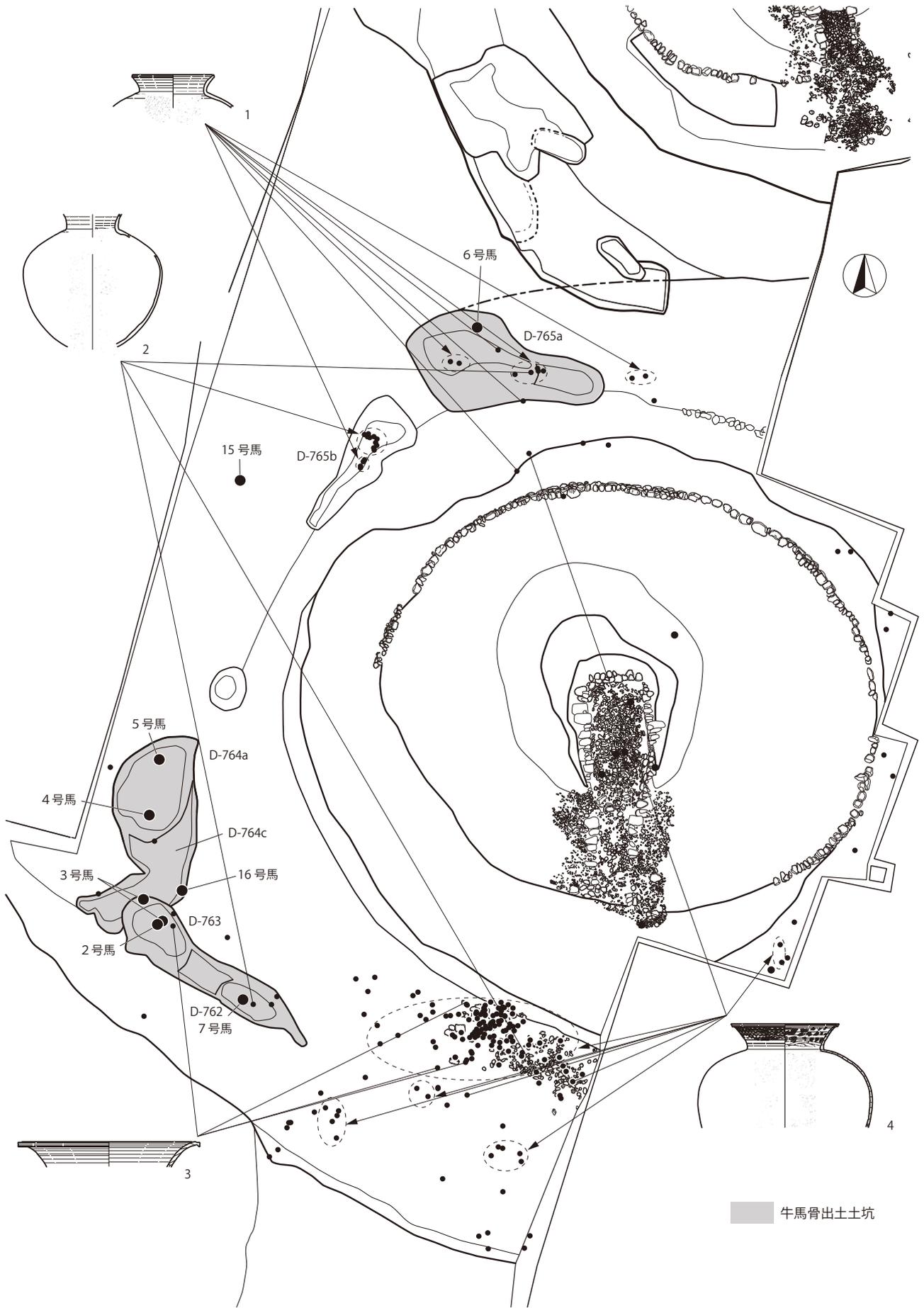
3号古墳



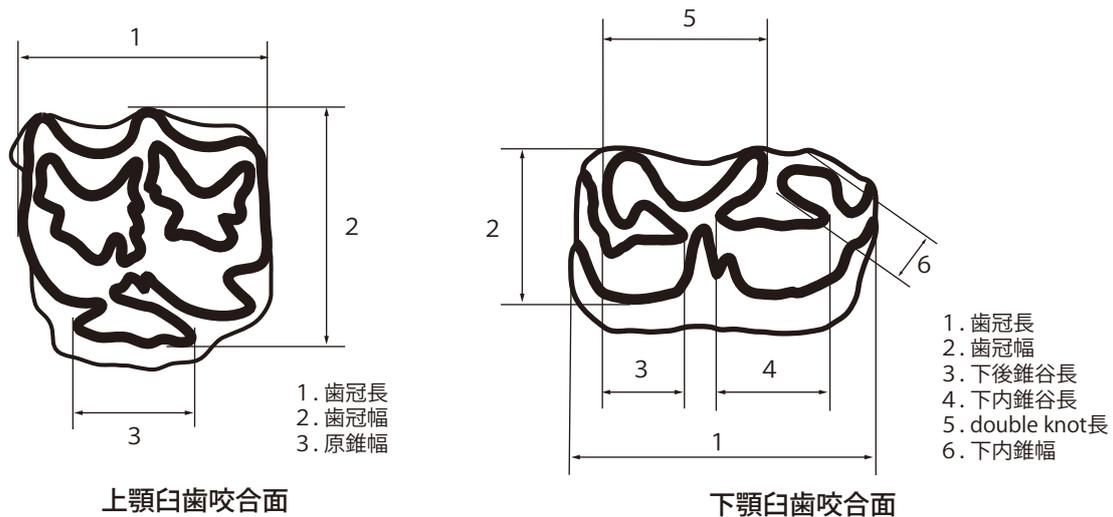
6号古墳



第148図 牛田古墳群 牛馬骨出土状況(2)



第 149 図 3 号古墳 牛馬埋設土坑と須恵器の接合関係



第 150 図 馬齒咬合面の計測部位 (Elsemann et al. (1988) を一部改変)

牛田古墳群出土の馬齒計測値

略語

P2：第二前臼齒 P3：第三前臼齒 P4：第四前臼齒

M1：第一後臼齒 M2：第二後臼齒 M3：第三後臼齒

齒冠高

B：頬側 C：中心 L：舌側 号数：馬番号 単位：mm

第 40 表 下顎臼齒

出土地点・資料 No.	762 号土坑 -No.1 (1 号馬)			
齒種	左 P3	左 P 4	左 M2	左 M3
齒冠長	27.6	26.8	23.4+	21.4+
齒冠幅	13.7	12.5		
齒冠高	C63.6	C71.0	C71.0	B64.0
doubleknot 長	14.8	12.7	12.0	
下内錐幅	6.0	5.4	4.0	

第 41 表 下顎臼齒

出土地点・資料 No.	763 号土坑 -No.1 (2 号馬)			
齒種	右 P2	右 P3	右 P4 ?	右 M2
齒冠長	28.3	26.8		22.0+
齒冠高	B44.0	B62.0	B71.5	B65.0
doubleknot 長		14.4	14.6	13.4

第 42 表 下顎臼齒

出土地点	763 号土坑			764a 号土坑		
資料 No.	No.9 (3 号馬)		No.2 (3 号馬)	No.24 (4 号馬)	No.31 (5 号馬)	
齒種	右 P3	右 P4	右 M1 ?	右 M3	右臼齒	左臼齒
齒冠長	26.1+	25.3	25.0	29.5	20.4+	19.4+
齒冠高	L52.0+	B38.6+	L65.0	L37.3+	L33.0	B34.3
下後錐谷長			9.9			
下内錐谷長			11.4			
doubleknot 長			14.8		14.0	13.8
下内錐幅			5.0			5.5

第 43 表 上顎臼歯

出土地点・資料 No.	765a 号土坑 -No.3 (6 号馬)					
歯種	左 P2	左 P3	左 P4	左 M1	左 M2	左 M3
歯冠長	33.4	26.7	25.3	22.4	21.7	24.3
歯冠幅			22.3			22.4
原錘幅						11.3
歯冠高	B36.0	B42.5	C38.0	B38.0	B40.3	C39.4
中附錘幅		3.8	4.2	3.0	3.5	4.0

第 44 表 上顎臼歯

出土地点	766b 号土坑 (7 号馬)					
資料 No.	No.9	No.10		No.11	No.12	
歯種	右 P3orP4	左 M1orM2	左 M3	左 P3orP4	右 M2	右 M3
歯冠長	22.2+	19.0+	29.0	27.1+1 ±	25.2	22.0+
歯冠高	L41.0	B40.0	B44.0	B35.2+	B50.0	B43.4
中附錘幅		4.0	4.4	4.7	4.1	4.1

第 45 表 下顎臼歯

出土地点・資料 No.	1 号古墳 - 周溝内 (8 号馬)						2 号古墳 -No.124 (14 号馬)
歯種	左 P2	左 P3	右 P4	右 M1	右 M2	右 M3	右 M3
歯冠長	28.8	26.6	25.2	22.2	24.3	31.1	34.6 ?
歯冠幅	13.8	14.8	15.6	14.2	12.4	11.3	19.6+
歯冠高	B16.3	B15.2	C23.4				C42.3+
下後錘谷長	4.1	8.6	7.9	4.8	4.5	4.2	7.6
下内錘谷長	15.7	9.5	8.6	6.4	7.5	9.7	9.7
doubleknot 長	13.1	16.9	15.1	11.7	12.1	11.7	11.7
下内錘幅	5.6	6.4	5.2	4.2			

第 46 表 下顎臼歯

出土地点	766 号土坑
資料 No.	No.16 (7 号馬)
歯種	右 P3 又は P4
歯冠遠心径	24.5
歯冠高	44.0
doubleknot 長	15.4
下内錘幅歯	5.7

第 47 表 上顎臼歯

出土地点・資料 No.	2 号古墳 -No.119 (10 号馬)			
歯種	左 P2	右 P3orP4	M1 ?	右 M3
歯冠長	29.4+	26.0	18.0+	23.0+
歯冠高	B30.4	B46.4	B39.7	B43.0
中附錘幅	4.8	3.9	5.1	4.7

第 48 表 上顎臼歯

出土地点	1 号古墳 (8 号馬)	2 号古墳 (14 号馬)		
資料 No.	周溝内	No.124	No.124	No.124
歯種	右 P4	右 P3	右 P4	左 M3
歯冠長	22.6	27.8+	25.3+	25.7
歯冠幅	23.3			26.9
原錘幅	12.4			11.1
歯冠高	B29.4	B53.3	B57.5	C48.1+
中附錘幅	3.6	5.7	5.8	4.5

第 49 表 上顎臼齒

出土地点	4号古墳	6号古墳		6号古墳			
資料 No.	No.5 (16号馬)	No.41 (25号馬)		No.46 (23号馬)			
齒種	左 M1	左 P3 ?	左 P4 ?	右 P3orP4	右 M1	右 M2	右 M3
齒冠長		24.0		25.5+	23.1+	24.0	27.0
齒冠高	B49.4	B61.4	B69.4	B51.7	B42.0	B53.0	B51.4
中附錘幅		5.0		5.5	3.2	4.4	5.0

第 50 表 下顎臼齒

出土地点	6号古墳				
資料 No.	No.45 (22号馬)		No.72 (22号馬)		
齒種	左 P4	左 M2	右 P3	右 P4	右 M2
齒冠長	26.6+	16.3+			21.2+
齒冠幅					10.0
齒冠高	B58.5	L69.0	L51.7+	B ? 70.4	B74.0
下後錘谷長					7.7
下内錘谷長					96.0
doubleknot 長			15.8	14.7	13.2
下内錘幅					3.7

第 51 表 下顎臼齒

出土地点・資料 No.	6号古墳 -No.46 (23号馬)			
齒種	左 P2	左 P3	左 P4	1 M1
齒冠長	29.6 + 1 ±	28.8	26.1+	20.7+
齒冠幅		15.5		
齒冠高	C39.0	C54.9	B ? 61.0	L38.0?
下後錘谷長		8.2	9.0	
下内錘谷長		13.0	12.0	
doubleknot 長		16.6	14.4	
下内錘幅		6.9	5.2	

第 52 表 下顎臼齒

出土地点・資料 No.	6号古墳 -No.46 (23号馬)			
齒種	右 P3	右 P4	右 M2	右 M3
齒冠長	20.4+	17.3+	23.0+	
齒冠高	L52.7	L62.0	L60.0	L59.0
下後錘谷長		8.1	7.7	
下内錘谷長	13.3		10.0	
doubleknot 長		14.9	12.5	
下内錘幅	6.6		4.0	

第 53 表 下顎臼齒

出土地点	6号古墳			
資料 No.	No.47 (24号馬)			No.5 (27号馬)
齒種	右 P3	右 P4	右 M1	左 P3orP4
齒冠長	16.0+	18.6+	23.9+	22.6+
齒冠高	33.3+	36.5	L28.5	L48.0
下後錘谷長		8.4	6.7	
下内錘谷長	11.0		7.2	
doubleknot 長		14.0	13.1	
下内錘幅	6.4		5.8	4.9

第 54 表 下顎臼歯

出土地点・資料 No.	6号古墳 -No.89 (18号馬)		6号古墳 -No.98 (20号馬)		
歯種	右 P2	右 P3	右 P 3	右 P4	右 M1
歯冠長	17.6+	28.0	18.2+	27.0	22.4+
歯冠高	L38.3		L27.0	C39.0	L37.0
下内錘谷長		11.6			
下内錘幅	5.6	6.1	6.0	6.1	4.8

第 55 表 上顎臼歯

出土地点	6号古墳				
資料 No.	No.103 (19号馬)		No.105 (19号馬)	No.107 (19号馬)	
歯種	左 P 2	右 P 3	左 P 3	右 M3	左 M3
歯冠長	19.0+	27.0	28.0+ 1 ±	26.0	24.1+
歯冠幅				13.0	
歯冠高	B38.0	B41.0	B47.4	B48.0	B47.0
中附錘幅		6.0	5.4	4.1	4.3

第 56 表 上顎臼歯

出土地点	6号古墳	
資料 No.	No.115 (17号馬)	No.120 (17号馬)
歯種	左 M1	右 M 3
歯冠長	23.9	26.1
歯冠幅		22.0
歯冠高	B61.0	C62.8
中附錘幅	4.5	5.5

第 57 表 上顎臼歯

出土地点	6号古墳				
資料 No.	No.133 (21号馬)				No.134 (21号馬)
歯種	左 P2	左 M3	右 P4	右 M3	左 P2
歯冠長	30.0+	14.0+	16.2+	14.0+	
歯冠高	B43.4	B54.0	B50.0	B48.4	B37.2
中附錘幅	5.7				5.3

第 58 表 牛歯計測値 1 (略語・単位は馬歯と同じ)

出土地点・資料 No.	766b号土坑 -No.6 (1号牛)				766号土坑 -No.2 (1号牛)
歯種	?下顎 P3	左下顎 M1	右下顎 M2	左下顎 M2	右上顎 M3
歯冠長	23.3+	27.0+	27.2+	27.1+	31.7
歯冠幅					20.3+
歯冠高	L17.1	L31.4+	L22.0+	B32.4	B29.3

第 59 表 牛歯計測値 2

出土地点	6号古墳			
資料 No.	No.40 (2号牛)	No.71 (3号牛)	No.110 (4号牛)	
歯種	左上顎 M2	右?下顎 M2orM3	右下顎 M1 ?	右下顎 M2 ?
歯冠長	32.0+		26.0+1 ±	31.0+
歯冠幅			14.0	
歯冠高	L45.0	L49.5	B15.0	B26.0

第 60 表 出土馬年齢・体高一覧

号馬	出土遺構	年齢(才)	年齢区分	体高 (cm)	在来馬の区分
1	762 号土坑 (3・4 号古墳)	5 土	幼齡馬	133.3	中型馬
2	763 号土坑 (3・4 号古墳)	5 土	幼齡馬	128.7	中型馬
3	763 号土坑 (3・4 号古墳)	3～4	幼齡馬	122.6	小～中型馬
4	764a 号土坑 (3・4 号古墳)	4～5	幼齡馬	133.8	中型馬
5	764a 号土坑 (3・4 号古墳)	11 土	後期壯齡馬	?	?
6	765a 号土坑 (3・4 号古墳)	10 土	前期壯齡馬	121.6	小型馬
7	766b 土坑 (2 号古墳)	9～10	前期壯齡馬	130.6	中型馬
8	1 号古墳周溝内	16～17	老齡馬	135～137	中型馬
9	2 号古墳 北側周溝内	?	壯齡馬	?	?
10	2 号古墳 北側周溝内	9 土	前期壯齡馬	121.6	小型馬
11	2 号古墳 西側周溝内	?	幼齡馬	?	?
12	2 号古墳 西側周溝内	?	幼齡馬	?	?
13	766c 号土坑 (2 号古墳)	?	?	?	?
14	766c 号古墳 (2 号古墳)	5～6	幼齡～壯齡	133.4	中型馬
15	764c 号古墳 (3・4 号古墳)		幼齡～壯齡	?	?
16	764c 号古墳 (3・4 号古墳)	7～8	前期壯齡馬	?	?
17	6 号古墳 a 集積区	4～5	幼齡馬	134.2	中型馬
18	6 号古墳 a 集積区	5～6	幼齡～壯齡	137.1	中型馬
19	6 号古墳 b 集積区	9 土	前期壯齡馬	123.5	小～中型馬
20	6 号古墳 b 集積区	10～11	前期壯齡馬	133.1	中型馬
21	6 号古墳 c 集積区	8 土	前期壯齡馬	?	?
22	6 号古墳 d 集積区	3～4	幼齡馬	?	?
23	6 号古墳 d 集積区	7～8	前期壯齡馬	133.3	中型馬
24	6 号古墳 d 集積区	11～12	前期壯齡馬	?	?
25	6 号古墳 e 集積区	4～5	幼齡馬	?	?
26	6 号古墳 f 集積区	11～12	前期壯齡馬	?	?
27	6 号古墳 f 集積区	7～8	前期壯齡馬	?	?
28	6 号古墳 f 集積区	～2.5	幼齡馬	?	?

# 第6章 自然科学分析

## 川除屋敷裏遺跡牛田古墳群の自然科学分析報告

株式会社 古環境研究所

### 第1節 放射性炭素年代測定

#### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である [中村 2003]。ここでは、川除屋敷裏遺跡牛田古墳群の年代を検討する目的で、加速器質量分析法 (AMS法) を用いて測定した。

#### 2. 試料と方法

測定試料は、牛田古墳群の2号古墳玄室内で出土した人骨 (歯) 1点と人骨 (焼骨) 2点、4号古墳玄室内で出土した人骨 (歯) 1点、1号古墳周溝内、2号古墳周溝内、D-762号土坑、D-763号土坑、D-764号土坑、D-765号土坑、D-766号土坑、6号古墳周溝内で出土した馬骨 (歯) 9点の計13点である。表1に測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。試料は、前処理・調整後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。

第61表 測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
1	2号古墳 玄室内	人骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
2	2号古墳 玄室内	人骨 (焼骨)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 サルフィックス処理	AMS
3	2号古墳 玄室内	人骨 (焼骨)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 サルフィックス処理	AMS
4	4号古墳 玄室内	人骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
5	1号古墳 周溝内 (6号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
6	2号古墳 周溝内 (10号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
7	762号土坑 (1号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
8	763号土坑 (3号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
9	764号土坑 (4号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
10	764a号土坑 (4号馬力)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
11	765a号土坑 (6号馬)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
12	766b号土坑	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS
13	6号古墳 周溝内 (19・20号馬力)	馬骨 (歯・エナメル質)	超音波、有機溶剤処理 (アセトン)、 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)	AMS

### 3. 結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第 62 表にこれらの結果を示す。

第 62 表 測定結果

出土位置	試料番号	測定 No. (PLD-)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (年 BP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP $\pm 1\sigma$ )	暦年代 (西暦)	
						1 $\sigma$ (68.27%確率)	2 $\sigma$ (95.45%確率)
2号古墳 玄室内	1	44099	-18.76 $\pm$ 0.10	1037 $\pm$ 20	1035 $\pm$ 20	995-1007 cal AD (36.93%) 1012-1022 cal AD (31.34%)	991-1030 cal AD (95.45%)
2号古墳 玄室内	2	44100	-21.59 $\pm$ 0.15	1232 $\pm$ 20	1230 $\pm$ 20	706-725 cal AD (15.57%) 773-775 cal AD (1.80%) 788-828 cal AD (45.09%) 859-869 cal AD (5.81%)	690-696 cal AD (1.24%) 703-741 cal AD (23.92%) 772-776 cal AD (2.30%) 784-880 cal AD (67.99%)
2号古墳 玄室内	3	44101	-23.83 $\pm$ 0.21	1235 $\pm$ 23	1235 $\pm$ 20	705-738 cal AD (25.01%) 773-775 cal AD (1.66%) 788-827 cal AD (37.83%) 861-868 cal AD (3.76%)	685-742 cal AD (32.59%) 762-764 cal AD (0.38%) 772-776 cal AD (2.30%) 783-880 cal AD (60.17%)
4号古墳 玄室内	4	44102	-18.93 $\pm$ 0.11	1071 $\pm$ 20	1070 $\pm$ 20	903-913 cal AD (10.31%) 976-996 cal AD (34.03%) 1004-1019 cal AD (23.93%)	897-922 cal AD (19.99%) 953-1023 cal AD (75.46%)
1号古墳 (6号馬)	5	44103	-14.89 $\pm$ 0.12	1308 $\pm$ 20	1310 $\pm$ 20	666-686 cal AD (27.67%) 742-762 cal AD (29.22%) 764-772 cal AD (11.38%)	660-706 cal AD (47.00%) 727-731 cal AD (1.18%) 737-773 cal AD (47.27%)
2号古墳 (10号馬)	6	44104	-12.08 $\pm$ 0.20	1199 $\pm$ 20	1200 $\pm$ 20	775-776 cal AD (1.16%) 782-790 cal AD (8.59%) 822-880 cal AD (58.52%)	774-777 cal AD (2.06%) 779-885 cal AD (93.39%)
D-762 (1号馬)	7	44105	-13.36 $\pm$ 0.17	1176 $\pm$ 20	1175 $\pm$ 20	775-787 cal AD (15.06%) 828-860 cal AD (32.23%) 869-889 cal AD (20.98%)	774-791 cal AD (17.11%) 799-813 cal AD (3.64%) 817-895 cal AD (67.12%) 925-949 cal AD (7.58%)
D-763 (3号馬)	8	44106	-14.59 $\pm$ 0.11	1191 $\pm$ 20	1190 $\pm$ 20	775-776 cal AD (1.34%) 780-788 cal AD (8.79%) 827-882 cal AD (58.14%)	774-793 cal AD (16.05%) 795-889 cal AD (79.40%)
D-764a (4号馬)	9	44107	-11.96 $\pm$ 0.11	1241 $\pm$ 20	1240 $\pm$ 20	705-738 cal AD (34.44%) 773-775 cal AD (1.75%) 790-822 cal AD (32.08%)	682-743 cal AD (44.69%) 760-765 cal AD (1.08%) 772-776 cal AD (2.53%) 786-837 cal AD (38.49%) 847-877 cal AD (8.66%)
D-764a (4号馬)	10	44108	-8.78 $\pm$ 0.14	1226 $\pm$ 19	1225 $\pm$ 20	709-712 cal AD (2.47%) 718-720 cal AD (1.58%) 773-775 cal AD (1.65%) 787-829 cal AD (50.13%) 855-873 cal AD (12.44%)	706-738 cal AD (14.62%) 773-776 cal AD (2.04%) 783-880 cal AD (78.79%)
D-765a (6号馬)	11	44109	-12.80 $\pm$ 0.16	1178 $\pm$ 20	1180 $\pm$ 20	775-787 cal AD (14.90%) 828-860 cal AD (33.20%) 869-888 cal AD (20.17%)	774-791 cal AD (17.14%) 798-814 cal AD (4.35%) 816-894 cal AD (68.15%) 927-947 cal AD (5.82%)
D-766b (7号馬)	12	44110	-14.51 $\pm$ 0.15	1182 $\pm$ 20	1180 $\pm$ 20	775-788 cal AD (13.57%) 827-861 cal AD (32.88%) 863-886 cal AD (21.82%)	774-792 cal AD (16.98%) 796-893 cal AD (75.77%) 930-942 cal AD (2.70%)
6号古墳 (19・20号 馬カ)	13	44111	-12.08 $\pm$ 0.25	1256 $\pm$ 20	1255 $\pm$ 20	686-742 cal AD (64.74%) 762-764 cal AD (1.34%) 772-774 cal AD (2.19%)	674-753 cal AD (71.51%) 757-775 cal AD (8.38%) 788-827 cal AD (15.55%)

#### 1) $\delta$ (デルタ) $^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

#### 2) 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 ( $\pm$ ) は  $1\sigma$  (シグマ) (68.27%確率) である。 $^{14}\text{C}$  年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

### 3) 暦年代 (Calendar Years)

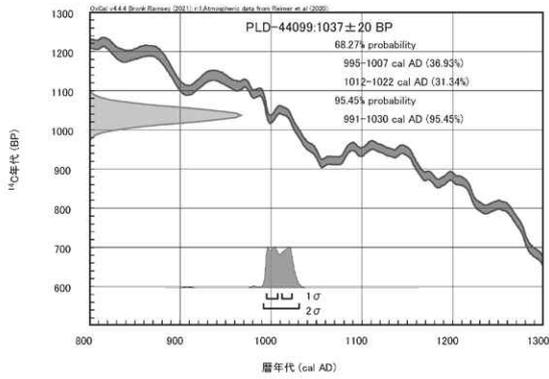
過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動および  $^{14}\text{C}$  の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な  $^{14}\text{C}$  測定値及びサンゴの U/Th(ウラン/トリウム)年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 20、較正プログラムは OxCal 4.4 である。

暦年代 (較正年代) は、 $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により  $1\sigma$  (68.27% 確率) と  $2\sigma$  (95.45% 確率) で表示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の  $1\sigma \cdot 2\sigma$  値が表記される場合もある。( ) 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

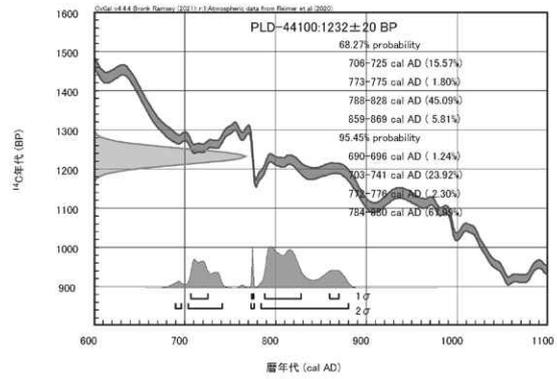
## 4. 所見

川除屋敷裏遺跡 D 地点牛田古墳群の年代を検討する目的で、出土した人骨や馬骨を対象として加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、2 号古墳玄室内で出土した人骨 (歯) (試料 1) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1035 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $991-1030$  cal AD (95.45%)、同じく人骨 (焼骨) (試料 2) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1230 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $690-696$  cal AD (1.24%)、 $703-741$  cal AD (23.92%)、 $772-776$  cal AD (2.30%)、 $784-880$  cal AD (67.99%)、同じく人骨 (焼骨) (試料 3) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1235 \pm 25$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $685-742$  cal AD (32.59%)、 $762-764$  cal AD (0.38%)、 $772-776$  cal AD (2.30%)、 $783-880$  cal AD (60.17%)、4 号古墳玄室内で出土した人骨 (歯) (試料 4) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1070 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $897-922$  cal AD (19.99%)、 $953-1023$  cal AD (75.46%)、1 号古墳周溝内で出土した馬骨 (歯) (試料 5) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1310 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $660-706$  cal AD (47.00%)、 $727-731$  cal AD (1.18%)、 $737-773$  cal AD (47.27%)、2 号古墳周溝内で出土した馬骨 (歯) (試料 6) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1200 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $774-777$  cal AD (2.06%)、 $779-885$  cal AD (93.39%)、D-762 号土坑で出土した馬骨 (歯) (試料 7) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1175 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $774-791$  cal AD (17.11%)、 $799-813$  cal AD (3.64%)、 $817-895$  cal AD (67.12%)、 $925-949$  cal AD (7.58%)、D-763 号土坑で出土した馬骨 (歯) (試料 8) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1190 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $774-793$  cal AD (16.05%)、 $795-889$  cal AD (79.40%)、D-764 号土坑で出土した馬骨 (歯) (試料 9) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1240 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $682-743$  cal AD (44.69%)、 $760-765$  cal AD (1.08%)、 $772-776$  cal AD (2.53%)、 $786-837$  cal AD (38.49%)、 $847-877$  cal AD (8.66%)、同じく馬骨 (歯) (試料 10) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1225 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $706-738$  cal AD (14.62%)、 $773-776$  cal AD (2.04%)、 $783-880$  cal AD (78.79%)、D-765 号土坑で出土した馬骨 (歯) (試料 11) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1180 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $774-791$  cal AD (17.14%)、 $798-814$  cal AD (4.35%)、 $816-894$  cal AD (68.15%)、 $927-947$  cal AD (5.82%)、D-766 号土坑で出土した馬骨 (歯) (試料 12) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1180 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $774-792$  cal AD (16.98%)、 $796-893$  cal AD (75.77%)、 $930-942$  cal AD (2.70%)、6 号古墳周溝内で出土した馬骨 (歯) (試料 13) は、補正  $^{14}\text{C}$  年代が  $1255 \pm 20$  年 BP、 $2\sigma$  の暦年較正值は  $674-753$  cal AD (71.51%)、 $757-775$  cal AD (8.38%)、 $788-827$  cal AD (15.55%) であった。

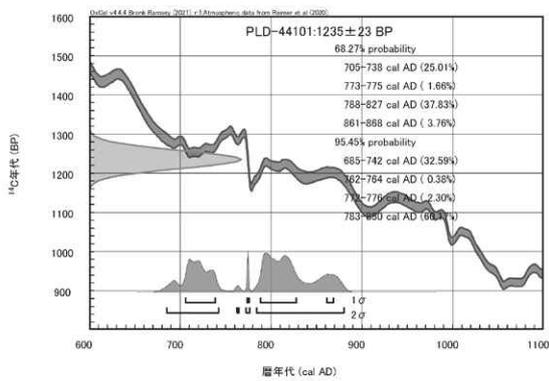
試料番号 1



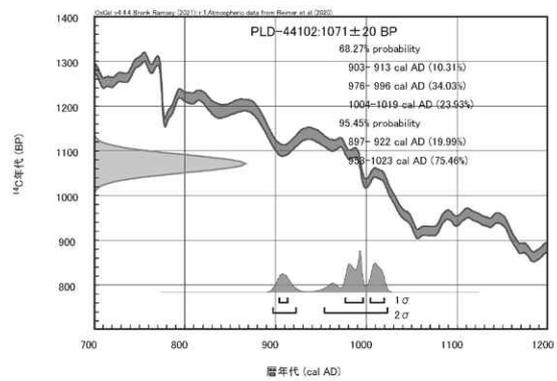
試料番号 2



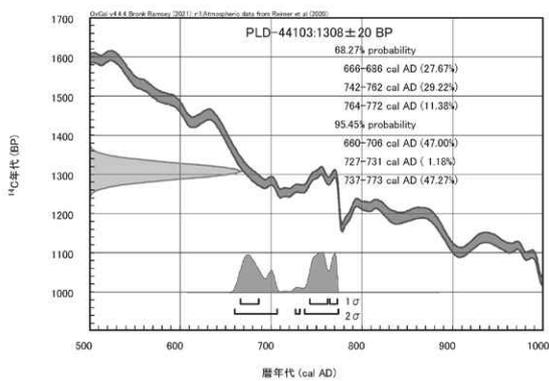
試料番号 3



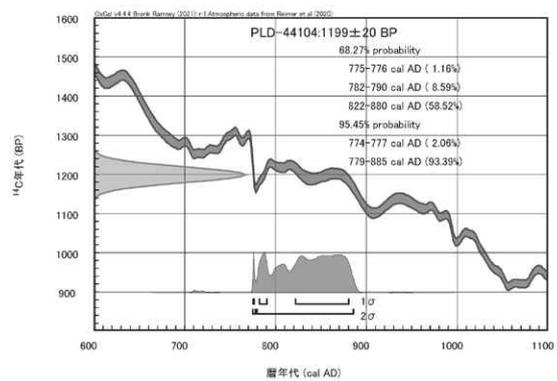
試料番号 4



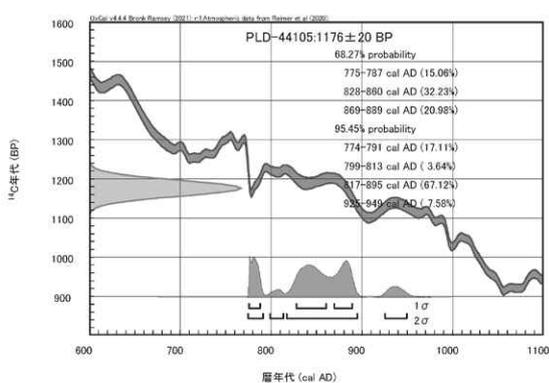
試料番号 5



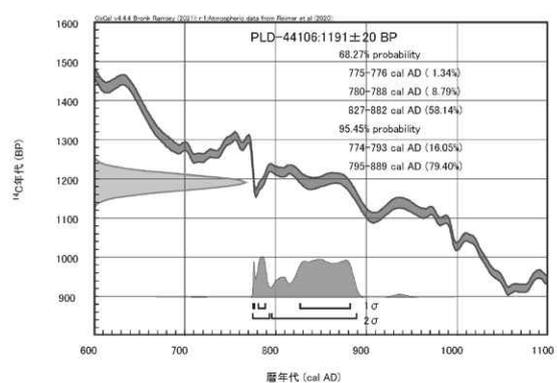
試料番号 6



試料番号 7

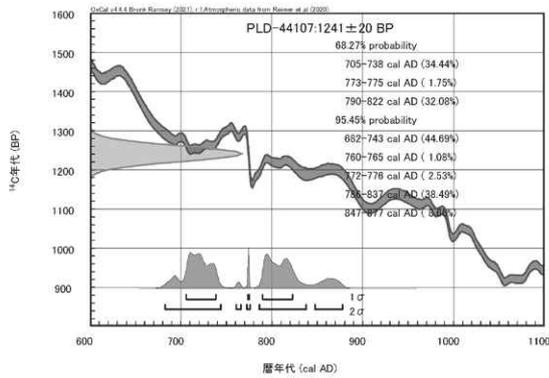


試料番号 8

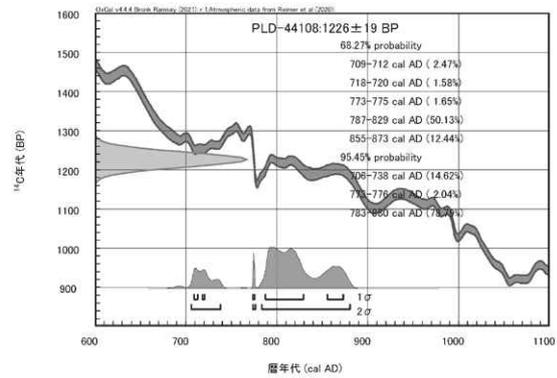


第 151 図 暦年較正結果 (1)

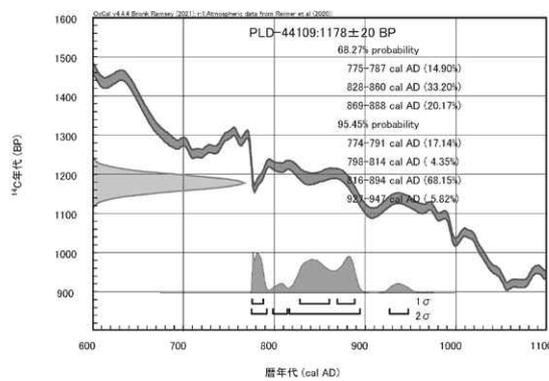
試料番号 9



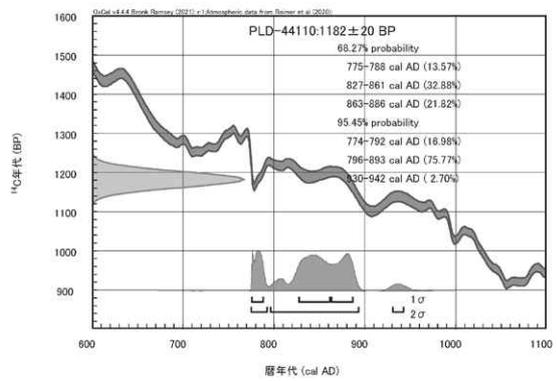
試料番号 10



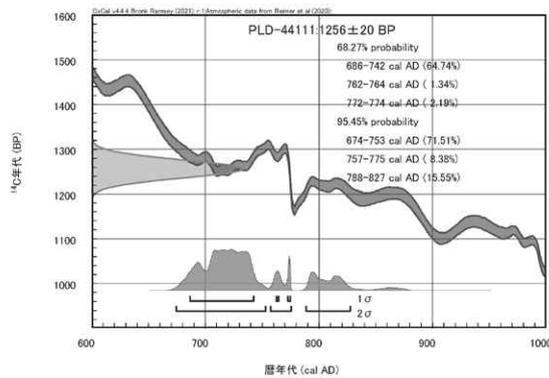
試料番号 11



試料番号 12



試料番号 13



第 152 図 暦年較正結果 (2)

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

Lanting, J. N., Aerts-Bijma, A. T. and van der Plicht (2001) Dating of Cremated Bones. Radiocarbon, 43 (2A), 249-254.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

## 第2節 牛田古墳群出土馬の歯エナメル質の同位体分析報告

金沢大学 覚張隆史  
株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

群馬県藤岡市の牛田古墳群から多数の馬遺存体が出土している。これらの馬遺存体の歯エナメル質の同位体分析を実施することで、その馬の生存時における生態の復元が可能である。馬の生態復元は、当時の人々がどの様に馬を飼育していたかを議論する上で、最も基礎的な情報といえる。特に、歯エナメル質は、歯が萌出・鈣質化する際に摂取していた食物及び飲み水に含まれる成分の情報を保持しており、歯エナメル質が形成される若い時期の生態情報（食性・出生地）を評価できる。具体的には、歯エナメル質の炭素同位体比は、摂取した植物の特徴を評価でき、ストロンチウム及び酸素同位体比は出生地（産地）の評価が可能である。本報告では、古墳時代における牛田古墳群の周辺域における人々の馬飼育文化を評価するために、同遺跡出土の馬歯エナメル質の炭素・ストロンチウム・酸素同位体分析を実施した。

### 2. 分析試料

群馬県藤岡市・牛田古墳群出土馬の歯エナメル質 10 点を分析に供した（第 63 表）。

第 63 表 分析試料の一覧表

遺跡名	発掘区	遺構名	取り上げNo.	分析番号	備考
川除屋敷裏遺跡 (牛田古墳群)	12 区	D-766 号土坑	No 9	KYY01	2 号古墳周溝
		K-6 号古墳	No97	KYY02	周溝内
		D-762 号土坑	No1	KYY03	
		K-2 号古墳	No119	KYY04	周溝内北側
		D-763 号土坑	No1	KYY05	
		D-764a 号土坑	No31	KYY06	3 号古墳周溝内
		D-764c 号土坑	No1	KYY07	3 号古墳周溝内
		D-765a 号土坑	No3	KYY08	完形下顎骨
		1 号古墳	No328	KYY09	周溝内
		6 号古墳	No46	KYY10	

### 3. 分析方法

#### (1) 歯エナメル質の採取及び前処理

歯エナメル質の同位体分析は Balasse (2002) および Hoppe et al. (2003) に基づいて実施した。初めに、同位体分析用の歯エナメル質粉末 10~15mg は、臼歯の舌側および頬側から、工作用ドリルとタンゲステン鋼の先端ツール (JET CARBIDE BURS HP2, SHOFU) を用いて採取した。埋没時において土壌から歯エナメル質へ沈着した汚染元素の影響を低減させるために、歯エナメル質の洗浄を実施した。採取したエナメル質粉末は、2.5% NaOCl に 4℃ 下で 24 時間反応させ、超純水で中性に戻した。次に、1ml 0.1M 酢酸バッファーを加え、攪拌・遠心分離した後に、上清を除去し、この工程を 12 回繰返した。反応後に超純水で中性に戻し、60℃オープンにて 2 日間乾燥させ、洗浄済みの歯エナメル質粉末を得た。

歯エナメル質に含まれるストロンチウム (Sr) を精製するために、アフィニティクロマトグラフィーによるストロンチウムの分離・精製を実施した (Richards et al. 2008)。Sr 精製の専用カラムに Sr-Spec 樹脂を充填し、超純水および 3.5M HNO<sub>3</sub> で Sr-Spec 樹脂をコンディショニングした。洗浄した歯エナメル質粉末約 3mg を 3.5M HNO<sub>3</sub> で溶解し、コンディショニングした Sr カラムに注いた。次に、100 $\mu$ l 3.5M HNO<sub>3</sub> を加えて流し切り、これを 3 回繰返した。300 $\mu$ l 3.5M HNO<sub>3</sub> を加えて流し切り、500 $\mu$ l 7.5M HNO<sub>3</sub> を流し切った。最後に、Sr 精製溶液回収用のチューブを Sr カラム下にセットし、1800 $\mu$ l 0.05M HNO<sub>3</sub> を Sr カラムに加注し、Sr 精製溶液を得た。

(2) ストロンチウム同位体比測定

Sr 精製溶液の Sr 同位体比 ( $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ) は、マルチコレクター型誘導プラズマ同位体比質量分析計 (MC-ICP-MS, NEPTUNE, Thermo Fisher Scientific) を用いて測定した。ストロンチウム同位体比は  $^{88}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$  の自然存在比 (8.375209) で規格化し、国際標準物質の NBS987 ( $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr} = 0.70125$ ) で補正し算出した。Sr 同位体比の測定精度は  $\pm 0.00001$  以下であった。

(3) 炭素・酸素同位体比測定

洗浄した歯エナメル質粉末約 0.5~0.7mg を用いて、炭酸塩の炭素・酸素同位体比測定を実施した。炭素・酸素同位体比の測定は、ガスベンチ型 - 同位体比質量分析計 (GasBench-IRMS, Thermo Fisher Scientific) を用いて実施した。炭素同位体比と酸素同位体比の標準物質はともに V-PDB を基準とした。両安定同位体比の測定時の標準物質は、国際標準物質の NBS19 ( $\delta^{13}\text{C} = 1.95\%$ ,  $\delta^{18}\text{O} = -2.2\%$ ) を用い補正を行った。本分析における両安定同位体比の測定精度は標準偏差  $\pm 0.1\%$  以下であった。

4. 分析結果及び考察

(1) 歯エナメル質の炭素・酸素同位体分析

歯エナメル質の炭素同位体比は、 $-10.4\%$  ~  $-7.3\%$  の範囲を示した (第 64 表)。歯エナメル質の炭素同位体比が、 $-8\%$  以下だと C3 植物食者、 $-8\%$  ~  $-2\%$  だと C3/C4 中間食者、 $-2\%$  以上だと C4 植物食者と識別される (Cerling & Harris 1999)。Cerling & Harris (1999) の区分に基づくと、KYY01、KYY04、KYY05、KYY06、KYY10 の 5 個体は C3 植物食者に、KYY02、KYY03、KYY07、KYY08、KYY09 の残り 5 個体は C3/C4 植物食者に分類される。出土地点がそれぞれ異なるために、それぞれの歯エナメル質は異なる個体から得られている同位体データであると仮定した場合、食性が大きく異なる 2 つの集団が同一遺跡から出土していたといえる (第 153 図)。後者の集団は C4 植物の中でも栽培植物のアワなどの雑穀類を給餌されていたか、野生種であるススキなどを摂取していた可能性が考えられる。

また、歯エナメル質の酸素同位体比は、 $-10.2\%$  ~  $-6.0\%$  の範囲を示した (第 64 表)。同一地域に生息していた場合、約  $2\%$  の酸素同位体比の範囲を示すが、分析結果では  $4\%$  以上と高い多様性を示している。この結果は、炭素同位体比の結果から、食性が異なる 2 集団の存在が示唆されたが、酸素同位体比の値はこれらの 2 集団間で有意な差がなかった (第 153 図)。これは、同一産地において、同じ食性を持った集団がいたというよりも、複数の産地で多様な餌の給餌形態を取っていたと推察される。

第 64 表 牛田古墳群出土馬の

酸素・炭素同位体比

分析番号	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{18}\text{O}$
KYY01	-9.7	-8.8
KYY02	-7.4	-10.2
KYY03	-7.4	-6.6
KYY04	-9.4	-6.2
KYY05	-9.4	-6.7
KYY06	-10.3	-6.7
KYY07	-7.7	-6.0
KYY08	-7.5	-8.1
KYY09	-7.6	-6.9
KYY10	-10.1	-6.7

(2) 歯エナメル質のストロンチウム同位体分析

歯エナメル質のストロンチウム同位体比は、0.705655 ~ 0.709620 の範囲を示した (第 65 表)。また、移入個体の同定のために測定した遺跡周辺域の植物のストロンチウム同位体比は、0.7065 ~ 0.7080 の範囲を示したことから、この範囲から逸脱した KYY01、KYY10 は移入個体である可能性が考えられる。KYY01 は 0.705 と非常に低いストロンチウム同位体比を示したことから、ストロンチウム同位体比が低い傾向にある火山性の地質帯で育った馬が持ち込まれた可能性が考えられる。一方、KYY10 は非常に高いストロンチウム同位体比を示したことから、ストロンチウム同位

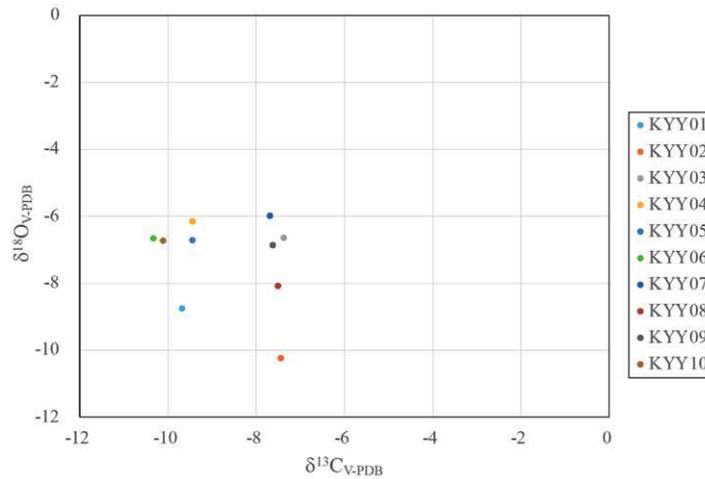
第 65 表 牛田古墳群出土馬の

ストロンチウム同位体比

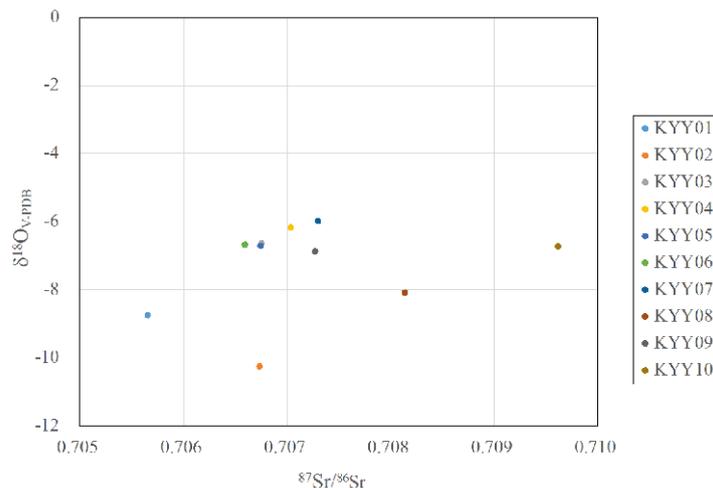
分析番号	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	std err
KYY01	0.705655	0.000004
KYY02	0.706736	0.000004
KYY03	0.706754	0.000006
KYY04	0.707035	0.000005
KYY05	0.706745	0.000004
KYY06	0.706596	0.000004
KYY07	0.707301	0.000005
KYY08	0.708140	0.000005
KYY09	0.707269	0.000006
KYY10	0.709620	0.000003

体比が高い傾向にある北部の古い地質帯で生息していた馬が持ち込まれた可能性が考えられる。一方で、KYY02は、酸素同位体比を合わせてみると、ストロンチウム同位体比では遺跡周辺域のストロンチウム同位体比の範囲ではあるものの、他の個体と比べて非常に低い酸素同位体比を示している（第 154 図）。ストロンチウム同位体比の近似した地域は遺跡周辺域以外にも遠方に分布するために、ストロンチウム同位体比だけでは別集団として識別できなかったと思われる。

この様に、炭素・酸素・ストロンチウム同位体比のデータを合わせて解釈すると、牛田古墳群出土馬は少なくとも 3 つ以上の遺跡周辺域とは異なる産地から持ち込まれた複合集団である可能性が指摘できる。



第 153 図 歯エナメル質の炭素・酸素同位体比分布



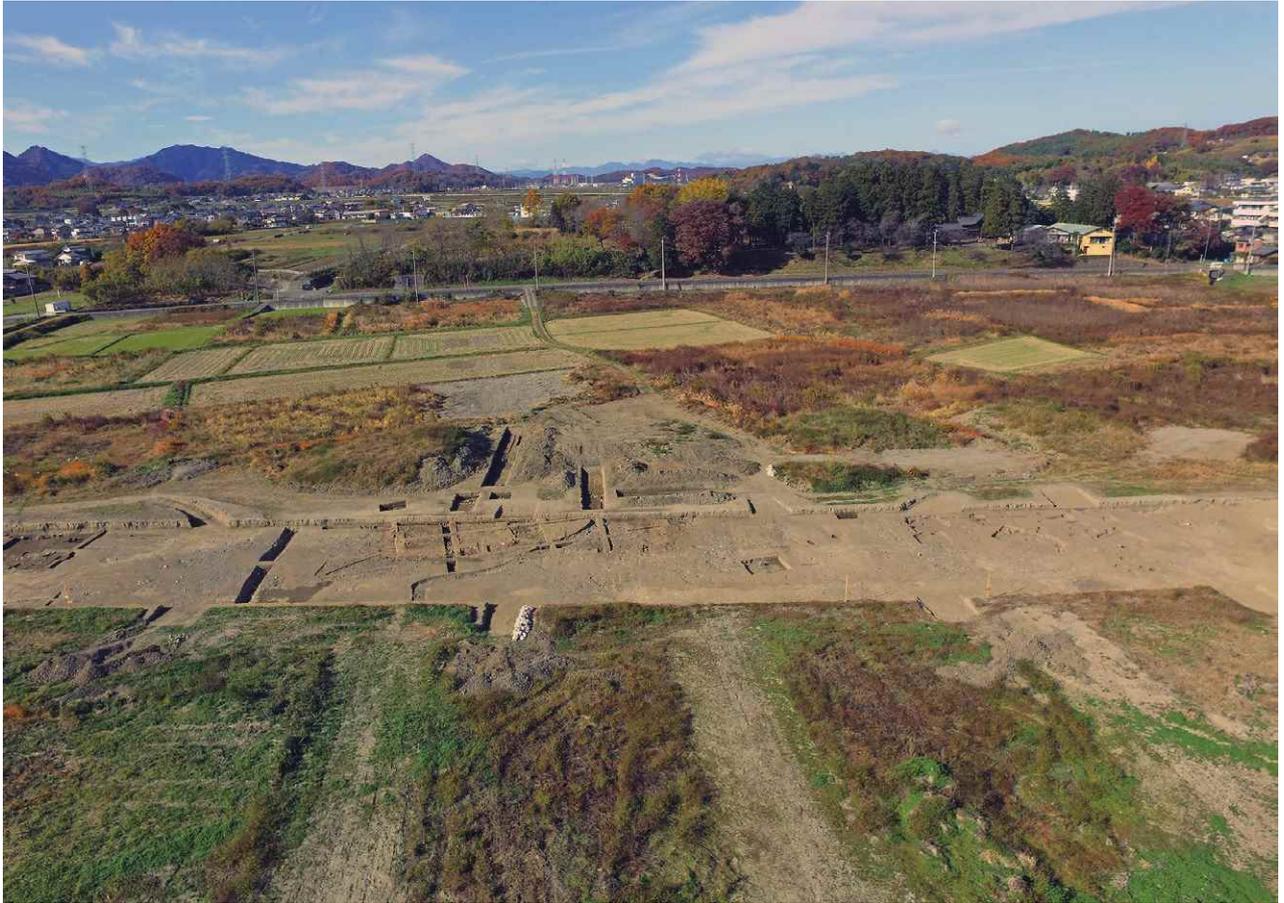
第 154 図 歯エナメル質のストロンチウム・酸素同位体比分布

#### 参考文献

- Balasse, M. (2002) Reconstructing Dietary and Environmental History from Enamel Isotopic Analysis: Time Resolution of Intra-tooth Sequential Sampling, *International Journal of Osteoarchaeology*, 12, pp. 155-165.
- Cerling, T. E., Harris, J. M. (1999) Carbon isotope fractionation between diet and bioapatite in ungulate mammals and implications for ecological and paleoecological studies, *Oecologia*, 120, pp. 347-363
- Hoppe, K., P. L. Koch and T. T. Frutani (2003) *International Journal of Osteoarchaeology*, 13, pp. 20-28.
- Richards, M., K. Harvati, V. Grimes, C. Smith, T. Smith, J. Hublin, P. Karkanas, E. Panagopoulou. (2008) Strontium isotope evidence of Neanderthal mobility at the site of Lakonis, Greece using laser-ablation PIMMS. *Journal of Archaeological Science*, 35, 1251-1256.

# 写真図版





1区 空撮（東から）



1区 空撮（西から）

写真図版 2



1区 空撮（垂直）



牛田廃寺跡 調査前現況



牛田廃寺跡 調査前検出状況



牛田廃寺跡 調査前検出状況



牛田廃寺跡 調査前検出状況



牛田廃寺跡 調査前検出状況



牛田廃寺跡 1号建物跡 検出状況（南から）



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮（北から）



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮

写真図版 4



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 1号建物跡 空撮



牛田廃寺跡 空撮 (トレンチ8)



1区 空撮



1区 空撮



1区 空撮



1区 空撮



牛田廃寺跡 瓦積基壇上面検出



1号建物跡 瓦積基壇上面・黄色粘土検出



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 南側軒丸瓦検出状況

写真図版 6



1号建物跡 南側瓦検出状況



1号建物跡 検出状況



1号建物跡 北東側瓦検出状況



1号建物跡 北側瓦検出状況



1号建物跡 北側瓦検出状況



1号建物跡 北側瓦検出状況



1号建物跡 東側瓦検出状況



1号建物跡 鉄釘出土状況



1号建物跡 東側瓦検出状況



1号建物跡 東側瓦出土状況



1号建物跡 西壁北端断面



1号建物跡 西壁南端断面



1号建物跡 西壁南端断面



1号建物跡 西壁南端軒丸瓦出土状況



1号建物跡 西壁南端軒丸瓦出土状況



1号建物跡 南側軒丸瓦・文字瓦検出状況

写真図版 8



1号建物跡 南側軒丸瓦・文字瓦検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇検出状況



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大

写真図版 10



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



1号建物跡 瓦積基壇拡大



牛田廃寺跡 調査終了時（南から）



牛田廃寺跡 調査終了時（東から）



1号建物跡 基壇外装抜き取り痕



1号建物跡 南北セクション版築断面



1号建物跡 南北セクション版築断面



1号建物跡 南北セクション版築断面



1号建物跡 東西セクション版築断面



1号建物跡 雨落ち溝検出状況



1号整地土 土層断面



1号整地土内 軒丸瓦出土状況

写真図版 12



トレンチ8



トレンチ8



トレンチ8



トレンチ9・14



トレンチ9・14 3号溝検出状況



トレンチ9・14



トレンチ9・14 3号溝立ち上がり



トレンチ10・11・12



トレンチ 10・11・12



トレンチ 13



トレンチ 13



トレンチ 13



トレンチ 13



トレンチ 13



トレンチ 15



トレンチ 15

写真図版 14



トレンチ 15・16・17



トレンチ 15・16・17



トレンチ 19



トレンチ 19



トレンチ 20



トレンチ 20



トレンチ 22



59号住居跡 完掘



60A・B号住居跡 遺物出土状況（西から）



60A号住居跡 カマド遺物出土状況（西から）



60A号住居跡 カマド完掘



60A・B号住居跡 完掘（東から）



61号住居跡 遺物出土状況（西から）



61号住居跡 カマド検出状況（西から）



61号住居跡 遺物出土状況（西から）



61号住居跡 カマド検出状況（西から）



61号住居跡 カマド検出 (西から)



61号住居跡 カマド検出 (西から)



61号住居跡 カマド検出



61号住居跡 カマド文字瓦



61号住居跡 完掘



62号住居跡 遺物出土状況



62号住居跡 完掘 (東から)



62・63号住居跡 完掘 (西から)



62号住居跡 カマド検出状況



71号住居跡



72号住居跡 遺物出土状況



72号住居跡 遺物出土状況



72号住居跡 遺物出土状況



75号住居跡 完掘（東から）



76号住居跡 礫出土状況



76号住居跡 礫出土状況



76号住居跡 遺物出土状況



85号住居跡 カマド検出状況



85号住居跡 カマド完掘



85号住居跡 カマド完掘



86号住居跡 遺物出土状況 (南から)



83・84号土坑 完掘 (東から)



95号土坑遺物 出土状況 (西から)



95号土坑 遺物出土状況



95号土坑 遺物出土状況



95号土坑 完掘（東から）



96号土坑 完掘（東から）



106・107・108号土坑 完掘（西から）



110～116号土坑 完掘（西から）



117～125号土坑 完掘（西から）



126号土坑 遺物出土状況



2号溝 東壁セクション（東から）



2号溝 完掘



3号溝



3号溝 東壁セクション (西から)



牛田廃寺跡 調査風景



牛田廃寺跡 作業風景



牛田廃寺跡 作業風景



牛田廃寺跡 埋め戻し風景



牛田廃寺跡 埋め戻し風景

軒丸瓦 A1 類 (1)



軒丸瓦 A1 類 (1)

写真図版 22

軒丸瓦 A1 類 (2)

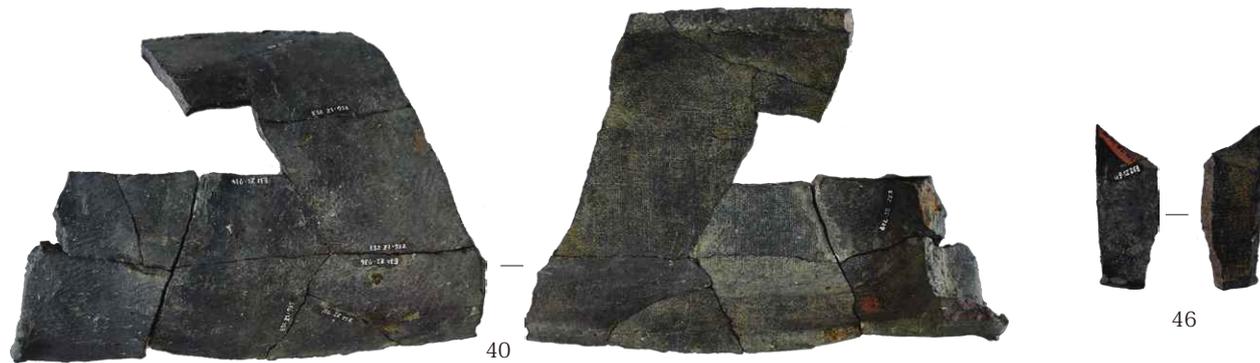


軒丸瓦 A2 類 (1)



軒丸瓦 A1 類 (2)・軒丸瓦 A2 類 (1)

軒丸瓦 A2 類 (2)



軒丸瓦 B 類



軒丸瓦 C 類



軒丸瓦 D 類 (1)



軒丸瓦 A2 類 (2)・軒丸瓦 B 類・軒丸瓦 C 類・軒丸瓦 D 類 (1)

写真図版 24

軒丸瓦 D 類 (2)



0 10cm 1:4

軒平瓦 A 類 (1)



58



59



0 10cm 1:4

軒平瓦 A 類 (1)

写真図版 26

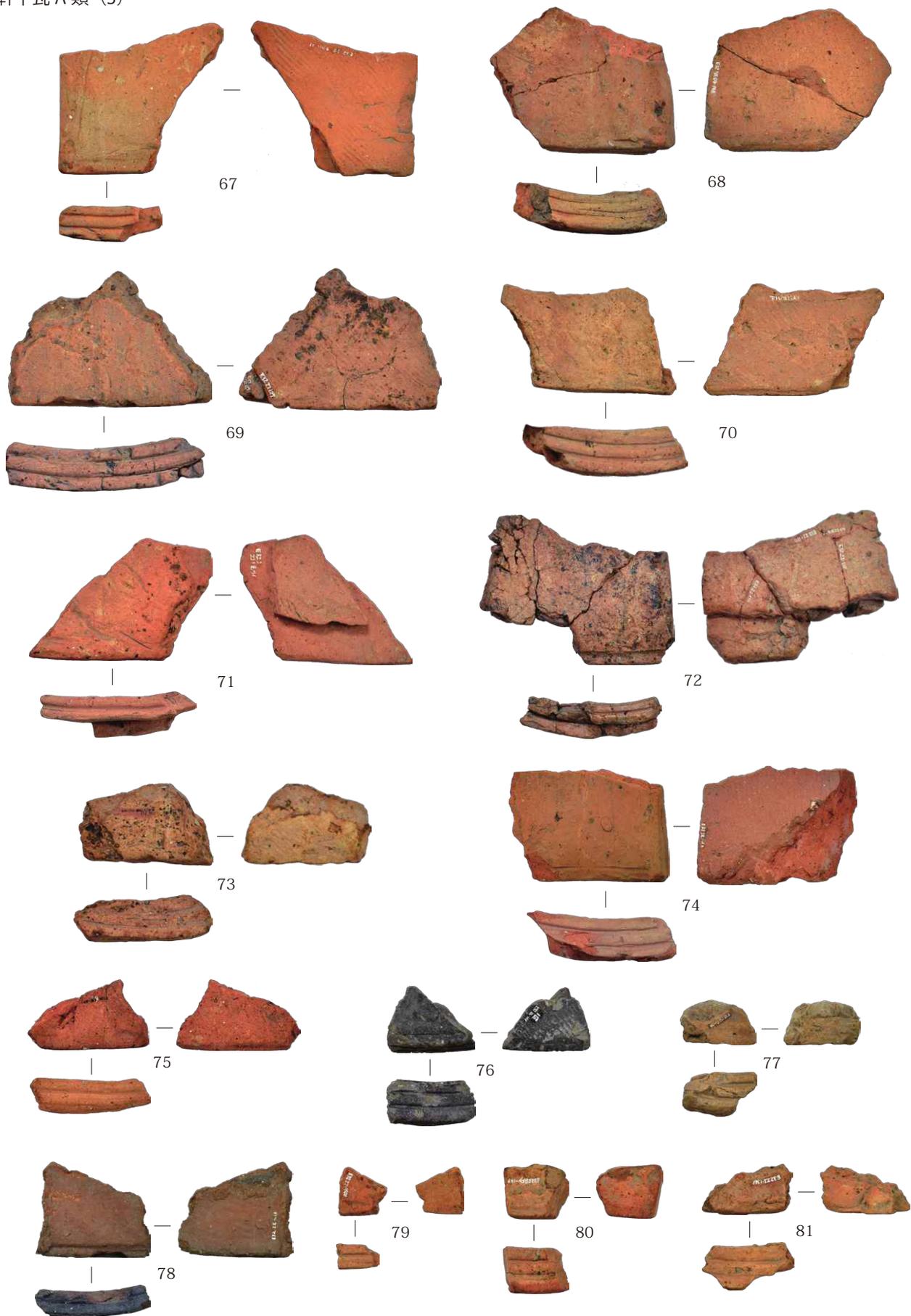
軒平瓦 A 類 (2)



0 10cm 1:4

軒平瓦 A 類 (2)

軒平瓦 A 類 (3)

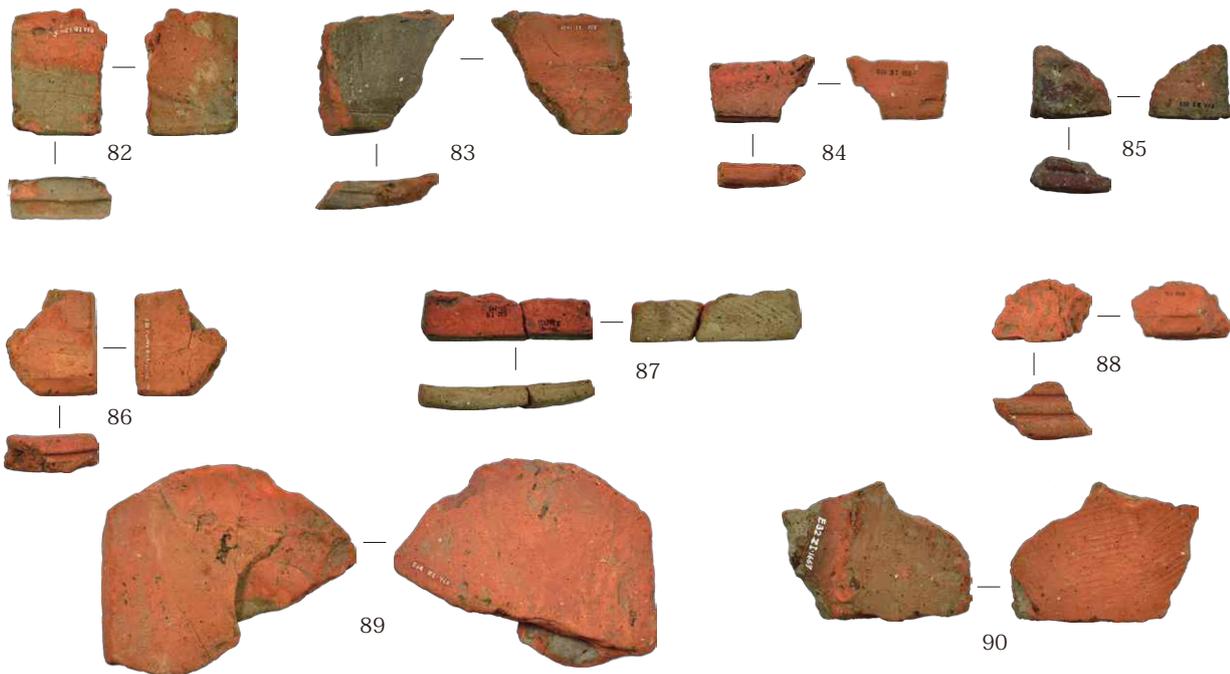


0 10cm 1:4

軒平瓦 A 類 (3)

# 写真図版 28

## 軒平瓦 A 類 (4)



## 軒平瓦 B1 類



## 軒平瓦 B2 類



## 軒平瓦 C 類



丸瓦 A1 類 (1)



102

103



104



105



106



107



1号建物跡 丸瓦 A1 類 (1)

写真図版 30

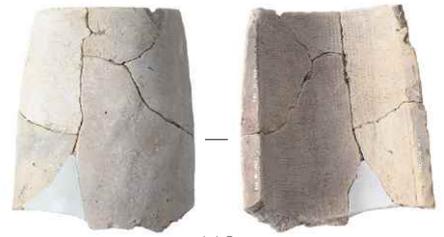
丸瓦 A1 類 (2)



108



109



110



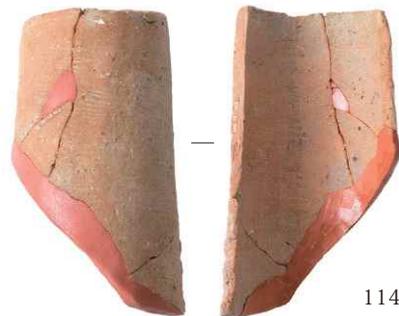
111



112



113

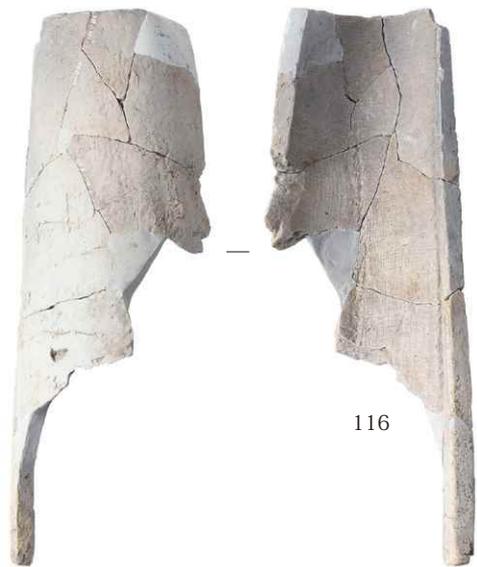


114



115

丸瓦 A2 類 (1)



116

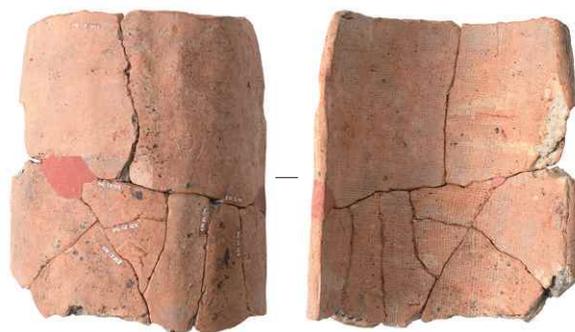


丸瓦 A2 類 (2)



117

丸瓦 B 類 (1)



118



120



119



121



122



123

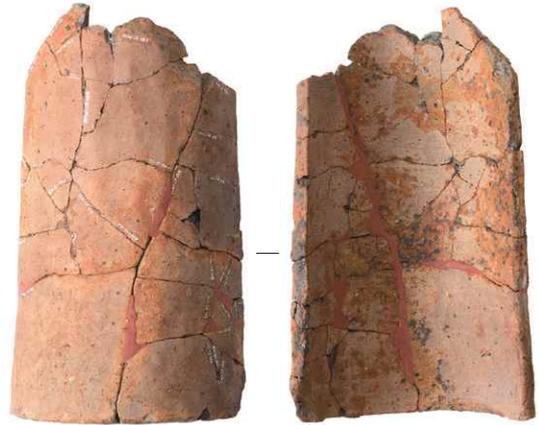
0 10cm  
1:6

写真図版 32

丸瓦B類 (2)



124



125



126



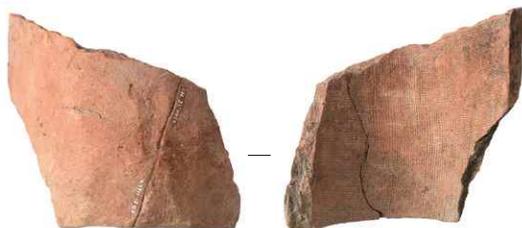
127



128



129



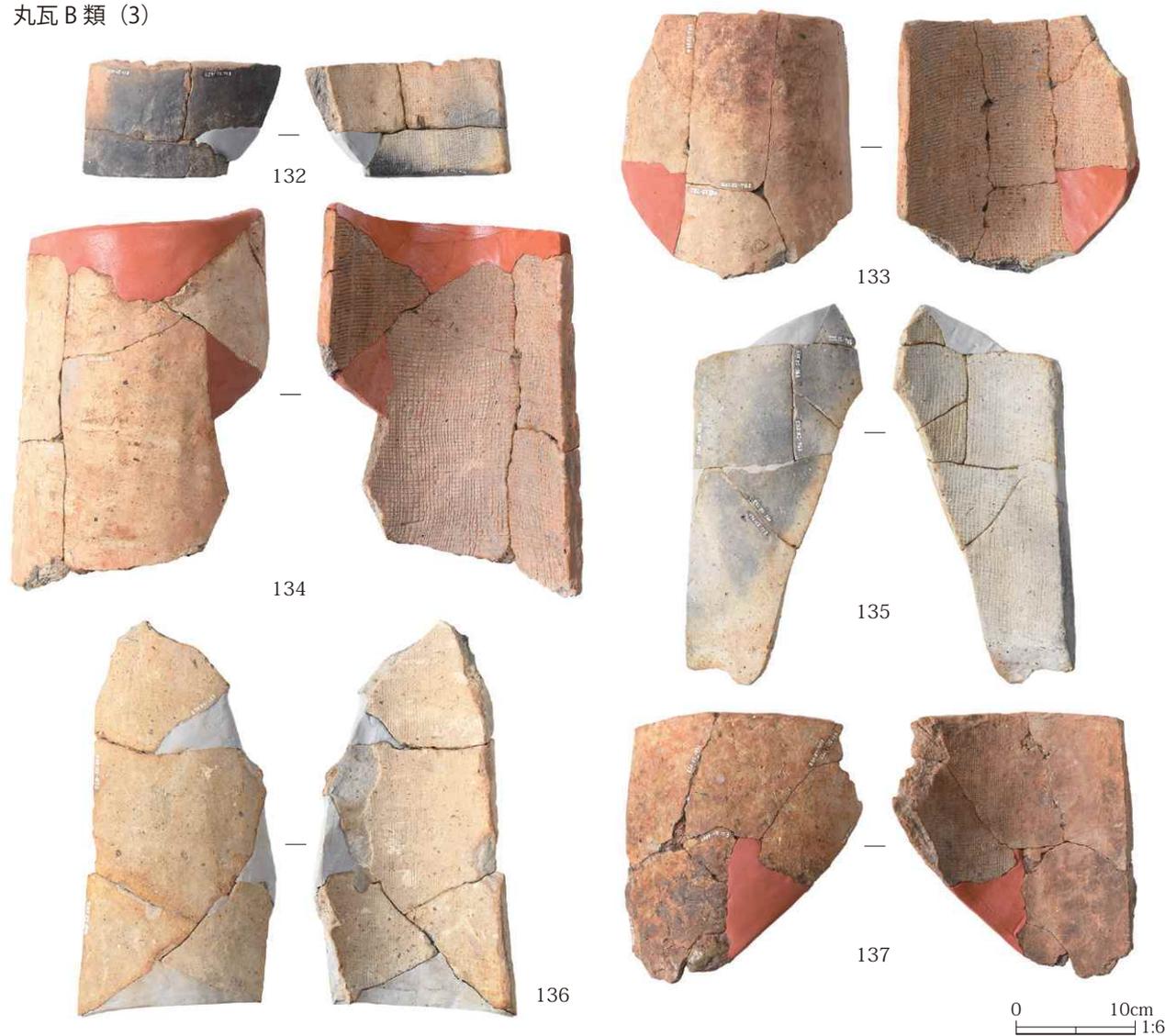
130



131



丸瓦 B 類 (3)



丸瓦 C1 類



1号建物跡 丸瓦 B 類 (3)・丸瓦 C1 類

写真図版 34

丸瓦 C2 類



平瓦 A1 類 (1)



1号建物跡 丸瓦 C2 類・平瓦 A1 類 (1)

平瓦 A1 類 (2)



151



152

0 10cm  
1:6

1号建物跡 平瓦 A1 類 (2)

写真図版 36

平瓦 A1 類 (3)



153



154



155

0 10cm  
| 1:6

1号建物跡 平瓦 A1 類 (3)

平瓦 A1 類 (4)



156



157



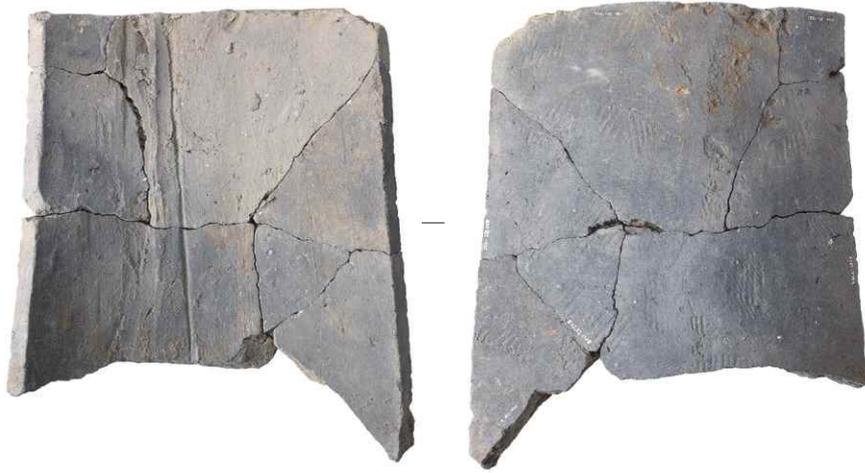
158

0 10cm 1:6

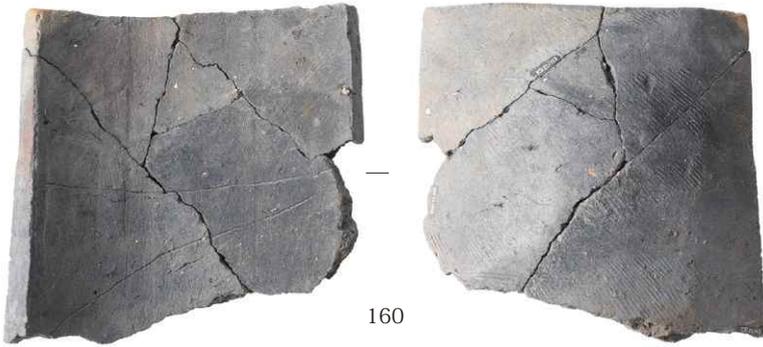
1号建物跡 平瓦 A1 類 (4)

写真図版 38

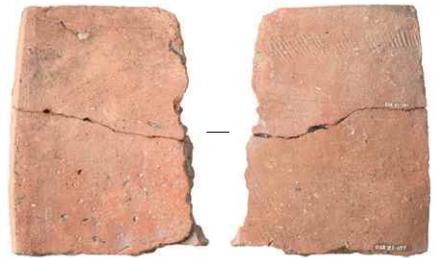
平瓦 A1 類 (5)



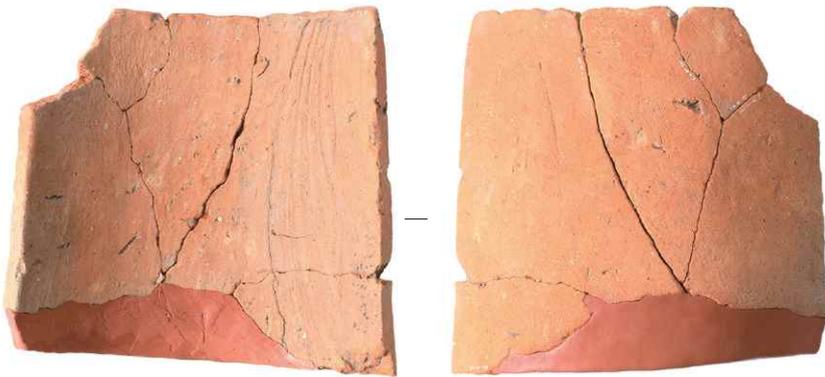
159



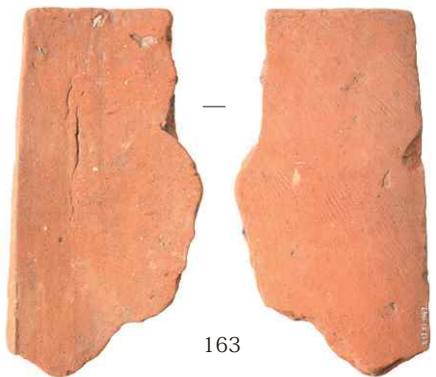
160



162



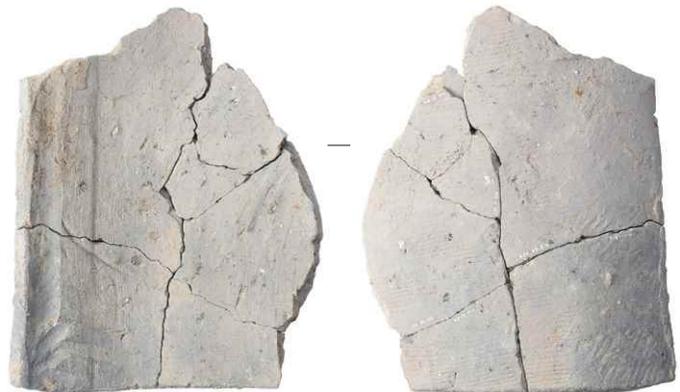
161



163



164

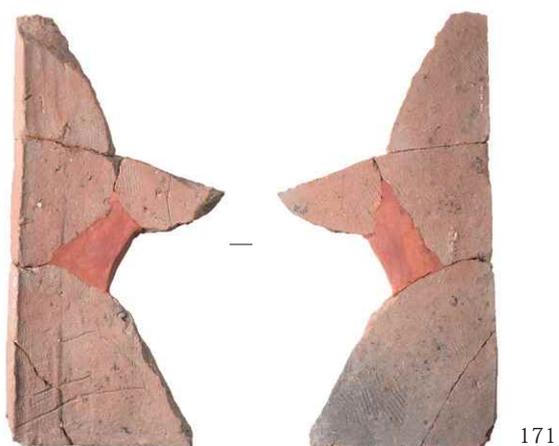
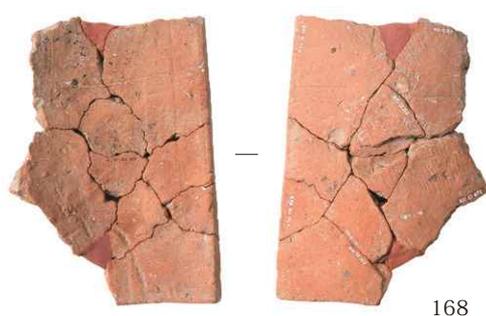
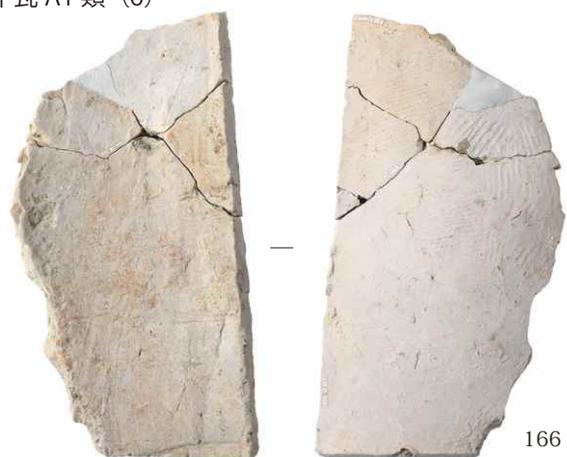


165

0 10cm  
1:6

1号建物跡 平瓦 A1 類 (5)

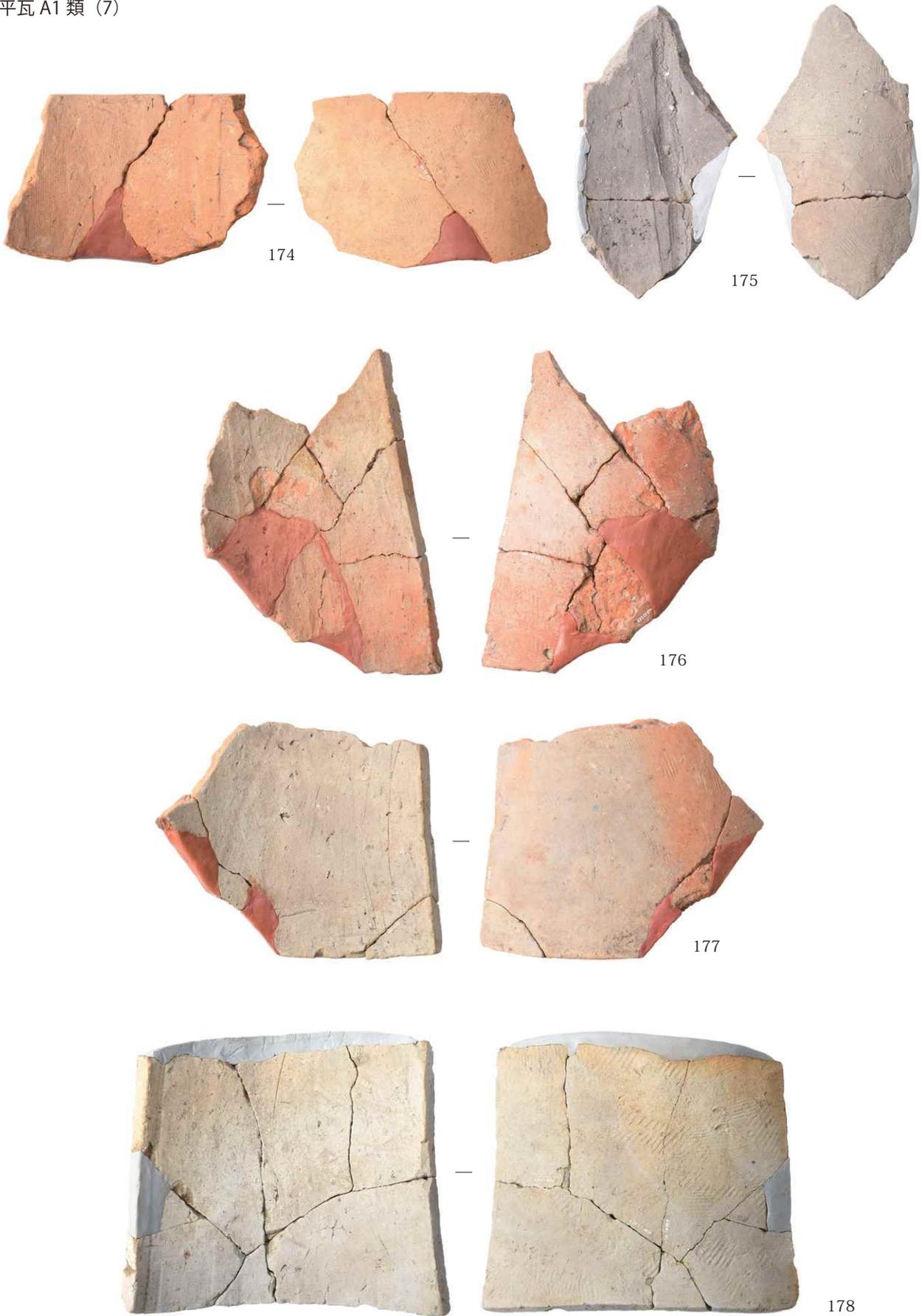
平瓦 A1 類 (6)



0 10cm  
1:6

写真図版 40

平瓦 A1 類 (7)



0 10cm  
1:6

1号建物跡 平瓦 A1 類 (7)

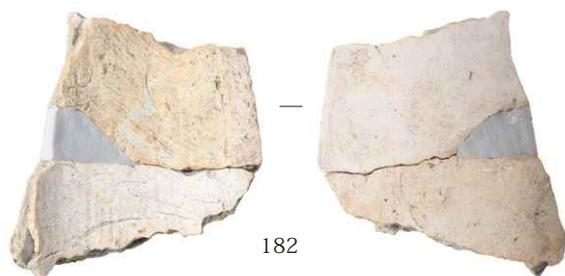
平瓦 A2 類



179



181



182



180

平瓦 B 類 (1)



183



184

0 10cm 1:6

1号建物跡 平瓦 A2 類・平瓦 B 類 (1)

写真図版 42

平瓦B類 (2)



0 10cm  
1:6

1号建物跡 平瓦B類 (2)

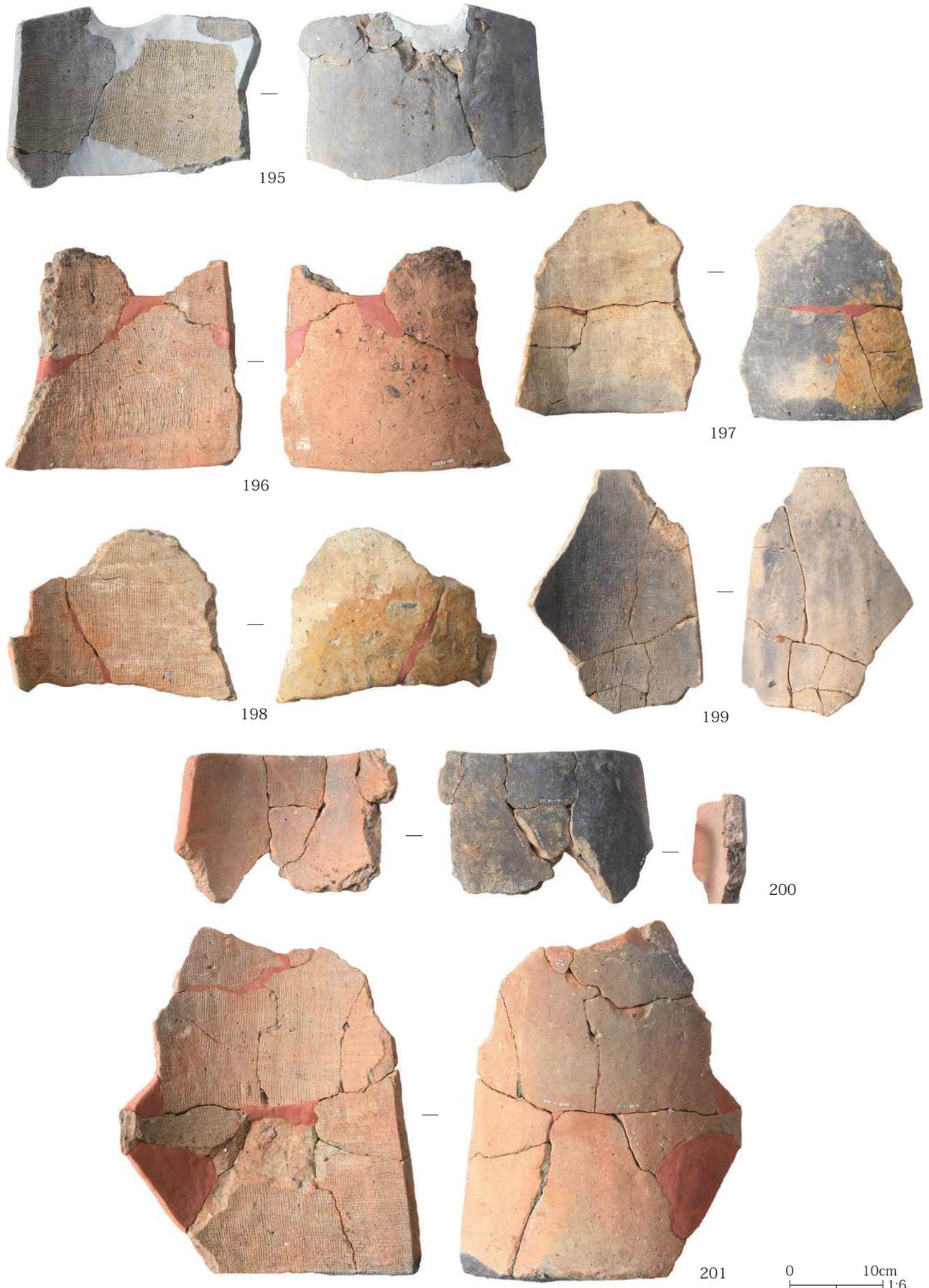
平瓦B類 (3)



0 10cm  
1:6

写真図版 44

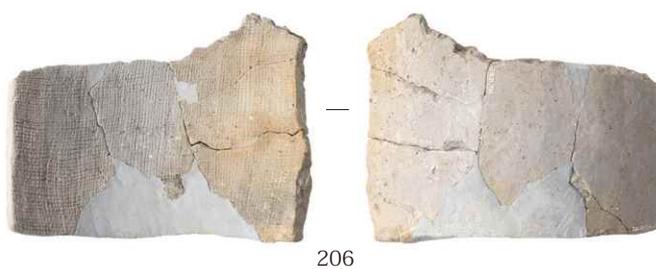
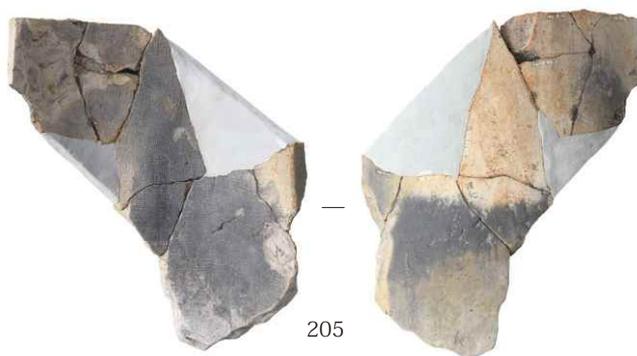
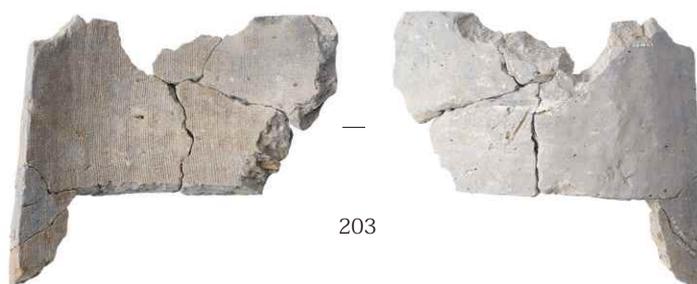
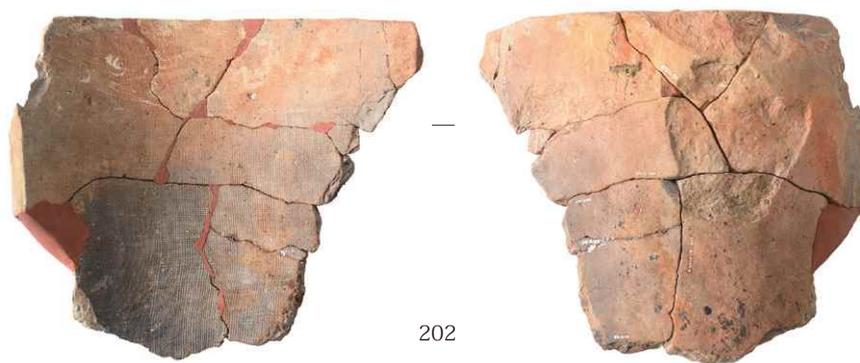
平瓦B類 (4)



1号建物跡 平瓦B類 (4)

0 10cm  
1:6

平瓦B類 (5)



0 10cm  
1:6

1号建物跡 平瓦B類 (5)

写真図版 46

文字瓦 (1)



207

208



209



210



0 10cm  
1:4

文字瓦 (1)

文字瓦 (2)



211



212



213



214



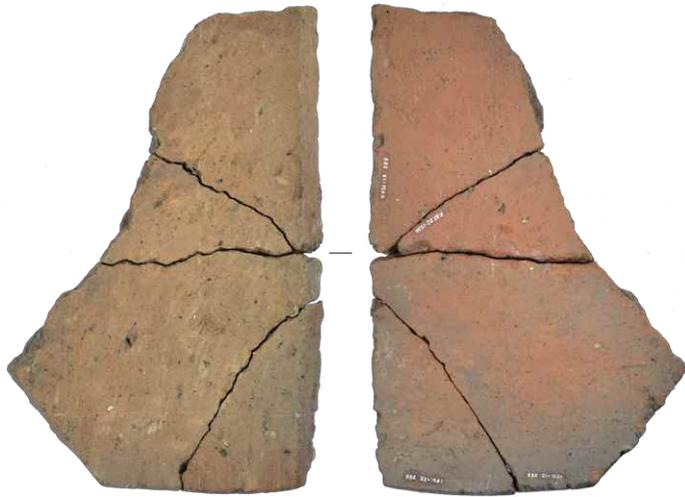
0 10cm 1:4

(214) 0 10cm 1:6

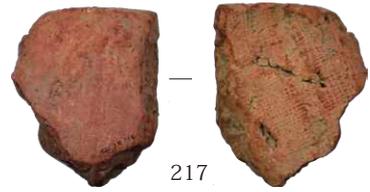
文字瓦 (2)

写真図版 48

道具瓦 (隅切瓦)



215



217



218



216



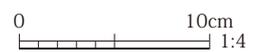
219



221



220



1号建物跡 道具瓦 (隅切瓦)

鉄製品



牛田廃寺跡 鉄製品

写真図版 50

1号建物跡 土器

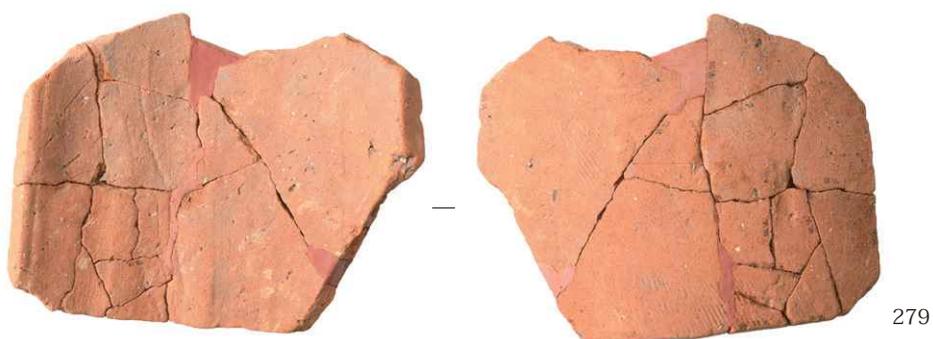
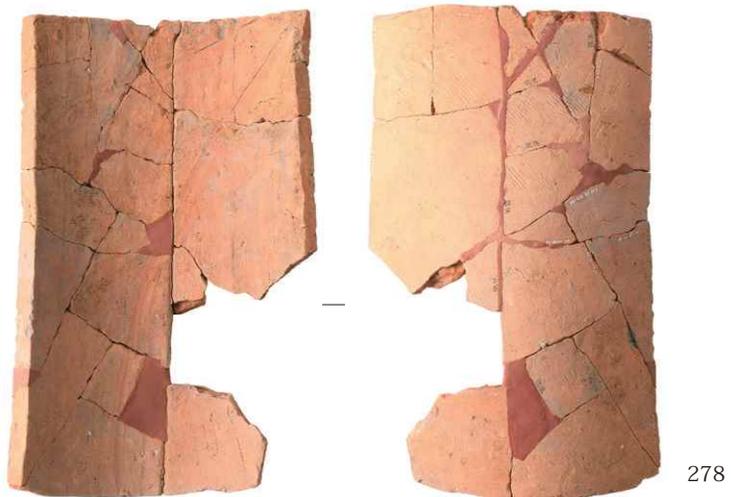


トレンチ 9・14 瓦



1号建物跡 土器／トレンチ 9・14 瓦

トレンチ 13 瓦 (1)

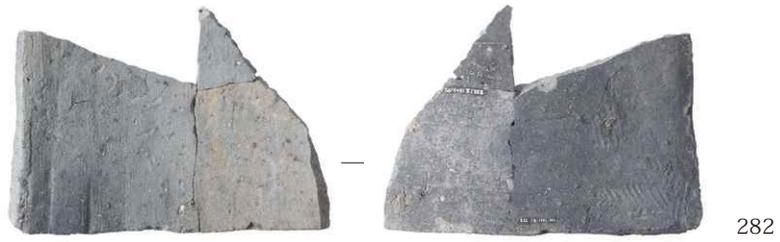


0 10cm  
1:6

トレンチ 13 瓦 (1)

写真図版 52

トレンチ 13 瓦 (2)・土器



0 10cm  
1:6



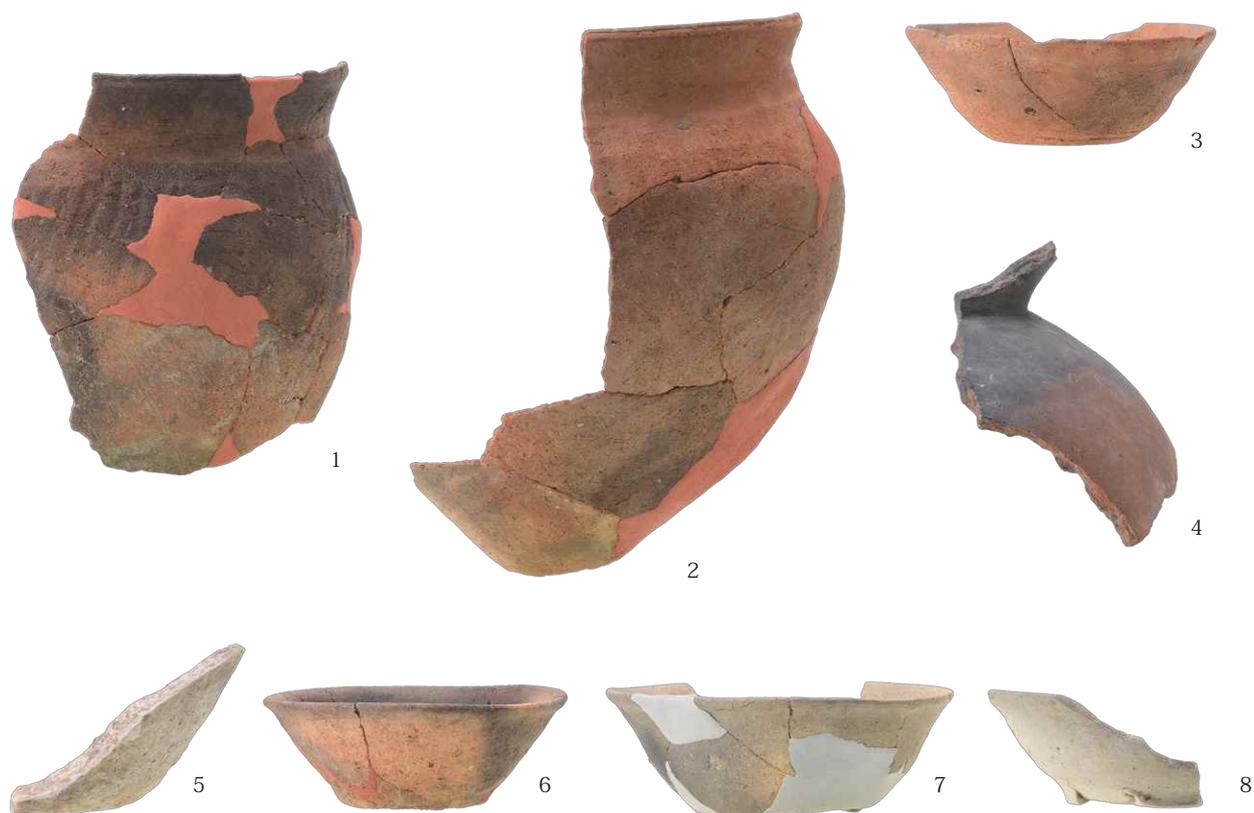
0 10cm  
1:3

トレンチ 13 瓦 (2)・土器

59号住居跡



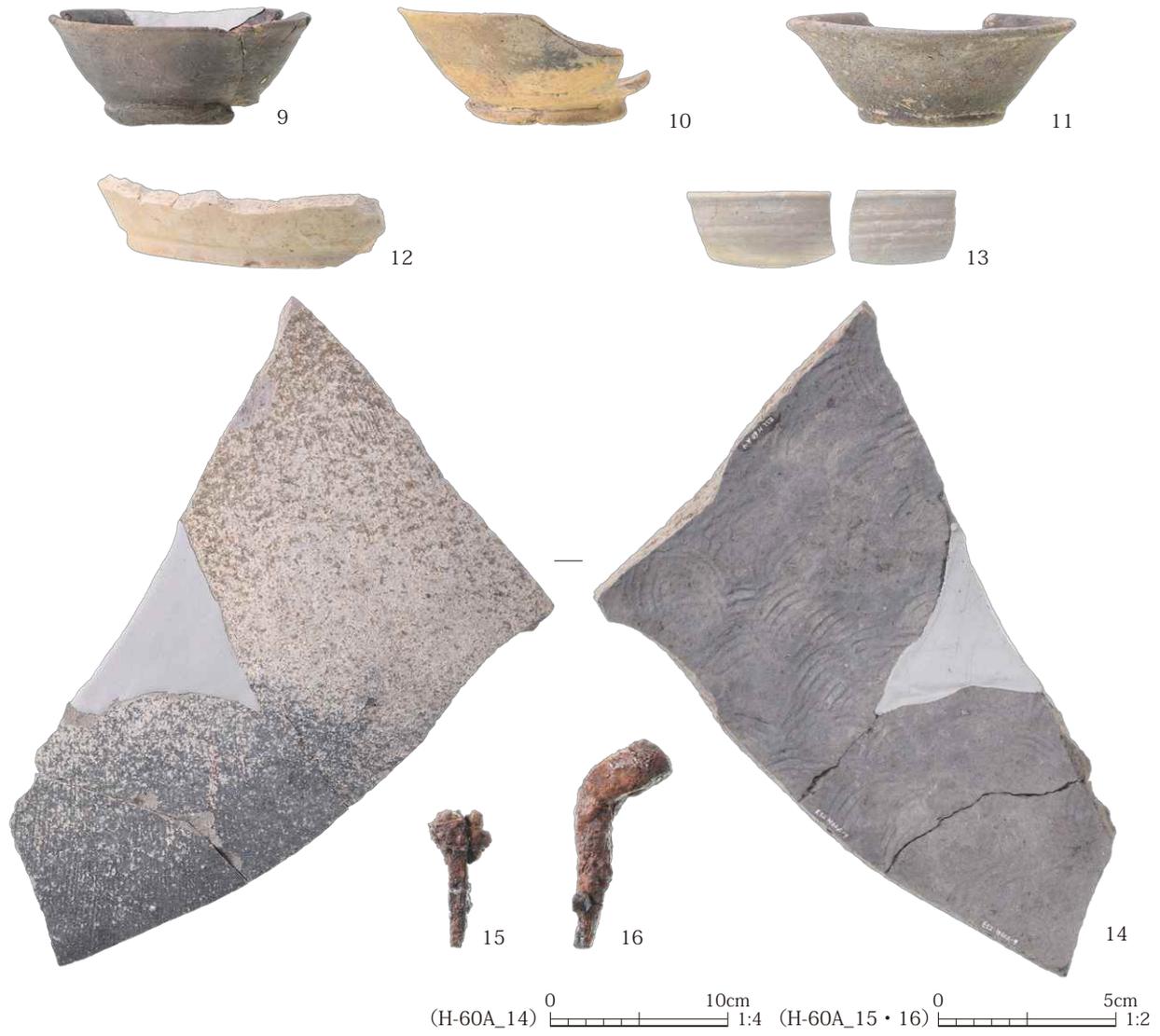
60A号住居跡 (1)



59号住居跡・60A号住居跡(1)出土遺物

写真図版 54

60A 号住居跡 (2)

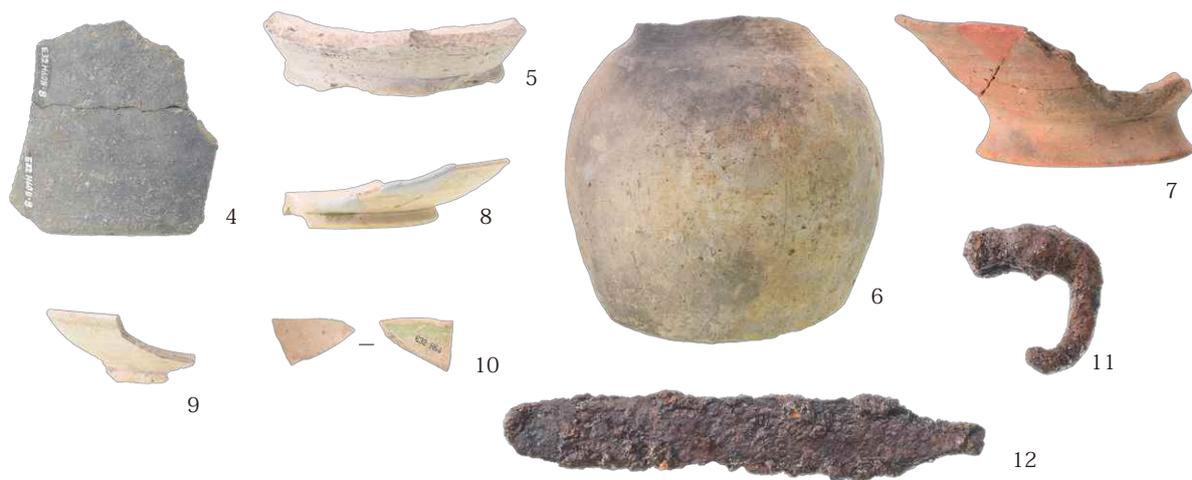


60B 号住居跡 (1)



60A 号住居跡 (2)・60B 号住居跡 (1) 出土遺物

60B 号住居跡 (2)



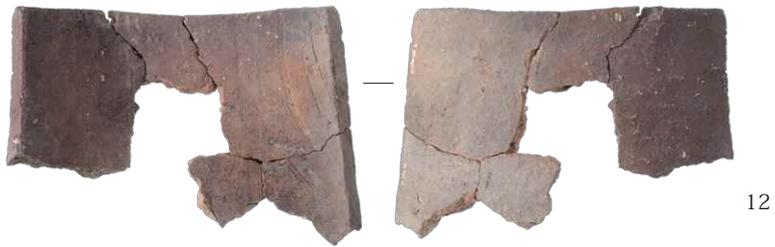
61 号住居跡 (1)



60B 号住居跡 (2) · 61 号住居跡 (1) 出土遺物

写真図版 56

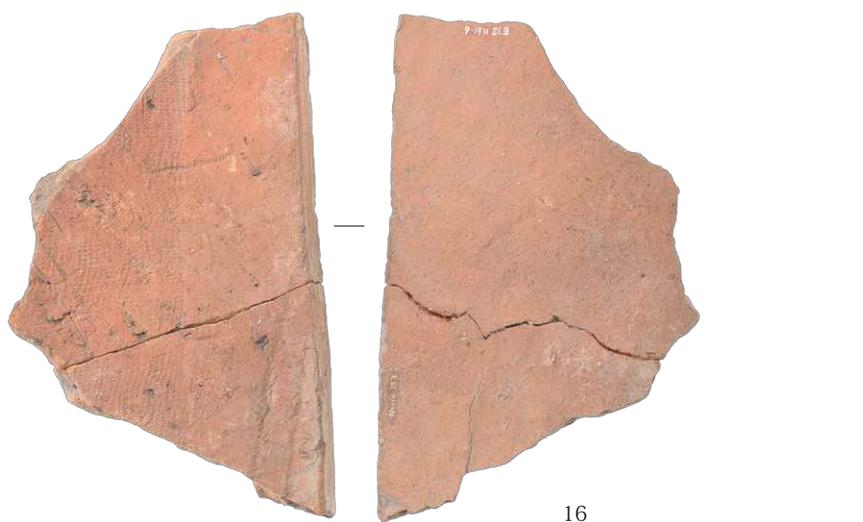
61号住居跡(2)



(H-61\_11・12) 0 10cm 1:6  
0 10cm 1:3

61号住居跡(2) 出土遺物

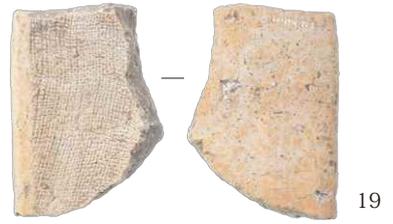
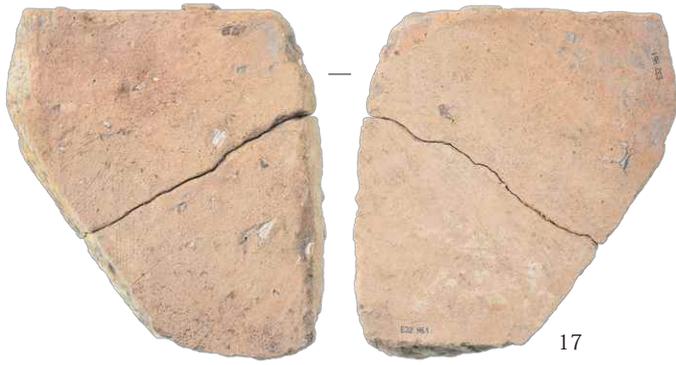
61号住居跡(3)



61号住居跡(3) 出土遺物

写真図版 58

61号住居跡(4)



61号住居跡(4) 出土遺物

61 号住居跡 (5)



(H-61\_24) 0 5cm 1:2

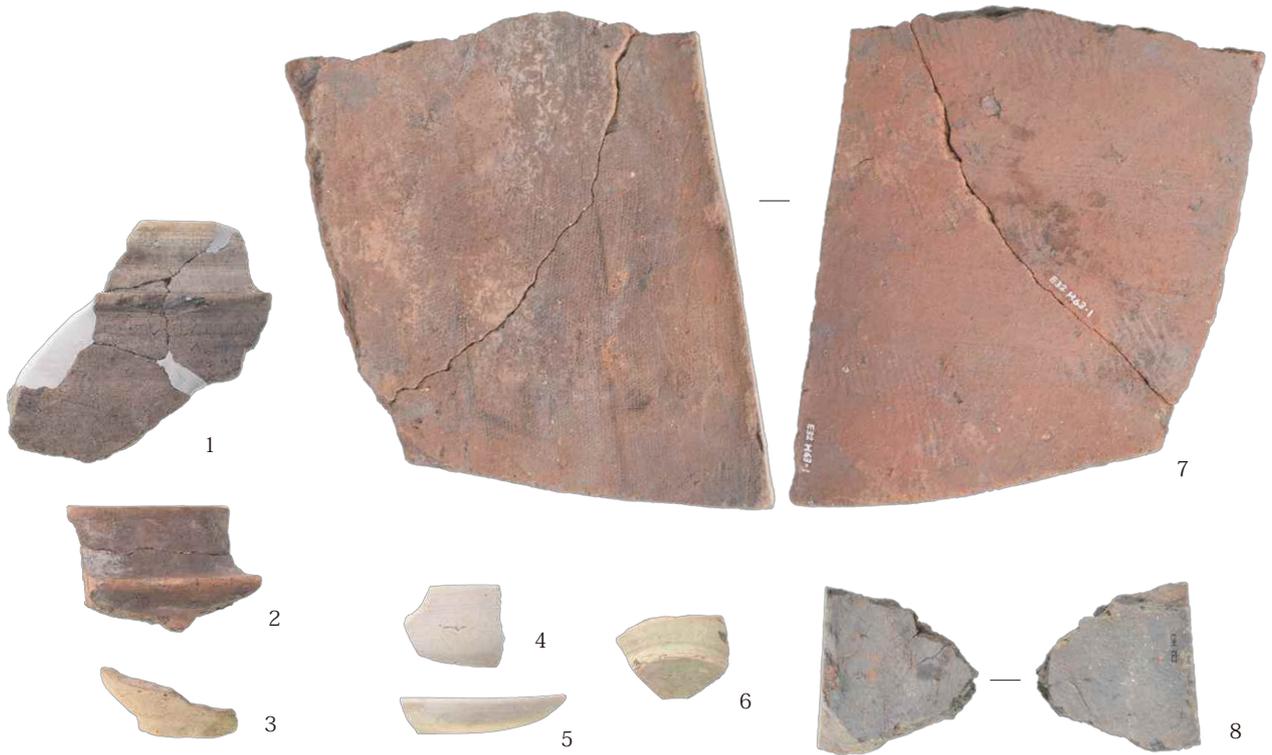
62 号住居跡



(H-62\_13) 0 5cm 0 10cm 1:2 1:3

写真図版 60

63 号住居跡



71 号住居跡

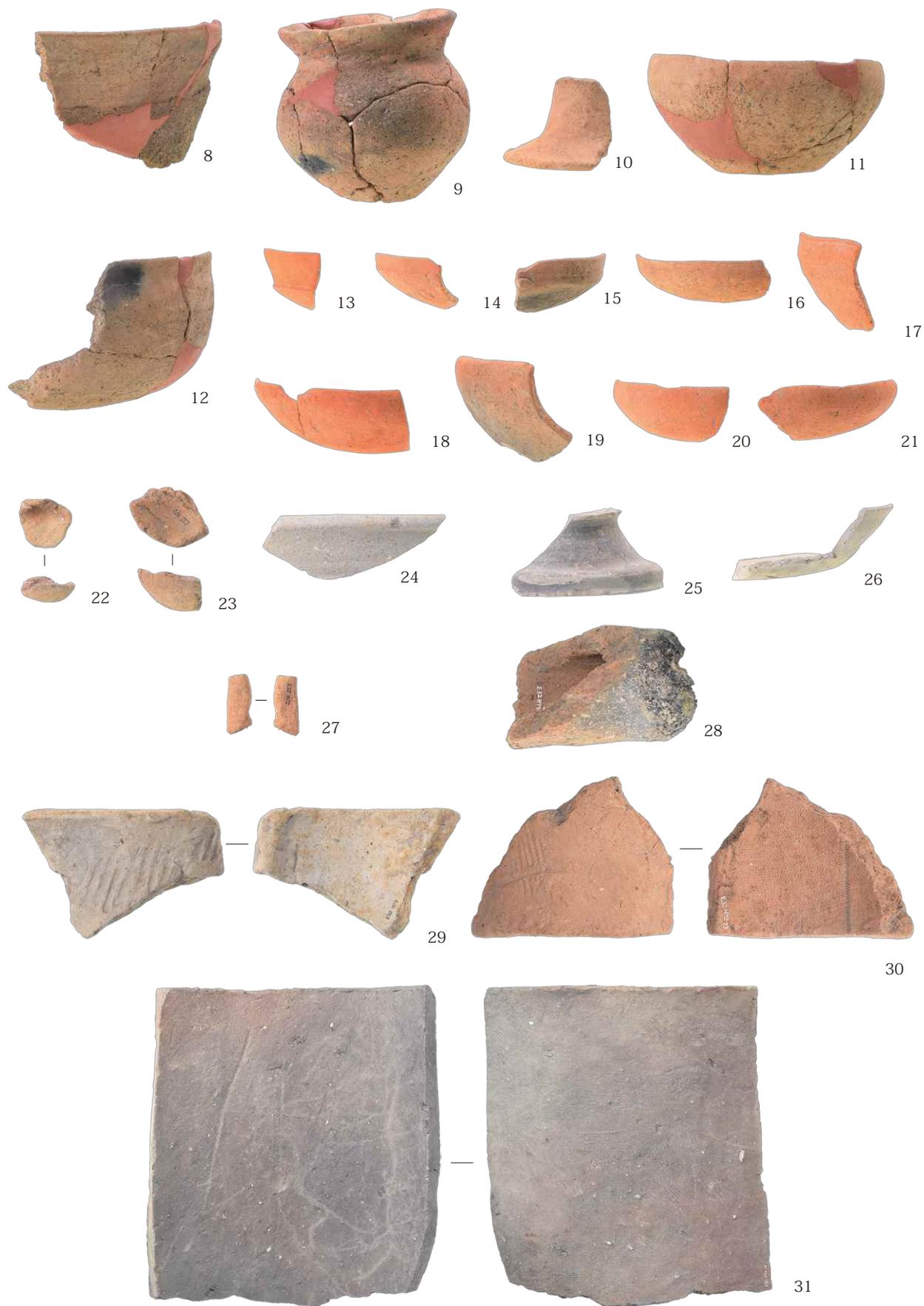


72 号住居跡 (1)



(H-71\_4) 0 5cm 0 10cm  
1:2 1:3

72号住居跡(2)

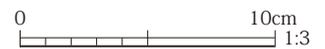
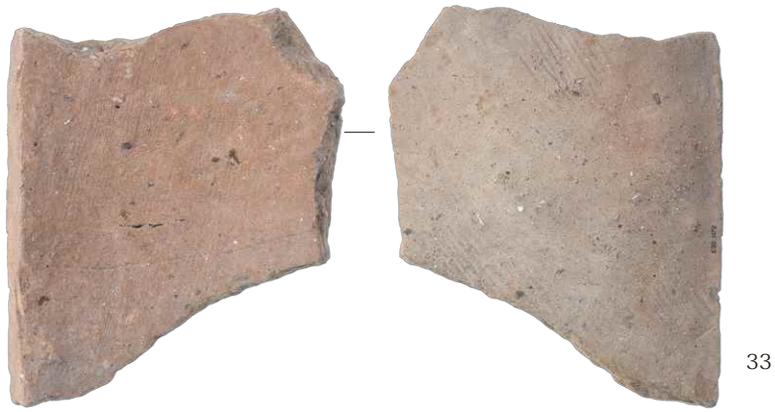


(H-72\_31) 0 10cm 1:6 0 10cm 1:3

72号住居跡(2) 出土遺物

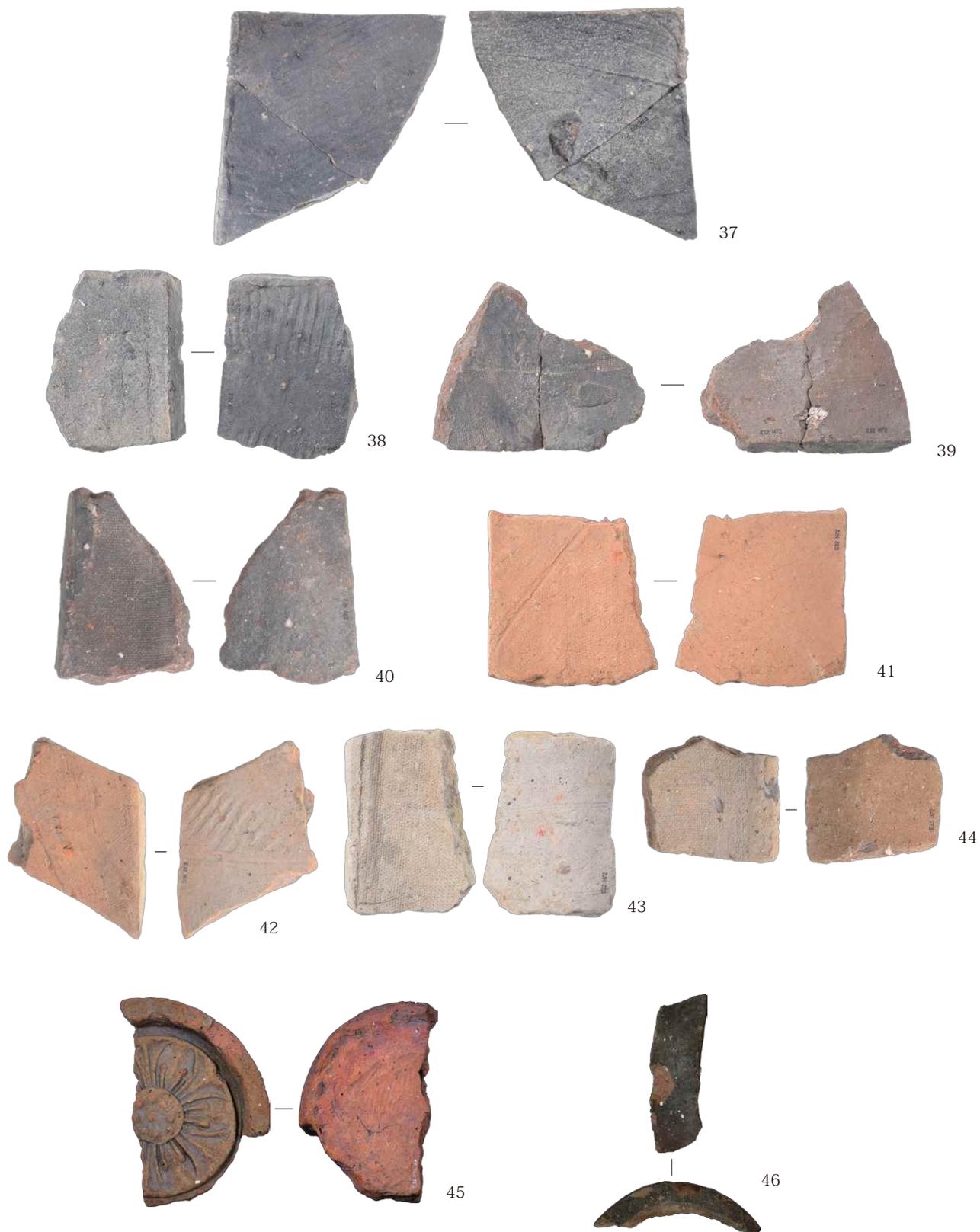
写真図版 62

72号住居跡(3)



72号住居跡(3) 出土遺物

72号住居跡 (4)



(H-72\_43~46) 0 10cm 0 10cm 1:4 1:3

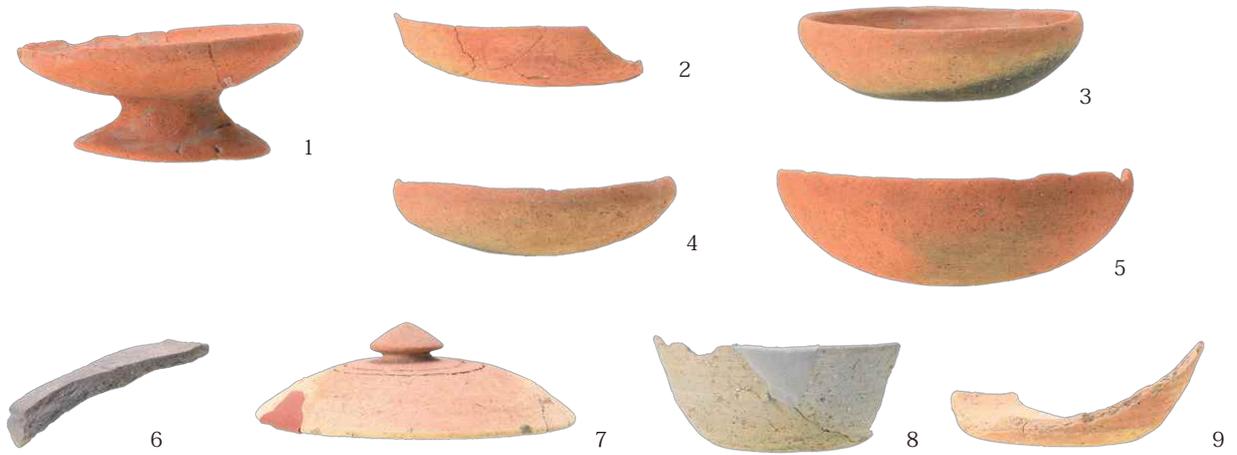
72号住居跡 (4) 出土遺物

写真図版 64

75 号住居跡



76 号住居跡



85 号住居跡



86 号住居跡 (1)



86 号住居跡 (2)



82 号土坑



83 号土坑



95 号土坑



96 号土坑



104 号土坑



108 号土坑



112 号土坑



113 号土坑



115 号土坑



117 号土坑



121 号土坑



(D-95\_4 · D-96\_9 · D-117\_2) 0 5cm 0 10cm 1:2 1:3

写真図版 66

123 号土坑



125 号土坑



126 号土坑



137 号土坑



2 号溝



3 号溝



遺構外



(3 号溝・瓦) 0 10cm 0 10cm  
1:6 1:3

# 報告書抄録

ふりがな	うしたはいじあと（かわよけやしきうらいせき）							
書名	牛田廃寺跡（E32a 川除屋敷裏遺跡 1 区）							
副書名	平成 30 年度 県営農業競争力強化基盤整備事業 牛田川除地区 埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	文挾 健太郎（編著）・宮崎重雄							
編集機関	群馬県藤岡市教育委員会							
所在地	群馬県藤岡市藤岡 1485 番地							
発行年月日	令和 6 年 2 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
うしたはいじあと 牛田廃寺跡 (E32a かわよけやしきうらいせき 川除屋敷裏遺跡 1 区)	ぐんまけんふじおかし 群馬県藤岡市 うしたあざしもだ 牛田字下毛田	10209		36°13'02"	139°4'28"	2018.5.21 ～ 2018.12.28	7.260m <sup>2</sup>	群馬県営 農業基盤 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
牛田廃寺跡	寺院・集落	8 世紀中葉 ～ 9 世紀後半	基壇建物跡・整地土・ 竪穴住居跡・溝・土坑		軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・ 文字瓦・須恵器・土師器・鉄釘			
要約	<p>神流川左岸低地部において 8 世紀第 2 四半期に創建され、9 世紀後半に廃絶されたと考えられる牛田廃寺跡が見つかった。地山砂礫層のレベルが高い自然堤防上に選地し造営されている。掘り込み地業・版築を持ち、瓦・自然石を用いて外装を施した 1 号建物跡と、2 箇所の整地土から構成され、明確な伽藍は持たない小規模な寺院跡である。1 号建物跡の基壇外側には、瓦集積が検出された。創建瓦は山王廃寺系である複弁 6 弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦、これらと型式学的特徴が一致する丸瓦・平瓦があり、セット関係が確認された。創建瓦とほぼ同数の補修瓦が見つかり、弘仁地震（818 年）に起因する大規模な改修があったことが想定される。これらの瓦は藤岡市内の窯跡で焼成されたことが判明している。周辺には、住居・土坑が検出されているが、寺院と時期が重複する遺構は少ない。寺域を画するなんらかの規制があった可能性が高いが、牛田廃寺跡を区画するような施設はなく、集落と完全に隔絶していたわけではない。やや離れた箇所には、多くの住居跡が検出され、大規模な集落が展開していた。牛田廃寺創建前の時期に住居跡が激増しており、計画村落の様相を示す。近接する牛田古墳群では、牛田廃寺と併行する時期に牛馬・須恵器を用いた祭祀を古墳周溝内で繰り返し実施していた。寺院 - 集落 - 古墳が 1 遺跡内に存在しており、それらの有機的な関連性が想定される。</p>							

群馬県藤岡市

## 牛田廃寺跡

(E32a 川除屋敷裏遺跡 1 区)

平成 30 年度 県営農業競争力強化基盤整備事業

牛田川除地区

### 埋蔵文化財発掘調査報告書

2024 年 2 月 28 日

編 集 群馬県藤岡市教育委員会

発 行 群馬県藤岡市教育委員会

群馬県藤岡市藤岡 1485

印 刷 イシイ印刷株式会社